佐伯有義校訂標注

増補 六國史

巻九

朝日新聞社藏版

装畫・・田中咄哉州

三代實錄

卷上

日本三代實錄

解説

一、書名

本書は、前史の體に倣ひて、清和天皇の天安二年八月より、光孝天皇仁和三年八月に至るまで、御三代三十年間の事を記せり。序文に、起於天安二年八月乙卯、訖于仁和三年八月丁卯、首尾三十年、都爲五十卷、名曰日本三代實錄とあり。書名を三代實錄と稱する事は、是にて明かなるが、また此の書を外記番記と稱すること、惟賢比丘筆記に

外記番記　自天安二年至仁和三年醍醐御宇左大臣時平等撰

と見えたり。別書ならむかとも思はるれど、日本書紀以下を列記し、文德實錄の次に之を擧げたれば、三代實錄なること疑なし。されば何故に斯くの如き名稱を附したるかといふに、元來此の書は、外記の當番日記を基礎とし、之に諸種の材料を加へて編修せられしが故に、其の事實に就きて、かくいへるなるべし。外記は其の位階は高からざれど、職員令に掌勘詔奏及讀申公文勘署文案撿出稽失とありて、最も樞要の

職にて、太政官の記錄を掌り、有識の士にあらざれば其の任に堪へざるより、其の人選を嚴にし、修史の際には、歷世必ず之を撰者の中に加へられしが、三代實錄も終始主として其の事に當りしは、大外記大藏善行なりき。故に其の事實の上より、外記番記ともいひしものなるべし。

二、編修

本書編修の沿革を考ふるに、宇多天皇寬平四年に、大納言源能有以下に詔して勅撰せしめ給ひ、九年を經て、延喜元年に至りて功成りて上奏せり。勅撰の命ありし事は、序文に、伏惟太上天皇(中略)以爲、始自貞觀、爰及仁和、三代風猷、未著篇牘、若缺文之靡補、恐盛典之長虧、詔大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奧出羽按察使臣源朝臣能有、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫臣藤原朝臣時平、參議勘解由長官從四位下兼守左大辨行春宮亮臣菅原朝臣道眞、從五位下行大外記兼播磨權大掾臣大藏朝臣善行、備中掾從六位上臣三統宿禰理平等、因循舊貫、勒就撰修と見えて、撰者の名は明なれど年月を記されざるが、日本紀略に、寬平四年五月一日甲辰、勅大納言源能有、參議藤原時平、大外記大藏善行等云云、始造國史と見えて、寬平四年五月一日に勅命

ありしこと、此の文にて明かなり。斯くて撰國史所の組織成り、大納言源能有を總裁とし、藤原時平・菅原道眞以下此の事に關與し、就中大外記大藏善行・三統理平以下を率ゐて、專ら編修に從事せしが、能有は八年七月右大臣に任ぜられ、翌九年六月八日薨去あり、尋いで同年七月三日、天皇御讓位あり、醍醐天皇御卽位あらせられしかば、御卽位大嘗祭等の事にて臨時の事務多く、編修の事業は一時中止の姿となれり。序文に時屬揖讓、朝廷務殷、在此際會、暫停刊緝とある是なり。其の後庶務常に復せしに依り、更に左大臣藤原時平、右大臣菅原道眞、大外記大藏善行、同三統理平等に勅して、先帝の聖旨を遵奉して、速に之を完成すべしと仰せ給ひき。其の年月は詳ならざれど、時平以下の位署に據りて之を考ふるに、新帝御卽位の翌年昌泰二年二月十四日、時平の左大臣に、道眞の右大臣に任ぜられし已後の事なるべし。此の時、寛平四年に勅命ありしより已に七年を經過したれば、大體の草案は脫稿し、更に之を訂正して完成すべき域に達せしなるべし。其は序文に、今上陛下云云、思欲遵前旨之草創、促卽日之財成、勅正三位守左大臣兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平、正三位守右大臣兼行右近衛大將臣菅原朝臣道眞云云等、責其參詳、頗有頭角とあるにて、かく推定せらるるなり。促卽日之財成とある、財成は裁成なり、責其參詳とは、裁成すべき議事に參與

して、之を審議すべしとなり。有頭角とは、其の事業を始むる意にて、草案の審査に著手するを云ふ。此の勅命に依りて直に草案の審査に從事し、日々進捗せしが、同四年即ち延喜元年正月廿五日に至りて、道眞は俄に大宰權帥に左遷せられ、大外記理平も亦同二月十九日轉任越前介となりしかば、編修上影響ありしことは勿論なるべけれど、當時は其の事業已に完成に近く、且此の編修に就きて事實上の首腦たりしは、大外記善行なりしかば、其の他の人々と共に勉勵努力し、同年八月二日に至り、筆削功成りて上奏せり。此の書を八月二日に上奏せしことは、序文に明かなるが、日本紀略にも、八月二日辛巳、左大臣等上三代實錄と記せり。國史の編修は、日本書紀を始め、續日本紀・日本後紀等、何れも多くの歲月を費し、文德實錄の如きも、僅に十卷にして尙ほ八年を要せり。然るに六國史中最も卷數多き本史が、僅に九年にして成功せしは、編修其の人を得たるにも由るべけれど、其の人々の大に努力せしことは、想像するに餘りありと云ふべし。

三、撰者

本史の編修に關係せしは、

大納言　源朝臣能有
左大臣　藤原朝臣時平
右大臣　菅原朝臣道眞
大外記　大藏朝臣善行
同　　　三統宿禰理平

以上の人々なるが、能有・時平・道眞は其の事蹟國史に明かなれば、煩しく此に載する要なく、善行・理平の傳も、大日本史文學列傳に、其の事蹟明かなれども、尚ほ聊か此に述ぶべし。

大藏善行は、當時文學を以て最も世に聞えたる人なり。姓初めは伊美吉後朝臣を賜ふ。其の祖は坂上氏と同じきこと、貞觀四年三月己巳朔紀に、右京人中納言從三位藤原朝臣氏宗家令大初位上大藏伊美吉廣勝、後漢孝靈皇帝四代孫、阿智使主後、與坂上大宿禰同祖也とあるにて明かなり。貞觀十七年十月勅を蒙り、藏人所に侍して御書を校定し、又左右年少者の爲に禁中に於て顏氏家訓を講じ、明年七月講竟りて宴を賜へり。元慶六年二月少外記に任じ、正六位上に叙す。是より先土左權掾たりしが、大內記都良香其の職を讓りて、善行等文富春華、學收秋實、若搖筆麟閣、洗硯鳳池、則左

右得ㇾ人、起居傳ㇾ美（都氏文集）といへり。七年兼存問渤海客使並に領客使となり、御衣袴各一襲を賜ふ。仁和元年正月大外記と爲り、三年正月外從五位下に、四年十一月從五位下に叙せらる。寛平四年國史勅撰の事起るや、中納言藤原時平等と共に其の命を拜す。善行は當時外記の上首にして、其に事に與りし時平及三統理平は、いづれも其の門下生たりしかば、得意想ふべし。昌泰元年從五位上に叙し、次侍從に補す。延喜元年八月、三代實錄編修功成り奏上す。是歳善行年七十、時平爲に壽筵を城南水石亭に開きしに、弟仲平及平惟範・同伊望・藤原興範・紀長谷雄等、いづれも其の門人なりしかば、是等の人々は悉く其の席に列れり。二年九月尋いで民部少輔に任じ、從四位下に叙し、更に大輔に進み、後東宮學士と爲る。年九十に滿ちて猶ほ壯容なり、世人歎異して地仙と稱へけるとぞ。

　三統理平は、大藏善行の門人なり、三統宿禰は、其の祖詳ならず。（續日本後紀承和十一年十月庚辰紀に、左京人玄蕃助從六位上日置宿禰眞淨等、賜二姓三統宿禰一と見ゆれど、日置宿禰は其の祖詳ならず。日置氏は姓氏錄に、日置朝臣・日置造・日置倉人・日置部見え、日置朝臣は右京皇別にて、應神天皇皇子大山守王の後とあり。日置造は、左京諸蕃に高麗國人伊利須意彌の後とあり、また右京大和攝津諸蕃にも見ゆるが、何れも

同祖なり。日置倉人は大和諸蕃に見え、日置造と同祖なり。日置部は和泉未定雜姓に見え、天櫛耳命の後とあり。又貞觀八年閏三月紀には、日置臣岡成に菅原朝臣を賜ふとあり、是は神別なり。かく皇別神別蕃別未定雜姓あれば、いづれも決め難し)理平は寛平八年正月、是より先少内記に任ぜられ、此に至りて少外記に轉ず。同十年卽ち昌泰元年正月大外記に進み、善行と共に本史の編修に從事せしが、延喜元年正月從五位下に叙し、同二月越前介に任ぜられて地方に去りしかば、奏上の日撰者の一人として其の名を列することを得ざりき。後歸京して大內記に任じ、延喜格の編修に預る。天皇學を好ませ給ひ、藤原春海をして日本紀を講せしめ給ひし時、理平も亦其の講筵に侍し、講竟りて竟宴の日、理平をして和歌序を作らしめ給ふ。尋いで從五位上に叙し、文章博士と爲り、晚年式部大輔に任じ、從四位下に進む。延長四年卒す。年七十四。

四、異　本

本書の寫本は頗る多けれど、孰れも三條西家本(今同家に傳らず)の複寫にて、三條西家本の原本は、卜部本なり。古くは吉田本以外にも幾多の寫本ありしなるべけれど、

いづれも散逸して、今世に傳はるものは、永正十二年九月より、大永四年八月に至る九年間に亙りて、實隆公の書寫せられし原本を複寫せるものなり。之に大略二種の區別あり。一は細字を以て、十三行約二十五字詰に書寫せるもの、一は大字を以て八行十九字、或は八行十五字詰に書寫せるものにて、要するに大字本と細字本との二種なり。斯く二種の區別はあれど、其の內容は殆ど同一にて異なる所なし。內容の稍異なるものは、唯尾張德川家所藏の一本あるのみ。其の理由を少しく述べむに、

抑、本書寫本の古く書に見えしは、本朝世紀天慶四年八月九日丙申條に、今日自殿上有勅、召三代實錄一部五十卷五箇帙、加目錄一卷、各有錦端帙、藏人藤原遠規傳件宣旨大外記三統宿禰公忠、少外記物部貞用、權少外記多治文正等、蒙宣旨奉之と見えたるを始とす。天慶四年は本書奏上延喜元年より僅に四十年の後なれば、外記局には數部存せしなるべし。平安朝を始め鎌倉以後の書にも、本書に關する記事あるべしと思へど、搜索の暇なし。尙ほよく尋ぬべし。此の書は外記局を始め其の他にも所藏せしならむに、後卜部家にのみ存せしは、いかなる理由に因れるかといふに、後世儒學陰陽書算和歌蹴鞠等諸道に就きて、自ら其の家定まり、神道にては白川家世々神祇伯となりしが、吉田家は白川家と拮抗せむと欲し、其の準備の一として、神書國史等

の蒐集にも力を用ひしより、三代實錄の如きも自ら書寫せられしもの丶如し。本書の奥書を檢するに、安貞三年二月十五日書了、安貞三年二月十六日一校了、また校他本了天福二年十二月二日など、鎌倉時代の年號見ゆるは、其の家譜と對照するに、蓋兼藤の校正せしものなるべし。降りて正和元年抄了兼夏、又延文元年修補之兼豐などいへる、吉野朝廷時代の奥書も卷毎に見え、又至德三年十一月一日抄了卜部朝臣兼熙といへる室町時代の奥書も見ゆるにて、累代之に力を用ひしこと推して知るべし。國史は政務の龜鑑にて、政事を執るに最も必要なれば、五攝家を始め其の他にも之を所藏せし人ありしこと勿論なるべしと思へど、卷帙浩瀚にして書寫容易ならざるより、之を所藏する人はさまで多からざりしことは、通憲入道の藏書中に、其の名の見えざるにても推測せらるべし。斯くの如き事情にて、他の國史に比較して貯藏の部數少かりしに、應仁の亂にて京都の大半は兵燹に罹り、久しく戰亂の巷となりしかば、市中にありしものは、之が爲に燒失し、或は散逸して跡を絶ち、後には獨り吉田神社にのみ存せしならむ。斯くて亂後幾多の歲月を經て、世の中少しく靜平に歸せしかば、志ある人々の中には、散逸せる古書を蒐集して、闕けたるを補はむと欲せし人ありしなるべし。就中實隆公は最も深く之を憂慮せられ、吉田家に文德實

錄及三代實錄の保存せらるゝことを聞き、之を借受けて、或は其の自邸に於いて、或は禁中の詰所に於いて、寒暑の厭なく、自ら筆を執りて書寫し、或は人をも傭ひて寫さしめ、永正十二年九月より大永四年八月まで、九箇年の歳月を費して完成せられしこと奥書にて明かなり、而して之を原本として書寫せし諸本に就きて之を檢するに、大體細字本と大字本との兩種あり。此の兩種あるは何故なるか、又其の前後は如何と云ふに、(續日本紀以下何れも大字本と細字本とあり、前田本中原本谷森本等は細字本にて、内閣本尾州本淀本等は大字本なり。)按ふに初め實隆公の書寫せられしものは細字本にて、後之を書寫するに當りて、便宜上大字に書改められしものなるべし。其は何に據りて之を知るかと云ふに、三條西家に現存する日本後紀の細字なること、是れ實に其の確證なるべし。然らば何故にかく細字を以て書寫せられしかと云ふに、是れ其の時勢を物語れるものにて、當時は亂後にて最も衰退の世なりしかば、料紙を得るにも容易ならざるべく、且細字は紙數を減少するが故に、携帶に便にして、保存し易きを以て、かく丹念に書寫せられしものなるべし。然るに其の後慶長中德川幕府より本書の寫本を請はれし際には、時勢も已に變り、且幕府よりの依賴なれば、料紙の缺乏もなく、意のまゝにするを得たれば、改めて大字にて書寫せ

しむることゝなり、此に大字本の生せしなるべし。されど其は書冊の體裁のみにて、內容には異同なきこと、諸本を對校して自ら知らるゝなり。たゞ尾張家の三代實錄のみは祕本閣本等に比して往々異同あり、是は來歷志本書寫の後に、德川氏より京都に依賴して寫せるものにて、京都にては其の書寫に先だちて校訂を加へたるより、此の本のみは異なるところあるならむ。此は思ひ浮べるまゝを述べたるにて誤あらむも知るべからず。尙ほよく考ふべし。

寫本の系統は大略右の如くなるが、然らば寬文の版本は何本に據れるかと云ふに、松下氏の跋文に、二三十年來、世有二寫書之商一、藏二本朝群書一、筆耕以爲レ養、好レ事者就求レ之、商人所レ寫不二精詳一、故三代實錄亦文字日變、終至二於不一レ可レ知とある寫書業者の手に寫されし書を底本として、校正せしものなるべし。底本誤謬多かりし故に、松下氏も其の眞贋を識別するに容易ならず、自ら誤謬脫漏多きならむ。予が今回本史校訂に方りても、頗る困苦したれど、幸にして祕本內閣本尾張本前田本谷森本等あらゆる祕籍を閱覽し、衆證を以て判斷を下せる故に、大に便益を得たり。寫本及版本に關し、大略の說明を了りたれば、以下各本に就きて少しく述ぶべし。

(一)　寫　本

(一)　東山御文庫御本　五十卷

祕籍なれば精しく述べず。

(二)　內閣慶長寫本　五十卷廿冊

來歷志本と稱し、慶長中德川幕府の請に依り、京都にて書寫せしものなり。他の寫本に比して誤字も極めて少く、最も良本なり。

(三)　淺草文庫本　五十卷廿冊

書寫の年代詳ならず。大字本にて八行約十五字詰、現今內閣文庫藏本となる。

(四)　昌平坂學問所本　五十卷廿五冊

書寫の年代詳ならず。同じく大字本なり、林氏藏書並に昌平坂學問所の印を捺す。林家の藏書にて、後昌平坂學問所の所有となれり。現今內閣文庫に存す。

(五)　嶋原本　五十卷十五冊

書寫の年代詳ならず。舊嶋原氏の所藏にて十行十八字詰。現今內閣文庫の藏本となる。

(六)　尾張德川家本　五十卷十三册

與書なく書寫の年代詳ならざれど、內閣本と匹敵すべき良本なり。文字は諸本と往往異なるものあり、思ふに何人か校訂を加へたるものなるべし。此の書の世に流布するものは、內藤氏の校合本を轉寫せるもののみにて、尾本と內藤本とを混合せるものあり。然るに予は親しく原本を閱覽して、其の區別を明かにし、又本書の他本に異れる所以に就きても之を了解するを得たり。

(七)　前田家本　五十卷十三册

細字本なり。松雲公時代に蒐集せられしものなるべし。書寫の年代詳ならざれど、寬永を下らざるべし。內容は內閣本谷森本とよく相似たり。是亦良本なり。

(八)　谷森本　五十卷七册

細字本なり。書寫の年代詳ならざれど、前田家本と極めてよく相似たり。谷森善臣翁の舊藏にて、現に令息建男氏所藏せらる。

(九)　華山本　五十卷卄册

書寫の年代詳ならざれど、大字本にて八行十五字詰、流本とよく似たり。華山藏書と刻せる印を捺す。谷森翁の舊藏にて令息建男氏所藏せらる。

(一)福　嶋　本　五十卷廿五册

書寫の年代詳ならざれど、體裁前本と同じく、八行十五字詰にて奥書なく、福嶋坊藏書と刻せる印を捺す。同じく谷森翁の舊藏にて、今息建男氏所藏せらる。

(二)淀　本　五十卷廿册

舊淀藩稻葉家の所藏なりしが、現今神崎一作氏之を所藏せらる。書寫の年代は詳ならざれど、内閣本と系統を同じくす。

(三)宮　崎　文　庫　本　五十卷十五册

舊宮崎文庫藏本にて、現に神宮文庫の所藏となる。書寫の年代詳ならざれど、内閣本と系統同じ。

(三)細　井　本　五十卷册數不詳

細井貞雄氏所藏の寫本なり。狩谷棭齋親しく校合して、寛文版本に書入れたるものは是なり。原本は見ざれど閣本以下の諸本とよく符合す。

(四)安　田　本　五十卷册數不詳

安田躬弦氏所藏の寫本なり。細井本と同じく、狩谷氏親しく之を校合して版本に書入れたるもの是なり。

㈤朝田本　五十卷冊數不詳

岸本由豆流氏所藏の寫本なり。岸本は本姓朝田なり。故に朝田本と稱す。山崎知雄校合本に、三代實錄全部五十卷、以鎌倉椛園平由豆流藏本遂校合了、以綠字書之、標曰攷本矣、鎌倉氏依別號攷證閣本也とあるもの是なり。以上三本今其の所在を知らず。

(二)版本

㈠寬文本　五十卷廿冊

寬文十三年三月、松下見林氏の校訂する所なり。氏は本史の衍文錯簡多きを慨し、類本數種を聚め、類聚國史及其の他の諸本を引證して、闕けたるを補ひ誤れるを正し、書肆をして之を刊行せしむ。其の功甚だ大なりと云ふべし。

㈡元治本　五十卷廿冊

元治元年の刊本なり、別本の如くに聞ゆれど、寬文本の奥附を改めたるのみにて、內容は異なる所なし。

(三)校訂本

(一) 水戸德川家校本　五十卷廿五冊

元祿中、德川光圀卿の校定せられし本なり。

(二) 狩谷棭齋校合本

本書卷五十の卷尾に、三代實錄全部五十卷與吉田雨岡、清水濱臣、大嶋林盒、岡田光憲會談校合、始寬政七乙卯年六月六日、終八年丙辰二月廿三日、高橋眞末とあり。狩谷氏が九箇月の日子を費し、知友と共に會談しつゝ、安田本細井本及類聚國史等を以て校正せしものにて、安田本は一、細井本は細、類聚國史は類と符號し、其の所見をば欄外に一々記入せり。

(三) 山崎知雄校合本

山崎氏弘化三年三月六日、狩谷氏の校合本を悉く轉寫し、次に同年三月廿六日、岸本由豆流所藏の古寫本を以て校合し、又同月十七日宮崎文庫校合本(本居宣長翁が安永八年十一月宮崎文庫本を以て校合せられしものを、寬政十二年小國重年之を轉寫し、文化十二年鈴木長温更に轉寫せしもの)を轉寫し、嘉永三年二月廿一日、黑川春村氏校合本(黑川氏が屋代弘賢手澤校本を以て比校せしもの)を、同年三月内藤氏校本(同氏の尾州家本を以て校合せしもの但し卷十八まで)を轉寫せるものなり。

五、脱漏と錯簡

本史は幸に缺卷なけれど、寫本版本共に完本にあらず。今精細に之を檢するに、卷一より十三まで及卷四十九、五十の兩卷合せて十五卷(卷十七、十八、三十三、三十四、四十四、四十五、四十七、以上七卷も完本なるべし)は完本なるが、其の他は抄本なり。其は何に據りて之を知るかと云ふに、卷十九貞觀十三年正月八日乙卯條に叙位の事を述べて、女御從四位下藤原朝臣高子從三位男一人女十一人と書し、男女十二人の氏名を略し、同月廿九日丙子條に任官の事を記して、二品行治部卿賀陽親王爲二大宰帥一、治部卿如故云々、二十二人と云ひて、其の官職氏名をば略し、三月戊申條には、單に除目三十人と書して、官職氏名を全部省略せり。又同年四月十三日己丑、從五位下陰陽助兼權博士笠朝臣巻云云と書して、履歴をば省略せり。是等の記事にて完本にあらざること明かなるが、又日本紀略と對照するに、卷十五貞觀十年の紀の如きは、紀略に見えて本史に缺けたるもの五十餘條に及べり。他の卷にはかゝる甚しきものはなけれど、一卷に十數箇條脱漏せるもの尠からず。此は脱漏せるにはあらずして、殊更に抄略せしなり。又類聚國史と對照するに、彼に見えて此に漏れたるもの尠からず。其の

記事中古寫本に見ゆるものも尠からざれど、現存の諸本はいづれも或る部分は抄略本なることは否定すべからず。

次に錯簡も亦往々存す。其の一二の例を擧ぐれば、版本卷三十五元慶三年四月十八日丁丑、延暦寺座主圓珍以下二十一僧を淸涼殿に屈して修法せしめし記事、五月十八日丁未に重出す。之を類聚國史百七十八修法の部と對照するに、五月は誤なり。又同年五月廿日己酉、大和國の米百斛を淸和院に進る事見ゆるが、同じ記事卷三十六同年十月廿日丙子條に重出す。此は十月廿日が正しく、五月廿日は誤なること、各古寫本及前後の記事にて明かなり。又同年十一月廿六日辛巳にあるべき源朝臣伯立以下敍位の記事が、十二月廿六日辛亥に出でしは錯簡なること、尾張本淀本及類聚國史にて之を證せらる。又版本卷十五貞觀十年正月二日丁酉に、皇太子大極殿最勝會に參入せられ、同年同月八日癸卯、紫宸殿にて論義ありと見ゆるは、承和十年正月二日、同月八日の誤にて、續日本後紀の記事なり。斯くの如き錯簡あるに據れば、三代實錄も續日本後紀の如く、或る部分は嘗て散亂せしを整理せしものなるべし。

校訂標注 日本三代實錄

凡例

一、本書は、松下氏校訂寛文十三年の版本を以て底本とし、左の諸本(解題は解説の下に之を擧げたるを以て此には略す)を以て校訂せり。

一、古寫本

			符號
一 東山御文庫本		五十卷	(祕本)
一 内閣慶長本	内閣文庫所藏	五十卷	(閣本)
一 尾張本	尾張德川侯爵所藏	五十卷	(尾本)
一 前田本	前田侯爵所藏	五十卷	(前本)
一 谷森本	谷森建男氏所藏	五十卷	(谷本)
一 華山本	同上	五十卷	(華本)
一 福嶋本	同上	五十卷	(福本)

一 淀　本 神崎一作氏所藏 五十卷 （淀　本）

一 宮　崎　本 宮崎文庫所藏 五十卷 （宮　本）

一 細井貞雄本 狩谷校本に據る （細　本）

一 安田躬弦本 同　上 （安　本）

一 岸本由豆流本 山崎校本に據る （朝　本）

二、校合本

一 伴信友校合本 山崎校本に據る 五十卷 （伴　校　本）

一 狩谷棭齋校合本 無窮會神習文庫所藏 五十卷 （狩谷校本）

一 山崎知雄校合本 同　上 五十卷 （山崎校本）

一 黑川春村校合本 山崎校本に據る 五十卷 （黑川校本）

三、注釋書

一 三代實錄私記 矢野玄道著 十二卷 （私　記）

一 三代實錄故事考 足羽敬明著 三　卷 （一　考）

二、本史は之を前史と比較するに、二三の異なるものあり。一は干支と日數とを併せ擧げたること是なり。前史は干支をのみ擧げたるに、本史は之を併せ擧げたるは、記憶上搜索上大に便利なり。二は月朔を必ず擧げたること是なり。前史は記事あれば之を擧げたるも、無ければ擧げざるを例とす。然るに本史は、記事の有無に關せず必ず之を擧ぐることゝ爲したるは、閲覽上大に便利なり。三は恒例臨時の記事に就きて、凡例を擧げたること是なり。此の事は序文に、節會儀注云云、臨時之履行成常、聊標凡例、以示有之矣といへるが、各事項に就き、初見の條に其の事由を說明して、以下效之と云へるは、後世を益すること少からず。此の例は文德實錄などにも往々見えたれど、三代實錄に至りては、序文にも之を載せて、一々之を說明したるは、編者の用意周到なるを知るべし。

三、現存の本史は、抄略本にして完本にあらず。是れ實に遺憾の事なり。尤も全篇悉く然りと云ふにはあらざれど、之を日本紀略及類聚國史と對照するに、全然其の記事を省略せるもの少からず。又敍任の條は數十人中僅に一二の人を擧げて、其の他は若干人之を除くと注し、或は除目若干人として、悉く之を除けるものあり。是れ實に惜しむべきことなり。故に類聚國史に見えたるものは、悉く之を採りて、

闕文を補へり。次に日本紀略は、其の名の示すが如く、文章を省略せるもの多く、正しく國史の文とはいふべからず。然れども省略せられざるものもありて、其の略否を判別すること容易ならず、然るに略文なるが故に之を收載せざれば、全く其の事實を知るに由なし。而して其の條項は、全篇を通じて數百箇條に渉り、關係する所頗る大なるを以て、略文なることを知りつゝ、類史と共に悉く之を收めたり。又扶桑略記は、主として三代實錄より抄錄せるもの多く、同書卷廿二光孝天皇の終に、已上三代實錄五十卷抄記已了とあり、本史と之を對照するに、其の證明白なり、然るに往々他書より採錄せるものも混交して、之を識別することは頗る困難なれど、正しく本史の文にて闕を補ふに足るべしと思はるゝものは、一二之を採錄したるものあり、其の由は一々標注に之を記せり。

四、本書の校訂に當りて、底本と校合し、或は參照したる諸書は、大略前史に同じ、故に之を略す。

五、續日本紀以下宣命は總べて傍訓を施したるが、純正なる古文も時勢の推移に隨ひて、文體自ら一變し、文中漢語を混入して怪しむ所なく、大に古文を亂すに至れり。此弊は日本後紀以後漸次に見えたるが、三代實錄に至りては、頗る甚しきも

のあり、前史の體に倣ひて强ひて傍訓を施すも益なきを以て、紛れ易き所のみ之を施し、其の他は悉く之を略せり。

六、本書の校訂に際し、德川侯爵、前田侯爵、並に谷森建男氏、神崎一作氏等祕藏の書を閲覽して、益を得たること極めて大なり。尾州本の名は夙に之を聞きしかど、未だ之を閲覽するを得ざりしが、今回幸にして、始めて之を對校することを得たり。前田本は、世の識者未だ之を知らざりしが、之も今回始めて閲覽することを得たり。谷森本淀本も、從來の學者の未だ校合せざるものなり。幸に兩侯爵家並に諸氏の好意にて、以上の諸本を閲覽することを得たるは、斯學のため喜ばしきことなり。謹みて之を拜謝す。

昭和五年六月

佐伯有義識

【三代實錄序】此序は類史百四十七に見ゆ
○述言事、漢書藝文志に左史記言右史記事、事爲春秋、言爲尚書とあり
○旦暮於手披之處、披見する書册に其時代彷彿すとなり
○遂初之迹、楚辭天問篇に遂古之初誰傳道之、注に遂往也とあり、原本遂を逐に作る諸本に據て改む
○俄頃於目閲之間、閲し行く書中に倏然として去來すとなり
○太上天皇、宇多天皇を申す
○生知、論語季氏篇に生而知之者上也學而知之者次也とあり
○性植、植は楚辭招魂の注に志也とあり
○體耀魄、北堂書抄に尚書大傳云北辰謂之曜魄、又唐揚烱渾天賦に天有北辰衆星環拱天帝威神尊之曰耀魄とあり耀曜同じ
○奏階、文選魏都賦注に黃帝泰階六符經曰泰階者天之三階也上階上星爲天子下星爲女主中階上星爲諸侯三公下階上星

日本三代實錄序

臣時平等、竊惟、帝王稽古、咸置史官、述言事而徵廢興、甄善惡以備懲勸、開闢之辰、旦暮於手披之處、遂初之迹、俄頃於目閲之間者也、伏惟太上天皇、生知至聖、性植純仁、體耀魄而居宸、平奏階而建極、彝倫攸序、憲章該擧、以爲、始自貞觀、爰及仁和、三代風猷、未著篇牘、若缺文之靡補、恐盛典之長虧、詔大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅陸奥出羽按察使臣源朝臣能有、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫臣藤原朝臣時平、參議勘解由長官從四位下兼守左大辨行春宮亮臣菅原朝臣道眞、從五位下行大外記兼播磨權大掾臣大藏朝臣善行、備中掾從六位上臣三統宿禰理平等、因循舊貫、勒就撰修、四五年來、大納言能有

朝臣拜右大臣、奄然殞逝、既而搜採稍周、條流且辨、天皇倦負扆於九重、輕脫屣於萬乘、宸旒應厭、凝神默於姑射、淨居有勸、落飾震於魔宮、爾乃時屬揖讓、朝廷務殷、在此際會、蹔停刊緝、今上陛下、承累聖之寶稱、順兆民之樂推、天縱雄才、嗤漢武於大略、德尙恭己、法虞舜之無爲、思欲遵前旨之草創、促即日之財成、勅正三位守左大臣兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平、正三位守右大臣兼行右近衞大將臣菅原朝臣道眞、從五位上行勘解由次官兼大外記參河權介臣大藏朝臣善行、大外記正六位上臣三統宿禰理平等、責其參詳、或有頭角、右大臣道眞朝臣、坐事左降、歘向西府、洎斯文之成立、値彼臣之謫行、大外記理平、賜爵遷官、不遂其業、臣等强勉專精、經引積稔、編次究數、筆削畢功、起於天安二年八月乙卯、訖于仁和三年八月丁卯、首尾卅年、都爲五十卷、名曰日本三代實錄、

爲元士、下星爲庶人、三階平則陰陽和風雨時歲大登民人息天下平是謂太平とあり
○彝倫攸序、序は原本敍に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
○三代風猷、清和陽成光孝天皇の御三代の御治績を云
○左大辨(道眞)、原本左を右に作る類史に據て改む
○從六位上臣(理平)、臣は前後の例に據て補ふ
○搜採、採は原本采に作る諸本及類史に據て改む
○條流、南史沈約傳に條流雖擧而採綴未周とあり
○天皇、宇多天皇を申す
○負扆、禮記明堂位に天子負斧依(扆に同じ)南鄕而立とあり
○脫屣、漢書郊祀志に天子曰嗟乎誠得如黃帝吾視去妻子如脫屣耳とあり
○宸旒、冕旒に同じ天子の冠なり
○默於姑射、仙洞御所を云莊子逍遙遊篇に藐姑射之山有神人居云云とあり默は原本點に作る諸本

及類史に據て改む
○淨居、寺院を云
○震於寬宮、寬宮は天鸞の宮殿を云維摩經菩薩品に見ゆ震は類史宸に作る
○時屬揖讓、御讓位の時に遭遇せるを云、時は諸本及類史に據て補ふ
○刊緝、晉書摯虞束晳傳贊に財成禮度刊緝遺文とあり
○今上陛下、醍醐天皇を申す
○樂推、梁書武帝紀に四海樂推殷周所以改物とあり
○天縱雄材、論語子罕篇に固天縱之將聖とあり
○嚽漢武於大略、漢書武帝紀贊に如武帝之雄材大略不改文景之恭儉以濟斯民雖詩書所稱何有加焉とあり
○虞舜之無爲、論語衞靈公篇に無爲而治者其舜也與夫何爲哉恭己正南面而已矣とあり
○促郎日之財成、財は裁也促は原本従に作る諸本に據て改む
○臣藤原朝臣時平、臣は諸本及類史に據て補ふ
○臣大藏朝臣善行、臣は上文に據て補ふ

今之所撰、務歸簡正、君舉必書、綸言遐布、五禮沿革、萬機變通、祥瑞天之所祚於人主、灾異天之所誡於人主、理燭方策、撮而悉載之、節會儀注、烝嘗制度、蕃客朝聘、自餘諸事、永式是存、粗舉大綱、臨時之事、履行成常、聊標凡例、以示有之矣、關委巷之常、乖敎世之要、妄誕之語、弃而不取焉、臣等生謝含章、辭非隱核、腐毫淹祀、硯汗失魂、謹詣朝堂、奉進以聞、謹序、

延喜元年八月二日

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平

從五位上行勘解由次官兼大外記臣大藏朝臣善行

○臣三統宿禰、臣は同上

○賁其參詳、其事に干與して審議するを云賁は求也

○有頭角、辭書に頭角は端緒也とあり編修に就て審議し端緒を得しむる意なるべし

○値彼臣之適行、延喜元年正月廿五日なり

○理平賜爵遷官、延喜元年正月七日從五位下に叙し二月十九日越前介に任ぜらる

○究數、數は總數なり編次凡て完きを云

○筆削、史記孔子世家に至於爲春秋筆則筆削則削とあり

○君擧必書、漢書藝文志に古之王者世有史官君擧必書とあり、原本書を盡に作る諸本及類史に據て改む

○綸言、禮記緇衣に王言如綸其出如綍とあるに據る

○五禮、尙書舜典に修五禮傳に修吉凶軍賓嘉之禮とあり　○灾異天之所誡云云、漢書宣帝紀に蓋災異者天地之戒也とあり　○方策、禮記中庸注に方版也策簡也とあり書册を云　○節會儀注、舊唐書經籍志史類八の注に儀注以紀吉凶行事とあり　○烝嘗、禮記祭統に秋祭曰嘗冬祭曰烝とあり　○闕委巷之常、禮記檀弓に曾子曰小功不爲位也者是委巷之禮也、疏に委細屈曲街巷之禮言禮之末略非典儀正法とあり闕は原本開に作る閣本前本淀本に據て改む　○謝含章、含章は易坤卦象傳に含章可貞以時發也或從王事知光大也、疏に知慮光大とあり　○隱核、考に按前漢司馬遷傳贊曰其文直其事核不虛美不隱惡故謂之實錄師古曰核堅實也とあり　○腐毫云云、腐毫は禿筆と云に同じ淹は久留也祀は年也

校訂標注 六國史第九卷目次

巻第廿五【起貞觀十六年正月盡同六月】

日本三代實錄卷第一

起天安二年八月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

太上天皇

天皇諱惟仁、文德天皇之第四子也、母太皇太后藤原氏、太政大臣贈正一位良房朝臣之女也、嘉祥三年歲在庚午三月廿五日癸卯、生天皇於太政大臣東京一條第、十一月廿五日戊戌、立爲皇太子、于時誕育九月也、先是有童謠云、大枝乎超天、走超天、騰加理躍止利超天、我耶護毛留田仁耶、捜阿左理食無志岐耶、雄々伊志岐耶、識者以爲、大枝謂大兄也、是時文德天皇有四皇子、第一惟喬親王、第二惟條親王、第三惟彥親王、皇太子是第四皇子也、天意若曰超三兄而立、故有此三超之謠焉、天安二年八月己丑朔、廿七日乙卯、文德天皇崩於冷然院新成殿、從五位上守左近衛少將兼行美濃介良岑朝臣清風、從五位上守右近衛少將兼行主殿頭美濃

【即位前紀】太上天皇、清和天皇に坐す
○藤原氏、紹運錄に太皇太后藤明子忠仁公女染殿后とあり
○大枝乎超天、大枝とは三皇兄を申す
○走超天、原本此三字重複せり都に闕本尾本紀略及大鏡裏書に據て削る走は紀略辨に作る
○騰加理躍止利、原本騰躍止利加理とあり大鏡裏書に據て改む
○我耶護毛留、耶は原本那に作る諸本及紀略に據て改む鹿持氏は加の誤なるべしと云
○捜阿左理食無志岐耶、捜り求め食む鴫誠なりあさるは食物を求むるを云鴫は抄羽族部に玉篇云鷸（和名抄云之岐一云田鳥）野鳥也とあり
○雄々伊志岐耶、雄々しき哉やとは御勢のたけきになずらへて賛て云るなり耶は原本那に作る諸本

權介紀朝臣今吉、各率將監將曹近衞等、陣於皇太子直曹、于時春宮帶刀舍人解陣退散、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使安倍朝臣安仁、率從五位下守左近衞少將兼行備前權介坂上大宿禰當道、從五位上守右近衞少將兼行伊勢權介藤原朝臣有貞、將監已下、奉天子神璽寶劒節符鈴印等於皇太子直曹、從五位上行少納言兼侍從橘朝臣清蔭、左衞門佐從五位上兼行少納言侍從藤原朝臣基經、從四位上行中務大輔清原眞人瀧雄、幷主鈴等相從焉、太政大臣從一位藤原朝臣良房、左大臣從二位源朝臣信、右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相、侍於皇太子直曹、公卿於藏人所、定緣葬諸司、正三位行中納言源朝臣定、參議從三位行中宮大夫伴宿禰善男、參議從四位上行左兵衞督兼信濃守源朝臣多、從四位上行中務大輔清原眞人瀧雄、從四位下行民部大輔兼加賀守藤原朝臣仲統、勘解由長官兼左近衞中將從四位下守右大辨行讚岐守藤原朝臣良繩、從五位下守左少辨丹墀眞人貞峯、從五位下守木工頭兼左衞門權佐紀朝臣春枝、

紀略及大鏡裏書に據て改む此事諸古事談一にも出づ

〔天安二年〕戊戌朔、新は原本闕に作る閣本尾本前本及文德紀天安二年八月乙卯紀に據て改む

○左近衞少將、衞字は諸本に據て補ふ

○美濃介(淸風)、文德紀天安二年二月戊辰紀に播磨權介とあり下文十一月甲子紀にも播磨介とあれば此に美濃介とあるは誤なるべし

○陣於皇太子、陣は原本陳に作る秘本尾本前本に據て改む下同じ

○從五位下守左近衞少將、下は原本上に作る貞觀元年十一月庚午紀に授二坂上大宿禰當道從五位上一とあり上は下の誤なり故に改む

○天子、紀略天皇に作る

○左衞門佐(基經)、原本左を右に作る閣本及文德紀天安元年二月辛卯紀に據て改む

○緣葬諸司、緣は原本送に作る閣本前本淀本及紀略に據て改む

○參議從三位(善男)、從は原本正に作る下文十一

月壬戌紀に據て改む善男は貞觀元年四月癸卯紀に加正三位とあり此時正三位に非ず
○信濃守源朝臣多、多は天安二年六月癸卯紀に爲伊勢守とあり下文にも伊勢守とあれば信濃守は誤なり
○貞峯、峯は閣本尾本淀本岑に作る下同じ
○氏宗、原本宗氏に作る諸本に據て改む
○木工權助、益門は天安元年正月癸丑木工權助となり同二年二月甲子木工助となる此に權助とあるは誤なり
○作路司、路は原本略に作る諸本に據て改む
○勅符木契、儀式固關使儀條に仰木工寮令作木契(長三寸方一寸)召內記令作勅符大臣手書木契一面云賜某國訖賜內記令中務析木析畢各相合如故大臣即令持勅符木契及官符等詣於御所執奉覽木契右片便留奏御所云々(節略)とあり
○此頭、此は仁壽三年正月壬午紀是に作る
○纜主、前後の例に據る

六位已下四人爲裝束司、正三位行中納言橘朝臣峯繼、參議從三位行春宮大夫平朝臣高棟、參議左大辨從四位上兼行左衞門督伊豫權守藤原朝臣氏宗、正四位下行下野守豐江王、散位從四位下茂世王、從四位上行越中守源朝臣啓、左京亮從五位下朝原宿禰良道、從五位下守主計頭兼行筭博士木工權助有宗宿禰益門、六位已下四人爲山作司、從四位下行越中權守房世王、從五位上守宮內大輔橘朝臣貞雄、大炊頭外從五位下丸子連家繼、六位已下二人爲養役夫司、從四位上行山城守基兄王、右京權亮從五位下巨勢朝臣河守、六位已下二人爲作路司、正三位行中納言源朝臣弘爲前次第司長官、從五位上守治部大輔藤原朝臣本雄爲次官、判官二人、主典二人、參議從四位上行左兵衞督兼伊勢守源朝臣多爲後次第司長官、兵部少輔從五位下源朝臣直爲次官、判官二人、主典二人、先是廿六日、遣使於伊勢近江美濃等國、賚勅符木契、警固諸關、散位從五位上藤原朝臣菅雄、外從五位下太秦公宿禰此雄、幷內舍人一人爲伊勢使、從五位上行丹波介坂上大

に此下にも並字あるべきなり
○散位(直道)、散上一人の官位姓名を脫する歟と廣嗣云
○與度山崎等道、與度は今の淀町なり等字は閣本尾本前本に據て補ふ
○鎧甲、鎧は釋名に猶塏塏堅重之言也とあり
○同輿、輿は文德紀薹に作る
○東五條宮、拾芥抄中末に東五條、五條后宮とあり
○紫微宮、晉書天文志に紫微垣十五星在北斗北一曰紫微天帝之座也天子之常居也とあり
○修國史局云云、職員令に中務省卿一人掌受納上表監修國史義解に謂圖書寮所修此省更押監也拔雜令有徵祥災異陰陽寮奏訖者季別封送中務省入國史是也とあり
○效此、效は原本効に作る誤なれば改む
(九月)眞原岡、下文二年十二月丁酉紀に詔改眞原山陵爲田邑山陵とあり諸陵式に平安宮御宇文德天皇在山城國葛野

宿禰貞守、散位從五位下上毛野朝臣繩主、內舍人一人爲近江使、散位從五位下藤原朝臣直道、幷內舍人一人爲美濃使、令山城國司警護宇治、與度、山崎等道、以東南西三方通路之衝要也、是日、宜告天皇崩之狀於山城國司、及伊勢、近江、美濃等使、遣從五位下守右少辨藤原朝臣家宗、率諸衛監護左右兵庫、從四位上守宮內卿源朝臣勤、勘解由次官從五位下藤原朝臣宜等監護左右馬寮、○廿九日丁巳、諸衛鎧甲嚴警、皇太子與皇太夫人同輿遷御東宮、儀同行幸、但不警蹕、先是廿七日、奉迎皇太夫人於東五條宮、欲令擁護幼冲太子也、陰陽寮奏言、夜有星入紫微宮、赤如炎火、長十餘丈、凡天文風雲氣色有異、陰陽頭及天文博士密封奏聞、修國史局召陰陽寮、索其案文、記載史書、他皆效此、○九月己未朔、二日庚申、大納言安倍朝臣安仁、中納言橘朝臣岑繼、參議平朝臣高棟、伴宿禰善男、從四位下行文章博士兼備前權守菅原朝臣是善、大藏大輔正五位下兼守左中辨高階眞人岑緒、從五位上行大學博士大春日朝臣雄繼、外從五位下行陰陽權助兼陰陽博士滋岳朝臣川人、

郡一兆域東西四町南北四町守戸五烟、今同郡太秦村大字中野是なり
○轉念功德、轉念は經を轉じ佛を念するを云
○成服、喪服を著くるを云
○令五畿、令は原本命に作る紀略に據て改む
○限以三日、漢書文帝紀遺詔に其令天下吏民令到出臨三日皆釋服とあり
○方相、文德紀天安二年八月甲子紀にみす
○廣隆寺、拾芥抄下本に廣隆寺東寺末太秦又號蜂岡寺河勝建立藥師とみゆ
○大佛頂三昧、大佛頂經の壇法に依て佛頂咒を誦する行法を云
○畢年、尙書堯典に朞三百有六旬有六日、傳に四時日朞とあり尾本期年に作る朞期通す
○過密、同に四海遏密八音、傳に遏絶密靜也とあり
○雖從、雖は原本惟に作

外從五位下行陰陽助兼權博士笠朝臣名高、外記史內記各一人、至山城國葛野郡田邑鄕眞原岡、定山陵之地、○三日辛酉、夜月中有黑色、須臾月色赤如血、是日、大行皇帝晏駕之後、始盈七日、遣使於近陵諸寺、各修功德、自此之後、毎値七日、於京邊諸寺、修轉念功德、○四日壬戌、東宮成服、群臣百寮從之、令五畿七道、始著素服、擧哀成禮、擧哀之禮、毎日三度、限以三日、式部省率百官於冷然院南路頭擧哀、公卿及侍臣已下於東宮、喪服之限、以日易月、十三日而釋之、其遠所者、以詔到日爲期、○六日甲子、葬文德天皇於眞原山陵、送終之禮、皆從儉約、一如仁明天皇故事、但變於前例、只是作方相而已、○七日乙丑、遣大學頭從五位上兼行東宮學士豐階眞人安人、存問供御葬之群臣、安置十僧於近陵山寺、四十僧於廣隆寺、合五十口、始自今日、至于卅九日、轉經念佛、安置沙彌廿人於陵邊、晝夜結番、修大佛頂三昧、朞年之後、當令得度、宣詔內外云、朞年之過密、雖從易月之制、率土黔黎、須有心喪、宜禁飮宴作樂美服、○八日丙寅、諸衞陣兵脫甲從常儀、○十四日壬申、遣大中臣氏人於左右

る諸本及紀略に據て改む
〇心喪、禮記檀弓に心喪三年、注に心喪戚容如父而無服也とあり
〇左右京、右字は諸本及紀略に據て補ふ
〇將釋服、將字は紀略に據て補ふ
〇內藏權頭、權字は上文及下文十一月甲子紀に據て補ふ
〇源朝臣平、嵯峨天皇々子源信の男
〇源朝臣舒、同明の男
〇源朝臣勤、嵯峨天皇皇子元慶五年五月癸亥に傳見ゆ
〇廣基爲助、此人助さなること閏二月壬子條（文德紀一七二頁）に見ゆ
〇空中有聲、空は原本宮に作る紀略に據て改む

京五畿七道、修祓禊、以將釋服也、以參議從三位行春宮大夫平朝臣高棟爲權中納言、勘解由長官兼左近衛中將從四位下守右大辨行讃岐守藤原朝臣良繩爲參議、散位從五位下源朝臣同爲侍從、春宮亮兼右衞門佐筑前守從五位下藤原朝臣興邦爲內藏權頭、筑前守如故、右京大夫從四位下兼行式部大輔春宮權亮南淵朝臣年名爲信濃守、右京大夫式部大輔如故、左衞門佐從五位上兼行少納言侍從藤原朝臣基經爲左近衞權少將、少納言侍從如故、從五位上行右兵衞佐兼行伊豫介藤原朝臣良世爲右近衞權少將、伊豫介如故、從五位下守內藏權頭兼行筑前守藤原朝臣興邦爲左衞門佐、餘官如故、侍從從五位下伴宿禰中庸爲右衞門佐、散位從五位上源朝臣平爲左兵衞佐、從五位下守雅樂頭源朝臣舒爲權佐、從四位上守宮內卿源朝臣勤爲右兵衞督、散位從五位下平朝臣有世爲左馬助、左兵衞佐從五位下兼行信濃介藤原朝臣秀道爲右馬頭、信濃介如故、散位從五位下藤原朝臣廣基爲助、是夜、空中有聲如雷、〇十五日癸酉、明經得業生正七位下苅田首安雄、

○公除、天皇の喪服を脱御し給ふを云
○大神宮、大は原本太に作る秘本及紀略に據て改む下同じ
○齋內親王、嘉祥三年七月甲申紀皇女晏子內親王爲伊勢齋と見ゆ
○從五位下源朝臣包、原本下を上に作る四月壬寅紀及下文十一月壬戌紀貞觀元年七月丁卯紀に據て改む
○中務少輔從五位下（忠宗）、原本中務少輔の四字なく下を上に作る四字は秘本及二年五月辛未紀に據、補ひ下は貞觀四年正月壬午・六年正月癸卯紀に據て改む
○從四位下行文章博士、原本四を五に、下を上に作る四は諸本に據り下は九月庚申紀及貞觀二年十一月壬辰紀に據て改む
○道嶋宿禰瀧嶋、原本道嶋を道興に、瀧嶋を瀧鳥に作る道嶋の嶋は文德紀天安元年十二月丁丑紀及下文貞觀八年正月甲申紀に據り瀧嶋は同紀及[illegible]本[illegible]本に據て改む
○時宗王、承和二年正月丁未紀に[illegible]位時宗王

大初位下葛井連善宗、並進二階、以奉試及科也、○十六日甲戌、今上公除、百官吉服、仍大祓於朱雀門前、○十八日丙子、所司始進御膳、○廿日戊寅、遣正六位上大中臣朝臣良人於伊勢大神宮、告以齋內親王退出也、○廿二日庚辰、地震、○廿三日辛巳、散位從五位下源朝臣包爲中務少輔、中務少輔從五位下藤原朝臣忠宗爲侍從、備後守從五位下藤原朝臣有年爲近江介、從四位下行文章博士兼備前權守菅原朝臣是善爲播磨權守、文章博士如故、從五位上守右近衞少將兼主殿頭行美濃權介紀朝臣全吉爲備前權守、從五位上守右近衞權少將兼行伊豫介藤原朝臣良世爲少將、伊豫介如故、從五位下行右馬助藤原朝臣廣基爲右兵衞佐、外從五位下行近江介道嶋宿禰瀧嶋爲右馬助、○廿五日癸未、從五位下行中宮大進三統宿禰眞淨爲亮、外從五位下行少進御船宿禰彥主爲大進、典藥頭從五位下兼行侍醫當麻眞人鴨繼爲主殿頭、侍醫如故、大學頭從五位上兼行東宮學士豐階眞人安人爲美濃權介、大學頭如故、散位從五位下賀茂朝臣弟岑爲備後守、○廿八日丙戌

從四位下一とあり同十四年二月丁丑治部大輔、同年五月甲戌大學頭、仁壽三年正月相摸守と爲る何れも從四位下とあれば從五位下は誤なり
○星所落、所字は紀略に據て補ふ
（十月）始發敎習鼓角之聲、八月廿七日文德天皇崩御十月二日に至るまで三十五日なり
○刓滅、說文に刓剸也徐曰印刓弊とあり磨滅せるを云
○是日夜、夜字は閣本前本及紀略に據て補ふ
○漏刻、天智天皇十年四月紀（紀下二四二頁）に始見す
○廣隆寺、上に注す山陵と同地なり故に此寺にて御齋會を修す
○公卿已下、已下の二字は閣本尾本前本及紀略に據て補ふ
○分頭、原本仗頭に作る諸本に據て改む
○使於近陵諸寺、於字は紀略に據て補ふ
○三昧、金剛經注に三昧梵語此云二正受一亦云二正見一遠二離九十六種邪一是名二正見一とあり

散位從五位下時宗王卒、○廿九日丁亥、夜有流星、自東南行西北、星所落之處、有聲如雷、○冬十月戊子朔、日有蝕之、六衞府兒直於陣者、賜絹綿各有差、○二日己丑、公卿不就太政官曹司廳、承前例、於仗頭賜次侍從已上飲、是日、隨停止、以諒闇也、鼓吹司始發敎習鼓角之聲、例也、○七日甲午、新鑄銅印一面、賜讃岐國、先是彼國司言、所在銅印、久經年代、文字刓滅、仍賜之、○八日乙未、遣散位從五位下內宗王、從五位下守左少辨丹墀眞人貞岑等、迎伊勢齋內親王、大祓於建禮門前、而發使焉、是日夜、陰陽寮漏刻盛水銅器自鳴一聲、○十六日癸卯、延五十僧於廣隆寺、修文德天皇七々日御齋會、公卿已下會集、又分頭遣使於近陵諸寺、修轉念功德、○十七日甲辰、便請廣隆寺五十僧於東宮、限以三日、轉讀大般若經、廣隆寺卅僧、近陵寺十僧、始自御葬明日、至于卅九日、讀經念佛、頻日所請、卽便是也、陵邊修三昧沙彌廿口、令住雙丘寺、元是右大臣清原眞人夏野之山莊、今所謂天安寺也、○廿二日己酉、授日向國從五位上高智保神、都農神等從四位上、從五位上都萬神、江田神、霧嶋神、並從四

○雙丘、洛外花園村に屬す續後紀(三二七頁)を參看すべし
○天安寺、山城志に法金剛院在葛野郡雙丘東南、百練抄曰大治五年十月待賢門院重新天安寺改名法金剛院とあり
○高智保神、式外、日向國西臼杵郡高千穗町
○都農神、神名式日向國兒湯郡都農神社、今國幣小社に列し都農村川北にあり
○都萬神、同式同郡都萬神社、下穗北村妻
○江田神、同式宮崎郡江田神社、檍村江田
○霧嶋神、同式諸縣郡霧嶋神社、今西諸縣郡小林町にあり
○布都神、同式伊豫國桑村郡布都神社、周桑郡吉岡村
○兼陰陽權博士、類史卅六には陰陽の二字なし
○眞原、原は原本高に作る閣本前本從本に據て改む
○爲大宰帥、按に正月十六日任大宰帥とあり此に再任せられしは蓋し文德天皇崩御によりて解かれ更に任ぜられしなり

位下、伊豫國正六位上布都神從五位下、○廿三日庚戌、遣外從五位下行陰陽助兼陰陽權博士笠朝臣名高、鎭謝眞原山陵、○廿六日癸丑、從五位下行越前介良岑朝臣經世爲少納言、從五位下行相摸介滋野朝臣安成爲權大外記、相摸介如故、周防權守從五位下藤原朝臣常行爲右近衞權少將、周防權守如故、四品惟喬親王爲大宰帥、○卅日丁巳、大祓於建禮門前、爲明日擬發伊勢大神宮使也、○十一月戊午朔、遣從四位下行越中權守房世王、內藏頭從五位上兼行神祇大副中臣朝臣逸志等於伊勢大神宮、告以天皇將即位也、是日、陰陽寮所進明年暦、付內侍奏、○三日庚申、停平野春日等祭焉、○五日壬戌、以正三位行中納言源朝臣定、從四位下行左馬頭在原朝臣行平、爲山階山陵使、參議左大辨從四位上兼行左衞門督伊豫權守藤原朝臣氏宗、從四位上行中務大輔淸原眞人瀧雄爲柏原山陵使、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使安倍朝臣安仁、中務少輔從五位下源朝臣包爲嵯峨山陵使、參議從三位行中宮大夫伴宿禰善男、大舍人頭從五位上

○春日祭使、爲は續史愚抄及紀略に據て補ふ

(十一月)越中權守、權は上文八月乙卯及貞觀二年閏十月辛未紀に據て補ふ

○平野春日等祭、平は原本大原の二字に作る秘本閣本尾本及紀略に據て改む

○山階山陵、天智天皇

○柏原山陵、桓武天皇、柏は原本栢に作る尾本前本淀本に據て改む

○嶋江王、嶋は原本島に作る諸本に據て改む嘉祥三年三月乙巳紀・仁壽三年四月庚午紀證さすべし

○深草山陵、仁明天皇

○眞原山陵、文德天皇、卽ち田邑山陵なり

○外祖母源氏、潔姫

○宣勅、原本勅を命に作る閣本尾本前本等に據て改む

○諸王諸臣、諸臣の二字は嘉祥三年四月及元慶元年正月卽位詔に據て補ふ

○大津乃宮、乃字は諸本に據て補ふ

○恐美坐久止、久は前例に據て補ふ

○皇止坐天、坐は原本座に作る閣本前本淀本に據

嶋江王爲深草山陵使、參議勘解由長官兼左近衞中將從四位下守右大辨行讃岐守藤原朝臣良繩、從四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善爲眞原山陵使、從四位上行右兵衞督源朝臣勤爲今上外祖母源氏愛宕墓使、並告以天皇卽位也、○七日甲子、天皇卽位於大極殿、時年九歲、詔曰、明神止大八洲國所知天皇詔旨良萬止宣勅乎、親王諸王諸臣百官人等、天下公民、衆聞食止宣、掛畏支平安宮爾御宇之倭根子天皇我宣、此天日嗣高座之業乎、掛畏近江大津乃宮爾御宇之天皇乃初賜比定賜倍留法隨爾仕奉止、仰賜比授賜比之大命乎、受賜利恐美、受賜利懼利、進毋不知爾、退毋不知爾、恐美坐久止宣天皇勅乎、衆聞食止宣、然皇止坐天、天下治賜君波、賢人乃良佐乎得天之、天下乎波平久安久治物爾在止奈毛聞行須、故是以大命坐宣久、朕雖拙劣、親王等乎始天、王等臣等乃相共奈比奉利、相扶奉牟事依弖之、此乃仰賜比授賜閇留食國乃天下之政波、平久安久可奉仕止奈毛所念行、是以正直之心天、天皇朝庭乎、衆

助仕奉止宣天皇勅乎、衆聞食止宣。辭別宣久、凡人子乃蒙福麻久欲爲流事波、於夜乃多米爾止奈母聞行須、故是以朕親母藤原氏乎、皇太夫人爾上奉利治奉流、又仕奉人等中爾、其仕奉狀隨爾、冠位上賜比治賜布、又大神宮乎始天、諸社乃禰宜祝等爾、給位一階、又僧綱乎始天、諸寺知行有聞流、幷天下僧尼乃年八十已上施物賜、又左右京五畿內乃鰥寡孤獨不能自存者、及天下給侍留人等爾、給御物布、又內外官乃未得解由輩免賜、又天下百姓乃牟衞免給、仁壽元年以往調庸未進、在民身者免賜波久止勅天皇大命乎、衆聞食止宣。授兵部卿三品忠良親王二品、左大臣從二位源朝臣信正二位、權中納言從三位平朝臣高棟正三位、參議從四位上兼行左兵衞督伊勢守源朝臣多、參議左大辨兼行左衞門督伊豫權守藤原朝臣氏宗、並正四位下、參議勘解由長官兼左近衞中將從四位下守右大辨行讃岐守藤原朝臣良繩從四位上、無位秀世王、棟氏王、並從四位下、無位廣山王從五位下、從四位上守治部卿兼行美作守源朝臣生、右京大夫從四位下兼行式部大輔信濃守南淵朝臣年

て改む
○天下治賜若波云云、天日下十五字秘本閣本谷本なし御父文德天皇即位詔及御子陽成天皇即位詔に據て補ふ此十五字なくては意通ぜず
○依豆之、豆は原本左に作り諸本久に作る豆の誤なれば改む
○所念行、念は原本命に作る文德天皇及陽成天皇即位詔に據て改む
○皇太夫人爾上奉、中右記に天皇即位日被立后例清和天皇即位天安二年十一月七日甲子立藤明子爲皇太夫人母后號中宮染殿后房女とあり太は原本大に作る閣本尾本前本等に據て改む
○給侍留人等、老齡に入りし者老に依て侍者を給はる人な云
○牟衞免給、免は秘本閣本前本等に據て補ふ
○秀世王、恒武天皇第十二皇子仲野親王の子
○棟氏王、同第十一皇子葛井親王の子
○廣山王、系詳ならず
○美作守源朝臣生、作は原本農に作る閣本尾本前本に據て改む

○橘朝臣貞根、貞は原本良に作る文德紀嘉祥三年五月甲午紀及貞觀三年六月庚申紀に據て改む
○玄蕃頭、蕃は原本番に作る尾本に據て改む
○在原朝臣安貞、原本此下に源朝臣安貞の五字あり閣本尾本前本等に據て削る
○永谷、貞觀元年七月丁卯紀永を水に作る
○右近衞權將監藤原朝臣山陰、原本右を左に陰を蔭に作る諸本に據て改む
○御酉、酉は原本首に作る下文に據て改む
○國兄、貞觀十一年正月七日乙丑紀閑兄に作る
○藤原朝臣古子、藤原冬嗣女五條后の妹なり嘉祥三年七月女御となる
○源朝臣良姫、嵯峨天皇皇女、文德天皇の女御
○賜飲群臣、賜字は紀略に據て補ふ
○大原野祭、私記に在文德天皇仁壽三年紀山田氏云按式十一月大原野祭例用子日歷弦下文十一月書大原野祭皆在子日此係丁卯未詳云
○坂子女王、系詳ならず

名、並正四位下、大學頭從五位上兼行美濃權介豐階眞人安人正五位上、散位從五位上橘朝臣貞根、丹波守大枝朝臣音人、左近衞少將兼行播磨介良岑朝臣清風、右近衞少將兼伊豫介藤原朝臣良世、從五位下守內藏權頭兼行左衞門佐筑前守藤原朝臣興邦、並正五位下、從五位下守左少辨丹墀眞人貞岑、右兵庫頭百濟王永仁、散位橘朝臣伴雄、雅樂頭源朝臣舒、兵部少輔源朝臣直、右近衞權少將兼周防權守藤原朝臣常行、右少辨藤原朝臣家宗、並從五位上、外從五位下守玄蕃頭兼行筭博士家原宿禰氏主、勘解由次官兼行明法博士御輔朝臣永道、散位正六位上在原朝臣安貞、源朝臣有、左衞門大尉坂上大宿禰貞雄、中務大丞佐伯宿禰眞利、大藏大丞大野朝臣鷹取、主殿權助藤原朝臣永谷、右近衞權將監藤原朝臣山陰、左兵衞大尉紀朝臣宗守、淡路守伴宿禰益友、式部大丞巨勢朝臣夏井、內藏權助藤原朝臣安房、並從五位下、左大史正六位上都宿禰御酉、直講布瑠宿禰淨野、大舍人少允文伊美吉國兄、並外從五位下、是日、進文德天皇女御從三位藤原朝臣古子階、加

○重子女王、同上、祕本重を童に作る
○褰帳之女王、御卽位の當日高御座の御帳を褰くるなり原本褰下に御字あり祕本閣本尾本及紀略に據て削る
○九德、尙書皐陶謨に皐陶曰都亦行有九德云々
○七功、考に或云九七字譌誤唐太宗貞觀七年春正月宴玄武門奏七德九功舞禹謨曰九功惟敘、私記に帝範崇文篇云及乎海岳既晏波瀾已清偃七德之餘威敷九功之大化とあり
○深衷、衷は原本哀に作る誤なれは改む
○鴻化推新、推は惟の誤かと云
○含瞬、或は含靈の訛か
○孰不仰屬、仰は原本何に作る諸本に據て改む
○委質、國語に委質爲臣、注に質贄也とあり
○一分之善、分は原本介に作る諸本に據て改む
○豈忘、忘は原本思に作る閣本尾本前本等に據て改む
○志思報効、原本思字なく効を效に作る思は祕本閣本尾本に據て補ひ効は

從一位、無位源朝臣良姬從四位上、禮畢還宮、賜飮群臣、賜祿各有差、○九日丙寅、地震、○十日丁卯、停大原野祭、○十一日戊辰、無位坂子女王、重子女王、並授從四位下、是褰帳之女王也、凡天皇卽位之日、擇王氏女有容儀者二人、充褰御帳之職、因而賜爵、他皆效此、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使安倍朝臣安仁、抗疏請解大將曰、安仁材非九德、藝謝七功、猥蒙先皇帝之恩、假以右將軍之節、辭不獲命、僶俛從事、猶輸深衷、欲訴非據、而奄然崩殂、哀號無及、今聖上承緖、鴻化推新、含瞬懷肝、孰不仰屬、安仁委質先朝、雖無一分之善、歸誠今上、豈忘累葉之恩、所以鞠躬刻心、志思報効、而此職任當股肱、寄重爪牙、警衞勤巡、事功夙夜、況復整烏合之衆、必資脊力、統鷹揚之師、宜藉驍雄、安仁蒲柳秋衰、昏耄日迫、雖欲自勉、力不從心、擁雲旗而慙威稜、佩霜劔而愧尫儒、恐老病潛發、坐嚴陣乞收將軍之印綬、保殘生於桑楡、臣解此職、而所帶猶多、於効涓塵、豈謂無地、伏願、曲垂優恤、鑒其所敢、卽而許之、不任懇款之至、不聽、○十三日庚午、太政官頒下今月七日詔書於京畿七道諸

國云、今稽詔旨、天安二年十一月七日以前、內外未得解由之輩、不論已言上未言上、准承和例、其身所犯、莫以拘責、但未言上者、後司造會赦帳、前後共署言上、亦如先格、又當年徭責不可更免者、後年聽復、不如明詔、敢有乖違者、殊處重責、不曾寛恕、又仁壽元年以往、調庸未進言上、在民身者、不明搜撿、早從免除、若徵取已訖、隱爲未進、及言上先訖、更加徵責者、科責如前、並是權時之恩宥、非猾吏之可恃、慣此風迹、不得再然、自餘事條、一依詔旨、○十四日辛未、從四位下藤原朝臣多可幾子卒、多可幾子者、右大臣從二位良相之第一女也、少有雅操、文德天皇仁壽初、選入掖庭、俄而爲女御、二年授正五位下、四年進爵爲從四位下、○十七日甲戌、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奥出羽按察使安倍朝臣安仁、重上疏曰、安仁近瀝情款、伏佇乾照、而還旨沖深、未垂矜許、魂影震迫、無以自厝、臣耄年既及、慮散命阽危、可濫帶衆官、久萃謗議、而鴻恩未答、纖効無聞、居常勵己、未能惣辭、竊以將軍之職、寄重責深、禦侮防非、唯力是視、假臣壯年猶尸素、況茲暮齡、懼同敗荷、是以抽丹瀉愿、誓祈久遠、

諸本に據て改む
○股肱、尙書益稷に帝曰臣作朕股肱耳目とあり
○爪牙、毛詩小雅祈父章に祈父予王之爪牙とあるに據れり
○勤逕、逕は原本處に作る諸本に據て改む
○烏合之衆、後漢書耿弇傳に見ゆ烏は原本鳥に作る諸本に據て改む
○鷹揚之師、毛詩大雅大明章に時維鷹揚、注に鷹揚如鷹之飛揚也とあり
○蒲柳秋衰昏耄日迫、蒲柳は寶龜三年紀（續紀下二四九頁）に注す禮記曲禮に八十九十曰耄注に耄惛忘也とあり
○擁雲旗云云、雲旗は文選東京賦に雲旗拂霓、注に爲高至雲故曰雲旗也威稜は漢書李廣傳に威稜憺乎鄰國、補注に木四方爲稜人有威如有稜者然故曰威稜とあり
○霜劔、利劔を云駱賓王の詩に風旗翻翼影霜劔轉龍文とあり
○坐嚴陣、私記に或云恐脫文
○桑楡、晩年の意續後紀（四八頁）に注す
○効消塵、原本効を效に

消を治に作る祕本閣本尾本等に據て改む
○郎而許之、私記に郎或云仰歟さ云
○脩義、脩は原本貴に作る諸本に據て改む脩書は脩分錢脩分稻を云
○特慣、特は原本特に作る閣本尾本前本に據て改む
○風迹、後漢書朱浮傳に浮年少有才能頗欲厲風迹注に風化之迹也とあり
○藤原朝臣多可幾子卒、一代要記に記す所此に同じ伊勢物語に此女御の追悼を行ひし時の盛況を述ふ
○懇情款、懇は原本懸に作る諸本に據て改む
○長重、重は原本重に作る諸本に據て改む
○魂業消亡、心身共に憊じ果れて措く所を知らずさなり
○殘命阽危、危は諸本付に作る阽危は承和八年紀(續後紀一九八頁)に註す
○可濫帶榮官、可濫は原本尚濫に作る諸本に據て改む
○曾傳清井、曾傳は毛詩小雅常棣章に門…漢書

伏願、天恩無偏、特垂鑒許、則脩方理暢、庸臣獲所、不任愚懇之至、許之、○廿日丁丑、停園韓神祭、自此之後、鎭魂新嘗等諸祭、皆停止、詔山城國司、令停警固、○廿一日戊寅、遣内舍人正七位上藤原朝臣宗行、佐伯宿禰春岑、紀朝臣良津、賫勅符木契、解諸關警、是日夜分、固近江關使從五位上坂上大宿禰貞守歸奏奉契、以正三位行中納言源朝臣定、爲兼右近衞大將、○廿四日辛巳、固伊勢關使散位從五位上藤原朝臣菅雄歸奏奉契、○廿五日壬午、宣詔内外云、宜改元中宮職、爲皇太后宮職、以散位從五位下橘朝臣休蔭爲侍從、從五位下安倍朝臣有道爲大監物、從四位下行兵部大輔兼越前權守藤原朝臣良仁爲中宮大夫、從五位上守右少辨藤原朝臣家宗爲亮、右少辨如故、正五位下行丹波守大枝朝臣音人爲式部少輔、外從五位下行直講布瑠宿禰淨野爲助教、散位從五位下橘朝臣春成爲雅樂頭、正五位下豐前王爲民部大輔、從四位下行民部大輔兼加賀守藤原朝臣仲統爲兵部大輔、散位從五位下安倍朝臣房上爲大判事、正四位下行下野守豐江王爲宮内卿、散位從五位

燕刺王傳に見ゆ
○鞠尸素、鞠下恐くは躬字あらむ
○敗荷、荷葉の敗れたるを云荷は諸本賀に作る
○天恩無偏、尙書洪範に無偏無黨王道蕩々無黨無偏王道平平とあり
○特垂鑒許、鑒は原本監に作る閣本尾本前本に據て改む
○脩方理暢、原本脩を備に暢を順に作る諸本に據て改む脩方は左傳昭廿九年に夫物物有其官官脩其方注に居其官者必脩其方法以終始之とあるに出づ
○歸奏奉契、奏は祕本尾本宮本に據て補ふ
○伊勢關使、關は原本國に作る上文及貞觀十八年十二月戊辰紀に據て改む
○宜改元中宮職、原本宜字なく元を先に作る類史百七に據て改め補ふ
○休蔭、休は原本林に作る天安元年九月辛亥紀及貞觀九年二月辛巳紀に據て改む
○從四位下行兵部大輔(良仁)、行は例に據て補ふ
○在原朝臣、在は原本藤

下清原眞人道雄爲少輔、從五位上出雲朝臣岑嗣爲典藥頭、從五位下高橋朝臣淨野爲內膳奉膳、從四位下茂世王爲彈正大弼、從四位下行近江權守紀朝臣今守爲左京大夫、參議右大辨從四位上兼行勘解由長官左近衞中將藤原朝臣良繩爲近江權守、餘官如故、散位從四位上清原眞人長田爲下野守、從五位上行丹波介坂上大宿禰貞守轉權守、從五位下行權介藤原朝臣諸藤轉守、從五位上守左近衞權少將兼行少納言侍從藤原朝臣基經爲播磨介、餘官如故、從五位下行曆博士兼紀伊權介大春日朝臣眞野麻呂爲備後介、曆博士如故、從五位下守右衞門權佐紀朝臣恒身爲紀伊權守、從五位上守右中辨兼行式部少輔播磨介紀朝臣夏井爲讚岐守、右兵衞佐從五位下藤原朝臣廣基爲右衞門權佐、侍從從五位下源朝臣至爲右兵衞佐、○廿六日癸未、固美濃關使散位從五位下藤原朝臣直道歸奏奉契、諸衞解嚴、贈故正三位源朝臣潔姬正一位、遣從四位上行越中守源朝臣啓於神樂岡冢、告以贈位、潔姬、帝之外祖母也、左京職言、

に作る宮本に據て改む
○爲大膳大夫、天安二年四月癸巳守不爲二大膳大夫一とあり更に任命せられしなり
○參議右大辨、右は原本左に作る上文此月壬戌及甲子紀に據て改む
○權介藤原朝臣諸藤、天安元年二月甲申紀に丹波介とあり
○源朝臣潔姬、齊衡三年六月紀（文德紀一二五頁）に潔姬薨去の事見ゆ
○神樂岡家、潔姬の墓は神樂岡白川の地にあり家は諸本家に作る
○春耀、傳詳ならず
○大法師位安圓、安圓も傳詳ならず大法師位は類史百八十五に住位に作る
十二月、謹撿徃事云云、以下奏可に至る四十四字既に天安二年紀（文德紀一七一頁）に出づ
○贈皇后、高志內親王
○對馬嶋云云、此事天安元年紀（文德紀一五五頁）に出で文異同あり宜しく參看すべし
○直氏成、天安元年六月庚寅紀に直浦主とあり
○直仁德、直は原本眞に作る前本從本に據て改む

每年進鍛冶戶百濟品部戶等計帳、無益於公家、有煩於職吏、請除弃而不進、從之、○廿七日甲申、以大安寺僧傳燈大法師位春耀、東大寺僧傳燈大法師位安圓、並爲內供奉十禪師、○十二月戊子朔、於右仗頭、賜親王已下侍從已上酒、非侍從亦預之、賜祿各有差、○二日己丑、前春宮職印一枚進於內裏、○八日乙未、公卿奏請省弃五月七日贈皇后忌云、謹撿徃事、後太上皇(嵯峨)、德崇謙光、不存國忌、而獨留皇后之忌日、勘之禮經、義乖相配、伏請、一准舊典、式從停廢、奏可、太政官論奏曰、對馬嶋下縣郡擬大領外少初位下直氏成、上縣郡擬少領無位直仁德等、率部內百姓首從十七人、發兵射殺守正七位下立野連正岑、及從者榎本成岑等、氏成等罪皆當斬、詔減死一等、處之遠流、須去十月十日以前、依式奏獻、而奉葬文德天皇、未滿三十日、亦皇太子未卽位、故延而行之、非緩也、以正五位下行式部少輔大江朝臣音人爲右中辨、式部少輔如故、○九日丙申、詔定十陵四墓、獻年終荷前之幣、天智天皇山階山陵在山城國宇治郡、春日宮御宇(施基)天皇田原山陵在大和國添上郡、天宗高紹(光仁)天皇後田原山

○氏成等罪皆當斬、氏成等の三字は蕭本及類史八十七に據て補ふ
○奏聞、奏は原本奉に作る閣本谷本淀本に據て改む
○大江朝臣、貞觀八年十月丙申紀に據るに江は枝に作るべし
○荷前之幣、延喜講書私記に調庸荷前先祭神祇號相嘗祭後奉山陵號荷前也諸國雜物爲充國用とあり
○春日宮御宇天皇、天武天皇の第一皇子、文武天皇の御父
○高野氏、高野新笠・桓武天皇の御母后、本姓和氏乙繼の女にて寶龜中改姓高野朝臣となる
○柏原山陵、柏は原本栢に作る閣本尾本淀本に據て改む
○藤原氏、桓武天皇の皇后諱乙牟漏なり內大臣良繼の女にて平城嵯峨の二帝及高志內親王の御母后なり
○鎌足多武峯墓、狩谷校本に契沖曰鎌足二字恐當後人攙入、无鎌足贈太政大臣、多武峯墓不比等と云ひ本居翁も不比等

陵在大和國添上郡、贈太皇太后高野氏(新笠)大枝山陵在山城國乙訓郡、桓武天皇柏原山陵在山城國紀伊郡、贈太皇太后藤原氏(乙牟漏)長岡山陵在山城國乙訓郡、崇道天皇(早良)八嶋山陵在大和國添上郡、先太上天皇(嵯峨)楊梅山陵在大和國添上郡、仁明天皇深草山陵在山城國紀伊郡、文德天皇田邑山陵在山城國葛野郡、贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足多武峯墓在大和國十市郡、後贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣宇治墓在山城國宇治郡、尙侍贈正一位藤原朝臣美都子次宇治墓在山城國宇治郡、贈正一位源朝臣潔姬愛宕墓在山城國愛宕郡、○十日丁酉、神祇官所奏御體御卜、大臣奏之、詔改眞原山陵爲田邑山陵、○十三日庚子、地震、公卿於外記候廳聽政、自文德天皇崩後、於近衞陣頭聽辨官所申之政、今日始復常儀、是日、公卿於侍從所飮酒、五位以上預席者八十餘人、以太政官廚家綿賜上下各二屯、○十四日辛丑、奉充田邑山陵陵戶四烟、○十五日壬寅、分遣公卿已下侍從已上於諸山陵墓、獻荷前幣、是日天皇不御建禮門前、大臣行事、○十九日丙午、屈名僧十口於內殿、轉讀

とすされど符宣抄四にも藤原朝臣鎌足多武岑墓とあり此と同じ
〇後贈太政大臣、狩谷氏は後字は下文宇治墓の上にあるべしと云
〇藤原朝臣美都子、文德天皇の外祖母、藤原冬嗣の室
〇源潔姬、清和天皇の外祖母、藤原良房の室
〇御體御卜、毎年六月並十二月の十日二回之を奏す主上の玉體に御愼あらむ事を卜ひて奏するなり四時祭式に卜御體(辭曰於保美麻)龜甲一枚竹廿株陶椀四口小斧二柄甲掘四柄刀子四枚、已上卜料と見ゆ
〇外記候廳、或は外記曹司廳とも太政官候廳とも外記局とも云貞觀十三年六月壬辰紀に太政官候廳者公卿聽政外記所直侍之處也とあり
〇廚家、廚家は單に廚と云ひ廚所とも云廚倉あり雜物を此に貯ふ事に臨みて之を賜ふなり
〇始修佛名懺悔、公事根源に御佛名十二月十九日より廿一日まで三ケ日なり此佛名といふは三

大般若經、限以八日、是日、始修佛名懺悔之事、凡毎年十二月十九日、延名僧三四人於內殿、始修佛名懺悔、限三日訖、他皆效此、〇廿九日丙辰、授無位良岑朝臣親子從五位下、〇卅日丁巳、大祓大儺如常儀、

世の諸佛の名號を唱て六根の罪を滅する心なり云々と見ゆ
○大儺、追儺なり公事根源に十二月卅日今日はなやらふ夜なれば大舍人寮鬼をつとめ陰陽寮祭文をもて南殿の版につきてよむ上卿以下是を追ふ殿上人ども御殿の方に立て桃の弓あしの矢にて射る云々追儺と云は年中の疫氣をばはらふ心也鬼と云は方相氏の事なり四の目ありておそろしげなる面をきて手にたてほこをもつ又侲子とて廿人紺の布衣著たるものを率して內裏の四門を廻る也慶雲三年十二月に始ると云々とあり（文德紀一〇四頁參看）
○常儀、常は類史七十四舊に作る
○卷第一、原本此下に終字あり諸本に據て刪る

日本三代實錄卷第一

日本三代實錄卷第二

起貞觀元年正月盡五月

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

貞(己卯)觀元年春正月戊午朔、天皇不受朝賀、諒闇也、中務省七耀曆、宮內省藏氷樣、大宰府腹赤魚等、付內侍奏、○七日甲子、詔以讃岐國從五位下雲氣神列於官社、是日天皇不覽靑馬、停節會之事也、○八日乙丑、於大極殿始講最勝王經、以元興寺僧三論宗傳燈大法師位道昌爲講師、不擧音聲、遏密也、凡每年十月興福寺維摩會、屈諸宗僧學業優長果五階者爲講師、明年正月大極殿御齋會、以此僧爲講師、三月藥師寺最勝會講師、亦同請之、經此三會講師者、依次任僧綱、他皆效此、○十日丁卯、所司獻剛卯杖、天皇不御前殿、付內侍奏、是日、始作天下諸社神寶、仍大祓於建禮門前、正三位行權中納言平朝臣高棟奏請、別墅在山城國葛野郡、以爲道場、賜額曰平等寺、詔許之、○十三日庚午、以散位從

【貞觀元年】元年、原本年下に己卯の二字あり諸本及類史に據て削る
○七耀曆、公事根源に中務省より奉る日月火水木金土此七曜を注たるよのつれのこよみ也とあり
○藏氷樣、宮內式に凡藏氷之處收氷多少及氷厚薄每處目錄元日群臣未喚之前省輔已上將本司一人奏云々、公事根源に氷樣は宮內省より奉る去年氷をおさめたる所々の樣を今日節會のついでに奏聞するなり厚さ薄さいか程いす法に侍るなどこまかに奏して其ためしさて近比は石かわらのわれを奉るなり(中略)氷のおほくゐるは聖代の驗氷のゐぬは凶年にて侍れば(中略)今日もよく氷て日出たきよしのためしを奉る也
○腹赤魚、文德紀齊衡元年正月丁亥紀に注す
○雲氣神、神名式に讃岐國多度郡雲氣神社とあり官社に列すること二年五月己巳紀に重出す雲は諸本及紀略雲に作る
○靑馬、卽ち白馬なり公事根源に白馬の節會を或

は青馬節會とも申なり其故は馬は陽獸なり青は春の色なり是によりて正月七日に青馬をみれは年中の邪氣をのぞくといふ本文侍なりとあり
○音聲、聲は類史百七十七及紀略樂に作る
○凡毎年、凡字は祕本閣本及類史紀略に據て補ふ
○興福寺維摩會云云、承和六年十二月紀（續後紀一五五頁）を參看すべし
○五階、三代格三齊衡二年八月太政官符に見ゆ試業複維摩立義夏講仕講是なり
○效此、類史此下に也字あり
○開卯杖、仁壽二年正月己卯紀（文德紀五五頁）に見ゆ
○前殿、紫宸殿を云
○始作、作は原本奉に作る諸本に據て改む
○日平等寺、日は類史百八十及紀略に據て補ふ平等寺は山城志に在太秦廣隆寺西とあり
○從四位上行右兵衞督、上は原本下に作る諸本及天安二年七月甲子、同九月壬申紀に據て改む
○右兵衞督如故、如故の

四位下利基王爲侍從、從五位下源朝臣謹爲雅樂頭、外從五位下高丘宿禰百興爲和泉守、從四位下滋野朝臣貞雄爲攝津守、外從五位下壹志宿禰吉野爲參河介、從五位下藤原朝臣眞冬爲遠江守、從五位下行式部大丞巨勢朝臣夏井爲駿河守、從四位上行右兵衞督源朝臣勤爲相摸守、右兵衞督如故、從五位下行內膳正清原眞人眞貞爲上總介、從五位下守雅樂頭橘朝臣春成爲下總介、從五位上行丹波權守坂上大宿禰貞守爲美濃權守、宮內少輔從五位下清原眞人道雄爲上野介、從五位下守左近衞少將兼行備前權介坂上大宿禰當道爲陸奧守、出雲守從五位下伴宿禰春宗爲介、從四位上行越中守源朝臣啓爲加賀守、散位從五位上廣宗宿禰糸繼爲越中守、從五位下上毛野朝臣繩主爲能登守、從五位下坂上大宿禰貞雄爲丹波介、從四位下行侍從輔世王爲但馬守、散位從五位下三原朝臣永道爲伯耆守、從五位下藤原朝臣數守爲出雲守、從四位下行左馬頭在原朝臣行平爲播磨守、參議正四位下行左大辨兼左衞門督藤原朝臣氏宗爲美作守、左衞門督如故、從

二字は二年十一月壬辰紀及八年正月庚寅紀に據て補ふ○眞貞、貞は原本員に作る天安二年七月甲子紀及下文二月己亥紀に據て改む○爲下總介、爲は諸本に據て補ふ○糸繼、原本繼元に作る諸本及承和九年八月壬申紀及仁壽三年正月戊戌紀に據て改む○輔世王、王は諸本に據て補ふ○藤原朝臣氏宗云云、以下左衛門督に至る十四字祕本閣本以下諸本に缺く按に此書刊行の時天安二年十一月壬戌紀に據て補ひしものなるべし美作は原本伊豫に作る補任及下文七月丁卯紀に據て改む○土左守、左は原本佐に作る諸本に據て改む下同じ○右近衛中將如故、右は原本左に作る上文天安二年正月丁卯紀に據て改む○上總權介、權字は閣本前本谷本及下文三月戊寅紀に據て補ふ○集徴、徴は原本緣に作る諸本及類史紀略に據て

四位上守刑部卿兼行但馬守藤原朝臣春津爲備前守、參議從三位行右衛門督源朝臣融爲備中守、右衛門督如故、散位從五位下藤原朝臣直道爲周防守、外從五位下三善宿禰氏吉爲淡路守、參議從三位行皇太后宮大夫伴宿禰善男爲伊豫權守、皇太后宮大夫如故、刑部少輔從五位下源朝臣穎爲權介、從五位下守大判事安倍朝臣房上爲土左守、右近衛中將從四位下兼行相摸守源朝臣興爲筑前守、右近衛中將如故、散位從五位下大原眞人眞室爲肥後權介、外從五位下善道朝臣根莚爲豐後介、從五位下行上總權介藤原朝臣良尙爲左近衛權少將、從五位上行豐前守清原眞人秋雄爲左馬頭、○十四日辛未、大極殿齋講畢、名僧於御前論義、施被如常、○十六日癸酉、停踏歌之節、諒闇也、從五位下行陸奥介坂上大宿禰高道爲鎭守將軍、○十七日甲戌、六衛射禮停而不行、○廿一日戊寅、美濃國言、紫雲見、○廿二日己卯、能登國馳驛言、渤海國入覲使烏孝愼等一百四人、來著珠洲郡、大宰府言、筑前國志麻郡兵庫鼓自鳴、庫中弓矢有聲聞外、○廿七日甲申、京畿七道諸神、

改む
○高道、高は原本當に作る諸本に據て改む
○鎭守將軍、原本守下に府字あり閣本尾本前本及類史百九十四に據て削る
○烏孝愼、烏は原本馬に作る祕本閣本前本等及類史に據て改む
○志摩郡、摩は原本麼に作る諸本及類史に據て改む
○京職、類史左職に作る
○伊佐奈岐命、神名式淡路國津名郡淡路伊佐奈岐神社（名神大）、今多賀村
○吉備都彦命、式備中國賀夜郡吉備津彦神社（名神大）、今吉備郡眞金村、官幣中社
○神產日神、以下五座は何れも神祇官西院所祭八神の一にて並に大月次新嘗
○生井神、以下五座は同上所祭座摩神なり並に大月次新嘗
○櫛石窓神豐石窓神、同上所祭御門神並に大月次新嘗
○生嶋神足嶋神、同上所祭生嶋神二座並に大月次新嘗
○園神韓神、文德紀嘉祥

進階及新叙、惣二百六十七社、奉授淡路國无品勳八等伊佐奈岐命一品、備中國三品吉備都彦命二品」神祇官无位神產日神、高御產日神、玉積產日神、生產日神、足產日神、並從一位、无位生井神、福井神、綱長井神、波比祇神、阿須波神、櫛石窓神、豐石窓神、生嶋神、足嶋神、並從四位上」宮內省從三位園神、韓神、並正三位、大膳職正四位上御食津神從三位、左京職從五位上太祝詞神、久慈眞智神、並正五位下、大膳職從五位下火雷神、大炊寮從五位下大八嶋竈神八前、齋火武主比命神、內膳司從五位下庭火皇神、造酒司從五位下大戶自神等、並從五位上、无位酒殿神從五位下」山城國正二位勳二等松尾神從一位、葛野月讀神、平野今木神、並正二位、正四位下稻荷神三前並正四位上、正四位下大若子神、小若子神、酒解神、酒解子神、並正四位上、平野從四位下久度古開神從四位上、正五位上貴布禰神、正五位下乙訓火雷神、從五位上水主神等、並從四位下、正五位下合殿比咩神正五位上、從五位下樺井月讀神、木嶋天照御魂神、和支神、並正五位下、從五位下祝園神、天野夫支賣神、岡田

鴨神、岡田園神、樺井月神、棚倉孫神、許波多神、出雲井於(ウヘノ)神、片山神、鴨川合神等、並從五位上、正六位上與(ヨ)度(ドノ)神、石作神、向神、簀原神、鴨山口神、小野神、久我神、高橋神、雙(ナミ)栗(クリ)神、水(ミ)度(ト)神、伊勢田神、无位小社神、並從五位下」

三年十月(三三頁)に注す　○正四位上御食津神、上は諸本下に作る類史は原本に同じ　○大祝詞神久慈眞智神、式左京二條坐神社二座(並月次相嘗新嘗)太詔戶命神・久慈眞智命神とあり卜庭神とも占部神とも云　○從五位下火雷神、此七字は諸本に據て補ふ式に大膳職坐火雷神社とあり　○大炊寮、此三字は諸本に據て補ふ　○大八嶋竈神八前、齊衡二年十二月丙子紀に見ゆ　○齋火武主比命神、同上　○庭火皇神、天平三年正月乙亥紀に見ゆ　○大戶自神、齊衡三年九月辛亥紀に見ゆ　○酒殿神、式造酒司坐酒殿神二座、酒彌豆男神・酒彌豆女神　○松尾神、天長十年閏七月壬午紀に注す　○葛野月讀神、文德紀齊衡三年三月戊午紀に見ゆ　○稻荷神三前、承和十年十二月戊午紀に見ゆ　○大若子神、以下四座梅宮神なり承和三年十一月壬申紀に注す　○酒解子神、神は原本等に作る類史に據て改む　○久度古開神、承和三年十一月庚午紀に見ゆ　○貴布禰神、承和五年八月甲辰紀に見ゆ此下に類史水主神の三字あり　○乙訓火雷神、寶龜五年六月壬申に見ゆ　○從五位上水主神等、承和十一年五月甲辰紀に見ゆ此八字類史なし　○合殿比咩神、平野神社合殿神　○樺井月讀神、式同國綴喜郡月讀神社(大月次新嘗)　○木嶋天照御魂神、大寶元年四月丙午紀に見ゆ　○和支神、下文の天野夫支賣神に同じ此に別揭せるは誤か支は原本伎に作る諸本に據て改む　○祝園神、式山城國相樂郡祝園神社(大月次新嘗)、祝園村　○天野夫支賣神、上に出でし和支神と同神にて式に山城國相樂郡和伎坐天乃夫支賣神社(大月次新嘗)とある是なり今棚倉村にあり野は式に據るに乃の誤か　○岡田鴨神、式同國相樂郡岡田鴨神社(大月次新嘗)、加茂村北　○岡田園神、式同郡岡田園神社(大月次新嘗)、木津村、園は式に國に作る　○樺井月神、式に同國綴喜郡樺井月神社(大月次新嘗)とある是なり大寶元年四月丙午紀其他には樺井神と云り原本月下に讀字あり諸本に據て削る　○棚倉孫神、式同郡棚倉孫神社(大月次新嘗)、田邊町　○許波多神、式同國宇治郡許波多神社三座(並大月次新嘗)、宇治町木幡　○出雲井於神、式同國愛宕郡出雲井於神社(大月次相嘗新嘗)、賀茂御祖神社境內攝社　○片山神、式同郡片山御子神社(大月次相嘗新嘗)、賀茂別雷神社境內攝社　○鴨川合神、天安二年八月丁未紀に見ゆ　○與度神、式同國乙訓郡與杼神社、今久世郡淀町　○石作神、同式同郡石作神社、今同郡大歲神社相殿　○向神、式同郡向神社、向日町、向は諸本川に作る類史原本に同じ　○簀原神、式同郡簀原神社　○鴨山口神、式同國愛宕郡賀茂山口神社、賀茂別雷神社境內攝社　○小野神、式同郡小野神社二座　○久我神、式同郡久我神社、大宮村西賀茂　○高橋神、式同郡高橋神社　○雙栗神、式同國久世郡雙栗神社三座　○水度神、式同郡水度神社三座、寺田村　○伊勢田神、式同郡伊勢田神社三座、小倉村伊勢田　○小社神、式外、葛野郡松尾村

○大己貴神、式大和國吉野郡大名持神社(名神大月次新嘗)、龍門村川原屋　○葛木御歲神、仁壽二年四月庚申紀に見ゆ

大和國從一位大己貴神正一位、正二位葛木御歲神、從二位勳八等高鴨阿治須岐宅(ナカ)比(ヒ)古(コ)尼(ネノ)神、從二位高市御縣鴨八重事代主神、從二位勳

二等大神大物主神從二位勳三等、大和大國魂神正三位勳六等、石上神正三位、高鴨神並從一位、正三位勳二等葛木一言主神、高天彥神、葛木火雷神並從二位、從三位廣瀨神、龍田神、從三位勳八等多坐彌志理都比古神、金峯神並正三位、正四位下丹生川上雨師神從三位、從五位下賀夜奈流美神正四位下、從五位下勳八等穴師兵主神、片岡神、夜岐布山口神並正五位上、從五位下都祁水分神、都祁山口神、石寸山口神、耳成山口神、飛鳥山口神、畝火山口神、長谷山口神、忍坂山口神、宇陀水分神、吉野水分神、吉野山口神、巨勢山口神、葛木水分神、鴨山口神、當麻山口神、大坂山口神、伊古麻山口神並正五位下、從五位下和爾赤坂彥神、山邊御縣神、村屋彌富都比賣神、池坐朝霧黃幡比賣神、鏡作天照御魂神、十市御縣神、日原高御魂神、畝尾建土安神、子部神、天香山大麻等野知神、宗我都比古神、甘樫神、稔代神、牟佐坐神、高市御縣神、輕樹村神、天高市神、太玉命神、櫛玉命神、川俣神、波多甕井神、神坐日向神、卷向若御魂神、他田天照御魂神、志貴御縣神、忍坂生根神、葛木倭文天羽雷命

○高鴨阿治須岐宅比古尼神、式葛上郡高鴨阿治須岐託彥根命神社四座（並名神大月次相嘗新嘗）、今南葛城郡葛城村鴨神、高字は式に據て補ふ
○鴨八重事代主神、式高市郡高市御縣坐鴨事代主神社（大月次新嘗）、金橋村雲梯、一云鴨公村高殿
○大神大物主神、神代紀（紀上四一頁）、嘉祥三年十月辛亥紀に見ゆ
○大和大國魂神、嘉祥三年十月辛亥紀に見ゆ
○石上神、同上
○高鴨神、上に見えたる高鴨阿治須岐宅比古尼神と同神なるべし
○葛木一言主神、嘉祥三年十月辛亥紀に見ゆ
○高天彥神、承和六年五月丙午紀に見ゆ
○葛木火雷神、式忍海郡葛木坐火雷神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）今南葛城郡忍海村笛吹
○廣瀨神、已に注す
○龍田神、同上
○多坐彌志理都比古神、式十市郡多坐彌志理都比古神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）、今磯城郡多村

神、長尾神、石園多久豆玉神、調田一事尼古神、金村神、葛木御縣神、火幡神、往馬伊古麻都比古神、平群石床神、矢田久志玉比古神、添御縣神、伊射奈岐神、葛木二上神、並從五位上、无位綱越神從五位下」

○金峯神、仁壽二年十一月辛丑紀に見ゆ　○丹生川上雨師神、已に注す　○賀夜奈流美神、式高市郡加夜奈留美命神社、高市村栢森　○穴師兵主神、式城上郡穴師坐兵主神社(名神大月次相嘗新嘗)、今磯城郡纏向村穴師　○片岡神、式葛下郡片岡坐神社(名神大月次新嘗)、今北葛城郡王子村　○夜岐布山口神、嘉祥三年十月辛亥紀に見ゆ　○都祁水分神、式山邊郡都祁水分神社(大月次新嘗)、都介野村友田　○都祁山口神、式同郡都祁山口神社(大月次新嘗)、都介野村小山戸　○石寸山口神、式十市郡石寸山口神社(大月次新嘗)、今磯城郡櫻井町谷、石寸の寸は村の省文　○耳成山口神、式同郡耳成山口神社(大月次新嘗)、今磯城郡耳成村木原　○飛鳥山口神、式高市郡飛鳥山口坐神社(大月次新嘗)　○畝火山口神、式同郡畝火山口坐神社(大月次新嘗)、畝傍町　○長谷山口神、式同國城上郡長谷山口坐神社(大月次新嘗)、今磯城郡初瀬村　○忍坂山口神、式同郡忍坂山口坐神社(大月次新嘗)、今磯城郡城嶋村赤尾　○宇陀水分神、式宇陀郡宇太水分神社(大月次新嘗)、榛原町下井足、陀は原本施に作る閣本前本に據て改む　○吉野水分神、式吉野郡吉野水分神社(大月次新嘗)、吉野村　○吉野山口神、式同郡吉野山口神社(大月次新嘗)、龍門村山口　○巨勢山口神、式葛上郡巨勢山口神社(大月次新嘗)、今南葛城郡葛村古瀬　○葛木水分神、式同郡葛木水分神社(名神大月次新嘗)、今南葛城郡吐田鄕村多田　○鴨山口神、式同郡鴨山口神社(大月次新嘗)、今南葛城郡大正村櫛羅　○當麻山口神、式同國葛下郡當麻山口神社(大月次新嘗)、今北葛城郡當麻村　○大坂山口神、式同郡大坂山口神社(大月次新嘗)、今北葛城郡二上村穴虫　○伊古麻山口神、式平群郡伊古麻山口神社(大月次新嘗)、今生駒郡平群村櫟原　○和爾赤坂彥神、式添上郡和爾坐赤坂比古神社(大月次新嘗)、櫟本町和爾　○山邊御縣神、同國山邊郡山邊御縣坐神社(大月次新嘗)　○村屋彌富都比賣神、式同國城下郡村屋坐彌富都比賣神社(大月次相嘗新嘗)、磯城郡川東村藏堂　○池坐朝霧黃幡比賣神、式同郡池坐朝霧黃幡比賣神社(大月次新嘗)、磯城郡川東村　○鏡作天照御魂神、式同郡鏡作坐天照御魂神社(大月次新嘗)、磯城郡都村八尾　○十市御縣神、式同國十市郡十市御縣坐神社(大月次新嘗)、磯城郡耳成村十市　○目原高御魂神、式同郡目原坐高御魂神社二座(並大月次新嘗)　○畝尾建土安神、式同郡畝尾坐健土安神社(大月次新嘗)、磯城郡香久山村下八釣　○天香山大麻等野知神、式同郡天香山坐櫛眞知命神社(大月次新嘗元名大麻等乃知神)、磯城郡香久山村南浦　○宗我都比古神、式同國高市郡宗我坐宗我都比古神社二座(並大月次新嘗)、眞菅村曾我　○甘樫神、式同郡甘樫坐神社四座(並大月次新嘗)、飛鳥村豐浦　○稔代神、式同郡稔代坐神社(大月次新嘗)、新澤村、又式同國城上郡に稔代神社あり　○牟佐坐神、同郡牟佐坐神社(大月次新嘗)、畝傍町見瀨　○高市御縣神、式同郡高市御縣神社(名神大月次新嘗)、畝傍町四條　○輕樹村神、式同郡輕樹村坐神社二座(並大月次新嘗)　○天高市神、式同郡天高市神社(大月次新嘗)、眞菅村曾我　○太玉命神、式同郡太玉命神社四座(並大月次新嘗)、金橋村忌部　○櫛玉命神、式同郡櫛玉命神社四座(並大月次新嘗)、坂合村眞弓　○川俣神、式同郡川俣神社三座(並大月次新嘗)、金橋村雲梯　○波多甕井神、式同郡波多甕井神社(大月次新嘗)、船倉村羽内　○神坐日向神、式城上郡神坐日向神社(大月次新嘗)、大神神社境外攝社、上の神の字は式に據て補ふ　○卷向若御魂神、式同郡卷向坐若御魂神社(大月次相嘗新嘗)、一名卷向穴師社、志料に卷向檜原にありと云ふ　○他田天照御魂神、式同郡他田坐天照御魂神社(大月次新嘗)、磯城郡纏向村大田

○志貴御縣神、式同郡志貴御縣坐神社（大月次新嘗）、磯城郡三輪町金屋　○忍坂生根神、式同郡忍坂坐生根神社（大月次新嘗）、磯城郡城嶋村忍坂　○葛木倭文天羽雷命神、式葛下郡葛木倭文坐天羽雷命神社（大月次新嘗）、北葛城郡當麻村加守、一に太田村志賀梨　○長尾神、式同郡長尾神社（大月次新嘗）、今北葛城郡磐城村長尾　○石園多久豆玉神、式同郡石園坐多久豆玉神社二座（並大月次新嘗）、今北葛城郡浮穴村三倉堂、豆は原本虫に作る式に據て改む　○調田一事尼古神、式同郡調田坐一事尼古神社（大月次新嘗）、北葛城郡新庄町疋田　○金村神、式同郡金村神社（大月次新嘗）、北葛城郡新庄町大屋　○葛木御縣神、式同郡葛木御縣神社（大月次新嘗）、北葛城郡新庄町葛木　○火幡神、式同郡火幡神社（名神大月次新嘗）、北葛城郡志都美村　○往馬伊古麻都比古神、式同國平群郡往馬坐伊古麻都比古神社二座（並大月次新嘗）、今生駒郡南生駒村一分　○平群石床神、式同郡平群石床神社（大月次新嘗）、生駒郡平群村越木塚　○矢田久志玉比古神、式添下郡矢田坐久志玉比古神社二座（並大月次新嘗）、生駒郡矢田村　○添御縣神、式同郡添御縣神坐神社（大月次新嘗）、生駒郡富雄村三碓　○伊射奈岐神、式同郡伊射奈岐神社（大月次新嘗）、北葛城郡上牧村下牧　○葛木二上神、式同國葛下郡葛木二上神社二座（大月次新嘗）、北葛城郡新庄町葛木　○綱越神、式同國城上郡綱越神社、今大神神社攝社、磯城郡三輪町

○枚岡天子屋根命、式河内國河内郡枚岡神社四座（名神大月次相嘗新嘗）、今中河内郡枚岡村、官幣大社

○恩智大御食津比古命神云云、式高安郡恩智神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）今中河内郡高安村恩智、原本比古命の命字なし文德紀嘉祥三年十月辛亥紀に據て補ふ

○枚岡比咩神、枚岡神社四座の一座

○社本神、式安宿郡杜本神社二座（並名神大月次新嘗）、今南河内郡駒谷村、社は原本杜に作る諸本に據て改む

○丹比神、式丹比郡丹比神社、今南河内郡丹比村丹治井

○春日戸神、式高安郡春

河内國從一位勳三等枚岡天子屋根命正一位、正三位勳六等恩智大御食津比古命神、恩智大御食津比咩命神、並從二位、正四位上勳六等枚岡比咩神從三位、從五位下社本神正四位下、從五位上丹比神正五位下、從五位下春日戸神、高宮神、弓削神、志紀長吉神、狹山堤神、狹山神、營生神、並從五位上、和泉國正五位下勳八等大鳥神從四位下、攝津國從三位勳八等廣田神正三位、正五位上勳八等生田神、從五位上勳八等長田神、從五位上垂水神、從五位下勳八等大依羅神、難波生國魂神、下照比女神、坐摩神、從五位下勳八等新屋天照御魂神、並從四位下、從五位下名次神正五位下、從五位下中臣須牟地神、伊射奈岐神、伊和

日戸社坐御子神社、今中河内郡中高安村山畑　○高宮神、式讃良郡高宮神社（大月次新嘗）、今北河内郡豐野村高宮　○弓削神、式若江郡弓削神社二座（並大月次相嘗新嘗）、一座は中河内郡曙川村、一座は南河内郡志紀村　○志紀長吉神、式志紀郡志紀長吉神社二座（並大月次新嘗）、今中河内郡長吉村長原　○狹山堤神、式丹比郡狹山堤神社（大月次新嘗）、今南河内郡狹山村半田　○狹山神、式同郡狹山神社（大月次新嘗）、同上　○菅生神、式同郡菅生神社（大月次新嘗）、今南河内郡平尾村菅生　○大鳥神、承和九年十月己巳紀に見ゆ　○廣田神、神功紀（紀上一八二頁）、嘉祥三年十月辛亥紀に見ゆ　○生田神、式攝津國八部郡生田神社（名神大月次相嘗新嘗）、神戸市、官幣中社に列す神功紀（紀上一八二頁）を參看すべし　○長田神、式同郡長田神社（名神大月次相嘗新嘗）、神戸市、官幣中社に列す　○垂水神、承和八年九月乙巳紀に見ゆ　○大依羅神、承和十四年七月丁卯紀に見ゆ　○難波生國魂神、又難波大社と云式東生郡難波坐生國咲國魂神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）、大阪市生玉町、官幣大社に列す　○下照比女神、式同郡比賣許曾神社（名神大月次相嘗新嘗）とある是なり志料に所在西高津村とあり　○坐摩神、西成郡坐摩神社（大月次新嘗）、今大阪市南渡邊町　○新屋天照御魂神、式嶋下郡新屋坐天照御魂神社三座（並名神大月次新嘗就中天照御魂神一座預二相嘗祭一）、今三嶋郡福井村　○名次神、式武庫郡名次神社、廣田神社攝社　○正五位下、類史は從五位上に作る　○中臣須牟地神、式住吉郡中臣須牟地神社（大月次新嘗）、今河内國中河内郡矢田村住道　○伊射奈岐神、式嶋下郡伊射奈岐神社二座（並大月次新嘗）、一座三嶋郡山田村山田小川、一座同郡千里村佐井寺　○伊和志豆神、式武庫郡伊和志豆神社（大月次新嘗）、良元村中村

志豆神、並從五位上。伊賀國无位穴石神從五位下。伊勢國從三位多度神正三位。從四位下阿射加神從四位上。尾張國正三位熱田神從二位。駿河國從三位淺間神正三位。伊豆國從四位下三嶋神從四位上。從五位下楊原神從五位上。武藏國從五位下氷川神從五位上。安房國從三位勳八等安房神、天比乃理刀咩命神、並正三位。近江國從二位勳一等比叡神正二位。從五位上勳八等伊香神從四位下。從五位下伊富岐神、佐久奈度神、水口神、川田神、三上神、奥津嶋神、小比叡神、並從五位上。美濃國從三位仲山金

○穴石神、式伊賀國阿拜郡穴石神社　○多度神、延暦元年十月庚戌紀に見ゆ　○阿射加神、承和二年十二月甲申紀に見ゆ　○熱田神、神代紀（紀上三七頁）、天長十年六月壬午紀に見ゆ　○淺間神、仁壽三年七月甲午紀に見ゆ　○三嶋神、嘉祥三年十月辛亥紀に見ゆ　○楊原神、式伊豆國田方郡楊原神社（名神大）、今駿河國駿東郡楊原村下香貫

山彥神正三位」信濃國正三位勳八等建御名方富命神從二位、從三位建御名方富命前八坂刀賣命神正三位」上野國正五位下勳八等貫前神從四位下」下野國從三位勳四等二荒神正三位」陸奥國正五位上勳四等計(ケ)仙(セ)麻(マ)神正五位下勳四等志波彥神勳五等拜幣志神勳六等零羊埼神從五位上勳四等志波姫神、並從四位下、從五位下計仙麻大嶋神從五位上」若狹國從二位勳八等若狹比古神正二位、正三位若狹比咩(サキ)神從二位」越前國正二位勳一等氣比神從一位、從四位上勳六等椎(シヒ)前神、勳六等劔神、並正四位下」加賀國白山比女神正三位」能登國正二位勳一等氣多神從一位」越中國從三位高瀨神、二上神、並正三位」

○氷川神、式武藏國足立郡氷川神社(名神大月次新嘗)、今北足立郡大宮町、官幣大社に列す　○安房神、承和三年七月甲申紀に見ゆ　○天比乃理刀咩命神、式に天比理乃咩命神社とあり承和九年十月壬戌紀に見ゆ乃は諸本比に作る　○比叡神、式外、大日吉神又大宮と云、滋賀郡坂本にあり　○伊香神、式近江國伊香郡伊香具神社(名神大)、伊香具村大音　○伊富岐神、嘉祥三年十月壬子紀に見ゆ　○佐久奈度神、式栗太郡佐久奈度神社(名神大)、大石村東　○水口神、式甲賀郡水口神社、水口町　○川田神、式同郡川田神社二座(並名神大月次新嘗)、貴生川村北内貴　○三上神、式野洲郡御上神社(名神大月次新嘗)、三上村、官幣中社に列す　○奥津嶋神、式蒲生郡奥津嶋神社(名神大)沖嶋村　○小比叡神、式滋賀郡日吉神社(名神大)、坂本村官幣大社に列す　○仲山金山彥神、美濃國不破郡、承和三年十一月己巳紀に見ゆ、諸本仲を中に作る類史は原本に同じ　○建御名方富命神、承和九年五月丁未紀に見ゆ　○八坂刀賣命神、同上　○貫前神、承和六年六月甲申紀に見ゆ　○二荒神、承和三年十二月丁巳紀に見ゆ　○計仙麻神、式陸奥國牡鹿郡計仙麻神社、今陸前國本吉郡氣仙沼町　○志波彥神、式宮城郡志波彥神社(名神大)、鹽竈町鹽竈神社御同座、國幣中社に列す　○拜幣志神、式牡鹿郡拜幣志神社(名神大)、今陸前國牡鹿郡石卷町八幡神社合祀　○零羊埼神、式同郡零羊埼神社(名神大)、今陸前國牡鹿郡石卷町湊　○志波姫神、式栗原郡志波姫神社(名神大)　○計仙麻大嶋神、式桃生郡計仙麻大嶋神社(名神大)、今陸前國本吉郡大嶋村　○若狹比古神若狹比咩神、景雲四年八月庚寅紀に見ゆ　○氣比神、持統天皇六年九月紀に見ゆ　○椎前神、式越前國足羽郡椎前神社、今吉田郡下志比村志比境、椎は原本推に作る式に據て改む　○劔神、寶龜二年十月戊辰紀に見ゆ　○白山比女神、仁壽三年十月己卯紀に見ゆ、白上に從三位の三字を脫す　○氣多神、景雲二年十月甲子紀に見ゆ　○高瀨神、寶龜十一年十二月甲辰紀に見ゆ　○二上神、同上

○小川月神、式丹波國桑田郡小川月神社（名神大）、今南桑田郡馬路村
○麻氣神、式船井郡麻氣神社（名神大）、摩氣村竹井
○大川神、式丹後國加佐郡大川神社（名神大）、岡田下村大川
○大宮賣神、式丹波郡大宮賣神社二座（名神大）、今中郡周枳村
○熊野神、仁壽元年九月乙酉紀（文德紀四九頁）に見ゆ
○杵築神、同上
○粒坐天照神、式播磨國揖保郡粒坐天照神社（名神大）、東粟栖村日山
○伊和坐大名持御魂神、式宍粟郡伊和坐大名持御魂神社（名神大）、神戸村國幣中社伊和神社
○海神、式明石郡海神社三座（並名神大月次新嘗）、垂水村西垂水、官幣中社に列す
○伊都岐嶋神、弘仁二年七月己酉紀に見ゆ
○速谷神、同上
○多家神、式安藝國安藝郡多家神社（名神大）、府中村
○住吉荒魂神、式長門國

丹波國從五位下小川月神、麻氣神、並從五位上、丹後國從五位下大川神、大宮賣神、並從五位上、出雲國從三位熊野神、勳八等杵築神、並正三位、播磨國從五位下勳八等粒坐天照神、伊和坐大名持御魂神、並從四位下、從五位下海神從五位上、安藝國正五位下伊都岐嶋神、從五位上速谷神、並從四位下、從五位下多家神從五位上、長門國從五位下住吉荒魂神從五位上、紀伊國從四位下伊達神、志摩神、靜火神、並正四位上、從五位下勳八等丹生都比賣神、伊太祁曾神、大屋都比賣神、都麻都比賣神、鳴神、並從四位下、從五位下須佐神、熊野早玉神、熊野坐神、並從五位上、阿波國從五位下大麻比古神、忌部天日鷲神、並從五位上、土左國從五位下都佐坐神從五位上、筑前國正三位勳八等田心姬神、湍津姬神、市杵嶋姬神、並從二位、正五位下竈門神、從五位下筑紫神、並從四位下、從五位下織幡神、志賀海神、美奈宜神、並從五位上、无位住吉神從五位下、筑後國正三位高良玉垂命神從二位、從四位下豐比咩神從四位上、肥前國從五位下田嶋神從四位下、肥後國從二位勳五等健磐

龍命正二位、從四位下阿曾比咩神從四位上、壹岐嶋從五位下海神、住吉神、兵主神、月讀神、並從五位上、對馬嶋從五位下和多都美神、高御魂神、住吉神、並從五位上、○廿八日乙酉、授无位錦部淨刀自子外從五位下、正六位上行少外記廣宗宿禰安人、大內記正六位上安倍朝臣清行、爲領渤海國客使、○廿九日丙戌、大祓於建禮門前、以明日將發班幣諸神使也、

豐浦郡住吉坐荒御魂神社三座（並名神大）、勝山村楠乃、官幣中社に列す　○從五位上、原本上を下に作る諸本に據て改む　○伊達神、式紀伊國名草郡伊達神社（名神大）、今海草郡有功村園部　○志摩神、式同郡志磨神社（名神大）、今海草郡中嶋村　○靜火神、承和十一年十一月辛亥紀に見ゆ　○並正四位上、類史上を下に作る　○丹生都比賣神、式伊都郡丹生都比女神社（名神大月次新嘗）、天野村、官幣大社に列す　○伊太祁曾神、文德紀嘉祥三年十月甲子紀に見ゆ　○大屋都比賣神、名草郡大屋都比賣神社（名神大月次相嘗新嘗）、今海草郡川永村宇田　○都摩都比賣神、式同郡都麻都比賣神社（名神大月次新嘗）　○鳴神、式同郡鳴神社（名神大月次新嘗）、今海草郡鳴神村　○須佐神、式在田郡須佐神社（名神大月次新嘗）、有田郡保田村千田　○熊野早玉神、式牟婁郡熊野早玉神社、東牟婁郡新宮町、官幣大社に列す　○熊野坐神、式同郡熊野坐神社（名神大）、東牟婁郡本宮町、官幣大社に列す　○大麻比古神、式阿波國板野郡大麻比古神社（名神大）、板東町、國幣中社に列す　○忌部天日鷲神、嘉祥三年四月乙酉紀に見ゆ　○都佐坐神、式土左國土左郡都佐坐神社、一宮村、國幣中社に列す　○田心姬神、以下三柱宗像神、承和七年四月丙寅紀に見ゆ　○竈門神、承和七年四月丙寅紀に見ゆ　○筑紫神、式筑前國御笠郡筑紫神社（名神大）、今筑紫郡筑紫村原田　○織幡神、宗像郡鐘埼村、嘉祥三年七月甲辰紀に見ゆ　○志賀海神、式糟屋郡志加海神社三座（並名神大）、志賀嶋村、官幣小社に列す　○美奈宜神、式下座郡美奈宜神社三座（並名神大）　○住吉神、式那珂郡住吉神社三座（並名神大）、住吉町、官幣小社に列す　○高良玉垂命神、承和七年四月丙寅紀（續後紀、六三頁）に見ゆ　○豐比咩神、嘉祥三年十二月壬申紀に見ゆ　○田嶋神、式肥前國松浦郡田嶋坐神社（名神大）、東松浦郡呼子村田嶋、國幣中社に列す　○健磐龍命、阿蘇郡、承和七年四月丙寅紀に見ゆ、命下に神字脫ちたるか　○阿曾比咩神、仁壽二年正月戊寅紀に見ゆ　○海神、式壹岐嶋石田郡海神社、石田村筒城　○住吉神、式壹岐郡住吉神社（名神大）、那賀村住吉、國幣中社に列す　○兵主神、式同郡兵主神社（名神大）　○月讀神、式同郡月讀神社（名神大）、箱崎村　○和多都美神、石田郡、承和四年二月戊戌紀に見ゆ　○高御魂神、式對馬嶋下縣郡高御魂神社（名神大）、豆酘村　○住吉神、式同郡住吉神社（名神大）、雞知村　○无位錦部、位は原本品に作る諸本に據て改む　○領渤海國客使、類史國字なし是なるに似たり　○班幣諸神使、神字は諸本及紀略に據て補ふ

（二月）釋奠、大寶元年二月丁巳紀（續紀上一八）

○二月丁亥朔、停釋奠之禮、諒闇也、遣使伊勢國大神宮、及五畿七道、

頁）に見ゆ
○大神宮、大は原本太に作る諸本及紀略に據て改む下同じ
○便處、便は原本使に作る諸本及類史百九十四紀略に據て改む
○石鍾乳、本草和名に石鍾乳一名公乳、一名蘆石、一名夏石、一名虛中出釋藥性、一名孔公乳石鍾乳者水精也已上出神仙服餌方、石鍾乳者石精也出范汪方、出備中國、抄天地部山石類に鍾乳新抄本草云石鍾乳（出備中國英賀郡、和名以之乃知）さあり典藥式に備中國四十二種鍾乳床六十斤さ見ゆ
○寶宅神、寶は原本守に作る諸本に據て改む寶宅神は神名式信濃國安曇郡穗高神社、名神大、是なり
○大般若云云、本世紀に重出す
○崇親院、拾芥抄中末に崇親院左大臣良相公貞觀六年立也卷、藤氏窮女一門也在東五條京極、往年在勾當一條北京極西隅三代格八昌泰四年四月五日太政官符に件院（崇親院、在西洞院大路南六條坊門小路北鴨河堤西京極大

班幣諸神、告以卽位之由、神祇官從一位神產日神、高御產日神、從一位玉積產日神、從一位足產日神、大和國從一位勳二等大神大物主神、並奉授正一位、○四日庚寅、於神祇官修祈年祭、渤海國客著能登國、是日詔遷於加賀國、安置便處、○五日辛卯、西京失火、延燒數十家、○七日癸巳、詔遣典藥頭從五位上出雲朝臣岑嗣於備中國、採石鍾乳、從六位下行直講苅田首安雄爲領渤海客使、以廣宗安人辭退也、○九日乙未、大初位下春日朝臣宅成爲渤海通事、○十日丙申、春日祭如常、○十一日丁酉、有赤黃白氣、形如車輪繞日、授信濃國從二位勳八等建御名方富命神正二位、正三位建御名方富命前八坂刀賣命神從二位、神祇官從四位上生嶋神、足嶋神、並正四位下、信濃國從五位下寶宅神從五位上、大般若經一部安置氣比神宮寺、右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相奏請、以私第一區、建崇親院、安置藤原氏女無居宅者、便隸施藥院、凡厥所須付物、令施藥院司掌之、又建延命院、々便隸勸學院、安置藤原氏有病患者、詔從之、○十三日己亥、土左守從五位下

路東、皆是依省符并公驗賣買人居之處也、去貞觀二年創建作院之日、遷立彼屋舍、以爲收養氏女之房室也とあり
○藤原氏女、女字は紀略に據て補ふ
○施樂院、天平二年四月紀(續紀上二二七頁)に見ゆ
○凡厥、凡は諸本及紀略に據て補ふ
○延命院、山城志古蹟に勸學院南とあり藤原氏の病患に罹れるものを收て療養する所なり
○々便、々字は諸本に據て補ふ
○土左守、左は原本佐に作る諸本に據て改む下同じ
○碓雄、原本雄上に作る諸本に據て改む
○輔嗣爲刑部卿、卿は原本丞に作る諸本及二年十一月壬辰紀に據て改む
○御長眞人近人、近は原本延に作る下文十一月戊午紀に據て改む

安倍朝臣房上爲圖書頭、從五位下守圖書頭當麻眞人清雄爲諸陵頭、散位從五位上藤原朝臣菅雄爲民部少輔、從五位下粟田朝臣碓雄爲鼓吹正、從四位上行阿波守藤原朝臣輔嗣爲刑部卿、阿波守如故、散位從五位上百濟王慶世爲大輔、從五位下橘朝臣末茂爲少輔、從五位下守雅樂頭橘朝臣春成爲大判事、散位從五位下御長眞人近人爲大藏少輔、河內守從五位下滋野朝臣善根爲宮內少輔、散位從五位下連扶王爲內膳正、從五位下行上總介清原眞人眞貞爲左京亮、從四位下行越前守橘朝臣海雄爲右京大夫、正四位下行右京大夫兼式部大輔信濃守南淵朝臣年名爲勘解由長官、式部大輔信濃守如故、從五位下守諸陵頭大枝朝臣直臣爲河內守、右兵庫頭從五位上百濟王永仁爲攝津權介、散位從五位下吉備朝臣全繼爲上總介、民部少輔從五位下淡海朝臣弘峯爲下總守、散位從五位下笠朝臣豐興爲越前守、從五位下守玄蕃頭兼行筝博士家原宿禰氏主爲伯耆守、伯耆守從五位下三原朝臣永道爲出雲守、從五位下行伊豫權介源朝臣穎爲備前介、勘解由

○大般若經一部云云、以下十三字已に丁酉紀に出づ、何れか誤あるべし
○熱田神、正月甲申紀に見ゆ
○大縣神、承和十四年十一月癸酉紀に見ゆ
○多度神、正月甲申紀に見ゆ
○六十口僧、諸本及紀略口を四に作る
○效此、效は原本効に作る谷本淀本に據て改む
○田心姫神、以下諸神正月甲申紀に見ゆ

次官從五位下藤原朝臣宜爲伊豫權介、豐後守從五位下橘朝臣岑雄爲土左守、左京亮從五位下朝原宿禰良道爲豐前守、散位從五位下藤原朝臣世數爲豐後守、出雲守從五位下藤原朝臣數守爲右兵庫頭、○十五日辛丑、詔越前國司、寫大般若經一部、安置氣比神宮寺、○十七日癸卯、授尾張國從二位熱田神正二位、從四位下大縣神從四位上、伊勢國正三位多度神從二位、○十九日乙巳、遣正五位下守右中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人、向伊勢國多度神社、尾張國熱田大縣等神社、奉神位記財寶、○廿五日辛亥、請六十口僧於東宮、轉讀大般若經、今日起首、限三日訖、凡貞觀之代、每年四季、轉大般若經、他皆效此、以長門國醫師從八位下海部男種麻呂爲採銅使、詔、三箇年內所進銅鉛、年別各足三千斤者、須借授五位、其後三年內不減此數者、隨爲眞、○廿七日癸丑、下知五畿七道諸國、令修理諸神社、宜自今以後、官長專當、年中修理色目、付朝集使言上、○卅日丙辰、大祓於建禮門前、以明日可發奉幣八幡大菩薩使也、筑前國從二位勳八等田心姫神、湍津姫神、市杵嶋姫神、

○太政大臣東京一條第云云、太政大臣は良房なり

○此宗像神の事諸神記に冬嗣の勸請にて式外の神なりしが嘉祥中四度官幣に預れりと見ゆ

(三月)御齋燒燈、公事根源に三月三日御燈是は天子の北斗に燈明を奉り給ふなり云々と見ゆ

○令影、令は原本今に作る諸本に據て改む

○陶山之爭、陶器を燒くべき薪山の境界の爭なり山は和泉國大鳥郡にあり下文四月丙午紀を參看すべし

○領渤海客使、原本海下に國字あり諸本及類史紀略に據て刪る

○御裝、御は治也理也とあり類史百九十四に御を似に作る似は作也整也

○告宣、類史宣告に作る

○故也、故は類史に據て補ふ

○加賀權掾、原本權下に大字あり祕本尾本及類史に據て刪る

○眞雅抗表、此表は類史百七十九及格二に出づ

○轉法輪、法を說て邪見を破し正道を開くを云

○直開、開は原本開に作

並授二正二位一、太政大臣東京一條第從二位勳八等田心姬神、湍津姬神、市杵嶋姬神、並授二正二位一、此六社居雖レ異、實是同神也、○三月丁巳朔、遣二散位從五位下和氣朝臣巨範、向二豐前國八幡大菩薩宮、奉二幣帛財寶神馬等、告以二卽位之由一也、○三日己未、停二御齋燒燈之事一、○四日庚申、遣二左衞門少尉正六位下紀朝臣令影、右衞門大志從六位上櫻井田部連貞雄麻呂於河內和泉兩國、辨二決陶山之爭一、○五日辛酉、授二相摸國大住郡大領外從五位下壬生直廣主從五位下、正六位上大神朝臣田仲麻呂外從五位下一、○十三日己巳、領渤海客使大內記正六位上安倍朝臣淸行、直講從七位下苅田首安雄、御二裝進發、告宣云、使等宜レ稱二存問兼領渤海客使一、當般(コノタビ)不レ任二存問使一故也一、渤海國副使周元伯頗閑二文章一、詔二越前權少掾從七位下嶋田朝臣忠臣一、假爲二加賀權掾一、向レ彼、與二元伯一唱和、以二忠臣能屬一レ文也、○十九日乙亥、大僧都傳燈大法師位眞雅抗レ表曰、道之極味、無レ勝二祕藏一、人之高行、在レ轉二法輪一、祕藏不レ直開、待レ緣乃開、法輪不二獨轉一、遂レ時初轉、法興道隆、其應レ有レ由、伏惟今上陛下、殖二良因於往劫一、纘二寶祚於今

扆、聖仁攸被、無遠而不臻、佛心所加、無幽而不照、眞雅幸謁聖明之主、儻遇仁造之時、道喜人歡、於此足矣、所謂悉曇梵字者、凡聖之教父、人天之智母者也、所以學字相者、廣生世間之庶智、觀字義者、深證出世之妙智、似巨海吞百川、如大地載萬物、如來說法、自斯字而發、薩埵圓覺、從彼文而開、眞雅苟爲傳薪之人、何無弘法之思、待緣仰運、齡傾力衰、如今當於此際會、不果彼心期、則俟河之清、人壽幾何、若夫嘉祥寺者、先帝(文德)奉爲深草天皇(仁明)所建立也、舊跡風流、宛然在日、伏願、便於彼寺新院、永賜三人度者、教以悉曇文相、學以梵字字義、卽是聲聞之業、法文之要、是故眞言宗、以此爲要道、應學法門、其類巨多、今取最要者、配於三人也、將使一人諳書大佛頂梵字、一人諳書大隨求梵字、一人諳書悉曇章梵字、亦其護身、則摩由之力殊高、存命則尊勝之助最深、是以莎底苾蒭、返損滅之神於明王、善住天子、延已縮之命於佛頂、拯濟之功、亘億界而不竭、度脫之力、歷萬劫而無極、然卽使此三人、兼讀大孔雀明王經三卷、幷佛頂尊勝梵字一通、每年三月上旬、試定上件三人、當於今上降誕之日度之、其得業

る類史に據て改む下同じ
○殖良因、殖は原本値に作る類史に據て改む
○緇、原本蕭に作る尾本前本淀本及類史に據て改む
○仁造、造は成也仁慈にして萬物を化成するを云
○於此足矣、於は原本効に作る類史に據て改む
○悉曇梵字、名義集五に悉曇章本是婆羅賀磨天所作(中略)悉曇此云成就所生、悉曇章是生字之根本(中略)如下此方由三三十六字母而生二諸字上さあり
○教父、父は原本文に作る類史に據て改む
○智母、智は原本知に作る尾本前本淀本及類史イ本に據て改む
○世間之庶智、原本之庶の二字を兼の一字に作る類史に據て改む
○出世之妙智、之字は祕本尾本及類史に據て補ふ
○似巨海、似は原本以に作る尾本前本及類史に據て改む
○薩埵、菩提薩埵の略にて菩薩なり
○傳薪之人、傳薪は傳燈に同じ
○俟河之清、黄河の澄む

を侯つなり左傳襄八年に周詩有之曰俟河之淸人壽幾何、拾遺記に丹丘千年一燒黃河千年一淸聖人之大瑞也とあるに據れり
○嘉祥寺、山城國紀伊郡深草村にあり嘉祥三年眞雅の創立に係る
○在目、目は原本日に作る諸本及類史に據て改む
○梵字字義、類史梵字之義に作る
○聲聞、佛の言敎を聞て悟る人といふ意類史及格聞を明に作る
○法文之要、文は類史及格門に作る
○法門、門は原本明に作る祕本尾本淀本及類史に據て改む
○其類、類は原本數に作る祕本及類史格に據て改む
○取最要者、取は原本所に作る類史に據て改む
○大佛頂梵字、大佛頂は大佛頂經卽ち楞嚴經なり
○大隨求梵字、大隨求は大隨求陀羅尼經なり
○摩由、大孔雀明王經を云由は原本尼に作る諸本及格に據て改む
○尊勝、佛頂尊勝陀羅尼

之後、爲持念之僧、住嘉祥西院、轉孔雀尊勝、恒護十善之鳳輿、久堅九重之寶城、特令弟子之中冠首者、永代相承、行此白業、然則今上陛下、德滿乾坤、明等日月、保不壞之聖體、於轉法之力、擧無疆之法壽於密言之功、深草(仁明)聖帝、正覺之花更鮮、田邑(文德)先皇、無價之寶彌照、卽使世同東戶、時化南薰、天下淸平、人物安樂、詔許之、○廿日丙子、授大膳職醬院無位高部神從五位下、○廿二日戊寅、授攝津國正六位上雪氣神從五位下、伯耆守從五位下家原宿禰氏主爲勘解由次官兼算博士、周防守從五位下藤原朝臣直道爲鑄錢長官、周防守如故、散位外從五位下高丘宿禰百興爲和泉守、從五位下守左近衞少將藤原朝臣良尙爲上總權介、少將如故、外從五位下行豐後介善道朝臣根莚爲越後權介、散位外從五位下都宿禰御西爲因幡權介、從五位下行上總介吉備朝臣全繼爲伯耆守、散位從五位下藤原朝臣山蔭爲備後權介、外從五位下當野忌寸平麻呂爲豐後介、○廿六日壬午、授上野國正六位上波己曾神從五位下、安藝國正六位上大麻天神、伊都岐嶋中子天神、水分天神、天社天

を云
○莎底苾蒭、莎底は演密鈔に梵音娑底也此方云レ諸若レ言二娑囉一即詮二堅淨之義一苾蒭は釋氏要覽上に梵語也是西天草名具二五德一故將喩二出家人一こ云
○損滅之神、已縮之命さ對す滅損せる精神の意
○明王、陀羅尼を云
○善住天子、天は原本太に作る諸本に據て改む尊勝陀羅尼經に見ゆ
○度脫之力、生死を超度解脫するを云
○大孔雀明王經三卷、不空譯
○梵字一通、通は諸本及格道に作る
○久堅、久は原本永に作る類史に據て改む諸本文に作るは久の訛なり
○冠首、格貫首に作る
○白業、黑業に對する語にて總じて善業を云大乘義章に善法鮮淨名レ之爲レ白こあり
○響言、陀羅尼を云
○東戶、淮南子繆稱訓に昔東戶季子之世道路不レ拾レ遺耒耜餘二糧宿一諸畮首云々こあり
○南薰、孔子家語辯樂解篇に昔者舜造二南風之詩一

神、並從五位下一。詔令三出羽國秋田郡俘囚道公宇夜古、道公宇奈岐一度レ之、先レ是國司上言、件俘囚等、幼棄二野心一、深愧二異類一、皈二依佛理一、苦(ネムコロニ)願レ持レ戒、仍特許レ之。授二正六位上高向朝臣公輔從五位下一。無位紀朝臣全子、田中朝臣保子、安倍朝臣高子、並從五位下。○廿七日癸未、制、主稅寮史生、勞以二十年一爲レ限。○夏四月丙戌朔、日有レ蝕之。雷雨、震二東京民居二家一。○二日丁亥、天皇不レ御二前殿一。於二左仗頭一賜レ飮親王以下次侍從以上、賜レ祿各有レ差。是日詔以二從四位下時佐王、從五位上百濟王慶正一、並爲二次侍從一。○三日戊子、安藝國采女凡(オホシ)直貞刀自賜二姓名笠朝臣宮子一、隷二左京職一。宮子八中務少丞正六位上笠朝臣豐主之女、母雄宗王之女淨村女王、大同元年、雄宗王以二伊豫親王家人一、配二流安藝國一。宮子少年從レ母、不レ知二父族一、貫二安藝國賀茂郡凡直氏一、預二采女之貢一。美濃守從五位上笠朝臣數道、越前守從五位下笠朝臣豐興等證レ之、仍復二本貫姓名一。○四日己丑、廣瀨龍田祭如レ常。○七日壬辰、式兵二省奏二擬階文一。天皇不レ御二前殿一、大臣奉レ勅、命レ省行レ之。武藏國去秋水潦、下野國大風、陸奧國洪水、出羽國霜雹、加賀國水

旱、出雲國秋寒、並賑給之。○八日癸巳、內殿灌佛如常、凡毎年四月八日、天子於內殿灌佛、親王公卿、及殿上六位以上、各奉嚫錢、多少有差、他皆效此。○九日甲午、從五位下守諸陵頭當麻眞人清雄爲圖書頭、從五位下守圖書頭安倍朝臣房上爲治部少輔、從五位下行大外記兼相摸介滋野朝臣安成爲上野權介、大外記如故。○十日乙未、授法花寺從三位薦枕高御產栖日神正三位、正四位上火雷神從三位、從四位下法花寺坐神從四位上。○十五日庚子、公卿於太政官曹司廳、賜成選位記、宣制云、勅旨止宣大命乎、衆聞食止宣、天安二年、成選人等爾、其仕奉狀乃隨爾冠位上賜比治賜波久止宣大命乎、衆聞食止宣。是日詔曰、朕聞、自古體元居正者、雖運殊根英、聲別金石、而改正朔、變徽章、以易民之視聽也、故能皇疏不測、萬朔酌而不厭、帝系無涯、千載沿布而無沫、方今春忠已達、夏德爲餘、衆鳥調翼而始飛、百花成實而新結、見候物之如此、知開元之所宜、其改天安三年、以爲貞觀元年、將使皇猷正一、被群品以用全、寶曆延長、均兩儀以年遠。是日神祇官卜以參河國播豆郡爲悠紀、美作國

南風之薰兮可以解吾民之慍兮云々とあり
○醫院、拾芥抄中末に大膳別院在職西とみゆ
○高部神、神名式大膳職坐高倍神社とあり
○雪氣神、攝津は讃岐の誤なるべしと思へど正月甲子紀と合はず神祇志料は讃岐國雲氣神の誤とす
○高丘宿禰百興、和泉守となりし事正月庚午紀に已に出づ
○波已曾神、國內神名帳に雜水郡從二位波古曾明神とあり
○大麻天神、式外、神祇志に在山縣郡
○伊都岐嶋中子天神、式外、所在未詳
○水分天神、式外、神祇志に今在安藝郡
○天社天神、式外、同志に在沼田郡
（四月）慶世、世は原本正に作る諸本に據て改む
○貞刀自、刀は諸本に據て補ふ
○淨村女王、原本村を材に王を也に作る諸本に據て改む
○擬階文、公事根源に四月七日擬階奏是は二月の列見の時の成選短册を

省よりもてまゐれるを大臣の奏聞する儀なり集釋に擬議也誰々ヲ加階サセラレヨト議スル奏也とあり
○灌佛、續後紀（一六二頁）に見ゆ
○嚫錢、布施の錢を云、嚫は原本新に作る本朝月令所引に據て改む諸本親に作るは嚫の訛なるべし
○法花寺、大和國添上郡今奈良市にあり
○鹿枕高御產栖日神、神名式添上郡宇奈太理坐高御魂神社（大月次相嘗新嘗）とある是なり產は原本座に作る元慶三年六月丁卯紀に據て改む
○火雷神、神名式大和國宇智郡火雷神社、南宇智村御山
○法花寺坐神、式外、高御產栖日神とは別社なり
○仕奉狀、狀は諸本に據て補ふ
○躰元居正、左傳隱元年杜注に欲其體元以居正とあり
○聲別金石、金と石とは其聲自ら別なるを云原本聲を事に金石を沿革に作る諸本に據て改む

英多郡爲主基、○十八日癸卯、皇太后遷自東宮、御右大臣西京三條第、去年八月廿九日、與今上同輿、遷自冷然院、御於東宮、擬還五條宮、暫御大臣第、爲避忌也、進參議從三位行皇太后宮大夫伴宿禰善男階、加正三位、亮從五位下三統宿禰眞淨從五位上、外從五位下行大進御船宿禰彥主從五位下、緣皇太后御願、置安祥寺年分度者三人、願文曰、竊以、眞化無方、導慈航於暗海、神功不測、運智炬於邪山、窺涉者莫究其宗、皈仰者咸超彼岸、權實兼濟、名言兩絕、故能感通之理、紛綸於沙界、報施之途、昭彰於塵劫者矣、伏惟仁明皇帝、均芳得一、降迹大千、雖垂衣廣運、負扆高居、而十地無忘、四禪有託、逮乎白雲有御、仙駕不追、九服所以纏哀、百靈於是結慟、威靈若在、歲月逾深、余昔出自閨門、入侍巾櫛、瑤光降神、誕得先帝、肅奉天規、丕隆祖業、未從汾水之遊、俄遷鼎湖之駕、慧日早隱、世間虛空、終天不可復看、隔地何日將會、祗犢之情、感于懷抱、垂堂之念、軫於心神、余家亡二親、國送兩帝、三從之義永絕、孤寡之思交侵、

○而改、而は尾本前本不に作る　○皇蹤、蹤は私記に一に統に作ると云　○酌而、私記に或云上下疑脱字と云　○無沫、沫は巳也

生者に身毀而未滅とあり滅は原本昧に作る諸本に據て改む　○始飛、飛は原本足に作る諸本に據て改む　○候物、候は時候、物は萬物なり　○兩儀、天地　○攝津郡、今も同じ　○英多郡、今英田に作る　○右大臣、藤原良相　○安祥寺、山城國宇治郡安祥寺村　○智炬、炬は原本矩に作る諸本及類史に據て改む　○邪山、瞻海と對して云　○兩絕、原本四施に作る諸本及類史に據て改む　○感通、感は類史咸に作る　○紛綸於沙界、史記司馬相如傳注に紛亂也綸沒也とあり沙界は娑婆世界なり　○昭彰、昭は原本照に作る類史に據て改む　○塵劫、佛語にて極めて永き年月を云永世の意　○均芳得一、均芳は文選宣貴妃誄に聯約齊顯接蔓均芳とあり得一は晉書裴楷傳に天得一以清地得一以寧王侯得一以爲天下貞とあり　○降迹大千、大千は大千世界、降迹は垂迹に同じ　○垂衣慶運云云、易繫辭傳に黃帝堯舜垂衣裳而天下治とあり負扆は已に注す　○十地、菩薩修行の階位に五十二位あり其四十一位より五十位までを云　○四禪、四禪天を云、四禪天とは色界に十八天あり、之を初禪天三天・二禪天三天・三禪天三天・四禪天九天に別つ其第四禪天なり　○有託、託は原本記に作る祕本前本谷本及類史に據て改む　○逮乎白雲有御云云、仁明天皇の崩御を云　○九服、周禮職方氏に見ゆ王畿以外の遠き國々なり　○纏衰、衰は喪服なり原本哀に作る類史に據て改む　○百靈、百神に同じ　○威靈若在、聖德の高きを云　○歲月逾深、歲月を經て哀慟愈深しとなり　○誕得先帝、先帝は文德天皇、原本誕下に生字あり類史に據て削る　○不隆、原本隆を降に作る類史に據て改む　○未從汾水之遊云云、莊子逍遙遊篇に堯治天下之民往見四子汾水之陽窅然喪其天下焉(節略)とあり又史記封禪書に黃帝鑄鼎於荊山下鼎既成有龍垂胡髯下迎黃帝黃帝上騎(中略)後世因名其處曰鼎湖とあるに據れり文德天皇の崩御を云次句も同じ　○何日、原本日を自に作る類史に據て改む　○舐犢之情、後漢書揚彪傳に見ゆ親の子を愛するを云　○垂堂之念、史記袁盎傳に千金之子坐不垂堂注に恐簷瓦墮中人とあり　○軫於心神、原本慙於神余に作る類史百七十九に據て改む軫は心を痛むる云　○兩帝、仁明天皇文德天皇なり　○三從之義、家語本命解篇に女子者有三從之道幼從父兄既嫁從夫夫死從子(節略)とあるを云

夫以、有始者必有終、有生者必有死、哀樂代謝、盛衰互來、猶如朝之有暮、晝之有夜、必然之理、所以不脫也、是以調御丈夫、示林變之悲、淨德夫人、遺花委之患、上界天人、猶以不免、下界凡夫、何方得遁、況復奈河之渡、平生之財不隨、平等之前、君臣之序無辨、獨生而獨死、自作而自受、即知藏庫之富、空穢清淨之心、王侯之貴、還因自在之身、長養此六賊、輪廻彼三界、豈如借有爲之力、攝無爲之家、役有漏之身、轉無漏之職、夫仁遠乎、我

○有始者必有終云云、揚子法言君子篇に見ゆ　○調御丈夫、釋迦には十の名あり第八を調御丈夫と云種々の諸法を說き能く衆生を調伏制御して善道に入らしむ故に調御丈夫と名く、原本丈を大に作る誤なれば改む　○林變云云、林變は秋に至て變色落葉するを云花委は花の落つるを云　○淨德夫人、法華經妙莊嚴王品に出づ　○奈河之渡、三途の川を云十王經に見ゆ

欲斯至、早歲有志、未屬時來、去仁壽年中、初建此伽藍、布須達之金、割祇陀之地、翹瓶沙之務、馳于塡之誠、輪奐之功、龍宮自寫、毗首之巧、尊顏更開、於是延荷衣、爲住持之客、屈龍象、爲傳燈之主、余雖有丈夫之志、未能行婦人之身、所願每年度此三人、代身修道、將除三毒、上以增佛法之壽命、下以遂我懷之宿望、但以衆生種性、大小不同、能仁隨應、示現非一、故空教有教、頓漸權實、各當其器、皆是無二、菩薩利他、孰捨孰取、然則世間所行八宗之教、須皆脩習、應病與藥、然而人命有限、法門無盡、仍人々分學、不責該通、而淺薄之輩、膚受之流、各迷所見、誣所不見、遂使一味之水、忽異波瀾、同床之子、還成矛楯、論之正教、良所不容、今之所度、有異於此、夫眞言教門、諸法之肝心、如來之祕要、凡在佛子、必可脩習、仍課度者、以爲自宗、自餘七宗、皆爲兼學、度者必須並學一宗、立此兼濟之道、示彼不別之心、仍試度之後、便籠寺家、七年之際、不聽出山、晝則講所兼之經論、夜則念所宗之經咒、又令此度者、每年相次、夏中三月、講演法華最勝仁王等經、其講師者、寺家簡定、牒僧綱所、將令充行、但法華最勝、年年相

○平等之前、平等は十王中の平等の王
○獨生、獨は原本猶に作る諸本及類史に據て改む
○六賊、六塵に同じ六塵は慧命を損じ法身を壞す故に賊と名づく
○役有漏之身、有漏は無漏に對す、漏は煩惱を云、役は原本但に作る類史に據て改む
○無漏之職、職は一に識或は識に作ると云
○夫仁遠乎云云、論語述而篇に子曰仁遠乎哉我欲仁斯仁至矣とあり
○須達、祇園精舍を建立して佛に供養せし慈悲深き人
○祇陀、波斯匿王の太子祇陀林の所有者深く佛を信す
○瓶沙、頻婆娑羅王を云摩伽陀國の王竹林精舍を建てゝ佛に供養す
○于塡、憍賞彌國の王佛を信じ釋迦入滅の時之に遭はざるを悲みて病を得佛像を作らしめたるに其病癒えたりと云
○毗首之巧、毗首羯磨を云ふ工匠を司る印度の神なり、巧は原本功に作る類史に據て改む

○荷衣、文選北山移文に焚二芰製一而裂二荷衣一注に荷衣隱者之服とあり僧侶を云
○丈夫之志、之は諸本及類史に據て補ふ
○三毒、貪毒・瞋毒・癡毒を云
○增佛法之壽命、佛字は尾本前本谷本及類史に據て補ふ
○能仁、釋迦を云
○空教有教、空教は一切皆空の義を說く教にて成實三論等之に屬す有教は萬有の實在を主張する教にて俱舍宗之に屬す
○無二、類史無上に作る
○利他、衆生を濟度するを云
○世間所行、所字は祕本谷本及類史に據て補ふ
○膚受、淺薄に同じ原本膚を庸に作る類史に據て改む
○波瀾、瀾は原本爛に作る祕本谷本及類史に據て改む
○矛楯、韓非子難勢篇に人有下鬻二矛與一レ楯者上、譽二其楯之堅一物莫二能陷一也、俄而又譽二其矛一曰吾矛之利物無レ不レ陷也、人應レ之曰以二子之矛一陷二子之楯一如何其

替、令レ講二一部、至二仁王經、每年加講、住山限滿、當レ行二利他、須下准二新藥、弘福、法隆、崇福等寺之例、預中維摩會最勝會竪義之列上、其年次者、置二崇福下、但複已下之業、本寺據レ例課試、令下夫修名之徒知二所レ屈、束實之流有上レ所レ伸、然則道之精華、未レ墜二於地、義之骨髓、猶在二於人、又每レ至二八月、起二廿一日、盡二廿七日、合七箇日、殊奉下爲二田邑(文德)天皇、令上レ修二尊勝法、與二乾坤而終始、將二日月而貞明、此之勝緣、是爲二無量維持、奉レ資二仁明天皇、洗二拂菩提之樹、開二敷正覺之花、翼二贊田邑天皇神路、青蓮臺上、面(マノアタリ)奉レ彌陀、紫紺堂中、親承二慈氏、聽二八音而證レ果、登二千葉而娛レ神、庶幾我皇千佛並レ手、俱垂二摩頂之慇、百像聚レ口、同加二育養之慈、金輪長轉、北極之尊不レ動、塵劫方盡、南山之壽不レ虧、大庭興レ夢、無爲之化可レ及、豐谷騰レ歌、有截之風彌長、開闢以來、登遐聖靈、灑二薰修之雨、滌二三障之垢、後々代々、有土之主、依二持念之風、固二萬代之基、殊別奉レ莊、天智天皇山陵、兆域近二於道場、疎鐘覺二長夜之眠、雅梵驚二重昏之聽、不レ改二山岳之色、即開二靈鷲之峯、乍御二生死之界、即取二涅槃之樂、太皇太后、及與二中宮、坤儀備レ德、王母獻レ壽、太政大臣、匡二揚皇化、致レ君昇二堯舜之美、

贊弼帝德、捧聖蓋羲軒之聲、諸王公主、固盤石之緒、天人之際逾高、股肱喉舌、申補袞之規、山河之賞克懋、文武罄匪躬之節、牧伯宣字育之方、華夷依仁、士女蹈義、日月光華、風雲律呂、時和歲阜、灾害不生、民富世豐、禍亂不發、上至有頂、下究輪際、中間所有、一切含識、同乘種智之車、等遊寂光之土、惣是廣大功德、奉資考妣之神、膝下之恩、昊天罔極、懷抱之慼、厚地不比、而風樹不待、寒泉空咽、願遣善根之寶、申莊嚴之志、駕空眞之轍、泛解脫之舟、開道樹於天宮、揚惠風於鷲嶺、凡厥試度之事、令權律師傳燈大法師位慧運專一勾當、血脉相傳、不關別人、其行事者、一任寺記、若有臨時應以俗爲勾當者、專依寺家所請、不更雜用他人、

人弗能應也とあるに據れり ○不容、容は原本害に作る類史に據て改む ○眞言敎門、言は諸本及類史に據て補ふ ○兼濟、濟は原本齊に作る諸本及類史に據て改む ○不聽出山、山は祕本及類史に據て補ふ ○但法華、華は原本宗に作る諸本及類史に據て改む ○新藥、新藥師寺 ○崇福等寺、等は祕本及類史に據て補ふ ○堅義之列、之字は尾本及類史に據て補ふ ○再覆、覆は原本復に作る諸本及類史に據て改む ○修名、名を求むるなり ○束實、束は謹束なり實を力めて名をはからざるなり、 ○骨髓、髓は原本體に作る類史に據て改む ○八月、原本八日に作る類史に據て改む八月廿七日は文德天皇崩御の日なり故に毎年此日に此法を修せしめらるゝなり格二には毎下に年字あり ○合七箇日、合は原本令に作る類史及格に據て改む ○貞明、易繫辭傳に日月之道貞明者也とあり ○兩量等持、兩は類史本に作る ○讚賛、原本葉替に作る讚は類史に據り賛は諸本及類史に據て改む ○神路、原本神器に作る類史に據て改む神路は聖階なり ○青蓮華上云云、極樂淨土に往生するを云 ○慈氏、彌勒菩薩を云慈は原本茲に作る諸本及類史に據て改む ○八音、如來の八種の音聲 ○千葉、蓮華なり ○摩頂之恩、法華經囑累品に釋迦牟尼佛從法座起現大神力以右手摩無量菩薩摩訶薩頂而作是言とあるに據て、菩提を得しむるを云なるべし ○百像、像は原本億に作る類史に據て改む ○南山之壽不虧、毛詩小雅天保章に如月之恒如日之升如南山之壽不騫不崩如松柏之茂無不爾或承とあるに據れり ○大庭興夢云云、列子黃帝篇に黃帝退而間居大庭之館晝寢而夢遊於華胥氏之國其國無帥長自然而已黃帝旣寤怡然自得、簡略とあるに據れり ○豐谷騰歌云云、豐谷は文選漢高祖功臣頌に虎嘯豐谷注に豐谷は豐邑とあれは毛詩大雅文王有聲章に作邑于豐とに本哉とあるを云なるべし、有截は毛詩商頌長發章に海外有截、箋に截整齊也四海之外率服截爾整齊とを云 ○登遐、崩御を云 ○三障、煩惱

障・業障・報障を云　○有土之主、有土は國土を保有するなり之は諸本及類史に據て補ふ　○持念之風、薫修之雨と對す　○道場、安祥寺を云御陵付にあり　○雅梵、梵音なり讀經の聲を云　○雨昏、長夜に同じ　○坤儀備德、婦德を備へ給ふを云儀は原本義に作る前本谷本及類史に據て改む　○王母獻壽、西王母は其長壽を太皇太后中宮に獻るなり　○羲軒、伏羲・軒轅なり　○公主、主は類史に據て補ふ　○盤石、漢書文帝紀に高帝王子弟地犬牙相制、此謂盤石之宗也とあり　○喉舌、諸本々類史に據て補ふ職員令義解に納言王者喉舌之官也とあり納言を云　○補袞、毛詩大雅烝民章、注に袞職王職也とあり補佐の臣を云　○山河之賞、唐中宗封張仁愿制に將帥興功本期於報國帝王懸賞用答於勲庸大將軍張仁愿宜列河山之賞式崇帶礪之榮（節略）とあるに據れり　○牧伯、國司を云　○日月光華、通鑑綱目所引虞夏傳に惟十有四祀帝乃維而歌者重篇於時俊乂百工相和而歌卿雲帝乃倡之曰卿雲爛兮禮縵々兮日月光華旦復旦兮とあり　○風雲律呂、文選新漏刻銘に河海夷晏風雲律呂、注に東風入律青雲干呂至道之應也とあり　○有頂、有頂天なり三界九地の絕頂にあり　○輪際、金輪際なり水面より八萬由旬の下に厚さ三億二萬由旬の金輪あり此金輪の在る所を云ふ大地の最底の意　○含識、衆生を云　○乘種智之車、原本乘を垂に車を事に作る乘は類史に據り車は諸本及類史に據て改む　○風樹不待云云、風樹は家語致思解に出づ寒泉は毛詩邶風凱風章に爰有寒泉在浚之下有子七人母氏勞苦とあるに據れり待は原本得に作る諸本及類史に據て改む　○遺善根之寶云云、原本善を蓋に寶を春に申を賁に作る諸本及類史に據て改む　○鷲空眞之轍、原本鷲を鷲に作る類史に據て改む

○廿日乙巳、詔賜左大臣從一位源朝臣信、攝津國河邊郡爲奈野、爲遊獵之地、○廿一日丙午、大祓於建禮門前、以觸穢之人入於御在所也、河內和泉兩國、相爭燒陶伐薪之山、依朝使左衞門少尉紀令影等勘定、爲和泉國之地、○廿三日戊申、六府警固、緣賀茂祭也、大納言正三位兼行民部卿陸奧出羽按察使安倍朝臣安仁薨、安仁者左京人、從四位上行治部卿東人孫、而參議大宰大貳從四位上寬麻呂之子也、安仁身長六尺三寸、姿貌環偉、性沉深有威重、少直校書殿、弘仁中爲山城大掾、累遷中務民部少丞、天長初除近江權大掾、介藤原朝臣弟雄深相親善、委

○從一位源朝臣信、天安二年十一月甲子紀に據るに正二位とあるべきなり
○紀令影、原本今影に作る尾本前本淀本に據て改む
○大納言正三位、三は原本二に作る類史六十七及補任に據て改む
○姿貌環偉、南史梁安陸王大春傳に體貌環偉とあり環は瓌の誤なるべし

任政事、安仁爲政强濟、名聞朝廷、秩限未滿、授從五位下、除信濃介、視事三年、部內肅然、任終之年、加從五位上、褒能治也、尋拜兵部少輔、俄而遷正五位下、承和元年轉大輔、遷任近江權介、明年遷刑部大輔、有勅侍奉太上天皇於嵯峨、太上皇甚親任、以安仁爲院別當、事無大小、委決於安仁、先是院事擁滯、男女多愁、安仁旬月之間、平理弁行、太上天皇深嘉之、尋遷治部大輔、太上天皇嘗從容評議諸國吏之優劣、以爲未若安仁爲信濃介之能、後人莫之及、卽賜牙笏、玉帶、金魚袋、并御衣一襲、有識相賀云、此賞是宰相之鴻漸也、三年授從四位下、五年拜參議、爲刑部卿、太上天皇語安仁曰、汝宜早掌樞機之職、何久行山院之事、七年爲左大辨、停別當職、其後院中庶事不理、有勅復爲別當、辨官之政、拂曉而入、安仁退衙之後、必詣嵯峨、往還之程、原野數里、朝廷恤其繁劇、爲擇簡之職、九年遷大藏卿、是年七月、太上天皇崩、皇太子坐事被廢、八月立諱文德天皇親王爲皇太子、以安仁爲春宮大夫、十年兼下野守、未幾兼彈正大弼、十一年授從四位上、十三年加正四位下、遷左大辨、春宮大夫彈正大弼下野守

○擁滯、擁は壅に同じ
○金魚袋、抄裝束部腰帶類に魚袋蔣魴切韻云袋囊名又金銀魚袋、唐令云諸百官魚袋並令中尚預造畫也、新唐書車服志に隨身魚符者以明貴賤（中略）皇太子以玉親王以金庶官以銅皆題其位姓名皆盛以魚袋三品以上飾以金五品以上飾以銀とあり彈正式に凡魚袋者參議以上及著紫緋王五位已上金裝自餘四五位銀裝とせり
○鴻漸、仕進に喩ふるなり
○退衙、衙は原本衛に作る前本從本に據て改む
○皇太子、恒貞親王
○遷左大辨、承和十三年正月乙卯紀に右大辨とあり

○三年拜權大納言、三年の二字は尾本に據て補ふ
○安仁任權大納言の事文德實錄に見えざれど公卿補任に三年十月日任とあり實錄三年十一月辛酉紀には權大納言と見ゆ
○調庸、庸は原本貢に作る尾本淀本に據て改む
○具瞻之地、毛詩小雅節南山章に赫々師尹民具爾瞻とあり高位高官を云
○至于二、二下に三の字を脫するか
○假景、暇景に同じ餘暇の時を云
○洪澮、畎澮に同じ尙書益稷に濬畎澮距川注一畝之間廣尺深尺曰畎方百里之間廣二尋深二仞曰澮とあり溝澮を云
○石船神、神名式常陸國那賀郡石船神社、今東茨城郡岩船村
○佐波波神、式多珂郡佐波波地祇神社、今多賀郡大津町、原本波一字なし祕本前本淀本に據て補ふ
○多家神、正月甲申紀に見ゆ
○書稱科斗、尙書序に魯共王壞孔子舊宅於壁中得先人所藏古文虞夏商周之書及傳論語孝經

並如故、十五年進爵爲從三位、拜中納言、數日兼民部卿、春宮大夫如故、嘉祥三年授正三位、齊衡二年領陸奧出羽按察使、上表辭民部卿、不許、三年拜權大納言、安仁志尙謙虛、愛公如家、顧謂子弟云、諸國調庸、多入封家、納官者少、所食之邑、於身有餘、乃上表曰、帶職兩三官、周旋於具瞻之地、食邑八百戶、盈溢於尸素之身、伏望、減大納言之所食、給中納言之所封、帝感安仁之有讓、特許其所請、天安元年爲大納言、兼右近衞大將、抗表苦辭大將、優詔不聽、頻上至于二、然後許之、薨時年六十七、安仁達練政體、明解朝章、每有奏議、應對無滯、至於假景、教誡子孫、有子男八人、貞行、宗行、淸行、興行、最知名、興行始舉秀才、對策及第、○廿四日己酉、賀茂神祭、停遣朝使、緣有穢也、是日夜大雨、流潦奔突、洪澮難涉、○廿六日辛亥、常陸國正六位上石船神、佐波波神、並授從五位下、○廿七日壬子、授安藝國從五位上多家神從四位下、○廿八日癸丑、詔曰、書稱科斗、懋遷之訓斯彰、簡號韋編、交易之方日遠、是以姜公通市井之貨、齊國大彊、鴟夷善廢斂之居、陶業爰盛、遠則赤側白金、近則鵝眼綖環、順世而異

レ名、逐レ時而興レ利、但權(ハカリ)レ輕作レ重、子去母隨、誠是歷年之漸深、遂知行用之彌賤、宜下改二舊弊一、更制二新錢一、勸二此變通一、救中彼流弊上、文曰二饒益神寶一、一以當二舊之十一、即舊之與レ新、並令二雜用一、是月二十日以前、有下讀二奏諸國銓擬郡司擬文一之儀上、例也、而史漏而不レ書、故今闕焉、

皆科斗文字（節略）とあり古文尙書を云
○懋遷之訓、尙書益稷に懋遷二有無一化レ居とあるを云懋遷は交易を勉むる意なり原本叢編に作る懋は尾本淀本に據り遷は尾本前本に據て改む
○簡號革編、易を云史記孔子世家に讀レ易韋編三絕とあり
○交易之方日遠、易繫辭傳に日中爲レ市致二天下之民一聚二天下之貨一交易而退各得二其所一蓋取二諸噬嗑一とあるを云日は前本淀本日に作る蓋し白の訛なり以上二句は尙書及易に既に交易を勉むべき由見えたりと云るなり　○姜公云云、晉書食貨志に太公通二市井之貨一以致二齊國之强一鴟夷善二發斂之居一以盛二中陶之業一とあるに據れり姜公は太公望呂尙なり本姓姜氏　○鴟夷云云、史記貨殖傳に范蠡變レ名易レ姓適レ齊爲二鴟夷子皮一之レ陶爲二朱公一云々乃治レ產積居與レ時逐とあり、廢は原本發に作り晉書にも發とあれど前本淀本に據て改む史記平準書に廢居居レ邑、索隱に廢出賣也とあり斂は聚也居は停蓄する所の貨を云陶業は原本陶葉に作る祕本前本に據て改む　○赤側白金、漢代の貨錢なり赤側は史記平準書の注に如淳曰以二赤銅一爲二其郭一也また白金は同注に雜二鑄銀錫一爲二白金一也とあり　○鵝眼綖環、宋（南北朝）代の貨錢なり宋書顏竣傳に景和元年沈慶之啓二通私鑄一由レ是錢貨亂敗一千錢長不レ盈二三寸一大小稱レ此謂二之鵝眼錢一劣二於此一者謂二之綖環錢一入レ水不レ沈隨レ手破碎とあり　○權輕作重云云、漢書食貨志に量二資幣一權二輕重一以救レ民民患レ輕則爲レ之作二重幣一以行レ之於レ是有二母權レ子而行一民皆得焉若不レ堪レ重則多作レ輕而行レ之亦不レ廢レ重於レ是乎有二子權レ母而行一小大利レ之、注に重爲レ母輕爲レ子とあり　○舊幣、幣は幣の訛なるべし　○勸此變通、勸は原本勸に作る前本淀本に據て改む　○是月、月は原本日に作る祕本前本淀本に據て改む　○讀奏諸國銓擬郡司擬文、太政官式に凡諸國銓擬言二上郡司大少領一者式部對試造レ簿先申二大臣一即奏聞とあり其式は內裏式に見ゆ貞觀七年四月乙亥及元慶八年四月條、日紀を參看すべし

○五月丙辰朔、參議從四位上行式部大輔藤原朝臣貞守卒、貞守者、參議從三位楓麻呂曾孫、而正六位上諸貞之子也、貞守器宇凝峻、頗有二學涉一、天長元年爲二大學大允一、累遷二內匠助皇太后宮大進一、五年授二從五位下一、爲二右少辨一、遷二式部少輔一、不レ幾復二右少辨一、兼二讚岐介一、十年加二從五位上一、承和元

（三五月）藤原朝臣貞守卒、貞守は北家則房前の後にて其系は房前、次眞楯、次門主、次諸貞、次貞守なり位の年月は補任に詳に見え此に記す所と異同あり宜しく參看すべし
○遷吏、晉書傅咸傳論に

風格凝俵、とあり凝は嚴整貌なり
○學涉、涉は涉獵するを云
○遷春宮亮、續後紀天長十年二月丁亥に繋す此に承和元年とあるは誤れり
○後年爲信濃介、承和八年正月癸巳なり
○兼備前介、備中守の誤なり十五年正月甲戌紀に見ゆ、備前介となりしは嘉祥三年正月甲午なり
○荒木神、神名式丹波國天田郡荒木神社神祇志料六部鄕堀村荒木山にありと云
○合志郡、倭名抄に合志は加波志と訓めり
○人康親王、紹運錄に法名法性、母は贈皇太后藤原澤子、贈太政大臣總繼の女貞觀十四年五月甲戌薨去
○居雲漢之末、皇親なるを云
○備簪纓、彈正尹兼常陸太守に任ぜられ給ふを云
○頑怯、怯は祕本怯に作る怯は實也
○幽人長往之蹤、文選北山移文、注に幽人は隱者之稱とあり蹤は原本縱に作る諸本に據て改む

年遷春宮亮、兼豐前守、後年爲信濃介、春宮亮如故、九年七月皇太子被廢、仍左遷越後權守、十五年徵拜式部少輔、兼備前介、嘉祥三年增正五位下、遷右中辨、仁壽元年授從四位下、轉左中辨、三年遷右大辨、數月拜參議、尋兼下野守、齊衡二年、進階爲從四位上、拜式部大輔、卒時年六十二、○四日己未、丹波國荒木神列於官社、○分肥後國合志郡、始置山本郡、○五日庚申、停端午之節、諒闇也、○七日壬戌、四品守彈正尹兼行常陸太守人康親王出家入道、上表曰、臣人康言、身居雲漢之末、才無涓流之効、空備簪纓、徒榮疾病、臣欲遂頑怯於聖日、不慮幽人長往之蹤、將盡筋骨於明時、豈歸眞如寂滅之道、然而蒙昧之身荷榮顯、鬼必瞰其滿盈、尊崇之地處虛羸、天宜奪其年算、斯乃臣所以一寒一暑、膚腠作患之機、或晦或明、心肺皆養痾之府者矣、臣今年二月、熱發甚篤、醫藥無所施其方、針熨遂不通其術、卽知魂遊岱岳、九原多一死之悲、夢上鈞天、七日無再生之効、緜綴之間、纔發此念、出家功德、免三途苦、仍先請二師、已受十戒、形猶禿丁、服是僧祇、豈計非更生之藥、起朽質於玄廬、無返魂

○膚腠、腠は皮膚な云
○針熨、針は鍼なり熨は史記扁鵲傳注に毒熨謂毒病之處以藥物熨帖也とあり
○魂遊岱岳、文選劉公幹贈五官中郎將詩に常恐遊岱宗、注に岱宗太山也人命屬之、臥疾恐死故云恐遊岱宗也とあり
○九原、禮記檀弓下の九京の注に晉卿大夫之墓地在九原（京蓋字之誤）とあり
○夢上鈞天、史記扁鵲傳に簡子疾五日不知人寤語諸大夫曰我之帝所甚樂與百神遊於鈞天とあり鈞天は中天也
○綿綴、氣息絶えむとするを云
○三途苦、三途は三途川の意
○禿丁、髮を剃りし俗人の意
○僧祇、僧伽に同じ僧を云原本祇を祗に作る前本流本徧本に據て改む
○玄廬、墓所を云
○返魂之香、十洲記に聚窟州に反魂香ありて死尸も香を聞けば卽ち活へる事見ゆ
○典錄、死者の籍を云文選魏文帝與吳質書に見

之香、招飛精於鬼錄、此乃如來護念、菩薩加持之力矣、已得蒙其冥助、不得背其深期、伏望、被陛下之殊私、爲梵門之禪侶、將使金魚脫佩、長褫紫服之粧、銀驄伏櫪、永罷繡衣之職、陛下若遇臣厚者、思拾獲其保全、若矜臣優者、宜奬收其封職、不勝荒迷之至、謹拜表以聞、詔、人康親王辭其官爵、歸於釋侶、宜准國康親王、收其品封、但本封舊幷帳內資人、准無品例充之、人康親王者、仁明天皇之第四子也、承和十五年正月叙四品、拜上總太守、仁壽二年遷彈正尹、齊衡四年兼常陸太守、親王自少年時、有歸大乘道之意、今謝病遂本懷焉、和泉國舊府神、聖神、比賣神等、列於官社、○十日乙丑、公卿就太政官曹司廳、任銓擬郡司、策文云、天皇我詔旨良萬止宣大命乎、衆聞食與止宣、今國々乃郡司爾任賜人等爾、冠位上賜比治賜波久止宣御命乎、諸聞食與止宣、存問兼領渤海客使大內記安倍朝臣淸行、加賀國司等、奉進渤海國啓牒信物、王啓曰、虔晃啓、孟冬漸寒、伏惟、天皇起居萬福、卽是虔晃、蒙恩當國、聞年使命永展先親、禮將果代之情、忱續任風之影、恒無隔紀、以至于今、虔晃幸承先緒、撫守一邦、古

典攸憑、合重禮意、敢依舊貫、差付使程、紀近盈年、允增結戀、期海津於挂席、表輸信於傳心、仍發雲檣、迴凌波濵、凝萬里之遐想、係寸心以難窮、往復之間、伏望矜恤、限以巨濵、未由拜覲、下情無任馳戀、謹差政堂省左允烏孝愼奉啓、不宣謹啓、中臺省牒曰、牒奉處分、扶桑崇濵、日域遐邦、欲占風而挂席、期阻歲而寄音、泛々輕舟、罕過沃雲之水、拳々方寸、彌增披霧之情、所以隔年度日、天轉律移、想尋修之舊貫、近周廻之星紀、酌展親於古典、遵繼好於前章、憑事表情、善隣賓禮、戀懷轉切、不待前期、謹差政堂省左允烏孝愼、令覲貴國者、准狀牒上、○十三日戊辰、備前國獲白雀一而獻之、○十五日庚午、下知山城國、充賻正一位源朝臣潔姬墓守家一戶、○十七日壬申、雷電雨雹、肥後國從四位上阿蘇比咩神列於官社、○十八日癸酉、授陸奥國正五位上勳五等日高見乃神從四位下、○十九日甲戌、從五位上行相摸權介藤原朝臣恒雄爲介、從五位下行陸奥守坂上大宿禰當道爲兼常陸權介、傳燈大法師位道詮奏言、法隆寺東院、是聖德太子所居、堂宇舊存、遺像是在、年祀稍久、破壞日加、請以大

ゆ
○伏望、伏は原本伏に作る、諸本に據て改む
○金魚脱佩云云、金魚は金魚袋、同月戊申紀一四七頁に出づ紫綬に親王の禮服
○銀驄、飾馬なり
○繡衣、漢書百官表に侍御史有繡衣直指、注に衣以繡者尊寵之也とあり
○國業親王、落髮の事齊衡三年四月戊戌紀に見ゆ
○本封舊、或云疑脱字
○拜上總太守、嘉祥二年閏十二月戊午なり
○舊府神、神名式和泉國和泉郡舊府神社、今泉北郡信太村
○聖神、同式同郡聖神社、所在同上
○比賣神、同式同國日根郡比賣神社、今泉南郡日根野村
○開食與止、與は世の誤なるべし下同じ
○郡司爾、爾は前本遠本に據て補ふ
○王啓曰云云、私記に此書文理多不通疑有脱誤と云
○即是、是は類史百九十四に此に作る
○使命、命は諸本及類史

に據て補ふ
○永展先親、展は重也下に注す
○禮將累代之情、將は承也奉也又進也又從也隨也とあり原本禮上に之字あり類史に據て削る
○恍續任風之影、續けて使者を遣すを云恍は原本悅に作る祕本に據て改む字書に恍は信也誠也とあり
○紀近盈年、豫て約せる年限に近づくを云近は諸本及類史に據て補ふ
○允增吉續、允は原本久に作る類史に據て改む
○朗海津於挂席、挂席は文選謝靈運遊赤石詩に揚帆采石華挂席拾海月注に揚帆挂席其義一也とあり船に帆を上けて海を渡らむと期するなり
○表翰信於傳心、書面を奉て赤心を傳へむとするなり二句共に倒裝法を用ひたり
○雲檣、檣は類史艢に作る
○以難窮、原本以窮の二字なし以は類史に據り窮は諸本及類史に據て補ふ
○代[illegible]限以巨濱、原本[illegible]を[illegible]に誤る[illegible]に、巨

和國平群郡私水田七町四段、施入彼院、以充修理堂舍、幷忌日轉念功德料、許之、○廿二日丁丑、屈八十僧、限以三日、於東宮轉讀大般若經、○廿六日辛巳、攝津國從五位下伴馬立天照神、伴酒著神、並授正五位下、伊勢國從五位下貴辨(キナヘノ)大神正五位下、紀伊國正六位上堅眞音(カタマネノ)神從五位上、○廿八日癸未、授出雲國正三位勳七等熊野坐神正三位勳八等杵築神、紀伊國從五位上熊野早玉神、熊野坐神、並從二位、山城國從五位下大川原國津神、有市(アリチノ)國津神、正六位上天照御門(アマテルミカドノ)神、並從五位上、○廿九日甲申、大雨、

選を臣僕に作る類史百九十四に據て改む
○烏孝憧、烏は原本馬に作る諸本及類史に據て改む下同じ
○占風、占は原本古に作る類史に據て改む
○期阻歲、阻は原本限に作る類史に據て改む
○罕過沃雲之水、原本罕なく沃を淩に作る類史に據て改め補ふ沃は灌也
○隔年、隔は原本擲に作る類史に據て改む
○近周廻之星紀、近は原本廷に作る諸本及類史に據て改む
○展親、魯語に古者分二同姓一以二珍玉一展レ親也、注に展重也とあり
○繼好、左傳襄四年に出づ
○善隣、左傳隱六年に親レ仁善レ隣國之寶也とあり
○賓禮、賓は通作レ示とあり類史實に作る
○從四位上阿蘇比咩神、正月甲申紀に出づ上は原本下に作る同紀に據て改む　○日高見乃神、神名式陸奥國桃生郡日高見神社今陸前國桃生郡桃生村大田、乃は諸本水に作る　○從五位上行相摸權介、行字は例に據て補ふ　○私水田、私は祕本尾本及紀略に據て補ふ　○伴馬立天照神、嘉祥二年十二月紀(續後紀三七七頁)に見ゆ伴馬立は原本新屋坐に作る諸本に據て改む　○員辨太神、神名式伊勢國員辨郡猪名部神社とある是なり　○堅眞音神、同式紀伊國名草郡堅眞音神社、今海草郡鳴神村鳴神社に合祀　○熊野坐神、諸本に坐字なし　○大川原國津神、式外、神祇志に在二北大河原村一　○有市國津神、式外、同志に在二上有市村一　○天照御門神、式外、同志に在二飛鳥路村一とあり以上三社並に山城國相樂郡にあり　○卷第二、原本二下に終字あり諸本に據て刪る

日本三代實錄卷第二

【貞觀元年】德繼王、此三字は諸本に據て補ふ
○舍人親王六代之孫、舍人親王より各王に至る世系詳ならず
○賜京邑、賜は塙本賑に作る
○月次神今食、月次祭班幣は神祇官に於て神今食は神嘉殿にて行はせらるゝ例さす然るに御親祭なきに依て班幣さ同じく神祇官にて行はせらるゝなり
○賜渤海國王勅書、類史百九十四に見え文字多少の異同あり
○忠孝由衷、衷は字書に中也誠也さあり衷心より忠孝なるを云ふ
○徽猷、毛詩小雅角弓章君子有徽猷、小人與屬さあり猷は類史に據て補ふ
○親仁、仁は原本王に作る秘本閣本尼本及類史に據て改む
○戴日之誠、李庾西都賦に千官就日萬品趨雲さあり
○利涉長期、易需卦に利涉大川さあるに據る
○顧深款、顧は原本願に作る諸本及類史に據て改

日本三代實錄卷第三

起貞觀元年六月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

六月乙酉朔、霖雨大水、○二日丙戌、正六位上秋岡王、秋雄王、良岡王、三常王、德繼王、德成王、無位廣貞王、廣益王、廣梁王、山村王、高隅王、清隅王十二人、並賜姓清原眞人、一品舍人親王六代之孫也、○四日戊子、霖雨未霽、賜京邑飢乏者、○十一日乙未、月次、神今食祭、並於神祇官行事、親王公卿參會、所司供事如常、○廿二日丙午、雷雨大風、折木發屋、○廿三日丁未、賜渤海國王勅書曰、天皇敬問渤海國王、書獻悉至、披覽具之、維王文武兼體、忠孝由衷、襲當國之徽猷、敦親仁之舊好、傾心久契、無疎就日之誠、利涉長期、不廢飛雲之嶮、乃顧深款、何摩增懷、先皇以去年八月昇遐、遺詔不許奔赴、朕以寡德、荷託鴻圖、奉先訓而聿脩、撫舊甿以自恤、雖則會同之禮、大喪無虧、延正之朝、春秋所美、然而闕庭過密、事須隔於

む
○奔赴、後漢書延篤傳に以師喪棄官奔赴とあり赴は訃なり
○馮闕、谷本闕に尾本馮の字闕け類史寔闕に作る闕は闕の譌にて類史是なるべし
○撫舊眈、眈は民なり原本撫を撰に眈を記に作る撫は類史に據り眈は諸本及類史に據て改む
○會同之禮、字書に古者諸侯以事來朝天子曰會衆見曰同とあり
○殷頻、周禮秋官大行人に殷覜以除邦國之慝注に謂一服朝之歲也云々以聘禮來覜天子天子以禮見之命以政禁之事所以除其惡行とあり類覜同じ
○有難、類史有艱に作る
○使者、使は原本傳に作る類史に據て改む
○迨期、期は原本朝に作る類史に據て改む
○間紀、間は原本問に作る類史に據て改む
○略此遺書、略は原本昆に作る類史に據て改む諸本は昆に作る
○指無一二、指は原本批に作る類史に據て改む

殷頻、邦國頻災、人有難於郵傳、緣此慰藉使者、迨期放還、間紀如賒、通情猶邇、今因孝愼、付送信物、仍舊辨裝、色目如別、熱劇、王及所部平安好、略此遺書、指無二一二、太政官送中臺省牒曰、得中臺省牒偁、奉處分、扶桑崇浪、日域遐邦、欲占風而拄席、期阻歲而寄音、泛々輕舟、罕過沃雲之水、劵々方寸、彌增披霧之情、所以隔年度日、天轉律移、想尋修之舊貫、近周廻之星紀、酌展親於古典、遵繼好於前章、憑事表情、善隣賓禮、戀懷轉切、不待前期、謹差政堂省左允烏孝愼、令覲貴國者、准狀牒上日本國太政官者、謹錄牒上、謹牒者、滄瀛不測、義在含弘、江漢可宗、禮存朝會、駿奔惟遠、來不及期、有司執平、弗肯容待、奉勅、孝愼等遙慕聲教、淩蹬闕而頻來、尋懷順皈、辭龍鄉以荐至、忠節之効、矜恤可量、況魯侯再朝、春秋無貶、唯國有兇喪、季屬荒侵、將全舊儀、何苦黎庶、宜殊加迎接、權停入都、在所安存、支賜准例、復吉凶相問、往迹所馮、若有意於弔來、事須拘於遺制、徒煩舟檝、將背時規、更待紀盈、當表隣好者、今因綸旨、撿校如常、修船畢功、風潮可駕、璽書信物、同附使廻、留彼篤誠、放其皈去、今以狀牒、々至准狀、故

牒、東絁五十疋、綿四百屯賜大使烏孝愼、孝愼別貢土宜、仍有此錫賚、爲、是日於東宮雅院始修法、限以十二日、○廿五日己酉、文章博士職田、元給四町、今加二町、○廿九日癸丑晦、大祓於朱雀門前、例也、

○秋七月甲寅朔、於右仗頭賜飲群臣、○四日丁巳、廣瀨龍田祭如常、○五日戊午、大和國從五位下氣吹雷神、從五位下響雷神、並列於官社、○七日庚申、筑後國從四位下豐比咩神列於官社、○十一日甲子、出雲國從五位下佐陀神、無位湯坐志去日女命、並授正五位下、○十三日丙寅、大祓於建禮門前、以明日將發奉諸神社幣幷財寶使也、詔、太政大臣藏法進左右大臣、幷停資人帶刀等、緣太政大臣抗表苦請也、又詔諸

○占風而排席、順風を測て出帆するを云原本占を古に作る閣本尾本谷本及類史に據て改む ○阻蔵、阻は原本限に作る諸本及類史に據て改む ○沃雲、沃は原本淩に作る諸本及類史に據て改む ○挙々方寸、挙々は忠勤の貌方寸は心を云 ○披霧之情、披霧は沃雲の對 ○隔年、隔は原本擲に作る類史に據て改む ○近周廻之星紀、近は原本延に作る類史に據て改む ○展親、親好を展ぶるなり繼好の對にて尙書旅獒に出づ ○馮事、馮は類史憑に作る ○善隣賓禮、上に注す ○烏孝愼、原本烏を馬に作る上文に據て改む下同じ ○含弘、易坤卦象傳に含弘光大とあるに據れり海の如き心を以て寬大なるべきを云 ○江漢可宗、尙書禹貢に江漢朝宗于海とあるに據れり ○朝會、諸侯の朝廷に會同するを云 ○駿奔云々、駿馬の足疾くして未だ期に及ばずして來るを云 ○容待、容は原本客に作る秘本閣本尾本及類史に據て改む ○遙墓、遙は類史遠に作る ○蜃闕、海を云漢書天文志に海旁蜃氣象樓台廣埜氣成宮闕とあるに據れり ○虎綁、蜃闕の對 ○荒侵、侵は類史饑に作る ○在所安存、在は類史に據て補ふ ○所爲若有意、原本所を可に作り有字なし類史に據て改め補ふ ○於遺制、原本於遺倒置す類史に據て改む ○者今因綸旨、者は原本右に作る類史に據て改む秘本閣本尾本等は古に作る ○風潮、潮は原本朝に作る諸本及類史に據て改む ○東絁五十疋、原本束を東に五十を十五に作る束は秘本閣本尾本に據り五十は諸本及類史に據て改む ○孝愼別貢土宜、原本孝愼の二字なく別を到に作る類史に據て補ひ改む土宜は土産のものを云

（七月）氣吹雷神響雷神、神名式大和國高市郡氣吹雷響雷吉野大國栖御魂神社二座（並名神大月次新嘗）とある是なり神祇志に所在雷土村とす ○列於官社、於字は閣本尾本谷本に據て補ふ ○豐比咩神、神名式筑後國三井郡豐比咩神社（名神大）、御井町國幣大社高良神社域内 ○佐陀神、同式出雲國秋鹿郡佐陀神社、今八束郡

國定額寺、堂塔破壞、佛經曝露、三綱檀越、無心修理、頃年水旱不時、疫癘間發、靜言其由、恐緣彼咎、宜下知五畿內七道諸國、修理部內諸寺堂塔、其料充寺家田園地利、若無田園者、勘錄支度帳言上、從四位上行備前守藤原朝臣春津卒、春津者左大臣正二位緒嗣朝臣之第二子也、春津風姿美麗、淸警寬雅、天長初、擢爲左近衛將監、七年遷皇太后宮大進、明年授從五位下、兼近江權介、數月授從五位上、承和元年遷爲備中權守、久而爲侍從、九年進正五位下、俄而拜右馬頭、十年春父左大臣抗表致仕、其第三表、以春津爲使、奉進內裏、勅曰、左丞相藤原朝臣公、先朝之元勳、而朕之舊德也、近功成名遂、老皈於第、朕以几杖禮優之、不敢負公之故也、右馬頭春津、是公之孝子、特授從四位下、以慰目前、嘉祥三年、丁母憂解職、未幾奪情起之、拜右兵衛督、仁壽初遷刑部卿、兼但馬守、尋加從四位上、齊衡四年爲但馬守、遷備前守、並不之官、春津家世貴顯、生而富實、居處閨庭、甚爲鮮華、性寡嗜欲、不貪財利、唯馬是好、時々觀之、里第養閑、不肯出仕、帝戲語左右曰、春津是南山之玄豹焉、卒時年五十二、〇十

佐夫付閉帶小社に列す
○湯坐志去日女命、式外所在詳ならず原本湯を闕に作る秘本閣本谷本に據て改む
○奉幣幷財寶使、蓋一代一度の大奉幣使なるべし
○又詔、詔は閣本尾本に據て補ふ
○定額、玄蕃寮式に凡東西寺三綱並以定額僧補之とあり
○春津卒、春津此には緒嗣二男とあれど尊卑分脈には第三子とす此人の事は天長十年十一月庚午紀に初て見ゆ
○左大臣、左は原本右に作る谷本淀本及下文に據て改む
○拜右馬頭、原本右上に爲字あり閣本尾本谷本に據て削る
○左大臣抗表致仕、此事承和十年正月庚戌紀（續後紀二五一頁）に見ゆ
○藤原朝臣公、原本臣下に緒嗣の二字あり秘本閣本尾本等に據て削る
○舊德、易訟卦に食舊德貞厲終吉とあり
○几杖禮、禮記曲禮に大夫七十而致事若不得謝則必賜之几杖とあり

○特授、原本特を侍に作る諸本に據て改む
○遷刑部卿、此事文德實錄に見えざれど天安元年正月癸丑紀に爲但馬守刑部卿如故とあれば此以前に刑部卿となりしなるべし
○深備前守、貞觀元年正月十三日庚午なり
○生而富實、尊卑分脈に日本第一富人名人也とあり
○玄豹、列女傳に陶荅子治陶三年名譽不興家富三倍婦曰妾聞南山有玄豹霧雨七日而不下食者何也欲以澤其毛而成文章也故藏而遠害（節略）とあるに據れり
○兩社使、兩字は諸本に據て補ふ
○從五位下守主殿權助、守字は閣本尾本谷本等に據て補ふ
○乙訓社、神名式山城國乙訓郡乙訓坐火雷神社
○右兵庫頭、右字は諸本に據て補ふ
○當麻社、神名式大和國葛下郡當麻都比古神社二座とあり淸和天皇外祖母源潔姬の外家當麻眞人の氏神なるに依て特に使を

四日丁卯、遣使諸社、奉神寶幣帛、參議正四位下行左大辨兼左衞門督美作守藤原朝臣氏宗爲賀茂御祖、別雷兩社使、散位從五位下正峯王爲松尾社使、正五位下守右中辨兼式部少輔大枝朝臣音人爲平野社使、從五位下守主殿權助藤原朝臣水谷爲大原野社使、右兵衞佐從五位下源朝臣至爲乙訓社使、從五位下守右兵庫頭藤原朝臣四時爲大神社使、掃部頭從五位上藤原朝臣貞敏爲石上社使、從四位下行兵部大輔藤原朝臣仲統爲春日社使、從五位下守圖書頭當麻眞人清雄爲當麻社使、中務少輔從五位下源朝臣包爲住吉社使、散位從五位下丹墀眞人繩主爲丹墀社使、少納言兼侍從從五位下良峯朝臣經世爲杜本社使、神祇大祐正六位上大中臣朝臣豐雄爲氣比、氣多兩社使、散位從五位下紀朝臣宗守爲日前、國懸兩社使、授平野正二位今木神從一位、從四位上久度神、古開神、並從三位、正五位下合殿比咩神從四位下、○十九日壬申、雷雨、震內教坊柿樹、○廿一日甲戌、存問兼領渤海客使直講苅田安雄復命奏言、客徒今月六日解纜返蕃、大內記安倍淸行、

遣されしなり
○丹墀社、神名式河內國丹比郡丹比神社
○杜本社、同式河內國安宿郡杜（古寫本には社とあり）本神社二座とあり當宗氏の祖神を祭る
○正二位今木神、二は原本三に作る諸本及正月甲申紀に據て改む
○苅田安雄、二月癸巳紀に據るに苅田の下首字あるべきかされど安倍清行にも朝臣の字なければ此は省けるなり
○雅院、文德紀（一頁）に注す
（八月）銚滅、銚は倒也刓也去角也
○山陰、原本山蔭に作る祕本谷本に據て改む
○陰陽博士、陰陽は原本陰陽に作る今閣本尾本淀本等に據る下同じ
○董仲舒祭法、詳ならず
○螟螣、毛詩小雅大田章の傳に食心曰螟食葉曰螣、抄蟲豸部に爾雅集注云螟（於保禰无之）食苗心曰螟とあり
○船岳、船岡山は京都の北にあり故に城北と云
○青馬、臨時祭式祈雨條に見ゆ

去四月丁父憂去職、故安雄獨廁奏事、依諒闇不喚客徒、自加賀國還蕃焉、○廿三日丙子、以從五位上守右少辨兼行中宮亮藤原朝臣家宗爲修理東大寺大佛長官、○廿七日庚辰、地震、○廿八日辛巳、河內國言、禾兩岐、是月、雅院櫻樹華、京中李樹皆華、○八月甲申朔、新鑄印一面賜美作國、以國司申請、舊印文字銚滅、不堪行用也、○三日丙戌、大雨、遣從五位下行備後權介藤原朝臣山陰、外從五位下行陰陽權助兼陰陽博士滋岳朝臣川人等、於大和國吉野郡高山、令修祭禮、董仲舒祭法云、螟螣賊害五穀之時、於害食之州縣內清淨處、解之攘之、故用此法、前年命陰陽寮、於城北船岳、修此祭、今亦於此修之、蓋擇清淨之處、○四日丁亥、下野國言、木連理、○七日庚寅、屈請六十僧於東宮、轉讀大般若經、限以三日、○八日辛卯、地震、勅、五畿七道諸國、年貢御鷹、一切停止、○九日壬辰、自五月至今月霖雨、仍遣使者於大和國丹生河上雨師社、奉幣青馬等、祈以止雨也、○十日癸巳、尙侍從三位當麻眞人浦虫薨、時年八十、浦虫者右京人也、父正六位上繼麻呂、浦虫弘仁七年任典殿、十三年

授從五位下、未幾遷爲掌侍、十四年授從五位上、天長五年授正五位下、爲典侍、九年授從四位下、承和八年授從四位上、嘉祥三年授正四位下、後年授從三位、天安元年任尚侍、浦虫爲人貞和、早標美譽、未嘗適於人、遂不知伉儷之道、自掌宮人之職、能脩禁內之禮式、○十二日乙未、大風雨交殺、京師人居、被風壞者多、○十三日丙申、授和泉國從五位下聖神從四位下、無位舊府神正五位下、比賣神從五位上、河內國無位飛鳥戶神正四位下、正六位上若倭彥命、若倭姬命、並從五位下、禁畿內畿外諸國司養鷹鷂、○十六日己亥、右京人散位從五位下高向朝臣公輔、元名桑田麻呂、而叙位告身、注名公輔、依公輔申請、除籍帳桑田麻呂字、○十七日庚子、上野國正六位上倭文神列於官社、○廿日癸卯、授上野國正六位上倭文神從五位下、○廿一日甲辰、皇太后屈請六十僧於雙丘寺、限五箇日、講法華經、奉爲田邑(文德)天皇、修周忌之齋也、群臣百僚皆悉參會、○廿五日戊申、出雲國俘囚正六位上吉彌侯黃海叙從五位下、○廿七日庚戌、於雙丘寺、修田邑天皇周忌御齋會、親王公卿參集、式部省點撿

○當麻浦虫甍、當麻眞人は錄右京皇別に用明皇子麻呂古王之後也とあり
○伉儷、字類に配遇也とあり
○交殺、殺は疾也原本接に作る諸本に據て改む
○聖神、以下二神は五月壬戌紀に注す
○飛鳥戶神　神名式河內國安宿郡飛鳥戶神社(名神大月次新嘗)、今南河內郡駒谷村壺井
○若倭彥命若倭姬命、同式同國大縣郡若倭彥命神社若倭姬命神社、今中河內郡堅下村
○倭文神、同式上野國那波郡倭文神社、今佐波郡宮鄉村
○雙丘寺、仁和寺の南にあり田邑陵と同地、此寺の事は天安二年十月甲辰紀に見ゆ
○百僚、僚は原本寮に作る諸本及紀略に據て改む
○吉彌侯、彌は原本禰に作る臨本谷本に據て改む
○黃海、[illegible]の弟子、[illegible]書十二に傳見え[illegible]に作る
○年分度者、年は閣本[illegible]本及類史紀略に據て補ふ
○[illegible]、[illegible]本[illegible]に

作る類史百七十九及紀略に據て補訂す三代格及編年記には賀茂名神とあり
○大安樂經、編年記に大安樂經一部卅八卷とあり
○春日神、格編年記には春日名神とあり
○皇覺、佛陀を云
○大士垂迹、大士も佛を云垂迹は佛が衆生を濟度する爲に其實身たる本地より種々の化身を現するを云 法華經科注に非本無以垂迹非迹無以顯本と見ゆ
○故能聖王、能は類史に據て補ふ
○調御、佛を云、十號の一に調御丈夫あり
○金輪陛下、須彌四洲を統領する王を金輪王或は轉輪王と云天皇を之に比す
○六牙、白象にて菩薩降下の時乘りて摩耶夫人の胎に入ると云因果經に爾時菩薩觀降胎時至即乘六牙白象發兜率宮とあり
○神跡、跡は類史に據て補ふ
○逮九歲云云、御年九歲にて即位し給ひしを云
○轉大法輪、敎法を說き

五位已上見參者、○廿八日辛亥、依十禪師傳燈大法師位惠亮表請、始置延曆寺年分度者二人、其一人爲賀茂神、可試大安樂經、加試法華經金光明經、一人爲春日神、可試維摩詰所說經、加試法華經金光明經、表曰、惠亮言、皇覺導物、且實且權、大士垂迹、或王或神、故能聖王治國、必賴神明之冥助、神道剪累、只憑調御之慧及、伏惟金輪陛下、乘六牙而降神跡、逮九歲而登九五、受佛付囑、轉大法輪、法門餘慶、還在于今歟、所謂維摩不二之典、盛演佛境不思之義、高貴四德之教、寔談佛性常住之旨、並斯如來護國利人之門、不可一廢者也、是以惠亮等、以去嘉祥三年八月五日、陛下在東宮日、經啓所願、已畢頃年殊垂恩感、每降誕日、臨時得度、于今八年、伏冀天慈幸降恩勅、不改素願、永歲三月下旬、於玆叡山西塔寶幢院、將試度之、然後准弘仁十四年官符、令受大戒、其受戒之後、依先師式、十二年不出山門、一日不闕、長講件經、利益名神、奉護聖朝、惠亮等師資相承、修此佛業、盡未來際、擁護國家、但件人等、得業以後、僧中諸事、准天台眞言等宗、一同用之、然則開闢以來仙靈、開覺性而遊妙覺、我朝以後

て邪を破り正を開くを云
○所謂、所は原本可に作る諸本及類史に據て改む
○維摩不二之典、維摩經は維摩種々の神通を示して不可思議解脫の相を顯し無往の本より一切法を建立し其森羅萬象を擧げて悉く不二の一法中に攝歸する法門を示す故に不二の典といひ佛境不思の義を盛に演ずと云
○不思之義、義は原本氣に作る類史に據て改む
○高貴四德之敎、高貴は高貴德王菩薩なり佛之に對して常樂我常の四德の妙理を說きしを云涅槃經高貴德王品(廿一至廿六)に見ゆ
○一慶、慶は原本度に作る類史に據て改む
○經啓、格は上啓に作る
○臨時得度云云、原本臨時の二字及今字なく得を且に作る臨時及得は類史及格に據り今は秘本閣本及類史に據て改め補ふ
○敍叡山、叡は原本比に作る諸本及格に據て改む
○不出山門、移本谷本山字なく閣本尾本は出山倒置せり
○作此傳業、修は諸本及

聖王、進醍醐而保常樂、非只諸神歲々增威、亦乃群生日々長福、持茲大善、集我皇明、伏願、長御紫宸、大敷玄德、壽固群岳、恩深四溟、次則資薰田邑聖靈、四流高謝、五智圓顯、龍天順風雨之期、率土樂昇平之化、然後豎窮三界、橫被四生、永謝迷津、超昇覺道、○廿九日壬子、大祓於朱雀門前、以心喪禮畢、始從常儀也、○九月癸丑朔、三日乙卯、停御燈潔齋、以有大嘗會事也、○四日丙辰、分頭遣使、奉幣賀茂御祖、別雷、松尾、貴布禰、乙訓、稻荷等神社、止霖雨也、○五日丁巳、左京人散位從五位上高原王賜姓三原朝臣、高原、一品新田部親王之後也、○八日庚申、山城國月讀神、木嶋神、羽束志神、水主神、樺井神、和岐神、大和國大和神、石上神、大神神、一言主神、片岡神、廣瀨神、龍田神、巨勢山口神、葛木水分神、賀茂山口神、當麻山口神、大坂山口神、膽駒山口神、石村山口神、耳成山口神、養父山口神、都祁山口神、都祁水分神、長谷山口神、忍坂山口神、宇陀水分神、飛鳥神、飛鳥山口神、畝火山口神、吉野山口神、吉野水分神、丹生川上神、河內國枚岡神、恩智神、和泉國大鳥神、攝津國住吉神、大依羅神、難波大社神、

廣田神、生田神、長田神、新屋神、垂水神、名次神等、遣使奉幣、爲風雨祈焉、○九日辛酉、停重陽節、以先帝忌景近也、於右仗頭賜菊酒群臣次侍從及非侍從堪言詩者、外記史內記預焉、酣暢之後、賦重陽菊酒詩、錄見在座者奏之、後日賜綿有差、此日大風暴雨、發屋折樹、○十日壬戌、大祓於朱雀門前、爲行大嘗會事也、依式、八月上旬可行、而以諒闇之內、延及于今日、遣使奉幣於伊勢大神宮、○十四日丙寅、地震、○十八日庚午、大風雷雨大殺、○廿一日癸酉、任大嘗會御禊裝束、及鹵簿次第等司、正三位行中納言源朝臣弘爲裝束司長官、從五位上守右少辨兼中宮亮藤原朝臣家宗爲次官、左大史正六位上菅野朝臣高松、大內記高階眞人菅根並爲判官、主典二人、正三位行中納言橘朝臣岑繼爲前次第司長官、中務少輔從五位下源朝臣包爲次官、中務大丞正六位上藤原朝臣善枝、式部大丞紀朝臣春常、並爲判官、主典二人、參議正四位下行左兵衛督兼伊勢守源朝臣多爲後次第司長官、兵部少輔從五位下源朝臣直爲次官、中務少丞正六位下藤原朝臣忠基、兵部少丞正七位下安

類史・格に據て補ふ
○仙靈、御歷代の天皇の神靈なり
○開覺性云云、佛陀の本性を悟て佛果を得るを云
開は諸本及類史に據て補ふ
○醍醐、涅槃經に「言醍醐者喩於佛性」とあり
○皇明、聖明に同じ明は原本朝に作る諸本及類史に據て改む
○四溟、溟は原本濱に作る諸本及類史に據て改む
○四流、見流・欲流・有流・無明流の四惑を云一切の有情は此四惑中に漂流す故に流と云
○五智、九識を轉じて得る五種の知慧、法界體性智大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作智是なり
○三界、欲界色界無色界
○四生、胎生・卵生・濕生・化生にて一切の生物を云
（九月）大嘗會事也、事也の二字は諸本及紀略に據て補ふ
○山城國月讀神、葛野坐月讀神社なり正月甲申紀に見ゆ以下諸神何れも祈雨八十五座神の中なり
○木嶋神、木嶋坐天照御

魂神社なり
○羽束志神、式山城國乙訓郡羽束師坐高御產日神社（大、月次新嘗）、羽束師村
○樺井神、樺井月神なり
○和岐神、和伎坐天乃夫支賣神社なり
○大和神、以下大和國の諸神は何れも正月甲申紀に見ゆ、養父山口神は夜支布山口神に同じ
○住吉神、已に注す
○大依羅神、以下攝津國の諸神は何れも正月甲申紀に見ゆ、難波大社神は難波生國魂神是なり
○在座者、座は原本坐に作る類史に據て改む
○折樹、樹は原本木に作る諸本及紀略に據て改む
○雷山大役、原本雨字なく、役を接に作る諸本及紀略に據て改め補ふ
○御裝束、御は諸本に據て補ふ
○裝束司長官、官は原本司に作る黑川校本に據て改む
○後次第司、後は原本從に作る樣本閣本尾本に據て改む
○高貞並爲判官、並は秘本閣本尾本に據て補ふ

倍朝臣高貞、並爲判官、主典二人、○卅日壬午、雨、大祓於八省院東廊、爲大嘗會近也、依雨行事、故用東廊、○冬十月癸未朔、日有蝕之、○二日甲申、於右仗頭賜飮親王已下、次侍從已上、錄見在坐者奏之、賜祿有差、○五日丁亥、卜定恬子內親王爲伊勢齋、儀子內親王爲賀茂齋、○七日己丑、畿內畿外諸國、遣使班幣於天神地祇、去九月祈無風雨之灾、誠有感徹、歲以有年、仍賽之、○武藏國從五位下磐井神列於官社、○十二日甲午、大祓於朱雀門前、以定伊勢賀茂齋內親王也、○十五日丁酉、天東南有異雲、中有赤色、如電光激、是日夜、神祇官於羅城門前、修祭事、爲大嘗會祭故也、○廿一日癸卯、爲來月將奉大嘗會、行幸鴨水、修禊事、例也、○廿三日乙巳、尙侍從三位廣井女王薨、廣井者二品長親王之後也、曾祖二世從四位上長田王、祖從五位上廣川王、父從五位上雄河王、廣井、天長八年授從五位下、任尙膳、嘉祥三年授從四位上、任權典侍、仁壽四年授從三位、天安三年轉尙侍、薨時八十有餘、廣井少修德操、擧動有禮、以能歌見稱、特善催馬樂歌、諸大夫及少年好事者、多就而習之焉、至于

殂沒、時人悼レ之、○廿八日庚戌、遣二散位從五位上並山王於伊勢大神宮一、告下以定二齋内親王一也上、上野國獻中嘉禾一莖三十穗、兩岐稻一莖九穗上、是日、鑄錢司進二新鑄錢一、奉二諸名神社幷諸山陵一、及頒二賜親王已下一各有レ差、○廿九日辛亥晦、地大震、○十一月壬子朔、陰陽寮奉レ進二明年御曆幷頒曆一、帝不レ御二前殿一、付二内侍一奏、○七日戊午、授二讃岐國正六位上城山神從五位下一、大藏少輔從五位下御長眞人近人爲二參河守一、○九日庚申、平野春日神祭如レ常、○十日辛酉、梅宮神祭如レ常、○十二日癸亥、地震、○十三日甲子、大原野神祭如レ常、○十四日乙丑、園韓兩神祭如レ常、○十五日丙寅、於二神祇官一修二鎭魂祭一、○十六日丁卯、車駕幸二朝堂院齋殿一、親奉二大嘗祭一、○十七日戊辰、未二鷄鳴一、大嘗宮祭禮既訖、天皇幸二豐樂院一、御二悠紀帳一、賜二宴群臣一、悠紀國獻レ物、移二御主基帳一、群臣移二就主基座一、悠紀國奏二風俗歌舞一、日暮、以二悠紀國所レ獻衣被一、賜二親王已下、五位已上、諸有二雜怠一、及内外官未レ得二解由一者皆預焉、是夜、天皇留二御豐樂殿後房一、文武百官侍宿、親王已下參議已上、侍二御在所一、琴歌神宴、終夜歡樂、賜二御衣一、○十八日己巳、天皇御二悠紀

（十月）於右仗頭賜飮、二孟旬なり
○恬子内親王、文德天皇第二皇女、今上御妹
○伊勢齋、齋は原本齊に作る閣本谷本及類史四に據て訂す下同じ
○儀子内親王、文德天皇第一皇女、今上御妹
○愍徹、徹は原本激に作る類史十一及紀略に據て改む
○磐井神、神名式武藏國荏原郡磐井神社
○於羅城門前修祭事、延喜臨時祭式に羅城御贖每レ世一行とあるも是なるべし羅城門は拾芥抄中末に是周之國門唐之京城門、西都謂二之明德門一東都謂二之定鼎門一今謂レ之羅城一其義未レ詳云々とあり
○修禊事、名目抄に卽位御禊大嘗會以上謂二之三箇之重事一とあり歌には豐のみそぎとよめり其儀貞觀儀式に詳なり大嘗會御禊日例に貞觀元年（己卯）十月廿一日癸卯御禊四條末とあり
○催馬樂歌、催馬樂は歌を主とする一種の聲樂なりもと路頭里巷の謠なりしが唐樂專ら行はるゝ世

さなりて其音調により人人の好尙に適ふべく譜を定て謠ひ遂に高貴の人の用ふる雅樂となりしなり歌字は秘本閣本尾本及紀略に據て補ふ
○少年好事者、原本年下に及あり紀略に據て削る
○進新錢、新は諸本及紀略に據て補ふ
○地大震、大は秘本閣本尾本及類史（百七十一）紀略に據て補ふ
（十一月）御曆幷頒曆、幷は原本等に作る諸本に據て改む
○付內侍、付は閣本尾本谷本等轉に作る
○城山神、神名式讃岐國阿野郡城山神社（名神大）今綾歌郡府中村
○乙丑、乙は原本已に作る諸本に據て改む
○朝堂院齋殿、悠紀主基兩殿なり大極殿前に設く故に朝堂院齋殿と云
○大嘗宮祭訖、宮は原本會に作る諸本に據て改む
○豐樂殿後房、卽ち清暑堂なり拾芥抄中末に清暑堂大嘗會五節於此所行之とあり
○神宴、[illegible]源抄に舊豐樂[illegible]

帳、賜宴群臣、主基國獻物、移御主基帳、群臣移座、乃主基國奏風俗歌舞、賜主基國所獻衣被、一如昨儀、是夜天皇留御、親王已下百官侍宿亦如昨、○十九日庚午、撤去悠紀主基兩帳、天皇御豐樂殿、廣宴百官、多治氏奏田舞、伴佐伯兩氏久米舞、安倍氏吉志舞、內舍人倭舞、入夜宮人五節舞、並如舊儀、宴竟賜絹綿各有差、諸司官人五位已上有雜怠、及諸國司就事入京、幷新除外吏過裝束程、未向任之輩、皆預之、但未得解由者、不在預限、詔曰、天皇我大命良萬止勅大命乎、諸聞給止宣、悠紀主基爾仕奉流二國乃國司等、日夜無怠事久務結利、勤之久仕奉爾依天治賜不、又仕奉人等中爾、其仕奉狀乃隨治賜人毛在、又御意乃愛盛爾治賜人毛一二在、故是以冠位上賜治賜波久止詔天皇大命乎、衆聞食止宣、進右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相階、加正二位、參議從三位行右衞門督兼備中守源朝臣融正三位、參議正四位下行左大弁兼左衞門督美作守藤原朝臣氏宗從三位、彈正大弼從四位下茂世王從四位上、無位棟良王從四位下、散位從五位下礒江王從五位上、無位久須繼王從五位

破撰古神樂歌、若是淸暑堂御神樂歟云云とあり
○天皇御位紀帳、儀式に巳日質明御悠紀帳、其儀一同辰日、未刻御主基帳、其儀同上、卽國司獻物韓櫃列于殿前庭、次供御膳云云（節略）とあり
○乃主基國、乃は原本及に作る寫本に據て改む
○風俗歌舞、其國風の歌舞なり
○廣宴百官、原本廣下に廂字あり諸本に據て刪る儀式に午日卯刻撤悠紀主基兩國帳、所司裝飾高御座、時刻皇帝出自淸暑堂、還御豐樂殿高御座とあり廣廂の事は見えず
○多治氏、貞觀八年二月丁卯紀を參看すべし
○田舞、延暦儀式帳に大神宮御田殖に田儛仕奉ること見ゆ依て田舞と云、田は原本由に作る諸本に據て改む
○久米舞、儀式に久米舞廿人二列而舞とあり起源は神武卽位前紀（紀上八六頁）に見ゆ
○吉志舞、儀式に安倍氏人奏吉志舞、人數行列等同久米舞とあり 吉志舞は續紀上（二四六頁）に始

下、從四位下行攝津守滋野朝臣貞雄從四位上、民部大輔正五位下豐前王從四位下、內藏頭從五位上兼行神祇大副中臣朝臣逸志、內藥正兼侍醫參河權介物部朝臣廣泉、肥後守藤原朝臣冬緖、紀伊守在原朝臣善淵、並正五位下、參河守從五位下御長眞人近人、散位大中臣朝臣楹雄、小野朝臣恒柯、美作介大中臣朝臣眞主、左馬頭兼行信濃介藤原朝臣秀道、備前守源朝臣穎、侍從源朝臣同、縫殿頭伴宿禰須賀雄、右兵衞佐源朝臣至、散位和氣朝臣巨範、圖書頭當麻眞人淸雄、權大外記兼上野權介滋野朝臣安成、左衞門權佐藤原朝臣廣基、陸奧守兼行常陸權介坂上大宿禰當道、並從五位上、外從五位下大和權介蕃良朝臣豐持、參河介壹志宿禰吉野、明法博士讃岐朝臣永直、尾張介菅野朝臣弟門、陰陽權助兼陰陽博士滋岳朝臣川人、大學助御船宿禰佐世、散位高橋朝臣文室麻呂、正六位上源朝臣撰、源朝臣治、左衞門大尉藤原朝臣國經、橘朝臣子善、藤原朝臣貞庭、式部大丞藤原朝臣安棟、右衞門少尉文室朝臣卷雄、右兵衞權大尉文室朝臣能雄、散位藤原朝臣岑人、橘朝

めて見ゆ
○倭舞、我國ぶりの舞の意、內舍人のみならず神祇官侍從大舍人等も舞ふを例とす
○宮人五節舞、原本宮人を奏の一字に作り舞字なし宮人は紀略に據り舞は秘本閣本尾本及紀略に據て補ふ
○諸國司、司は諸本に據て補ふ
○詔曰、此宣命儀式四に見ゆ
○務結利、結は原本給に作る諸本に據て改む
○仕奉爾、爾は原本木に作る閣本尾本谷本等に據て改む
○治賜波久止、止は諸本に據て補ふ
○備中守源朝臣融、以下左衞門督に至る廿七字は諸本に據て補ふ
○氏宗從三位、從は原本正に作る諸本に據て改む下文二年四月廿四日紀證さすべし
○久須繼王、須は諸本に據て補ふ
○善淵並正五位下、並字は閣本尾本谷本に據て補ふ
○以經、楓は原本楫に作

臣忠宗、木工權助笠朝臣弘興、大內記高階眞人菅棟、右近衛將監兼美作權大掾紀朝臣正守、丹波權掾百濟王俊聰、散位笠朝臣高人、內藏少允丹墀眞人石臣、主殿允車持朝臣廣眞、並從五位下、左大史正六位上菅野朝臣高松、少外記秦宿禰安雄、主計助飛鳥戶造豐宗、中宮少進長統朝臣三助、左近衛將監神門臣氏成、右近衛將監多臣自然麻呂、參河權掾大原宿禰河麻呂、美作掾佐伯直豐田麻呂、並外從五位下、日暮車駕還宮、○廿日辛未、詔曰、天皇我大命良萬止勅大命乎、衆聞給止宣、神祇官人等乎始天、大嘗會爾參出來天、仕奉流悠紀主基二國乃國司、郡司百姓、及司々人止毛、番上已上爾御物賜布、又悠紀主基兩國乃主典與利以下、國醫師爾至萬氏、及諸郡司主帳已上乃把笏者爾、位一階上賜治賜布、又悠紀國乃今年庸 物、主基國乃今年田租免賜布、兩國乃卜相郡司爾波、特御物賜波久止宣、神祇伯大副、及二國齋郡少領已上、加賜馬各一疋、○授正四位下源朝臣全姬從三位、無位爲子女王、憙子女王、異子女王、並從四位下、從四位下伴宿禰友子從四位上、無位源朝臣盈姬從

る諸本に據て改む
○和氣朝臣巨範、巨は秘本尾本に據て補ふ
○當麻眞人、當は宮本及元年二月己亥紀・二年正月丁卯紀に據て補ふ
○永直、直は諸本眞に作るは非なり四年八月十七日癸丑紀證とすべし
○菅棟、棟は元年九月癸酉紀・二年正月丁卯紀には根に作る
○車持朝臣、天武紀十三年十一月條に車持君賜姓曰朝臣、また天平九年正月紀に車持公長谷賜朝臣姓などと見ゆ是と同族なるべし、此氏人は元慶六年十二月癸亥紀に據るに後世殿部として奉仕せり
○河麻呂、河は閣本尾本谷本等に據て補ふ
○豐田麻呂、田は諸本に據て補ふ
○番上、上は原本士に作る秘本閣本尾本等に據て改む
○齋郡、郡は原本部に作れるを改む齋郡卽ち悠紀主基の兩郡なり
○憙子、憙は原本意に作る諸本に據て改む貞觀九年四月庚午紀に女御とな

四位下、從五位上菅原朝臣閑子、甘南備眞人伊勢子、並正五位下、從五位下田口朝臣館子、菅原朝臣勢子、並從五位上、外從五位下賀陽朝臣姑子、無位源朝臣高子、橘朝臣常子、藤原朝臣繼子、藤原朝臣高子、藤原朝臣榮善子、百濟王香春、笠朝臣遠子、並從五位下、從六位上江沼臣河子外從五位下、○廿二日甲戌、大雨雪、○廿九日庚辰、雪未止、○卅日辛巳、大祓於朱雀門前、大嘗祭解齋也、○十二月壬午朔、十一日壬辰、月次神今食祭如常、○十四日乙未、授信濃國無位守達神從五位下、淡路國正六位上湊口神從五位下、○十八日己亥、延屈六十僧於東宮、限以三日轉讀大般若經、幷修佛名懺悔、○廿一日壬寅、正三位行中納言兼右近衛大將源朝臣定、正三位行中納言源朝臣弘、並爲大納言、定右近衛大將如故、從四位上守大藏卿兼行因幡守淸原眞人岑成爲參議、正五位下守右中辨兼行式部少輔大江朝臣音人爲權左中辨、式部少輔如故、正五位下行肥後守藤原朝臣冬緒爲右中辨、參議正三位行皇太后宮大夫兼伊豫權守伴宿禰善男爲民部卿、餘官如故、正五位下行紀伊

るこゝ見え意を嘉に作る同十年正月癸卯紀及大日本史亦同じ
○姑子、姑は原本始に作る諸本に據て改む
○藤原朝臣高子、長良の第二女にして二條后に坐す貞觀八年十二月戊戌女御さあり陽成天皇を生み奉る高は原本喬に作る諸本に據て改む
○並從五位下、下は原本上に作る黑川校本に據て改む
○河子外從五位下、外は諸本に據て補ふ
〔十二月〕月次神今食祭如常、原本次下に祭字あり諸本及類史九に據て削る
○守達神、神名式信濃國水內部守田神社、古間村
○湊口神、同式淡路國三原郡湊口神社、湊村
○宗右近衞大將如故、定は諸本に據て補ふ
○大江朝臣、江は貞觀八年十月丙戌紀に據るに當に枝に作るべし
○高神、高は原本喬に作る諸本に據て改む
○參議右大辨、右は原本左に作る三年正月戊子紀に據て改む

守在原朝臣善淵爲大和守、散位從五位下佐伯宿禰子房爲武藏權介、從五位下藤原朝臣貞庭爲上總介、遠江守從五位下藤原朝臣眞冬爲常陸介、正三位行權中納言平朝臣高棟加陸奧出羽按察使、參議右大辨從四位上兼行左近衞中將勘解由長官近江權守藤原朝臣良繩爲備前守、右大辨左近衞中將勘解由長官並如故、散位從五位下文室眞人益善爲紀伊守、○廿二日癸卯、從四位上行攝津守滋野朝臣貞雄卒、貞雄者右京人也、父從五位上家譯、延曆十七年改伊蘇志臣、賜滋野宿禰、弘仁十四年改宿禰賜朝臣、貞雄、是家譯之第三子也、身長六尺餘、雅有儀貌、幼遊大學、頗閑詞賦、弘仁七年爲主殿少屬、累遷掃部權允、右衞門少尉、嵯峨天皇徵貞雄延侍、恩寵稍密、自右衞門少尉遷掃部助、兼左近衞將監、天長四年授從五位下、除備前權介、承和五年改權爲正、其年授從五位上、拜少納言、兼侍從、十二年出爲丹波守、加正五位下、嘉祥三年授從四位下、拜但馬權守、天安二年爲攝津守、貞觀元年進從四位上、女從五位上岑子、文德天皇納之、誕二皇子二皇女、並賜姓源朝臣、貞雄

○右大辨左近衞中將、原本右を左に作り左字なし上文に據て改め補ふ
○勘解由長官、私記に或云考上文二月己亥、南淵年名爲勘解由長官、蓋代眞繩而爲之、此書勘解由長官如故誤ると云
○延侍、延或は近字の訛か
○加正五位下嘉祥三年云云、以下爲攝津守に至る迄は私記に或云按續日本後紀・文德實錄、貞雄承和九年叙正五位下、仁壽元年爲但馬權守、又按上文、是年五月庚午條爲攝津守、此所書皆誤ると云
○與物無競、文選與山巨源絕交書に至性過人與物無傷注に聖人處物不傷物者物不能傷也とあるに據れり
○年六十五、年は秘本閣本尾本及紀略に據て補ふ
○伊勢齋、齋は原本齋に作る閣本谷本及類史五に據て改む下同じ秘本には齋下に宮字あり
○荷前幣、公事根源に荷前とは十陵八墓に年のおはりに幣帛を奉らせ給ふ云々とあり
○下刑部省妄引赦書、原

職歷數國、殊迹無聞、爲性仁愛、與物無競焉、卒時年六十五、○廿五日丙午、伊勢齋恬子內親王、於鴨水邊六條坊門末修禊、賀茂齋儀子內親王、於同水邊待賢門末修禊、並入初齋院、○廿七日戊申、大臣奉勅、於建禮門前、行荷前幣之事、○太政官論奏言、前越後守從五位上伴宿禰龍男、令從者公彌侯廣野等、毆殺書生物部稻吉、前者稻吉向太政官、告訴守龍男犯用官物、故殺之狀、下刑部省、令斷龍男罪、省稱會恩赦、直從放免、前豐後守從五位下石川朝臣宗繼、寃奪百姓財物、介外從五位下山口宿禰稻床等證之、下刑部省、妄引赦書、擅從原免、前左馬權少允正六位上淸岑朝臣田繼、少允從六位上紀朝臣令名、少屬正六位上安倍朝臣有之、從六位上麻續部淸道、史生從六位上田邊史宅主、騎士余廣主、恩智貞吉等、以私馬換官馬、省亦無所考訊、皆以赦免、刑部大丞正六位上藤原朝臣飽永、少錄從七位下秦忌寸秋野、前少輔從五位上源朝臣穎、大錄從七位上布瑠宿禰道永等、從大丞丹墀眞總言、放出罪人、前日向守從五位下嗣岑王謀殺詔使正五位下田口朝臣房富等、須詳加覆

本省下に更に省字あり秘本及類史八十七に據て刪る
○丹墀眞總、眞は原本貞に作る下文及類史に據て改む
○優典、典は原本曲に作る類史に據て改む
○如常儀、類史七十四に常を當に作る

案者也、帝特降優詔曰、龍男宗繼及左馬寮官人等所犯、年遷時變、人物改易、飽永等罪、成自眞總、情有可矜、宜申優典、並從原宥、但刑部大丞正六位上兼中判事丹墀眞人眞總確執非法、故縱罪人、仍官當解任、嗣岑王依先斷、官當免爵、○卅日辛亥、大祓於朱雀門前、并大儺、如常儀、

〇卷第三、卷字は尾本に據て補ふ

日本三代實錄卷第三

〇時平等、等字は祕本尾本谷本等に據て補ふ

【貞觀二年】于時天皇御東宮、御卽位以來東宮にましまし、此時も東宮を以て御殿とし給ひしなり

〇明哲、哲は類史百七十七に晳に作る

〇齋講、講は類史會に作る

〇奉參御在所、類史は御在所を内殿に作り奉上に以字あり

〇論義施被、類史義を議に作り施被の二字なし

〇如常、類史此下に儀字あり

〇行民部卿、行字は祕本閣本尾本等に據て補ふ

〇善繩、補任に祖財麻呂、父豐雄本姓猪名部造と見ゆ傳は十二年二月辛丑紀に詳なり

日本三代實錄卷第四

起貞觀二年正月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

(庚辰)二年春正月壬子朔、天皇不受歳賀、雨也、御前殿、賜宴侍臣、賜御被、所司各奉職、奏七曜曆、藏氷厚薄、腹赤魚、擧音樂、並如舊儀、于時天皇御東宮、是日廢朝賀、故宴於前殿、〇四日乙卯、所司獻剛卯杖、天皇不御前殿、付内侍奏、〇七日戊午、車駕幸豐樂院、觀覽青馬、賜宴奏樂、賜祿如舊儀、〇八日己未、於大極殿、始講最勝王經、如常、以藥師寺僧花嚴宗傳燈大法師位明哲、爲講師、〇十四日乙丑、大極殿齋講畢、僧綱引名僧、奉參御在所論義、施被如常、〇十六日丁卯、踏歌之節、天皇御前殿、賜宴奏樂、踏歌如常儀、是日、以參議正三位行民部卿兼皇太后宮大夫伊豫權守伴宿禰善男、爲中納言、民部卿皇太后宮大夫如故、從四位上行伊豫守春澄朝臣善繩爲參議、散位從五位上小野朝臣千株爲内匠頭、從五位下

行上總介藤原朝臣貞庭爲大藏少輔、散位正五位下弘宗王爲左京大夫、從五位下行駿河介坂上大宿禰瀧守爲山城介、左京大夫從四位下紀朝臣今守爲攝津守、圖書頭從五位上當麻眞人淸雄爲伊賀守、外從五位下行音博士上毛野朝臣永世爲尾張介、從五位下行大内記高階眞人菅根爲遠江守、外從五位下行侍醫興道宿禰名繼爲駿河介、侍醫如故、散位從五位下佐伯宿禰眞利爲甲斐守、從五位上平朝臣春香爲武藏介、從五位下和氣朝臣春生爲上總權介、從五位下藤原朝臣大野爲介、參議正三位行右衞門督源朝臣融爲近江守、右衞門督如故、從五位下守左近衞少將兼行上總權介藤原朝臣良尙爲權介、少將如故、二品行彈正尹賀陽親王爲常陸太守、彈正尹如故、二品行兵部卿忠良親王爲上野太守、兵部卿如故、散位從五位下橘朝臣信蔭爲出羽守、從五位下豐住朝臣永貞爲若狹守、從四位上淸原眞人長田爲加賀守、從五位下行造酒正伊統宿禰福代爲介、左京亮從五位下淸原眞人眞貞爲越後守、散位從五位下藤原朝臣興世爲但馬介、左近衞少將正五位下

○行大内記、行は諸本に據て補ふ
○爲近江守、常陸太守と順序違へり
○豐住朝臣、住は原本任に作ノ承和十四年正月甲辰紀・天安元年正月癸丑紀に據て改む
○伊統宿禰、統は原本流に作る諸本に據て改む

○起之、起は原本赴に作る例に據て改む
○帝座、座は原本坐に作る類史に據て改む
○書中不、書は原本曹に作る諸本及類史に據て改む
○諸人、閣本前本淀本等諸な朋に作り尾本明に作る
○效此、效は原本効に作る細本に據て改む
○內宴、公事根源に內宴と申はうちくの節會なり仁壽殿にておこなはる文人ども題を給り詩を作てやがて御前にて詠ぜらるゝとあり承和三年正月庚申紀、仁壽二年正月己丑紀に見ゆ
○敬滿神、仁壽三年十一月癸丑紀に見ゆ

良岑朝臣清風爲播磨權介、少將如故、從五位下行備中介朝野朝臣貞吉爲守、散位從五位下內藏朝臣高守爲介、從五位下藤原朝臣貞高爲讃岐介、參議從四位上守大藏卿兼行因幡守淸原眞人岑成爲大宰大貳、散位從五位下藤原朝臣眞數爲少貳、右近衞中將從四位下源朝臣興爲筑前守、興去年正月兼筑前守、母憂去職、今以本官起之、從五位上行大宰少貳小野朝臣貞樹爲肥後守、外從五位下行少外記秦宿禰安雄爲豐後介、散位從五位下藤原朝臣雄瀧爲日向守、○十七日戊辰、天皇幸豐樂院、觀射禮、○十八日己巳、車駕幸豐樂院、觀賭射、左右近衞少將侍帝座、東西、書中不如舊儀、凡御豐樂殿覽賭射之時、左右近衞少將各一人、相分昇侍帝座、高御座、東西、書諸人射的中不、他皆效此、○廿一日壬申、天皇內宴近臣、如常儀、凡每年正月廿一日、天子內宴於近臣、喚文人賦詩、預席者不過四五人、內敎坊奏女樂、親王公卿、及文人殿上六位已上賜綿、各有差、他皆效此、○廿七日戊寅、詔越前國氣比神宮寺、置十僧爲定額、隨闕補之、授遠江國從四位下敬滿神正四位下、正五位下

茢原河內神、小國神、從五位下鹿苑神、並授從四位下、從五位上矢奈比賣神、眞知乃神、並正五位上、美作國正五位下中山神從四位下、散位外從五位下大秦公宿禰此雄爲出雲介、○二月壬午朔、三日甲申、春日祭如常、○四日乙酉、祈年祭如常、○五日丙戌、信濃國正六位上馬背神、廳別神、妻科地神、無位駒弓神、出速雄神、並授從五位下、○六日丁亥、釋奠如常、直講從六位下茢田首安雄講毛詩、文人賦詩、○八日己丑、進肥前國從四位下田嶋神階加從四位上、授從五位上荒穗天神正五位下、從五位下豫等比咩天神、久治國神、天山神、志々伎神、溫泉神、並從五位上、正六位上金立神從五位下、○十日辛卯、大原野祭如常、從五位上行大學博士大春日朝臣雄繼、以孝經奉授天皇、正五位上行大學頭豐階眞人安人爲都講、正五位下守權左中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人、正五位下守右中辨藤原朝臣冬緒等預席、○十一日壬辰、公卿於太政官曹司廳、列見文武官成選之人、正五位下良岑朝臣親子、從五位下藤原朝臣有子、並進階級、加從四位下、授從五位下藤原朝臣宜子正

○茢原河內神、神名式遠江國周知郡芽原川內神社とある是なり神字は宮本及式に據て補ふ茢は谷本淮本茢に作る茢も名義抄にカルと訓み茢に同じ
○小國神、承和七年六月（續後紀一七四頁）に見ゆ
○鹿苑神、嘉祥三年七月丙戌紀に見ゆ
○矢奈比賣神、承和七年六月戊辰紀に見ゆ原本比字なし同紀及式に據て補ふ
○眞知乃神、神名式遠江國佐野郡己等乃麻知神社とあり又コトノマヽの社とも云今小笠郡に屬す
○中山神、同式美作國苫東郡中山神社（名神大）今苫田郡一宮村、國幣中社に列す、中は原本仲に作る諸本に據て改む
（二月）馬背神、式外、所在未考、背は原本皆に作る諸本及七年三月甲辰紀・九年三月辛亥紀に據て改む
○廳別神、同上
○妻科地神、神名式信濃國水內郡妻科神社、今長野市妻科
○駒弓神、同式同國小縣郡子檀嶺神社、今武石村

小澤根
○出速雄神、式外、神祇志に今在諏訪郡西山田村稱出早雄こ見ゆ雄は元慶二年二月癸酉紀に據て補ふ
○苅田首、首は諸本に據て補ふ
○田嶋神、元年正月甲申紀に見ゆ
○荒穗天神、神名式肥前國基肄郡荒穗神社、今三養基郡基山村宮浦、穗は原本係に作る式に據て改む
○豫等比咩天神、同式同國佐嘉郡與止日女神社、今佐賀郡川上村、天は原本大に作る諸本に據て改む
○久治國神、式外、所在未詳
○天山神、式外、神祇志在小城郡晴氣村天山嶽
○志々伎神、同式同國松浦郡志志岐神社、今北松浦郡志々岐村
○溫泉神、式外、神祇志在高來郡小濱村溫泉山
○金立神、式外、同志在佐賀郡金立村
○大春日朝臣、大は齊衡三年八月丁酉紀と閏十月己巳紀に據て補ふ

五位下、無位水取連夏子從五位下、正六位上和久勝清子外從五位下。從三位源朝臣全姬爲尙侍。○十四日乙未、請六十僧於東宮、限三箇日、轉讀大般若經。散位從五位下正岑王爲大監物、從五位下橘朝臣岑範爲圖書頭、彈正少弼從五位下平朝臣實雄爲式部權少輔、二品行彈正尹兼常陸太守賀陽親王爲治部卿、常陸太守如故、防葛野河使散位從五位下佐伯宿禰眞持爲玄蕃頭、散位從五位下藤原朝臣緒數爲諸陵頭、從五位上安倍朝臣眞行爲刑部大輔、治部卿正四位下源朝臣生爲大藏卿、外從五位下行侍醫兼駿河介興道宿禰名繼爲醫博士、餘官如故、散位外從五位下春道宿禰永藏爲造酒正、四品行上總太守本康親王爲彈正尹、上總太守如故、散位從五位下藤原朝臣安棟爲少弼、從五位下藤原朝臣大野爲左京亮、大監物從五位下安倍朝臣有道爲右京亮、正五位下行內藥正兼侍醫參河權介物部朝臣廣泉爲參河權守、內藥正侍醫如故、散位從五位下和氣朝臣春生爲遠江權介、從五位上伴宿禰龍男爲上總介、鎭守將軍從五位下坂上大宿禰高道爲權介、散

位外從五位下神門臣氏成爲下總介、從五位上豐井王爲但馬權守、左馬頭從五位上淸原眞人秋雄爲介、左馬頭如故、散位從五位下藤原朝臣興世爲因幡守、從五位下小野朝臣春枝爲鎭守將軍、○廿五日丙午、僧正傳燈大法師位眞濟卒、眞濟者俗姓紀朝臣、左京人也、祖正五位下田長、父巡察彈正正六位上御園、眞濟少年出家、學大乘道、兼通外傳、夙有識悟、從大僧都空海、受眞言教、大師海公、鑒其器量、特加提誘、遂授兩部大法、爲傳法阿闍梨、眞濟時年廿五、時人奇之、眞濟入愛當護山高尾峰、不出十二年、嵯峨天皇聞其苦行、爲內供奉十禪師、承和之初、遣使聘唐、眞濟奉朝命、隨使渡海、中途漂蕩、船舶破裂、眞濟纔駕一筏、隨波而去、泛々然不知所到、凡在海上廿三日、其同乘者卅餘人、皆悉餓死、所活者眞濟與弟子眞然二人而已、眞濟唯佛是念、自然不飢、豈非如來冥護之所致哉、南嶋人遙望海中、每夜有光、恠而尋之、極得著岸、皮膚腐爛、尸居不動、嶋人憐愍、收而養療、遂得歸本朝、仁明天皇擢爲權律師、文德天皇甚見尊重、爲權少僧都、未幾轉權大僧都、少頃爲僧正、於是眞濟抗表

○和久勝淸子、和久勝は出自未詳、勝とあるに據れば蕃別なるべし丹波國天田郡に和久鄕あり和久は之によれるか
○全姬、全は諸本に據て補ふ
○從五位上伴宿禰、上は原本下に作る齊衡元年正月壬辰紀及元年十二月戊申紀に據て改む
○鎭守將軍、原本守下に府字あり諸本に據て削る下同じ
○眞濟卒、傳は元亨釋書三にも見ゆ
○眞濟者、者は閣本尾本及紀略に據て補ふ
○左京人、左は紀略右に作る
○田長、田は原本由に作る諸本に據て改む
○御園、園は釋書國に作る恐くは非
○識悟、識は原本職に作る諸本に據て改む
○纔駕、纔は原本終に作る諸本に據て改む
○隨波而去、而は諸本に據て補ふ
○泛々然、泛は原本泣に作る諸本に據て改む
○唯佛是念、佛は諸本に據て補ふ

○極、拯に作るべきか
○收而養療、收は諸本に據て補ふ
○爲權少僧都、仁壽元年七月丁亥紀に少僧都とあり權字なし
○爲僧正、齊衡三年十月戊子なり
○贈空海法師、天安元年十月丙戌紀に見ゆ贈は原本賜に作る諸本に據て改む
○五重寶塔、五は諸本一に作る
○高尾峯神護寺、山城國葛野郡梅畑村にあり峯は尾本前本谷本等岑に作る
○大漸、疾甚劇しきを云
○時論嗷々、何に因れるか此事文德紀に見えず同紀には八月辛亥今宵天皇倉卒有不豫之事近侍男女騷動失精とも見ゆ
○大藏神、式外、神祇志に在品治郡今同村
○神田神、式外　同志に在安那郡山野村
〔三月〕建部神、神名式近江國栗太郡建部神社名神大、勢田村神領に在り官幣大社に列す
○美馬郡、美馬は倭名抄に美萬と訓り、今も同じ
○三好郡、三好は抄に美

請以僧正位、讓先師空海、中心懇切、至于再三、天皇感徹、贈空海法師、以大僧正位、緇徒榮之、眞濟表請、建五重寶塔於高尾峯神護寺、造五大虛空藏菩薩像、安置塔中、置七口僧及度年分三人、春秋二季、永設法會、轉讀虛空藏十輪等經、以鎭護國家也、守其遺跡、至今修之、天安二年八月、文德天皇寢病、眞濟侍看病於冷然院、大漸之夕、時論嗷々、眞濟失志隱居、遷化時年六十一、○廿八日己酉、授備後國正六位上大藏神、神田神、並從五位下、○廿九日庚戌晦、雷雨晦合、○三月辛亥朔、近江國建部神列於官社、○二日壬子、割阿波國美馬郡、置三好郡、○三日癸丑、御燈齋潔如常、○七日丁巳、詔以武藏國正稅穀四百斛、上野國二百斛、賜傳燈大法師位圓仁、於彼國應賽宿禱、故有此賚、○廿日庚午、從五位上行參河守御長眞人近人爲越後守、散位從五位上並山王爲紀伊守、從五位上行紀伊守文室眞人益善爲豐前守、薩摩國從五位上開聞神加從四位下、從五位下志奈毛神、白羽火雷神、智賀尾神、賀紫久利神、鹿兒嶋神、並授從五位上、正六位上伊尒色神從五位下、○廿五日乙亥、特有勅、

與之と訓り、今も同じ
○圓仁、釋書卷三に傳あり
○懸賽、賽は原本寒に作る諸本に據て改む
○開聞神、神名式薩摩國穎娃郡枚聞神社、今揖宿郡穎娃村十町、國幣小社に列す
○志奈毛神、式外、神祇志に在薩摩郡隈城鄉宮里村
○白羽火雷神、式外、同志に在同郡平佐鄉白羽村
○智賀尾神、式外、同志に在日置郡伊集院鄉嶽村
○賀紫久利神、仁壽元年六月戊午紀に見ゆ
○鹿兒嶋神、式外、神祇志に在鹿兒嶋郡澤牟田村
○伊爾色神、式外、同志に在鹿兒嶋郡伊敷村
○特有勅、特は原本時に作る諸本に據て改む
○舞踏、舞は諸本儛に作る拾芥抄中末に舞踏事再拜(置笏)立左右左居左右左(取笏小拜)立再拜とあり
○良繩、繩は倘の誤なるべし良倘の傳は元慶元年三月辛亥紀に見ゆ按に良

免除太政官廚借大藏省錢七百卌四貫、絹六十九疋、綿八萬四千三百卌屯、絲一千八百斤、調布一萬三千六百端、商布一萬九千八百廿六段、鐵一百廷、公卿已下、辨大夫已上、於左仗頭拜賀舞踏、○廿九日己卯、迅雷暴雨、右京一條三坊地壹町、賜從五位上小野朝臣千株、從五位下藤原朝臣良繩等、○夏四月辛巳朔、帝御南殿、賜宴侍臣、次侍從被召侍右仗下、左右近衛府遞奏音樂、日暮酒酣、親王公卿促席御前、各奏絲竹、坐歌起舞、非侍從及外吏五位未得放還、幷外記史內記六府將監尉以下、門部以上、預見參者、賜祿各有差、參議以上別加賜御衣、夜分之後、盡歡而罷、是日、詔以從五位上藤原朝臣廣基、從五位下源朝臣有、爲次侍從、○四日甲申、平野廣瀨龍田等祭如常、○五日乙酉、梅宮祭如常、○六日丙戌、殞霜殺草、○八日戊子、內殿灌佛如常、詔東大寺、大毘盧遮那佛會事、惣聽修理大佛檢校修行傳燈賢大法師眞如處置、又詔二品治部卿賀陽親王、大納言正三位源朝臣弘、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男等、勾當供養大佛會事、○十一日辛卯、廻飈

縄此時既に右大辨從四位上左近衞中將なれば此人に非ざること明なり
（四月）促席、字書に促は迫也近也とあり
○坐歡起舞、坐は原本笙に作る諸本に據て改む
○眞如、平城天皇皇子高岳親王、大同四年四月立太子、弘仁元年九月廢せられて出家し給ふ
○廻飆、抄天地部に文選詩云廻飆卷高樹（和名豆无之加世）兼名苑注云飆者暴風從下而上也とあり飄は爾雅に回風爲飄とあり飄飆音同じければ相通ずるなるべし
○齋内親王、齋は原本齊に作る諸本及類史五に據て改む
○禹能子、子字は諸本に據て補ふ
○玄宗仁王般若云云、仁王護國般若波羅蜜多經卽ち仁王經を云玄宗は佛敎、大乘滿字は涅槃經に大乘經を悉曇章の滿字（半字の根本にして文字の具足せざるものを半字、餘の文字を滿字と云）に譬へし故大乘經の意に用ひたり
○波斯匿王云云、仁王經

起外記候廳前、旋轉西行、小虫無萬數、飛散其中、是日詔、准據承和仁壽舊跡、新錢三萬賜侍從廚、○十五日乙未、六府警固、緣賀茂祭也、○十七日丁酉、賀茂祭如常、齋内親王未入野宮、故不向社、○十八日戊戌、諸衞解嚴、○十九日己亥、詔五畿七道諸國、令境内僧尼誦佛頂尊勝陀羅尼、日滿廿一遍、毎至年終、具錄言上、自今以後、永爲歲事、以爲國祈也、○廿二日壬寅、地震、○廿四日甲辰、從五位下藤原朝臣禹能子授從四位下、無位藤原朝臣度茂子從五位下、○廿五日乙巳、皇太后遷自右大臣西京第、御東五條宮、授從五位上行右近衞權少將兼周防權守藤原朝臣常行正五位下、常行右大臣（良相）之第一男也、新鑄印一面、賜尾張國、○廿九日己酉晦、設齋會、講仁王經、起自京師、爰及諸國、惣百高座焉、咒願文曰、實知、玄宗仁王般若大乘滿字護國祕藏、波斯匿王對揚之主、無上世尊演說之師、文言超卓、理致幽深、辨明五忍、發揮二諦、道濟群品、不宰其功、化惣萬流、莫知其用、防灾劾禍、寔是昭彰、司契握裒、誰不崇重、聖皇出震、景命惟新、漢昭謝明、周成慙德、亭毒無私、財成不測、慈覃鳥獸、恩

は佛波斯匿王に對し正法を演說し王此經を讃歎奉持す故に斯く云
○五忍、仁王經所說にして伏忍・信忍・順忍・無生忍・寂滅忍是なり
○二諦、仁王經所說の世諦第一義諦卽ち眞俗の二諦を云
○昭彰、類史旼數に作る
○司契、老子七十九章に有德司契とあり
○握裒、初學記に孝經援神契曰舜手握裒宋均注曰握裒手中有裒字（節略）とあり
○出震、易說卦傳に帝出乎震とあり
○漢昭謝明云云、漢書昭帝紀贊に成王不疑周公孝昭委任霍光各因其時以成名とあり　昭帝成王共に幼主にて霍光周公をして攝政せしむ宛も清和天皇の御幼少に坐して太政大臣良房政を攝するに例たり故にかく云り
○財成、易泰卦の象傳に后以財成天地之道とあり財は裁なり
○雲之油油、文選封禪頌に自我天覆雲之油油、注に油油雲行貌天子之德如天覆萬物雲行天下

遍遐荒、雲之油油、穀之芊々、應物開務、沿酌舊章、隨時施教、因循故實、執徐之歲、中呂之月、講期卜日、法會擇辰、始自朝廷、洎于海內、預撤熏羶、先禁漁獵、三十一處、設席京城、六十九所、肆筵都外、飾茲百座、竟以二時、哲匠吼說、聽者塡噎、魚山唄暢、牛檀香披、散花如雨、懸幡搖風、大哉勝事、盛矣善功、十方三寶、願有感通、一切諸聖、願爲隨喜、護持寶位、泰山之安、珍衛仙齡、劫石之固、玉鏡宣輝、金輪穆化、乾坤交泰、家國富饒、梵釋四王、增益威光、龍神八部、加添勢力、天宇棟梁、王室股肱、叶贊罔窮、帶礪不渝、中外和平、妖孽不生、俗比結繩、人歌擊壤、先是二月十六日任行事司、大納言正三位源朝臣弘、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男、參議從三位行左大辨兼左衛門督美作守藤原朝臣氏宗、參議右大辨從四位上兼行左近衛中將備前守藤原朝臣良繩、正五位下守權左中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人、修理東大寺大佛使長官從五位上守右少辨兼行中宮亮藤原朝臣家宗、大外記正六位上多米宿禰弟益、正六位上行左少史讃岐朝臣時雄、正六位上行右少史志紀宿禰氏

經等是也、

○五月庚戌朔、屈請六十僧於東宮御在所、讀大般若經、限三日訖、○五日甲寅、地震、雷電雨雹、帝不御武德殿、停端午之節、駿河國言、富士山上五色雲見、○十一日庚申、天皇及皇太夫人、以米六百斛、鹽卅五斛、醴卅五斛、糉子一千五百枚、櫝飯四十合、笥飯五百合、褁飯一萬六千九百六十枚、海藻三萬三千三百斤、新錢一十二萬五千文、施僧尼優婆塞優婆夷及隱居飢窮之輩二萬九千六百七十四人、以助修淳和(正子)太后齋會也、先是淳和太后、於院裏設齋會、限以五日、講法華經、是日齋講竟矣、○十八日丁卯、地震、雷電雨雹、散位從五位上小野朝臣恒柯卒、恒柯者

也とあり
○莘々、文選東都賦注に莘々衆多也とあり
○沿酌、沿は原本治に作る諸本及類史百七十七に據て改む　○執徐之歳、爾雅に太歲在辰曰執徐とあり辰年を云歳は原本年に作る諸本及類史に據て改む　○中呂之月、禮記月令に孟夏之月律中中呂とあり四月を云　○撤熏擁、撤は原本徹に作る類史に據て改む熏擁は葷擁に同じ五辛及魚獸肉を云　○魚山唄暢、魚山は又漁山に作る魏の曹植此山に登り誦經の聲を聞き之に擬して梵唄を制す、故に梵唄を漁唄と云　○牛檀、牛頭栴檀の略翻譯名義集三に摩羅耶山出栴檀香名曰牛頭とあり　○刧石之固、刧は類史盤に作る　○穆化、化は類史紀に作る　○梵釋四王、梵天・帝釋天及四王天なり　○罔窮、罔は原本囯に作る祕本尾本谷本及類史に據て改む　○帶礪、史記高祖功臣表に封爵之誓曰使黃河如帶泰山若厲國以永寧爰及苗裔とあるに出づ厲は礪に同じ　○俗比結繩、莊子胠篋篇に子獨不知至德之世乎昔者容成氏伏戲氏神農氏當是時也民結繩而用之樂其俗安其居(節略)とあり　○歌擊壤、帝王世紀に堯時有八九十老人擊壤而歌於路曰吾日出作日入而息鑿井而飲耕田而食帝力于我何有哉とあり歌は原本欽に作る類史に據て改む　○參議右大辨、參議の二字は類史に據て補ふ　○氏經、經は類史繼に作る恐らくは非

(五月)○帝不御、類史七十三に帝上に皇字あり
○鹽卅五斛、卅以下三字は諸本に據て補ふ
○醴卅五斛、原本醴字なく五を二に作る醴は諸本に據りて補ひ五は祕本に據て改む
○糉子、抄飲食部に風土記云糉(字亦作粽知朱反)以菰葉褁米以灰汁煮之令爛熟也五月五日喫之とあり端午節にちまきを食ふことの來由は公事根源五月の條に見ゆ參看すべし
○櫝飯、櫝は原本横に作る黑川校本に據て改む
○褁飯、今の握飯なり褁飯は延暦儀式帳にも見ゆ

○三萬三千三百斤、原本百下に三十の二字あり諸本に據て削る
○五千文、千は原本十に作る諸本に據て改む
○雷電、電は祕本宮本に據て補ふ
○尋轉大內記、此五字は諸本に據て補ふ
○遷近江大掾、此五字同く諸本に據て補ふ
○書迹之妙、之は諸本に據て補ふ
○楷模、文德紀齊衡二年（一〇九頁）に注す
○五十三、三は原本二に作る諸本に據て改む
○雲氣神列於官社、此事既に元年正月甲子條に出で此に重出す、雲は祕本閣本等雪に谷本は雷に作る
○東宮北殿、北は原本比に作る閣本谷本淀本等に據て改む
○披訴、披は原本投に作る諸本に據て改む
○鵜坂神、神名式越中國婦負郡鵜坂神社、鵜坂村、鵜上に位階を脫す
○日置神、同式新川郡日置神社
○授正五位上、正は原本從に作る諸本に據て改む

右京人也、祖征夷副將軍從五位下永見、父出羽守正五位下瀧雄、恒柯少好學、頗有文情、尤善草隷、承和二年爲少內記、尋轉大內記、兼美作掾、遷近江大掾、大內記如故、八年遷式部大丞、十一年授從五位下、出爲大宰少貳、仁壽三年拜右少辨、明年爲播磨守、治貴簡要、政不開明、貞觀元年授從五位上、恒柯情無矯餝、擧必任眞、但性矜夸、傲於人物、書迹之妙、冠絕當時、世之習其業者、皆取楷模、適得尺牘、莫不愛奇焉、卒時年五十三、○廿日己巳、讃岐國從五位下雲氣神列於官社、○廿三日壬申、尾張國人從六位上笛吹部高繼復本姓物部屋形、○廿六日乙亥、於太政官曹司廳、任諸國銓擬郡司、是日、請廿僧於東宮北殿、修息災法、限以三日、○廿八日丁丑、從四位下童子女王、復本名重子、授位告身、誤注童子、今有披訴、因而許之、○廿九日戊寅、進越中國鵜坂神階、加從四位下、從五位上日置神授正五位上、○六月庚辰朔、三日壬午、自五月霖雨、至是大水、○五日甲申、散位從五位下藤原朝臣秋緒爲大監物、從四位下行播磨守在原朝臣行平爲內匠頭、散位從五位下藤原朝臣廣守爲諸陵

（六月）壬午、此二字闕本尾本谷本等に據て補ふ
○從五位下藤原朝臣、位字は諸本に據て補ふ
○大穴持神、神名式能登國羽咋郡大穴持像石神、一宮村
○宿那彥神、同式能登郡宿那彥神像石神社、金丸村
○夜帝不御、夜は諸本及類史九に據て補ふ
○攝津國、國は尾本に據て補ふ
○使者、者は原本看に作る諸本に據て改む
○文雄、文は原本大に作る祕本閣本尾本等に據て改む
○隼神、神名式左京四條坐隼神社（大月次新嘗）、葛野郡朱雀村
○相博、博は原本轉に作る祕本尾本谷本に據て改む博は易也
○勝田郡、勝田は倭名抄に加都多と訓り
○土左國、左は原本佐に作る諸本及類史百七に據て改む下同じ
（七月）彌加布都命神比古佐自布都命神、河內國若江郡弓削神社の祭神なり元年正月紀には弓削神

頭、從五位上文室朝臣笠科爲刑部大輔、從五位上橘朝臣伴雄爲宮內大輔、從五位上守刑部大輔安倍朝臣貞行爲攝津守、內匠頭從五位上小野朝臣千株爲播磨守、○九日戊子、能登國大穴持神、宿那彥神像石神二前、並列於官社、○十一日庚寅、於神祇官修月次祭、夜帝不御神嘉殿、便於神祇官修神今食祭、○十四日癸巳、攝津國四天王寺上言、毘沙門像手持刀、及塔形等拋擲壇下、遣使者修法、謝恠異也、前文章得業生正八位下味酒首文雄加敍三階、以對策及第也、○十五日甲午、授後院無位隼神從五位下、○十六日乙未、分遣使者近京諸寺、修轉念功德、緣御體乖和也、○十七日丙申、地震、○廿二日辛丑、地亦震、○廿三日壬寅、皇太后宮職水田九町、在美作國英多郡、今相博勝田郡公田、以英多郡地狹田少、給民口分、常煩不足故也、○廿五日甲辰、地震、○廿九日戊申、土左國播多郡地一十町賜施藥院、大祓於朱雀門前、如常、●秋七月己酉朔、四日壬子、廣瀨龍田祭如常、○十日戊午、進河內國從三位彌加布都命神、比古佐自布都命神階、並加從二位、○十四日壬戌、地震、○

さ見ゆ河内志に獮加布都命は若江郡東弓削村に、比古佐自布都命は志紀郡西弓削村にありさ見ゆ
㈡八月、廣湍雄椎神、式外、神祇志に廣湍神社在丹生郡廣瀨村、雄椎神社在足羽郡大瀨村さ見ゆ椎は原本推に作る祕本閣本谷本に據て改む
○二上神、此三字諸本に據て補ふ
○淑子、淑は原本濟に作る閣本尾本谷本等に據て改む淑子は長良の女二條后の妹
○中宮大夫、大は原本太に作る諸本に據て改む下同じ
○良仁美姿儀、良仁の二字は諸本に據て補ふ
○俄而、而は祕本閣本に據て補ふ
○加叙正五位上、上は原本下に作る嘉祥三年四月甲子紀に據て改む
○經時、經は原本縱に作る諸本に據て改む
○時年四十二、年字は尾本黑川校本に據て補ふ

十七日乙丑、地震、○廿一日己巳、大風暴雨、○廿四日壬申、地震、夜有流星、出自東北、入於西南、光照地、○廿五日癸酉、請六十僧於東宮、轉讀大般若經、限三日訖、○八月戊寅朔、二日己卯、越前國正六位上廣湍雄椎神、二上神、並授從五位下、○五日壬午、授無位藤原朝臣淑子從五位上、○中宮大夫從四位下藤原朝臣良仁卒、良仁者贈太政大臣正一位冬嗣朝臣之第七子也、母嶋田氏、從五位下淸田之姉、良仁美姿儀、風神警亮、少遊大學、讀書忘疲、文德天皇在儲、承和十年徵爲藏人、俄而除主藏正、遷爲春宮大進、十三年授從五位下、轉亮、授從五位上、嘉祥三年四月、文德天皇踐祚之初、加叙正五位上、遷中宮亮、兼右兵衞權佐、後拜右馬頭、中宮亮如故、四年授從四位下、累遷兼右近衞中將、大舍人頭、木工頭、左京大夫、遷轉數官、猶帶中宮亮、天安元年左遷越前權守、遷兵部大輔、未幾遷中宮大夫、良仁淡雅、歸懷釋教、門地高華、甚爲潔淸、服飾之美、寂究鮮明、所好唯馬、退公之後、每爲愛玩、性至孝、奄丁母憂、哀啼哭泣、歐血絕氣、經時乃蘇、不勝悲慟、服中病卒、時年四十二、○六日癸未、皇太后

○加慘、慘は疲也憂也、原本懆に作る諸本に據て改む
○以禱、以は諸本及紀略に據て補ふ禱は紀略祈に作る
○銅鐸、弘仁曆運記考下に詳に見え圖をも出せり
○渥美、倭名抄に阿豆美と訓り
○村松、泉村大字村松なり
○阿育王、印度の王なり
○次第司、第は原本弟に作る諸本及類史四に據て改む下同じ
○源朝臣直、原本直を忠に作る諸本及類史に據て改む
○全吉、全は原本金に作る諸本及類史に據て改む
○右近衞少將、右は原本左に作る天安二年九月辛巳紀に據て改む
○山陰、陰は原本蔭に作る總本谷本淺本等に據て改む
○爲右近衞權少將、權字は三年正月戊子紀に據て

自七月晦、御體不豫、至此加慘、度廿人出家、以禱平復也、○十日丁亥、釋奠、外從五位下行助教布瑠宿禰清野講尚書、文章生等賦詩如常、○十一日戊子、明經博士等參詣東宮、不召御前、賜祿而罷、○十四日辛卯、參河國獻銅鐸一、高三尺四寸、徑一尺四寸、於渥美郡村松山中獲之、或曰、是阿育王之寶鐸也、○十五日壬辰、任伊勢齋內親王行禊前後次第司、以掃部頭從五位上藤原朝臣貞敏爲前次第司長官、式部大丞正六位上紀朝臣良舟爲判官、大錄正六位下善道朝臣繼根爲主典、從五位上行兵部少輔源朝臣直爲後次第司長官、大丞正六位上藤原朝臣保則爲判官、大錄從六位下榎原忌寸全吉爲主典、○廿四日辛丑、大祓於建禮門前、爲明日伊勢齋內親王將行禊也、○廿五日壬寅、伊勢齋恬子內親王臨鴨水、大修禊事、即日入野宮、○廿六日癸卯、授右近衞少將正五位下兼行伊豫介藤原朝臣良世從四位下、爲中宮大夫、正五位下行大和守在原朝臣善淵爲內匠頭、從四位下行內匠頭在原朝臣行平爲左京大夫、正五位下守左京大夫弘宗王爲大和守、彈正少弼從五位下藤原

補ふ
○偸兒、抄人倫部に偸兒楊氏漢語抄云偸兒（沼須比斗）とあり
○齋戶神殿、一に齋殿・祝殿・祝部殿又刀禰殿とも云八神殿の異にあり
○結御魂緒、毎年鎭魂祭に結び奉れる御魂緒、緒は原本結に作る秘本尾本谷本等に據て改む
（九月）賜姓惟岳宿禰、此事は中臣氏本系帳に見え賜惟岳宿禰姓依舊被編右京九條二坊云々とあり
○御齋燒燈、江次第三月三日御燈事（九月同之）に上古被奉御燈之時（貞觀以往）北山靈巖寺邊供之尋東流水於其上行之云々とあり
○重陽之節、之は秘本尾本に據て補ふ
○爲文章生幷、閣本には文章生幷の四字なし
○侍座、座は原本坐に作る類史七十四に據て改む下同じ
○兩河洪水、兩洪の二字は秘本閣本尾本及紀略に據て補ふ

朝臣安棟爲參河守、散位從五位下藤原朝臣萬枝爲相摸介、右近衞權少將正五位下兼行周防權守藤原朝臣常行爲少將、周防權守如故、從五位下行備後權介藤原朝臣山陰爲右近衞權少將、備後權介如故、○廿七日甲辰、文德天皇國忌、始修西寺、仍所司廢務、夜有流星、出自南方、入於西北、光照地、夜、偸兒開神祇官西院齋戶神殿、盜取三所齋戶衣、幷主上結御魂緒等、○卅日丁未、雨水、○九月戊申朔、二日己酉、右京人從八位上中臣朝臣福成賜姓惟岳宿禰、還附右京九條、先是福成披訴、去齊衡三年、中臣氏人、稱非同族、申官削籍、厥後福成忽焉失姓、請賜件姓、被貫右京、許之、○三日庚戌、天皇御齋燒燈如常、○七日甲寅、地震、○九日丙辰、停重陽之節、於右仗頭、賜菊酒群臣、次侍從及諸司官人、舊爲文章生、幷文章生等被召侍座、錄見在座者奏之、後日賜大藏省綿各有差、○十一日戊午、遣大舍人頭從五位上嶋江王、神祇大祐正六位上大中臣朝臣豐雄等、向伊勢大神宮奉幣、例也、○十四日辛酉、大風、折樹發屋、京師百姓廬舍、破損者甚多、○十五日壬戌、風雨未止、都城東西兩

○二荒神社、元年正月甲申紀に見ゆ
○能有、母は伴氏、正三位右大臣左近衛大將皇太子傅、近院大臣と號す
○忍頂寺、拾芥抄下本に忍頂寺攝津仁和寺領、攝津志に嶋下郡壽命院舊名忍頂寺舊在忍頂寺山巓今在山下忍頂寺村とあり今三嶋郡見山村大字忍頂寺なり
○從五位下、位は原本從に作る閣本尾本及紀略に據て改む
○長道、上文天安二年十一月甲子紀永道に作り道は紀略通に作る
○十一月、月は原本日に作る臆本谷本に據て改む上文に據るに二年十一月甲子なり
○權中納言、權は原本なし上文に據て補ふ
○邊垂、左傳成十三年に出で邊境を云ふ
○去鄕、鄕は原本卿に作る谷本注本及類史八十四に據て改む
○以正稅給之、三代格には給之を全給に作る
十月
○大富神、式外、神祇志に大富神社今在上毛郡山田村

河洪水、人馬不通、諸國濱海之地、潮水漲溢、人畜被害、○十九日丙寅、詔下野國正三位勳四等二荒神社、始置神主一、山城國宇治郡荒廢地一町三百卌八歩、賜文德天皇皇子源朝臣能有、○廿日丁卯、傳燈滿位僧三澄奏言、神岑山寺在攝津國嶋下郡、三澄奉爲國家所建立也、春演說最勝王經、秋吼講法華妙典、請爲御願眞言一院、賜名忍頂寺、詔許之、○廿六日癸酉、勘解由次官從五位下兼行明法博士御輔朝臣長道卒、長道者左京人也、元明經生、後學律令、號別勅生、官給衣食、同得業生、學殖漸優、奉試及第、承和七年爲明法博士、仁壽三年敍外從五位下、母喪去職、後復本官、齊衡二年兼大判事、天安二年爲勘解由次官、餘官如故、十一月授從五位下、卒時年六十二、○廿七日甲戌、正三位行權中納言兼陸奧出羽按察使平朝臣高棟奏、鎭守府上言、邊垂之吏、去鄕遼遠、公廨之外、無復資粮、而至有未納、抑而不行、請准大宰府司公廨、雖有未納、以正稅給之、永爲恒例、詔許之、○冬十月丁丑朔、日有蝕之、○二日戊寅、天皇御前殿、賜飮侍臣如常、○三日己卯、授豐前國正六位上大富神從五

○內藥正、內は原本典に作る、祕本閣本尾本及紀略に據て改む
○物部朝臣廣泉卒、廣泉の傳は日本史方技傳に見ゆ、私記に或云據續後紀文德實錄、廣泉承和六年授外從五位下、十二年爲內藥正、天安元年爲肥前介、此所書皆與前史不合、蓋有脫誤さ云、賜姓朝臣は齊衡元年十月丙寅、任內藥正は承和十二年十二月戊寅、轉參河權守は貞觀二年二月乙未なり
○皓白、皓は原本皎に作る、類史百卅七に據て改む
○光澤、光は原本悅に作る、類史に據て改む
○時年、年は祕本閣本尾本等に據て補ふ
○攝養要決、本朝書籍目錄に廿卷物部廣泉撰さあり
○吉多野神、吉多は姶良郡蒲生村大字北か又肝屬郡に岐刀野鄕の二鄕あり、吉多は岐刀、野神は野裡の誤なりさも云
○百姓之作業、之は祕本尾本谷本等に據て補ふ
○飛鳥戸神、元年八月丙申紀に出づ
○不退、拾芥抄下本十五

位下、安藝國佐伯郡始置主政一員、正五位下行內藥正兼侍醫參河權守物部朝臣廣泉卒、廣泉者左京人也、本伊豫國風早郡、姓物部首、後隷京兆、賜姓朝臣、廣泉少學醫術、多見方書、天長四年爲醫博士兼典藥允、遷爲侍醫、後累遷伊豫讃岐掾、侍醫如故、六年春授外從五位下、爲內藥正、侍醫如故、十四年授從五位下、兼伊豫掾、仁壽四年授從五位上、爲肥前介、內藥正侍醫如故、天安二年兼參河權介、貞觀元年冬授正五位下、轉參河權守、內藥正侍醫如故、廣泉藥石之道、當時獨步、齡至老境、鬢眉皓白、皮膚光澤、體氣猶强、卒時年七十六、撰攝養要決廿卷、行於世矣、○七日癸未、地震、○八日甲申、廢大隅國吉多野神二牧、緣馬多蕃息、害百姓之作業也、○十五日辛卯、河內國正四位下飛鳥戸神列於官社、大和國平城京中水田五十五町四段二百八十八歩、施捨不退超昇兩寺、先是傳燈修行賢大法師眞如上表曰、件田、大同四年勅賜上毛野、叡努、石上內親王等、彼親王等偏謂、私地捨充功德、而歷代以降、盡被收公、聞諸俗務、理縱宜然、假之眞論、義有未愜、當今慈雲廣覆、慧日更明、凡緣

大寺中に見ゆ大和志に不退寺添上郡不退寺村拾一平城天皇宮爲寺とあり
○超昇、同く十五大寺中に超證寺あり大和志に超昇寺添下郡超昇寺村
○大同四年、四は原本舊に作る諸本に據て改む
○上毛野、平城天皇第一皇女、母は伊勢繼子、老人の女、眞如親王の同母妹、石上內親王亦同じ
○叡努、平城天皇皇女、母は紀氏、木津魚の女、努は原本弩に作る續後紀承和二年四月戊子紀に據て改む
○闡諸俗務、闡は原本關に作る諸本に據て改む
○假之眞論、眞は原本假上にあり諸本に據て改む
○恩給、給は原本綸に作る諸本に據て改む
○印可、允可に同じ許さるゝを云
○超昇等寺、寺は秘本尾本に據て補ふ
○亡靈、亡は原本已に作る谷本黑川校本に據て改む
○窮性盡理、易說卦傳に窮理盡性以至於命とあり
○六籍、六經を云

佛事之莊嚴、必賜恩給、而印可、請特哀許、施入不退超昇等寺、不破亡靈之宿心、將資聖朝之冥助、勅許之、眞如者平城太上天皇皇子、弘仁之廢皇太子也、○十六日壬辰、制、哲王之訓、以孝爲基、夫子之言、窮性盡理、即知、一卷孝經、十八篇章、六籍之根源、百王之摸範也、然此間、學令孔鄭二注、爲教授正業、厥其學徒相沿、盛行於世者、安國之注、劉炫之義也、今案、大唐玄宗開元十年、撰御注孝經、作新疏三卷、以爲世傳鄭注、比其所注、餘義理專非、又稽之鄭志、康成不注孝經、安國之本、梁亂而亡、今之所傳、出自劉炫、事義紛薈、誦習尤艱、靡厭衆止、更招疑義、故玄宗廣酌儒流、深迴睿想、爲之訓注、冀闡微言、即勅學士儒官、僉議可否、於是當時有識、碩德名儒、咸集廟堂、恭尋聖義、妙理甚深、常情難測、同共嗟伏、服請頌傳、侍中安陽縣男乾曜等奏曰、天文昭爛、洞合幽微、望即流行、佇光來葉、制曰可、然則孔鄭之注、並廢於時、御注之經、獨行於世、而唯傳彼注、未讀件經、假之通論、未爲允愜、鄭孔二注、即謂非眞、御注一本、理當遵行、宜自今以後、立於學官、教授此經、以充試業、庶革前儒必固之失、遵先王至要之源、

○學令孔鄭二注云云、學令に凡教授正業、孝經孔安國鄭玄注とあり注は原本註に作る諸本に據て改む
○安國之注、隋書經籍志に古文孝經一卷孔安國傳梁末亡逸今疑非古本とあり
○劉炫之義、同志に千文孝經述義五卷劉炫撰とあり
○御注孝經、唐書藝文志に今上孝經制旨一卷（玄宗）とあり
○鄭志、孝經序の刑昺疏に鄭君卒後其弟子追論師所注述及應對時人謂之鄭志其言鄭所注者唯有毛詩三禮尚書周易都不言注孝經とあり
○衆止、莊子德充符篇に人莫鑑於流水而鑑於止水唯止能止衆止とあるに據れるか
○流行、流は閣本尾本等絕に作る施の訛なるべし
○假之通論、論は諸本に據て補ふ
○革前儒、革は祕本閣本尾本に據て補ふ
○法隆寺牒、牒は原本牋に作る尾本及類史百七十九に據て改む

但去聖久遠、學不厭博、若猶敦孔注、有心講誦、兼聽試用、莫令失望、○廿一日丁酉、屈六十僧於東宮、限三箇日、轉讀大般若經、○廿五日辛丑、法隆寺牒曰、撿案內、有功德安居、官安居二色講師、功德安居講者、上宮太子之本願、官安居講者、勝寶感神天皇(聖武)之本願也、昔日僧等、件二色講、互當其次、則爲得業、而依登美眞人藤津解、天長二年以降、延曆寺僧爲官安居講師、爾來功德一講、依次充之、即爲夏講業、而太政官去齊衡二年八月廿二日格偁、補任諸國講讀師者、以五階僧爲講師、以三階僧爲讀師者、有司案此格云、所謂夏講、已請延曆寺僧、專寺僧等所請功德講、是格外之色、不可爲夏講業、今諸大寺、惣有其色、成五階業、至法隆寺、既無其色、何以立業、望請、件功德講、爲夏講業、下知所司、以爲永例、然則先聖本願、隆於萬代、傳燈末學、紹於億劫、從之、○廿八日甲辰、皇太后於東五條宮、大修齋會、講法華經、限五日訖、○廿九日乙巳、山城國宇治郡地廿五町、賜左大臣正二位源朝臣信、○正三位行中納言橘朝臣岑繼薨、岑繼者、贈太政大臣正一位清友朝臣孫、而右大臣贈從一位氏公朝臣之

○安居、天武紀十二年（紀下二九五頁）に見ゆ
○上宮太子、聖德太子
○聖寶感神天皇、聖武天皇
○齊衡、齊は原本齋に作る谷本及類史に據て改む
○廿二日格、格は原本符に作る諸本及類史・格に據て改む
○五階僧、五階僧は試業・複・維摩立義・夏講・供講の五階業を經たるものをいひ三階僧は右の中夏講供講の二階を除きしものを云
○至法隆寺、至は諸本及類史・格に據て補ふ
○地是大臣之孫、地は原本也に作る諸本閣本尾本に據て改む
○意旨、原本意を音に作る諸本閣本谷本に據て改む
○拜權中納言、嘉祥二年正月戊辰にて五月とあるは誤なり
○年五十七、年は紀略に據て補ふ
（閏十月）廣成、原本廣歲に作る承和二年十一月

長子也、氏公朝臣是仁明天皇之外舅、岑繼所生、是仁明天皇之乳母、故天皇龍潛之日、陪於藩邸、稍蒙寵幸、岑繼身長六尺餘、腰闊差大、爲性寛緩、少年愚鈍、不好文書、天皇見其無才、歎曰、岑繼地是大臣之孫、帝之外家、若有才識、公卿之位、庶幾可企、何其不讀書之甚哉、岑繼竊聞、慙恐於心、乃改節勵精、從師受學書傳、略通意旨、天長六年爲內舍人、七年任常陸少掾、遷相摸權掾、九年正月叙從五位下、天皇登極之初、天長十年三月爲右近衛少將、父氏公右近衛大將、由是遷爲左兵衛佐、遷左近衛少將、承和三年正月授從五位上、兼丹後守、六年加正五位下、七年授從四位下、拜兵部大輔、左近衛少將丹後守並如故、轉中將、十一年正月拜參議、十三年爲右衛門督、兼相摸守、十四年進從四位上、其年冬十二月、母憂解職、十五年二月詔奪情以本官起之、嘉祥二年正月授從三位、五月拜權中納言、齊衡二年進爵爲正三位、三年拜中納言、薨時年五十七、○閏十月丁未朔、地震、○二日戊申、分遣使者、賜京師貧窮者錢米、以今日皇太后宮齋講畢故也、○四日庚戌、詔二品行兵部卿忠良親王、聽以私

紀(續後紀七〇頁)に據て改む下同じ
○大山積神、神護二年四月甲辰紀(續紀下一三三頁)に見ゆ
○伊方神、式外、舊越智郡伊方村にありしか今北浦村に遷す
○瀧神、神名式伊豫國越智郡多岐神社(名神大)、下朝倉村古谷
○同子內親王、紹運錄同を國に作れど紀略・皇代記・一代要記・編年記等何れも此に同じ
○池子、一代要記・紹運錄は常に作り諸本には子字なし
○正五位下守右中辨、守は黑川校本に據て補ふ
○朔旦冬至奏議、類史七十四及政事要略廿五に見ゆ
○是善等議曰、政事要略等下に矣字あり

鷹二聯、待五畿內國禁野邊○十二日庚午、大宰府言、管豐後國權掾正六位上越智宿禰廣成乞骸骨曰、廣成齡及八十、筋力衰耗、空妨官職、無益公家、請罷官飯鄉以待終、許之○十六日壬戌、進伊豫國從四位上大山積神階、加從三位、正六位上伊方神授從五位下○十七日癸亥、授伊豫國從五位上瀧神從四位下○廿日丙寅、雨雪、錄見在禁中五位以下、及諸衛府宿直者、賜綿有差、無品同子內親王薨、帝不視事三日、內親王者、淳和太上天皇之皇女也、母池子、丹墀氏、從五位上門成之女也○廿三日己巳、地震、勅從四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善、正五位下守權左中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人、正五位下守右中辨藤原朝臣冬緒、從五位上行大學博士大春日朝臣雄繼、從五位下守主計頭兼行木工助筭博士有宗宿禰益門等曰、今年一章十九年、准據先例、當有朔旦冬至、而曆博士眞野麻呂等所上曆日、冬至在十一月二日、若於經史、有可進退之理乎、宜議而奏之、是善等議曰、謹案、眞野麻呂所執、以爲依日分小餘不足、不得合朔、論之曆術、理若當然、但案曆經注

○三大二小、原本六大六小に作る諸本及類史要略に據て改む
○三大三小、原本六大六小に作る諸本及類史七十四に據て改む下同じ
○傅仁鈞云、此事唐書律曆志に見ゆ原本傅を傳に作る秘本閣本谷本及類史に據て改む
○李淳風、唐書律曆志に見ゆ
○孔穎達、同志に見ゆ
○尚書八座、文選齊竟陵文宣王行狀注に「八座謂六尚書二僕射」とあり
○晷耀之愆、魏書肅宗紀に「自皇運肇基曲章猶缺、惟三元之曜未盡厥理」とあり晷曜同じ晷耀は日影なり
○尚書百釋、隋書經籍志に「尚書百釋三卷梁國子助教巢猗撰」とあり
○章蔀之歲、周髀算經に「十九歲爲一章、章條也言閏餘盡爲法章條也」「四章爲一蔀七十六歲」とあり
○二大、二は原本七に作る諸本及類史に據て改む
○令諸有識、原本令を今に作る類史に據て改む

云、月行遲疾、曆則有三大二小、以日行盈縮、增損之云云、當察加時早晚、隨其所近而進退之、使不過三大三小、其正月朔、若有交加時正見者、消息前後一兩月、以定大小、令虧在晦者、以此言之、既有進退之理、而今當年曆、八月大、九月小、十月大、閏十月小、然則以一小月爲大、自得朔旦冬至、夫朔旦冬至者、曆數之所始、帝王之休祥、既云避凶而在晦、何不逐吉以退朔、昔唐太宗貞觀十四年有閏十月、卽得朔旦冬至、太史令傅仁均、以癸亥爲朔旦冬至、而宣義郎李淳風、案古曆、分日、以爲甲子宜在朔旦、詔下公卿及諸有識、於是國子祭酒孔穎達等十有四人、尚書八座、請從淳風議、有詔可之、雖然至於後年、不見晷耀之愆、爰知一日進退、未足爲妨、又尚書百釋云、頻大消之、案其意義、每至章蔀之歲、必欲令得朔旦冬至、故頻置大月、至於三四、夫三大三小者、曆術之常法、況今唯置二大、既得合朔乎、又勅從五位下行曆博士兼備後介大春日朝臣眞野麻呂、外從五位下行陰陽助兼權陰陽博士笠朝臣名高等曰、令諸有識等僉議云、今年可置朔旦冬至、若依此說、逐吉置朔者、於後年曆、得節氣不錯謬

○但依群議、但は諸本及類史に據て補ふ
○弦望晦朔、晦に要略に據て補ふ
○十一月一日、一日は原本二日に作る諸本及要略に據て改む
○主典二人、二人は諸本に據て補ふ
(〔十一月〕)冬至、冬の上に私記は廿九日の神祇官解を引けり新儀式に朔旦冬至事承和八年貞觀二年元慶三年昌泰元年延喜十七年天曆九年とあり
○豐稻賣神、式外、所在詳ならず
○御祖神、神名式河内國高安郡御祖神社、中河内郡中高安村
○御子宮神、同式同郡春日戸社坐御子神社、所在同上、御字は諸本及式に據て補ふ
○乾坤不宰、老子十章に爲而不レ恃長而不レ宰是謂二玄德一とあり宰は主なり
○躔次、日月星辰の經行する軌道を云
○上元之歲、五代史司天考に數千歲之前必得二甲子朔旦夜半冬至一而日月五星皆會二于子一謂二之上元一以爲二曆始一とあり

歟、眞野麻呂等奏言、謹撿二術法一、無レ依二吉進退之文一、仍今年不レ置二朔旦冬至一、但依二群臣議一置レ之、可レ無二弦望晦朔之差一、於レ是詔從二是善等之議一焉、○廿五日辛未、宜下詔二百官及五畿七道諸國一云、今年當レ有二朔旦冬至一、而曆家偏依二日分不一レ足、置二於二日一、今稽二之故實一、旣有二改定之理一、宜下改二閏小月一爲中大、即以上十一月一日丁丑上爲二朔旦冬至一、是日任二同子內親王裝束司一、從四位下行越中權守房世王爲二裝束司長官一、治部少輔從五位下安倍朝臣房上爲二次官一、判官二人、主典二人、散位從五位下廣山王爲二山作司長官一、從五位下藤原朝臣大野爲二次官一、判官二人、主典二人、喪家辭而不レ受、太政官論奏、美濃國惠奈郡人縣萬歳麻呂、殺二百姓三人一、法官斷レ罪、當二斬刑一、詔減二死一等一、處二之遠流一、○十一月丁丑、朔旦冬至、河內國從五位下豐稻賣神、御祖神、御子宮神、並授二正五位下一、公卿上表、賀二朔旦冬至一曰、臣聞、乾坤不レ宰、日月無レ私、逆二其道一則躔次自差、順二其常一則禎祥暗叶、然則上元之歲、天正之辰、合璧和レ光、連珠縟(イロドル)レ彩、歷二列辟一而稀遭、待二興王一而合レ瑞者也、中謝伏惟、皇帝陛下、承二天之序一、繼二聖之明一、生知之德潛通、不言之化自

○天正、唐書禮樂志注に冬至云天正長至とあり天は諸本如に作る
○合璧和光云云、漢書律暦志に日月如合璧五星如連珠、顔注に孟康曰太初上元甲子夜半朔旦冬至時七曜皆會聚、斗牽牛分度、夜盡如合璧連珠也とあり
○列辟、列代の君
○興王、中興の王
○承大之序、漢書霍光傳に見ゆ
○纘聖之明、易離卦象傳に見ゆ
○生知、聖人を云中庸に見ゆ
○不言之化、禮記樂記に天則不言而信神則不怒而威とあり
○律應北宮、北宮は史記天官書に見ゆ
○漏移南至、左傳僖五年春王正月辛亥朔日南至疏に日南至者冬至日也とあり林注に周正月今之十一月蓋十一月一日冬至也
○五星云云、火水木金土の五星なり金陵瑞異録に五星聚有三周將代殷聚於房とあり
○兩耀集辰云云、兩耀は日月を云、此故事未だ考

遠、是以陰陽降祉、天人合應、慶雲連理、史不絶書、瑞鳥嘉禾、府無虚月、而今律應北宮、漏移南至、五星同舍、均瑞彩於周臺、兩耀集辰、合昌耀於漢祀、從九霄以降祥、表無彊之嘉運、豈不以天地合德、日月齊明、先天而天不違、後天而奉天時者哉、臣等傾心日轡、庇影璇闈、顧惟愚矇、竊感顯慶、同陳思王之抗表、唯祝踐長、異崔亭伯之作銘、猶欽延祚、無任鑽抃之至、謹拜表奉賀以聞、是日、帝御前殿、賜飲侍臣、錄文武官及校書殿內豎等見直者奏之、○三日己卯、詔參議正三位行右衛門督源朝臣融、賜大和國宇陀野、爲臂鷹從禽之地、○八日甲申、春日平野等祭如常、○九日乙酉、梅宮祭如常、○十二日戊子、大原野祭如常、○十三日己丑、園韓兩祭如常、○十四日庚寅、於宮內省、修鎭魂祭、如常、○十五日辛卯、修新嘗祭、帝不御神嘉殿、親王公卿向宮內省行事、○十六日壬辰、詔曰、皇天無親、以萬物爲芻狗、聖人無心、以百姓爲耳目、是以資生無沫、不言之化克隆、樂推不厭、無爲之業長逸、朕以眇々之身、託萬民之上、涉道已淺、乘奔危懷、但賴群公卿士盡力寅翼朕躬、廼者公卿奏言、今年十一月朔旦冬至、得

天之紀、終而復始、連珠映五緯而懸芒、合璧疊二離而摛彩、雖理關恒算、而必感至仁、朕之寡德、何鍾斯祥、肆思與天下共同休慶、自貞觀二年十一月十六日昧爽以前、徒罪以下、不論輕重、咸從免除、但八虐、故殺、謀殺、強竊二盜、私鑄錢、常赦所不免、及欠負官物之類、不在赦限、若以赦前事、相告言者、以其罪罪之、其門蔭久絕、及功才早彰者、特加榮獎、式暢寵章、內外文武官主典已上、叙爵一級、在京正六位上諸吏、及史生以下、直丁以上、又天下高年人等、宜量賜物、庶覃鴻霈於浹宇、答靈眷於昊蒼、布告遐邇、俾知朕意焉、

天皇御前殿、賜宴群臣、賜文武官爵、策命曰、天皇我詔旨良萬止勅大命乎、

へす
○嘉運、運は諸本及類史七十四に據て補ふ
○先天而天不違云云、易文言傳に夫大人者與天地合其德云々先天而天弗違後天而奉天時天且弗違而況於人乎とあり
○日轡、雍夏樂府に禮將華樂將闌廻日轡動天關とあり
○璇闈、闈は原本圍に作る諸本に據て改む
○晷隙、類史晷曙に作る
○陳思王云云、魏曹植なり陳に封ぜられ諡を思と云曹植冬至獻履襪頌表に伏見舊儀國家冬至獻履貢襪所以迎福踐長とあるに據れり踐長は履長に同じ玉燭寶典に冬至律當黄鍾其管最長故有履長之賀とあり唯は原本喉に作る諸本及類史に據て改む　○崔亭伯云云、崔亭伯は後漢の人名は參亭伯は字なり崔駰襪銘に黄鍾育化以養元基長履景福至于億年云々本枝萬世子子孫孫とあるに據れり　○肇抃、肇は敬也抃は觀抃の意　○平野等祭、等字は祕本閣本尾本に據て補ふ　○向宮內省、宮は諸本及類史紀略に據て補ふ　○皇天無親、尙書蔡仲之命に出づ　○以萬物爲芻狗、老子五章に天地不仁以萬物爲芻狗とあり　○以百姓爲耳目、同卌九章に聖人無常心以百姓心爲心とあり　○資生無沫、資生は易坤卦彖傳に至哉坤元萬物資生とあり沫は原本涯に作る諸本に據て改む　○萬民之上、之字は要略に據て補ふ　○乘奔危懷、奔は奔馬懷は思也又僻膺也奔は諸本及類史に據て補ふ　○寅䕶、寅は恭也又敬也　○得天之紀云云、史記封禪書に是歲己酉朔旦冬至得天之紀終而復始とあり　○五緯、五星を云　○二離、日月なり　○理關恒算、日月の運行には一定の順序あり數を推して之を算するに或る年月には必ず之に際會するを云　○不論輕重、論は原本輪に作る諸本及類史に據て改む　○諸吏、吏は原本史に作る諸本及類史要略に據て改む　○鴻霈、鴻恩に同じ
○策命、此宣命は承和八年及元慶三年十一月朔旦

冬至宣命に同じ兩宣命を參看すべし
○一二在、元慶三年宣命には一二の下に人字あれど承和宣命にはなし
○免賜、賜は諸本及類史七十四に據て補ふ
○橘朝臣永名、原本卜部宿禰平麻呂に作る平麻呂は元慶五年十二月己卯紀從正位下行丹波介卜部宿禰平麻呂卒、中略天安二年拜二權大祐一兼二爲宮主一貞觀八年遷二參河權介一とあり神祇伯に任ぜられし事なし永名は承和十四年四月丁巳神祇伯となり嘉祥二年十一月甲戌に正四位下に進みしが此に至て從三位に叙せられしなり按に卜部宿禰平麻呂とあるは後人の加筆なること明なれば尾イ本谷イ本及原本頭書に據て改む
○與我王、與は原本興に作る稻本閣本尾本等に據て改む
○源朝臣光、紹運錄に源光右大臣左大將、仁明皇子文德帝季弟とあり
○式部少輔大枝朝臣、少は原本大に作る諸本に據て改む同十月己巳紀讀ごすべし

衆諸聞食止宣、朔旦冬至波、歷代天希爾値王者乃休祥奈利、朕我以不德天、今爾得値利、朕躬乃美也此乎嘉牟、親王等諸王等諸臣等百官人止毛、天下乃公民爾至萬天、相賀部之止奈毛所念行須、故是以、其仕奉狀乃隨爾、上治賜布人毛在、氏氏乃中爾治賜布人毛一二在、又內外乃諸司乃主典與利以上乃人爾冠一階上賜布、又司々乃人止毛直丁爾至萬天大物賜布、又天下高年乃人止毛爾毛賜物布、又諸徒罪以下乃人止毛、免賜久止勅大命乎、衆聞食止宣、進正四位下行神祇伯橘朝臣永名、從四位上守刑部卿藤原朝臣輔嗣階、並加從三位、授參議右大辨從四位上兼行左近衞中將備前守藤原朝臣良繩正四位下、散位從四位下基棟王從四位上、文章生無位潔世王從四位下、大舍人頭從五位上嶋江王正五位下、無位與我王從五位下、從四位上行右兵衞督兼相摸守源朝臣勤正四位下、從四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善、無位源朝臣光、並從四位上、散位正五位下坂上大宿禰正野、大藏大輔兼守左中辨高階眞人岑緒、權左中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人、左近衞少將兼行播磨權介

良岑朝臣清風、右中辨藤原朝臣冬緒、右近衞少將兼行周防權守藤原朝臣常行、並從四位下、從五位上守左近衞權少將兼行少納言侍從播磨介藤原朝臣基經正五位下、散位從五位下常道眞人兄守、滋野朝臣善蔭、主殿頭兼行侍醫當麻眞人鴨繼、因幡守藤原朝臣興世、大宰少貳藤原朝臣眞數、神祇少副中臣朝臣蕤守、散位藤原朝臣諸葛、左近衞少將兼行近江權介藤原朝臣良尙、中務少輔源朝臣包、大膳大夫在原朝臣守平、右衞門佐伴宿禰中庸、主計頭兼行筭博士木工助有宗宿禰益門、少納言兼侍從良岑朝臣經世、並從五位上、散位外從五位下味眞(アヂマ)公御助麻呂、春道宿禰永藏、天文博士志斐(シヒ)連春繼、主稅頭家原宿禰繩雄、侍醫兼醫博士駿河介興道宿禰名繼、助教布瑠宿禰清野、無位源朝臣好、正六位上源朝臣加(クハフ)、內舍人橘朝臣茂蔭、大內記安倍朝臣清行、無位平朝臣朝雄、式部少丞藤原朝臣良近、木工大允和氣朝臣彝範、式部大丞紀朝臣春常、散位文室眞人甘樂(カムラ)麻呂、民部大丞清原眞人惟岳、左衞門大尉藤原朝臣利基、少尉菅野朝臣宗範、散位百濟王貞惠、藤原朝臣

○經世、經は原本繼に作る諸本及元年七月丁卯紀に據て改む
○味眞公、倭名抄郡鄕部に越前國今立郡味眞（阿知末）鄕あり味眞は之に據れり
○貞惠、惠は原本忠に作る諸本に據て改む
○藤原朝臣雄貞、祕本閣本尾本等藤原の二字なし尊卑分脈を閱するに藤原氏に雄貞見えず疑なきにあらねど暫く舊に仍る
○安雄並從五位下、並以下五字は諸本に據て補ふ
○福貞、貞は三年八月丁未紀に據て改む
○右近衞將監、右は原本左に作る諸本に據て改む
○土左權掾、左は原本佐に作る細本に據て改む
○道主、主は原本生に作る諸本及四年正月壬午紀に據て改む
○清根宿禰吉、清根宿禰は承和元年九月壬申紀に見ゆ阿知直同祖なり、原本清を河に作るを諸本に據て改む狩谷校本に吉下一本有繼字一とあれどさる本を見ず承和元年九月紀によるに吉上に或は福を脫せるか尙考ふべし

○左近衛將曹、左は原本右に作る祕本閣本尾本等に據て改む

○忠世宿禰眞、四年正月壬午、五年八月乙酉紀に據るに眞下に恐くは直字を脫す

○是日夜烈風雷雨、此七字は原本廿六日壬寅の條に收む然るに祕本閣本谷本等何れも十七日廿日兩日の記事は烈風雷雨の次にあり紀略にも十六日壬辰の條に天皇御ニ前殿ニ賜ニ宴男女叙位賜ニ親王以下祿ニ有ㇾ差是日烈風雷雨十七日癸巳風不ㇾ止多壞ニ人舍ニとあり、此に據るに女子叙位及親王以下に宜祿を賜ふことも十六日にあるべきなり然るに賜祿の事は類史七十四に廿六日壬寅とすされば女叙位と賜祿とは之を廿六日に行はせられしなるべし、但し烈風雷雨の事は紀略の文にて十六日なること疑なく然らざれば十七日風猶不ㇾ止へ續かず、故に是日以下の七字を此に移す烈風は原本風烈に作る諸本及紀略に據て訂す

○源朝臣端姫、嵯峨天皇皇女にて盈姫の御妹

眞宗、藤原朝臣雄良、當麻眞人安方、肥前介永原朝臣永岑、河內介石川朝臣第庭、宮內大丞大原眞人安雄、並從五位下、左大史正六位上三善宿禰清江、大外記多米宿禰弟益、直講六人部福貞、右近衛將監兼土左權掾肩野連道主、木工權少允志紀縣主貞成、皇太后宮大屬清根宿禰吉、式部大錄善道朝臣繼根、左近衛將曹從七位下忠世宿禰眞、並外從五位下、是日、夜烈風雷雨、○十七日癸巳、風猶不ㇾ止、多壞ニ人廬舍ニ、○廿日丙申、詔改ニ散事從四位下源朝臣盈姫告身ニ、爲ニ從四位上ニ、盈姫、嵯峨太上天皇之女也、○廿六日壬寅、無位源朝臣端姫、□統朝臣敦子、並授ニ從四位上ニ、無位藤原朝臣儉子從四位下、從五位下安倍朝臣御井子正五位下、無位藤原朝臣元子、藤原朝臣德子、文室眞人廣子、藤原朝臣多子、藤原朝臣岑子、藤原朝臣充子、坂本朝臣氏子、並從五位下、從七位下葛井連繼刀自、春日部眞繼、刑部眞鸞、無位佐々貴山公宮子、大春日朝臣氏子、並外從五位下、賜ニ親王以下祿ニ各有ㇾ差、今月一日、錄ニ文武官及校書殿內豎見直者ニ、今日賜ㇾ祿、○廿七日癸卯、正五位下行內藏頭兼神祇

○□統朝臣敦子、□は詳ならす敦子は紹運錄に統朝臣熱子、從四位上とさあるさ同じかるべし
○並授從四位上、授は諸本に據て補ふ
○從五位下安倍、下は原本上に作る閣本尾本谷本等に據て改む
○春日部、部は諸本に據て補ふ
○佐々貴山公、公は原本谷に作る同じく諸本に據て改む
○從五位下行曆博士、以下餘官如故に至る廿九字は諸本に據て補ふ
○虎主、虎は原本庸に作る秘本尾本谷本等に據て改む
○三藤、藤は原本藏に作る仁壽三年七月庚戌・天安二年四月壬寅紀に據て改む
○清瀧朝臣藤根、原本藤原朝臣清瀧に作る秘本閣本尾本及十二年正月戊寅紀に據て改む
○爲越前守、下文に據るに恐くは守上權字を脫する
(〔十二月〕)播磨國言、言は諸本に據て補ふ
○因循、循は原本修に作る黑川校本に據て改む

大副中臣朝臣逸志爲神祇伯、從五位上行神祇少副中臣朝臣薭守爲大副、散位從五位下高向朝臣公輔爲中宮大進、從四位下行右近衞少將兼周防權守藤原朝臣常行爲內藏頭、餘官如故、從五位下行曆博士兼備後介大春日朝臣眞野麻呂爲陰陽頭、餘官如故、從五位下行侍醫大神朝臣虎主爲內藥正、散位從五位下藤原朝臣正世爲大藏少輔、從五位上滋野朝臣善蔭爲彈正少弼、從五位上行美濃權守坂上大宿禰貞守爲守、從五位上行陰陽頭藤原朝臣三藤爲下野守、散位從五位上清瀧朝臣藤根爲越前守、大藏少輔從五位下藤原朝臣貞庭爲大宰少貳、從五位上行大宰少貳藤原朝臣眞數爲肥後守、○十二月丙午朔、四日己酉、地震、○八日癸丑、新修釋奠式、頒下七道諸國、先是播磨國言、博士正八位上和邇部臣宅繼申請云、謹案、大唐開元禮、大學國子州縣、各有釋奠式、今此間唯有大學式、無諸國式、所謂大學式、則因循開元禮、大學國子之式、具載奠祭之儀、明定進退之度、又云、若上丁當國忌及祈年祭、改用中丁者、如此等事、未有施行、凡厥諸國相犯者多、或稱大學例、

○進退之度、之は祕本閣本に據て補ふ
○若上丁、尾本淀本丁を下に作る
○如在之禮、論語八佾に祭如在、祭神如神在とあり
○參差、毛詩周南關雎章に見ゆ長短不齊なるを云
○諸陵墓、原本諸下に山字あり諸本に據て刪る
○大神朝臣虎主卒、虎主大神朝臣を賜ふ事齊衡元年十月癸酉紀に備後介たる事同二年二月乙丑紀に伊豫權掾たる事天安元年正月癸丑紀に見ゆ、虎は原本廟に作る諸本に據て改む下同じ
○本姓、本は原本奉に作る宮本に據て改む
○俊辨、辨は明察なり
○備後掾、齊衡二年二月乙丑紀に據るに掾は介とあるべきなり
○齊衡三年授從五位下、齊衡の二字は宮本及類史九十九に據て補ふ齊衡三年正月辛亥なり
○年六十三、年は閣本尾本谷本等に據て補ふ
○對事、俗に所謂即座の事を云
○地黃煎、抄香藥部煎

用風俗樂、或據州縣式、停止音樂、唯任人心、遂無一定、夫尊師之道、誠須嚴整、如在之禮、豈合參差、望請、被賜件式、以爲永鑒、勅依之、○十一日丙辰、於神祇官、修月次神今食祭、親王公卿參會行事、○十五日庚申、公卿奉勅、會建禮門前、遣使者於諸陵墓、獻荷前幣如常、○廿日乙丑、先是從五位上行大學博士大春日朝臣雄繼、以御注孝經、奉授皇帝、今日有事竟宴、授博士雄繼正五位下、御筆書告身以寵之、○廿一日丙寅、始修佛名懺悔之事如常、○廿八日癸酉、授正六位上藤原朝臣諸房從五位下、○廿九日甲戌、從五位下行內藥正大神朝臣虎主卒、虎主者右京人也、自言大三輪大田々根子之後、虎主本姓神直、成名之後、賜姓大神朝臣、幼而俊辨、受學醫道、針藥之術、殆究其奧、承和二年爲左近衞醫師、遷侍醫、十五年授外從五位下、兼參河掾、後遷兼備後掾、齊衡三年授從五位下、貞觀二年拜內藥正、卒時年六十三、虎主性好戲謔、最爲滑稽、與人言談、必以對事、嘗出自禁中、向作地黃煎之處、途逢友人、問云、向何處去、虎主答云、奉天皇命、向地黃處、此其類也、然處治多効、人皆要引、療病之工、

日本三代實錄卷第五

起貞觀三年正月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

【貞觀三年】

（辛巳）三年春正月丙子朔、天皇不受朝賀、雨也、御前殿、賜宴侍臣、奏七曜曆、藏氷厚薄、腹赤魚、擧音樂、賜被、並如常儀、○四日己卯、所司獻剛卯杖、天皇不御前殿、付內侍奏、○七日壬午、天皇御豐樂殿、觀靑馬、賜宴奏樂、如常儀、賜祿有差、○八日癸未、於大極殿、始講最勝王經、以興福寺僧傳燈大法師位春德爲講師、○九日甲申、地震、○十三日戊子、參議從三位行左大辨兼左衞門督美作守藤原朝臣氏宗爲中納言、左衞門督如故、散位正四位下正躬王爲參議、正四位下行右大辨兼左近衞中將備前守藤原朝臣良繩爲左大辨、左近衞中將備前守如故、正四位下行勘解由長官兼式部大輔信濃守南淵朝臣年名爲右大辨、勘解由長官信濃守如故、參議從四位上春澄朝臣善繩爲式部大輔、從四位下行權左中辨兼

○春德、傳詳ならず春は原本脊に作る諸本及紀略に據て改む
○左衞門督如故、原本衞門を兵衞に作る諸本及天安二年八月乙卯紀に據て改む
○正四位下「正躬王」、正は原本從に作る閣本尾本及二月庚申紀に據て改む
○春澄朝臣善繩、善は原本良に作る二年正月丁卯

紀及四年正月丙子紀に據て改む
〇二品、原本三品に作る、閣本及齊衡二年八月己丑紀・九年二月癸卯紀に據て改む
〇從五位下守河內守、從以下五字諸本に據て補ふ
〇大枝朝臣、枝は原本江に作る下文二月己巳紀に據て改む

式部少輔大枝朝臣音人爲左中辨、從五位上行民部少輔藤原朝臣菅雄爲大輔、宮內少輔從五位下滋野朝臣善根爲民部少輔、從五位上守治部大輔藤原朝臣本雄爲大藏大輔、散位從五位下丹墀眞人弟梶爲少輔、從四位下行攝津守紀朝臣今守爲山城守、散位外從五位下多米宿禰弟益爲介、從五位下在原朝臣安貞爲大和權守、從五位下藤原朝臣秀雄爲河內守、攝津權守從五位上安倍朝臣貞行爲正守、散位從四位上源朝臣冷爲伊勢守、從五位上行皇太后宮亮三統宿禰眞淨爲介、本官如故、散位從五位下藤原朝臣良近爲權介、外從五位下善道朝臣繼根爲伊豆守、二品行式部卿仲野親王爲上總太守、式部卿如故、散位從五位下橘朝臣吉雄爲信濃權守、從五位下行內藏助紀朝臣冬雄爲介、散位從四位上基棟王爲下野權守、從五位下伴宿禰河男爲介、從四位下行越中守房世王爲越前權守、從五位下守大判事橘朝臣春成爲越中權守、從五位下守河內守大枝朝臣直臣爲介、散位從五位下高橋朝臣文室麻呂爲越後介、從四位下行左中辨兼大藏大輔高階眞人岑

緒爲丹波守、散位從五位上文室朝臣笠科爲丹後守、大藏少輔從五位下藤原朝臣正世爲因幡介、大監物從五位下藤原朝臣秋雄爲播磨權介、從五位下行陰陽權助兼陰陽博士滋岳朝臣川人爲權大掾、餘官如故、右近衞中將從四位下源朝臣興爲兼美作守、參議正四位下行左兵衞督兼伊勢守源朝臣多爲備前守、左兵衞督如故、散位從五位下小野朝臣國梁爲備後介、從五位下藤原朝臣國經爲權介、從五位上藤原朝臣闕主爲安藝守、從五位下紀朝臣春常爲長門守、外從五位下菅野朝臣高松爲紀伊介、從四位上行彈正大弼茂世王爲阿波守、從五位上守左近衞少將藤原朝臣有眞爲介、少將如故、從四位下行民部大輔豐前王爲伊豫守、從五位下守右近衞權少將藤原朝臣山陰爲介、少將如故、大藏卿正四位下源朝臣生爲筑前守、宮內大丞正六位上大原眞人安雄、去年十一月十六日、闕賜爵之日、式部省引列於庭中、而內記漏脫、不書位記、遂以空還、然而勅賜著緋、是日追賜從五位下告身、授無位長岑宿禰良子從五位下、○十四日己丑、大極殿齋會畢、僧綱以下、奉參

○陰陽權助兼、原本助を介に作り兼字なし諸本及元年十一月庚午紀に據て改め補ふ
○右近衞(源朝臣興)、右は原本左に作る諸本及元年正月庚午紀に據て改む
○左兵衞督如故、左は原本右に作る元年九月癸酉紀及六年正月甲午紀に據て改む
○右近衞權少將藤原朝臣山陰、原本右を左に陰を蔭に作る右は閣本尾本谷本及二年八月癸卯紀に據て改め陰は祕本閣本尾本等に據て改む
○筑前守、補任には權守とす
○十六日、十は祕本閣本尾本紀略及二年十一月壬辰紀に據て補ふ
○追賜、追は原本進に作る諸本に據て改む

○李居正、諸本正字なし類史百九十四、紀略此に同じ
○內敎坊、類史七十二に內字なし紀略此に同じ
○雅樂少允、類史樂下に寮字あり
○是日宣詔、東大寺要錄三に貞觀三年正月廿一日太政官符として出づ文異同あり參看すべし
○奉修理、類史一百七十七及紀略奉字なし
○佛像功夫、原本像字なく功を工に作る諸本及類史紀略に據て改め補ふ
○无遮之大會、維摩經會なり
○至于會日、于は類史紀略に據て補ふ
○普爲供養、普は原本並に作る尾本及類史に據て改む爲は諸本及に作る
○我寺、寺恐くは等の誤
○先帝、文德天皇
○本願天皇、聖武天皇
○初行修理、行は原本作に作る祕本前本及要錄に據て改む
○當時、要錄聖朝世の三字に作る

內殿、論議如常、○十六日辛卯、帝御前殿、賜宴侍臣、踏歌賜祿如常、○十七日壬辰、降雨、於豐樂殿行射禮、上不臨御、勅公卿、令監射焉、○廿日乙未、出雲國上言、渤海國使李居正等一百五人、自隱岐國來著嶋根郡、○廿一日丙申、內宴近臣、文人賦詩、內教坊奏樂如常儀、賜祿有差、授雅樂少允正六位上和邇部大田麻呂外從五位下、大田麻呂工於吹笛者也、是日宣詔山城、河內、和泉、攝津、及七道諸國司、近來奉修理東大寺大毗盧遮那佛像、功夫既成、仍來三月十四日當設无遮之大會、極莊嚴之妙態、宜自十一日至廿日禁斷殺生、至于會日、於國分二寺、各開齋會、請集部內僧尼、普爲供養、其料物便用正稅、其大宰府於觀音寺修之、令導師具演事由、兼令會集僧尼、俱稱讚盧舍那佛號、乃至無知小民教作是念、我寺知識所奉修理毗盧舍那、今日至心應奉供養、我亦運心、專念同就、廣作功德、但先帝准據本願天皇之弘願、以八幡大菩薩爲主、天下名神及萬民爲知識衆、初行修理、今至當時、此事遂成、始終雖殊、德業惟一、然則使八幡大菩薩別得解脫、令諸餘名神神力自在、本願天皇、及

○聖靈、要錄聖尊に作る
○爰及當今云云、要錄大に異同あり
○終證、終は閣本尾本谷本等修に作る
○特以穀春、稻は穗のままなるをいひ穀はモミなり穀春即ち米なり原本特を時に、春を倉に作る祕本閣本谷本及類史百九十四に據て改む
○(二月)沒陸奥國司、原本沒を役に作り司字なし祕本閣本尾本及類史八十七に據て改め補ふ
○二品兵部卿、前後の例に據るに品下に行字あるべきなり
○國業比賣神、式外、所在未詳
○寫得、得は諸本に據て補ふ

先帝御靈、乃至開闢以來登遐聖靈、同賴薰修、早開覺花、爰及當今、表裏夷晏、風雨順時、年穀豐稔、以此爲基、當遍法界、不論自他、終證菩提焉、下知出雲國司云、渤海客徒依例供給、但舊用稻、今度特以穀春充、○廿八日癸卯、散位正六位上藤原朝臣春景、兵部少錄正七位下葛井連善宗爲領渤海客使、播磨少目大初位上春日朝臣宅成爲通事、勅、竟使事之間、藤原春景宜稱但馬權介、葛井善宗稱因幡權掾、○二月乙巳朔、日有蝕之、○二日丙午、沒陸奥國司守從五位上坂上大宿禰當道、介從五位下仲宿禰春宗、及掾已下記事以上公廨、以前守從五位上文室朝臣有眞解由不與過程限也、前守有眞、記事葛木種主等、科公事稽留罪、以程限之內不分付官物也、○三日丁未、攝津國豐嶋郡古荒田五十七町、賜二品兵部卿忠良親王、○四日戊申、祈年祭、幷春日祭如常、○七日辛亥、遣唐使者向攝津國住吉神社奉神寶、授信濃國正六位上國業比賣神從五位下、先是令奉爲先帝寫得金字大般若經一部、是日於內殿屈請百僧、奉讀彼經、限三日訖、授外從五位下錦部連清刀自從五

位下、○十日甲寅、讀經事畢、自僧綱還、各施度者一人、所司有布施之外、以內藏寮絹綿布加賜焉、○十三日丁巳、釋奠如常、讃岐國從五位上田村神列於官社、○十六日庚申、散位從五位上和氣朝臣巨範爲中務少輔、從五位下伴宿禰益友爲大監物、從五位上行宮內少輔源朝臣同爲大學頭、從五位上行中務少輔源朝臣包爲治部大輔、正五位上行大學頭豊階眞人安人爲刑部大輔、散位從五位下橘朝臣主雄爲大判事、主計頭從五位上兼行木工助笠博士有宗宿禰益門爲木工權頭、主計頭笠博士如故、外從五位下行木工權少允志紀縣主貞成爲助、參議正四位下正躬王爲彈正大弼、從五位下行主殿權助藤原朝臣水谷爲齋院長官、權助如故、散位從五位下清原眞人惟岳爲勘解由次官、從五位上行武藏介平朝臣春香爲權守、從五位下行武藏權介佐伯宿禰子房爲介、○十八日壬戌、皇太后臨御太政大臣東京染殿第、王公以下莫不畢會、盛設肴饌、終日歡飲、雅樂寮擧音樂、賜親王以下五位以上衣被絹、諸司六位以下及女孺等、賜祿有差、夜分

○田村神、嘉祥二年二月癸丑紀(續後紀三六〇頁)に見ゆ
○從五位上(巨範)上は原本下に作る元年十一月庚午紀及下文己巳紀に據て改む
○染殿第、拾芥抄中末に染殿正親町北京極西二町忠仁公家或本染殿清和院同所と見ゆ
○肴饌、肴は原本希に作る諸本及紀略に據て改む
○歡飲、原本極歡に作る諸本及紀略に據て改む

○鳳輦、有職抄裝束篇下に朝覲還幸等ノ晴ノ時乘御凡行幸ニハ大略鳳輦也其躰金鳳御輿ノ上ニ立也とあり皇太后も鳳輦に乘り給ふを例とし牛車は略儀なり

○會集人、類史百七十七集下に其字あり紀略にはなし

○直道、祕本直を眞に作るは非なり

之後、還御本宮、太后可御鳳輦、而今日用牛車、○十九日癸亥、授外從五位下行隼人正難波連蘰麻呂從五位下、主殿允正八位下伴大田宿禰常雄外從五位下、无位上毛野朝臣滋子從五位下、昨日皇太后御太政大臣第、仍有此賞、蘰麻呂已下、大臣家之人也、○廿一日乙丑、詔山城、河內、和泉、攝津、七道諸國司云、來三月十四日、當設无遮大會、奉供養東大寺大毗盧舍那佛、宜令彼日會集人、授十善戒、○廿五日己巳、皇太后向大原野神社奉幣、御牛車、以藤原氏六位以下、爲御車從者、是日、以周防守從五位下藤原朝臣直道爲少納言、散位從五位上藤原朝臣諸葛爲中務少輔、齋院長官從五位下兼行主殿權助藤原朝臣水谷爲侍從、餘官如故、從五位下行侍醫兼醫博士駿河介興道宿禰名繼爲內藥正、侍醫駿河介如故、從五位上行中務少輔和氣朝臣巨範爲大藏少輔、從五位下行越中介大枝朝臣直臣爲駿河權守、從五位上守左近衞少將兼行近江權介藤原朝臣良尙爲正介、少將如故、外從五位下行紀伊介菅野朝臣高松爲越中介、大藏少輔從五位下丹墀眞人弟梶爲周防守、

詔大納言正三位兼行右近衞大將源朝臣定、聽以私鷹鶴各二聯、遊獵山城、河内、和泉、攝津等國禁野之外、○廿九日癸酉、皇太后落飾入道、文德天皇女御從一位藤原朝臣古子相從出家、參議從四位上行大宰大貳清原眞人岑成卒、岑成者左京人、贈一品舍人親王之後也、曾祖二世從四位上守部王、祖從五位下猪名王、父无位弟村王、岑成是弟村之子也、天長五年、爲近江大掾、六年授從五位下、爲筑後守、七年二月、母憂去職、其年十月、拜近江介、九年加從五位上、岑成本名美能、至于十年六月、賜姓清原眞人、改名爲岑成、十一月加正五位下、承和元年、授從四位下、十一年爲越前守、赴任之後、取暇入京、隱居不出、所司奏聞、官當解任、免從四位下之階、十三年授正五位下、十四年春、拜大和守、嘉祥元年授從四位下、爲彈正大弼、遷爲左中辨、仁壽二年、出爲越前守、八月留爲彈正大弼、齊衡二年進從四位上、除右大辨、天安元年、遷大藏卿、二年兼因幡守、貞觀元年拜參議、二年爲大宰大貳、卒於官、岑成立性清直、不拘小節、初爲大和守、盛改造官舍、政有能名、至于爲大貳、西府倉屋破壞特甚、有

○大納言正三位、正三位の三字は類聚國史及下文四月甲申紀に據て補ふ
○山城、城は原本域に作る意本及類聚國史に據て改む
○皇太后落飾入道、皇太后は文德實錄所引書達記に四月廿五日出家五月廿五日皆幸合安ニ比丘己大戒ニ法諱ニ覺、諱郷とあり皇太后御名は順子、仁明天皇后、文德天皇御母儀
○古子、皇太后御妹
○清原眞人岑成卒、岑成の名は續後紀天長十年十一月庚午紀に始て見え文德紀には屢見ゆ叙任の年月は補任に詳なり
○岑成者、者は諸本に據て補ふ
○賜姓清原眞人、續後紀及補任に據れば嘉祥二年十一月壬子とあり此に書す所疑はし
○十一月加正五位下、下は原本上に作る續後紀及補任に據て改む
○齊衡、衡は原本衞に作る諸本に據て改む
○盛改造、諸本改字なし恐くは衍
○政有能名、政は印本閣本尾本等に據て補ふ

○伐神社之木云云、此條齊明天皇七年五月癸卯紀を參看すべし

（三月）三日丁丑、原本三を二に丁丑を丙子に作る二は諸本及紀略に據り丁丑は類史百七十八に據て改む御燈は三月三日なること明なればなり

○白鳥神、式外、神祇志に白鳥神社今在名西郡と見ゆ

○停防鴨河葛野河二使、三代格十六に太政官符見ゆ

○奉供養、奉は祕本閣本尾本及要錄に據て補ふ

○左京大夫、左は原本右に作る二年八月癸卯紀に據て改む

○左衞門權佐、權は下文に據て補ふ天安元年正月癸丑紀證とすべし

意脩造、不遑寧居、伐神社之木、充結構之用、或人諫云、此神見稱有靈、祟咎所致、不利於人、岑成拒而不肯、强令伐取、因此受病、不幾而卒、時年六十三、○三月乙亥朔、殞霜、○三日丁丑、御齋燒燈如常、○四日戊寅、自一日霜頻降、○六日庚辰、授阿波國正六位上白鳥神從五位下、○七日辛巳、新鑄銅印一面、賜東市司、○八日壬午、授左近衞權少將正五位下兼行少納言侍從播磨介藤原朝臣基經從四位下、散位從四位下忠貞王爲大學頭、從五位上源朝臣冏爲宮內少輔、○十二日丙戌、授從八位下齋部宿禰文山從五位下、文山修理東大寺大佛、巧思不恒、功夫早成、仍以賞焉、○十三日丁亥、令百官限三箇日斷魚肉、以明日應奉供養東大寺毗盧舍那佛故也、停防鴨河葛野河二使、隷山城國、○十四日戊子、於東大寺、設無遮大會、奉供養毗盧舍那大佛、勅二品治部卿賀陽親王、三品中務卿諱（光孝天皇）親王、四品彈正尹本康親王、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男、從四位下行右中辨藤原朝臣冬緖、左京大夫從四位下在原朝臣行平、從五位下守左衞門權佐紀朝臣春枝、

○外從五位下布瑠宿禰、原本外字なく瑠を留に作る祕本閣本尾本に據て改め補ふ
○左大史、原本左下に京字あり諸本に據て刪る
○天平十五年云云、續紀同年十月辛巳紀に見ゆ
○齊衡二年云云、文德紀同年五月庚午紀に見ゆ
○是日卽便開眼、原本是日の二字なく便を使に作る諸本及要錄に據て改め補ふ
○殿廊、殿は要錄に據て補ふ
○宿德、德は原本襟に作る諸本及要錄に據て改む
○具足、具は原本俱に作る祕本閣本前本及要錄に據て改む
○肆陣、肆は陣也又列也陣に行列也
○方羅、羅は原本聲に作る諸本及要錄奈本に據て改む羅は羅列の意
○壯齒者、壯年の者なり壯は原本狀に作る諸本及要錄に據て改む
○彩衣霓裳、色彩美しき衣裳を云霓は虹なり
○以移一天、要錄以を似に作り尾本移を彩に作る
○南北兩京、奈良と京都

散位外從五位下布瑠宿禰清貞、外從五位下行左大史三善宿禰清江、少外記正七位下御室朝臣安常等、相率向寺、監修會事、此是佛像感神聖武皇帝天平十五年創造、文德天皇齊衡二年、頭傾頸斷、頓落于地、年來修理、鎔鑄復舊、是日卽便開眼、佛師入籠、轆轤引上、乃點佛眼、凡其莊嚴之儀、不可勝載、殿廊之柱、衣以錦繡、壇場之上、敷其朱紫、懸七寶樹、遶栽庭際、藻餝幡蓋、排批香花、極巧盡麗、奪人目精、歷覽梵宇、處々莊餝、觀者不能厭而拋過、衲衣宿德、振錫秀出、威儀具足、塡噎堂宇、大唐、高麗、林邑等之樂、鼓鐘肆陣、絲竹方羅、先令內舍人端貌者廿人、供倭舞、次近衞壯齒者廿人東舞、後梵唄接響、衆樂遞奏、大佛殿第一層上結構棚閣、更施舞臺、天人天女、彩衣霓裳、音伎聒空、以移一天、南北兩京貴賤士女、充街塞陌、莫不聚觀、躡足翕肩、人不得顧、先是詔從四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善、作咒願文曰、粤若天國押開廣庭天皇十三年壬申、佛像西睠釋教東來、至于感神聖武皇帝天平十五年癸未、敬造此盧舍那大佛、二百有餘載、金姿誕耀、光輝百億之中、實相宏開、震動三

○蹠足、蹠は要錄踊に作る何れにても通ず
○天國押開廣庭天皇、欽明天皇
○佛像西瞻釋教東來、佛教の渡來せるを云ふ瞻は眷に同じ眷は顧也嚮也、佛以下六字原本釋迦牟尼佛銅像の七字に作る要錄に據て改む祕本閣本以下諸本西下に還頭の二字あり教字なし
○天平十五年癸未、續紀上三三〇頁に見ゆ
○實相、佛の有のまゝの姿を云ふ、實は要錄に據て補ふ
○光趺已成、光趺は後光趺坐なり佛像の已に成就せるを云ふ
○兜率之下生、兜率は欲界第四重の天の名、其內院は菩薩最後身の住處にして釋迦も此より人間に下世して成佛す故に佛をかく云り
○設開眼會、天平勝寶四年四月紀 續紀上三八六頁に見ゆ
○四夷間奏、唐古樂中樂散樂高麗林邑樂等を奏したるを云ふ
○千株、株は要錄柱に作る

千之外、一草一壤、獻至誠而爭先、一日三拜、應弘誓以競進、人神感慶、光趺已成、摸兜率之下生、狀須彌之高峙、爰設開眼會、車駕親臨、旌旗拂天、鐘鼓震地、四夷間奏、萬樂更陳、自斯而後、一百餘祀、先皇齊衡二年乙亥秋九月、現寂滅之爲樂、稱諸法之必空、廢千株之扶持、爲一時之傾毀、靈顏頓落、疑滿月之暮西山、寶髻倶投、似遊雲之類北礀、眞容特峙、儼若思惟、玉座無驚、宛然禪定、先皇大鈞无事、神器有餘、堯曦將佛鏡倶懸、軒車與法輪同轉、刑罰措而不用、功德因以同施、慨諸佛之失元首、恨衆庶之無瞻仰、以爲神力不動於大力、四禪不壞於三灾、勾海將留、魔風可返、卽傍謀卿相、博詢蒭蕘、採公輸班之雲械、據張平子之參輪、周官詮撰日之工、荊容練成風之功、雖則道濡遐邇、覗動幽明、龍王移水府之琛、星容布天國之賫、紅粟朽廩、贍萬民而有羸、靑鳬委貫、散四海以無盡、猶示功非獨擧、力寄群緣、一切偕心、衆生共助、一粒攸捨、齊金剛之珍藏、半錢所施、比銅山之陶鑄、於是神靈致感、奔爲知識之先、外道飯心、還爲恭敬之輩、何況施身童子、忍辱仙人、天女持花、山神獻菓、三槐九棘、襛玉佩而從飯、

桂殿椒房、落金釵以靡惜、無量無盡、荷擔爭馳、自西自東、車馬競至、遂使銀繩運轉、見飛頭於虛空、璧相金還、瞻圓面於寶殿、猶喩漢帝之日、再中天上、秦王之鏡、更出地中、星豪一點、排重雲而宵光、花箸四照、逐長春以曉發、前佛後佛、非謂二佛、前身後身、猶是一身、如去如來、不生不滅、豈此之謂哉、若使陰陽爲炭、萬物爲銅、較量功力、豈如此哉、自鼎湖龍去、梧岫雲飛、藻繢有遺、供養未畢、

○北瀾、瀾は要錄潤に作る　瀾潤相通す　○大鈞、原本鈞を天に作る　諸本及要錄に據て改む　辭源に大鈞也言其造成萬物如陶之作鈞也とあり　此語文選鵩鳥賦に見ゆ　○堯曦、堯は唐堯　曦は日光也　此語高士傳に見ゆ　原本曦に作るは曦の省文　○軒車、軒は黃帝軒轅氏にて黃帝の車　○因以同施、因は要錄に據て補ふ　同は要錄周に作る

○不動、動は原本勤に作る前本及要錄に據て改む　○四禪云云、第四禪天にて色界にあり三災は火水風の三災にて第三禪天迄は此三災の爲に浸さるゝと云　○勾海、勾は原本四に作る諸本及要錄に據て改む　○公輸班之雲械、墨子公輸篇に公輸盤爲楚造雲梯之械とあり原本械を械に作るは誤なり　○張平子之參輪、輪は原本輸に作る諸本及要錄に據て改む張平子は張衡字平子後漢の人なり後漢書張衡傳に參輪可使自轉、木雕猶能獨飛注に間者言衡作三輪木雕、尙能飛轉、傳子曰張衡能令三輪獨轉也とあり　○周官詮揆日之工、毛詩鄘風定之方中章に作于楚宮、揆之以日、注に揆度也度日出日入以知東西とあり日景に依て東西南北を知る事周禮考工記匠人建國の條に見ゆ故に周官と云か或は當に周宮に作るべしと云詮は具也就也　○荊容練成風之功、莊子徐無鬼篇に郢人堊漫其鼻端若蠅翼使匠石斵之匠石運斤成風聽而斵之盡堊而鼻不傷郢人立不失容とあるに據れり郢は楚即ち荊國の都なり故に荊容と云　○水府之琛、琛は原本深に作る諸本及要錄に據て改む　○星容、原本容を客に作る祕本閣本尾本等に據て改む　○天國之畵、原本國を圖に畵を責に作る要錄に據て改む　○紅粟朽廩、穀物多きを云紅粟は紅腐して食ふべからざるなり　○青鳧委貫、西陽雜俎に青鳧即青蚨也とあり錢を云貫は錢差なり　○施身童子、波羅捺國王の太子忍辱父母の病篤き時自ら肉を割きて藥に充つと云之を云か　○忍辱仙人、釋迦如來忍辱仙となりて忍辱の行を修し歌利王の爲めに身を支分せられしを云　○三槐九棘云云、三槐九棘は三公九卿なり周禮秋官に見ゆ玉佩は毛詩秦風渭陽章に何以贈之瓊瑰玉佩とあり帶に繫ぐる所の物なり、從は原本徒に作る淀本及要錄に據て改む　○桂殿椒房云云、桂殿椒房は後宮を云金釵を脫ぎて惜む所なしとなり　○銀繩運轉云云、以下瞻圓面於寶殿に至るまでは傾き落ちし佛の頭を修繕して舊の如くなせるを云璧相は玉の姿なり、原本璧を壁に作る諸本に據て改む　○漢帝之日云云、風俗通に孝文皇帝小生於軍、及長大有識、不知父所在、日祭於代東門外、高帝數夢見一兒祭已、使使至代求之、果得文帝、立爲代王、及後徵到後、期不得立、日爲再中とあるに據れり　○秦王之鏡云云、淵鑑類函所引西陽雜俎に僬僥石岸石窟有方鏡、徑丈餘照見人五藏、秦始皇時號爲照骨寶とあるを云か　○星豪、白毫を云豪は當に毫に作るべし　○宵光、宵は原本霄に作る黑川校本に據て改む　○前佛後佛、今佛以前に成道して已に入滅せるを前佛といひ未來に示現するを後佛と云迦葉佛彌勒菩薩の如き是なり　○豈此之謂哉、

豈は原本者に作る秘本閣本尾本等に據て改む　○陰陽爲炭云云、此二句は文選鵩鳥賦に出づ　○豈如此哉、此は要錄に據て補ふ　○鼎湖云云、黃帝の故事、已に見ゆ、文德天皇の崩御を申す　○藻績有遺、績は原本績に作る要錄に據て改む、藻は水草有文者、績は與繪同綵畫也とあり修繕未だ遺る所あるを云

○寢繩、淮南子覽冥訓に女媧鍊五色石以補蒼天、積蘆灰以止淫水、枕方寢繩、當此之時禽獸蝮蛇無不匿其爪牙藏其螫毒、節略　注に寢繩直身而臥也とあり　○馭七聖、七聖は莊子徐無鬼篇に黃帝將見大隗乎具茨之山、方明爲御、昌寓驂乘、張若謵朋前馬、昆閽滑稽後車、至於襄城之野、七聖皆迷とあり馭は優越するを云　○三皇、伏羲・神農・黃帝　○爲具相、完全なる姿となせるを云　○青蓮湛目云云、佛像の完成せる美しき姿を形容せるなり青蓮云云は眼を形容す三十二相に眼色如紺青相あり赭石云云は口を形容す赭石は要錄赭菓に作る　○煥者、要錄若を奐に作る　○八十四儀・三十二相の對なり　○卽使莊嚴、原本便を使

爰今上垂衣致化、寢繩成功、馭七聖而無爲、軼三皇以有截、憂良圖之不竟、悲善業之無成、奉先百工、遂爲具相、以此貞觀三年歲次辛巳春三月十四日、青蓮湛目、褰翠幌而高臨、赭石涵脣、啓紅窓以密咲、三十二相、煥若天成、八十四儀、巍如踊出、卽便莊嚴金光護國之香場、排辨天平勝寶之舊事、曆覺四法、激奔電於彫櫳、複屋三休、繞浮烟於繡檻、瓊廡淸英之地、鵞鷺成行、琪樹恢廊之庭、鵷鸞致態、飛箏列鐸、抽上妙之奇調、淸唄梵鐘、發中天之異響、初虹曳綵、卽挂新幡、瑞鳳翻金、還棲舊剎、香煙花雨、供三世佛之虛空、玉饌瓊漿、薦十方僧之現在、天籟地籟、參差萬殊、南音北音、鏗鏘九變、寶螺獸吼、法皷雷鳴、蕩穢滌邪、和神感鬼、激楚陽阿之曲、俳優狄鞮之偶、莫不動風雲致鱗羽者矣、於是閭閻霧擈、士女雲趁、車不得旋、人不得顧、繞長廊而遊目、翠簾啓窓、推高門而翕肩、紅袖成帷、非夫含樞宅海提象御震者、焉能動而行之、非夫薰修百億覆護三千者、誰敢靜

に作り莊嚴の二字なし要錄に據て改め補ふ
○甍豐四注、以下修理新に成れる大佛殿の堂宇の美しきを形容せり
○淸英、英は原本第に作る諸本及要錄に據て改む
○鶖鷺、僧侶を云
○恢廓、恢は原本恠に作る要錄に據て改む
○鵷鷺致態、鵷鷺は朝臣の列を云劉禹錫の詩に鵷鷺想退朝とあり態は原本能に作る諸本及要錄(奈本)に據て改む
○飛箏列鐸云云、音樂の微妙なるを稱贊す箏は原本筭に作る閣本前本谷本及要錄に據て改む
○初虹、初要錄神歟と云
○天籟地籟、莊子に出づ
○激楚陽阿之曲、原本楚陽阿を楚湯河に作る諸本に據て改む激楚は文選上林賦に激楚結風、注に楚歌曲也激衝激急風也陽阿は淮南子俶眞訓に足蹀陽阿之舞、注に陽阿古名倡也とあり
○俳優狄鞮之偶、文選上林賦に俳優侏儒狄鞮之倡、注に俳倡也優樂也狄鞮西戎樂名也とあり偶は恐くは倡の誤なるべし要

而當之、然則金鐘盛四海之水、能灌頂者曰師、玉斗騰七耀之暉、獨臨智者稱聖、先分功德、救濟神祇、早脫威怒之煩、速趁慈善之果、憑斯功德、奉資感神之山陵、以此勝因、奉翊田邑之靈廟、俱懸眞鏡、爲遍周法界之光、同轉梵輪、爲願行圓滿之佛、令茲景福、奉薦聖朝、四三才而齊儀、六五龍而比壽、愕夢無侵其慮、甘寢有恬其神、璇璣不廢、玉燭恒照、九土開謳、千廟發詠、太皇太后、中宮、摩耶之德、窮累劫而無銷、章德之規、與坤元以等久、親王諸王、相府卿門、拱北辰而無移、據南岳以不動、百僚之臣、千城之宰、比屋流祥、闔門契福、十方之所該被、三界之所包含、俱出塵區、同登智岸、郎說咒願曰、

蓮華法藏、　莊嚴世界、　祇園重閣、　開演勝義、　十重法身、
遍周法界、　不可思議、　盧舍那佛、　感寶天皇、　敬造金容、
天人合應、　祥符顯彰、　一人弘誓、　萬方捨財、　塊壤盈握、
枝葉捧手、　銑鎔已畢、　藻飾具成、　光焰襲天、　跏趺連地、
榆芒曉點、　桂影宵臨、　神宮不夜、　寰宇長秋、　一日三拜、

録は伎に作る
○閶闔務撲云云、以下参詣人の多きを云ふ王勃舍利塔碑に閶闔務撲士女雲流とあり、務は原本霜に作る諸本に據て改む
○車不得旋云云、文選西都賦に人不得顧車不得旋とあり、旋は原本施に作る諸本及要録に據て改む
○含樞、隋書天文志に黄帝坐一星在太微中含樞紐之神也とあり
○宅海、沈約九日侍宴樂遊苑詩に憑玉宅海端居御天とあり海は四海の略なり
○握象御寓、原本御寓を北宸に作る諸本及要録に據て改む象は天象なり含德以下天子の德を形容す
○兼修云云、佛の德を形容す三千は三千世界なり
○玉斗、斗は要録車に作る
○感神之山陵、聖武天皇を申す
○本朔、朔は原本湖に作る要録に據て改む朔は輔也
○願行圓滿、願は誓願、行は修行圓滿は具足に同じ
○令茲景福、原本令茲を

千年六時、霜鐘遠響、風鐸長鳴、至誠欽仰、精進供養、香花無數、伎樂自在、爰及齊衡、圓首忽類、叡情悲感、黎庶栖遑、因修舊迹、補綴先儀、功未具足、先帝昇遐、聖皇繼體、文思欽明、垂拱無爲、優遊有道、股肱寧濟、輔相肅雍、赤縣同文、蒼旻俱悅、貞觀三年、歲次辛巳、暮春之月、十四日晨、莊嚴洽盡、頭顱端正、慧眼重開、靈毫更照、乃勅境内、禁斷屠漁、預勸會衆、受十善戒、請三世佛、供養上饌、屈十方僧、布施妙財、虹幡製綵、雲幢揚光、鼉鼓群鳴、鳳簫俱叫、琴瑟克諧、金石殊調、似夢鈞天、疑生淨土、天神皈依、地靈來集、觀者如堵、來者如雲、都雄野老、厲行連袖、趙美燕餘、魚貫繼履、如是景祐、先資七廟、滌想三明、恬神八解、感神天皇、遠慮斯基、早叶宿誠、當成今佛、田邑聖靈、深圖始啓、速遊六天、遂登十地、兩皇太后、母儀堅固、中宮淑德、

霧露無侵、方今聖朝、寶祚延長、恒沙入壽、切石添身、風調舜曆、雨浹堯旬、萬民康樂、四境恬靜、天宮家宰、全保金剛、袞職名臣、永斷災難、文武百官、霑斯法味、牧守千里、沐此良緣、梵釋四王、龍神八部、增光日月、倍勢風雷、八幡菩薩、殊資妙因、依善知識、成菩提果、部類神祇、或幽或顯、俱乘梵筏、早脫假宅、山林聚落、河海諸神、扶持白業、愛護黃圖、三千法界、十二因緣、共出煩昏、同遊覺照、

○廿三日丁酉、詔河內攝津兩國、聽二品行式部卿兼上總太守仲野親王、以私鷹鷂各二聯、遊獵禁野之外、○廿五日己亥、禁陸奧國出境內之馬、○卅日甲辰、聽傳燈修行賢大法師眞如向南海道、

全慈に作る令は要錄に據り茲は諸本及要錄に據て改む　○四三才云云、三才は天地人なり天下の意に用ふ　○六五龍云云、五龍は五龍氏なり史記三皇本紀に見ゆ五龍氏を六にして其數を壽を同じくするを云　○玉燭恒照、爾雅に四時和謂之玉燭とあり、照は原本昭に作る要錄に據て改む　○九土、九州に同じ　○千廂、廂は箱に同じ車箱なり禾稼豐に稔りて收獲多きを云　○摩耶、淨飯王の妻釋迦の母　○等久、久は原本又に作る諸本及要錄に據て改む　○拱北辰、拱は共に同じ歸向也、論語爲政篇に爲政以德譬如北辰居其所而衆星共之とあり　○據南岳云云、杜甫別蘇徯詩に北辰當宇宙南岳據江湖とあり南岳は天柱山、天柱は晉書天文志に三台六星一曰天柱三公之位也とあり故に斯く云るなるべし　○百僚、僚は原本寮に作る前本從本谷本及要錄に據て改む　○該被、該は兼也備也　○說咒願、說は原本親に作る諸本に據て改む　○蓮華、華は諸本及要錄に據て改む　○十重法身、重は原本方に作る諸本及要錄に據て改む佛に十身あり故に云　○金容、大佛を云　○天人合應、文選西都賦に出づ天意人事合應するを云　○一人、人は原本切に作る要錄に據て改む　○塊壤涓埃云云、上文に一草一壤獻至誠而爭先とあるを云　○榆芒、芒は原本芭に作る諸本に據て改む　○宵臨、宵は原本霄に作る要錄に據て改む　○六時、晝三時（晨朝日中日沒）夜三時（初夜中夜後夜）合せて六時なり　○栖遑、あわてさわぐを云　○功未具足、未は原本夫に作る諸本及要錄に據て改む　○文思欽明、尚書堯典に出づ　○寧濟、民を安じ救ふを云　○輔相肅雍、毛詩周頌清廟章に肅

雝練相、注に繡は亦雝は和とあり雝雍同じ要錄は繡雍を書羅に作る　○倶悅、倶は諸本皆に作り要錄旨に作る皆の訛か　○暮春之月、要錄之を三に作る　○十四日晨、要錄晨を辰に作る　○請三世佛、以下妙財に至る原本十方佛布施妙財請三世佛供養上饌とあり要錄に據て改む　○鼉鼓、毛詩大雅靈臺章に鼉鼓逢々とあり鼉の皮にて張りし鼓なり　○趙美燕餘、婦女子を云古詩に燕趙多佳人また張衡七辨に淮南淸歌燕餘材舞とあり　○魚貫、雁行の對、字書に言相續而進如魚之一貫也とあり魏志鄧艾傳に出づ　○滌想三明、三明は三達とも云阿羅漢果の聖者の有する三種の智明、滌は原本條に作る諸本に據て改む　○八解、八解脫にて八種の解脫觀なり　○六天、第六天なり他化自在天とも云六欲天の最高にあり　○十地、已に注す　○務露無侵、後漢書皇后紀に身犯霧露於雲臺之上注に霧露謂疾病也とあり　○恆沙、恆河の砂の數にて多數を云　○舜曆、曆は要錄春に作る　○天官冢宰、周禮天官に立天官冢宰使帥其屬而掌邦治以佐王均邦國とあり　○金剛、七寶の一にて寶石の名百錬すれども銷けず堅くして利く玉を截ること泥の如しと云　○衮職、三公を云　○梵筏、佛法を筏に喩ふ　○煨宅、火宅に同じ　○山林、山は原本水に作る前本谷本淀本及要錄に據て改む　○白業、善業を云已に注す　○黃圖、白業の對、國土の意なるべし　○十二因緣、人の三世に流轉するを十二種の因緣に別つ　○二品行式部卿、行は上文正月戊子紀に據て補ふ　○禁陸奧國云云、此太政官符三代格十九に出づ

○夏四月乙巳朔、天皇不御前殿、於右近仗下、賜侍臣飲、賜祿如常、喚左右近衛樂人於北殿東庭、奏音樂、中宮別賜中將以下、近衛以上、御衣幷布各有差、○四日戊申、廣瀨龍田平野等祭如常、○五日己酉、梅宮祭如常、○七日辛亥、地震、○八日壬子、內殿灌佛如常、授近江國從五位下川枯神正五位下、○九日癸丑、從五位上行中務少輔藤原朝臣諸葛爲少納言、從五位上行宮內少輔源朝臣同爲中務少輔、散位從五位下文室朝臣卷雄爲主殿權助、周防守從五位下丹墀眞人弟梶爲兼鑄錢長官、○十日甲寅、授伊賀國正六位上高藏神、阿波神、高松神、宇奈根神、並從五位下、○十二日丙辰、賀茂齋內親王臨鴨水修禊、是日、便入紫野齋院、勅

（四月）右近仗下、下は紀略頭に作る　○賜祿、賜は諸本及類史七十五に據て補ふ　○北殿、仁壽殿を云　○音樂、樂は類史聲に作る　○川枯神、神名式近江國甲賀郡川枯神社二座、油日村中　○高藏神、式外、神祇志に今在阿拜郡西村と　○阿波神、神名式伊賀國山田郡阿波神社、阿山郡阿波村下阿波　○高松神、式外、今在未詳　○宇奈根神、式外、神祇志に今在名張郡宇陀下[illegible]村、宇は原本字に作る諸本に據て改む

大納言正三位兼行右近衞大將源朝臣定監禊事、○十三日丁巳、勅、綠皇太后御願、安祥寺年分度三人外、寄住寺中、七大寺僧每年一人、請用維摩最勝兩會聽衆一人、預竪義、但年分度者、居山七年預竪義、十三年預聽衆、○十四日戊午、宮中有聲如雷、○十五日己未、公卿就太政官曹司廳、賜文武官成選位記、宣制如常、○十六日庚申、諸衞警固、緣賀茂祭也、○十七日辛酉、修賀茂祭、先是內藏寮有人死穢、仍勅使自縫殿寮進發、○十八日壬戌、諸衞解嚴、○廿五日己巳、文德天皇皇子、男二人女三人、未定名號、是日、或爲親王、或爲朝臣、惟恒親王、禮子內親王、並母藤原朝臣氏、源朝臣行有母布勢氏、源朝臣富子母菅原氏、源朝臣淵子母滋野氏是也、○廿八日壬申、天皇御武德殿、閱覽左右馬寮御馬駒、○五月甲戌朔、授園池司無位御氣津神從五位下、○五日戊寅、天皇御武德殿、觀覽騎射、親王以下、五位以上、貢競走馬、○六日己卯、天皇御同殿、觀覽競走馬、並如舊儀、○十一日甲申、式部省奏諸國郡司擬文、帝不御前殿、右大臣於仗頭、定而奏焉、○十三日丙戌、地震、○十四日丁亥、從四位上

○齋內親王、齋は原本齊に作る祕本谷本に據て改む下同じ
○大納言、言は諸本及類史五に據て補ふ
○寺中、中は諸本及類史百七十七に據て補ふ
○聽衆、法華八講等の一座に列なる僧衆の中にて講師問者を除きし餘人を云
○竪義、立義に同じ論場に於て探題より出したる論題に就て義を立つるを云
○進發、發は諸本及類史五に據て補ふ
○諸衞、類史には衞下に府字あり
○惟恒親王、文德天皇第五皇子母藤原今子守貞女延喜四年四月八日薨
○禮子內親王、同第六皇女、母惟恒親王に同じ
○藤原朝臣氏、朝臣の二字は衍なるべし
○母布勢氏、原本母下に臣字あり衍なり諸本に據て刪る
○淵子、紹運錄に滋子に作る
（五月）御氣津神、宮內省園池司に祭る
○仗頭、陣の座なり

○名神七社、石清水は告文に見ゆれど其他の社は詳ならず

○經日、經は原本紅に作る諸本に據て改む

○大幣帛、幣は原本弊に作る祕本前本に據て改む

○奉出須、須は原本大書せるを祕本閣本尾本等に據て改む

○從五位上（家宗）、上は原本下に作る天安二年十一月甲子紀に據て改む

○正岑王、岑は諸本峯に作る

源朝臣光爲次侍從、○十五日戊子、遣使者於近京名神七社、奉幣祈雨、告文曰、天皇我詔旨止、掛畏支八幡大菩薩乃廣前仁申賜倍止申久、頃者經日不雨之天、百姓乃農業可枯損、掛畏岐大菩薩乃矜賜牟爾依天之、甘雨普降天、五穀豐熟倍之止念行天奈毛、散位從五位下和氣朝臣彝範乎差使天、禮代乃大幣帛乎令捧持弖奉出須、此狀乎平聞食天、甘雨忽降之女天、天下豐年爾有之女賜比、天皇朝庭乎寶位無動久、常磐堅磐爾護賜比矜賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申、自餘社告文准此、○十六日己丑、請諸大寺僧六十口於御在所、轉讀大般若經、限三箇日訖、祈甘雨也、○十八日辛卯、雷、少雨微澍、○十九日壬辰、地震、微雨即止、讀經更延二箇日、爲未得嘉澍也、○廿日癸巳、地震、從五位上守右少辨兼中宮亮藤原朝臣家宗爲右中辨、中宮亮如故、從五位下行伊勢權介藤原朝臣良近爲右少辨、散位從五位下橘朝臣門雄爲大監物、從五位下守左兵庫頭藤原朝臣數守爲宮內少輔、散位從五位下和氣朝臣彝範爲木工權助、大監物從五

位下正岑王爲內膳正、土左守從五位下橘朝臣岑雄爲彈正少弼、從四位下行丹波守高階眞人岑緒爲伊勢權守、從五位上行彈正少弼滋野朝臣善蔭爲丹波守、從五位下行木工助笠朝臣弘興爲土左守、從四位下行右中辨藤原朝臣冬緒爲大宰大貳、從五位下行內膳正連扶王爲右兵庫頭。○廿一日甲午、讀經畢、衆僧退散、諸司行布施之外、加施御被。晩間、不雨而雷。宣告存問兼領渤海客使但馬權介正六位上藤原朝臣春景、并出雲國司等云、渤海國使李居正、違先皇制、輙以吊來、亦令齎啓案、違例多端、事須責其輕慢、自彼却還、然而如聞、居正位在公卿、齡過懸車、才綺交新、猶有可愛、因欲特加優恤以聽入京、而頃者炎旱連日、有妨農時、慮夫路次、更以停止、又王啓并信物等不可更收、須進上中臺省牒、授伊豫國從五位上野間神從四位下、詔、左右京職、五畿內國、班給百姓口分田、國司其人、仍停遣使、以出雲國絹一百卌五疋、綿一千二百廿五屯、便頒賜渤海客徒一百五人。○廿六日己亥、太政官送渤海國中臺省牒、下存問使并出雲國司、絁一十疋、綿卌屯、別賜大使李居正、

○土左守、左は原本佐に作る諸本に據て改む下同じ
○橘朝臣岑雄、諸本岑を峯に作る
○岑緒、原本岑雄に作る諸本及上文正月戊子紀に據て改む
○木工助、元年十一月庚午紀に木工權助とあり
○弘興、興は原本與に作る閣本尾本前本及上下の文に據て改む
○冬緒、緒は原本雄に作る諸本及上文三月戊子紀に據て改む
○懸車、白虎通に臣七十懸車致仕とあり
○才綺交新、交は原本夫に作る諸本及類史百九十四に據て改む才綺は文藻あるを云
○以聽入京、聽は原本聞に作る諸本及類史に據て改む
○更以停止、更は諸本及類史に據て補ふ
○王啓、王は原本上に作る諸本及類史に據て改む
○野間神、神名式伊豫國野間郡野間神社（名神大）今越智郡乃萬村
○以出雲國絹、以下廿九字內藤氏は此條當入廿

六日條下に云り
○絹一百卅五疋、原本絹を給に作り其下に絁字あり卅を卌に作る祕本閣本尾本及類史に據て改め削る
○領賜渤海客徒、原本領を領に作り徒字なし諸本及類史に據て改め補ふ
○卅屯、卅は類史卌に作る
〔六月〕左右京職、右は諸本に據て補ふ
○奉充、奉は紀略に據て補ふ
○河陽離宮、山城國乙訓郡山崎にあり抄國郡部山城國の條に源昌朝臣爲守之時奏聞以河陽離宮爲國府」と見ゆ後國府となせるなり
○宮垣、宮は諸本に據て補ふ
○八橋云云、抄國郡部に八橋に作り、汗入は安世利、會見は安不美、日野は比乃と訓り
○月次祭、祭の字は類史になし
○始頒行長慶宣明曆經、宣は祕本尾本前本に據て補ふ、宣明曆經を用ふべき太政官符は三代格十七に見え釋日本紀に宣明曆

○廿九日壬寅、公卿就太政官曹司廳、任諸國銓擬郡司、散位從五位下藤原朝臣諸房爲齋宮頭、○六月甲辰朔、詔民部省、除弃大中臣、中臣兩氏絕戶、幷無身戶、左右京職惣一百卅七烟、先是正五位下守神祇伯中臣朝臣逸志、少副正六位上大中臣朝臣豐雄等奏言、請件無身絕戶等除帳、以絕胄蔭之訢、從之、○二日乙巳、和泉國日根郡田幷山岡廿三町七段百九十九步、永奉充淳和院、○三日丙午、無雲而雷、○七日庚戌、山城國奏言、河陽離宮、久不行幸、稍致破壞、請爲國司行政處、但不廢舊宮名、行幸之日、將加掃除、許之、○九日壬子、任伊勢齋內親王裝束使、大祓於建禮門前、伯耆國八橋(ヤハシ)、汗入(アセリ)、會見(アフミ)、日野(ヒノ)四郡、去年九月遭水災、百姓被損者多、詔復優二箇年、○十一日甲寅、修月次祭神今食祭、帝不御神嘉殿、親王公卿向神祇官行事、○十六日己未、始頒行長慶宣明曆經、先是陰陽頭從五位下兼行曆博士大春日朝臣眞野麻呂奏言、謹撿豐(トヨ)御食炊屋(ケカシキヤ)姬天皇(推古)十年十月、百濟國僧觀勒、始貢曆術、而未行於世、高天(タカマノ)原廣野(ヒロノ)姬天皇(持統)四年十二月、有勅始用元嘉曆、次用儀鳳曆、高野姬天皇(稱德)

天平寶字七年八月、停儀鳳曆、用開元大衍曆、厥後寶龜十一年、遣唐使錄事故從五位下行內藥正羽栗臣翼、貢寶應五紀曆經、云、大唐今停大衍曆、唯用此經、天應元年、有勅令據彼經造曆日、無人習學、不得傳業、猶用大衍曆經、已及百年、眞野麻呂去齊衡三年、申請用彼五紀曆、朝庭議云、國家據大衍曆經、造曆日尙矣、去聖已遠、義貴兩存、宜暫相兼不得偏用、貞觀元年、渤海國大使烏孝愼新貢長慶宣明曆經云、是大唐新用經也、眞野麻呂試加覆勘、理當固然、仍以彼新曆、比校大衍五紀等兩經、且察天文、且參時候、兩經之術、漸以麤疎、令朔節氣既有差、又勘大唐開成四年、大中十二年等曆、不復與彼新曆相違、曆議曰、陰陽之運、隨動而差、差而不已、遂與曆錯者、方今大唐開元以來、三改曆術、本朝天平以降、猶用一經、靜言事理、實不可然、請停舊用新、欽若天步、詔從之、○十七日庚申、詔定仁明天皇深草山陵四履、東西限一町五段、南限純子內親王家地、北限峯、散位正五位下橘朝臣貞根爲右京大夫、從五位下藤原朝臣三直爲安藝介、三直、貞觀拜安藝介、而會母喪去官、今起之、○廿日癸

長慶二年徐昂造とありまく唐書藝文志に長慶宣明曆三十四卷同要略一卷と見ゆ長慶二年は我弘仁十三年なり
○觀勒治貞曆術、推古天皇十年十月なり、原本勒を勸に作る隣本前本谷本に據て改む
○高天原廣野姫天皇、野は原本天の下にあり書紀持統紀に據て改む
○始用元嘉曆、持統天皇四年十一月紀に見ゆ此に十二月とあれど書紀は十一月甲申とす唐書藝文志に何承天宋元嘉曆二卷とあり
○儀鳳曆、唐高宗麟德二年李淳風作る所にて高宗の儀鳳年中に渡來せるものなり
○停儀鳳曆、寶字七年八月紀續紀下七七頁を參看すべし
○大衍曆、唐書藝文志に僧一行大衍曆一卷又曆議十卷とあり大は原本太に作る諸本に據て改む下同じ
○五紀曆經、唐書藝文志に寶應五紀曆四十卷
○用大衍曆經、格には此下に勘造曆日の四字あり

○齊衡三年、天安元年正月丙辰紀を參看すべし
○據ム、衍歷經、曆は狩谷氏の説に據て補ふ
○烏萇愼、烏、原本馬に作る諸本及楢に據て改む
○開成四年、承和六年
○大中十二年、天安二年原本大中を天平に作る閣本尾木及楢に據て改む
○天平以降、上文に據るに天平は天平寶字七年なり
○欽若天歩、天歩は天の歩度なり欽若は敬順なり尙書堯典に乃命羲和欽若昊天、とあり
○四履、履は原本至に作る[illegible]に據て改む履は左傳僖四年注に謂所踐履之界也、とあり
○内親王家地、狩谷氏曰家一本作家者非、此時純子内親王未薨也
○貞觀拜安藝介、三直安藝介に任ぜられしは天安二年正月にして此に貞觀とあるは[illegible]
○起之、起は原本赴に作る[illegible]に據て改む
○内宮大内人、狩谷校本に本居氏曰内宮古本作同宮可從とあり
○戩狀、狀は原本伏に作

亥、伊勢國朝明郡人六人部淳根麻呂妻秦美豆岐、一產三男、賜稻三百束、充乳母一人、三箇年間、給以公粮、○廿一日甲子、下知近江、伊賀、伊勢國等國司、役夫一百人、馬二百九十五疋、來九月四日、伊勢齋內親王、將入大神宮、仍預令點儲、宣詔伊勢國司幷大神宮司云、豐受宮禰宜正八位上神主河繼、內宮大內人外從八位下神主眞雄、同宮副大內人外少初位下神主伊勢雄等、一祖之後、分爭歷年、或告冒名、或云假姓、討其端緒、互有是非、並須摘其疵瑕、正其罪法、然而事行曩代、咎在先民、既似疎遠、誠非奸狀、加以發覺以來、多經恩蕩、神礙同驪、子孫相仍、稽之律條、既非還正之類、求之圖系、猶見同姓之因、所諍之疊、同自先祖而發、實非末孫之過、周道如砥、既往不咎、況秋荼已厭、國憲有常、所犯事條、非可追究、宜令共保所帶之姓、依舊得供神事、但聞、河繼等各依私事、互闕神事、須准法式重其科責、此段別從在宥之義、以崇一切之恩、○廿二日乙丑、天寒降霧、○廿三日丙寅、地震、○廿八日辛未、天皇御前殿、觀童相撲、先是近臣分頭、相折各爲左右、以右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝

る黑川校本に據て改む
○神癡、原本神主に作る諸本に據て改む癡は趾也跟也とあり同神の後裔の意なるべし
○還止、罪科に處して正につかしむるを云
○周道如砥、毛詩小雅大東章に周道如ㇾ砥其直如ㇾ矢とあり砥は礪石なり平なるを云ふ
○秋荼、鹽鐵論刑德篇に昔秦法繁ニ於秋荼一とあり此は刑法を云原本茶を業に作る諸本に據て改む
○一切之恩、原本傍注切を祖に作る
○入住、住は止也立也
○勅命、命は類史七十三に令に作る
○透橦、辭源に透橦兒童古百戲之一卽緣竿也宋人有ニ透橦兒童賦一略言雲竿百尺絙直規圓此兒於ㇾ是跂ニ雙足一戲ニ兩臂一踴身而直上若ㇾ有ニ其遐一盡ㇾ竿而卒立云々とあり、橦は原本撞に作る前本谷本淀本に據て改む
○咒擲　抄術藝部雜藝類に擲倒楊氏漢語抄云擲倒ニ賀倍利宇都一、箋注に今俗逆立東反是類也と云
○弄玉、弄丸なり抄同部

臣良相、爲左方首、以大納言正三位兼行右近衞大將源朝臣定、爲右方首、左右標幷樂人相撲童等、經左右仗下、入往殿前、九番相撲後、有勅命停、左右互奏音樂、種々雜伎、散樂、透橦、咒擲、弄玉等之戲、皆如相撲節儀、○廿九日壬申晦、帝御南殿、觀童相撲、如昨儀、朱雀門前大祓如常、○秋七月癸酉朔、二日甲戌、授和泉國從四位下勳八等大鳥神從三位、紀伊國正六位上御船神從五位下、○十一日癸未、大風雨、○十四日丙戌、先是伊勢國司介從五位下清原眞人長統、大掾正七位上藤原朝臣秋實、少掾從八位下藤原朝臣近氏、大目正七位下秦忌寸高志繼、少目從六位上大友槻本連眞吉、從八位上若宮臣秀雄、前司大掾正六位上御常朝臣氏雄、少掾正六位上興世朝臣有法、大目正六位上早部直秋貞、少目正七位下忍海部國宮、幷諸郡司十五人、惣廿七人、爲安濃郡百姓神人部東成、建部繼東、所告隱課丁二百十八人、不附大帳、遣散位從七位上藤原朝臣朝野推之、長統等罪當徒以下、是日、據去年十一月十六日詔書之旨、並原免、○十九日辛卯、以尾張國愛智郡荒廢田一百八

に弄丸梁武帝千字文注云宜遼者楚人也能弄丸（此間云多末斗利）八在空中一在手中、令人之弄鈴是也　楊氏漢語抄云　弄鈴須々此利　とあり
○皆如、皆は諸本及類史七十三に據て補ふ
（七月）大島神、承和九年十月己巳紀に見ゆ
○御船神、式外、神祇志に在那賀郡神田村
○氏雄、氏は祕本尾本に據て補ふ
○早部直、原本早部に作る諸本に據て改む
○東成、閣本東成に作る
○去年十一月云云、前年同日紀を參看すべし
○並原兇、並字は諸本に據て補ふ
○京職條令、條は黑川校本坊に作れど類史百七も本史に同じ
（八月）彌彦神、承和九年十月壬戌紀に見ゆ
○大神神、神名式同國頸城郡大神社、西頸城郡糸魚川町、神一字は諸本に據て補ふ
○居多神、同式同郡居多神社、中頸城郡春日村、居多はケタと訓べし居たケと訓るは書紀にミヤケ

町六段三百歩、充冷然院、○廿六日戊戌、帝御前殿、觀相撲、左右近衞府奏音樂、○廿八日庚子、制、諸司雜色人、未經一選、不得輙任左右京職條令、○八月壬寅朔、三日甲辰、越後國從五位上彌彦神、大神神、居多神、並授從四位下、○六日丁未、釋奠如常、外從五位下行直講六人部福貞講周易、○七日戊申、明經博士等奉參內殿、論義如常、○十二日癸丑、屈六十僧於內殿、轉讀大般若經、限以三箇日、○十六日丁巳、天皇始講論語、正五位下行大學博士大春日朝臣雄繼侍講、是日夜、月有蝕之、○十七日戊午、地震、宣告五畿七道諸國云、佛頂尊勝陀羅尼、功德勝利不可思量者也、故波利殞身、邀大士於五臺窟、善住繫念、脫極苦於七返生、宜令書寫梵本、安國內諸寺塔、若無牢固之、易損弊、須鑿心柱深藏其中、凡厥功力所感、只有處心、亦須國司當日清食、於國分寺、令講讀師、燒香散花、供養諸尊、迴向法界、但定額寺、令三綱修之、其無塔寺、不在此限、越前國百姓、窮弊飢饉特甚、長門國去年疫癘、死者尤多、並賑給之、○十八日己未、大祓於建禮門前、以伊勢齋內親王可入大神宮故也、○十九

を彌移居と書けるを始め例多し
○七日戊申、諸本申を午に作るは非なり
○不可思量、可は諸本に據て補ふ
○波利殞身云云、佛頂尊勝陀羅尼經序に佛頂尊勝陀羅尼經者婆羅門僧佛陀波利儀鳳元年從西國來至此漢土到五臺山次遂五體投地向山頂禮曰如來滅後衆聖潜靈唯有大士文殊師利於此山中汲引蒼生教諸菩薩とあるを云
○善住繫念云云、善住と名くる國王此陀羅尼に依て七返畜生身を受くる事を免がれしこと同經に見ゆ
○諸寺塔、寺は祕本尾本前本に據て補ふ
○心柱、抄調度部佛塔具に擦四聲字苑云初鎋反俗云心之波之良佛塔中心柱也とあり
○有慮心、慮は閣本谷本慶に作る
○清食、魚鳥を食せざるを云
○令講讀師、令は諸本命に作る
○伴大田宿禰、錄右京神

日庚申、左京人散位外從五位下伴大田宿禰常雄賜伴宿禰姓、先是正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男等奏言、常雄歎偁、謹稽家牒、伴大田宿禰同祖、金村大連公第三男、狹手彥之後也、狹手彥、宣化天皇世、奉使任那、征新羅復任那、兼助百濟、欽明天皇世、百濟以高麗之寇、遣使乞救、狹手彥復爲大將軍、伐高麗、其王踰城而遁、乘勝入宮、盡得珍寶貨賂、以獻之、磯城嶋天皇世、還來獻高麗之囚、今山城國狛人是也、狹手彥再使海外、征伐兩國、盡力絕域、復立二國、身尊當時、功流後代、但古人朴質、除兩國盡力非私、皆賜別姓、是以子孫不得大部、別賜大田宿禰、而狹手彥之弟阿彼布古、承父爲大部連公、自斯而後、恐子孫之不廣、無復更賜別姓、今阿彼布古之後、歷代尊顯、而狹手彥之後、舉朱紱者、曠世無聞、一祖之枝、榮枯殊隔、沉淪之歎、告訴无止、常雄幸逢昌泰、新參花轂、門蔭中興、寔爲榮慶、刊大田兩字、同皈於一宗、然則外不辱功臣之序、內方敦孔懷之親、善男等伏撿家記、所陳不虛、請刊彼兩字、直賜宿禰、控其泒入此本源、從之、○廿一日壬戌、從五位下紀朝臣本道爲筑前

別大伴大田宿禰高魂命五世孫天押日命之後也
○欽明天皇世、世は原本時に作る諸本に據て改む
○踰城、城は諸本に據て改む
○磯城嶋天皇、原本磯城嶋を珠敷に作る諸本に據て改む磯城嶋天皇は欽明天皇なり書紀に欽明天皇廿三年八月狹手彥打破高麗、乘勝以入宮盡得珍寶貺賂七織帳鐵屋還來とあるに合へり前後の文を考ふるに上に欽明天皇世とありて此に磯城嶋天皇世と云るは重複に似たれど蒼家牒のまゝに據れるにて誤にはあらず、原本に珠敷天皇とあるは重複を厭ひて改めしなるべけれど事實に合はず故に諸本に據て改む
○但吉人、但は諸本俱に作る
○原南國、南國は新羅ご高麗ごたりし上に高字などありしが脫ちしか
○出阿夜布古、夜は原本被に作る諸本及下文に據て改む
○昌泰、泰は原本擧に作る諸本に據て改む
○孔懷、毛詩小雅常棣章

權守、本道。天安二年二月拜此職、母憂去職、今詔起之。肥後國飽田郡大領外從七位上建部公貞雄借外從五位下。是日彈正臺始置扶臺掌二人。○廿四日乙丑、伊勢齋內親王臨葛野河修禊、勅遣中納言從三位兼行左衞門督藤原朝臣氏宗監禊事。肥前國正六位上稻佐神、堤雄神、丹生神、並授從五位下。○廿七日戊辰、空中有聲、如雷。○廿九日庚午、大祓於朱雀門前、以伊勢齋內親王九月一日將入大神宮故也。日晚雷雨。○是月、京邑往往梨李華或實、又患赤痢者衆、十歲已下男女兒、染著此病、死者衆矣。○九月壬申朔、勅遣右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相、尙侍從三位源朝臣全姬、向八省院、發遣伊勢齋內親王。○九日庚辰、重陽節、天皇不御前殿、於殿庭賜菊酒、親王以下、侍從以上、及文人、酣飮賦詩、勅賜題云、菊暖花未開、日暮賜祿各有差。是月、伊勢齋內親王入大神宮、由是無用宣命、不擧音樂、亦不著靴。○十九日庚寅、無品伊登內親王薨、帝不視事三日、內親王者桓武天皇之皇女也、母藤原氏、從三位乙叡之女也。○廿三日甲午、授常陸國從五位下主玉神從

五位上、（一）廿四日乙未、正五位上行刑部大輔豐階眞人安人卒、安人者、元河內國大縣郡人、後爲二左京人一也、本姓河俣公、延曆十九年、河俣公御影、改姓豐階公、安人少穎悟、有二局量一、以二好學一早知名、涉二讀史傳一、最精二漢書一、承和五年除二少內記一、轉二大內記一、十五年外從五位下、嘉祥二年遷二東宮學士一、三年四月、文德天皇踐祚、授二外從五位上一、爲二丹後權守一、仁壽二年、安人上疏言、安人貫二河內國一、未レ除二公字一、伏請移二籍京華一、亦爲二眞人一、於レ是詔賜二姓眞人一、貫二於京兆一、齊衡三年遷爲二圖書頭一、天安之初、遷二掃部頭一、遷二大學頭一、少頃爲二東宮學士一、大學頭如レ故、數月兼二美濃權介一、其年十一月、皇太子卽二帝位一、加二授正五位上一、貞觀三年拜二刑部大輔一、卒時年六十五、〇廿六日丁酉、左京人大內記從七位上味酒首文雄、山城少目從八位下味酒首文主、文章生無位味酒首文宗等三人、並賜二巨勢朝臣一、先レ是左京權亮從五位下巨勢朝臣河守等奏言、文雄欵偁、先祖出レ自二武內宿禰大臣一也、大臣第五男巨勢男韓（ヲカラ）宿禰、是巨勢朝臣之祖、第三男平群木兎（ツク）宿禰、卽是文雄之祖也、木兎宿禰之後、賜二味酒臣姓一、淪落被レ貫二伊勢國一、至二于文雄祖宗一、改

に兄弟孔懷さあるに據れり
○流其派、其は諸本に據て補ふ
○天安二年二月、文德天皇同年同月辛卯紀に見ゆ
○起之、起は原本赴に作れるを改む
○稻佐神、式外、神祇志に在二今杵嶋郡邊田村一
○堤雄神、同上、同郡猿石村
○丹生神、同上、今藤津郡馬場下村
○赤痢、抄疾病部に痢釋名云痢（音利久曾比理乃夜萬比）言二出漏之利一也さあり
（九月）靴、抄裝束部履襪類に靴唐令云烏皮靴赤皮靴（音戈字亦作䩠韡化乃久豆）胡履也さあり
○母藤原氏、母は尾本宮本に據て補ふ古今集目錄に伊登內親王桓武天皇第七女兼子內親王號二桂內親王一是也母藤原南子云々阿保親王妻也さあり
○主玉神、嘉祥三年六月己酉紀には主上に鴨大神御子神の六字あり式內社、常陸國新治郡
○河俣公、錄河內皇別に川俣公日下部連同祖彥坐

命之後也とあり、河は原本阿に作る宮本及黒川校本に據て改む下同じ
○幾悟、機警に同じ
○文主、主は原本王に作る閣本尾本前本に據て改む
○左京權亮、天安二年閏二月乙巳紀に據るに左は右の誤なるべし
○大臣葉五男、大臣の二字は諸本に據て補ふ
○一祖之裔、裔の上下恐くは一字を脱す
○首字之味、黑川校本に一本首字味之に作りイ本味首之字に作るさ云へど證とすべきものなし或は之上に酒字を脱したるか
○式徵、毛詩邶風式微章に見ゆ式は發語の辭國君寰業、衰落するを云
○深鯁、鯁は原本鯾に作る諸本に據て改む鯁は梗に同じ病なり
○濯鱗淸流云云、文選阮瑀爲曹公作書與孫權に濯鱗淸流、飛翼天衢とあり
十月○酒美豆男神云云、神名式造酒司坐神酒殿神社二座酒彌豆男神・酒彌豆女神とあり
○酒賀神、式外、所在未詳

臣賜首姓、入貫左京、事煥圖諜、不敢具載、文雄一祖之裔、八腹之支別、孤爲悴族、久隔榮途、加以酒之爲用、唯貴成禮、耽淫之失、鑒誡攸深、而今味酒爲姓、副以首字之味、既非吉祥、況復當爲其首乎、是以改姓之望、朝夕刻思、式微之歎、弟兄深鯁、願濯明時之景煦、入巨勢之華宗、濯鱗淸流、歛翼高幹、但須順祖胤之流、賜平群之姓、而平群之字、稱謂是凡、巨勢之文、義理堪愛、恒作昆弟、實可无親疎、既云匪他、詎論其去就、河守等謹撿本系、已知同宗、見其所愁、理當聽許、特賜巨勢朝臣之姓、將慰沈淪族人之懷、從之、○冬十月辛丑朔、帝御前殿、賜飲侍臣、左右近衞府遞奏音樂、賜祿如常、○四日甲辰、遣使者向伊勢國大神宮奉幣、爲國祈也、○十一日辛亥、造酒司從五位下酒美豆男神、酒美豆女神、並授從五位上、○十六日丙辰、因幡國正六位上酒賀神、賀露神、並授從五位下、授散位外從五位下作宿禰常雄從五位下、陸奥國石瀨郡大領外從五位下石瀨朝臣富主授借外從五位上、○廿日庚申、備後國正六位上大神神、天照眞良建雄神、並授從五位下、○廿二日壬戌、授雲感寺無位檜本神從五位

○賀茂神、神名式因幡國巨濃郡甘露神社、岩美郡東村陸上
○石瀬郡大領云云、郡以下十字は恐らく闕本尾本等に據て補ふ
○借外從五位上、上は原本下に作る宮イ本に據て改む
○大神神、式外、所在未詳
○天照眞良建雄神、同上
○雲感寺、雲は原本靈に作る下文八年五月丁卯紀及神名式に據て改む例に依るに雲上大和國の三字あるべし
○綺本神、神名式大和國平群郡雲甘寺坐倚本神社、生駒郡平群村梨本
○起之、起は原本赴に作る例に據て改む
○右諸衞府、右は原本召に作る類史七十八に據て改む
○右馬寮、右は原本左に作る同上に據て改む
○毆殺、毆は原本歐に作る諸本及類史八十七に據て改む下同じ
(十一月)故佐伯直田公男云云、田公男以下十二字は諸本に據て補ふ

下、從五位下橘朝臣三夏爲六年少貳、去七月母喪解官、今詔以本職起之、○廿四日甲子、帝御前殿、右諸衞府幷右馬寮獻物、奏音樂、是五月六日競走馬轅物也、親王以下賜祿有差、○廿五日乙丑、請六十僧於內殿、限三箇日、轉讀大般若經、○廿八日戊辰、太政官論奏曰、尾張國人敢臣繼吉、敢臣宗貞等、毆殺宗貞兄敢臣繼雄、信濃國人壬生稻主毆殺妻母刑部子刀自女、上野國人神人繼道故殺布師貞、淡路國浪人物部冬男鬪殺錦織廣人、遣正六位上行治部少丞安倍朝臣興氏、從七位上行勘解由主典伴連貞宗等於上野國、推之、自餘國司斷而言上、法官覆案、罪皆當斬、詔減死一等、處之遠流、○十一月辛未朔、帝不御前殿、陰陽寮貢獻來年御曆、付內侍司奏、○二日壬申、春日平野祭如常、○三日癸酉、梅宮祭如常、○十一日辛巳、散位從五位下丹墀眞人今繼爲武藏權介、讃岐國多度郡人故佐伯直田公男、故外從五位下佐伯直鈴伎麻呂、故正六位上佐伯直酒麻呂、故正七位下佐伯直魚主、鈴伎麻呂男從六位上佐伯直貞持、大初位下佐伯直貞繼、從七位上佐伯直葛野、酒麻呂男

○十一人、一恐くは衍

○倭胡連公、胡は原本故に作る諸本に據て改む下同じ

○允恭天皇御世云云、私記に或云按日本紀室屋大連名初見允恭天皇紀而云其子之亂允恭天皇之御世任國造未詳云云

○孝德天皇御世、御は黑川校本に據て補ふ

○玄蕃頭、蕃は原本番に作る諸本に據て改む

○眞持、眞は原本直に作る諸本に據て改む

○實惠、俗姓佐伯氏空海の弟子東寺第二世

○道雄、同じく佐伯氏空海の弟子山城海印寺の祖

○是兩法師、此四字は諸本に據て補ふ

○彫蟲之小藝、詩文を作るを云揚子法言に見ゆ

○特蒙、特は原本時に作る諸本に據て改む

書博士正六位上佐伯直豐雄、從六位上佐伯直豐守、魚主男從八位上佐伯直粟氏等十一人、賜佐伯宿禰姓、隷左京職、先是正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男奏言、書博士正六位下佐伯直豐雄款云、先祖大伴健日連公、景行天皇御世、隨倭武命平定東國、功勳蓋世、賜讃岐國、以爲私宅、健日連公之子、健持大連公子、室屋大連公之第一男、御物宿禰之胤、倭胡連公、允恭天皇御世、始任讃岐國造、倭胡連公、是豐雄等之別祖也、孝德天皇御世、國造之號、永從停止、同族玄蕃頭從五位下佐伯宿禰眞持、正六位上佐伯宿禰正雄等、既貫京兆、賜姓宿禰、而田公之門、猶未得預、謹檢案內、眞持正雄等之興、只由實惠道雄兩大法師、是兩法師等、贈僧正空海大法師所成長也、而田公是大僧正父也、今大僧都傳燈大法師位眞雅、幸屬時來、久侍加護、比彼兩師、忽知高下、豐雄又以彫蟲之小藝、忝學館之末員、顧望往時、悲歎良多、准正雄等之例、特蒙改姓、改居、善男等謹檢家記、事不憑虛、從之、○十六日丙戌、武藏國每郡置檢非違使一人、以凶猾成黨群盜滿山也、○十八日戊子、大

原野祭如常、○十九日己丑、園幷韓神祭如常、○廿日庚寅、所司奉祭鎭魂如常儀、○廿一日辛卯、新嘗祭也、帝不御神嘉殿、親王公卿向神祇官、奉祭如常儀、○廿二日壬辰、天皇御前殿、賜宴群臣如常、賜祿有差、○十二月庚子朔、十一日庚戌、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿供事如常儀、○廿五日甲子、獻荷前幣於諸山陵墓如常、天皇不御建禮門前、公卿行事、○卅日己巳、大祓大儺如常、

日本三代實錄卷第五

○新嘗祭、祭は原本曾に作る諸本及類史九に據て改む
(十二月)

○卷第五、卷字は祕本閣本宅本等に據て補ふ

〔貞觀四年〕賜被、被は一本祿に作る

○參議從四位上兼行、兼は行なるべし

○能有、文德天皇皇子清和天皇の御弟仁壽三年賜姓寛平九年六月薨

日本三代實錄卷第六

起貞觀四年正月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

(壬午)四年春正月庚午朔、天皇不受朝賀、雨也、御前殿、賜宴侍臣、賜被如常儀、

○七日丙子、帝御前殿、觀青馬、宴於群臣、賜祿各有差、授參議從四位上兼行式部大輔春澄朝臣善繩正四位下、從四位下行越前權守房世王從四位上、无位良秀王從四位下、從五位下行內膳正正岑王從五位上、左京大夫從四位下在原朝臣行平、兵部大輔藤原朝臣仲統、无位源朝臣能有、並從四位上、正五位下行大和守弘宗王、內藏權頭兼左衞門佐藤原朝臣興邦、並從四位下、散位從五位上藤原朝臣春岡、大藏大輔藤原朝臣本雄、並正五位下、備中守從五位下朝野朝臣貞吉、圖書頭橘朝臣岑範、少納言兼侍從藤原朝臣直道、陰陽頭兼曆博士大春日朝臣眞野麻呂、式部權少輔平朝臣實雄、雅樂頭源朝臣謹、助教滋善宿禰宗

人、左衛門權佐兼木工頭紀朝臣春枝、內藏權助藤原朝臣安方等、並從五位上、和泉守外從五位下高丘宿禰百興、陰陽助兼權陰陽博士笠朝臣名高、尾張介上毛野朝臣永世、散位正六位上當世王、无位源朝臣計、橘朝臣葛名、左衛門大尉平朝臣善行、木工權大允藤原朝臣是緝、雅樂助藤原朝臣業世、內藏大允藤原朝臣積善、式部大丞紀朝臣良丹、左近衛將監安倍朝臣比高、大外記賀茂朝臣岑雄、大炊助上毛野朝臣安守、散位大春日朝臣澤主、右近衛將監紀朝臣繼則、近江大掾御春朝臣行雄等、並從五位下、左大史正六位上朝原宿禰高道、右大史安墀宿禰雄繼、織部正善良朝臣美雄、縫殿助時統宿禰諸兄、造兵正葛城宿禰永藤、明法博士粟凡直鯖麻呂等、並外從五位下、○八日丁丑、大極殿始齋講如常、以法隆寺僧三論宗傳燈大法師位長賢、爲講師、授无位源朝臣吾姫、□統朝臣忠子、並從四位上、无位藤子女王、良岑朝臣憙子、藤原朝臣節子、藤原朝臣尙子等、並從五位下、无位尾張宿禰大海、大和朝臣仲子等、並外從五位下、○十日己卯、所司獻剛卯杖、天皇不御前殿、付內侍

○佐衛門權佐兼木工頭、權字に天安元年正月癸丑紀及上下の文に據て補ふ
○百興、興は原本輿に作る諸本に據て改む
○源朝臣吾姫、紹運錄に嵯峨天皇皇女母內藏氏とあり
○□統朝臣忠子、□は原本に三とあれど祕本閣本尾本等空闕とす、三統は見宿禰姓のみにて朝臣は見えず或は長統朝臣の長の闕けたるかと思へど之も

證なければ祕本閣本尾本等に據て闕字とす忠子は五年正月戊子紀に淳和太上天皇之女也天長九年賜姓統朝臣とあり紹運錄には同天皇の御女に統朝臣熟子從四上天長二三七賜姓と見ゆ忠子の御姉なるべし何れも統とのみあれど是も古くより上の一字失せしかと思はる尙よく考ふべし
○從五位上守內藏權助、守は私記に或云行歟とあり
○土左守、左は原本佐に作る諸本に據て改む下同じ
○弘興、興は原本與に作る諸本に據て改む
○從四位上(行平)、原本上を下に作る上文丙子紀に據て改む
○因幡守、原本守上に權字あり祕本尾本谷本及六年正月甲午紀に據て刪る
○因幡權介、權字は諸本及元年三月戊寅紀・十二年正月戊寅紀に據て補ふ

司奏、○十一日庚辰、地震、○十三日壬午、散位從五位下源朝臣治爲侍從、從五位上守內藏權助藤原朝臣安方爲助、從五位下行內藏大允藤原朝臣積善爲權助、外從五位下行直講六人部福貞爲助教、肥前守從五位下藤原朝臣有蔭爲民部少輔、治部少輔從五位下安倍朝臣房上爲尾張守、土左守從五位下笠朝臣弘興爲權介、散位外從五位下肩野連道主爲駿河權介、從五位下藤原朝臣忠雄爲武藏守、從五位下坂上大宿禰瀧守爲介、從五位下大原眞人安雄爲安房守、民部少輔從五位下滋野朝臣善根爲美濃守、散位外從五位下三善宿禰清江爲介、左京大夫從四位上在原朝臣行平爲信濃守、勘解由次官從五位下清原眞人惟岳爲加賀介、從五位上守右近衛少將兼行阿波權介藤原朝臣有貞爲因幡守、右近衛少將如故、因幡權介外從五位下都(ミヤコノ)宿禰御酉爲介、散位從五位下橘朝臣時成爲石見守、從五位下行備後權介藤原朝臣國經爲播磨介、從四位下行左近衛少將良岑朝臣清風爲美作守、左近衛少將如故、從五位下行式部大丞紀朝臣良丹爲介、散位從五位下紀朝

○巨範、巨は祕本淀本臣に作る

○兵主神、神名式近江國野洲郡兵主神社（名神大）兵主村五條

（二月）

臣宗守爲紀伊介、從五位上行因幡守藤原朝臣興世爲阿波權守、侍從從五位下藤原朝臣忠宗爲介、大藏卿正四位下源朝臣生爲讃岐權守、大藏卿如故、從五位上行大藏少輔和氣朝臣巨範爲土左守、散位從五位下橘朝臣忠宗爲肥前守、外從五位下忠世宿禰貞直爲薩摩守、從五位下行主殿權助文室朝臣卷雄爲左衛門佐、○十六日乙酉、踏歌之節、天皇御前殿、宴於侍臣、踏歌如常儀、賜祿各有差、○十七日丙戌、車駕幸豐樂院、觀射禮、○十八日丁亥、停四衛府賭射之事、勅公卿、向豐樂院、令諸衛府後參者射、○廿日己丑、授近江國從五位上勳八等兵主神正五位下、○廿一日庚寅、內宴如常、賜祿各有差、是日授從七位上紀朝臣宅子從五位下、○廿五日甲午、地震、○二月庚子朔、四日癸卯、祈年幷大原野祭如常、○八日丁未、釋奠如常、直講從七位上葛井連宗之講左傳、公卿及文人賦詩、○九日戊申、春日祭如常、○十一日庚戌、圖書頭從五位上橘朝臣岑範爲神祇大副、刑部少輔從五位下橘朝臣末茂爲中務少輔、散位從五位下都努朝臣淸貞爲圖書頭、肥前守從五位下橘朝臣

○良繩奏言、原本言を云に作る類史百八十に據て改む
○居住、類史住居に作る
○捨事、類史には事字なし、衍なるべし
○眞如院、山城志に眞如院在葛野郡下山田村、見三代實錄、後廢荒蕪、近世重建とあり、類史には如を名に作る

忠宗爲治部少輔、從五位上行中務少輔源朝臣同爲刑部大輔、左京亮從五位下藤原朝臣大野爲大藏少輔、從四位下行山城守紀朝臣今守爲左京大夫、山城守如故、散位外從五位下布瑠宿禰清貞爲亮、正五位下大藏大輔藤原朝臣本雄爲加賀守、散位正五位下藤原朝臣春岡爲越中守、從五位下行大學助御船宿禰佐世爲備後權介、筑前權守從五位下紀朝臣本道爲守、○十四日癸丑、祠園并韓神如常、散位從五位下藤原朝臣利基爲內匠頭、從五位下文室朝臣好雄爲刑部少輔、正五位下行內匠頭在原朝臣善淵爲大藏大輔、散位外從五位下朝原宿禰高道爲因幡權介、大監物從五位下伴宿禰益友爲肥前守、從五位下行武藏介坂上大宿禰瀧守爲右兵衛權佐、○十六日乙卯、出雲國出雲、大原兩郡、去年風水殞霜、多被損傷、詔復課役一年、參議正四位下行左大辨兼左近衛中將藤原朝臣良繩奏言、別墅一區、在山城國葛野郡、良繩奉爲先皇、造佛寫經、安置其中、親母出家、便亦居住、請捨事爲道場、賜名眞如院、許之、○十七日丙辰、地震、○廿日己未、請六十僧於內殿、三箇

○貞成、原本貞戌に作る、祕本閣本尾本及三年二月庚申紀に據て改む
○鼓吹佑、佑は原本佐に作る職員令に據て改む
○志紀縣主、姓氏錄河內皇別に見ゆ
○多朝臣、同左京皇別に見ゆ
○(注)諱高志、紀略大同四年五月壬子條に三品高志內親王薨內親王者桓武天皇第一女皇帝同母妹也配淳和天皇生三品恒世親王氏子有子貞子內親王二、節略)とあり
○藤野等二人、二人は諸本に據て補ふ
(三月)大田田根子命、田田は諸本直々に作る
○大藏伊美吉、姓氏錄に見えず
○阿智使主之後、之は諸本に據て補ふ
○辨拆、拆は原本折に作れるを改む
○伎人堤、攝津志に住吉郡古蹟に伎人堤嘗防障河息長川喜連村上古屬河州按是時已屬本州乎とあり
○正六位上(業平)、一本從五位下に作る攷云案續後紀卷十九嘉祥二年正

日閒、轉讀大般若經、○廿三日壬戌、河內國志紀郡人外從五位下行木工助兼右大臣家令志紀縣主貞成、正六位上行鼓吹佑志紀縣主福主、散位大初位上志紀縣主福依等三人、賜姓宿禰、卽改本居、隷左京職、神八井耳命之後、與多朝臣同祖也、右京人正六位上行主水令史中臣朝臣坂田麻呂、賜姓大中臣朝臣、與大中臣同祖也、○廿五日甲子、地震、无品有子內親王薨、淳和太后奏請不被任葬儀司、詞旨懇切、因而不任、輟朝三日、內親王者、淳和太上天皇之女也、母贈皇后、諱高志、桓武天皇之女、生一男三女焉、○廿八日丁卯、攝津國河邊郡人正六位上行內膳典膳高橋朝臣藤野等二人、改本居貫左京職、○三月己巳朔、右京人左大史正六位上眞神田朝臣全雄、賜姓大神朝臣、大三輪大田田根子命之後也、右京人中納言從三位藤原朝臣氏宗家令大初位上大藏伊美吉廣勝、賜姓宿禰、後漢孝靈皇帝四代孫、阿智使主之後、與坂上大宿禰同祖也、○二日庚午、毀外從五位下大春日朝臣氏子告身、改授從五位下、○三日辛未、御齋如常、○四日壬申、遣木工頭從五位上兼行左衞門權

月壬戌有无位在原朝臣業平云々並從五位下之文再考一本恐非初叙五位而貶爲正六位上乎といへり
○太政官處分、三代格十六に見え望請每坊門置兵士十二人上下分番互加掌護即便令夜行之兵衞每夜巡檢兵士之直否とあり
○每坊門置兵士二人、坊門は左右各九門あり兵士の數格には十二人とあり是なるが知し
○每夜、夜字は格に據て補ふ
○兵士直番、兵士は分番坊門に當直して之を守衞するを云
○卌五町、原本卌を三十に作る諸本及類史百七に據て改む
○左京職言云云、此太政官符は三代格十六に應令結保督察姧猾及糺守道橋事云云と見ゆ
○司存之理、原本司上に有字あり諸本及格に據て削る
○相接、格には相交とあり
○卿相之家、之字は諸本及格に據て補ふ

佐紀朝臣春枝、從六位下守右衞門大尉藤原朝臣好行、辨拆河內攝津兩國相爭伎人堤之事。備中國賀夜郡人左大史正六位上賀陽朝臣宗成、從六位下備中權博士賀陽朝臣眞宗等二人、隷左京職。○七日乙亥、授正六位上在原朝臣業平從五位上。○八日丙子、太政官處分、令左右京職朱雀路每坊門置兵士二人分番掌護、左右兵衞府行夜、兵衞等每夜巡撿兵士直番。○十一日己卯、地震。○十四日壬午、河內國交野郡古荒田一町六段、攝津國嶋下住吉兩郡古荒田卌五町九段、奉充中宮職。○十五日癸未、左京職言、戶令云、凡戶皆五家相保、一人爲長、以相撿察、勿造非違。然則結保之興、爲紏姦濫、司存之理、必可遵行。而皇親之居、街衢相接、卿相之家、坊里猥雜、若非蒙官符、直施此制、不教之漸、輙無承引、請親王及公卿職事三位以上、以家司爲保長、無品親王以六位別當爲保長、散位三位以下五位以上、以事業爲保長、然則皇憲通行、隣伍相保、姧猾永絕、道橋自全。太政官處分、依請、右京職亦准此。○十六日甲申、天東有聲、如雷。美作國久米郡始置主政一員。○十九日丁亥、雨雹。從五

位上行上總介伴宿禰龍男、到任交替、稱官物多欠、禁固前司介從五位上和朝臣豐永、豐永訟寃、太政官處分、遏其禁、○廿日戊子、詔五畿七道諸國、貢醫師博士解由、先是從五位下行下野介伴宿禰河雄奏言、年中輸貢調庸雜物、色數非少、而民弊人姧、未進還積、實是綱丁盜犯、使者懈緩之所致也、今在任博士四人、醫師二人、皆非練道受業之輩、空費俸料、無益生徒、請一准史生、差充綱領、若不請返抄、責其解由、令塡欠負、凡非業之輩、皆責解由、但只責身犯、不關他怠、從之、河內國河內郡大領正六位上河內連田村麻呂、信濃國埴科郡大領外從七位上金刺舍人正長、小縣郡權少領外正八位下他田舍人藤雄等、並授借外從五位下、○廿二日庚寅、從五位下錦部淨刀自子賜姓河上朝臣、○廿五日癸巳、延曆寺僧傳燈大法師位安慧、傳燈大法師位常濟、並爲內供奉十禪師、○廿六日甲午、詔、畿內五國、出擧官稻、簡點民俗、歷代相沿、百王不易之政也、方今淳源已遠、薄俗逾滋、不欺之德罕聞、苟免之行流競、遂乃貢賦逋懸、公私闕乏、返擧虛納、何國不然、未納未進、諸郡皆是、雖頻下格制、務加

○職事三位、散位三位に對して云

○以六位別當、原本以の下に下の字あり諸本及格に據て削る

○善業、養老三年十二月紀（續紀上、四五頁）に見ゆ

○和朝臣豐永、原本和下に氣字あり秘本尾本前本に據て削る豐永は承和四年三月丙子紀に內舍人和朝臣豐永とあると同人なり

○豐永訟寃、豐永の二字は秘本閣本に據て補ふ

○戊子詔、三代格八・要略五十一に見ゆ

○令塡、塡は原本償に作る諸本に據て改む

○金刺、刺は原本利に作る諸本に據て改む

○河上朝臣、出自未詳

○延曆寺僧、僧は類史百八十五に據て補ふ

○安慧、釋書二に傳見ゆ

○常濟、傳詳ならず

○甲午詔、類史八十三に見ゆ按に此詔元慶四年三月庚午紀に重出す類史に據て彼を削り此を存すべし

○相沿、沿は類史佚に作る

○不欺之德、史記滑稽傳に子產治鄭民不能欺子賤治單父民不忍欺さあり
○苟免、後漢書杜林傳に法防繁多則苟免之行興さあり
○貧吏、貧は原本貪に作る閣本谷本に據て改む
○失懷土之心、鄕土を思ふ心を失ふなり、懷土は原本德土に作る秘本閣本及類史八十三に據て改む
○欠損、欠は原本見に作る塙本及類史に據て改む
○往車雖折云云、前車の覆るは後車の誡さならずして其轍をふむを云
○皮盡毛亡、本盡くれば末も立たざる意
○異記□、原本朱紙彈されり類史及元慶四年三月紀に據て改む
○膠柱、法令に拘泥するを云史記廉頗藺相如傳に若膠柱鼓瑟耳さあるに據れり
○諸田、原本田を國に作る類史及元慶四年紀に據て改む
○賜田墾田、賜田は賜はれる田、墾田は自ら開墾せる田を云、原本賜下に田字なし類史及元慶四年

催督、而日不如古、彌以過甚、貧吏不免奪侵之苦、弱人多失懷土之心、上下同嗟、首尾難救、又每國司遷代、分付受領、欠損所積、十而三四、往車雖折、來軫方隨、如此不停、終至虛竭、皮盡毛亡、非無素論、是而不救、孰與爲治、安民上策、誠異記□、利國良圖、豈期膠柱、今須國內所有諸田除賜田墾田、其納租之法、皆增於舊例、京戶土人口分田、舊例段別一束五把、今增加一束五把、雜色田段別五把、因卽京戶咸免徭分、土人復徭廿日、但土人例役之內、所不足者、便以租稻充於功食、凡厥年中雜用、皆當以彼稻支給、但當非常異損之年、應輸地利、懸欠則國司不費公廨、徭丁仍舊疲役、須隨損多少定用增減、令調物公用不致闕怠、亦夫例擧官稻者、須停出擧、量其要否、給之借貸、且救民急、且備國用、唯彼國田少租乏、難支例用、如無出擧、恐乖遠圖、又燈分料稻者、先代宿祈、事緣功德、雖云顧民、何得停廢、凡所以嫌出擧政者、將以除吏民之苦、假使昔之十分、今行其一者、論之物情、豈爲煩擾、但使小吏因緣、不容姧濫耳、夫變常巧法、古賢猶難、自近及遠、先訓不朽、然則先下畿內、限以三年、試張此制、儻有利

於時、有便於物、即施之天下、亦未晚矣、○廿八日丙申、地震、○夏四月己亥朔、天皇不御前殿、於右近仗下、賜飲侍臣、賜祿各有差、○二日庚子、大雨、河水流溢、行路難通、○四日壬寅、廣瀨龍田祭如常、○五日癸卯、請一百僧於大極殿、轉讀大般若經、限三日訖、○六日甲辰、以傳燈法師位湛海、傳燈滿位詮暉、並爲內供奉十禪師、○七日乙巳、式部兵部兩省、奏文武官成選擬階簿、天皇不御前殿、大臣奉勅、令本省行之、散位從五位下安倍朝臣比高爲武藏介、從五位下行內膳奉膳高橋朝臣淨野爲筑前權守、從四位下行右近衞少將兼內藏頭藤原朝臣常行爲權中將、內藏頭如故、○八日丙午、內殿灌佛如常、○十日戊申、祠平野神、○十一日己酉、祠梅宮神、先是大和國言、左京絕戶七百十三烟、將被削籍、依百姓愁、貞觀二年、且免卌四烟、百姓之愁、猶未有弭、至是免六百十二烟、編戶如舊、○十二日庚戌、授河內國正六位上栗栖神從五位下、○十五日癸丑、公卿就太政官曹司廳、授文武官成選位記、宣制如常、是日、下詔曰、朕聞、自古聖明之君、以堯舜爲稱首、然猶諫鼓謗木、設之於朝、又俾大

紀に據て補ふ
○雜色田、口分田以外の各種の田を云
○功食、功夫の食粮を云
○支給、支は原本與に作る諸本及元慶四年紀に據て改む
○懸欠、逋懸欠負なり
○調物、原本調移に作る祕本尾本及類史に據て改む
○彼國、彼は原本被に作る諸本及類史に據て改む
○嫌出擧政、政は原本改に作る祕本尾本前本及類史に據て改む
○吏民之苦、苦は原本若に作る尾本及類史に據て改む
○昔之十分、昔は原本者に作る尾本及類史に據て改む
○因緣、原本目掾に作る諸本及類史に據て改む
○有便、便は原本扶に作る同上に據て改む
(四月)右近仗下、右は諸本及類史(七十五)紀略に據て補ふ
○流溢、諸本流を沉に作る沉は汎の訛なるべし
○湛海、傳詳ならず
○詮暉、同上
○奉膳、原本典膳に作る

○諸本に據て改む
○卌四烟、卌は原本此に作る諸本に據て改む
○栗栖神、神名式河内國若江郡栗栖神社、中河内郡八尾町
○十五日、此十五日を下文十二月辛酉紀(廿七日)には十二日に作れり
○成選、選は原本遷に作る上下の文例に據て改む
○是日下詔曰云云、類史八十に見ゆ
○諫鼓謗木、淮南子主術訓に堯置敢諫之鼓、舜立誹謗之木、注に欲諫者擊其鼓、書其善否於表木也
○大禹皐陶云云、尙書に大禹謨・皐陶謨あり之を云ふ、大は原本太に作る閣本尾本等に據て改む
○徇齊、史記五帝本紀に幼而徇齊、注に徇疾齊速也とあり
○迪哲、明智の道を蹈むを云ふ、尙書無逸に見ゆ
○保佐、佐は原本佑に作る諸本に據て改む、類史は佑に作る
○叔末、後漢書竇融傳論に叔末澆訛王道陵缺、注に叔末猶季末也とあり
○嗟毒、後漢書朱穆傳に嗟野嗟毒とあり歎き恨む

禹皐陶盡其謨訓、蓋以萬機之盛、非廣詢難以興功、四海之尊、非下問無以成化也、朕以童丱嗣守鴻基、器謝徇齊、業慙迪哲、實賴賢輔之保佐、將以拱已而仰成、然運接百代之叔末、時遇萬邦之凋殘、卽位以還五年于茲、徒聞府帑空竭、經用不支、貢賦逋懸、吏人嗟毒、未得所以救之之要術、昔神農氏世衰天下倒懸黃帝代以脩德、卽隆垂衣之化、殷暴辛政亂、百姓塗炭、周興成康之時、至刑厝而不用、是以古不常淳、今不常薄、唯在君臣善惡、政教得失而已、若能群臣大小、勠力傾心、務求政實、匡拂朝家、訓導黎庶、則國富刑淸、時和歲阜、醨變爲樸、僞反爲眞、卽東戶季子之代、遂何遠之有矣、宜參議已上各論時政之是非、詳世俗之得失、傷化害人不便於時者、節用謹度、當利於國者、並盡昌言、以沃朕心、勿爲華飾、勿有隱諱、以勸解由次官從五位下兼行筭博士家原宿禰氏主爲美作權介、餘官如故、○廿日戊午、勅、參議正四位下行彈正大弼正躬王男散位從五位下住世王、无位繼世王、基世王、家世王、益世王、助世王、是世王、經世王、並世王、尙世王、行世王、保世王、故從四位上正行王男高蹈王、高居王、

故從四位下雄風王男定相王等十五人賜姓平朝臣、先是正躬王抗表曰、正躬聲花無算、德望罕稱、幸荷不時之祟恩、明參非據之重任、分暉銑樹、託派銀漢、猥負丘山之恩、慙無塵髮之効、況亦年鬢云暮、蒸息稍衆、名編宗親之籍、身託府帑之資、臣雖才質空虛、猶冀破家爲國、思夫公費內狹、私心因欲除諸子之王名、與諸臣同貫列、例宗室之繁蕪、省歳時之祿賞、雖至女子蔭留一身、祿不及子、於其隆退、或當悲吟、竊見宗門賜姓者多、臣意所欽、在平朝臣、請除非女子所有男兒、皆賜平朝臣姓、亦復諸姪希望者同預於此矣、顧骨肉於天然、深愛雖存、添塵涓於國用、篤誠攸企、至是許之、○廿二日庚申、諸衛警固、緣賀茂祭也、○廿三日辛酉、賀茂祭如常、○廿四日壬戌、諸衛解嚴、授皇太后宮无位木枯神從五位下、○廿六日甲子、授河內國无位田坐神從五位下、○廿七日乙丑、天皇御武德殿、閲覽左右馬寮御馬、如常儀、

を云　○帝、紂之之變、紂之の二字は底本尾本に無し類史に據て補ふ諸本には之一字なし　○倒懸、昔の甚しきを云孟子公孫丑章に見ゆ　○殷辛之亂、辛は殷の紂王史記殷本紀に帝乙崩子辛立是爲帝辛天下謂之紂とあり　○塗炭、尙書仲虺之誥に見ゆ　○成康之時云云、史記周本紀に見ゆ　○求政賓、賓は原本奚に作る諸本及類史に據て改む　○東戶季子之代、古の名君なり淮南子繆稱訓に見ゆ　○節用、論語學而篇に節用而愛人とあり　○謹度、孝經諸侯章に制節謹度、注に愼行禮法謂之謹度とあり　○昌言、正當の言なり尙書皐陶謨に出づ　○沃朕心、沃は灌漑なり尙書說命に啓乃心沃朕心とあり　○助世王、此三字は閣本尾本前本に據て補ふ　○並世王、此三字は祕本閣本尾本等に據て補ふ　○保世王、此三字は諸本に據て補ふ　○德望、原本德聖に作る閣本尾本に據て改む　○非據之重任、實力なくして高位にあるを云易繫辭傳に非所據而據焉身必危とあり　○銑樹、王勃乾元殿頌に太陽分銑樹之輝とあり　○銀漢、天漢に同じ已に注す　○塵髮之効、効は原本功に作る諸本に據て改む　○年鬢、辭源に猶年貌年深老則鬢髮漸白故言衰老恆用此語とあり庾信詩に空傷年鬢秋とあり　○隆退、隆は降の訛なるべし　○或當悲吟、或は原本式に作る諸本に據て改む

○所欽、欽は原本欣に作る諸本に據て改む　○攸釡、攸は原本傾に作る閣本淀本に據て改む　○如常、此下に宮イ本内イ本儀字あり　○木枯神、式外　○田坐神、神名式丹比郡田坐神社、中河內郡松原村、今同村柴籬神社に合祀

〔五月〕曾許乃御立神、神名式遠江國敷智郡曾許乃御立神社、今濱名郡北庄内村　○賀久留神、同式同郡賀久留神社、同郡神久呂村　○雜弄、三年六月辛未紀に童相撲あり散樂透撞咒擲弄玉等の戲を行はれしこと見ゆ是等の類なるべし　○於公、出自詳ならず於忌寸、天平九年九月紀、於宿禰、延暦六年六月紀あれど異なり　○滋世宿禰、他に見えず　○丸子部妖人、和邇臣の部曲の民なるべし萬葉廿に常陸國久慈郡丸子部佐壯見ゆ　○俘囚、俘は原本徐に作る類史の文に據て改む　○吉美侯、侯下恐くは部字を脫す　○宇倍神、神名式因幡國法美郡宇倍神社、名神大、今國幣中社に列す當[illegible]宇倍野か　○六人部、姓氏錄右京神別に火明命五世孫武礪目命之後也とあり　○少神積命、武礪目命の

○五月戊辰朔、遠江國正六位上曾許乃御立神、賀久留神、並授從五位下。○四日辛未、先是大和國言、右京絕戸百七十九烟、將被除帳、至是並免之、以百姓愁也。○五日壬申、端午之節、天皇御武德殿、觀諸衞騎射、親王以下、五位以上、貢競走馬、如常。○六日癸酉、亦御同殿、觀馬藝雜弄、如昨儀。○十日丁丑、右京人左辨官史生從六位下於公浦雄、弟菅雄、主雄等三人、賜姓滋世宿禰。常陸國久慈郡人、丸子部妖人、茨城郡俘囚吉美侯酒田麻呂等、並進位三階、以孝於父母也。○十三日庚辰、授因幡國從五位下宇倍神正五位上。美濃國厚見郡人外從五位下行助教六人部永貞、讃岐少目從七位上六人部愛成、散位從七位下六人部行直等三人、賜姓善淵朝臣。天孫火明命後、少神積命之裔孫、與伊豫部連、次田連等同祖也。讃岐國刈田郡人直講從六位上刈田首安雄、散位從七位上刈田首氏雄、阿波博士從八位上刈田首今雄等三人、改本居隷左京職。○十四日辛巳、式部省奏、諸國銓擬郡司擬文、天皇不御前殿、大臣奉

一名か

○伊豫部連、錄左京神別尾張連の次に伊與部火明命五世孫武礪目命之後也とあり

○次田連、同河內神別に次田連火明命兒天香山命之後也とあり

○阿波博士、阿波國の博士なり頭注に阿波疑阿野郡人之誤と云へるは非

○點定、點は原本群に作り諸本野に作る紀略に據て改む

○賜姓清春眞人云云、清春氏は清原氏と同祖、此文七年六月壬申紀に重出す何れか誤あるべし

○礒城親王、本居翁云礒、礒の誤、礒城皇子は天武天皇の皇子

○特甚、甚は原本共に作る諸本に據て改む

(六月)金佐奈神、神名式武藏國兒玉郡金佐奈神社(名神大)、同郡青柳村二宮、官幣中社に列す

○校田帳、現在耕作に堪ふる田地を調査して悉く之を記載せる帳簿なり此太政官符は三代格十五に見え校田帳の事は民部式に見ゆ

○大帳、計帳とも大計帳

勅、於近仗下點定覆奏焉、○十六日癸未、地震、是日夜、東京左衛門衛士居區失火、○十七日甲申、詔以河內國從五位下田坐神列於官社、○廿日丁亥、公卿就太政官曹司廳、任諸國銓擬郡司、近者海賊往往成群、殺害往還之諸人、掠奪公私之雜物、備前國言、進官米八十斛、載於一船、差綱丁進上、而遭海賊、悉被侵奪、所殺百姓十一人、是日、下知播磨、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土左等國、差發人夫、追捕海賊、○廿二日己丑、左京人正六位上坂井王賜姓清春眞人、礒城親王五代之孫也、○廿三日庚寅、美濃國土岐惠奈兩郡、百姓弊亡特甚、給復一年、○廿七日甲午、淫霖未止、是日、雷電大雨、庭潦奔溢、詔、故從四位下藤原朝臣雄敏田地在河內國澁川郡、以充崇親院、○六月戊戌朔、四日辛丑、武藏國正六位上金佐奈神列於官社、○五日壬寅、太政官處分、諸國校田帳、自今以後、進據大帳、不許損減、若有所損、爲例返帳、但非常損者、令別錄言上、以中務少輔從五位下橘朝臣末茂爲甲斐守、從五位下守大和權守在原朝臣安貞爲大宰權少貳、○十日丁未、大祓

さしたる戸口及調庸の課不課等を登錄せる帳簿なり
○繼長、類聚大補任に見ゆ貞觀七年十二月四日叙従五位下、始叙内階とあり
○勅旨田卅町、紀略卅を卌に作る
○天穗日命神、神名式山城國宇治郡天穗日命神社、紀伊郡醍醐村石田
○石手堰神、同式陸奥國膽澤郡石手堰神社、陸中國江刺郡黒石村
○答笛笙生、答笙の二字は諸本に據て補ふ
○五百木部連、錄河内神別に五百木部連火明命之後也と見ゆ
○駒形神、神名式陸奥國膽澤郡駒形神社、陸中國膽澤郡水澤町、國幣小社に列す
○正六位上天穗日命神、正六位上の四字は上文壬子紀に據て補ふ
○賑給之、賑は諸本賑に作る以下同じ
〔七月〕高宮郡、鈔國郡部に高宮太加三也とあり後高田郡に入る
○仲縣國造、國造本紀に吉備中縣國造見ゆ其地詳ならず備中國後月郡邊か

於建禮門前、以宮內省有馬死穢、○十一日戊申、晨月次祭、夜神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿向神祇官奉祭、授伊勢大神宮禰宜外從五位下神主繼長外從五位上、○十四日辛亥、平城舊京中勅旨田卅町、返賜无品高岳親王、及正五位上紀朝臣種子、正五位下大原眞人全子、无位藤原朝臣乙名子、并賜興福寺宿院各有數、○十五日壬子、山城國正六位上天穗日命神、陸奥國鎭守府正六位上石手堰神、並預官社、播磨國揖保郡人雅樂寮答笛笙生無位伊福貞、復本姓五百木部連、○十六日癸丑、地震、○十八日乙卯、授陸奥國正五位下駒形神從四位下、山城國正六位上天穗日命神從五位下、自去五月霖雨、京邑飢饉、頒遣使者賑給之、○卅日丁卯、大祓如常、○秋七月戊辰朔、二日己巳、常陸國河內、信太、鹿島、那賀、多珂五箇郡、頻年水旱疾疫、給復二年、○五日壬申、天皇御前殿、觀童相撲、其儀一如去年、○六日癸酉、亦御同殿、觀童相撲、○十日丁丑、安藝國高宮郡大領外正八位下三使部直弟繼、少領外從八位上三使部直勝雄等十八人、復本姓仲縣國造、○十二日己卯、天

皇御前殿、觀相撲、奏樂、如去年、○十三日庚辰、亦御同殿覽相撲、○十五日壬午、下知五畿七道諸國、進合赦帳程、准不與解由狀之期、○十六日癸未、相撲節改六月十五日、定七月上旬之內、○十七日甲申、於中宮、喚伶人舞童子等、奏音樂、如童相撲日之儀、○廿一日戊子、地震、授武藏國正五位下勳七等秩父神正五位上、○廿三日庚寅、大唐商人李延孝等卅三人來、勅大宰府、安置供給、○廿七日甲午、地震、安藝國安藝郡始置主政一員、○廿八日乙未、左京人前越後介外從五位下坂上伊美吉能文、大學少允從六位上坂上伊美吉斯文等九人、賜姓坂上宿禰、後漢孝靈皇帝四代孫、阿智使主之裔、與坂上大宿禰同祖也、左京人從五位下行參河介壹志宿禰吉野賜姓大春日朝臣、天足彥國押人命之後也、右京人中宮少屬正八位上道祖史豐富賜姓惟道宿禰、阿智使主之黨類、自百濟國來歸也、左京人造兵司少令史正六位上飛鳥戶造彌道賜姓百濟宿禰、百濟國混伎之後也、伊勢國安濃郡人右辨官史生正七位上爪工仲業賜姓安濃宿禰、神魂命之後也、河內國安宿郡人外從五

郷あり是かと云其[illegible]に神魂命十世[illegible]有[illegible]
○[illegible]、任中[illegible]あり[illegible]しも[illegible]に言ふて[illegible]解由を與ふる時其[illegible]を[illegible]に勘ずる[illegible]を云續後紀(二六〇頁)に始て見ゆ
○不與解由狀之期、勘解由式に凡內外官人云々其不與解由狀內官卅日外官十日內不ㇾ論ニ前後ニ超次勘奏とあり
○正七月、定は原本及に作る諸本に據て改む
○秩父神、神名式武藏國秩父郡秩父神社、大宮町國幣小社に列す
○卅三人、祕本卅三人に作る
○安藝國、此三字諸本に據て補ふ
○大春日朝臣、錄左京皇別に見ゆ
○天足彥國押人命、孝昭天皇の皇子
○道祖史、錄右京諸蕃に百濟國王孫許里公之後也とあり
○飛鳥戶造、錄右京諸蕃及河內諸蕃に見ゆ
○彌道、彌は原本禰に作る諸本に據て改む
○爪工、錄和泉神別に爪工連神魂命男多久豆玉命

之後也雄略天皇御世遣紫蓋爪一并车・御座一仍賜爪工連姓
○阿刀物部、原本物部た宿禰に作る總本尼本に據て改む諸本移部に作る移字は物字の誤寫なり六年八月壬戌紀證とすべし阿刀物部は阿刀連と同祖
○日奉部、寶龜元年十月紀（續紀下二三三頁）に日奉部廣主と見ゆるは同族なるか日奉連は同族なるや否かは詳ならす
○川上舍人、雄略天皇二年に置史戸河上舍人部と見ゆ其の後ならむか
○巨濃郡、巨は原本臣に作る諸本に據て改む
八月○金佐奈神、六月辛丑紀に見ゆ
○御注孝經、唐玄宗の注
○論議、諸本議を義に作る
○公卿相、此三字は諸本に據て補ふ
○元興寺、興は原本與に作る諸本に據て改む
○高守遭母憂、高守の二字は衍なるべし
○起之、起は原本赴に作る諸本に據て改む
○是日、諸本是月に作る
○□□國寧川郎、國に諸

位下行主計助飛鳥戸造豐宗、改本居隷左京職、攝津國西成郡人陰陽允阿刀物部貞範貫附左京職、飛驒國荒城郡人太政大臣家扶日奉(ヒマツリ)部(ベノ)若善貫附左京職、河内國安宿郡人皇太后宮少屬正八位上百濟宿禰有世貫附左京職、近江國犬上郡人左馬大屬正六位上川上舍人名雄貫附右京職、因幡國巨濃郡人中宮大屬正六位上物部門起貫附右京職、○八月丁酉朔、日有蝕之、○五日辛丑、延六十僧於內殿、限三箇日、轉讀大般若經、○六日壬寅、授武藏國正六位上金佐奈(カナサナ)神從五位下、○九日乙巳、但馬國言、慶雲見、○十一日丁未、釋奠如常、正六位上行直講刈田首安雄講御注孝經、文章生等賦詩如常、是日、於太政官曹司廳、定條屬之考、公卿相分行事、○十二日戊申、明經博士等奉參御在所、論議如常、○十五日辛亥、和泉國和泉郡人白丁川枯首吉守叙位一階、獎力田也、是日、詔令本元興寺法華供得業僧、預維摩會竪義、○十七日癸丑、以散位從五位下藤原朝臣春江爲中務少輔、從五位下內藏朝臣高守爲備中介、高守、貞觀二年任備中介、高守遭母憂去職、今詔起之、

本に據て補ふ但し諸本讃岐の二字を缺く
○性甚、性は原本徃に作る諸本に據て改む
○爲大判事、大判事さ爲れる事續後紀に見えず云々さして略せし中にありしなるべし爲字は宮イ本内イ本に據て補ふ
○京職、原本京上に右字あり原本頭注に右字以上續日本後紀第五補さあれど六字の句にてなきがよし今諸本に據て削る
○差踳、踳は玉篇に踳駮色雜不同又與舛同さあり
○犯大不敬、犯は原本死に作る諸本に據て改む
○當絞詔減罪一等、原本當上に罪字及罪上に死字あり祕本尾本前本等に據て削る
○配流佐渡國、嘉祥元年十二月乙卯紀に見え佐渡を土左に作る
○興原敏久、原本興原を興源に作る諸本に據て改む敏久及額田今人の兩人に就て原本頭注に說あれど私記に拾遺云敏久見國史卷百四十七及卷九十九令義解序云興原宿禰敏久額田今足要略額田

是日、從五位下守大判事兼行明法博士讃岐朝臣永直卒、永直者、右京人也、本姓讃岐公、讃岐國寒川郡人、幼齒大學、好讀律令、性甚聽明、一聽暗誦、弘仁六年、補明法得業生、兼但馬權博士、數年之後、奉試及第、天長七年春、爲明法博士、同年夏爲右少史、明法博士如故、尋轉左少史、八年兼勘解由判官、承和元年正月、授外從五位下、爲大判事、明法博士如故、是年兼勘解由次官、三年賜姓朝臣、改本居隷京職、俄而兼出雲權介、遷兼阿波權掾、十三年法隆寺僧善愷向官、告檀越少納言登美眞人直名有犯之狀、右少辨伴宿禰善男、與參議右大辨正躬王等、執論差踳、善男辨口便佞、蒙帝寵遇、遂誣正躬王等、許容善愷違法之訴、免其官爵、先令明法博士等斷正躬等之罪、永直畏憚權勢、不肯正言、然執律私曲相須之義、大忤善男之旨、嘉祥元年、刑部少輔和氣朝臣齊之、犯大不敬、當絞、詔減罪一等、流伊豆國、永直坐齊之事、配流佐渡國、二年二月、仁明天皇晏駕、文德天皇踐祚、明年勅特從恩免、徵復本位外從五位下、齊衡二年、爲明法博士、三年老乞骸骨、再三陳請、然後許之、然猶不停明法博士、歸休

國造今見據此作今人首書所云々皆非按人訓爲是伴信友嘗辨之と云り
○疑滯、疑は原本凝に作る、閣本尾本前本等に據て改む
(九月)鷲峯神、式外、神祇志に今在氣多郡鷲峯村曰鷲峯明神と云、峯は原本岑に作る諸本に據て改む
○廿一日、閣本此條缺く
○是月京師云云、月は原本日に作る諸本に據て改む
○伊豫村神、神名式伊豫國伊豫郡伊豫神社(名神大)北伊豫村神崎
○板野郡人外從五位下、外字は宮本信友校本及正月丙子紀・十月己酉紀に據て補ふ
(十月)
○輪于六道、六道は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上を云ふ、于は諸本乎に作る
○四生、胎生・卵生・濕生・化生を云
○含靈、人類を云
○礫報之戚、礫は原本轢に作る類史百八十に據て改む
○三使、生・病・死の三

於家、天安二年、文德天皇勅曰、明法博士是律令之宗師也、惜其齒在耆耇不傳正說、宜令好事諸生、就其里第受讀善說、永直閑臥私第、授律令於生徒、式部省就門庭行講竟之禮、法家榮之、以壽終焉、時年八十、永直自爲官吏、爰及晚節、歷任勘解由次官、使判決之道、能究其旨、爲彼使司者、今猶爲準的焉、嘗大判事興原敏久、明法博士額田今人等、抄出刑法難義數十事、欲遣問大唐、永直聞之、自請詳解其義、累年疑滯、一時氷釋、遣唐之問、因斯止矣、長子時人傳父業、改姓和氣朝臣、少女爲光孝天皇更衣、生源皇子舊鑒、○九月丁卯朔、三日己巳、天皇潔齋、奉燈如常、○八日甲戌、授因幡國正六位上鷲峯神從五位下、○九日乙亥、重陽之節、天皇御前殿、賜宴群臣、文人賦詩、奏樂賜祿如常、○十一日丁丑、遣使伊勢大神宮奉幣如常、○十五日辛巳、地震、○十七日癸未、是月京師人家井泉皆悉枯竭、所有水之處、人相借汲用、是日、勅開神泉苑西北門、聽諸人汲水、○十八日甲申、授伊豫國從五位上伊豫村神從四位下、○廿一日丁亥、地震、○廿三日己丑、阿波國板野郡人外從五位下行明法博士粟

凡直鱒麻呂、中宮舍人少初位下粟凡直貞宗等、同族男女十二人、賜姓粟宿禰、○廿四日庚寅、地震、○廿七日癸巳、美作國獻白鹿、○廿九日乙未晦、地震、○冬十月丙申朔、天皇御前殿、賜飮侍臣、左右近衞府遞奏音樂、賜綿各有差、○二日丁酉、太政官處分、免大和國言將除棄右京絕戶百姓三百烟、○七日壬寅、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男奏言、生於三界、轉于六道、莫不荷負四恩之德、何謂四恩、一父母恩、二衆生恩、三國王恩、四三寶恩、四生含靈、非恩無育、夫報恩者、早登菩提之臺、背德者、常沒奈落之獄、臣宿緣多幸、生遇聖日、身陶十善之化、心練報恩之誠、每念建仁祠之舍、還恐違國家之制、方今三使數催、屠羊日迫、此生不報、後生何爲、悲寶山之徒歸、痛刀林之永割、請捨山城國紀伊郡深草鄕別墅、爲道場、賜額報恩、然則名之與實、自將相副、上答聖主覆載之恩、下酬法界顧復之德、詔許之、○九日甲辰、地震、越中國從四位下鵜坂神授從四位上、○十四日己酉、以外從五位下行明法博士粟宿禰鱒麻呂爲大判事、明法博士如故、○廿一日丙辰、右方諸衞府及馬

を三天使と云
○屠羊、屠所の羊なり
○寶山之徒歸、正法念處經に得人身不修道如入寶山空手歸とあり
○刀林、十六地獄の一にして劍樹地獄を云
○顧復、顧は原本領に作る諸本に據て改む毛詩小雅蓼莪章に顧我復我とあるに出づ
○卅僧修法、原本卅を御の一字に作る祕本閣本尾本等に據て改め補ふ
(〔十一月〕)天皇不御前殿、天皇不の三字は諸本に據て補ふ
○大物忌神、承和五年五月紀(續後紀一二二頁)に見ゆ
○地大震動、類史百七十一には地震の二字に作る
○粟栖神、四月庚戌紀に見ゆ
○田邊東神田邊西神、兩社並に式外、攝津志住吉郡に田邊東神祠在平野中野邑田邊西神祠在南田邊村とあり
○以攘妖祥焉、此五字原本に缺く諸本に據て補ふ
○廿二日丙戌云云、此條廿九字は祕本閣本尾本等に據て補ふ紀略は授神位

の三字に作る
○熊通男神、以下三神は神祇志に三社今並不知在何郡とあり
○川合坐小社宅神、原本坐を座に社を祖に作る式に據て改む
（十二月）卅二町、原本卅二町に作る諸本に據て改む
○纖長、大宮司例文に見ゆ此に同じ
○善根今年爲美濃守、善根は正月壬午美濃守に任ぜらる
○三年五月朔丹波守、善陰の丹波守に任ぜられしこと三年五月癸巳紀に見ゆ朔は誤なり朔或は爲の誤か貞觀の文字も適當ならず
○起之、起は原本赴に作る諸本に據て改む
○宇倍神、嘉祥元年七月甲申紀に見ゆ
○正五位上小野神、承和元年二月辛丑紀に見ゆ上の字諸本缺く、されば原本上とあるは見林氏の補ひたるかと思はる
○童齓、七八才の兒童を云齓は原本齡に作る諸本に據て改む
○歸丑、丑は日之誤歟さ

寮獻物、即是五月六日競走馬之輸物也、奏音樂并賜祿如舊儀、○廿二日丁巳、延屈六十僧於內殿、限以三日、轉讀大般若經、卅僧修法限七日、訖、○廿八日癸亥、地震、○十一月乙丑朔、中務省率陰陽寮、獻明年御曆、天皇不御前殿、付內侍司奏、詔以出羽國正四位上勳五等大物忌神、預之官社、○三日丁卯、地大震動、○八日壬申、平野春日祭如常、○九日癸酉、梅宮祭如常、○十一日乙亥、遣散位從五位下末良王、向伊勢大神宮奉幣、詔以河內國從五位下栗栖神、預之官社、攝津國正六位上田邊東神、田邊西神、並授從五位下、○十三日丁丑、祠園并韓神如常、○十四日戊寅、鎭魂祭如常、○十五日己卯、新嘗祭、天皇不御神嘉殿、勅親王公卿、向神祇官奉祭、○十六日庚辰、天皇御前殿、賜宴群臣、奏大歌五節舞、賜祿如常、○廿日甲申、先是少主鈴從八位上美和眞人清江言、鼠嚙內印盤褥、至是神祇官卜云、觸穢之人供神事、仍成祟、由是大祓於建禮門前、以攘妖祥焉、○廿二日丙戌、出羽國正六位上熊通男神、石通男神、眞藉神、並授從五位下、○廿四日戊子、大原野祭如常、○廿五日己丑、先

黑川氏云ふ
○丘田、祕本丘を岳に作る
○至于歸老、于は類史百八十に據て補ふ
○顯簪纓而胡顏、簪纓は身に著る冠服を云未だ退官せざるに依てかく云
○禪師親王、高岳親王
○因願、願は原本顯に作る諸本及類史に據て改む
○不勞犯土之功力、凡そ土を拓きて新に邸宅を營むには土神を祭りて謝するを例とし然らずば疾厄に遭ふべしと云是卽ち犯土なり、もと堂舍を構へし地にて其勞なしとなり
○獻微涓於存沒、微涓は微志なり存は御父高岳親王、沒は平城天皇を申す
○暝因、因は原本目に作る祕本閣本谷本等に據て改む
○四月十二日、上文十五日とす
○雲霓、霓は原本霞に作る閣本及類史八十一に據て改む
○不諱之綸、隱諱あることなく意見を述べよとの詔勅なり綸は原本論に作る諸本及類史に據て改む
○身非岳神、毛詩大雅崧

是、從五位上行但馬權守豐井王、割公廨道幡十八旒、各長一丈五尺、施入國分寺、請官裁云、永附官帳、以賽御願、太政官處分、依請焉、授山城國從五位上鴨川合坐小社宅神正五位下、○十二月乙未朔、七日辛丑、相摸國大住郡荒廢田卌二町、奉充冷然院、典藥寮始置寮掌一員、○十一日乙巳、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿向神祇官奉祭、伊勢大神宮禰宜外從五位上神主繼長加外正五位下、授度會宮禰宜外正六位上神主河繼外從五位下、○十六日庚戌、地震、○廿日甲寅、於內殿修佛名懺悔如常、以散位從五位下平朝臣住世爲正親正、從五位下滋野朝臣善根爲美濃守、從五位上滋野朝臣善蔭爲丹波守、善根今年爲美濃守、善蔭貞觀三年五月朔丹波守、兄弟並以母憂去職、今詔以本官起之、○廿二日丙辰、因幡國正五位上宇倍神、近江國正五位上小野神、並授從四位下、○廿五日己未、大藏大輔正五位下在原朝臣善淵奏言、善淵自在童亂之年、平城天皇別賜恩隱、荷戴之德、猶欲灰身、自宮車晏駕、常念結精廬於陵次、以作念佛之地、聊旦所得白業、卽便奉賽

高章に維嶽降神生甫及申、箋に四嶽卿士之官掌四時者也德當嶽神之意とあるに據れり四嶽の神を降して生ぜる甫侯申伯の如き賢知の相才に非すとなり
○台袞、三台補袞の意にて公なり
○獻替、獻は進、替は廢なり可を進めて否を廢するを云ふ左傳昭二十年に見ゆ
○仍以、仍は類史但に作る
○詩曰、毛詩大雅瞻卬章の語
○書曰、尙書皐陶謨の語
○趙魏滕薛之任易迷、適材を適所に置くは迷ひ易くして任じ難しとなり論語憲問篇に孟公綽爲趙魏老則優不可以爲滕薛大夫とあるに出づ
○絳侯嗇夫之才難辨、人の眞の才能は容易に辨別し得ざるを云ふ漢書張釋之傳に夫絳侯東陽侯稱爲長者此兩人言事曾不能出口豈效此嗇夫喋喋利口捷給哉とあるに據れり嗇夫は辯舌を以て漢文帝の賞賛を受けし者なり
○一切智、智度論所説三

御靈、丘山之恩、以補萬一、假使世累未免者、以得意一僧、代身令住持、至于歸老之時、將果出世之願、而年鬢漸衰、心事未合、望山陵而泣血、顧簪纓而胡顏、竊見禪師親王、昔擇堂舍之地、今來荒廢、基趾猶存、因願不勞犯土之功力、便建一舍於此中、方今薰風遠扇、眞俗霑仁、凡有善願、皆蒙成濟、儻枉大恩、蒙賜哀許、則獻微涓於存沒、爲知恩之一端、營深念於現當、作斷惑之勝業、卽瞑因之至願、土灰之極榮也、詔許之、善淵平城太上天皇孫、高丘親王之男也、○廿六日庚申、雷、大雨、勅公卿、分遣諸山陵墓、奉獻荷前幣如常、○廿七日辛酉、地震、右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相上表曰、伏奉今年四月十二日詔書曰、參議已上、各論時政之是非、詳世俗之得失、傷化害人、不便於時者、節用謹度、當利於國者、並盡昌言、以沃朕心、勿爲華飭、勿有隱諱、伏惟皇帝陛下、德高雲霓、明並日月、猶開廣詢之路、遂降不諱之綸、臣身非岳神、位忝台袞、獻替之誠徒積、塵髮之効叵申、仍以中外之國、小大之政、所以治而不亂者、唯以任得其人也、脫非其人、則雖有峻法嚴令、然是爲亂之階、終非爲治之備

○智の一にて一切の法を知了するを云
○八省維摩講師、八省は八省院なり
○職經內外、諸本外を史に作る天長十年正月十一日少內記に任ぜられたれば內史にても通ずれど七年二月紀にも內外とあれば改めず
○先鳴、左傳襄廿一年州綽曰云々平陰之役先二二子一鳴、注に自比二於雞鬪一勝而先鳴と見ゆ
○或羅法網、天安元年正月乙卯先是讃岐守たりし時百姓に訴へられ禁固に處せられしことあるを云
○無地息肩、地は原本他に作る類史に據て改む息肩は左傳襄二年に見ゆ
○徒獻管窺、史記扁鵲傳に若下以レ管窺レ天以レ郄視上レ文とあり又莊子秋水篇に見ゆ徒は原本從に作る尾本に據て改む
○第六、原本六下に終字あり祕本閣本前本等に據て削る

矣、故詩曰、人之云亡、邦國殄瘁、書曰、都在知人、知人則哲能官人、臣之不敏、深信斯言、從政以來、猶自留意、而趙魏滕薛之任易迷、絳侯嗇夫之才難辨、卽知人心險於山川、惟帝其難、將如之何、抑其明經秀才、得試及第者、尤是國家之才望、宜明古今王事之體、又一切智法教無量、凡諸僧綱、及曾經八省維摩講師、皆應通熟世諦之利病、又右大辨南淵朝臣年名、身爲進士、職經內外、稍通治體、旣居樞要、山城守紀朝臣今守、所歷之州、風聲必暢、論之良吏、自爲先鳴、伊豫守豐前王、才學早彰、資歷淹久、無他異跡、足謂老成、大宰大貳藤原朝臣冬緖、聲名粗達、器識漸優、吏幹之稱、仍有可愛、大和守弘宗王、頗有治名、多宰州縣、雖自賢之費、或羅法網、而談諸經國、非無其才、然則令件等人同上意見、旣云諮及芻蕘、何況於彼有識、臣謬荷重責、無地息肩、徒獻管窺、耻塵旒聽、○廿九日癸亥晦、大祓大儺如常、

日本三代實錄卷第六

【貞觀五年】七耀暦、耀は類史七十一に曜に作る

○源朝臣定薨、大日本史九十に傳見ゆ嵯峨天皇皇子にて第六の源氏なり

○贈從一位、從は諸本に據て補ふ

○別館、館は諸本宮に作る

○尤鍾愛、尤は原本在に作る諸本に據て改む

○弘仁五年、五月八日なり下文に見ゆ

日本三代實錄卷第七

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

起貞觀五年正月盡十二月

(癸未)五年春正月甲子朔、天皇不受歲賀、雨也、御前殿賜宴侍臣、賜被如常、七耀暦、藏氷樣、腹赤魚等、所司緩怠、不奏於庭、附內侍奏、○三日丙寅、大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定薨、贈從二位、遣從四位下行伊豫守豐前王、散位從五位下田口朝臣統範等、於柩前宣制、定者嵯峨太上天皇之子也、母百濟王氏、其名曰慶命、天皇納之、特蒙優寵、動有禮則、甚見尊異、宮闈之權、可謂無比、官爲尙侍、爵至二位、及薨贈從一位、始太上天皇遷御嵯峨院之時、爲築別館、令爲居所、號曰小院、太上天皇所居爲大院、尙侍所居爲其次故也、權勢之隆、至如此焉、定生而岐嶷、太上天皇尤鍾愛、弘仁五年、特蒙明詔、諸皇子未爲親王者、皆賜姓源朝臣、定是源氏之第六郎也、其源之命氏、始於此矣、太上天皇以定奉淳和天皇爲子、

淳和天皇受而愛之、過所生之子、更賜寵姫永原氏、令爲之母、故世稱定有二父二母焉、原姫所謂亭子女御也、天長四年二月廿八日、淳和天皇奉書於嵯峨太上天皇、請以定爲親王曰、被賜以來、稍淹年序、偏忸鍾愛、未閑才學、所恨荊山之璞、遂混瓦礫、皇家之胤、徒淪疋庶、眷言猶子、情深矜愍、謹檢弘仁五年五月八日詔旨、除親王之號、賜朝臣之姓、如可闕者、朕殊裁下、特望齒列親王、榮曜貽孫、方寸之思、伏聽天裁者、嵯峨太上天皇遂不聽焉、九年正月、擢授從三位、于時年十八、是年三月爲美作守、十年八月拜參議、十一年十一月爲治部卿、承和元年二月遷中務卿、美作守如故、五年爲播磨守、中務卿如故、七年五月淳和太上天皇崩、定上表乞退所職、至于八月、依請解參議、猶帶中務卿、但別勅賜食封百戶、九年嵯峨太上天皇崩、定丁憂解職、九月詔起之、以本官、十四年正月拜參議、十五年春爲尾張守、中務卿如故、嘉祥二年正月拜中納言、是月、母尙侍百濟王氏薨、定遭喪去職、三月詔奪情起之、仁壽三年八月爲左兵衞督、中納言如故、天安元年夏、抗疏解左兵衞督、二年兼右近衞大將、貞觀元

○原姫、寵姫永原氏を修して原姫と云
○忸鍾愛、忸は原本恤に作る秘本、閣本尾本に據て改む
○荊山之璞、文選答賓戲に和氏之璧韞於荊石とあり
○徒淪疋庶、疋は匹にて匹夫庶は庶民なり原本徒を從に疋を胥に作る秘本閣本尾本に據て改む
○眷言猶子、眷は玉篇に親屬曰眷とあり猶子は禮記檀弓に兄弟之子猶子也とあるに據れり
○檢弘仁五年五月八日詔旨、紀略に弘仁五年五月甲寅詔曰云々男女稍衆未識子道云々思除親王之號賜朝臣之姓とあり
○貽孫、毛詩大雅文王有聲章に詒厥孫謀以燕翼子とあり子孫に傳ふる計を云
○年十八、原本八を六に作る補任に弘仁七年生年十八とあり下文にも年四十九とあるに據て改む一代要記にも天長十年年十九とあり
○十一年、此三字は續後紀天長十年十一月紀に據るに衍なり閣本には一の

字なし
○九月詔、月は諸本に據て補ふ
○艱難、艱は諸本に據て補ふ
○性素溫雅、性は原本徃に作る諸本に據て改む
○薨時年卌九、原本時を特に卌を三十に作る諸本に據て改む又薨上に時字あり衍なれば削る
○付內侍奏、付は類史七十一及紀略に據て補ふ
○內藏頭、四年正月丙子紀に內藏權頭とあり此も權字を加ふべきなりされど紀略にも頭とありて權字なし故に舊に據て改めず
○藤原朝臣興邦卒、興邦は參議常嗣の長子にて祖父葛野麻呂は房前の曾孫なり任官の年月文德實錄に齊衡二年正月爲筑前介同三年正月爲筑前權守三年二月爲圖書頭天安元年九月爲右衛門佐二年正月爲筑後守とあり此文と合はず、興は原に與に作る諸本に據て改む
○閏二月、諸本二を三に作るは非なり
○內藏頭、天安二年九月壬申紀に權頭とあり

年十二月拜大納言、右近衛大將如故、定養長於深宮之內、未嘗知世俗之艱難、居家之事、無所經問、性素溫雅、愛好音樂、家庭常置鼓鐘、退公之後、必令擧而觀之、薨時年卌九、○四日丁卯、所司獻剛卯杖、付內侍奏、○五日戊辰、從四位下行內藏頭藤原朝臣興邦卒、興邦者、正三位行中納言葛野麻呂孫、而參議從三位行左大辨常嗣之子也、承和年中爲內舍人、久而遷右衛門少尉、俄轉大尉、尋兼近江大掾、遷兼備前掾、齊衡二年授從五位下、爲筑前介、二月留拜圖書頭、三月遷任筑前權守、不之任、三年遷左兵衛佐、天安之初、遷拜右衛門佐、二年正月兼筑前守、閏二月爲春宮大進、本官如故、三月轉亮、八月母喪解官、九月拜內藏頭、未幾兼左衛門佐、十一月皇太子卽帝位、是日加正五位下、貞觀四年授從四位下、卒時年卌三、○六日己巳、雷雨、○七日庚午、天皇御前殿、觀青馬、賜宴群臣、奏樂、賜祿如常、授從四位下貞內王、利基王等從四位上、無位元長王從四位下、散位從五位下內宗王從五位上、大山王從五位下、左京大夫從四位下紀朝臣今守、右近衛中將源朝臣興等、並從四位上、正五

位下守神祇伯中臣朝臣逸志從四位下、左馬頭從五位上兼行但馬介淸原眞人秋雄、民部大輔藤原朝臣菅雄、右中辨兼中宮亮藤原朝臣家宗等、並正五位下、散位從五位下飯高朝臣永雄、讃岐朝臣高作、平朝臣有世、下野介作宿禰河男、散位久賀朝臣三常、源朝臣有等、並從五位上、大炊頭外從五位下丸子連家繼、散位廣階宿禰貞雄、中宮少進長繼朝臣三助、無位源朝臣洪、左近衞將監正六位上橘朝臣弟房、中宮少進藤原朝臣是行、周防掾橘朝臣岑守、大藏少丞藤原朝臣行雄、紀朝臣吉繼、散位丹墀眞人繩繼、式部大丞藤原朝臣元利萬侶、神祇少副大中臣朝臣豐雄、大外記嶋田朝臣善長、大內記巨勢朝臣文雄、散位大神(オホミワ)朝臣高岑、皇太后宮大屬御春朝臣內雄等、並從五位下、直講從七位上刈田首安雄、施藥院使正六位上下毛野朝臣殿永、左大史大神朝臣全雄、主稅助山邊公眞雄、左京少進御輔朝臣直野、侍醫家原宿禰善宗、宮主卜部是雄等、並外從五位下、○八日辛未、始講最勝王經於大極殿、以興福寺僧傳燈滿位僧興照爲講師、授左衞門大尉正六位上藤原朝臣宗枝

○未幾、同紀に同日の事とす
○十一月、原本月を日に作る秘本尾本谷本に據て改む
○卅三、原本三十三に作る諸本及紀略に據て改む
○雷雨、雷は紀略に據て補ふ
○大山王、大上に無位の二字脫ちしなるべし
○右中辨(家宗)、右は原本左に作る三年五月癸巳に據て改む補任に貞觀六年二月十二日左中辨とあり
○讃岐朝臣高作、原本此上に讃岐朝臣永雄の六字あり衍なり秘本閣本尾本等に據て削る
○廣階宿禰貞雄、階は原本橋に作る諸本に據て改む
○從七位上(安雄)、四年五月庚辰紀に從六位上同年八月丁未紀に正六位上とあり恐くは從六位上の誤なるべし
○傳燈滿位僧興照、原本滿を法師の二字に作り興を與に作る諸本及類史百七十七に據て改む類史傳上の僧なきも前後の例に據るに僧字は寺名の下に

ありて名の上には見えず何れにても一字は衍なるべし
○源朝臣年姫、嵯峨天皇の皇女貞觀十六年九月六日卒
○統朝臣倚子、狩谷校本に統上恐有脫字乎といひ黑川校本に伊の字を補ひたれど所據を知らず伊統氏は六年八月壬戌右京人內敎坊頭從七位下秦忠寸善子賜姓伊統朝臣と見え此同族かと思へど年姫と共に無位より直に四位を賜ふに據れば別なるべし、淳仁天皇皇女に從四位上統朝臣熱子見ゆ其御姉妹なるべきか尙よく考ふべし
○藤原朝臣數、數は秘本閣本屋本に據て補ふ數下に子字を脫せしか
○好、此下にも子字を脫せしか
○普子、普は秘本並に作る
○清原眞人瀧雄卒、瀧雄の事蹟は續後紀には承和元年四月辛丑紀に文德紀には嘉祥三年四月甲子紀を始め其他にも屢見ゆ
○申遊宴、山田以文云申恐由之訛、中にても通ず

從五位下、從五位上橘朝臣氏子、無位源朝臣年姫、統朝臣倚子等、並從四位上、從五位上田口朝臣館子、從五位下藤原朝臣數、並正五位下、無位藤原朝臣好從五位上、良岑朝臣寛子、藤原朝臣普子、賀茂朝臣貞子、清科朝臣普子等、幷從五位下、小槻山公廣宅、角山公成子、並外從五位下、○十日癸酉、雷雨、○十一日甲戌、從四位上行中務大輔清原眞人瀧雄卒、瀧雄者右大臣贈正二位夏野眞人之第二子也、天長三年爲右兵衞少尉、四年遷右衞門大尉、尋遷左衞門大尉、七年九月、淳和天皇臨幸大臣新造雙丘山莊、申遊宴也、喚文人賦詩、授瀧雄從五位下、于時大臣爲大納言、八年八月除侍從、數月遷雅樂頭、承和元年四月、嵯峨太上天皇幸雙丘山莊、賞翫水樹也、是日勅加授大臣男三人榮爵、加從五位下瀧雄從四位下、正六位上澤雄、秋雄、並授從五位下、四年冬十月、父大臣薨、瀧雄居喪、哀毀過禮、十二月詔奪情、以本官起之、七年拜美作守、嘉祥三年四月進從四位上、十一月遷拜治部大輔、仁壽四年春爲安藝守、天安二年五月拜中務大輔、貞觀二年八月、丁母憂解職、十月詔起之、以本

任卒、時年六十五、○十四日丁丑、大極殿御齋會竟、僧綱已下、奉參內殿、論義如常、○十六日己卯、踏歌之節、天皇御前殿、賜宴侍臣、奏樂踏歌、賜祿、其儀如常、並如舊儀、○十七日庚辰、勅公卿、於豐樂院、令行射禮、○十八日辛巳、天皇御射場殿、觀四府賭射、○十九日壬午、侍從所庭中、鬼足遺跡、無品大原內親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、皇帝不視事三日、內親王者、日本根子天排國高彥尊天皇（平城）之皇女、母正四位下勳四等伊勢朝臣老人之女、贈從三位繼子也、二品行治部卿兼常陸太守賀陽親王上表、請致仕曰、臣聞、力拙筋衰、請骸之訓自遠、鐘鳴漏盡、收迹之誠斯彰、臣本愚頑、志業無紀、幸賴天潢餘潤、終得爵命洊臻、獻替之志、已謝塵涓、期夕之誠、徒積葵藿、方今光陰行暮、忽爲夜行之人、即須歲首奏聞、當表閑退之請、然而將辭之蔫、猶有眷戀彫梁、欲去之驂、非無徘徊伏櫪、況臣多年已作魏闕之臣、一旦應爲丘園之老、犬馬之情、戀主何已、故三朝以下、諸節會之日、勤從賓贊、自割情戀、即今正月已闌、朝會漸隔、宜退影閑扉、待終初服、伏願曲垂上天聽卑之恩、幸全微臣知止之分、瞻仰

○嘗翫、翫は原本愛に作る秘本尾本に據て改む
○論義、類史論議に作る
○鬼足遺跡、齊明紀六年に鬼火見えたれど後に所謂鬼と云ものは此に始て見ゆ抄天地部神靈類に人神周易云人神曰鬼（和名於邇或說云於邇者隱音之訛也鬼物隱而不欲顯形故以稱也）とあり跡は原本蹟に作る諸本及紀略に據て改む
○大原內親王、平城天皇の皇女
○力拙、拙は原本備に作る諸本に據て改む拙は鈍也
○徒積葵藿、文選求通親親表に若葵藿之傾葉太陽雖不爲之迴光終向之者誠也とあり徒は原本從に作る秘本閣本尾本に據て改む
○夜行之人、魏志田豫傳に年過七十而以居位譬猶鐘鳴漏盡夜行不休是罪人也とあるに出づ
○魏闕、莊子讓王篇に心居乎魏闕之下とあり朝廷を云
○丘園之老、易賁卦に賁于丘園、注に丘園是質素之處とあり隱居の意なり

宸居、伏增感戀、不任下情之至、優詔不許之、○廿日癸未、從五位上行助教滋善宿禰宗人卒、宗人者左京人、本姓西漢人、備中國下道郡之所貫也、少遊學館、從大學博士御船宿禰氏主受三禮、一聞而記於心焉、氏主顧謂同志云、此生、後代之禮聖也、天長年中爲美作博士、以經學優洽、被召侍嵯峨院、承和七年、擢拜直講、久而遷助教、嘉祥三年授外從五位下、仁壽二年賜姓滋善宿禰、改本屬隷於左京、天安元年授從五位下、貞觀之初加從五位上、宗人性沉靜少人事、執志雅正、以儒素自守、未嘗入宮中見公卿大夫、卒時年六十四、○廿一日甲申、停內宴、以天下患咳逆病也、於雅院修法、限以七日、○無品純子內親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、皇帝不視事三日、內親王者、嵯峨太上天皇之皇女也、母正五位下文室眞人久賀麻呂之女文子、生二女焉、○廿二日乙酉、散位從四位下棟氏王卒、棟氏者三品葛井親王之子也、天安二年十一月授從四位下、貞觀十三年正月拜下野守、未遂秩限而卒、○廿五日戊子、大納言正三位源朝臣弘薨、弘者嵯峨太上天皇之子也、母上毛野朝臣氏、弘幼

○犬馬之情、史記三王世家に臣竊不勝犬馬心とあり
○三朝、元日を云漢書孔光傳に歲之朝曰三朝、注に歲之朝月之朝日之朝故曰三朝とあり
○勤從賓贊、朝儀に從事して賓禮を助くるなり治部卿は諸蕃朝聘の事を掌り元日以下節會に蕃客參列の時專ら其事に關係するを云
○已闕、闕は原本閑に作る諸本に據て改む
○初服、仕官せざる前の服なり離騷に退將復脩吾初服とあり
○上天聽卑、蜀志秦宓傳に天處高而聽卑とあり卑は原本早に作る閣本谷本に據て改む
○宗人者、宗は諸本に據て補ふ
○三禮、周禮儀禮禮記を云
○改本屬、屬は原本居に作る諸本に據て改む
○天安元年、諸本元年の二字缺く、原本頭注に元年二字以三代實錄補さあれど從五位下に叙せられしは齊衡三年正月辛亥にて天安は誤なり

○貞觀之初、四年正月丙子なり
○以儒素自守、晋書王隱傳に隱以儒素自守と見ゆ
○咳逆病、抄形儀部疾病類に引咳嗽病源論云欬嗽(亥走、一音欬字亦作咳之波不岐)肺寒則成也とあり箋注には欬嗽に作るシハフキは俗にいふセキなり
○文子、文は諸本父に作る原本頭注に文字誤寫爲父今以紹運圖改正とあり
○生二女、紹運錄には芳子純子齊子の三内親王見ゆ
○棟氏王卒、桓武天皇皇子葛井親王の子棟良王の兄なるべし
○貞觀十三年、十字は衍なるべし然るに三年正月に其事見えず戊子紀に基棟王を下野權守に任ずる事見ゆ恐くは誤あるべし
○源朝臣弘薨、紹運錄に源弘大納言正三位號廣幡とあり大日本史九十に傳見ゆ
○聽警、聽は原本聽に作る諸本に據て改む
○遷治部卿、續後紀に承

而聽警、好讀經史、尤善隷書、太上天皇在祚、弘仁五年賜姓源朝臣、弘是源氏之第二郎也、年十六歲、天長五年賜爵從四位下、七年加從四位上、爲宮內卿、九年兼播磨權守、十年遷信濃守、宮內卿如故、承和元年進正四位下、二年遷刑部卿、未幾遷治部卿、信濃守如故、九年七月、遭太上天皇崩解職、同月拜參議、九月復本官治部卿、十二年兼尾張守、十三年爲左大辨、尾張守如故、十四年授從三位、十五年正月拜中納言、仁壽元年進爵正三位、貞觀元年拜大納言、爲性寬厚、仁愛於物、通曉政體、視事清斷、始太上天皇見皇子中、弘最好學、特賜經籍、故家多賜書、倍於他子、弘尋讀不倦、兼好絲竹、每退衙之閑、以琴書自娛、薨時年五十二、散事從四位上統朝臣忠子卒、忠子者淳和太上天皇之女也、天長九年賜姓統朝臣、貞觀四年正月授從四位上、○廿七日庚寅、於御在所及建禮門、朱雀門、修大祓事、以攘災疫也、賑給京師飢病尤甚者、自去年冬末、至于是月、京城及畿內畿外、多患咳逆、死者甚衆矣、○二月甲午朔、勅從五位下行陰陽權助兼陰陽博士播磨權大掾滋岳朝臣川人、率大屬從八

和二年五月甲子遷二刑部卿一信濃守如レ故同五年八月庚寅爲二治部卿一信濃守如レ故とあり此に未レ幾遷二治部卿一とあるは誤れり
○九月復本官治部卿、此事續後紀に見えず
○十五年正月、原本頭注に正字闕以二續日本後紀一補とあり
○見皇子中、原本見皇の二字を諸字に作る諸本に據て改む
○倍於他子、他は原本諸に作る諸本に據て改む
○續朝臣忠子卒、紹運錄には續朝臣熟子見えて忠子は見えず大日本史に續忠子皇胤紹運錄皇胤系圖並忠作レ熟二代要記作レ就並非といひ熟子は忠子の誤とし皇統御系圖亦之に據れど忠子と熟子とは別なるべし天長九年賜姓の事他に所見なし
○忠子者、者字は諸本に據て補ふ
○修大祓事、修は紀略に據て補ふ
○去年冬末、年は諸本及類史百七十三に據て補ふ
○甚衆、甚は類史になし
二月 日下部、日下の二字は原本早に作る狩谷

位上日下部利貞、幷陰陽師等、向二大和國吉野郡高山一修二祭事一、預攘二虫害一也、○二日乙未、大祓於朱雀門前一、以下觸二死穢一人、入中禁中上也、○三日丙申、停二春日祭一、○四日丁酉、地震、停二祈年祭一、並以レ有レ穢也、○七日庚子、於二内殿一修法、限二七箇日一、○下二知大和國一、禁下藤原氏先祖贈太政大臣(鎌足)多武岑墓四履之内、部内百姓伐レ樹放牧上、○十日癸卯、以二二品兵部卿兼上野太守忠良親王一爲二式部卿一、上野太守如レ故、四品大宰帥惟喬親王爲二彈正尹一、正四位下行右大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名爲二左大辨一、勘解由長官如レ故、從四位下行左中辨兼式部少輔大枝朝臣音人爲二右大辨一、參議正四位下行彈正大弼正躬王爲二刑部卿一、散位正四位下源朝臣寛爲二宮内卿一、從五位下久須繼王爲二少納言一、從四位下行大和守弘宗王爲二左中辨一、從五位下行信濃介紀朝臣冬雄爲二皇太后宮亮一、信濃介如レ故、大藏大輔正五位下在原朝臣善淵爲二内匠頭一、從五位下行紀伊介紀朝臣宗守爲二玄蕃頭一、散位從四位上基兄王爲二民部大輔一、從五位下行尾張權介笠朝臣弘興爲二少輔一、四品彈正尹本康親王爲二兵部卿一、從五位上行左馬助平朝臣

氏の說に據て改む
○四疆之內、內は諸本に據て補ふ多武峯略記に貞觀六年延安和尚の申請に據り官使を遣して四至を定むること見ゆ
○惟喬、喬は原本高に作る諸本に據て改む
○正四位下行右大辨（年名）、行は六年正月癸卯紀に據て補ふ
○弘興、興は原本與に作る諸本に據て改む
○爲彈正大弼、爲は黑川校本に據て補ふ
○從五位上行兵部少輔、行は諸本に據て補ふ
○藤原朝臣春岡、朝臣の二字は四年正月丙子紀に據て補ふ
○直持、二年二月乙未紀眞持に作る
○百興、興は原本與に作る諸本に據て改む
○下野守基棟王、三年正月戊子紀には權守とあり其後正となりしにや考ふべし

有世爲刑部大輔、從四位上行信濃守在原朝臣行平爲大藏大輔、信濃守如故、從四位上行文章博士菅原朝臣是善爲彈正大弼、文章博士如故、從五位上行兵部少輔源朝臣直爲山城權守、從四位上行左京大夫兼山城守紀朝臣今守爲大和守、餘官如故、正五位下行越中守藤原朝臣春岡爲權守、從五位下守玄蕃頭佐伯宿禰直持爲介、和泉守從五位下高丘宿禰百興爲河內守、散位從五位下嶋田朝臣善長爲和泉守、從五位下藤原朝臣是總爲伊勢介、從五位下紀朝臣正守爲參河介、散位頭從五位下縣犬養大宿禰貞守爲駿河守、散位從四位上源朝臣啓爲相摸守、從五位下清原眞人長統爲下總守、從四位下行左近衛少將兼美作守良岑朝臣清風爲近江權守、民部少輔從五位下藤原朝臣有蔭爲上野介、從五位下行下野介伴宿禰河男爲守、侍從從五位下坂上大宿禰岑雄爲介、參議刑部卿正四位下正躬王爲越前權守、刑部卿如故、大監物從五位下橘朝臣門雄爲能登守、從四位上行下野守基棟王爲越中守、散位從五位上飯高朝臣永雄爲越後守、前越後介從五位下坂

○仲野親王、野は原本舒に作る伴本及九年正月戊午紀に據て改む

○貞庭、貞は舊本伴本眞に作り上文何れも貞とあり

○左兵衞權佐、佐は原本介に作る諸本に據て改む

上宿禰能文爲權介、散位外從五位下秦宿禰永原爲丹波介、從五位上藤原朝臣常永爲但馬守、大藏少輔從五位下藤原朝臣大野爲權守、從五位下行皇太后宮大進御船宿禰彦主爲兼因幡介、參議正四位下行式部大輔春澄朝臣善繩爲播磨權守、式部大輔如故、從四位上行兵部大輔藤原朝臣仲統爲美作守、兵部大輔如故、從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣直道爲備前守、從五位下守內匠頭藤原朝臣利基爲權介、從五位下行中宮少進藤原朝臣是行爲介、從五位下行備後介小野朝臣國梁爲守、外從五位下行左大史大神朝臣全雄爲介、散位從五位下紀朝臣繼則爲紀伊介、外從五位下行縫殿助時統宿禰諸允爲淡路守、散位從五位下藤原朝臣宜爲伊豫權守、二品行式部卿兼上總太守仲野親王爲大宰帥、權少貳從五位下在原朝臣安貞、從五位下守右少辨藤原朝臣元利萬侶等、並爲少貳、大宰少貳從五位下藤原朝臣貞庭爲筑前守、散位從五位下永原朝臣永岑爲介、從四位下行左近衞少將藤原朝臣基經爲中將、從五位上行左兵衞權佐源朝臣舒爲少將、中納言

○兼行左衞門督藤原朝臣氏宗、以下兼伊豫介に至る三十三字は朝本に據て補ふ

○天津石門別稚姬神、神名式山城國葛野郡天津石門別稚姬神社（名神大月次新嘗）是なり大和さあるは同國高市郡に天津石門別神社あるより誤れるものなるべし

○守達神、守は原本安に作る元年十二月乙未紀に據て改む諸本字に作るも守の訛なり守達は式に守田さあり水内郡なり

○妻科神、二年二月丙戌紀に妻科地神さ見ゆ

○八櫛神、式外、所在未詳、神は原本なし例に據て補ふ

○與不之狀、原本與不倒置諸本及類史八十四に據て訂す

○守右中辨兼行中宮亮、守は諸本に據り行は例に據て補ふ

○大宰少貳、少は原本大に作る上文癸卯紀に據て改む

○從五位上（礒江）、上は原本下に作る元年十一月庚午紀に據て改む

從三位兼行左衞門督藤原朝臣氏宗爲右近衞大將、從五位下守右近衞權少將兼伊豫介藤原朝臣山陰爲少將、伊豫介如故、參議正三位行右衞門督兼近江守源朝臣融爲左衞門督、近江守如故、參議正四位下行左大辨兼左近衞中將藤原朝臣良繩爲右衞門督、散位從五位上在原朝臣業平爲左兵衞權佐、○十四日丁未、大風、壞民廬舍、大和國從五位下天津石門別稚姬神、信濃國從五位下守達神、妻科神、八櫛神等、並授從五位上、四品兵部卿兼上總太守本康親王勅賜帶劔、○十五日戊申、太政官處分、沒紀伊國司守從五位上並山王公廨、以前司介從五位下山口伊美吉西成放還與不之狀、過限不言上也、○十六日己酉、以正五位下守右中辨兼行中宮亮藤原朝臣家宗、爲左中辨、中宮亮如故、從五位上守左少辨丹墀眞人貞岑爲右中辨、從五位下守右少辨藤原朝臣良近爲左少辨、大宰少貳從五位下藤原朝臣元利萬侶爲右少辨、從四位下行大學頭忠貞王爲中務大輔、從五位下守大判事橘朝臣主雄爲少輔、從五位下行播磨介藤原朝臣國經爲侍從、播磨介如故、散

○石臣、原本右馬に作る祕本閣本谷本に據て改む元年十一月庚午紀證さすべし

○貞雄、貞は原本眞に作る祕本及正月庚午紀に據て改む

○行造兵正、行は前後の例に據て補ふ

○眞丘、眞は原本直に作る諸本に據て改む

○絕戶因而除帳、原本絕戶因を紀伊國に作る絕は黑川眞本に據り戶因は諸本に據て改む

位從五位下田口朝臣統範爲大監物、從五位上礒江王爲大舍人頭、從五位上藤原朝臣春江爲權少輔、散位從四位下潔世王爲大學頭、正五位下行博士大春日朝臣雄繼爲治部大輔、博士如故、山城權守從五位上源朝臣直爲兵部少輔、散位從五位下紀朝臣恒身爲大判事、大監物從五位下丹墀眞人石臣爲大藏少輔、散位從五位下車持朝臣廣貞爲大炊頭、大炊頭從五位下丸子連家繼爲木工助、散位從五位下廣階宿禰貞雄爲左京權亮、外從五位下行造兵正葛城宿禰永藤爲右京權亮、從四位下行左中辨弘宗王爲大和守、從五位上行典藥頭出雲朝臣岑嗣爲攝津權守、散位從五位下賀茂朝臣岑雄爲相摸權介、從五位下紀朝臣眞丘爲上野介、鎭守將軍從五位下小野朝臣春枝爲權介、將軍如故、散位從五位下文室朝臣甘樂麻呂爲陸奧介、民部少輔從五位下藤原朝臣有蔭爲大宰少貳、○十七日庚戌、左京人從八位上息長眞人淨主等、同族合五烟、還附本貫、薺衡二年左京職言、此是絕戶、因而除帳、至是淨主等披訴、許之、○十

○日初昇白無光、原本日字なく白を日に作る尾本前本谷本及紀略に據て改む
(三月)熊野早玉神、元年正月甲申紀に出づ
○七道諸國名神、七上に或は五畿の二字を脱るせかされど紀略亦同じ
○咳嗽、原本咳嗽に作る今諸本に據て訂す箋注倭名抄疾病部に咳嗽病源論云欬欶（字亦作咳嗽之波不岐）とあり
○二月四日、月は原本日に作る諸本に據て改む
○穴太氏、錄山城雜姓に穴太村主曹氏寶德公之後者とあり
○息長坂田酒人、錄左京皇別に息長眞人出自譽田天皇（謚應神）皇子稚渟毛二俣王之後也とあり坂田酒人眞人亦同じ
○兩人、息長氏と坂田酒人と兩氏なれば人は氏の訛なるべし
○无上之法、法字諸本に空白とす十七年三月辛亥紀所引に據れば法は力な

九日壬子、自十六日至十八日、日初昇、白無光、月初出、赤如丹、今日並復舊、○廿一日甲寅、勅能登國、置國分寺布薩戒本田三町、大和和泉兩國飢疫、賑給之、○三月癸亥朔、二日甲子、空中有聲、如雷、紀伊國從二位熊野早玉神授正二位、○三日乙丑、御齋奉燈如常、○四日丙寅、勅班幣七道諸國名神、今春咳嗽流行、人多疫死、仍禱名社神明、有感、因以賽之、○五日丁卯、於神祇官修祈年祭、此祭例用二月四日、而有穢停止、故今日祠焉、○九日辛未、遣使者奉幣於伊勢大神宮、○十一日癸酉、詔令近江國坂田郡穴太氏譜圖、與息長坂田酒人兩人同卷進官、○十五日丁丑、霜降、宣詔五畿七道諸國云、迺者陰陽寮勘奏狀偁、撿卜筮、今茲可有天行之疫、豫能修善、可防將來者、加以春雨未遍、水泉涸乏、思民與歲、忘寢與食、夫銷禍者、能仁无上之法、招福者大乘不二之德、宜仰諸國、以安居中、講說經王、自詔到日、比及秋收、至心堅固、專念轉讀、庶幾增神威於自在、保寶祚於冥助、黎民無疾疫之灾、農功有豐稔之喜、凡功德之道、誠信爲本、仍須長官親自撿校、勤允叡慮、必期靈應、不得疎略、帝外

るべし
○講說經王、經は紀略及十七年三月辛亥紀に據て補ふ法華經最勝王經を經王と云
○疾疫、原本疫癘に作る諸本及十七年三月紀に據て改む
○源氏墓、源潔姫
○兆域地、兆は諸本及紀略に據て補ふ
○禁私養鷹鷂、此事三代格十九に太政官符として出づ
○大村神、神名式伊賀郡大村神社、今名賀郡阿保町
○應感神、式外、神祇志に今在阿拜郡法華村
○治部大輔正五位下兼行博士、原本に正五位下兼治部大輔行大學博士とあり諸本に據て改め訂す
○三善宿禰、三は尾本宮本及四年正月壬午紀に據て補ふ
○起之、起は原本赴に作る諸本に據て改む
○有隣、隣は原本陰に作る諸本に據て改む

祖母源氏墓、在山城國愛宕郡、詔以兆域地四町、爲四履之限、是日禁諸國牧宰私養鷹鷂、先是貞觀元年八月頒下詔命、不貢御鷹、亦制國司養鷹逐鳥、或聞、多養鷹鷂、尙好殺生、故以獵徒縱橫部內、故重制焉、○十六日戊寅、伊賀國正六位上大村神、應感神、並授從五位下、○十九日辛巳、以散位從五位下橘朝臣弟房、爲大監物、從五位下山口宿禰文雄爲散位頭、從五位上源朝臣包爲治部大輔、治部大輔正五位下兼行博士大春日朝臣雄繼爲刑部權大輔、博士如故、外從五位下三善宿禰清江爲美濃介、清江貞觀四年拜美濃介、以父憂去職、今詔起之、○廿日壬午、以散位從五位上文室朝臣有眞、爲下總守、大宰少貳從五位下藤原朝臣有蔭爲近江介、下總守從五位下清原眞人長統爲越後守、從五位下行近江介藤原朝臣有年爲大宰少貳、○廿三日乙酉、延百二十僧於内殿、中宮、神泉苑三處、相分轉讀大般若經、限三日訖、○廿八日庚寅、詔以從四位下秀世王、正五位下在原朝臣善淵、從五位上紀朝臣有常、有宗宿禰益門、大春日朝臣眞野麻呂、平朝臣實雄、藤原朝臣安方、在原朝臣

（四月）傳燈法師位僧賢永、諸本法師の二字缺く

○攸感、攸は原本欣に作る黑川校本に據て改む

○貯穀百斛、貯は原本賜に作る諸本に據て改む

○乃付國司、乃は原本及に作る諸本に據て改む

○從停止、停は紀略に據て補ふ

業平、從五位下坂上大宿禰瀧守、藤原朝臣山陰、文室朝臣卷雄、高橋朝臣文室麻呂、藤原朝臣良近等、爲次侍從。○卅日壬辰、以從五位上滋野朝臣安成、藤原朝臣關主、從五位下源朝臣矜、藤原朝臣利基等、爲次侍從。○夏四月癸巳朔、天皇御前殿、宴于侍臣、奏樂賜祿如常。○三日乙未、先是伯耆講師傳燈法師位僧賢永奏言、年來五穀不登、百姓窮弊、加之疫病頻發、死亡者衆、賢永奉爲國家、誓願佛力、精誠攸感、頗知靈驗、由是割留供料、圖書寫一萬三千佛、幷觀世音菩薩像、及一切經、貯穀百斛、以資燈炷、請安置國分寺、乃付國司、其穀每年出擧、勿斷燈明、詔許之。○四日丙申、廣瀨龍田祭如常。○五日丁酉、昨今所修平野梅宮祭、忽有穢事、並從停止。○七日己亥、式部省奏成選擬階之簿、天皇不御前殿、大臣奉詔、付省行之。河內國若江郡空閑地四町賜陰陽寮。是日、以從四位上源朝臣能有、從五位上平朝臣春香、源朝臣平等、爲次侍從。○八日庚子、內殿灌佛如常。○十日壬寅、於建禮門前大祓。○十一日癸卯、天寒大風。人康親王家田九十四町在近江國愛智郡、爲傳法料、常康親王家

○百卅町、原本百上に四あり諸本に據て削る
○大外記滋野朝臣安成、上下文に大外記とあり或は權大外記ともあり外記補任には權大外記とす
○丁未、原本丁亥に作る尾本及紀略に據て改む
○眞當、當は黑川校本常に作る
○時主、鴨氏系圖に見ゆ此に同じ
○良岑朝臣清風卒、清風は承和三年五月庚申紀に初て見え文德紀には屢見ゆ
○嘉祥二年、原本嘉を喜に二を三に作る嘉は諸本に據り二は嘉祥二年正月壬戌紀に據て改む
○加賀介、加は原本伊に作る諸本に據て改む仁壽元年正月甲申紀參照すべし
○貞觀二年春云云、二年正月丁卯紀に「爲播磨權介」と見え同十一月壬辰紀從四位下敘位の條にも播磨權介とありて「除美濃守」の事は見えず、されば二年は四年の誤にて美濃は美作の誤とせば四年正月壬午紀に「爲美作守」

田百卅町在同國高嶋郡、爲救急料、並施入延曆寺、詔付國司、永勿徵租、○十三日乙巳、賀茂齋內親王依例修禊事、辨史皆染辨官犬死穢、勅遣從五位上行大外記滋野朝臣安成、奉從行事、○十四日丙午、地震、○十五日丁未、公卿就太政官曹司廳、賜文武官成選位記、賀茂上社禰宜正六位上賀茂縣主眞當、下社禰宜從六位上鴨縣主時主等、並授外從五位下、從四位下行近江權守良岑朝臣清風卒、清風者大納言贈從二位安世第三子也、承和初任內舍人、五年遷下野掾、八年除內匠少允、明年遷伊勢大掾、嘉祥二年正月授從五位下、四年拜加賀介、仁壽四年正月加從五位上、齊衡四年爲左馬助、天安元年遷左近衛少將、六月兼越中權介、二年遷美濃介、同年遷播磨介、並左近衛少將如故、是年母喪解職、數月之後、詔以本官起之、同年十一月授正五位下、貞觀二年春除美濃守、少將如故、十一月授從四位下、今年二月拜近江權守、赴任之後、未幾而卒、時年卅四、○十六日戊申、諸衛警固、緣賀茂祭也、○十七日己酉、賀茂祭如常、○十八日庚戌、諸衛解嚴、○廿一日癸丑、式部省奏諸國

とあるに合へど十一月授二從四位下一とあるは違へり蓋し編纂の際既に誤りしものなるべし
○卌四、原本三十四に作る諸本及紀略に據て改む
○式部少輔開簿讀之、少輔は原本省輔に作る少は林イ本に據り輔は諸本に據て改む
○无著、无は原本光に作る諸本に據て改む
○鴻臚館、大宰府にあり
○待唐人船、待は原本侍に作る祕本尾本谷本等に據て改む
（五月）正躬王卒、傳は大日本史百廿八に見ゆ此に萬多親王第七子とあれど天安二年七月己巳正行王の傳に萬多親王第二子也初與二兄正躬王一受二業大學一とあれば七子とあるは恐らくは誤なるべし
○奉文章生試、奉は原本擧に作る諸本に據て改む
○授從四位下、補任に天長六年正月七日とあり
○仁壽二年云云、承和六年正月甲子紀に爲二丹波介一とあり之を誤れるかされど仁壽中叙任の事承和の前にあるべきにあらず下文仁壽元年十一月云

郡司擬文、天皇不御前殿、公卿奏詔於仗下、令式部少輔開簿讀之、以從五位下行備後權介御船宿禰佐世爲助教、備後權介如故、河內守從五位下藤原朝臣秀雄爲典藥頭、從五位下行內藥正兼侍醫興道宿禰名繼爲駿河介、餘官如故、散位從五位下蕃良朝臣豐茂爲若狹守、是日制、准陸奧國例、給出羽國司交替料夫馬、先是大宰府言、新羅沙門无著、普嵩、清願等三人、著博多津岸、至是勅安置鴻臚館、資給粮食、待唐人船、令得放却、○廿九日辛酉、是月霖雨未霽、○五月癸亥朔、參議刑部卿正四位下兼行越前權守正躬王卒、正躬王者、贈一品萬多親王之第七子也、幼而聰穎、入學齒曹、涉讀史漢、善屬文、年十八奉文章生試及第、天長六年正月授從四位下、累遷彈正大弼、刑部大輔、右京大夫、仁壽二年出爲丹波守、以清簡見稱、部內肅然、民不敢欺焉、承和七年八月拜參議、八年春爲大和守、九年正月拜左大辨、大和守如故、十一年夏除遠江守、左大辨如故、是年十月爲領班山城國田使長官、十二年法隆寺僧善愷、告少納言兼侍從從五位下登美眞人直名爲寺檀越枉法狀、太政官

云の次に三年正月爲丹波守とあるべきなり
○拜左大辨、左は原本右に作る下文及承和九年正月戊申紀に據て改む
○爲領班、爲は朝イ本黒川校本に據て補ふ
○縱橫、縱は原本蹤に作り諸本從に作る今黒川校本に據る
○授正躬從四位下、此事續後紀嘉祥元年十二月庚戌紀に見ゆ此に正月とあるは誤れり
○拜治部卿、拜は秘本尾本に據て補ふ
○卌九戶、卌は原本三十に作る諸本に據て改む

加訊鞫讞之、而時論縱橫云、正躬等爲善愷成私曲、于時從五位下守右少辨兼行讃岐權介伴宿禰善男、執律私曲相須之義、不平正躬等之論此事、分爭遞成矛楯、事下勘解由次官外從五位下兼守大判事行明法博士讃岐朝臣永直考之、永直考云、私曲兩字、混處一科、是相須之義也、善男確執以爲、私之與曲、明是二也、當時、有識式部少輔從五位下小野朝臣篁同善男之論、遂緣受推善愷違法訴狀、官當解任、削爵一階、從四位下行左中辨兼守大藏大輔伴宿禰成益、從五位上守右中辨藤原朝臣豐嗣、從五位下守左少辨兼左衛門權佐藤原朝臣岳雄等、共坐此事、解官削爵、前史詳之、故不委載焉、嘉祥元年正月、授正躬從四位下、未幾拜治部卿、仁壽元年十一月加從四位上、齊衡二年正月進正四位下、拜大宰大貳、在官六年、貞觀二年歸京、三年正月拜參議、二月爲彈正大弼、今年二月除刑部卿、兼越前權守、卒於官、時年六十五、○二日甲子、平野從三位久度神、古開神、並加正三位、從四位下合殿比咩神從四位上、是日制、以下野國准大國例、免卌九戶損、伊賀國名張郡節婦伊賀朝臣道

○小高神、式外、神祇志に在利根郡神戶鄕後閑村とあり今古馬牧村後閑なり

○承和十二年爲掌侍、十以下從四位下に至る十六字は諸本に闕く

○爲尙藏、此下脫文あらむ

○御靈會、崇道天皇以下の怨恨ある御靈を慰め奉る法會なり是より先かゝる流言行はれ庶民之を信じて佛事を盛に行ひ朝廷遂に使を遣して之を監せしむるに至れり

○赴集、赴は原本起に作る要略廿二に據て改む

○靈座六前、崇道天皇以下六座なり

○雜伎、雜は原本新に作る要略に據て改む

○苑四門、拾芥抄中末に神泉苑天子遊覽所乾臨閣

虫女、永免戶內田租、終身勿事、卽表門閭、以旌貞操焉、○六日戊辰、天皇不御武德殿、停騎射之節也、○七日己巳、天寒殞霜、○八日庚午、公卿就太政官曹司廳、任銓擬郡司、官制如常、○九日辛未、授上野國正六位上小高神從五位下、○十三日乙亥、請六十僧於內殿、限以三日、轉讀大般若經、○十九日辛巳、尙藏從三位菅野朝臣人數薨、人數者致仕參議從三位眞道之女也、天長十年十一月叙從五位下、承和十二年爲掌侍、是年十一月叙從四位下、十三年爲典侍、是年十一月授從四位上、嘉祥二年十月轉尙侍、十一月授從三位、天安元年遷爲尙藏、○廿日壬午、於神泉苑修御靈會、勅遣左近衞中將從四位下藤原朝臣基經、右近衞權中將從四位下兼行內藏頭藤原朝臣常行等、監會事、王公卿士赴集共觀、靈座六前設施几筵、盛陳花果、恭敬薰修、延律師慧達爲講師、演說金光明經一部、般若心經六卷、命雅樂寮伶人作樂、以帝近侍兒童及良家稚子爲舞人、大唐高麗更出而舞、雜伎散樂競盡其能、此日宣旨、開苑四門、聽都邑人出入縱觀、所謂御靈者、崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人、及觀察

謂二之正殿一とあり宮殿壯麗に四方に門を設けて嚴重にせられしなり
○崇道天皇、出雲路御靈光仁天皇御子早良親王
○伊豫親王、京極下御靈桓武天皇々子反逆を誣ひられ藥を仰て母夫人と共に薨じ給ふ
○藤原夫人、高野御靈伊豫親王御母吉子
○觀察使、木津御靈藤原廣嗣なりと云
○逸勢、下桂御靈
○宮田麻呂、綴喜御靈宮田麻呂は仁明天皇承和十年十二月伊豆國に流さる以上六所の御靈は神祇拾遺に據る
○厲、厲鬼也惡鬼といふが如し
○疫病繁發、繁發の二字は要略に據て補ふ
○童貫、童に原本里に作る諸本及要略に據て改む貫は要略友に作り或は貫は串の誤かと云
○靚粧、靚は粉黛粧飾也
○袒裼、袒は原本祖に作る谷本に據て改む袒は裸露也裼は袒也捲袖也在衣曰袒、在裏曰裼とあり
○嫚戲 嫚は慢に同じ

使橘逸勢、文室宮田麻呂等是也、並坐レ事被レ誅、寃魂成レ厲、近代以來、疫病繁發、死亡甚衆、天下以爲、此災御靈之所レ生也、始レ自二京畿一、爰及二外國一、毎レ至二夏天秋節一、修二御靈會一、往々不レ斷、或禮レ佛說レ經、或歌且舞、令三童貫之子靚粧馳射、膂力之士、袒裼相撲、騎射呈レ藝、走馬爭レ勝、倡優嫚戲、遞相誇競、聚而觀者、莫レ不二塡咽一、遐邇因循、漸成二風俗一、今玆春初、咳逆成レ疫、百姓多斃、朝廷爲祈、至レ是乃修二此會一、以賽二宿禱一也、○廿二日甲申、天皇御二雅院一、召二見神泉苑御靈會舞童一、雅樂寮奏二音樂一、是日、勅遷二山城國廣幡神、田中神於愛宕郡伊佐彌里一、以二舊社近一レ於汙穢一也、○廿六日戊子、授二下總國從五位下意富比神正五位下一、分二美作國苫田郡一、爲二苫東、苫西郡一、以二從五位下守主稅頭家原宿禰繩雄一、爲二遠江權介一、主稅頭如レ故、○廿八日庚寅、美作國從五位下天石門別神、奈美神、大佐々神、並授二從五位上一、○六月壬辰朔、二日癸巳、以二駿河國富士郡法照寺一、預二之定額一、○三日甲午、以二丹波國何鹿郡佛南寺一、爲二眞言院一、割二付國司撿校一、○八日己亥、授二武藏國從五位上氷川神正五位下、甲斐國從五位下勳十一等物部神、美和神從五位上、

○塡咽、辭源に言人衆擁擠也とあり
○咳逆成疫、成は要略に據て補ふ
○廣幡神田中神、並に式外神祇志に二社今在愛宕郡華園村と見ゆ
○伊佐彌里、華園の舊名なるべし
○意富比神、神名式下總國葛飾郡意富比神社、東葛飾郡船橋町
○苫田郡、此時東西二郡とせられしが現今はまた一郡となれり
○天石門別神、神名式美作國英多郡天石門別神社同郡河會村瀧宮
○奈美神、式外神祇志に在勝田郡廣岡鄕成松村今屬勝北郡とあり美は癸の訛
○大佐々神、式外、同志に在苫東郡高倉鄕大佐々村今屬東北條郡(六八月)法照寺、厚原瀧泉寺なるべしと云
○何鹿郡、抄國郡部に何鹿(伊加留加)とあり
○佛南寺、詳ならず
○從五位上氷川神、上は原本下に作る元年正月紀に據て改む
○物部神、神名式甲斐國

近江國正六位上建部神從五位下、○十一日壬寅、月次幷神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿向神祇官、奉祭如常、○十七日戊申、越中越後等國、地大震、陵谷易處、水泉涌出、壞民廬舍、壓死者衆、自此以後、毎日常震、○廿一日壬子、復美濃國土岐、惠奈兩郡百姓課役一年、安藝國佐伯郡加置主政主帳各一員、○廿六日丁巳、進伊勢國從二位多度神階、加正二位、○廿八日己未、內匠寮始置寮掌一員、○廿九日庚申、以從五位上安倍朝臣貞行、爲攝津守、貞行貞觀三年任攝津守、以母難解職、今詔起之、○是月霖雨、人民愁焉、○閏六月壬戌朔、霖雨始霽、○二日癸亥、大和國言、石上神社南、見五色雲、○九日庚午、地震、○十三日甲戌、從四位下良岑朝臣寬子卒、○十九日庚辰、曉有流星西行、○廿一日壬午、京師飢、賑給之、○廿七日戊子、授近江國正五位下三尾神從四位下、○廿九日庚寅晦、朱雀門前、大祓如常、○秋七月辛卯朔、日有蝕之、○二日壬辰、勅遣參議正四位下行式部大輔兼播磨權守春澄朝臣善繩、從五位下行神祇少副大中臣朝臣豐雄、於大極殿、奉禱伊勢大神、去月有流星、

山梨郡物部神社、東山梨郡岡部村松本
○美和神、神祇志料に巨摩郡神部神社なるべしと云
○建部神、二年三月辛亥紀に出づ
○奉祭、祭は原本幣に作る、類史九に據て改む
○陵谷易處、毛詩小雅十月章に高岸爲谷、深谷爲陵とあり
○多度神、元年正月紀に出づ
○起之、起は原本赴に作る、諸本に據て改む
（閏六月）石上神社、山邊郡布留村にあり
○從四位下（寛子）、正月辛未紀從五位下に作る
○正五位下三尾神、神名式近江國高嶋郡水尾神社二座、並名神大月次新嘗とあり延曆三年八月壬寅紀に見ゆ
○庚寅晦、晦は例に據て補ふ
（七月）從五位下（豐雄）下は原本上に作る正月庚午紀及類史三に據て改む
○伊勢大神、大は原本太に作る諸本に據て改む下同じ
○豐江王卒、豐江王は光

神祇官卜云、天照大神成祟、故禱以防不祥也、○四日甲午、祠廣瀨龍田神、分遣使者、班幣諸名神社、○五日乙未、天皇御南殿、觀相撲、○八日戊戌、天皇御南殿、觀童相撲、○十六日丙午、前宮內卿正四位下豐江王卒、豐江者三品薭田親王孫、而高橋王之子也、弘仁十三年正月授從五位下、天長二年秋拜少納言、兼侍從、五年叙從五位上、承和五年加增正五位下、九年七月叙從四位下、十年爲中務大輔、十一年遷兵部大輔、嘉祥仁壽之間、累加至正四位下、齊衡三年遷右京大夫、後年除下總權守、天安二年爲宮內卿、貞觀四年、老病罷官、退居里第、卒時年六十八、○廿日庚戌、請六十僧於內殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿一日辛亥、大風、折樹發屋、○无品善原內親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、皇帝不視事三日、內親王者、桓武天皇之皇女也、母從四位上藤原朝臣大繼之女、從四位下河子也、○廿六日丙辰、囚獄司著釱囚人毆傷防援右兵衞百濟豐國、于時以左兵衞二人、右兵衞二人、爲左右囚人防援、囚人等私發憤恚、遂成此亂、○廿七日丁巳、勅以新錢一千貫文、施入諸大寺、充修理

仁天皇皇子稗田親王の孫にて高棟王の子なり、續史には續後紀承和五年正月丙寅授正五位下とさ見えたるを始とし文徳紀にも見ゆ
○高橋王、他に見えず
○承和五年、原本年を季に作る今尾本前本淀本に據る
○善原内親王薨、親王は桓武天皇皇女にて仲野親王紀伊内親王大井内親王何れも同母にまします
○大繼、濱成の子にて神祇伯伊勢守となる
○河子也、也は諸本焉に作る
○防援、今の看守の如きもの援は原本授に作る諸本に據て改む下同じ
○懷悪、悪は原本悉に作る宮イ本内イ本に據て改む
○己未晦、晦は閣本尾本前本等に據て補ふ
(八月)吉田神、神名式常陸國那賀郡吉田神社(名神大)東茨城郡吉田村
○從五位上建水分神、同式河内國石川郡建水分神社、南河内郡赤阪村水分上は諸本下に作る
○頭陀寺、遠江國濱名郡

料、中宮鐵一千廷加充同料、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺各錢百貫鐵百廷、延曆寺、新藥師寺各錢卅貫鐵卅廷、豐浦寺、本元興寺、招提寺、天王寺、崇福寺、知識寺各錢廿貫鐵廿廷、梵釋寺、比叡西塔院、東寺、西寺各錢十五貫鐵十五廷、○廿九日己未晦、囚獄司著鈦囚卅人、脫禁逃竄、○八月辛酉朔、二日壬戌、授常陸國從四位下勳八等吉田神從四位上、河内國從五位上建水分神正五位下、以遠江國頭陀寺預於定額、○三日癸亥、下知五畿内七道諸國、追捕逃走著鈦囚卅人、○七日丁卯、釋奠如常、直講從七位下船連副使麻呂講禮記、幷文章生等賦詩、○八日戊辰、地震、明經博士等奉參內裏、不喚御前、賜祿而罷、散位從四位上房世王上表言、風和日暖、則微禽猶弄其音、世靜時平、則小人自申其志、房世立性頑疎、無分所採、幸沾天潢之餘潤、早預紫紱之顯榮、每至公私行列之時、高加諸臣之上、未嘗不赧然恒怍、內疚于心、既恥一身不才塵點宗室、況復子孫無益損費帑藏、是以倘謙之慮、已兆於曩時、賜姓之言、乃發於今日、但嫌自愚心賜新造姓名、望請、追同近族、作平朝

にあり東海道名所圖會に青林山頭陀寺馬込橋より南八町にありと見ゆ
〇御前、前は原本所に作る紀略に據て改む
〇房世王、桓武天皇々子仲野親王の子
〇天潢、已に注す原本潢を滿に訛れるを閣本尾本に據て改む
〇紫紱、已に出づ
〇怛怍、怛は驚也懼也怍は慙也、原本怛を沮に作る黑川校本に據て改む
〇倚謙之慮、易履虎尾卦履道坦々の注に履道尚謙不憙處盈務在致誠惡夫外飾者也とあり
〇貽厥之謀、尚書五子之歌に貽厥子孫傳に言仁及後世とあるに據れり
〇外從五位下行、行は六年三月甲午紀に據て補ふ
〇和邇部、錄右京皇別に和邇部天足彥國押人命三世孫彥國葺命之後也とあり彥國押人命は孝昭天皇の皇子
〇菅野朝臣、錄右京諸蕃に見ゆ百濟國都慕王十世孫貴首王の後
〇少還、少は原本小に作る紀略に據て改む
〇鵜坂姉比咩神、神名式

臣姓、卽取得平之義、將爲貽厥之謀、詔許之、左京人外從五位下行雅樂少允和邇部大田麻呂賜姓宿禰、大田麻呂自言、天帶彥國押人命之後也、山城國紀伊郡人大炊大屬從六位下秦忌寸比津麻呂復本姓民伊美吉、父市守早死、比津麻呂幼少、被貫母姓、散位從四位下坂上大宿禰正野等上表、請復比津麻呂本姓、從之、攝津國河邊郡人散位正六位上若湯坐連宮足、主殿允正六位上若湯坐連仁高等三人、改本居隷右京職、〇九日己巳、右京人從五位下行皇太后宮大進御船宿禰彥主、從五位下行助教兼備後權介御船宿禰佐世、內藏少屬正七位上御船宿禰氏柄、散位從七位上船連助道等男女六人、賜姓菅野朝臣、河內國丹比郡人左兵衞權大志正七位上船連貞直賜姓御船宿禰、彥主等之先、出自百濟國貴須王也、〇十一日辛未、晨日無光、〇十二日壬申、晨日無光、少還復本、〇十五日乙亥、越中國正六位上鵜坂姉比咩神、鵜坂妻比咩神、杉田神、並授從五位下、庶人文室宮田麻呂家十區、地十五町、水田卅五町、在近江國滋賀、栗太、野洲、甲賀、蒲生、神埼、高嶋、坂田等郡、勅

越中國婦負郡姉倉比賣神社なるべし神祇志には式外とす

○鵜坂妻比咩神、鵜坂神の姫神

○杉田神、杉は原本移に作る諸本に據て改む神祇志料には原本傍注により式内婦負郡杉原神社とし神祇志には版本に據て移田とし礪波郡中田村移原にありと云

○栗太、栗は原本粟に作る閣本尾本前本等に據て改む

○貞觀寺、山城國紀伊郡にあり十四年七月丁亥十六年三月壬午紀に見ゆ

○飛鳥戸造、錄河内諸蕃に飛鳥戸造出レ自二百濟國主比有王男混伎王之後一也とあり

○无姓百姓安岑、百姓の二字は諸本に據て補ふ

○安岑等自款、安岑等の三字も諸本に據て補ふ

○典兵、後宮職員令兵司に尙兵一人掌レ供二奉兵器之事一典兵二人掌同二尙兵一とあり

○外少初位下麻續部愚麻呂、麻以下六字は諸本に據て補ふ

○豐城入彦命、崇神天皇

施貞觀寺、○十七日丁丑、右京人外從五位下行主計助飛鳥戸造豐宗等男女八人、賜姓御春朝臣、其先出自百濟國人琨伎也、无姓百姓安岑、春岑等二人、賜姓有良朝臣、貫附左京、安岑等自款云、安岑等故從四位上橘朝臣清野男安雄之子也、安雄剃髮爲沙門、安岑等被編伯父從五位下橘朝臣廣雄戸籍、承和十二年、氏人等稱有嫌疑、削籍不齒、今請賜姓定居、爲編戸民、許之、和泉國大鳥郡人大藏大錄正七位上當世宿禰高門、大和國城下郡人正六位上大和宿禰永胤、典兵外從五位下大和宿禰繼子等、並改本居、貫附右京職、○十九日己卯、伊勢國多氣郡百姓外少初位下麻續部愚麻呂、麻續部廣永等十六人、復本姓中麻續公、愚麻呂等自款云、豐城入彦命之後也、以傳燈法師位善行、爲內供奉十禪師、○廿一日辛巳、於神泉苑修法、限七日訖、右京人從五位下行隼人正難波連藲麻呂、伊豫權掾正六位下難波連實得、縫殿少允從六位上難波連清宗等、並賜姓朝臣、其先高麗國人也、○廿二日壬午、讃岐國多度郡人齋院權判官正六位上刑部造眞鯨、改本居貫左京職、○

皇子
○難波連麻呂、錄右京諸蕃に難波連出自高麗國好太王之後也とあり波は閣本前本谷本破に作る
○清宗、清は原本法に作る諸本に據て改む
○改本居、本は黑川校本に據て補ふ
○宜勘三比籍、戸令義解に六年爲一比、謂之比者比校之義とあり戸籍は六年毎に一度造るを例とし三比は三度の戸籍なり
○起之、起は原本赴に作る閣本尾本谷本等に據て改む
（九月）○多臣、錄左京皇別に多朝臣出自謚神武皇子神八井耳命之後也とあり
○秦忌寸、錄山城諸蕃に秦忌寸太秦公宿禰同祖秦始皇帝之後也とあり
○式部位子、位子を上中下三等に分ち上等及下等を式部に送り大舍人及使部とす式部位子とは之を云
○禪林寺、山城志に禪林寺在南禪寺北、稱永觀堂、又名無量壽院とあり
○眞紹、釋書十四に傳見

廿三日癸未、太政官處分、左右京五畿七道諸國、貢擧位子、自今以後、宜勘三比籍。○廿五日乙酉、以外從五位下忠世宿禰貞直、爲薩摩守。貞直、貞觀四年任薩摩守、以母憂去職、今詔起之。○九月庚寅朔、三日壬辰、御齋奉燈如常。○五日甲午、右京人散位外從五位下多臣自然麻呂賜姓宿禰。信濃國諏方郡人右近衛將監正六位上金刺舍人貞長賜姓大朝臣。並是神八井耳命之苗裔也。山城國葛野郡人圖書大允從六位上秦忌寸春風、但馬少目正八位上秦忌寸諸長等三人、賜姓時原宿禰。其先、秦始皇之後也。河內國丹比郡人左少史從六位下葛井連宗之、兵部少錄正七位下葛井連居都成等四人、改本居貫附右京職。河內國錦部郡人木工權少屬從七位上錦部連安宗、式部位子正七位上錦部連三宗麻呂等、改本居貫附左京職。○六日乙未、以山城國愛宕郡道場一院、預於定額、賜名禪林寺。先是、律師傳燈大法師位眞紹申牒偁、昔忝以愚朦貧道之質、厚蒙承和聖主之恩。不任慙愧之至、思致涓塵之効。行住坐臥、未曾廢忘。當于此時、至心發願、奉爲聖皇、奉造毘盧遮那佛、及四方佛

像、奉レ報二聖恩一護二持國家一而每事闕短、資具未レ備、唯採二材木一未レ始二鏤刻一爰逮二于齊衡元年一於二河內國觀心山寺一僅奉レ造、三年之間、其功既畢、竊慮、山中寂寞、住持難レ久、至二于後代一恐有二頽毀一事須下近移二京華之邊垂一令上レ易二後代之修治一爰買二故從五位下藤原朝臣關雄東山家一即便爲二寺家一造二立一堂一安二置五佛一夫僧買二俗家一者、律令之所レ制、私立二道場一者、格式之所レ禁也、犯二此禁制一立二彼道場一非下是敢狎二法禁一故招中罪名上誠欲下報二先帝之鴻恩一果中區區之至願上夫普天之下、莫レ不二王地一所作之功德、皆悉資二國王大臣一此則聖教之所レ明、非二凡愚之私造一請預二之定額一名二禪林寺一永傳二眞言法門祕要一師資相傳、存二於不朽一詔許レ之、○七日丙申、壹伎嶋石田郡人宮主外從五位下卜部是雄、神祇權少史正七位上卜部業孝等、賜二姓伊伎宿禰一其先出レ自二雷大臣命一也、○八日丁酉、地震、右京人主計權少屬從八位上大原史弘原、內膳令史從七位上大原史廣永等賜二姓宿禰一其先出レ自二後漢孝靈皇帝之後麗王一也、○九日戊戌、重陽之節、宴二于群臣一賜以二菊酒一喚二文人一賦レ詩、宴竟賜レ祿各有レ差、○十日己亥、大二祓於建禮門前一以二明日將一レ發レ奉二幣伊勢大

ゆ
○貧道、道を得ること貧弱なる意、僧史略に漢魏兩晉沙門對二君王一亦只稱二貧道一とあり
○奉造毗盧遮那佛、奉は諸本及類史百八十に據て補ふ
○每事、類史は事を年に作る
○觀心山寺、石川郡觀心寺村にあり縁起に當寺者先師(空海)和尙經行之伽藍とあり
○僅奉造、僅は原本謹に作る諸本及類史に據て改む
○藤原朝臣關雄、秘本閣本尾本朝臣の二字なし
○敢狎法禁、類史敢狎を欺狎に作る
○名禪林寺、類史名下に爲字あり
○宮主、神祇官卜部の中にあり主として宮中の御卜に奉仕するものなり大宮主中宮々主東宮々主の別あり
○伊伎宿禰、錄右京神別に壹伎直天兒屋根命十一世孫雷大臣之後也とあり
○大原史弘原、大原史は錄攝津諸蕃に漢人西姓令貴之後也とあり弘原宿禰

を賜ふ事十四年八月己亥紀に重出文少しく異なり
○飾磨郡人、人は文例に據て補ふ
○大初位上(宅繼)、宅繼は二年十二月癸丑紀に正八位上とあり何れか誤あるべし
○藏史朝臣繼、狩谷校本に朝臣當乙とあり
○內豎、豎は原本竪に作る闇本谷本に據て改む下同じ
○眞野臣、錄右京皇別に眞野臣天足彥國押人命三世孫彥國葺命之後也とあり
○雄山神、神名式越中國新川郡雄山神社、中新川郡立山村、諸本には山字なし
○高野神、神名式栗太郡及伊香郡に高野神社あり高野の誤かとも思へど葛野は式外なるべし
○高繩神、式外、神祇志に高繩神在風早郡一とあり繩は秘本には縄に作る
○起請二條、起は原本廬に作る諸本に據て改む
○神社帳云云、此官符は格十二に出づ
○奴婢生益附帳之日、此官符は格三に出づ

神宮使一也、播磨國飾磨郡人播磨博士大初位上和邇部臣宅繼賜二姓邇宗宿禰一、自言天帶彥國押人命之後也、河內國古市郡人木工大屬正七位上藏史朝臣繼、改二本居一貫二附右京職一、○十一日庚子、遣二使者於伊勢大神宮一、○十三日壬寅、紀伊國名草郡人內豎從八位下紀直貞吉、改二直字一賜二宿禰姓一、攝津國豐嶋郡人左史生從六位上葛木直貞岑、改二本居一貫二附右京職一、美濃國可兒郡人左史生從八位上長谷部貞宗貫二附左京職一、○十五日甲辰、右京人主計少允正六位上眞野臣永德、姪男眞野臣道緖等、賜二姓宿禰一、大和國山邊郡人上野權少掾正六位上民首廣門、右京人大宰醫師正七位上民首方宗、木工醫師正六位上民首廣宅等、賜二姓眞野臣一、永德廣門之先、出レ自二天足彥國押人命一也、○廿五日甲寅、授二越中國正五位下雄山神正五位上、近江國正六位上葛野神、伊豫國正六位上高繩神、並從五位下一、勘解由使起二請二條一、其一曰、神社帳准二官舍帳一、勘了之日、令レ移二式部省一、其二曰、奴婢生益、附レ帳之日、令レ注二父母名一、太政官處分、並依レ請、○廿六日乙卯、下二知大和國一云、添上郡般若寺近側山十

町之內、勿令百姓伐損、○十月庚申朔、天皇不御前殿、宴侍臣於仗下、勅賜擧音樂、親王已下賜祿各有差、是日、夜雷雨、諸衞陳於殿前、○二日辛酉、制、長門國採銅所雜色四人、預於勘籍、○六日乙丑、大和國正六位上天玉敷神、豐日神、甲斐國正六位上比志神、並授從五位下、○七日丙寅、授下野國從五位上勳五等溫泉神從四位下、上野國正六位上若伊賀保神從五位下、○十一日庚午、右京人陰陽少屬從六位上飛鳥戸造清貞、內豎正六位上飛鳥戸造清生、太政官史生正八位下飛鳥戸造河主、河內國高安郡人主稅大屬正七位上飛鳥戸造有雄等、並賜姓百濟宿禰、其先、百濟國人比有之後也、○十五日甲戌、大風雷雨、○十七日丙子、復出雲國百姓課役一年、○廿一日庚辰、天皇宴太政大臣於內殿、以賀滿六十之齡、有衣被寶物之贈、每色叶於六數、皆是乘輿服御之物也、特喚諸大夫年六十已上者於仗頭、賜飮、太政大臣家令從五位下菅野朝臣弟門授從五位上、藤原朝臣直方從五位下、從四位下藤原朝臣儉子進從四位上、无位藤原朝臣多美子從四位下、從五位下上毛野朝臣

○般若寺、奈良市般若坂町にあり
（十月）○天玉敷神豐日神並に式外、神祇志に天玉敷神社今不詳所在、豐日神社今在山邊郡豐井村と見ゆ
○比志神、式外、同志に今在巨摩郡比志村とあり
○溫泉神、神名式下野國奈須郡溫泉神社、那須村湯本
○若伊賀保神、式外、伊香保山の麓有馬村にありと云
○內豎、豎は原本監に作る宮本に據て改む
○太政官史生、生は諸本に據て補ふ
○比有、百濟第二十世の王にて昆有王とも云
○太政大臣、良房
○弟門授從五位上、原本門下に並字あり類史百七に據て削る
○藤原朝臣直方、良相の第二子なり藤原の上に無位或は某位の字を脫せるか

○正六位下（居都人）、下は諸本空白とす
○川原公清永川原公、清以下五字のうち永は下文に據り其他の四字は秘本尾本前本等に據て補ふ
○火焔之後、錄攝津皇別に爲奈眞人宣化皇子火焔王之後也とあり焔下に或は王字を脫せしか
○飯大嶋神、神名式陸奥國牡鹿郡大嶋神社なるべし
○阿福麻水神、同式同國日理郡安福河伯神社、逢隈村
○八牡姬小結溫泉神、姬の下神字を脫す二社並に式外、所在未詳
○贊乃波神、式外、所在未詳
○天磐門別神在屋神、並に式外、所在未詳
［十一月］新嘗祭、原本嘗下に會字あり類史九及紀略に據て削る

滋子正五位下、慶賀之餘歡、恩獎及餘家人也、河內國丹比郡人正六位下葛井連居都人、大初位下葛井連高長等、改本居貫附右京職、○廿三日壬午、屈六十僧於內殿、限三箇日、轉讀大般若經、○廿七日丙戌、攝津國河邊郡人九世散位正六位上川原公清永、川原公清宗、正七位上川原公清貞、從八位下川原公清方、十一世大膳大進正六位上爲奈眞人菅雄等五人之戶、並蠲課役、清永等宣化天皇皇子火焔之後、計其世數、未可徵課役也、○廿九日戊子、陸奥國勳九等飯大嶋神、勳十等阿福麻水神、无位八牡姬、小結溫泉神等、並授從五位下、伊勢國正六位上贊乃波神、安藝國正六位上天磐門別神、在屋神、並從五位下、○卅日己丑、大祓於建禮門前、以犬嚙死人骸入神祇官故也、○十一月庚寅朔、七日丙申、平野春日祭如常、○八日丁酉、梅宮祭如常、○十日己亥、以傳燈法師位載寶、爲內供奉十禪師、○十二日辛丑、園并韓神祭如常、○十三日壬寅、地震、鎭魂祭如常、○十四日癸卯、新嘗祭、天皇不御神嘉殿、以主殿寮有狐死穢、而官人參入御在所也、公卿向神祇官、奉祭如常、○十五

○細羅國、都氏文集に新羅東別嶋細羅國人五十餘口舟行遭風漂著と見ゆ
○松原村、今聞えず地名の改まりしなるべし
○荒坂濱、神祇志料法美郡荒坂神社の條に今荒坂山の地也とあり
○上毛野公、錄左京皇別上毛野朝臣、下毛野朝臣同祖豐城入彥命五世孫多奇波世君之後也とあり
(〔十二月〕)戊亥隅神、式外、左京職戊亥隅に祀る今詳ならず
○春日年祈神、式外、所在未詳
○小杖神、神名式近江國栗太郡小槻大社とある是なり治田村下戸山
○阿度河川内神、式外所在未詳、高嶋郡に安曇川あり萬葉集に高嶋の足速の水門と見ゆれば阿度河神は此地にあるか内は原本田に作る諸本に據て改む
○從五位上(直主)、上は原本下に作る諸本及類史

日甲辰、天皇御前殿、宴於群臣、奏大歌五節舞、賜祿如常、○十七日丙午、先是丹後國言、細羅國人五十四人、來著竹野郡松原村、問其來由、言語不通、文書無解、其長頭屎鳥舍漢書答云、新羅東方別嶋細羅國人也、自外更無詞、因幡國言、新羅國人五十七人、來著荒坂濱頭、略似商人、是日勅給程粮、放却本蕃、○廿日己酉、左京人齋院判官正八位上上毛野公藤野、內教坊頭從七位下上毛野公赤子等、同族男女七人、賜姓朝臣、豐城入彥命之苗裔也、○廿六日乙卯、中宮於太政大臣染殿第、大設齋會、演大乘經、賀太政大臣滿六十也、限三日訖、公卿大夫多參陪焉、○十二月己未朔、三日辛酉、左京職正六位上戊亥隅神、山城國春日年祈神、近江國少杖神、阿度河川內神等、並授從五位下、○六日甲子、勅遣散位從五位上內宗王、從五位上大中朝臣直主、從五位下齋部宿禰木上等、向伊勢大神宮奉幣、○九日丁卯、以甲斐國從五位下大井俣神列於官社、○十一日己巳、月次幷神今食祭、天皇不御神嘉殿、所司奉祭如常、右京人左史生正八位下六人部連吉雄賜姓善淵宿禰、天孫火明命之後

三に據て改む
○木上、上は原本工に作る、類史に據て改む
○大井俣神、神名式甲斐國山梨郡大井俣神社
○六人部連、錄山城神別に六人部連火明命之後也とあり
○連理一、一の字は諸本に據て補ふ
○廣讌、讌は字書に合語也、即燕字とあり
○衣被並絹、並絹の二字は諸本に據て補ふ

也、○十二日庚午、中務省火、燒卿曹司屋一間、○十三日辛未、飛驒國言、樹連理一、○十六日甲戌、陸奥國磐瀨郡人正六位上勳九等吉彌侯部豐野賜姓陸奥磐瀨臣、其先、天津彥根命之後也、○十八日丙子、分遣公卿已下侍從已上、向諸山陵墓、奉獻荷前幣、○廿一日己卯、勅賜長門國司帶劔、○廿四日壬午、中宮爲賀太政大臣齡滿六十、設廣讌、親王已下五位已上並侍焉、極歡而罷、賜親王已下衣被幷絹、○廿九日丁亥晦、大祓大儺如常、

○第七、原本此下に終字あり諸本に據て削る

日本三代實錄卷第七

日本三代實錄卷第八

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

起貞觀六年正月盡五月

六年（甲申）春正月戊子朔、大雨雪、天皇加元服、御前殿、親王以下五位已上、入自閤門、於殿庭拜賀、禮畢退出、百官六位主典已上、於春華門南拜賀、先是預詔勸學院藤氏兒童、高四尺五寸已上者十三人加冠、是日、引見內殿、○七曜御暦、藏氷樣、腹赤御贄等、所司付內侍所奏、○三日庚寅、天皇御大極殿、受朝賀、禮畢還東宮、御前殿、賜宴侍臣、雅樂寮奏音樂、宴畢賜御被、○四日辛卯、所司獻剛卯杖、天皇不御前殿、內侍奏之、○七日甲午、天皇御前殿、覽青馬、賜宴群臣、奏樂賜祿如常、詔曰、明神止大八洲國所知天皇詔旨良萬止宣勅乎、親王諸王諸臣百官人等、天下公民衆聞食止宣、天皇幼少久御坐止伊倍止毛、親王等乎始天、王等臣等乃相穴奈比奉利、相扶奉爾依天、食國之內無事久平介久之天、御冠加賜比、人止成賜努、此慶乎天

【貞觀六年】加元服、漢書昭帝紀に元鳳四年春正月丁亥帝加元服、注に師古曰元首也冠者首之所著故曰元服とあり元服の式は新儀式江家次第等に見ゆ此時の御式に就て中右記大治四年正月五日條に助教信俊來談云我朝清和帝初御元服時大江音人卿引唐禮元服儀作出式也其後用作式也と云り
○前殿、紫宸殿なり
○閤門、宮中の小門なり正門より入らずして小門より出入するは敬意を表するなり
○春華門、拾芥抄中末に云左馬陣、謂之左衞門陣、[illegible]門東と見え内裏の東南隅にあり
○七曜御暦は類史七十一歳時部には暦に作る

○円傳時、所字恐くは衍
○手爾賀、爾は原本拜に作る諸本及類史紀略に據て改む
○大八洲、洲は原本州に作る秘本谷本瀧本に據て改む
○相穴奉比、穴は原本作に作る諸本に據て改む
○人止成賜努、大人と成給ひぬとなり
○皇太后、文德天皇の御母儀藤原順子文德天皇即位の日崇め奉りて皇太夫人と爲し齊衡元年皇太后と爲給ふ
○皇太夫人、清和天皇の御母儀藤原明子天安二年十一月清和天皇即位の日崇め奉りて皇太夫人と爲給ふ
○位一階但、原本一階を階一に但を位に作る一階は文德紀及孝紀即位の詔に據り但は諸本に據て改む
○以上爾、爾は諸本に據て補ふ
○施物太萬布、太は原本大に作る諸本に據て改む
○帛絮、絮は綿なり倭名抄布帛部に四聲字苑云絮似綿而麁惡也とあり
○未結正、此三字は諸本

下國內止共爾可爲止奈毛所念行須、凡爲人子者、有悅事時爾波、必先都於夜乎崇餝毛乃止奈毛聞行須、故是以皇太后乎太皇太后爾、皇太夫人乎皇太后爾上奉利崇奉留、又大神宮乎始天、諸社乃禰宜祝等爾給位一階、但正六位上量賜物、又諸寺僧尼乃滿位以上爾加位一階、若大法師位奈良牟爾波、廻授弟子一人、又天下僧尼乃年八十已上爾施物太萬布、又五位已上子孫年二十已上叙當蔭階、又天下爲父後者、六位已下叙爵一級、唯正六位上爾波廻授一子、无子者爾波量賜物、又京官主典已上加賜帛絮、又貞觀六年正月七日午時以前、大辟已下、罪无輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、及犯八虐、常赦所不免者、咸赦除之、其私鑄錢、及強竊二盜、並不在赦限、但入死刑者降一等、諸老人年百歲已上賜穀伍斛、九十已上參斛、八十已上壹斛、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、鰥寡孤獨、篤疾重病、不能自存者爾波、宜量賜物、又天下百姓乃徭十日免賜布、又仕奉人等中爾、其仕奉狀乃隨爾治賜人毛在、又御意愛盛爾治賜人毛一二在、故是以、冠位上賜比治賜止宣天皇我勅乎、衆聞給止宣、授无品惟條親王四

に據て補ふ
○百姓乃僑、尾本僑下に役字あり
○御意愛盛爾、ミコヽロノメデノサカリニと訓むべし、原本意下に爾字あり盛を惑に作り愛字なし諸本に據て改め補ふ
○從四位上、今字、上は原本下に作る五年正月庚午紀に據て改む
○博士大春日朝臣、下文二月丁卯紀に大學博士とあれど五年二月己酉紀及十年二月己丑紀には博士とのみあり故に原本に據る
○右衞門權佐(廣基)、權は天安二年十一月壬午紀及下文七年六月乙亥紀に據て補ふ
○廣基等並正五位下、並字は例に據て補ふ

品、散位從四位下輔世王從四位上、无位忠範王、朝右王、並從四位下、主水正正六位上岑行王從五位下、從四位上行左京大夫兼山城守紀朝臣今守正四位下、從四位下行伊豫守豐前王、中宮大夫藤原朝臣良世、大宰大貳藤原朝臣冬緒等、並從四位上、正五位下守右京大夫橘朝臣貞根、內匠頭在原朝臣善淵、刑部權大輔兼行博士大春日朝臣雄繼等、並從四位下、從五位上行但馬守藤原朝臣常永、右近衞少將兼行因幡守藤原朝臣有貞、左近衞少將源朝臣舒、伊賀守當麻眞人清雄、右衞門權佐藤原朝臣廣基等、並正五位下、信濃權守從五位下橘朝臣安吉雄、鑄錢長官兼周防守丹墀眞人弟梶、前大宰少貳橘朝臣三夏、伊豫權守藤原朝臣宜、安藝介藤原朝臣三直、侍從兼齋院長官藤原朝臣水谷、右近衞少將兼伊豫介藤原朝臣山蔭、散位源朝臣好等、並從五位上、左京亮外從五位下布瑠宿禰清貞、正六位上源朝臣弼、讃岐權掾藤原朝臣弘經、左衞門大尉平朝臣季式、大炊助安倍朝臣宗行、掃部助藤原朝臣高範、散位橘朝臣世人、大藏大丞長岡朝臣秀雄、大膳亮紀朝臣當仁、式

○藤善、善は七年正月己酉紀には吉に作る

○從三位(氏宗)、三は原本二に作る下文癸卯紀に據て改む

○五禮、吉禮凶禮賓禮軍禮嘉禮なり周禮春官大宗伯に以吉禮事邦國之鬼神祇以凶禮哀邦國之憂以賓禮親邦國以軍禮同邦國以嘉禮親萬民と節略して見ゆ

部大丞藤原朝臣維範、橘朝臣良基、右近衞將監布勢朝臣冬雄、民部少丞大中臣朝臣是直、主殿權允淸瀧朝臣岑成、民部大丞丹墀眞人瀧雄、左馬助丹墀眞人藤善、太皇太后宮少進安倍朝臣肱主、散位伴宿禰繼守、左近衞將監安倍朝臣三寅、右兵衞大尉藤原朝臣千乘、越前介藤原朝臣淸身、散位佐味朝臣人上、右少史兼明法博士宍人朝臣永繼、書博士佐伯宿禰貞敏等、並從五位下、左大史正六位上賀陽朝臣宗成、音博士淸內宿禰雄行、並外從五位下、是日、太政大臣從一位臣藤原朝臣良房、左大臣正二位臣源朝臣信、右大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣良相、正三位行中納言兼陸奥出羽按察使臣平朝臣高棟、正三位行中納言兼民部卿太皇太后宮大夫臣伴宿禰善男、中納言從三位兼右近衞大將臣藤原朝臣氏宗、參議正三位行左衞門督兼近江守臣源朝臣融、參議正四位下行左兵衞督兼備前守臣源朝臣多、參議正四位下行右衞門督臣藤原朝臣良繩、參議正四位下行式部大輔兼播磨權守臣春澄朝臣善繩等、上表奉賀帝加元服曰、臣聞、夫冠者五禮之始、

○因斯、因は原本同に作る、諸本に據て改む
○宏綱、諸本綱を緹に作る、宏綱は大綱に同じ
○陛下、陛は尾本前本谷本階に作る
○紀高卷領、卷領は淮南子氾論訓に古者有鍪而綣領以王天下者矣、其德生而不辱、注に鍪放髮也、綣繞頸而已皆無飾也、刑措不用也とあり
○功邁垂衣、原本垂衣を千古に作る、秘本閣本尾本等に據て改む、易繫辭傳に黃帝堯舜垂衣裳而天下治とあるに據れり
○挺濬哲、挺は原本據に作る、秘本閣本尾本等に據て改む
○沉幾、後漢書光武紀贊に沉幾先物、注に幾音動之微也、物事也、沉深之幾先見於事也とあり
○履端朔旦、正月元旦を云
○惟新、惟は原本推に作る、諸本に據て改む
○玄武之象、史記天官書に北宮玄武とあり北方七宿の名、黃屋に對して云へり
○黃屋之尊、天子の尊位を云、黃屋は已に注す
○七十二君之清塵、史記

嘉事之重、古之聖王、必敬此道、因斯長幼能和、尊卑有序、表成人之茂典、裁訓俗之宏綱者也、中謝伏惟、皇帝陛下、紀高卷領、功邁垂衣、挺濬哲於生知、凝沉幾於日用、今屬履端朔旦、開歲惟新、元服肇加、禮容斯擧、玄武之象既彰、黃屋之尊彌劭、叶民之望、超七十二君之清塵、承天之休、握萬八千歲之寶算、是知、一人有慶、萬國歡心、凡在黎苗、孰不抃躍、臣等任忝股肱、喜深骨髓、太陽既照、更增傾藿之誠、廣廈斯成、倶獻賀燕之志、不任鼓舞忻幸之至、謹奉表陳賀以聞、○八日乙未、始講最勝王經於大極殿、以元興寺僧傳燈大法師位賢應爲講師、授巡察彈正從六位上田口朝臣業雄從五位下、進尙侍從三位源朝臣全姬階、加正三位、典侍從四位下良岑朝臣親子、藤原朝臣有子、並從四位上、從五位下藤原朝臣能子正五位下、典藏從五位下文室朝臣御井子、掌侍從五位下安倍朝臣厚子、散事從五位下紀朝臣全子、田中朝臣保子、安倍朝臣高子等、並從五位上、典水外從五位下大和宿禰繼子、无位藤原朝臣養賀子、藤原朝臣御康、御園眞人藤子、當麻眞人眞廣、粟田朝臣宅子、高橋朝臣宅子等、並

封禪書に古者封泰山禪梁父者七十二家と見ゆ
[illegible]跡也
○宣天之休、之字は據本に據て補ふ尚書湯誥に不敢不敬天之休とあるに據れり
○萬八千歲之實、史記三皇本紀に天地初立有天皇氏兄弟十二人立各一萬八千歲とあり
○一人有慶、尚書呂刑に一人有慶兆民賴之とあり
○萬國歡心、孝經孝治章に得萬國之懽心とあり
○黎甿、百姓なり唐書杜佑傳に見ゆ
○傾藿之誠、傾藿は傾葵又は葵藿と云に同じ五年正月壬午紀に注す
○廣廈斯成云云、淮南子說林訓に大廈成而燕雀相賀とあるに據れり廣廈は大屋なり以て天皇の御成人に比し奉る
○析辛、析は原本拆に作る諸本に據て改む
○眞廣、眞は原本直に作る諸本に據て改む
○大和宿禰繼子、已に上に見ゆれど位階異なれば別人か
○宣告云云、三代格十七

從五位下、无位秦忌寸今子、大和宿禰繼子等、並外從五位下、○九日丙申、宣告百官五畿七道諸國云、今稽詔書旨、百姓傜宜復十日者、是則下恩一時、垂制永年、但傜役者、專任國司之自爲、實非公家所考覈、而或牧宰等偏稱傜民不足、好用功粮、論之政途、豈云良吏、宜乃眷公平、務廻方畧、令民心深息肩之悅、國政少用稅之費、自餘事條、一准舊例、○十四日辛丑、大極殿齋講畢、僧綱已下、奉參御在所論義、賜御被如常、延曆寺座主傳燈大法師位圓仁卒、圓仁俗姓壬生氏、下野國都賀郡人也、當產時有紫雲、見其家上、家人無見、于時有僧、名曰廣智、國人號廣智菩薩、廣智覩望雲氣、乃知起於檀越壬生氏家、甚以奇之、祕而不言、誡其父母善能愛養、久而圓仁喪父、隨母育長、年甫九歲、付託廣智菩薩、圓仁幼而警俊、風貌溫雅、其兄以外典教之、然猶心慕佛道、嘗登經藏、誓探得觀世音經、心甚歡喜、遂抛俗書、受學經論、俄而通涉諸部、領悟大旨、夢見一大德、顏色淸朗、長六七尺、即就其邊、瞻仰禮拜、大德含咲、摩頂語話、傍有人問云、汝知大德否、答云不知、傍人云、此是叡山大師也、大同末年、隨緣入京、

要略五十九に出づ
○垂制永年、垂は原本乘に作る秘本閣本尾本等に據て改む
○公平、平は裕及要略事に作る
○論義、義は類史百七十七に議に作る
○圓仁卒、圓仁の傳は此に記せる所頗る詳なれど續群從所收慈覺傳亦精しく入唐中の事は入唐求法巡禮行記最も詳なり俗姓壬生氏、慈覺傳(以下略して傳と云ふ)に其先崇神天皇第一皇子豐城入彥命天皇特令治東國、及其苗裔遂爲其鄕人焉延曆十三年大師誕生とあり
○廣智、都賀郡大慈寺の僧なり智は原本知に作る諸本に據て改む傳亦同じ
○觀覺、觀は原本歡に作る諸本に據て改む
○大同末年、大同三年
○寂澄大師含咲、原本澄を脫し咲字なし澄は諸本に據て改め咲は諸本に據て補ふ
○止觀、摩訶止觀なり
○始滿卅、卅は秘本閣本等册に作り原本は卅なり
○因而、因は原本囚に作る諸本に據て改む

適登叡山、謁觀寂澄大師、瞻視顏貌、一如昔夢、寂澄大師含咲語話、如夢所見、竊自知之、不向人說、圓仁于時年十五矣、寂澄大師教以止觀、弘仁十三年六月、寂澄大師遷化、圓仁齡始滿卅、身羸眼暗、知命不久、因而尋叡山北極幽谷、結草爲庵、消三四年、闔山僧衆苦勸云、吾師爲法早取入唐、尋而官補請益、承和五年發、七月二日著大唐楊州海陵縣、開成三年七月二日到楊州、同年十月國使入京、圓仁苦請留住楊府、意在巡禮天台及五臺等諸聖跡、李相公德裕聞奏、有勅不許巡禮、四年國使聘禮既畢、還向本朝、圓仁相隨上船、圓仁心謂、遠渡滄溟、本爲求法、仍辭國使獨身下船、弟子惟正、惟曉、俱留住沙石之上、海賊十餘人、忽然出來、顏色非常、意在要物、圓仁與惟正等俱語云、我死只在茲、不如捨物專任彼賊、即捨隨身物、著身衣服、皆悉與之、最後授銚子、賊即云、和尚若捨銚子、客中無此器、辛苦無極矣、賊乃發慈心語云、和尚如今有何所要、答、都無所要、但欲得到村里、賊即差一人、隨逐圓仁、令送村里、纔至人舍、賊即逃隱不見、當此之時、殆沒賊手、僅免虎口、更歸海州、刺史處分、配住本國第二船、

○叡山北極幽谷云云、首楞嚴院是なり俗に横河と云

○請益、留學僧と請益法師とは異なり請益法師は佛敎の奧義に關する疑問を質して益を得むとするものなり

○五年發、五年六月十三日大使參議右大辨藤原常嗣と共に上船進發せり發は諸本に據て補ふ

○海陵縣、入唐求法記（以下略して入唐記と云）に未時到揚州海陵縣白潮鎭桑田鄕東梁豐村日本國承和五年七月二日卽大唐開成三年七月二日雖年號殊而月日共同とあり

○到揚州、入唐記に八月一日早朝大使到州衙見揚府都督李相公とあり

○天台及五台、天台山は浙江天台縣に五台山は山西五台縣にあり

○圓仁相隨上船、開成四年三月廿二日なり

○辭國使獨身下船、四月五日なり

○銚子、抄器皿部に四聲字苑云銚（辨色立成云銚子佐之奈閇俗云佐須奈閇）とあり

船頭判官良岑長松、同船解纜、待風而發、逆風忽起、到著登州堺、圓仁下船、登赤山法華院、送過冬月、登州十將押衙張詠、來到山院語云、詠昔到邦國、甚蒙國恩、故來奉問、若有所要、冀莫形迹、圓仁答云、無他所要、但意樂欲得入國內巡禮諸聖跡、押衙答云、和尙莫憂、詠將滿此要、數日文登縣牒將來云、日本國僧等、今須任意巡禮諸聖跡、押衙卽副使送縣宰、宰與縣牒、付送靑州、開成五年、入五臺山、禮拜聖跡、謁諸大德、主人意謂、客僧若是文殊歟、客僧忽恐、主人皆是文殊歟、如是相疑、共增恭敬、圓仁住大華嚴寺涅槃院、經過一夏、垂至北臺、雲霧滿山、徑路難尋、霧氣開霽、乃看路前、見一師子、其形甚可怖畏、圓仁却走二三里許、經於小時、更復進路、見彼師子猶在前路、蹲居不動、更復却走二三里許、彌增驚恐、數刻之後、亦漸進行、師子猶在不去、遙見人來、卽便起立、入重霧中、無復所見、凡五臺多傳天台教法、有志遠和尙、玄鑒和尙、各年及八十、盛傳摩訶止觀并玄疏等、學徒數百矣、圓仁夏中隨遠和尙、稟學止觀、寫得天台教迹等三十七卷、至秋七月、巡禮南臺、至黃昏時、忽見聖燈、一燈之光、普照五臺、

○僅纔、僅は諸本に據て補ふ
○海州、唐書地理志に河南道海州東海郡あり
○登州、同志に河南道登州東牟郡あり今山東省蓬萊縣
○赤山法華院、赤山は登州文登縣青寧鄉にあり
○若有所要冀莫形迹、傳に若有所欲冀露心膽とあり
○文登縣、登州に屬す
○押衙卽副使、卽は諸本に據て補ふ
○縣宰、宰は諸本家に作る
○青州、唐書地理志に河南道青州北海郡あり今山東省
○開成五年、開成五年二月十九日赤山新羅院を發し四月廿八日五臺山上に至る
○住大華嚴寺涅槃院、入唐記に五月十六日到大花嚴寺入庫院住、齋後到涅槃院見賢座主云々とあり
○北臺、五臺山は東西南北及中央の五臺に分る北臺は其一なり
○師子、尾本獅子に作る下同じ

一々分明、至五更聖燈滅不現、其年八月、到長安城、禮拜大興善寺翻經院、元政阿闍梨、屈請以爲師、始學金剛界大教、數月受五瓶灌頂、被許傳法也、明年向青龍寺、禮拜義眞阿闍梨、屈請爲師、入胎藏灌頂道場、始習學毘盧遮那經中眞言印契、并眞言教中微細儀式、凡住長安六年之間、求得念誦教法經論章疏等五百五十九卷、胎藏金剛界兩部大曼茶羅、及諸尊曼茶羅、壇樣、高僧眞影、舍利、并道具等廿一種、後隨青龍寺阿闍梨、學悉地大教、得値南天竺寶月三藏、學西天悉曇、聲韻分明、千古所疑、一時氷釋、兼巡城中、遍謁衆德、到街東大安國寺、謁侃阿闍梨、向街西淨影寺、見惟謹阿闍梨、不惜玄祕、各爲指授、遇會昌(武宗)天子毀滅佛法、經歷三年、既絶歸思、俄而軍裏下牒云、外國僧等宜早歸本貫、因得出城、纔至城門、大理寺卿中散大夫賜紫金魚袋楊敬之、朝議郎守尚書職方郎中上柱國賜緋魚袋楊魯士、左神策軍押衙銀青光祿大夫撿校國子祭酒殿中監察侍御史上柱國李元佐等、及衆官禮拜所持之教法、押衙等引諸官人、迎待門前、特致勞問、僉云、我國佛法既已滅盡、佛法隨和尚東去、自

今以後、若有求法者、必當向日本國也、得到登州押新羅使張詠宅、安存優厚、經兩三年、不得歸國、夢達摩和尙、寶志和尙、南岳、天台、六祖大師、幷日本國聖德太子、行基和尙、叡山大師等、俱共來集、語云、吾等爲護汝令到日本國、故到此間、語竟卽起、前後圍繞、向東相送、其年春遇本國船、爲風所扇、到登州堺、覓問法師、卽乘其船、還至本朝、承和十四年九月還此土、聞奏天子、請奉爲國家修灌頂、每年永修、鎭護聖境、詔依請焉、嘉祥二年五月、於延曆寺始修灌頂、官給一千僧供料、用內藏寮物、勅遣參議從四位下守右大辨伴宿禰善男撿挍、而飮誓水者一千餘人、同年七月、詔以圓仁、爲內供奉十禪師、三年三月天皇崩、四月皇太子卽皇帝位、圓仁上奏言、除災致福、熾盛光華佛頂、是爲最勝、是故唐朝內道場中、恒修此法、爲鎭國基、街西街東諸內供奉持念僧等、互相爲番、奉祈寶祚、今須建立持念道場護摩壇、奉爲陛下、應修其法、唐國街東青龍寺裏、亦建立皇帝本命道場、令勤修眞言祕法、詔曰、朕特發心願、於彼峯建立惣持院、興隆佛法、於是勅惣持院安置十四僧、永令修法、仁壽四年四月、勅以圓仁、

○其形、其は諸本に據て補ふ
○寶志和尙、志は原本誌に作る諸本及傳に據て改む寶誌は南朝の人唯識の釋論を護持して玄奘三藏に授く
○玄疏、玄は天台の法華經玄義、疏は法華經文句を云
○南岳、南は原本五に作る諸本及傳に據て改む入唐記に七月二日向南岳去とあり
○聖燈滅不現、私記に現或云恐現とあれど入唐記にも燈光焰然自至半夜浸而不現矣とあり
○禮拜大興善寺、入唐記に八月廿二日到大興善寺西禪院とあり
○元政、諸本に元字なく政を征に作れど入唐記及傳並に元政とあり
○金剛界大教、大日如來の智德を開示したる部門を云
○五瓶灌頂、入唐記に開成六年二月十三日受傳法灌頂以五瓶水灌於頂上と見ゆ
○明年向青龍寺、入唐記に四月四日往青龍寺入東塔院云々とあり

爲延曆寺座主、齊衡三年三月、天皇屈圓仁於冷然院、受兩部灌頂、天安二年八月天皇崩、十二月皇太子踐祚、明年天皇屈圓仁於內裏、受菩薩戒、貞觀二年五月、淳和太后請諸寺名德於院裏、六箇日間、講法華經、解坐之後、請留圓仁、受菩薩大戒、奉太后法名稱良祚、三年六月、太皇太后藤原氏、請僧綱名僧、於五條宮、四箇日間、講法華經、太后受菩薩大戒、三昧耶戒、及境灌頂、行大乘布薩、遷化之時、年七十二、天下道俗、知與不知、莫不哀惜焉、勅遣少納言良岑朝臣經世、贈法印大和尚位、八年追謚曰慈覺、勅遣少納言良岑朝臣經世、就山宣制焉、圓仁性寬柔、慈悲甚深、喜怒不形于色、嘗患身羸、蟄居叡山北極草菴、夢從天送藥、形如甜瓜、半片噉之、其味如蜜、傍有人語云、此是三十三天不死妙藥、覺後口裏餘味、飮之三過、與夢中噉、其味不異、經旬日、知身健眼明、圓仁在此、心無染著、得絕攀緣、又行路之時、日無邪視、路傍左右、時有過者、直置而去、不知有人、於向行方、適有相遇、乃揖而前、其專心無餘執、皆此類矣、圓仁身遊上邦、足歷靈窟、趁衆德而決其說、稟微旨而記於心、傳將眞教、弘闡殊旨、宜彼

に述れる書數通を載す
○悉地、大日經供養法疏に悉地者成就亦云成菩提とこと見ゆ出世の法に通じて三密相應し以て成就せる妙果を云
○寶月三藏、入唐記に於青龍寺天竺三藏寶月所重學悉曇親口受正音とあり
○會昌天子云云、通鑑綱目に唐武宗會昌五年秋七月詔毀天下佛寺僧尼並勒歸俗とあり
○賜緋魚袋楊魯士、魯は原本普に作る秘本及入唐記に據て改む傳には魚上に銀字あり
○銀青、諸本青を錄に作るは非なり
○上柱國李元佐、原本李上に此字あり秘本尾本及入唐記に據て刪る
○諸官人、諸は原本諸に作る諸本に據て改む
○官人相看、看は伍本異書には看に作る
○南岳天台六祖大師云云、六祖以下叡山大師に至る二十字原本になし諸本に據て補ふ、南岳名は慧思支那天台宗の第二祖、天台名は智顗天台宗の開祖、六祖名は荊溪智

顗より六世に當る故に六祖と云
○覔間法師卽乘其船、師卽の二字は諸本に據て補ふ
○還此土聞奏天子、原本聞奏を倒置す諸本及傳に據て改む諸本土字なし
○飲響水、響水は一名金剛水と云、眞言行者の三昧耶戒を受くる際響約を表する爲に飲む水の名
○熾盛光華佛頂、尊勝陀羅尼の本尊々勝佛頂一名除障佛頂と云、之を念ずるは尊勝法なり
○五相爲番、五は原本互に作る尾本及傳に據て改む
○本命道場、皇帝の本命星を祈念し以て國家を鎭護する道場なり
○惣持院、山門堂舍記に在戒壇院西堀上、或名法華佛頂總持院、文德天皇御願始、自仁壽三年、至貞觀四年、十ケ年所造立也とあり
○天皇受菩薩戒、傳に徵大師於大內、受菩薩大戒、奉法號曰素眞とあり
○稱良祚、稱は原本釋に作る諸本及傳に據て改む

西人謂法東去、雖復數遇難危、然而毎得免脫、自非被佛護念、導利群生、豈能與於斯者哉、又天台宗之傳於本朝也、昔聖德太子、迎前身舊讀之經於南岳、鑒眞高僧賚止觀教法而來自西唐、先師最澄奉詔越海、造道邃和尚而受微言、從順曉闍梨而學悉地、所求法文二百餘卷、圓仁資新來之祕教、廣舊傳之宗門、雖發源於懸水、而鼓濤於浮天、人能弘道、信而有徵歟、○十六日癸卯、踏歌之節、天皇御前殿、賜宴侍臣、伶官奏樂、官人踏歌如常儀、賜親王已下祿、各有差、是日、以正三位行中納言兼陸奧出羽按察使平朝臣高棟、正三位行中納言兼民部卿太皇太后宮大夫伴宿禰善男、並爲大納言、善男民部卿太皇太后宮大夫如故、中納言兼右近衞大將從三位藤原朝臣氏宗爲權大納言、參議正三位行左衞門督源朝臣融爲中納言、大藏卿正四位下兼行讃岐權守源朝臣生、正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名、右大辨從四位下大枝朝臣音人、右近衞權中將從四位下兼行內藏頭藤原朝臣常行、左近衞中將從四位下藤原朝臣基經爲參議、本官並如故、散位從五位下藤原朝

○三年六月、傳に八月とあり
○藤原氏、明子
○布薩、行事鈔上四に布薩者長養、義二義一淸淨戒住ニ長增功德と見ゆ
○七十二、傳に春秋七十一夏臘四十九とあり天台座主記法華驗記亦同じ二は一の誤なるべし
○贈法印大和尙位、二月十六日なり傳に宣命を載す參看すべし
○八年追謚曰慈覺、八年七月十四日なり贈位謚號の勅書は傳に載す
○良岑朝臣、岑は原本峯に作る滝本に據て改む
○有相遇、相は諸本に據て補ふ
○揖而前、揖は原本指に作る傳に據て改む
○興於斯者哉、者は諸本及傳に據て補ふ
○天台宗之傳於本朝也、諸本之を也に作る朝下の也字恐くは衍か
○前身傳說之譚、上宮太子傳に太子の前身は南嶽の思禪師にて先世持ちし所の法華經七卷を使を遣して取らしめられし由見ゆ
○道邃和尙、台州天台山國淸寺座主

臣宗枝爲内匠頭、從五位上行大外記滋野朝臣安成爲刑部大輔、從五位上行丹波守滋野朝臣善蔭爲大藏大輔、若狹守從五位下蕃良朝臣豐持爲河內守、正四位下行左京大夫兼山城守紀朝臣今守爲大和守、餘官如故、從四位下行中務大輔忠貞王爲攝津守、從四位上行右近衞中將源朝臣興爲伊勢守、右近衞中將如故、民部少輔從五位下笠朝臣弘興爲遠江守、散位從五位下菅野朝臣宗範爲駿河介、從五位下備前介藤原朝臣是行爲相摸介、鎭守將軍從五位下兼上野權介小野朝臣春枝爲權介、鎭守將軍如故、從五位上守刑部大輔平朝臣有世爲武藏權守、散位外從五位下多宿禰自然麻呂爲下總介、四品彈正尹惟喬親王爲常陸太守、參議正四位下行式部大輔兼播磨權守春澄朝臣善繩爲近江守、式部大輔如故、從四位上行彈正大弼兼文章博士菅原朝臣是善爲權守、從五位上行信濃權守橘朝臣安吉雄爲守、三品中務卿諱光孝天皇親王爲上野太守、中務卿如故、從五位下行相摸權介賀茂朝臣岑雄爲權介、散位從四位下棟貞王爲下野守、從五位下行武藏介安倍朝

臣比高爲出羽權介、從五位上行神祇大副橘朝臣岑範爲若狹守、宮內輔正四位下源朝臣寬爲越前權守、從五位下行助教兼備後權介菅野朝臣佐世爲介、助教如故、大監物從五位下橘朝臣弟房爲能登守、散位從五位上飯高朝臣永雄爲丹波守、從五位上守宮內大輔橘朝臣伴雄爲因幡守、從四位上行伊勢守源朝臣冷爲播磨權守、從四位上行大藏大輔兼信濃守在原朝臣行平爲備前權守、從五位下行阿波介藤原朝臣忠宗爲介、左近衞少將正五位下源朝臣舒爲備中權守、少將如故、從五位上行掃部頭藤原朝臣貞敏爲介、掃部頭如故、從五位下行民部少丞大中臣朝臣是直爲安藝介、從四位下行內匠頭在原朝臣善淵爲紀伊守、從五位上行主殿頭當麻眞人鴨繼爲阿波介、主殿頭如故、參議正四位下行右衞門督藤原朝臣良繩爲讚岐守、右衞門督如故、從四位上行皇太后宮大夫藤原朝臣良世爲權守、本官如故、大宰少貳從五位下藤原朝臣有年爲介、從五位下行式部大丞橘朝臣良基爲伊豫權介、勘解由次官從五位下安倍朝臣清行爲大宰少貳、散位從五位下橘朝臣

○頼咲、[illegible]の僧
○[illegible]、[illegible]天は文選海賦に浮天無岸、注に天下之多者水焉浮天載地とありて海なる
○人能弘道、道は原本法に作る諸本及傳に據て改む
○善男伴部彌、善男の二字は諸本に據て補ふ
○從四位下(音人)、狩谷氏下恐上と云は非なり
○基經、此下に等字あるべきか
○本官並如故、此並字は源生以下五人に係れり
○今守爲大和守、今守は貞觀五年二月癸卯紀に爲大和守、閏月己酉左中辨弘宗王爲大和守とあり弘宗王大和守となりしが此に至て今守更に兼大和守となりしなり
○弘興、興は原本與に作る諸本に據て改む
○外從五位下多宿禰、外は諸本に據て補ふ
○棟貞王爲下野守、七年正月己酉下野守棟貞王

爲越中守とあり下野守は權守の誤とせば非なり
○出羽權介、羽は祕本尾本雲に作るは非、七年正月己酉出羽權介安倍朝臣比高爲守とあり
○從五位上（永雄）、從上に內イ本外字あるは非、五年正月庚午從五位上となる
○從五位上（伴雄）、諸本上字缺く一本上を下に作るは非、天安二年十一月甲子上となる
○從五位上行主殿頭、行は原本守に作る例に據て改む
○大宰少貳從五位下、原本下の下に行字あり衍なれば刪る
○山口伊美吉西成卒、西成の事蹟は續後紀嘉祥二年十月戊戌紀に初て見え文德紀にも見ゆ
○引客入京、客は祕本閣本尾本に據て補ふ
○准據令條、令は考課令なり准は原本唯に作るを狩谷校本に據て改む
○正丁一人、丁は原本十に作る祕本閣本尾本に據て改む

朝雄爲肥後介、○十七日甲辰、車駕幸豐樂院、觀射禮、散位從五位下山口伊美吉西成卒、西成者右京人也、幼懶讀書、好習射藝、逮于成人、改節入學、以春秋名家、兼善毛詩周易、補得業生、奉試及第、除大宰博士、不之官、承和之初拜大學直講、嘉祥二年、渤海國王遣使入覲、以西成權稱大學大允、爲存問兼領客使、向加賀國、引客入京、俄而轉助教、仁壽三年敍外從五位下、齊衡三年授從五位下、出爲大和介、天安二年遷紀伊介、卒時年六十三、○十八日乙巳、御射場殿、觀四府賭射、○廿一日戊申、內宴近臣、詔喚文人、命樂賦詩如常儀、賜祿各有差、○廿五日壬子、是日頒下五畿七道諸國、不聽以不課口計戶口增益之功、先是主計寮言、撿案內、諸國之功、准據令條、以不課六人准正丁一人、承前之例、行來尚矣、今疫死百姓、無國不申、因茲課丁減除、貢賦數少、而國司等偏執戶口增益、以不課男女編附籍帳、或國一萬餘人、或國五六千人、空有增益之名、曾無一物之貢、撿之政途、甚乖公平、請自今以後、以不課人不入功口、太政官處分、依請焉、○廿七日甲寅、詔以從四位下藤原朝臣多美子爲女御、

○今守等、等は諸本に據て補ふ
○去貞觀、去は類史八十に據て補ふ
○廿六日、諸本六を八に作るは非、上文を參看すべし
○格云、類史八十四には格下に甲午の二字あり
○徭丁、丁は原本給に作る諸本及類史に據て改む
○往年之正税、之は類史に據て補ふ
○改張、張は原本帳に作る諸本及類史に據て改む
(二月)高橋朝臣文室麻呂卒、文室麻呂は文德紀天安元年正月丙午紀に初て見ゆ
○文室麻呂者、麻呂の二字は諸本に據て補ふ

○廿八日乙卯、左京大夫兼山城大和守正四位下紀朝臣今守等上言三事、其一、復舊出擧正税事、去貞觀四年三月廿六日格云、除諸寺燈分料之外、悉停出擧、但増收田租、以充例用并年中雜用者、今撿彼年税帳、可收租稻、其數乏少、曾不足徭丁之功食、多費用往年之正税、其二、減徵田租事、同前格云、田租恒例、段別一束五把、今增加口分田段別一束五把、雜色田段別五把者、而國內水田、不必一等、上中田少數、下々田多數、至徵田租、動致未進、加之下田以下、無人買作、然則田疇荒廢、翹足可待、其三、增加民徭事、同前格云、民徭卅日、今復廿日、若不足例役者、給功食雇役、其料用租內者、今準格旨、給功食役、而民無休息、徒盡官物、須依今年正月七日詔、永復十日、可役廿日、今守等守格旨、施行民間、而慣古先之舊規、嫌當今之新制、不早改張、恐致公損、請復舊法、以叶民望、勅許之、○廿九日丙辰、銅印一面、鑄充伊勢齋宮主神司、○二月戊午朔、二日己未、從五位下行越後介高橋朝臣文室麻呂卒、文室麻呂者左京人、本姓膳臣、又姓錦部、信濃國人也、五代祖膳臣金持娶信濃國人錦部氏女生

○之父也文室麻呂、此七字諸本に據て補ふ
○天皇自敎皷琴、天皇自の三字諸本に據て補ふ
○卌九、原本三十九に作る閣本尾本前本等に據て改む
○雖小道云云、論語子張篇に子夏曰雖小道必有可觀者焉とあるに據れり
○月山神、神名式出羽國飽海郡月山神社(名神大)今羽前國東田川郡月山に鎭座、官幣大社に列す
○大物忌神、四年十一月乙丑紀に見ゆ
○三嶋神、元年正月甲申紀に見ゆ
○宮原神、式外、神祇志に今在賀陽郡下足守村(吉備郡足守町下足守)とあり
○久度神、神名式淡路國三原郡久度神社、神代村國衙
○旱部、原本旱部に作る諸本に據て改む

男倭、於是倭不尋本族、以母姓爲己姓、便作信濃國人、倭男美造病死、五男備前掾正六位上彦公、以讀五經、侍嵯峨院、天長五年、改錦部賜高橋朝臣、貫附左京、膳與高橋同祖、故隨彦公願賜之、彦公是文室麻呂之父也、文室麻呂年九歲事嵯峨太上天皇、天皇自教皷琴、其伎日長、他教習者、無有相及、仍賜文室麻呂號曰琴師、十六歲始加元服、便爲藏人、太上天皇崩後、仁明天皇徵爲藏人、尋拜常陸大掾、遷右兵衞大尉、有勅奉教皷琴於諱光孝天皇親王、本康親王、文德天皇齊衡四年授外從五位下、貞觀元年十一月授從五位下、爲次侍從、後拜越後介、不之任、卒時年卌九、文室麻呂能琴之名、冠於當時、嘗文德天皇及清和太上天皇、徵令侍殿上爲師、學彈琴、歷仕四代、頗蒙寵幸、雖小道有可觀者、殆近是歟、○四日辛酉、祈年祭如常、○五日壬戌、授出羽國正四位上勳六等月山神從三位、正四位下勳五等大物忌神正四位上、伊豆國從四位上三嶋神正四位下、備中國正六位上宮原神、淡路國正六位上久度神、並從五位下、攝津國武庫郡節婦旱部連氏成賣、年十六、適右京人文室眞人武庫麻呂、歷二

○制定僧綱位階、此官符は三代格三及僧綱補任に載す、原本誤注に按元亨釋書載定僧階三、依眞雅奏立此三階之説あり
○高卑、高は原本齊に作る、諸本及類史百八十五こ僧綱補任に據て改む
○法眼和上位、類史僧綱補任には上を尚に作る下同じ
○從五位上（諸葛）、原本上を下に作る二年十一月壬辰紀に據て改む
○十六人、下文策命に記す所は十五人なり
○白佐部登、部は原本久に作る諸本に據て改む
○奉利末左布爾、奉りますにを誤へたるなり
○依天奈流部之止、依は原本佐に作る黑川校本に據て改む

十七年、武庫麻呂死、氏成晝居喪在墓、事死如生、日不再食、遂不改操、詔叙位二階、免戸内田租、終身勿事、卽表門閭、以旌貞操、〇十日丁卯、釋奠如常、從四位下行刑部權大輔兼大學博士大春日朝臣雄繼講毛詩、文人賦詩、並如常儀、〇十五日壬申、以延曆寺僧傳燈大法師位承雲爲内供奉十禪師、〇十六日癸酉、制定僧綱位階、詔曰、國典所載、僧位之制、本有三階、滿位、法師位、大法師位是也、僧綱凡僧、同授此階、位號不分、高卑無別、論之物意、實不可然、仍彼三階之外、更制法橋上人位、法眼和上位、法印大和尚位等三階、以爲律師已上之位、宜法印大和尚位爲僧正階、法眼和上位爲僧都階、法橋上人位爲律師階、是日、勅遣參議大藏卿正四位下源朝臣生、從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣諸葛等、依式率所司、於西寺綱所、任僧正已下、律師已上十六人、策命云、天皇詔旨登、法師多知爾白佐部登宣大命乎白須、天皇我朝廷乃天日嗣乃位爾平安爾御座之、又御冠加賜比人止成利賜布事波、諸佛弟子多知乃護持和護念比奉利末左布爾依天奈流部之止奈毛念行米須、依此天常例與利外爾、此度僧綱數多久治賜

布、或波先帝乃遺勅爾依天治賜布、或波相護利奉禮流狀乃隨爾、治賜布毛在利、故是以大僧都傳燈大法師位眞雅乎法印大和尚位僧正爾、少僧都傳燈大法師位明詮乎法眼和上位大僧都爾、律師傳燈大法師位慧達乎法眼和上位少僧都爾、律師傳燈大法師位眞紹乎法眼和上位權少僧都爾、傳燈大法師位最敎、願曉、明哲、光善乎法橋上人位律師爾、傳燈大法師位慧叡、眞慧、正進、道昌、道詮、興照、常曉乎法橋上人位權律師爾任賜比治賜布、自今以後毛、合力一心爾之天、上下和睦天、天皇我朝廷乎平安久誓願比奉利、天下乎平爾護持知萬左倍止、白世止宣布天皇我勅命乎白。遣從五位上行少納言兼侍從良岑朝臣經世、向延曆寺、以傳燈大法師位安慧、爲彼寺座主、策命云、天皇我詔旨止、山中乃法師等爾白左部止宣勅命乎白、大法師安慧波、故座主圓仁大法師乃弟子爾之天、眞言止觀乃業乎兼習利、故是以、彼座主乃平生爾定申之隨爾、座主爾治賜布事乎白左倍止宣勅命乎白、○十七日甲戌、先是去年新羅國人卅餘人、漂著石見國美乃郡海岸、死者十餘人、生者廿四人、詔國司給程糧放却、○十九日丙子、授參河國從五位上

○或波相護利、波は尾本に據て補ふ
○大法師位明詮、位は黑川校本に據て補ふ
○興照、興は原本輿に作る諸本に據て改む
○自世止宣布、此五字は原本誤て勅命乎の下に收む諸本に據て改移す
○天皇我勅命乎白、諸本自を白に作るは誤れり故に改む
○宣勅命乎白、原本白下に佐久い二字あり諸本及朝野群載に據て削る
○弟子爾之天、爾は群載止に作る
○業乎、乎字は閣本尾本薗本等になし
○座主爾治賜、座主爾の三字は諸本に據て補ふ
○卅餘人、總本閣本尾本等に卅を卌に作る

知立神、砥鹿神、並正五位下、從五位下狹投神從五位上、正六位上兎足神從五位下、○廿一日戊寅、伊勢大神宮司言、於度會郡山中、獲木連理一、○廿五日壬午、車駕幸於太政大臣東京染殿第、觀櫻花、累路駐蹕於一條第、即是帝降誕之處也、太政大臣以肴醑賜扈從群臣文武官、積祿物於庭中、令帝覽訖、班賜有差、遂幸染殿花亭、親王已下、侍從已上並侍焉、太政大臣別令伶人教習樂一部、喚能屬文者五位已上十人、諸司六位十人、文章生二十人、命樂賦詩、具醉歡樂、移自花亭、御於射場、帝御弓矢、一發中鵠、群臣稱萬歲、親王已下以次遞射、山城國司守正四位下紀朝臣今守等、率郡司百姓、於東垣外、行耕田之禮、欲令帝覽之、知農民之有事也、自晨至暮、極樂而罷、賜親王公卿文武百僚祿各有差、夜分還宮、是日、授從五位下行隼人正難波朝臣蘰麻呂從五位上、太政大臣家扶正六位上日奉部若善外從五位下、正五位下上毛野朝臣滋子從四位下、无位當麻眞人葛子、上毛野朝臣宮子並從五位下、○三月丁亥朔、詔以因幡國從四位下宇倍神預之官社、○三日己丑、天皇潔齋奉燈

○知立神、神名式參河國碧海郡知立神社、知立町
○砥鹿神、同式寶飯郡砥鹿神社、一宮村にあり國幣小社に列す
○狹投神、同式賀茂郡狹投神社、西猿投村
○兎足神、同式寶飯郡菟足神社、小坂井村、兎は原本菟に作る今諸本に據る
○獲木連理一、獲は原本衡に作る祕本尾本に據て改む前本谷本橇に作るも獲の訛なり
○累路、累は原本中に作る諸本に據て改む
○肴醑、醑は原本醴に作る諸本に據て改む玉篇に醑は美酒也とあり
○中鵠、鵠は射侯の的なり
○難波朝臣蘰麻呂、蘰は原本訛れるを五年八月辛巳紀に據て訂す
○正五位下上毛野朝臣、正五位下の四字は諸本及五年十月庚辰紀に據て補ふ
（三月）宇倍神、四年五月庚辰紀に出づ此神官社に預ること嘉祥元年七月甲申紀にも見ゆ、倍は原本治に作れるを上下の文

に據て改む
○賜豐階朝臣、原本豐階の下に宿禰刑部首弟宮子賜豐階の十一字あり衍なり諸本に據て削る
○彥坐命、開化天皇々子
○弘興、興は原本與に作る諸本に據て改む
○土左守、左は原本佐に作る祕本閣本谷本等に據て改む下同じ
○巨範、諸本巨を臣に作る
○爲木工助、爲は尾本伴校本に據て補ふ
○守內匠頭、守は祕本尾本に據て補ふ

如常、○四日庚寅、丹波國何鹿郡人從七位下刑部首夏繼賜姓豐階宿禰、刑部首弟宮子賜豐階朝臣、夏繼等自言、先出自彥坐(ヒコイマス)命也、詔以內藏寮所領遠江國長上郡田地一百六十四町、施入貞觀寺、○五日辛卯、雷雨、○八日甲午、以從五位下行神祇少副大中臣朝臣豐雄爲大副、散位從四位上輔世王爲中務大輔、從五位下丹墀眞人瀧雄爲大監物、從五位下藤原朝臣維範爲內匠頭、外從五位下行雅樂少允和邇部宿禰大田麻呂爲權大允、遠江守從五位下笠朝臣弘興爲民部少輔、從五位上行土左守和氣朝臣巨範爲宮內大輔、散位從五位下御春朝臣內雄爲木工助、從五位下行木工助丸子連家繼爲大炊頭、右兵庫頭從五位下連扶王爲內膳正、散位從四位上平朝臣房世爲彈正大弼、從五位下行大炊助安倍朝臣宗行爲勘解由次官、從四位下行紀伊守在原朝臣善淵爲山城守、從五位下守內匠頭藤原朝臣宗枝爲伊勢介、散位從五位下長岡朝臣秀雄爲遠江守、從五位下行伊勢介藤原朝臣是繩爲信濃權介、正三位行中納言源朝臣融加陸奥出羽按察使、本官如故、外從

○左兵衞督源朝臣多爲、此九字は諸本に據て補ふ
○最敎、二月癸酉紀に見ゆ
○彗星、彗は原本慧に作る淀本に據て改む
○營室宿、廿八宿の一にて北極の北にあり
○積川神、神名式和泉國和泉郡積川神社五座、泉南郡直上村積川
○筑紫對馬神、式外、所在未詳

五位下行助教善淵朝臣永貞爲越後介、助教如故、外從五位下行備後介大神朝臣全雄爲但馬介、左京亮從五位下布瑠宿禰清貞爲伯耆守、散位外從五位下都宿禰御酉爲出雲守、從五位下源朝臣撰爲備後介、從五位下藤原朝臣行雄爲土左守、參議正四位下左兵衞督源朝臣多爲左衞門督、從四位上行備前權守在原朝臣行平爲左兵衞督、備前權守如故、從五位上行左兵衞權佐在原朝臣業平爲左近衞權少將、散位從五位下藤原朝臣直方爲左兵衞權佐、從五位下廣山王爲右兵庫頭、先是律師法橋上人位最教等、申牒起請四事、其一事曰、僧受戒、以四月十五日始行、二事曰、未授度緣之輩、雖下官符、不預受戒、三事曰、受戒畢後、奏聞受戒僧數、四事曰、戒壇院設印、捺於戒牒、太政官處分依請、但其印便可用東大寺印、○十一日丁酉、東京火、延燒三家、○十四日庚子、彗星見東、在營室宿、長四許尺、○廿二日戊申、延六十僧於內殿、限以三日、轉讀大般若經、以傳燈法師位願祥、爲內供奉十禪師、○廿三日己酉、授和泉國從五位上積川神從四位下、遠江國正六位上筑紫對馬神、越

○楉梓神、式外、神祇志に今在射水郡白川村と見ゆ
○法印大和上位、上は尙なるべし
（四月）
○名方郡、方は原本東に作る諸本に據て改む倭名抄には名東名西とあれど此時未だ一郡にて二郡となりしは寛平七年なり
○大和連、錄攝津神別に大和連神知津彦命十一世孫御物足尼之後也とあり
○於仗下、於は原本檢に作る伴校本に據て改む
（五月）

中國正六位上楉梓神並從五位下、○廿七日癸丑、贈大僧正傳燈大法師位空海、延曆寺座主傳燈大法師位最澄、並贈法印大和上位、○夏四月丁巳朔、天皇不御前殿、親王已下賜飮仗下、○四日庚申、廣瀨、龍田、平野等祭如常、○五日辛酉、梅宮祭如常、○七日癸亥、式部兵部兩省奏成選擬階簿、天皇不御前殿、有勅於省令行、○八日甲子、灌佛於內殿、如常儀、○十日丙寅、阿波國勝浦郡加置少領一員、○十五日辛未、公卿就太政官曹司廳、賜文武官成選位記、策命如常、○十六日壬申、諸衞警固、緣明日賀茂祭也、○十七日癸酉、賀茂祭如常、○十八日甲戌、諸衞解嚴、○廿一日丁丑、有勅改定諸國貢御馬期、隨國遠近程有餘役、○廿二日戊寅、阿波國名方郡人從八位上海直豐宗、外少初位下海直千常等、同族七人賜姓大和連、○廿三日己卯、式部省奏諸國銓擬郡司擬文、天皇不御前殿、大臣奉勅、於仗下點定之、復奏焉、○廿八日甲申、天皇御武德殿、閱覽左右馬寮御馬、○五月丙戌朔、五日庚寅、端午之節、天皇御武德殿、觀諸衞騎射、親王已下競馳馬、○六日辛卯、天皇御武德殿、觀左右馬寮

○承忍、承は原本烝に作る諸本に據て改む
○便任、任は原本住に作る黑川校本に據て改む
○愛當護神、神名式丹波國桑田郡阿多古神社是なり今山城國葛野郡に屬す愛は原本受に作る前本谷本淀本に據て改む
○延算寺、山縣郡巖美村岩井に延算寺藥師堂あり其遺趾なるべし
○春道宿禰、承和元年十二月乙未紀に川上造吉備成賜姓春道宿禰伊香我色雄命之後也とあり物部氏の同族なり
○中山金山彥神、元年正月甲申紀に見ゆ、中は原本仲に作る諸本に據て改む
○大山火、火は諸本に據て補ふ
○本栖、本は原本木に作る諸本に據て改む
○甲斐、甲は原本田に作る諸本に據て改む
○第八、原本八下に終字あり諸本に據て刪る

走馬、諸衞騎射、馬上雜藝、皆如舊儀、○九日甲午、勅法隆寺僧承忍還俗、復本姓名中臣美乃連益長、便任美濃國山縣郡少領、益長元各務郡人也、○十日乙未、授丹波國正六位上愛當護神從五位下、○十一日丙申、右京人因幡權掾正六位上物部門起賜姓春道宿禰、○十四日己亥、以美濃國山縣郡延算寺預之定額、○十九日甲辰、請六十僧於內殿、限三箇日轉讀大般若經、○廿二日丁未、授美濃國正三位中山金山彥神從二位、○廿五日庚戌、霖雨、京師隱居飢病者特加賑恤、駿河國言、富士郡正三位淺間大神大山火、其勢甚熾、燒山方一二許里、光炎高二十許丈、有雷地震三度、歷十餘日、火猶不滅、焦巖崩嶺、沙石如雨、煙雲鬱蒸、人不得近、大山西北有本栖水海、所燒巖石、流埋海中、遠卅許里、廣三四許里、高二三許丈、火焰遂屬甲斐國堺、

日本三代實錄卷第八

【貞觀六年】宗我都比古神、元年正月甲申紀に見ゆ
○勅改定信濃國牧貢御馬期、左馬寮式に諸牧駒者毎年九月十日國司與牧監若別當人等臨牧檢印云々明年八月附牧監等貢上さあり
○波寶神波比寶神、天安二年三月紀(文德紀一七五頁)に見ゆ
○授正四位下、原本正を從に作る八年十一月乙巳紀に據て改む
○弘經、經は原本徑に作る諸本に據て改む
(七月)奉幣於伊勢、於は類史に據て補ふ
○兩國疾疫、此下に恐くは賑給之の三字を脫せり

日本三代實錄卷第九

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

起貞觀六年六月盡十二月

六月丙辰朔、十一日丙寅、月次幷神今食祭、親王公卿向神祇官、奉祭如常、○十六日辛未、授大和國從五位上宗我都比古神正五位下、○廿三日戊寅、勅改定信濃國牧貢御馬期、大和國從四位下波寶神、波比寶神、並授正四位下、○廿八日癸未、以散位從五位下藤原朝臣萬枝爲上總介、外從五位下賀陽朝臣宗成爲安房守、從五位下行讃岐權掾藤原朝臣弘經轉權介、○秋七月乙酉朔、日有蝕之、○四日戊子、廣瀨龍田祭如常、○十日甲午、遣使者奉幣於伊勢大神宮、進平野從一位今木神階、加正一位、○十一日乙未、加賀出雲兩國疾疫、○十四日戊戌、天皇御前殿觀相撲、○十五日己亥、陸奧國磐瀨郡權大領外正六位上磐瀨朝臣長宗借叙外從五位下、○十七日辛丑、頒下五畿七道諸國、班幣境内

大小諸神、爲殺祈也、甲斐國言、駿河國富士大山、忽有暴火、燒碎崗巒、草木焦殺、土鑠石流、埋八代郡本栖、并剗兩水海、水熱如湯、魚鼈皆死、百姓居宅、與海共埋、或有宅無人、其數難記、兩海以東、亦有水海、名曰河口海、火焰赴向河口海、本栖剗等海、未燒埋之前、地大震動、雷電暴雨、雲霧晦冥、山野難辨、然後有此災異焉、○十九日癸卯、天皇御前殿、觀相撲、○廿日甲辰、天皇御前殿、觀童相撲、○廿三日丁未、有星、出營室入羽林東、赤黃無光、○廿五日己酉、授和泉國正六位上卷尾神從五位下、○廿七日辛亥、勅曰、去年七月廿五日、頒下五畿、并伊賀、伊勢、志摩、遠江、相摸、上總等國云、鎭護國家、消伏災害、尤是敬神祇、欽祭禮之所致也、是以格制頻下、警告慇懃、今聞諸國牧宰、不愼制旨、專任神主禰宜祝等、令神社破損、祭禮疎慢、神明由其發祟、國家以此招災、今欲令諸社一時新加華餝、而經月踰年、未有修造、宜早加修餝、勿致重怠、○進筑後國從二位高良玉垂命神階、加正二位、從四位下豐比咩神從四位上、武藏國從五位下若電神從五位上、右京人無位民首方永賜姓眞野臣、天足彥國忍人

○大小諸神、神名式所載の神に大小あり其區別は幣帛の量數に據て之を定む
○焦殺、殺は原本熱に作る紀略に據て改む
○本栖并剗兩水海、富士五湖の一なり本栖は今も同じ剗は今の精進湖並に其東なる西湖に渉れる古名なりもと一湖なりしが中央埋塞して二湖となれりと云本栖及精進湖は今西八代郡に屬し西湖は都留郡に屬す本は原本木に作る諸本に據て改む下同じ
○河口海、今も同じ今都留郡に屬す
○自營室入羽林東、營室は廿八宿の室宿にて北極の北にあり羽林は羽林軍ともいひ室の南にあり總て四十五星あり三才圖會に三三而聚散在營室之南天軍也主軍騎又主翼王也星衆而明則安寧希而動則兵革起云々とあり、出營室の三字は紀略に據て補ふ秘本尾本前本等には有室とあり
○卷尾神、式外、神祇志に今在和泉郡坪井村東槇尾山施福寺境內とあ

り坪井村は今泉北郡横山村大字となる ○今開、開は諸本に據て補ふ ○由共發業、共は原本是に作る諸本に據て改む ○高良玉垂命神、元年正月甲申紀に見ゆ ○若雷神、式外、所在未詳、雷は或は霤の訛か ○眞野臣、錄右京皇別に眞野臣天足彥國押人命三世孫彥國葺命之後也とあり

(八月)(二)文章生、原本文人の二字に作る諸本に據て改む ○貞子、貞は原本眞に作る秘本尾本前本等に據て改む ○贈從二位、二は原本一に作る仁壽三年四月戊寅常康親王の傳に據て改む ○平昔、平は原本在に作る諸本に據て改む杜甫詩に二嘆酒食傍何由似平昔とみゆ ○賜顔色、寵愛し給ふを云宋之問桂州三月三日詩に兩朝賜顔色二紀陪歡宴とあり ○天至、天は原本大に作る諸本に據て改む ○震宮、東宮なり震は原

命之後也、○八月乙卯朔、三日丁巳、釋奠如常、從五位下行助教兼越前權介菅野朝臣佐世發尙書題、文章生等賦詩、是日、仁明天皇女御正三位藤原朝臣貞子薨、勅贈從二位、葬深草山陵兆域之內、仁明天皇平昔賜顔色、所許也、遣參議大藏卿正四位下源朝臣生、散位從四位下弘宗王等、監護葬事、貞子者、右大臣贈從一位三守朝臣之女也、風容甚美、婉順天至、仁明天皇爲儲貳、以選入震宮、寵愛日隆、天皇踐祚之初、天長十年十一月授從四位下、承和六年正月、進爵授從三位、嘉祥三年七月加正三位、先是誕育一皇子二皇女、皇子者第八成康親王是也、雖不登后位、而宮闈權勢无與爲比、嬿私加愛、終始無衰焉、○四日戊午、明經博士等奉參御在所、不喚御前、賜祿而罷、○五日己未、下知甲斐國司云、駿河國富士山火、彼國言上、決之著龜云、淺間名神禰宜祝等、不勤齋敬之所致也、仍應鎭謝之狀、告知國訖、宜亦奉幣解謝焉、○八日壬戌、右京人故外從五位下岡屋公祖代賜姓八多朝臣、其先、出自八太屋代宿禰也、左京人武藏權大掾正七位下大丘造塵繼、散位從七位上大丘連田

刈等四人、賜姓宿禰、其先百濟人也、左京人玄蕃大允正六位上阿刀連粟麻呂、主殿大屬正六位上阿刀宿禰石成、下野權大目正七位上阿刀連禰守、右京人陰陽允阿刀物部貞範等、並賜姓良階宿禰、神饒速日命之裔孫也、右京人二品秀良親王家令正六位上宇自加臣吉人賜姓笠朝臣、彥狹嶋命之後也、阿波國名方郡人二品治部卿兼常陸太守賀陽親王家令正六位上安曇部粟麻呂、改部字賜宿禰、粟麻呂自言、安曇百足宿禰之苗裔也、讃岐國多度郡人美作掾從六位下秦子上成、弟無位秦子彌成等三人、賜姓忌寸、本系出自秦始皇帝也、播磨國餝磨郡人播磨權醫師正八位上和邇部臣宅貞、式部留省從八位上和邇部臣宅守等、賜姓邇宗宿禰、左京人散事從五位下水取連夏子、故外從五位下水取連柄仁、故外從五位下水取連繼男等、賜姓朝臣、神饒速日命之後也、尾張國海部郡人治部少錄從六位上甚目連公宗氏、尾張醫師從六位上甚目連公冬雄等同族十六人、賜姓高尾張宿禰、天孫火明命之後也、左京人山村忌寸安野、夏野、全子等賜姓紀朝臣、紀角宿禰之

〇本寢に作るを改む
〇三年七月、七は原本正に作る文德紀嘉祥三年七月辛丑紀に據て改む
〇二皇女、親子・平子兩內親王
〇皇子者、原本子を女に作る諸本に據て改む
〇无與爲比、比は紀略に據て補ふ
〇終始、始は原本如に作る諸本に據て改む
〇岡屋公、皇別は姓氏錄に見えず同書山城諸蕃に見ゆるは百濟系なり
〇八多朝臣、錄右京皇別に八多朝臣武內宿禰命之後也とあり
〇大丘造麈繼、錄左京諸蕃に大丘造出自百濟國速古王十二世孫恩率高難延子之後也とあり麈は鹿或は庶の誤か
〇右京人(貞範)、四年七月乙未紀に阿刀宿禰貞範貫附左京職とあれば右は左の誤か
〇阿刀連、錄山城神別に阿刀連饒速日命孫味饒田命之後也とあり
〇良階宿禰、禰は原本彌に作る諸本に據て改む
〇宇自加臣、錄右京皇別に宇自可臣孝靈天皇皇子

○彦狹嶋命之後也とあり
○名方郡、方は原本東に作る諸本に據て改む
○安曇部、三代格一に戸座阿波國阿曇部壬生中臣部右男帝御宇之時供奉と見ゆ
○式部留省、留省は和銅七年紀（續紀上一〇三頁）に見ゆ原本留省を小錄に作る諸本に據て改む
○海宗宿禰、五年九月己亥紀に見ゆ海宗はチカヨシと訓むべしと云る說あれどニムネと訓むべきか
○水取連、錄左京神別に水取連饒速日命六世孫伊香我色乎命之後也とあり
○籠男、男は尾本遠本雄に作る
○甚目連、山崎校本頭注に弘仁海部令稱海東[illegible]日海東日甚目寺[illegible]業任之云姓甚目[illegible]渡來[illegible]日甚目伊勢國安志郡[illegible]甚目[illegible]渡來[illegible]とあり甚目は原本其目に作る諸本に據て改む下同じ
○高屋宿禰、錄左京神別に尾張宿禰[illegible]七世孫阿智連之後也とあり
○紀朝臣、錄在京皇別に[illegible]朝臣建內宿禰男紀角宿

後也。右京人內教坊頭從七位下秦忌寸善子賜姓伊統朝臣、弟秦忌寸安雄等賜姓伊統宿禰。播磨國餝磨郡人陰陽大屬正六位上旱部利貞、父武散位正六位下旱部歲直等、賜姓旱部連、貫附攝津國嶋上郡。狹穗彦命之後也。播磨國餝磨郡人陰陽寮陰陽師從八位下弓削連是雄、父正六位上弓削連安人等、改本居貫附河內國大縣郡。近江國犬上郡人左近衞府生正七位下春良宿禰諸世、改本居貫附山城國愛宕郡。河內國若江郡人故從五位下春江宿禰安生、式部大錄正六位上春江宿禰良並、大宰大典從六位上春江宿禰敏雄、蔭子正六位上春江宿禰常嗣等、改本居貫左京職。○九日癸亥、勅配流越中國罪人伴那賀人免罪入京。太政官下符東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、大宰府、貢調庸僞惡停、貞觀元年十二月十五日、下七道諸國符偁、大同二年十二月廿九日格云、僞惡之罪者、格條所指、科責非輕、而今諸國所貢絹布等、惣是僞惡、事無精麗、或如絹非絹、尤同蜘蛛之秋網、或如布非布、不異連瑣之疎文、加以尺寸多欠、短狹無數、徒有輸貢之勞、還闕支給之備、是則牧

禰之後也とあり
○正六位上(利貞)、十五年十二月癸巳紀には從七位上に作る
○早部、錄河內皇別に日下部連彥坐命子狹穗彥命之後也とあり原本早を早に作る十五年十二月癸巳紀に據て改む下同じ
○父武散位、父は諸本文に作る前例に據て改む武散位は武官にて散位なるを云
○作那賀人、那は原本部に作る秘本閣本尾本に據て改む前本谷本淀本等郡に作るも那字の訛なり
○貢調庸麁惡併、原本貢を貫に作り併字貢上にあり諸本に據て改め移す
○大同二年十二月格、三代格八及要略五十一に見ゆ
○諸國所貢、所は諸本に據て補ふ
○蜘蛛、諸本蛛を蜘に作る名義抄に蜘蛛クモとあり蛛蜘同韻なれば古は通用せしなるべし
○秋綱、綱は原本網に作る諸本に據て改む
○徒有檢貢、徒は原本從に作る秘本閣本尾本に據て改む

宰專忘格制、唯事規避之所致也、法設不行、雖是寬典、人狎不愼、實須懲肅、然而漸染所成、難可頓責、宜誡既往之怠、以求將來之效、符出之後、數年于茲、猶不懲肅、彌致麁惡、卽知、空張格制、不行其罰、國宰狎來所積之漸也、須准之科條、必其罪責、而時尊深仁、政先鴻恕、年來優容、特聽換納、如此之費、既成奸濫、論之政途、理何合然、自今以後、猶有麁惡、論之如格、不曾寬恕、○十日甲子、右京絕貫百姓大中臣朝臣豐御氣自言云、親父麻呂、故刑部卿從四位下東人之玄孫也、豐御氣祖父男成、流寓大宰府、父麻呂相隨、男成生長彼土、歷數十年、貫屬既絕、請復本屬、更爲編戶、神祇伯從四位下中臣朝臣逸志等證之、勅、麻呂、豐御氣、多勝、春秀等男女十人、復本貫右京五條一坊、山城國乙訓郡人內膳典膳正六位上丈部谷直平雄、散位正七位上丈部谷直福麻呂等、改本居貫附左京、河內國丹比郡人大宰大典正六位上安原宿禰臣雄、左近衞將曹從六位下安原宿禰貞臣等、改本居隷右京職、○十一日乙丑、伊賀國名張郡人左史生從六位下伊賀朝臣春野、改本居貫山城國葛野郡、○十三日丁

○支給、給は原本細に作る閣本尾本前本等に據て改む
○漸染、漸は祕本閣本尾本に據て補ふ
○特聽撿納、納は諸本に據て補ふ
○丈部谷直、仁和三年七月十七日戊子紀に後漢孝獻皇帝後坂上大宿禰等之氏族有姓丈部谷直者と見ゆ
○左近衛將曹、祕本閣本尾本等衛字なく一本には曹を監に作る
○仲山大神、二年正月戊寅紀に見ゆ仲は上文及式中に作る
○蒲田神、神名式荏原郡蒲田神社（式蒲に作るは誤れり三代實錄倭名抄に據て訂すと志料に云）
○美作國、作は原本濃に作る長田神以下何れも美作國にありて美作の誤なること明かなり故に改む
○長田神、以下久止神に至る八神前社神を除くの外は神名式美作國大庭郡に見え其順序は佐波良神社、形部神社、壹粟神社二座、橫見神社、久刀神社、菟上神社、長田神社とあり、佐原は式の佐波

卯、節婦紀伊國名草郡人伴連宅子叙位二階、免戸內田租、表其門閭、以旌貞節、先是大宰府言、大唐通事張友信渡海之後、未知歸程、唐人來往、亦無定期、請友信未歸之間、留唐僧法惠、令往觀音寺、以備通事、太政官處分、依請、○十四日戊辰、詔以美作國從四位下仲山大神、武藏國從五位下蒲田神、並列官社、○十五日己巳、美作國從五位下長田神、兔上神、前社神、佐原神、形賣神、壹粟神、橫見神、久止神、高野神等、並授從五位上、是日制、筑前國香椎廟司、以六年爲任限、○十七日辛未、進女御從四位下藤原朝臣多美子階、加從三位、播磨國赤穗郡大領外正七位下秦造內麻呂借叙外從五位下、右京人河內守從五位下蕃良朝臣豐村、右大史從六位下葛井連宗之、兵部少錄正六位上葛井連居都成等、賜姓菅野朝臣、本系出自百濟國人貴須也、右京人散位從五位上讃岐朝臣高作、右大史正六位上讃岐朝臣時雄、右衛門少志正六位上讃岐朝臣時人等、賜姓和氣朝臣、其先、出自景行天皇皇子神櫛命也、左京人太皇太后宮少屬正七位上百濟宿禰有世賜姓御春朝臣、有世其先、

出レ自二百濟國人比有一也、右京人主計算師正八位上大窪峯雄、主水權令史正六位上大窪淸年等、賜二姓有宗宿禰一、左京人正八位下刀岐直永繼等姉妹五人、賜二姓滋岳朝臣一、左京人右近衛將曹正六位上和藥使主弟雄、式部位子從八位下和藥使主安主、兵部位子從八位下和藥使主黑麻呂等、改二使主一賜二宿禰一、其先吳國人智聰也、美濃國多藝郡人太政官史生正八位下物部吉宗、改二本居一貫二山城國愛宕郡一、○廿日甲戌、授二和泉國從五位下卷尾神從五位上一、○廿三日丁丑、延二六十僧於紫宸殿一、限以二三日一、轉二讀大般若經一、○廿五日己卯、勅以二平朝臣寛子一爲二女御一、左京人主水令史正七位下水取連繼人、散位正八位下水取連繼主、賜二姓宿禰一、○九月乙酉朔、三日丁亥、天皇潔齋、奉レ燈如レ常、○四日戊子、地震、和泉國大鳥郡人民部少錄正七位下蜂田連瀧雄、改二本居一隷二左京職一、○九日癸巳、重陽之節、天皇御二前殿一、賜二宴於群臣一如二常儀一、賜レ祿各有レ差、是夜有レ星、出二紫微宮一入レ昴、長可二三丈餘一、○十一日乙未、遣二使者於伊勢大神宮一奉レ幣、例也、○十四日戊戌、是夜有レ星、出レ自二奎婁間一入二於外屛一、○廿六日庚戌、地

眞、形質は形部なり佐渡眞神社以下何れも眞庭郡湯原村大字社にあり佐原は原本に加佐美とあり此は美濃國各務郡に加佐美神社あるより強ひて改めしなるべしされど諸本何れも佐原とあり壹粟は原本に壹粟原とあれど諸本に原字なく秘本淀本に粟な粟に作るに據て訂す前社神は原本に田神とあれど諸本何れも前社神とあり式外なるべし
○高野神、神名式苫東郡高野神社、今苫田郡二宮村
○是日制、以下十六字は類史十四日戊辰に繋く
○豐村、村は上文何れも持に作る持の訛なるべし
○菅野朝臣、錄右京諸蕃に菅野朝臣百濟國都慕王十世孫貴首王之後也
○百濟國人、人は諸本に據て補ふ
○其先、其は原本某に作る前後の例に據て訂す
○有宗宿禰、出自未詳
○刀岐直、出自未詳、刀は秘本閣本尾本及齊衡元年九月丁亥紀に據て補ふ
○和藥使主、錄左京諸蕃に出レ自二吳國主照淵孫智

聽一也とあり
○眷尾神、上文七月己酉紀に出づ
○平朝臣寬子、父詳ならず、平上に位階あるべきなり
○繼主、此下に黑川校本等字あり
(九月)各有差、各は類史七十四に據て補ふ
○入昴、昴は廿八宿の一にて北極の西にあり
○出自奎婁間云云、奎婁並に廿八宿の一にて北極の西北にあり外屛は同じく星名にて奎の南にあり七星あり屛の如く排列す於は總本前本等扵に作る
(十月)御前殿、前は諸本及類史紀略に據て補ふ
○五尺許、紀略に五許尺に作る
○東京第、第は伴校本に據て補ふ
○伯耆守從五位下、伯耆守の三字は諸本に據て補ふ
○宮原神、式外、神祇志に宮原神社今在賀陽郡下足守村とあり今吉備郡足守町大字となる
○安部神伊賀津彥神、共に式外、所在未詳
○高屋粟井神、總本閣本

震、○廿七日辛亥、東京有火、○冬十月甲寅朔、天皇御前殿、宴于侍臣、左右近衛府奏音樂、賜祿如常、是日、復出雲國仁多飯石兩郡百姓課役二年、以不宜農蠶也、○三日丙辰、請六十僧於內殿、轉讀大般若經、限三日訖、○七日庚申、夜北山有光、如電、又朱雀門前見赤光、長五尺許、○九日壬戌、地震、○十一日甲子、坐太政大臣東京第正二位勳八等田心姬神、湍津姬神、市杵嶋姬神、並進階級、加從一位、以傳燈法師位空操、爲內供奉十禪師、○十二日乙丑、地大震動、○十四日丁卯、以散位從五位下紀朝臣吉繼、爲安房守、民部少輔從五位下笠朝臣弘興爲丹波權守、散位從五位下百濟王俊聰爲伯耆守、伯耆守從五位下布瑠宿禰清貞爲豐前守、○十五日戊辰、備中國從五位下宮原神加授從五位上、伊賀國正六位上安部神、伊賀津彥神、讃岐國正六位上高屋粟井神、梶州、天川、宇夫志奈神、賀富良津神等、並從五位下、○廿一日甲戌、天皇御前殿、右近衛右衛門右兵衛等三府、及右馬寮獻物、去五月六日競馬走馬之輸物也、音樂備擧、百戲皆作、極醉方罷、宴竟賜祿各有差、○廿六日己卯、

前本等何れも屋粟神とあり苅田郡に高屋神社粟井神社あるより後人私意を以て高及井字を補ひ栗を粟と改めしなるべし按に木田郡に八栗山八栗寺あれば屋粟神は此地に由ある神なるべし
○梶州天川宇夫志奈神、共に式外、梶州は所在未詳州恐くは誤字ならむ天川神社宇夫志奈神社は神祇志に二社今在鵜足郡天川社在造田村天川之地宇夫志奈社在鵜足津村産砂之地と云
○賀富良津神、式に苅田郡加麻良神社あり是なるべし諸本に神字なし津は神の訛にて賀富良神か
○御前殿、閣本尾本及類史七十八に御南殿に作る
○去五月、去は原本云に作る諸本及類史に據て改む
○百戲、戲は原本獻に作る諸本及類史紀略に據て改む
○方罷、罷は原本醒に作る諸本及類史に據て改む
(〔十一月〕)大宅牧、倭名抄肥後國宇土郡に大宅鄕あり此地にありしなるべし

夜雷三聲、〇十一月甲申朔、陰陽寮奏進御曆、天皇不御前殿、內侍奏之、〇四日丁亥、勅停肥後國大宅牧、始置玄蕃寮寮掌一員、〇五日戊子、授出羽國正四位上勳五等大物忌神從三位、〇七日庚寅、詔免除無品人康親王家借絹百卅疋、綿三百屯、調布四百端、錢三千三百貫文、先是大和國言、平城舊京、其東添上郡、西添下郡、和銅三年遷自古京、都於平城、於是兩郡自爲都邑、延曆七年遷都長岡、其後七十七年、都城道路、變爲田畝、內藏寮田百六十町、其外私竊墾開、往往有數、望請收公、令輸其租、許之、〇十日癸巳、備後國品治郡人左史生從八位上品治公宮雄、改本居貫山城國葛野郡、從四位下橘朝臣影子卒、〇十二日乙未、勅令五畿內幷山陽南海兩道預鎭謝疫癘、兼轉讀般若大乘、以神祇官奏言彼諸國可有天行也、〇十三日丙申、夜熒惑入守弖、〇十七日庚子、右近衞府有犬死穢、停大原野祭、〇十八日辛丑、園韓神祭如常、〇十九日壬寅、鎭魂祭如常、〇廿日癸卯、新嘗祭、天皇不御神嘉殿、勅親王公卿、於神祇官奉祭、〇廿一日甲辰、天皇御前殿、賜新嘗豐樂宴於群臣、大歌

○大物忌神、四年十一月乙丑紀に見ゆ
○變爲田畝、原本爲田の間一字空白とし諸本菑字あり菑は菑なり
○橘朝臣影子、從四位下を授くること承和七年正月乙酉紀に見ゆ
○勅令、令は原本命に作る類史十一に據て改む
○熒惑、火星なり
○守弖、弖は廿八宿の一にて北極星の東南にあり原本與に作る諸本及紀略に據て改む
○右近衛府、右は原本左に作る諸本に據て改む
○新嘗祭、祭は諸本及類史九に據て補ふ
○猿嶋、猿は原本猨に作る今諸本に據る
〔十二月〕横走永倉柏原、倭名抄郡郷部に駿河國駿河郡横走（與古波之里）永倉（奈加久良）柏原（加之波々良）と見ゆ横走は今駿東郡足柄北郷兩村及小山町の一部に當り永倉は長泉村小白村等に當り柏原は今富士郡元吉原村に當れど驛址は詳ならず、原本柏を栢に作る諸本に據て改む
○驛子、驛馬を提ふ人夫

五節舞、賜祿如常、○廿二日乙巳、勅復下總國葛餝印幡相馬埴生猿嶋五郡百姓調庸二年、以往頻憂水旱也、○廿六日己酉、雷雨、○卅日癸丑、日有蝕之、○十二月甲寅朔、十日癸亥、勅加置伊勢豐受神宮御馬飼內人一人、以元御馬二疋充飼內人一人也、駿河國言、駿河郡帶三驛二傳、横走、永倉、柏原驛家是也、惣差點丁驛子四百人、傳子六十人、年來疫旱荐臻、課丁欠少、因而驛傳子等不能滿數、郡民凋殘、莫甚於此、望請、廢柏原驛、富士郡蒲原驛遷立於富士河東野、然則蒲原驛與永倉驛、行程自均、民得息肩、從之、○十一日甲子、月次幷神今食祭、天皇幸宮內省、親奉祭、○十四日丁卯、若狹國言、謹撿齊衡二年五月十九日格偁、當年調庸、來年不究、明年三月卅日以前、主計寮具錄未進之數、移主稅寮、進未進之數、沒國司史生已上公廨、貞觀四年三月二十日格偁、非受業博士醫師、宜准史生責其解由者、然則史生已上既立其制、博士醫師不入沒例、況復從事同於史生、何獨保其俸料、望請、博士醫師、除受業練道之外、同沒公廨、從之、諸國亦准此、○十八日辛未、勅公卿獻荷前幣如常、○廿一

日甲戌、授丹後國從五位上籠神正五位下、○廿三日丙子、內殿始修佛名懺悔如常、○廿六日己卯、大宰府言、肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍命神靈池、去十月三日夜、有聲震動、池水沸騰空中、東南灑落、其落東方者、如布延縵、廣十許町、水色如漿、黏著草木、雖經旬日、不消解、又比賣神嶺、元來有三石神、高四許丈、同夜二石神頽崩、府司等決之龜筮云、應有水疫之災、○廿九日壬午晦、大祓大儺如常、

日本三代實錄卷第九

な云課丁を以て之に充つ　○傳子、驛路の傳馬を養ふ者なり同じく傳戶の課丁を以て充つ　○蒲原驛、倭名抄言上郡鄕名蒲原の次に驛家と見ゆる是なり其地詳ならず　○若狹國言云、三代格八に太政官符應國醫生未進代沒非業博士醫師公廨事と見ゆ　○非受業博士醫師云云、四年三月廿日紀に今在任百十四人醫師三人皆非練道受業之輩空費俸料無益生徒請一准史生云々と見ゆ　○解由者、者は格及要略五十一に據て補ふ　○沒例、沒は原本役に作る類史格及要略に據て改む　○俸料、原本撿斷に作る類史八十四に據て改む尼本前本谷本等俸を捧に作るは訛なり　○沒公廨、沒は原本役に作る類史要略及格に據て改む　○籠神、神名式丹後國與謝郡籠神社（名神大月次新嘗）とあり今府中村にあり國幣中社に列す　○東南灑落、南は原本西に作る諸本に據て改む　○比賣神、阿蘇比咩神なり　○二石神、二は原本一に作る諸本に據て改む　○大祓、此二字諸本及類史（七十四）紀略に據て補ふ　○第九、原本此下に終字あり諸本に據て刪る

【貞觀七年】出庚入甲、庚は申酉の方、甲は寅卯の方なり

○出天苑云云、天苑は昴畢の南にあり常陳は太微垣内五常座の北にあり

○齋誡、原本誡を戒に作る諸本に據て改む、寄書に誡與戒同とあり

○拜爵之儀、拜爵は叙位なり

日本三代實錄卷第十

起貞觀七年正月盡五月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

(乙酉)七年春正月癸未朔、是日立春、天皇不受朝賀、以雨雪地濕也、天皇不御前殿、七曜御曆、藏氷樣、腹赤御贄等、所司付內侍奉進、親王已下、侍從已下飮宴、賜御被、○三日乙酉、雨雪、夜有星、出庚入甲、推之出天苑入常陳、○四日丙戌、去年陰陽寮奏、明年可有兵疫之災、近日天文博士奏、應警兵事、於是勅僧綱曰、防災未萌、延慶將來、誠是佛法之力、經王之功也、宜一七日間、令十五大寺奉讀大般若經、其所擇諸寺、金剛般若經、又下符五畿七道、俾國司講師相共齋誡、從符到日一七日間、於國分寺及有供定額諸寺、轉讀同經王、○七日己丑、天皇御前殿、簾中覽靑馬、及宴群臣、賜祿如常、太政大臣自去冬寢疾彌留、故拜爵之儀、今日寢參焉、○八日庚寅、於大極殿、始講最勝王經、以東大寺僧華嚴宗傳燈大法師位興

智爲講師、○十四日丙申、地震、大極殿齋講竟、僧綱以下奉參内殿、論義如常、○十六日戊戌、踏歌之節、天皇不御前殿、宴于侍臣、踏歌賜祿如常、○十七日己亥、勅公卿、於建禮門前行射禮、○十八日庚子、停四府賭射、授近江國无位比良神從四位下、○十九日辛丑、天皇於御在所射場、觀四府賭射、○廿五日丁未、太政大臣從一位臣藤原朝臣良房、左大臣正二位臣源朝臣信、右大臣正二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣良相、大納言正三位臣平朝臣高棟、大納言正三位兼行民部卿太皇太后宮大夫臣伴宿禰善男、右近衞大將從三位兼守權大納言臣藤原朝臣氏宗、正三位行中納言兼陸奥出羽按察使臣源朝臣融、參議正四位下行左衞門督臣源朝臣多、參議正四位下行大藏卿臣源朝臣生、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官臣南淵朝臣年名、參議正四位下行右衞門督兼讃岐守臣藤原朝臣良繩、參議正四位下行式部大輔兼近江守臣春澄朝臣善繩、參議從四位下守右大辨臣大枝朝臣音人、參議右近衞權中將從四位下臣藤原朝臣常行、參議左近衞中將從四位下臣藤原

○論義、義は類史百七十七に議に作る
○停四府賭射、停は類史七十二に據て補ふ
○比良神、式外、神祇志に所在滋賀郡鵜川村とあり鵜川は今小松村大字となる
○正三位（高棟）、三は原本二に作る二年九月甲戌紀に據て改む
○民部卿太皇太后宮大夫、原本卿を大輔に作り皇上の太字なし諸本及上下の文に據て改め補ふ
○伴宿禰善男、宿禰は原本朝臣に作る二月己巳紀に據て改む
○臣南淵朝臣、臣は前後の例に據て補ふ
○臣藤原朝臣良繩、臣は諸本に據て補ふ

○六代親王、桓武天皇より文德天皇まで六代なり
○年料給分云云、親王に給はる年官なり除目抄に親王巡給事、巡給・別巡給・別給已上其號有三種年給目一人一分一人外巡給二合事也と見え親王には公廨稲二分を給せらる丶主典一人、一分を給せらる丶史生一人の官を賜ひ其收入を所得せしめらる丶なり
○徒見流例、徒は原本從に作る諸本に據て改む
○所出之闕、原本闕を給に作る諸本に據て改む闕は闕官なり轉任死亡等に依て生ずる闕員を云
○應補者居多、多は諸本に據て補ふ
○伏聽天裁、伏は諸本に據て補ふ
○從五位下行造酒正、行以下十七字は諸本に據て補ふ

朝臣基經等奏議言、伏見、自延暦至仁壽、六代親王年料給分主典史生等、每代各一人、互稱一代、不用通計、是以或隔一年卽給、或經數年稀給、或省內親王、不關給例、執論各殊、披訴間出、天慈攸及、還似不平、謹按此事、格式不載、宣旨非切、徒見流例、未詳本源、方今年中所出之闕、始自三宮、至於諸司、有勞應補者居多、常苦其不足、而親王之數、四十有餘、非隔數年、難可周給、伏請、惣計親王、不別代々、輪轉而給、鱗次弗愆、將使先後無恨、男女共欣、永々相承、以爲成式、但先來有勅、所別給者、不入此限、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、○廿七日己酉、以散位從四位下忠範王爲中務大輔、從五位下興我王爲大監物、從五位上行內藏助藤原朝臣安方爲頭、從五位下行造酒正春道宿禰永藏爲助、從五位下行上野介紀朝臣貞丘爲諸陵頭、從四位下行中務大輔輔世王爲民部大輔、散位從五位上源朝臣穎爲少輔、從五位下丹墀貞人高棟爲大藏少輔、從五位下行備後介源朝臣撰爲山城介、從四位上行彈正大弼平朝臣房世爲河內權守、從五位下行天文博士中臣志斐連春繼爲攝津權介、天文博士如

○碓雄、碓は原本雖に作る諸本に據て改む

○三寅爲權介、介は原本助に作る前後の例に據て改む

○貞行、貞は原本眞に作る諸本に據て改む

○藤吉、六年正月甲午紀藤善に作り下文十二年十一月乙丑紀此に同じ同年十二月丙午紀以下多く藤善とす

○三原朝臣永道、永は諸本空白とす

故、從五位下行鼓吹正粟田朝臣碓雄爲伊賀守、散位從五位上藤原朝臣宜爲伊勢權守、從五位上行太政大臣家令菅野朝臣弟門爲尾張介、遠江守從五位下長岡朝臣秀雄爲參河守、散位從五位下安倍朝臣三寅爲權介、大監物從五位下田口朝臣統範爲遠江守、散位從五位下布勢朝臣冬雄爲駿河介、從五位上大中臣朝臣眞主爲常陸介、主計頭兼木工權頭從五位上有宗宿禰益門爲信濃權守、餘官如故、散位從五位下大春日朝臣吉野爲介、從五位上安倍朝臣貞行爲上野介、治部少輔從五位下橘朝臣忠宗爲下野守、散位從五位下伴宿禰春宗爲陸奧介、從五位下行出羽權介安倍朝臣比高爲守、散位從四位下弘宗王爲越前守、刑部少輔從五位下文室朝臣能雄爲權介、從四位下行下野守棟貞王爲越中守、散位從五位上久賀朝臣三常爲權守、從五位下行左馬助丹墀眞人藤吉爲丹波權介、左馬助如故、侍從從五位下源朝臣治爲因幡權守、散位從五位下三原朝臣永道爲播磨守、從五位下平朝臣季式爲介、從五位下行陰陽權助兼陰陽博士滋岳朝臣川人爲權介、餘官

○紀朝臣宗守、宗は原本今に作り諸本空白とす今守は六年正月癸卯紀に正四位下行左京大夫兼山城守紀朝臣今守爲大和守餘官如故とあり當時正四位下にて從五位下にあらず又玄蕃頭にも非ず五年二月癸卯紀に從五位下行紀伊介紀朝臣宗守爲玄蕃頭とあり此時從五位下にて玄蕃頭たりしは宗守なり依て今を改て宗とす
○鎭守將軍、原本守下に府字あり諸本に據て削る
（二月）豐前者、原本前下に王字あり無きを例とす諸本に據て削る
○親王後、後は諸本に據て補ふ

如故、散位從四位上源朝臣光爲美作守、從四位上基兄王爲安藝守、勘解由次官從五位下安倍朝臣宗行爲周防守、從四位上行兵部大輔兼美作守藤原朝臣仲統爲紀伊守、兵部大輔如故、參議左近衞中將從四位下藤原朝臣基經爲阿波守、左近衞中將如故、右近衞少將正五位下藤原朝臣有貞爲讃岐權介、右近衞少將如故、從五位下行雅樂助藤原朝臣業世爲筑前權介、從五位下守玄蕃頭紀朝臣宗守爲筑後守、散位從五位上紀朝臣夏井爲肥後守、從五位下守諸陵頭藤原朝臣廣守爲豐後守、散位從五位下菅野朝臣宗範爲介、從五位下田口朝臣業雄爲日向守、從五位下行陸奧介文室朝臣甘樂麻呂爲鎭守將軍、○廿九日辛亥、地震、○二月癸丑朔、二日甲寅、從四位上行伊豫守豐前王卒、豐前者、贈一品舍人親王後、四世木工頭從五位上榮井王之子也、豐前少以涉學爲稱、天長三年、爲大學助、俄而遷式部大丞、五年父憂去職、服中詔以本官起之、七年遷諸陵助、九年爲大宰大監、十年仁明天皇卽天子位、是年十一月、新嘗廣讌、授從五位下、承和元年、拜備中守、罷秩之後、爲參

○貞觀三年正月、正月の二字諸本になし
○四年四月十二日、此七字亦諸本なし
○良相上表、四年十二月辛酉紀に見ゆ參看すべし
○身爲進士、身は諸本に據て補ふ
○異跡、跡は原本路に作る諸本に據て改む
○隨年足符出多少賜之、足は原本數に作る諸本に據て改む、年足とは祿令に凡皇親年十三以上皆給時服料とある十三歲に達するを云延喜正親式に凡諸王滿年十二云々とあるも同じ十二年二月壬寅紀を參看すべし

河守、久而除大藏少輔、十四年、叙從五位上、出爲安藝守、明年遷伊豫守、仁壽三年春、加正五位下、爲大和守、齊衡二年、爲左京權大夫、大和守如故、天安元年九月、丁母憂解官、服闋之後、二年十一月、拜民部大輔、貞觀三年正月、遷伊豫守、不之任、四年四月十二日下詔、令參議已上各論時政之是非、詳世俗之得失、右大臣藤原朝臣良相上表言、伏惟皇帝陛下、德高雲霓、明並日月、猶開廣詢之路、遂降不諱之綸、右大辨南淵朝臣年名、身爲進士、職經內外、稍通治體、既居樞要、山城守紀朝臣今守、所歷之州、風聲必暢、論之良吏、自爲先鳴、伊豫守豐前王、才學早彰、資歷淹久、無他異跡、足謂老成、大宰大貳藤原朝臣冬緒、聲名粗達、器識漸優、吏幹之稱、仍有可愛、大和守弘宗王、頗有治名、多宰州縣、談諸經國、非無其才、然則令件等人同上意見、詔曰可、先是諸王自二世至四世、賜夏冬衣服、不限人數、隨年足符出多少賜之、或至五六百人、是時載簿進官者四百餘人、豐前上疏曰、諸王給服、人數不定、徒費帑藏、何無紀極、望請以當時所在爲定數、隨闕補之、不聽輙過、從之、六年授從四位上、卒於官、時年六十

一、豐前爲性簡傲、言語夸浪、接物之道、爲人所避、尋常直於侍從局、品藻人物、以爲己任、談咲消日、放縱不拘、諸王五世以下帶五位者、法不聽著紫、豐前爲五世五位著紫、爲有司所糺、然後著緋、是日夜、有星出東井入軫、色白、長二丈餘、○三日乙卯、大原野祭、○四日丙辰、祈年祭並如常、○五日丁巳、釋奠如常、○八日庚申、春日祭如常、○九日辛酉、新鑄銅印一面賜女官厨、○十日壬戌、詔曰、皇乾播德、亭毒之功自高、哲匠裁規、撫臨之道斯廣、是知致庶績於和平、唯資惠愛、驅黎元於富壽、實在憂勞、朕以庸虛、恭承緒業、位雖尊於宸極、化未洽於域中、所以宵衣惕慮、旰食兢懷、欲使四海無凶札之嗟、八荒絕烽燧之警、然素情弗顯、玄感猶睽、孤負靈心、招以變異、去冬大宰府言上、在肥後國阿蘇郡神靈池、經淫雨而無增、在亢陽而不減、而今無故沸騰、衍溢他縣、龜筮所告、兵疫爲凶、朕之中腸、氷谷寃切、夫脩德嫁禍、既有前聞、行善攘殃、非無徃鑒、宜每寺薫修、每社走幣、賴茲冥祐、防彼咎徵、又鰥寡孤獨不能自存者、量加優賑、使得支濟、又天安二年以徃租稅未納、皆勿譴責、一從蠲除、所冀至精廣被、消霧露

○夸浪、夸誕孟浪なり大言するを云
○品藻、品評するを云漢書揚雄傳に見ゆ
○豐前爲五世五位著紫、此九字諸本に據て補ふ
○東井云云、東井並軫は廿八宿の一にて東井は北極星の南西にあり井とも云軫は北極星の東南にあり
○皇乾、後漢書黄瓊傳に賴皇乾眷命炎德復輝とあり皇天と云に同じ
○哲匠、事理に明なる大匠を云王維詩に謀猷歸哲匠詞賦屬文宗とあり
○黎元、庶民を云
○凶札、周禮司關に國凶札則無關門之征注に凶謂凶年饑荒札謂疫癘死亡とあり
○烽燧、烽火に同じ漢書賈誼傳に見ゆ
○中腸、心中の意陸機の詩に沈思鍾中腸とあり腸は、原本腹に作る諸本及類史十一に據て改む
○氷谷、已に注す
○大脩德、脩は原本備に作る閣本谷本及類史に據て改む
○徃鑒、鑒は原本監に作る尾本閣本谷本及類史に

據て改む
○走幣、走は原本奉に作る諸本及類史に據て改む下同じ
○不能自存者、諸本には者字なし
○譴責、譴は字彙に責也とあり
○疫癘、疫病を云已に注す
○佛法、法は原本佛に作る閣本尾本前本に據て改む
○寔資、祕本尾本前本寔下に是字あり
○其幣料、幣は祕本閣本尾本に據て補ふ
○以救急義倉內、義倉は賦役令義解に分富賑貧其情合義故曰義倉と見え漢土にては隋開皇五年(敏達天皇十四年)五月度支尙書長孫平の奏に依て之を始むと云、內は原本開に作る諸本に據て改む
○十三日乙丑、原本に十一日癸亥とあれど諸本には此二字缺く按に十一日とありしより後人の推して癸亥の二字を充てしなるべけれど園韓神祭は丑日にて亥日にあらず紀略には十三日乙丑園韓神祭とありて一は三の誤なり

於無形、潜衞傍通、靜風塵於未兆、布告遐邇、俾知朕意、是日、太政官頒下詔書於五畿七道曰、今稽詔書、每寺薰修、每社走幣、賴玆冥祐、防彼咎徵、又鰥寡孤獨不能自存者、量加優賑、使得支濟、又天安二年以往租稅未納、皆勿譴責、一從蠲除、夫佛法所崇、尤在誠信、神明所感、寔資潔淸、今須國司講師相齋戒、從符到日一七箇日、於國分寺及有供定額寺、令轉讀金剛般若經、讀經之間、禁斷殺生、又國內所有大小諸社、長官躬親潔齋奉幣、其幣料用正稅、又鰥寡孤獨不能自存者、以救急義倉內、國司相量給之、又天安二年以往租稅未納、載所司文簿者、感從原免、○十三日乙丑、園韓神祭如常、出雲國言、衰弊年久、黎元凋殘、疫癘數發、稼穡不登、護國安民、般若之力、攘災招福、經王之助、望請每年春秋仲月、講演仁王般若經、其布施供養、充國儲料、太政官處分、依請、○十四日丙寅、請六十僧於東宮內殿、限以五日、轉讀大般若經、是日、勅遣從五位下行木工權助和氣朝臣彝範、奉幣於豐前國八幡大菩薩、告文云、天皇我詔旨坐、掛畏岐八幡大菩薩乃大前爾申賜倍止申久、大菩薩乃護賜爾依天、天下無事、

故に同書に據て一を三とし癸亥を乙丑と改む
○出雲國言云々、此事類史百七十七に見え七年二月十三日乙丑とありてよく合へり
○左右爾念行、以下思食天に至る廿八字諸本闕く
○奉出古止、諸本古止の二字なし
○良辰乎、乎は諸本及類史十一になし
○護賜比、比は類史に據て補ふ
○常磐堅磐爾、以下九字諸本に闕く
○山階山陵、天智天皇
○沸溢利、上文に據るに利上に恐くは太を脱す
○忠心乎、乎は諸本及類

然乎去年與利、天變地灾今月萬天爾不止、加以、肥後國阿蘇郡爾在留神靈池無故沸溢太利、乍驚卜求禮波、兵疫乃事可有止申利、自此之外爾毛、物恠亦多、依此天、左右爾念行爾、掛畏岐大菩薩乃護賜牟爾依天、無事久可有止思食天、去正月爾差使天、大幣乎奉出无止志岐、然乎忽爾依有穢天、奉出古止不得奈利爾岐、今吉日良辰乎擇定天、木工權助從五位下和氣朝臣彝範乎差使天、禮代乃大幣乎令捧持天、奉出須此狀乎聞食天、天下平介久、群臣忠心乎懷岐、上下有序利、兵疫不發之天、寶祚無動久護賜比、常磐堅磐爾矜幸倍賜倍止、恐美恐美毛申賜波久止申、○十七日己巳、勅遣參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人、從四位下行中務大輔忠範王等、向山階山陵、告以神靈池水沸騰、預防灾害、告文云、天皇我詔旨爾坐、掛畏岐山階乃御陵爾申賜倍止申久、自去年至于今月、天變地灾不止、加以、肥後國阿蘇郡爾在流神靈池無故沸溢利、乍驚卜求禮波、兵疫乃事有可止申利、自此之外爾毛物恠亦多、依此天左右爾念行爾、掛畏岐御陵乃護賜牟爾依天、無事久可有止思食天、去正月爾差使天奉出无止志岐、然乎忽爾依有穢天、奉出古止不得奈利爾岐、今吉日良辰

乎擇定天、參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人、從四位下行中務大輔忠範王等乎差使天、奉出須此狀乎聞食天、天下平氣久、群臣忠心乎懷岐、上下有序利、兵疫不發(オコラズシテ)之天、寶祚无動久護賜比、常磐堅磐爾矜幸(メグミサキハヘ)倍賜倍止、恐美恐美毛申賜波久止申。參議正四位下行右衞門督兼讚岐守藤原朝臣良繩、從五位上行兵部少輔源朝臣直等向柏原山陵、從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗、從五位上行民部少輔源朝臣穎等、向嵯峨山陵、大納言正三位兼行民部卿太皇太后宮大夫伴宿禰善男、散位從四位上茂世王等、向深草山陵、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名、從四位上行侍從利基王等、向田邑山陵、告文一同山階山陵。○廿七日己卯、豐前國從五位上辛國(カラクニ)息長(オキナガ)比咩(ヒメノ)神、忍骨(オシホネノ)神、並授從四位上、阿波國正五位下天石門和氣八倉比咩(イハトワケヤクラヒメノ)神從四位下、和泉國從五位下泉穴師(イヅミアナシ)神從五位上、出羽國正六位上城輪(キノワノ)神、高泉神、並從五位下。○三月壬午朔、二日癸未、制、七道貢蘇違期、國司五位已上奪位祿、六位已下折取公廨五分之一、自今以後、永爲恒例。○三日甲申、天皇潔齋

史に據て補ふ
○常磐堅磐、諸本堅磐常磐に作る
○行兵部少輔(源直)、行は原本守に作る類史十一に據て改む
○柏原山陵、柏は原本栢に作る諸本に據て改む
○行民部少輔(源穎)、行は原本守に作る類史に據て改む
○深草山陵、仁明天皇
○田邑山陵、文德天皇
○辛國息長比咩神、神名式豐前國田川郡辛國息長大姫大目命神社とあり
○忍骨神、同式同郡忍骨命神社、同郡香春町
○天石門和氣八倉比咩神、續後紀(二一〇〇頁)に見ゆ
○泉穴師神、同上(二一四〇頁)に見ゆ
○城輪神高泉神、並に式外、神祇志に二社今並在飽海郡、城輪社在宮形村、高泉社在北境村とあり
(三月)貢蘇、蘇は牛乳を精煎したるものなり民部式下に諸國貢蘇の年番量數詳に見え其期限は當年十一月進了但出雲十二月爲限其取得乳者肥牛日大八合瘦牛減半作蘇

〇之法乳大一斗煎得蘇大一升とあり、蘇は原本賦に作る諸本及類史（八十四）要略に據て改む
〇名不正云云、論語子路篇に名不正則言不順言不順則事不成とあり
〇名以召實、莊子逍遙遊篇に名者實之賓也とあり
〇定訟之司、抄職官部に刑部省（宇多倍多々須都加佐）とあり
〇守達神、守は原本宇に作る式及元年十二月乙未紀に據て改む

奉燈如常、〇七日戊子、先是刑部省奏言、承前之例、訓刑部省、號訴訟之司、夫名不正、則事不從、又名以召實、事以放象、何以判斷之司、可謂訴訟之司、望請、訓刑部省三字、將號判法之司、至是有勅云、宜號定訟之司、〇八日己丑、雷雨、〇九日庚寅、以散位從五位上和氣朝臣高作爲圖書頭、從五位上橘朝臣三夏爲治部少輔、從五位下行安房守紀朝臣吉繼爲玄蕃頭、散位從五位下上毛野朝臣綱主爲鼓吹正、從五位上紀朝臣有常爲刑部權大輔、從五位下藤原朝臣秋緒爲少輔、從五位下行明法博士宍人朝臣永繼爲大判事、明法博士如故、散位從五位下當麻眞人安方爲造酒正、從五位下齋部宿禰木上爲勘解由次官、丹波權守從五位下笠朝臣弘興爲守、參議從四位下守右大辨大枝朝臣音人爲播磨權守、右大辨如故、從五位下守主税頭兼行遠江權介家原宿禰縄雄爲備後介、主税頭如故、正五位下行左馬頭清原眞人秋雄爲左近衛權少將、右馬頭從五位上藤原朝臣秀道爲左馬頭、從五位上守左近衛權少將在原朝臣業平爲右馬頭、〇十二日癸巳、授信濃國從五位上守達神從

○日功、一日の賃錢なり
○長年錢、嘉祥元年九月紀（續後紀三五一頁）令鑄新錢云々文曰長年大寶一以當舊之十とあり
○天石戸開神、東洞院花山第宗像社内にあり花山院家記に天岩戸開神大石也と見ゆ
○筑前國水田卌町、卌は原本卅に作る祕本閣本尾本等に據て改む
○馬背神、二年二月丙戌紀に見ゆ背は原本皆に作る祕本谷本に據て改む
○慧運、釋書十六に東寺實慧之徒也承和五年共圓仁師同舟入唐十四年歸爲安祥寺第一世貞觀十三年九月卒とあり、慧は閣本及要略惠に作る
○一據舊例得度者受戒、三代格二に太政官符應一據舊例得度者受戒事として之を載す
○曰撿舊例、曰は原本日に作れるを改む
○度緣、度牒なり
○每年三月、月は原本日に作る諸本及格に據て改む
○夾名、夾は原本交に作る諸本及格に據て改む

四位下。○十三日甲午。制。諸司諸衛府仕丁衛士日功。收長年錢廿文。○十九日庚子。周防守從五位下安倍朝臣宗行爲兼鑄錢長官。○廿一日壬寅。授太政大臣東京第无位天石戸開神從三位。相摸國鎌倉郡人太皇太后宮少屬從八位上上村主眞野。武散位從八位上上村主秋貞等。改本居貫河內國大縣郡。○廿二日癸卯。地震。以筑前國水田卌町。充對馬嶋上縣下縣兩郡司統領職田。○廿三日甲辰。授信濃國從五位下馬背神從四位下。○廿五日丙午。少僧都法眼和上位慧運申牒。請一據舊例得度者受戒。曰。撿舊例。凡有得度者。先與度緣。次令入寺。就中年分度者經二箇年。臨時度者經三箇年。令練沙彌之行。然後初聽受戒。爾乃每年三月以前。僧綱放牒諸寺。令進當年可受戒者夾名。會集綱所。治部玄蕃共勘名籍。兼試法華最勝威儀三部經。卽簡定年六十已下。廿五已上。學得前件三部經者。更牒本寺。廿一日令修悔過。四月十五日以前。定其受戒日。請集傳戒大少十師於東大寺戒壇院。依教法問十三難幷十遮。然後令登壇受戒。卽受戒畢後。安置戒壇院。差教授師。夏月之間。

○威儀三部經、威儀は大比丘三千威儀經なり
○廿五、五は格に據て補ふ
○廿一日、格に三箇七日に作る
○傳戒大少十師、戒を授くる十人の師卽ち下文の三師七證なり
○十三難幷十遮、小乘律の法に具足戒を授くるに此十三難さ十遮さを以て其器を擇ぶなり遮は遮止して受戒せしめざるを云ひ難は自性惡にして其器にあらざるを云十三難は犯比丘尼殺父殺母破僧等其數十三あり十遮は自己の名を知らざるもの和尙の名を知らざるもの年二十に滿たざるもの三衣を具せざるもの等其數十あり故に云
○敎授師、弟子に威儀作法等を敎授する比丘の稱受戒の時三師の一さして必ず其人を定む五種阿闍梨の一なり
○夏月、原本百日に作る諸本及格に據て改む
○二百五十戒、比丘の具足戒數なり分て八段さす一に四波羅夷以下八に六滅諍に至る

令修學比丘二百五十戒三千威儀、誓護國家、或在各本寺、請依止師、細學律相、同以誓護、其年不滿二十、若七十已上、幷國家不放之人、債負之人、黃門奴婢之類、非是戒器、故佛不聽受戒、頃年之間、非唯忘却舊例、乘復違背佛教、或臨受戒日、纔下官符、新剃頭髮、初著袈裟、冠幘之痕、頭額猶存、或十四已下、年少之人、空有貪名之外謀、曾無慕道之中誠、皆是未練沙彌之行、況於懺悔之事乎、加以、結番之場、競上下而鬪亂、登壇之次、爭先後而拏攫、遂則罵詈有司、陵轢十師、濫惡之甚、不可勝計、夫受得表無表戒、名曰受戒、於三師七證前、慇懃至誠求禮、乞戒之下、發得防非止惡之功能、名曰表戒、羯磨之下、發得非色非心成佛殊勝之功能、名曰无表戒、既無至誠禮敬之心、安得表戒、表戒未得、何得無表戒、既不得表戒無表戒、何名得戒、登壇已後、不學律相、故不知持犯、不知持犯、故不修安居、何稱比丘乎、望請、惣據舊例、乘遵佛教、然則緇徒感激、濫惡自止、戒壇清靜、佛法興隆、國土之豐樂不期而來、內外之災障不攘而去、太政官處分、依請、○廿六日丁未、授甲斐國從五位下大井俣神正五位下、○廿七

日戊申、有勅、大捜於宮中及諸司東西京。○廿八日己酉、以從五位上行治部少輔橘朝臣三夏爲刑部大輔、左京權亮從五位下廣階宿禰貞雄爲亮、散位從五位下紀朝臣當仁爲權亮、從五位上守刑部大輔滋野朝臣安成爲美濃權守、外從五位下行主計助御春朝臣豐宗爲權介、左近衞權少將淸原眞人秋雄爲阿波守、少將如故、參議左近衞中將從四位下藤原朝臣基經爲伊豫守、中將如故、從四位下行大學博士大春日朝臣雄繼爲權守、博士如故。近江國言、伊香郡人石作部廣繼女、生年十五、始以出嫁、卅七矣、其夫常守墳墓、哭不斷聲、專期同穴、無心再嫁、量其意操、可謂節婦、勅、宜叙二階免戶內租、卽表門閭、以相摸國大住愛甲兩郡空閑地四百町內、見開田十五町、充淳和院。○廿九日庚戌晦、大祓於建禮門前。○夏四月辛亥朔、天皇御前殿、宴于侍臣、賜祿各有差。是日勅木工權頭從五位上有宗宿禰益門、頭從五位上紀朝臣春枝、權助從五位下和氣朝臣彝範、助從五位下御春朝臣內雄等、令得往還近江國、

○二日壬子、元興寺僧傳燈法師位賢和奏言、久住近江國野洲郡奧嶋、

○三千威儀、具足戒の二百五十に對して其他の細行を云三千は數多きを云

○在各本寺、原本在各を各存に作る格に據て改む

○依止師、比丘新に度せられて後先輩の比丘に依止（力德ある所に依賴止住すること）して其監督を受くるを依止師と云

○國家不放之人、釋書廿四に朝廷不許之人とあり放は原本敬に作る諸本及格に據て改む

○債負之人、負債ある人

○黃門、五種不男と稱し完全なる男性を有せざるもの

○臨受戒日、受は秘本閣本尾本及格に據て補ふ

○陵躒、侵陵するを云

○表無表戒、受戒者戒壇に登て身口意の三業を發表して正しく戒法を受得するを表戒といひ此時受者の體內に發得して三業に表顯せざる戒體を無表戒と云

○三師七證、具足戒を受くるに要する三師卽ち戒和尙羯磨師敎授師及七人の證明師を云

○羯磨、授戒懺悔等の業事を作す一種の宣告式を

云玄應音義に羯磨此譯云二作法辨事一と見ゆ
○殊勝之功能、之は諸本殊上にあり是なるが如し
○既不得表戒、既は諸本及格に據て補ふ
○律相、戒律の法相なり
○清靜、靜は原本淨に作る諸本及格に據て改む
○大井俣神、五年十二月丁卯紀に見ゆ
○大搜、大は諸本に據て補ふ
○期同穴、毛詩王風大車章に穀則異室死則同レ穴とあり
○大住愛甲兩郡、大住は今中郡に入り愛甲は舊名存す
○(四月)二令得往還近江國一、關市令に凡欲レ度レ關者皆經二本部一(本貫ノ本司)請二過所一官司撿勘然後判給とあり關を越て外國に出入するには制限あり之に據らずして往還することを聽されしなり
○奥嶋、蒲生郡に屬す野洲は其隣郡なり
○嶋神、神名式に近江國蒲生郡奥津嶋神社(名神大)とある是なり
○蓋纒、煩惱の異名、蓋は心性を蓋ふをいひ纒は

聊構二堂舍一、嶋神夢中告曰、雖レ云二神靈一、未レ脫二蓋纒一、願以二佛力一、將下增二威勢一、擁二護國家一、安中存鄕邑上、望請、爲二神宮寺一、叶二神明願一、詔許レ之、○三日癸丑、殞レ霜殺レ草、○四日甲寅、殞レ霜不レ止、廣瀨龍田祭如レ常、○五日乙卯、是日、內裏并諸司諸所延二名僧一人一、受二十善戒一、讀二般若心經一、僧俗所レ讀經卷數、各別錄奉レ進、去年天下患二咳逆病一、今年內外疫氣有レ萌、故轉レ經攘レ之、○七日丁巳、殞レ霜、式部兵部兩省奏二成選擬階簿一、天皇不レ御二前殿一、大臣奉レ勅、令三各還レ省行二之、○八日戊午、殞レ霜、灌二佛於內殿一、如二常儀一、○十日庚申、平野祭、○十一日辛酉、梅宮祭並如レ常、○十二日壬戌、地震、○十四日甲子、殞レ霜、○十五日乙丑、授二伊勢國正五位上稻生神從四位下、從五位上勳七等椿神正五位下一、公卿就二太政官曹司廳一、賜二文武官成選位記一、是日、制、興福寺維摩會立義得第僧、敍二滿位階一、立爲二恒例一、常住寺十禪師傳燈法師位延庭奏言、於二山城國葛野郡北山一、奉レ爲二國家一、建二立道場一、名曰二興隆寺一、四履六町、安二置千手觀音像一體、梵王帝釋像各一體、四王像四體一、貞觀二年、詔令下木工寮修二造堂舍一、春演二說最勝王經一、秋吼講妙法蓮華經、安居之中、轉二讀

まとひて自由ならしめざるを云
○殺草、草は秘本閣本尾本に據て補ふ
○是日、山崎校本に類史無二是日二字一疑上有二缺文一と云
○諸所、諸は原本綱に作る諸本及紀略に據て改む
○十善戒、十善は十惡の對にて不殺生以下の十戒を云ふ
○不御前殿、不は諸本に據て補ふ
○梅宮祭並如常、並は平野祭梅宮祭にかけて云り
○稻生神、生は原本葉に作る諸本に據て改む稻生神は神名式に伊勢國伊奈冨神社とあり今河藝郡稻生村にあり
○椿神、同式鈴鹿郡椿大神社、同郡椿村
○立義、立は類史百七十七に竪に作る
○延庭、庭は原本頭注に庭字誤寫作レ廉今以二類聚國史一正レ之と云尾本延上に眞の字あり
○興隆寺、山城志に在二葛野郡大北山村一とあり
○四王、四天王なり
○得度除帳田、口分田の受領者出家得度したるに

大般若經、誓護國家、深期永代、望請、爲御願寺、修戒律眞言兩宗、但不經僧綱幷講師之攝、從之、以從五位下行越前權介文室朝臣能雄、爲能登守、從五位下行豐後介菅野朝臣宗範爲薩摩守、是日、以傳燈大法師位眞延爲内供奉十禪師、○十七日丁卯、雷雨、諸衞陣於殿庭、勅、奉充諸明神神田、松尾神五段、賀茂御祖神五段、別雷神五段、稻荷神三段、平野神五段、大原野神五段、並以山城國愛宕、紀伊、乙訓、葛野等郡得度除帳田充之、遣從五位下行木工權助和氣朝臣彝範、向石淸水（イハシミヅ）八幡大菩薩宮、奉楯矛幷御鞍、告文云、天皇我詔旨度、掛畏岐石淸水爾坐八幡大菩薩乃廣前爾申給止申久、新宮構造天波、楯桙及種々神財可奉出、而神財波且奉出已止畢太利、楯桙幷御鞍等乎奈毛、怠利介留、此乎令造餝天、禮代大幣帛乎令捧持天、使木工權助從五位下和氣朝臣彝範（ツネノリ）差天奉出給布、但御鞍波三具奈毛奉出須倍加利介留、然乎申傳太留人奈毛誤天、二具乎令造天介留、因天一具乎波大菩薩爾奉利、一具乎波卜定天大帶命（オホタラシノミコト）爾奉留、但比咩大神乃御料波、今使造天、後爾吉日良辰（コキヒノヨキトキ）爾奉出牟、此狀乎平介久聞食天、天皇朝庭乎寶

因り公に還したる田を云
〇新宮搆造天波、波は原本岐に作る諸本及類史五に據て改む石淸水の宮は貞觀元年八月廿五日行敎に託宣あり朝廷に奏請して造れるものなれば新宮を搆造ると云り
〇令造餝、令は前本谷本及類史今に作る
〇大帶命爾、爾は類史に據て補ふ
〇使造天、造は類史作に作る
〇此狀乎平介久、類史平下に安字あり
〇是受、受は愛の訛なるべし
〇負重、說苑雜本篇に負重道遠者不擇地而休とあり任重きを云
〇天鑒、鑒は原本監に作る諸本に據て改む
〇默識、論語述而篇に默而識之とあり
〇匪才、諸本非才に作る
〇喉舌、納言を云
〇爪牙、大將を云已に注す
〇覆餗、易鼎卦に鼎折足覆公餗とあり
〇瞰門、漢書揚雄傳に高明之家鬼瞰其室とあるに據れり

位無動久、堅石常石爾、夜守日守爾護幸倍賜比、天下國家無事久護助給倍止、恐美恐美毛申賜波久止申。參議從四位下守右大辨兼行播磨權守大枝朝臣音人向平野社、內藏頭從五位上藤原朝臣安方向太政大臣東京第社、並奉楯桙御鞍等、告文同石淸水。〇廿日庚午、從三位守權大納言兼右近衛大將藤原朝臣氏宗上表、請解大將職曰、臣前年抗表、請解左衛門督、誠以、器與用違、官曠職闕、非敢微軀是受、實將負重致憂也、而天鑒曲降、更加殊奬、武職文官還襲時、中謝臣才非默識、性是朱愚、叨蒙不測之恩、驟歷匪才之任、今復位當喉舌、寄忝爪牙、顧覆餗而貽憂、想瞰門而增懼、縱只鞠躬槐庭之中、慙惶不暇、何况兼寵蘭錡之上、志力那堪、加以、桑楡陰短、犬馬齒衰、嬰羸病之暗來、恐警巡之多闕、伏願、皇情下照、丹款獲申、罷擁旄於八屯、專粉骨於一職、無勝兢悚戰汗之至、謹奉表以聞、優詔不許。〇廿二日壬申、諸衛警固、緣賀茂祭也。〇廿三日癸酉、賀茂祭如常儀。〇廿四日甲戌、諸衛解嚴。〇廿五日乙亥、授大和國無位田中神從五位下。是日、式部省奏諸國銓擬郡司擬文、天皇不御前殿、右大臣奉

勅、於仗下令少輔從五位上平朝臣實雄開簿讀之、大臣點定覆奏、○廿七日丁丑、請六十僧於內殿、三箇日間、轉讀大般若經、○五月辛巳朔、二日壬午、雷雨、諸衞陣於殿庭、○五日乙酉、停端午之節、○八日戊子、授美濃國從五位下伊富岐神從四位下、遠江國正六位上淡海石井神從五位下、以出羽國觀音寺預之定額、是日、勅充對馬嶋分寺三綱供、其料用三寶布施大豆百斛之息利、○十日庚寅、先是源永、藤原興蔭、直世道主、藤原連春藤、秋宗、春行、安繼、俊成、恒雄、眞藤、利貞、吉雄等十四人、浮宕於出雲國、拒捍國郡、陵轢百姓、是日、下知國司、差加防援、早令入京、○十三日癸巳、延僧四口於神泉苑、讀般若心經、又僧六口、七條大路衢、分配朱雀道東西、朝夕二時、讀般若心經、夜令佐比寺僧惠照、修疫神祭、以防灾疫、預仰左右京職、令東西九箇條男女、人別輸一錢、以充僧布施供養、欲令京邑人民賴功德免天行也、右京職言、右京人伴健岑、承和九年七月廿八日謀反、配流隱岐國、而彼國稱健岑會赦、放免入京、勅、宜殊從寬宥、遷配出雲國、差充防援遞送前所、○十五日乙未、公卿就太政官曹

○寵蘭錡之上、蘭錡は文選西京賦に武庫禁兵設在蘭錡、注に兵架也陳列於甲第之門、若今敬門、善曰受他兵曰蘭受弩曰錡とあり武臣として寵を受くるを云ふ、錡は原本綺に作り諸本錡に作る西京賦に據て改む
○曦來、來は原本昧に作る諸本に據て改む
○麾旄施於八屯、旄は旄牛の尾を以て飾れる旗を云ふ指揮に用ふるなり八屯は八營に同じ文選西京賦に衞尉八屯警夜巡晝とあり、旄は原本衞に作る閣本前本谷本徒本に據て改む
○田中神、式外、大和志に添下郡田中神祠田中村今稱甲斐明神とあり
（五月）陣於殿庭、陣は原本陳に作る諸本に據て改む
○伊富岐神、仁壽二年十二月紀（文德紀六七頁）に見ゆ
○淡海石井神、式外、所在未詳
○觀音寺、地理志料に蓋在最上郡觀音寺村乎とあり
○對馬嶋分寺、下縣郡國

府の附近（今の嚴原町）にあり今國分寺と稱す
○三綱供、上座寺主都維那の供料なり
○拒捍國郡陵轢百姓、拒は諸本に據て補ふ陵は諸本凌に作る
○防援、援は原本授に作る獄令に據て改む下同じ
○般若心經、心は諸本に據て補ふ
○大路衞、衞は原本行に作る諸本及紀略に據て改む
○佐比寺、山城國紀伊郡佐比里にあり後廢絶す
○東西九箇條男女、東西兩京共に一條より九條に至る故に九箇條と云
○天行、已に注す
○彼國稱、稱恐くは偁の譌
○差充防援、獄令に凡流移人云々遞差防援專使部領遞送至配所とあり
○齋宮儀頭、儀は原本祭に作る諸本に據て改む
○木上、淀本木工に作る
○以本職起之、職は尾本官に作り閣本前本谷本等識字とす
○置諸國介掾、此格又三代格五に出づ
○土左、左は原本佐に作

司廳、任諸國郡司、策命如常、○十六日丙申、以散位從五位下藤原朝臣高範、從五位下藤原朝臣千乘、並爲侍從、刑部少輔從五位下藤原朝臣秋緒爲治部少輔、下野守從五位下橘朝臣忠宗爲刑部少輔、從五位上行伊勢權守藤原朝臣宜爲齋宮權頭、伊勢權守如故、散位從五位下大春日朝臣澤主爲勘解由次官、從四位上行侍從利基王爲下野權守、勘解由次官從五位下齋部宿禰木上爲越前權介、從五位下行主稅頭乘備後介家原宿禰繩雄爲加賀權介、主稅頭如故、外從五位下行安房守賀陽朝臣宗成爲備後介、從四位上基兄王爲安藝守、基兄今年正月拜安藝守、丁母憂去職、詔以本職起之、授陸奧國俘囚外從八位下伴部建麻呂外從五位下勳五等、○是日、置諸國介掾、甲斐、能登、丹後、石見、周防、長門、土左、日向八國、並今置介、飛驒一國今置掾、先是三月九日、太政大臣已下、參議已上奏言、謹案令條、上國有介、中國無介、下國無掾、夫雖分官置職、實有前規、而隨時制宜、豈闕當代、今件等國、或前爲上國、未備介職、或國務稍繁、官員猶少、或長官有故、主典執印、論之政途、事非穩便、伏

ろ諸本に據て改む
〇官員猶少、官は諸本及格に據て補ふ
〇下國又置掾、原本國下に同字あり諸本及格に據て削る
〇謹錄事狀、謹は意を以て補ふ
〇堅眞音神、元年五月辛巳紀に見ゆ原本音字なし諸本に據て補ふ
〇道祖史永主、錄右京諸蕃道祖史百濟國王孫許里公之後也とあり
〇賀紫久利神、文德紀仁壽元年六月戊午紀に見ゆ
〇近士、原本沙門に作る秘本閣本尾本等に據て改む近士は優婆塞なり
〇賢基、後延安と改む多武峰略記に要記云建立之後年序積堂塔獨存香華鎭怠無講經修營之人爲樵牧葬埋之地爰有一人童自成比丘名曰賢基於是喟然歎曰靈應勝地何無住者吾住此峰再興寺塔云々貞觀五年始申右大臣良相蒙官符同六年勅定四至同七年勅賜供料田戶同年始賜撿挍官符とあり
〇多武峰墓邊寺、多武峰は藤原鎌足の墓地にて妙

請、甲斐周防新備介職、自餘中國同置介、下國又置掾、以適變通、但至于安房、若狹、佐渡、大隅、薩摩、志摩等國、雖有中下之名、不足備介掾之職、仍不入此例、臣等商量、具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、詔從之、〇十七日丁酉、詔以紀伊國從五位上堅眞音神列於官社、上野國言、加舉權任國司公廨料稻七萬束、從之、〇廿日庚子、在京人造酒令史正六位上道祖史永主、散位大初位下道祖史高直等二人、賜姓惟道宿禰、其先出自百濟國人王孫許里也、〇廿四日甲辰、遣諸衞府官人已下、大搜於東西京、先是左衞門獄中著鈦囚六人、穿獄垣逃去、仍以搜索、〇廿五日乙巳、大搜京邑、授薩摩國從五位上賀紫久利神正五位下、讚岐國三野郡置主政一員、是日制、五畿七道諸神社祝部、停補白丁、以八位已上及年六十已上人充之、先是置者、令終其身、自今以後、立爲恒例、以散位從五位上良岑朝臣長松爲大和權守、〇廿六日丙午、勅、近士賢基、修行年久、居住多武峯墓邊寺、宜令大和國、以正稅稻、日給米一升二合、充其供料、兼令賢基、率沙彌等、撿彼墓四至之內、〇廿七日丁未、下知大和國、僧

樂寺ありしが後廢れて庶人墳墓の地となる其墓地に設けられし寺なり
○陣於殿前、陣は原本陳に作る諸本に據て改む
○是日、日字恐くは月の誤なるべし

高貞、沙彌勝勢等、不ㇾ宜ㇾ令ㇾ居二止部內一、其由未ㇾ詳、○廿九日己酉晦、大電雷雨、諸衞陣二於殿前一、是日淫霖猶未ㇾ止、

○第十、原本十下に終字あり諸本に據て削る

日本三代實錄卷第十

日本三代實錄卷第十一

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

起貞觀七年六月盡十二月

六月庚戌朔、日有蝕之、授和泉國從五位上泉穴師神正五位下、○四日癸丑、授後院隼神從五位上、○五日甲寅、從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗上疏言、氏宗忝以謏昧、備列槐棘、負荷之憂、寤寐無息、日者降詔、令進意見、公卿宰相、儒官賢士、毎各輸忠盡誠、陳上深謀遠慮、爰下公卿、更相評議、日月空過、遞爲矛楯、却恐評議之上、更有後議之勞、氏宗無計愚情之不及、誤評一兩人奏狀、再三悚愧、遂無所裨、今望、諸臣所進意見奏狀中、先擇要切、且以施行、皆是抄出古典、無言非道、稍隨時宜、遂盡其志、謹勒管見、俯待取捨、○八日丁巳、因幡國無位阿太賀都建御熊神、大和佐美神、並授從五位下、○十日己未、禁京畿及近江國賣買之輩擇弃惡錢、曰、弘仁十一年六月九日、下知大藏省曰、鑄錢司所

【貞觀七年】泉穴師神、上文二月己卯紀に見ゆ
○後院隼神、二年六月甲午紀(八七頁)に據るに此上に從五位下の四字あるべきなり
○守權大納言(氏宗)、守は閣本尾本谷本及類史八十に據て補ふ
○寤寐、原本倒置す閣本尾本谷本及類史に據て改む
○後議、類史復議に作る
○奏狀、原本答狀に作る類史に據て改む
○再三悚愧、三は類史に據て補ふ
○諸臣、諸は原本請に作る諸本及類史に據て改む
○俯待、俯は類史伏に作る
○阿太賀都建御熊神、神名式因幡國高草郡阿太賀都健御熊命神社、今氣高郡末恒村御熊
○大和佐美神、同式同郡大和佐美命神社、今氣高郡神戸村上妙見、大は諸

本大に作る

○牓于路頭、牓は原本牒に作る宮本に據て改む字書に牓也木作榜木片也とあり

○東子女王卒、嘉祥三年七月甲申紀に東子女王爲女御とあり文德天皇の女御

○兵主神、四年正月己丑紀に見ゆ

○御靈會、五年五月壬午紀を參看すべし

○六世三坂王、河嶋王子より三坂王に至る世系は詳ならず

○河嶋王子、紀に川嶋皇子と見ゆ王は皇の誤か姓氏錄には左京皇別淡海朝臣河嶋王之後也と見ゆ、黑川校本王下に之字あり

○天津石門別稚姬神、五年二月丁未紀に見ゆ

○坂井王賜姓、四年五月己丑紀に見ゆ重出恐くは衍なるべし

進新錢、雖文字頗不明、而不失體勢、亦有小疵、行用無妨、宜猶撿納、而閭愚者不悟此旨、專任已心、擇弃不受、或稱文字不全、計十嫌二三、或號輪郭有缺、擧百欠八九、是以要升米者、飢口難御、買屯綿者、寒身不暖、宜牓于路頭、嚴加禁止、若有乖違、隨即決笞、從四位下東子女王卒、○十一日庚申、月次幷神今食祭、天皇不御神嘉殿、遣親王公卿奉祭如常、○十四日癸亥、授近江國正五位下勳八等兵主神從四位上、是日、禁京畿七道諸人寄事御靈會、私聚徒衆、走馬騎射、小兒聚戲、不在制限、左京職言、天長年中、於八條二坊、造立七間板屋一宇、以爲乞人所居、而乞人之輩、別處停留、無居止、頃年駈役囚人、隨便寄住、去年以來、無人居宿、加之毎遇風雨、逾增腐損、欲加修理、非無煩費、望請、除弃以脫職累、太政官處分依請、○十六日乙丑、大風暴雨、壞廬舍、折樹木、建禮門扉二枚倒仆、左京人六世無位三坂王賜姓淡海眞人、河嶋王子裔孫也、○廿一日庚午、遲明、月色正黃、有赤雲覆之、○廿二日辛未、山城國從五位上天津石門別稚姬神列於官社、○廿三日壬申、左京人正六位上坂井王賜姓清

○礒城皇子、天武天皇々子、忍壁親王同母弟
○正三位行(融)、行は諸本及類史七十三に據て補ふ
○從四位上行左兵衞督(行平)、原本行字なく左を右に作る類史及六年三月甲午紀に據て補ひ改む
○左中辨(家宗)、左は原本右に作る諸本及類史に據て改む
○正四位下行右兵衞督(勤)、行は原本守に作る八年正月庚寅紀に據て改む

春眞人、礒城皇子之裔孫也、○廿六日乙亥、任左右相撲司、正三位行中納言兼陸奥出羽按察使源朝臣融、參議正四位下行左衞門督源朝臣多、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名、參議從四位下守右大辨兼播磨權守大枝朝臣音人、參議左近衞中將從四位下兼行伊豫守藤原朝臣基經、從四位上行左兵衞督兼備前權守在原朝臣行平、正五位下守左中辨兼行太皇太后宮亮藤原朝臣家宗、左近衞少將正五位下兼行備中權守源朝臣舒、從五位上行兵部少輔源朝臣直、左馬頭從五位上藤原朝臣秀道、木工頭從五位上兼行左衞門權佐紀朝臣春枝、左兵衞權佐從五位下藤原朝臣直方等爲左司、參議大藏卿正四位下源朝臣生、參議正四位下行右衞門督兼讃岐守藤原朝臣良繩、參議正四位下行式部大輔兼近江守春澄朝臣善繩、參議右近衞權中將從四位下藤原朝臣常行、正四位下行右兵衞督源朝臣勤、從四位上行右近衞中將源朝臣興、右近衞少將正五位下兼行讃岐權介藤原朝臣有貞、正五位下行右衞門權佐藤原朝臣廣基、從五位上守右中辨

（七月）重子內親王薨、紹運錄に重子內親王母藤原小童子と見ゆ、重は細本朝木童に作る
○壬午、秘本閣本尾本等は午を申に作る
○調御、釋迦を云ふ元年四月紀（四二一頁）に注す
○在建立安祥寺、在は原本志に作る諸本に據て改め訓點をも改めたり、安祥寺は山城國宇治郡にあり清和天皇御母五條后御願にて仁壽年中創立貞觀元年四月年分度者三人を置かる
○今亦、閣本尾本谷本亦下に令字あり
○令得安樂、秘本以下の諸本此下六字を空白とす
○今上陛下、陛下の二字諸本に據て補ふ
○皇太后殿下、儀制令に於三后皇太子上啓稱殿下とこ見ゆ
○代々國主少君、國主は御歷代天皇少君は皇后を申せり但し國主は皇帝の貶稱、少君は諸侯夫人の稱なれば此には當らず

丹墀眞人貞岑、從五位上行右兵衞佐源朝臣至、主計頭從五位上行算博士信濃權守有宗宿禰益門、右馬頭從五位上在原朝臣業平等爲右司、○卅日己卯、大祓於朱雀門前、例也、○秋七月庚辰朔、二日辛巳、無品重子內親王薨、依內親王平生辭讓、不任緣葬諸司、輟朝三日、內親王者、仁明天皇之皇女、母從五位下藤原朝臣道長之女也、○三日壬午、信濃國諏方郡水田二段、爲彼國建御名方富命神社田、○四日癸未、廣瀨龍田祭如常、○十二日辛卯、延僧六人於建禮門、轉讀金剛般若經、○十七日丙申、大風雨、折樹發屋、○十九日戊戌、緣太皇太后御願、於安祥寺、永代相承、持念尊勝眞言、轉讀孔雀王經、及諸宗經論、其願文曰、深悲遠慮、調御用心、勝利常行、薩埵攸急、爰從去貞觀元年、在建立安祥寺、奉爲田邑天皇（文德）、毎月一七日、令一七口僧、持念尊勝眞言、至今七箇年、已又令彼寺年分栖山僧等結番、晝夜無間、轉讀諸宗經論、以奉翊聖朝、加護國家、今亦念孔雀明王、能除災難、令得安樂、一七口僧、毎月一七日夜、讀誦件經、不絕音聲、上爲諸天釋梵一切神祇、今上陛下、皇太后殿

下、及代々國主少君、深草（仁明）田邑兩陵聖靈、先考先妣二所魂魄、下爲太政大臣、王主公卿、文武庶寮、都鄙黔首、凡諸藤氏者、乃至四恩法界一切含靈、皆能隨尊卑而增福、兼現當而加榮、早破煩惱、頓證菩提、吾之此志也、雖黃泉而不朽、庶俾新々不絕、永々相承、天長地久、修此勝因者、勑下知彼寺、隨御願力、勤能薰修、莫令違失、○廿一日庚子、天皇御建禮門、觀相撲、○廿三日壬寅、天皇於南殿御簾中、觀相撲、左右司遞奏音樂、百戲偕作、○廿六日乙巳、進美作國從四位下仲山神階、加從三位、授尾張國從四位上眞清田神正四位上、信濃國正六位上名立神、備前國正六位上神根神、壹岐嶋正六位上見上神、眞賀山神等、並從五位下、○廿七日丙午、先是大宰府言、大唐商人李延孝等六十三人、駕船一艘、來著海岸、是日、勑安置鴻臚館、隨例供給、○廿九日戊申晦、先是、武德殿前有人死、仍大祓於建禮門前、以攘邪穢也、○八月己酉朔、二日庚戌、雨水、○十一日己未、內膳典膳正七位下雀部朝臣祖道、隱匿司中人死之穢、仍科上祓、○十二日庚申、左右辨官暫移直宮內省、緣天皇擬遷御太政官也、○十

○王主、漢書成帝紀注に王主王之女也翁主也王自主婚故曰王主と見ゆ
○都鄙黔首、鄙は諸本に據て補ふ黔首は史記始皇廿六年紀に更名民曰黔首と見ゆ
○隨尊卑、原本尊卑の二字を身の一字に作る諸本に據て改む
○現當、現世と當世卽ち此世と後の世とを云
○頓證菩提、頓は諸本綏に作る
○吾之此志也、此は原本吾の上にあり諸本に據て改移す
○仲山神、二年正月戊寅紀に見え仲を中に作る
○眞清田神、續後紀承和十四年十一月癸酉紀に見ゆ
○名立神、式外、所在未詳
○神根神壹岐嶋正六位上此十字は諸本に據て補ふ神根神は神名式備前國和氣郡に見え神根村神根本にあり
○見上神、同式壹岐嶋石田郡見上神社、今壹岐郡那賀村湯岳
○眞賀山神、式外、所在未詳

○鴻臚館、大宰府にあり（八月）上祓、祓に大上中下の四種あり神事違例のものに之を科す三代格一延暦二十年五月十四日の太政官符に詳なり
○巖堀、字彙に堀孔穴也とあり
○卌許丈、卌は秘本卌に作る
○詔許之、詔は諸本に據て補ふ
○秋季御讀經、季御讀經とて春秋二季春は二月秋は八月に行はるゝを例とす大極殿にて行はるゝが例なれど天皇太政官曹司廳におはしまさむとす故に此廳にて之を行はれしなり
○備後國神石云云、倭名抄國郡部に神石（加女志）奴可（奴加）甲奴（加不乃）惠蘇世良（訓なし）三谿（美多爾）三次（美與之）三上（美加三）と見ゆ
○僻居、僻は閣本尾本谷本に據て補ふ
○御本命庚午、陰陽道の說に其人の生れ年を本命と稱す淸和天皇は仁明天皇の嘉祥三年御降誕にて同年の干支は庚午なり故に云

五日癸亥、大宰府言、對馬嶋銀穴在下縣郡、自高山底、穿鑿巖、堀入卌許丈、白晝執炬而得入、頃年以來、處々崩塞、屢費人功、而去夏霖雨、穴底水湛、計其功力、非可堪、司私輙穿開、望請、准延暦十五年例、以彼嶋例、擧大豆遺百斛、并租地子穀百斛、且充其料、令堀開、詔許之、○十七日乙丑、屈六十僧於太政官曹司廳、限以三日、轉讀大般若經、天皇欲遷御、故、秋季御讀經於此修之、兼以鎭也、備後國神石、奴可、甲努、惠蘇、世良、三谿、三次、三上八郡、僻居山間、土宜採鐵、連年旱疾、黎庶弊亡、四年之間、毎年四郡、更復課役、○廿一日己巳、天皇遷自東宮、御太政官曹司廳、爲來十一月將遷御內裏也、當此之時、陰陽寮言、天皇御本命庚午、是年御絶命在乾、從東宮指內裏、直乾、故避之焉、公卿於中務省廳事、聽尋常政、少納言外記移直中務省、取於近御在所也、○廿四日壬申、太政官獻物、并進酒饌於後宮、及饗近臣、昔弘仁末、沙門玄賓於伯耆國會見郡、建立阿彌陀寺、至是勅、永免寺田十二町九段卌歩租、本國內百姓所施入也、○廿六日甲戌、民部省獻物、○廿八日丙子、授近江國從五位上三上神正四

○御絶命在乾、拾芥抄下末に八卦忌事謂遊年禍害絶命方等件三方不レ可ニ犯土造作一云々公家遊年禍害絶命鬼吏等方令忌避給凡人遊年外不レ忌歟とあり ○故避之焉、これ所謂方違なり此事國史には此に始て見ゆ ○聽事、官府にて執務する場所を云本聽事に作れるを六朝以來廳事とす ○取於近御在所、原本取字なく於近を上下にす諸本に據て改補ふ ○玄賓、後紀弘仁二年五月己酉紀同三年五月丁丑紀に見え釋書九に傳見ゆ ○阿彌陀寺、詳ならず ○九段卌歩租、卌は秘本淀本には卌に作る租は閣本尾本に據て補ふ前本谷本等相に作るは租の訛なり ○三上神、元年正月甲申紀に見ゆ

（九月）清源山寺、詳ならず ○壹演爲權僧正、釋書十四に傳見え同書廿四資治表に凡僧正有レ三大正權也大行基始レ之正觀勒始レ之權演始レ之と見ゆ ○白左部度、原本白左部渡に作る秘本閣本尾本等に據て改む ○安久、此二字は諸本に據て補ふ ○所念行、所は上下の例に據て補ふ ○拋官天入道世利、九年七月己酉紀に弘仁末擢爲ニ內舍人一とあるを云 ○練耶之行、耶は原本助に作る諸本に據て改む ○不在シテ、シテの二字は諸本に據て補ふ ○聞見多留奈利、留字は狩谷氏說に據て補ふ

位下、

○九月己卯朔、詔以ニ山城國葛野郡山地一町八段一賜ニ清源山寺一。○三日辛巳、大炊寮有ニ犬產穢一、仍停ニ御燈之齋一。○五日癸未、勅以ニ藥師寺僧壹演一爲ニ權僧正一。遣ニ參議從四位下守右大辨兼行播磨權守大枝朝臣音人、從五位上行少納言兼侍從良岑朝臣經世一、率ニ所司一向ニ西寺綱所一宣制。策文曰、天皇大命爾坐、諸大法師等爾白左部度宣久、天下乃平久安久可レ有岐事波、諸佛弟子等乃願誓坐散无爾依天奈留部之止奈毛所念行須、今藥師寺僧壹演、少壯之時爾、酷厭ニ俗塵一天、拋レ官天入道世利、因果之理乎問習天、練耶之行乎企脩已止、專無ニ退轉一之天、既經ニ多年一氣利、唯身獨乃爲爾波不レ在シテ、國家乎護持部至誠深志、自然爾朕心爾覺知（サトリシリ）多萬比、諸人毛普久聞見多留奈利、然爾太政大臣去年冬與利重病爾沉天、命難レ存（タモチ）久侍萬之々乎、至レ今爾平安爾侍萬須事波、

顯然爾此僧乃以至心救護爾依天奈利介利、朕我心思宇之呂也須久、國家乃無動岐事波、太政大臣一柱爾依天奈利、然物乎複留命乎救比活萬川禮留恩德乎、何爲加輕久念保須部岐、古事乎聞食波、如此岐國家乃大楯度安留大臣乃身命乎救止之天波、官庫乃物乎傾盡、種々爾公勞乎盡左禮氣利、然則此一僧乎別爾褒賞比天、自今以往毛、大臣乎救衞之女萬都利、天下平安爾在之女牟止奈毛所念行須、然乎此僧天性離欲天、係望女留事一毛聞食爾波、褒賞波牟事乃無禮波奈毛、權僧正爾任賜布、是則令法久住利有情我爲爾奈利止白左部奈止宣勅命乎白。內匠寮始置寮掌二員。伊賀國阿拜、山田、伊賀三郡田六町九段二百八十八歩、施入貞觀寺。○七日乙酉、中務省獻物。○八日丙戌、式部省獻物。○九日丁亥、於太政官賜宴群臣、喚文人賦詩、內教坊奏女樂、皆如常儀、公卿以下賦詩者、皆起探韵、日暮賜祿各有差。是夜有星、出卷舌入畢首、長可三尺。○十日戊子、夜有星、出墳墓下入貫須女。○十一日己丑、是日可奉幣帛伊勢大神宮、御在所有穢、仍以停止、遣散位從五位下岑行王、神祇伯從四位下中臣朝臣逸志、告以事由。○十四日

○太政大臣、頁房
○侍萬之々乎、原本侍萬之事さあり事は之乎の二字を誤て一字させしなるべし乎は諸本に據り々は意を以て補ふ
○活萬川禮留、原本川を心に留を可に作る狩谷氏の說に據て改む
○如此岐、岐は原本波に訛れるを閣本尾本前本等に據て改む
○國家乃大楯、大臣を楯に譬へたるなり藩屏さいふも同じ
○公勞、勞は慰勞の意
○在之女牟止奈毛、原本之止の二字なく女を米に毛を利に作る秘本閣本尾本等に據て改め補ふ
○久住、住は原本任に作る諸本に據て改む
○爲爾奈利止、爾は衍か
○白左部奈止、奈は衍か或は白左部は白せの延言奈はネに同じく此まゝにてもよきかさ思へば削らず、原本奈の字部の上にあり今上下にす
○貞觀寺、山城國紀伊郡にあり十四年七月丁亥紀に詳に見ゆ
○皆如常儀、皆は原本並に作る諸本及類史七十四

壬辰、勅以遠江國長下郡水田十二町、施入貞觀寺、○十五日癸巳、太政官下知彈正臺、左右京職、山城、攝津、伊賀、近江、丹波、播磨等國、禁材木短狹、及定載車法曰、步板、簀子、榲、榑等長短厚薄、去延暦十五年、初立制法、於是年月遷改、久忘格意、仍弘仁四年、天長八年、嘉祥三年、科罪兼可沒之狀、下知已訖、而採材倫輩、爲貪潤澤、伐斫一本、欲得百利、因茲裁長要短、而任意爲漸、嫌厚求薄、在手不輟、公途私用、常多闕乏、頻施嚴制、未聞懲肅、雖是愚民之可責、豈非國吏之解體、宜早遵行、無有乖違、沒物科罪、一如先格、但中間所在、不法材者、承制之後、百廿日內、悉令賣竟、其車荷者、量材長短、先有制法、今擧不法、既責輕薄、運載之法、何應一同、須榲榑卅二材、步板八枚、簀子十枚、以此爲定、復舊之後、改從恒例、不得因此更令濫吹、長官相承、嚴加督察、牓示山口及津頭、分明令知、○廿一日己亥、宮內省獻物、○廿二日庚子、河內國正六位上野神、近江國正六位上石劔神等、並授從五位下、○廿四日壬寅、地震、○廿六日甲辰、勅木工寮、採銅於山城國相樂郡岡田鄕舊鑄錢司山、

に據て改む
○出卷舌入畢昔、卷舌は廿八宿中昴宿の北にあり畢は昴と相並べり
○出墳墓下入貫須女、墳墓は廿八宿中危宿の下にあり形墓の如し須女は女宿の一名なり
○載車法、材木を車に積載する取締規則なり
○步板、三代格十八延暦十五年二月十七日太政官符・續修東大寺正倉院文書・延喜式等に見ゆ建築に用ふる板なり
○簀子、簀子に作る用材なり倭名抄箋注居處部屋宅具に按簀子蓋今俗板緣之類也古編竹爲之故名簀子後代以木猶沿舊稱又謂可造簀子之材亦爲簀子と云り
○榲榑等、榲は杉なり榑は名義抄に榑音扶クレ抄調度部造作具に說文云榑(補各反和名久禮)壁柱也とあり、榲榑は原本榲榑に作る今閣本尾本淀本に據り等は閣本尾本及類史八十に據て補ふ
○可沒、沒は原本役に作る類史に據て改む
○在手、原本生平に作る閣本尾本前本及類史に據

て改む　○解體、事を行ふに肅敬せず疎慢なるを云左傳成八年に見ゆ　○一如先格、先字は閣本尾本谷本及格に據て補ふ類史は空白とす　○中間所在、中間とは此太政官符を發せられ其實行せらるゝまでの間卽ち舊法と新法との中間の意、在は諸本及格に據て補ふ　○今擧不法、今擧は原本令奉に作る今は類史に據り擧は諸本及類史に據て改む　○責輕薄、責は原本貴に作る諸本及類史に據て改む　○復舊之後、復は原本獲に作る閣本尾本前本及類史に據て改む　○長官相承、長は祕本閣本尾本及類史格に據て補ふ　○督察、察は原本祭に作る類史に據て改む　○津頭、頭は原本以に作る諸本及類史に據て改む　○正六位上野神、式外か或は式內安野神社、滋川郡横野神社、志紀郡長野神社此三社中の上の一字脫ちて野神となれるか考ふべし野神の二字は宮本及神階記に據て補ふ　○近江國正六位上石鏂神、式社には見えず式外か近江國正六位上の七字は諸本及神階記に據て補ふ鏂は原本鈒に作る今尾本前本に據る　○岡田郷、倭名抄に見えず神名式に岡田鴨神社岡田國神社見ゆこれ其地にて今の木津町・當尾・加茂・瓶原村に亙れる地域なり　○鑄錢司山、今の瓶原山なるべし、山は原本止に作る諸本に據て改む

○冬十月己酉朔、天皇御二南殿一、賜二飲侍臣一、（南殿謂二官廳事一、）左右近衛府、遞奏二音樂一如レ常、賜レ祿各有レ差、○七日乙卯、中務省言、被管諸司考文、造二三通一、置二於惣省并式部本司等一、各爲二常留一、今案二物情一、式部本司料、於レ事有レ用、常留之備、以レ是足焉、至二于此省一、雖レ有二收置之勞一、曾無二充レ事之要一、每レ至二交替一、非レ無二其煩一、望請、准二宮內省一、三年一除、將レ省二物煩一、太政官處分、被レ管諸司、長上考文、留二三箇年一、番上留二六箇年一、依レ次撿除、○九日丁巳、讃岐國從五位上田村神、大水上神、並授二正五位下一、從五位下大麻神、城山神、賀茂神、神谷神等、並從五位上、大和國正六位上武雷神、保沼雷神、出雲國從六位上女月神等、並從五位下、○十六日甲子、詔以二權僧正法印大和尚位壹演一、爲二

（十月）（注）南殿謂官廳事、此六字後人の加注か諸本には本文とす南殿は紫宸殿なり官曹司廳を南殿代とせられしをかく云るか　○惣省、中務省を云　○今案物情、今は閣本尾本に據て補ふ　○本司料、料は原本斷に作る尾本前本谷本等に據て改む　○充事之要、之は諸本に據て補ふ　○物煩、煩は原本情に作る諸本に據て改む　○田村神、嘉祥二年二月癸丑紀貞觀三年二月丁巳紀等に見ゆ　○大水上神、神名式讃岐國三野郡大水上神社、今三豐郡二宮村羽方　○大麻神、同式多度郡大

麻神社、今仲多度郡善通寺町大麻、神字は式に據て補ふ
○城山神、貞觀元年十一月戊午紀に見ゆ
○賀茂神、神名式讃岐國阿野郡鴨神社、今綾歌郡加茂村鴨
○神谷神、同式同郡神谷神社、今綾歌郡松山村神谷
○武雷神、式外、所在未詳
○保沼雷神、神名式大和國廣瀨郡穗雷命神社、今北葛城郡馬見村安部
○女月神、同式出雲國意宇郡賣豆紀神社
○超昇寺、大和志に在二添下郡超昇寺村一とあり
○軾料、軾は膝突なり字類抄にヒザツキと訓り
○絹糸、絹と糸なり糸は原本布に作る閣本尾本前本等に據て改む
○直丁、職員令集解讃說に官內臨使とあり太政官の直丁は左右各四人あり
○預賚、賚は原本寶に作る諸本に據て改む
○大和尙位、位は諸本及類史百八十五に據て補ふ
○瓶雀、瓶は原本蜫に作る類史に據て改む僧善慧の七賢女偈に雀來入一瓶

超昇寺座主。○十七日乙丑、令三五畿七道、自二來月二日一至二七日一、禁二斷殺生一、○十九日丁卯、延二六十僧於太政官廳事一、轉二讀大般若經一、限二三日一訖。○廿一日己巳、勅、河內國平岡神主一人、給二春冬當色軾料絹糸等一、一如二平野梅宮神主一、又春秋二祭、差二神祇官中臣官人一人一、撿二挍祭事一、兼付二幣帛一、又差二琴師一人一、供二事祭場一、立爲二恒例一。是日以二從五位下藤原朝臣元利萬侶一爲二次侍從一。○廿二日庚午、太政官獻レ物、公卿已下、侍從已上侍レ宴、雅樂寮奏二音樂一、酣暢竟レ日、極レ歡而罷、賜レ祿各有レ差、外記以下、直丁已上預レ賚焉、○廿五日癸酉、權僧正法印大和尙位壹演上表、請レ褫レ職曰、小僧壹演言、任非二其器一、則公私共速二其傷一、分爽二其才一、則道俗同罹二其咎一、壹演凡愚性拙、白業功疎、瓶雀還飛、水萍易レ合、徒縱二慙愧一以爲レ衣、雖レ鑄二弘誓一以爲レ鎧、未レ遑レ救レ己、寧及二利他一、伏見太政大臣藤原朝臣、仁風廣扇、德望高懸、利物之功、希世而出、故及二其臥病沉困之時一、天下緇素、譬レ憂二父母一、或事勞二於外一、或心焦二於中一、依レ佛依レ神、競祈二其命一、即知二天答萬人之望一、豈偏謂レ假二一身之力一乎、而今承二黄紙詔命一、以二小僧一爲レ活二彼大臣一、賜二位權僧正一、恩出二非常一、分彰二不次一、

身毛盡豎、伏增赧顏、又其僧正之位者、天下之所瞻仰、四輩中之鎭也、當今才當其途者、寔滋有徒、而非智非行、超加其上、則恐遠乖世尊之教、近貽聖朝之譏、伏願、枉留聖聽、早賜哀許、不任丹款之至、謹上表以聞、○廿六日甲戌、雅樂權大允外從五位下和邇部宿禰大田麻呂卒、大田麻呂者右京人也、吹笛出身、備於伶官、始師事雅樂權少屬外從五位下良枝宿禰清上、受學吹笛、清上特善吹笛、音律調弄、皆窮其妙、見大田麻呂有氣骨可敎習、因加意而敎之、承和之初、清上從聘唐使、入於大唐、歸朝之日、船遭逆風、漂墮南海賊地、爲賊所殺、本姓大戶首、河內國人也、大田麻呂能受其道、莫不精究、天長初任雅樂百濟笛師、尋轉唐橫笛師、數年爲雅樂少屬、俄轉大屬、齊衡三年除權大允、貞觀三年正月廿一日授外從五位下、是日內宴也、大田麻呂伎術出群、故加殊奬、大田麻呂、本姓和邇部、後賜宿禰、卒時年六十八、○廿七日乙亥、延百僧於本宮內裏、限以三日、轉讀大般若經、天皇欲遷御、故豫鎭之、○廿八日丙子、勅曰、壹演和尙、省表具之、和尙恬清受性、忍生草之穿身、堪任陶情、慕落花之雨鳥、況復

中羅〻掩瓶口鼓穿雀飛去識神隨業走とあり
○水萍、恐くは氷洋の訛なるべし煩惱を以て氷に譬ふること止觀に見ゆ
○纏慙愧、纏は原本纒に作る類史に據て改む
○依佛、依は閣本尾本谷本及類史に據て補ふ
○卽知、知は原本如に作る諸本に據て改む
○黃紙詔命、詔勅を書くには黃紙を用ふ故に云
○賜位權僧正、位は原本任に作る類史に據て改む
○四輩、四衆に同じ四衆は比丘比丘尼優婆塞優婆夷を云
○超加其上、超は原本起に作る諸本及類史に據て改む
○丹款之至、至は諸本及類史に據て補ふ
○和邇部宿禰大田麻呂、部は類史に據て補ふ
○伶官、伶は原本訛れるを閣本谷本淀本及類史に據て訂す
○特善、特は原本時に作る類史に據て改む
○敎習、敎は原本勵に作る祕本尾本淀本に據て改む閣本谷本及類史斅に作る斅は敎に同じ

味二至味之無味一、所レ貯則死者還レ生、殊行二能行之不行一、所レ練則對治延レ命、由レ斯太政大臣寢レ疾之日、誠賴二和尚一、竟得二平安一、朕達レ旦不レ寐、深嘉二其功一、感レ恩之思、亡二德不一レ報、故殊拔二儕類一、委以二綱維一、期二一天下之無爲一、恬二四海內之有截一、而今陳請辭謝、推二讓是崇一、心雖レ有二出塵之淸一、迹既無二同俗之混一、夫大慈之所レ貴、不レ繫二於一身一、弘誓之所レ先、普及二於庶類一、豈有二頤神水石一、徒遂二獨善之求一、韜二光松蘿一、空弃二兼濟之顧一者哉、倘攝二和氣息一、遂薰二禪風一、暫屈二淡退之志一、曲叶二緇素之望一、出雲國從五位下左草神、御譯神、阿式神等、並授二從五位上一、尾張國正六位上鞆江地神、杉地神等、並從五位下、遠江國長上郡空閑地百六十町、施二入貞觀寺一、○廿九日丁丑晦、勅賜二讀經百僧度者各一人一、

○河內國人也、也は諸本に據て補ふ ○爲雅樂少屬、雅以下正月廿一日に至る廿五字は諸本に據て補ふ ○年六十八、年は諸本に據て補ふ ○廿七日、祕本閣本等七を八に尾本六に作る何れも非なり ○壹演和尚、諸本壹の字なし是なるべし ○省表、省は原本裏に作る諸本及類史百八十五に據て改む ○恬淸受性、恬は原本坊に作る諸本及類史に據て改む諸本淸受を靖授に祕本谷本受を挺に作る ○堪任、任は原本住に作る諸本に據て改む ○雨爲、雨は原本兩に作る類史に據て改む ○頼和尚、尾本前本谷本和尚を公事に作り類史公力に作り閣イ本谷イ本倘を力に作る ○竟得平安、閣本前本谷本竟を意に作る ○亡德不報、毛詩大雅抑章に無レ言不レ讎無レ德不レ報とあり ○儕類、同輩を云、儕は原本濟に作る類史に據て改む ○期一天下、原本期一を斯爲に作る諸本及類史に據て改む ○恬四海內、恬は安なり四海を平和に安ぜむとなり恬は原本活に作る諸本に據て改む ○雖有出塵之淸、雖は諸本及類史に據て補ふ ○大慈、原本人玆に作る大は類史に據り慈は諸本及類史に據て改む ○頤神、頤は養也精神を寧じ養ふを云 晉書曹毗傳に出づ ○韜光松蘿、山林に隱棲して才德を顯はさゞるを云韜は藏也 ○兼濟之顧、顧は恐くは願の訛なるべし ○氣息、息は原本恩に作る類史に據て改む ○左草神、仁壽元年九月紀（文德紀四九頁）に出づ ○御譯神、同上 ○阿式神、神名式出雲國出雲郡阿須伎神社、今簸川郡遙堪村遙堪字阿式 ○鞆江地神、神名式尾張國中嶋郡鞆江神社、朝日村明地、地は諸本に據て補ふ ○杉地神、此三字は諸本に據て補ふ、尾張國式外、所在未詳

（十一月）借外從五位下（宮主）、借は九年七月己亥紀に據て補ふ
○經卅餘歲、經は諸本及類史五十四に據て補ふ
○免同籍課役、免同の二字は諸本に據て補ふ
○明神十一社、閣本尾本谷本及類史三には社字神の下にあり
○御仁壽殿、仁壽殿は天皇御常の御殿なり即位後久しく東宮にまし〳〵しが假に太政官に遷御此に至りて本殿に渡御あらせられしなり
○宣陽門、拾芥抄中末に宣陽門三間云〻左兵衞陣建春內とあり諸本宣を宜に作るは非なり
○春日祭如常、閣本尾本前本等如常の二字なし下文梅宮祭園韓神祭の條亦同じ
○大歌、原本歌下に所字あり閣本谷本及類史九に據て削る
○憶感神、文德紀仁壽三年六月丁卯紀に出づ
○射殿、原本射下に場字あり諸本に據て削る十年以下每年正月十八日紀を參看すべし
○神祇伯從四位下、四は

○十一月戊寅朔、地震、○二日己卯、詔贈正五位下道公首名從四位下、首名、是良吏也、今追賞焉、陸奧國磐瀨郡大領借外從五位下磐瀨朝臣富主授外從五位下、阿波國名方郡人忌部首眞貞子、伉儷亡後、經卅餘歲、身臥家側、心存念佛、遂不再醮、將終一生、詔叙位二階、免戸內租、即表門閭、以旌節婦之貞焉、○三日庚辰、美作國久米郡人秦豐永、天性孝行、志在恭順、幼稚之年、致養二親、父母亡後、常守墳墓、叙位三階、免同籍課役、表門閭、令衆庶知焉、○四日辛巳、勅遣使者於伊勢大神宮、并明神十一社、奉幣、告以天皇遷御內裏也、天皇遷自太政官、御仁壽殿、自此三日、諸衞警固、諸司侍宿宣陽門外廊下、是日、外記候處還於本局、○七日甲申、平野春日祭如常、○八日乙酉、梅宮祭如常儀、○十二日己丑、園韓神祭如常、○十三日庚寅、鎭魂祭如常、○十四日辛卯、新嘗祭、天皇不御神嘉殿、勅遣親王公卿、向宮內省奉祭、是夜地震、○十五日壬辰、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、大歌五節舞如常儀、宴竟賜祿各有差、○十七日甲午、授尾張國從五位下憶感神從五位上、○十八日乙未、天皇御射殿、

原本五に作る閣本尾本前本及上文九月己丑紀に據て改む

○稱非氏人並申官、原本非氏人を絕戸の二字に作り並を幷に作る諸本に據て改む但し諸本氏を民に作るは訛なり今宮本に據る

○賜祿、祿は原本物に作る諸本に據て改む

○麻生神、式外、所在未詳

○大井內親王薨、仲野親王同母妹

○河子、原本阿子に作る九年正月戊午仲野親王の傳に據て改む

（十二月）淺間明神祠、神名式甲斐國八代郡淺間神社（名神大）、東八代郡一宮村にあり國幣中社に列す、神祇志に都留郡河口鄕川口村に在りとす

親王已下、參議已上侍焉、是日、木工寮獻物、○廿日丁酉、神祇伯從四位下中臣朝臣逸志等解偁、左京人大中臣朝臣名高戸一烟、去貞觀三年稱絕戸、右京人大中臣朝臣氏吉戸一烟、去天安二年稱非氏人、並申官除弃、今戸口等披訴、皆有證據、望請、依實還附本貫、詔許之、○廿一日戊戌、天皇御紫宸殿、王公並侍、左近衞、左衞門、左兵衞等府、幷左馬寮獻物、終日宴飲、雜樂皆作、賜祿有差、○廿五日壬寅、天皇御紫宸殿、王公皆侍、右近衞、右衞門、右兵衞等府、幷右馬寮獻物、酣暢作樂、一同前日、賜祿各有差、○廿六日癸卯、授近江國正六位上麻生神從五位下、勅以山城國相樂郡舊鑄錢司地廿餘町、爲採銅之地、○廿七日甲辰、延僧七口於內殿裏修法、○廿八日乙巳、無品大井內親王薨、不任緣葬司、以喪家固辭也、帝不視事三日、內親王者、桓武天皇之皇女、母從四位下藤原朝臣河子、從四位上大繼之女也、○十二月戊申朔、二日己酉、地震、○九日丙辰、勅、甲斐國八代郡立淺間明神祠、列於官社、卽置祝禰宜、隨時致祭、先是彼國司言、往年八代郡暴風大雨、雷電地震、雲霧杳冥、難辨山野、駿河國

○巖谷、巖は原本嚴に作る前本谷本に據て改む
○宜潔奉祭、宜は祕本尾本前本等に據て補ふ大系本は潔下に齋字を意補す
○國司求之、國司の二字は諸本に據て補ふ
○異火之變、變は閣本尾本前本等表に作る
○剗海、已に注す
○垣有四隅、垣は原本恒に作る祕本前本谷本に據て改む
○厚一尺、厚は原本原に作る諸本に據て改む
○立石之門、狩谷氏曰門恐間
○旱霜、旱は原本早に作る閣本谷本淀本に據て改む
○託磨牧、三間郡託間鄕（今の三豐郡託間村）にあり
○正五位下（繼長）、正は原本從に作る四年十二月乙巳紀に據て改む類聚大補任に貞觀七年大神宮禰宜外正五位下繼長十二月四日敍從五位下と見ゆ
○更深、深は閣本尾本谷本及類史百八十五に據て補ふ
○悲競、悲は諸本及類史非に作る

富士大山西峯、忽有熾火、燒碎巖谷、今年八代郡擬大領無位伴直眞貞託宣云、我淺間明神、欲得此國齋祭、頃年爲國吏成凶咎、爲百姓病死、然未曾覺悟、仍成此恠、須早定神社、兼任祝禰宜、宜潔奉祭、眞貞之身、或伸可八尺、或屈可二尺、變體長短、吐件等詞、國司求之卜筮、所告同於託宣、於是依神明願、以眞貞爲祝、同郡人伴秋吉爲禰宜、郡家以南作建神宮、且令鎭謝、雖然異火之變、于今未止、遣使者檢察、埋剗海千許町、仰而見之、正中最頂飾造社宮、垣有四隅、以丹青石立其四面、石高一丈八尺許、廣三尺、厚一尺餘、立石之門、相去一尺、中有一重高閣、以石構營、彩色美麗、不可勝言、望請、齋祭兼預官社、從之、武藏國旱霜、優復一年、停廢讃岐國三野郡託磨牧、阿波國板野郡人百濟岑子女、一產三男、給稻三百束、乳母一人、授伊勢大神宮禰宜外正五位下神主繼長從五位下、豐受宮禰宜正六位上神主眞水外從五位下、〇十一日戊午、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、所司奉祭如常、〇十三日庚申、權僧正法印大和尙位壹演重上表曰、沙門壹演言、前進表章、庶蒙矜察、肅奉還敕、猥喩更

深、臨深谷而悲兢、仰寒天而流汗、壹演雖同瘦鷹、未免啞羊、徒明四河之同名、難企六波之一岸、加之、素性庸菲、無德無才、何以辱法務之綱維、爲道俗所欽仰、伏惟聖朝陛下、以堯舜之聖德、得旦奭之賢佐、宣風則俊士如林、贊化則高僧成市、是以四海賢愚、盡甘詮鑒、百官內外、皆有允釐、而今謬降殊恩、辱此非據、上達天造、下慙物情、進退惶怖、罔措心顏、伏乞曲照丹誠、俯收玄澤、則誤授之譏、無涉於淸朝、虛受之嫌、幸免於陋質、匪任惶迫之至、謹重上表以聞、○十七日甲子、勅河內國平岡神四前、准春日大原野神、春冬二祭奉幣、永以爲例、諸衞士仕丁等愁訴云、遠辭鄕國、苦役京都、唯仰養丁之輸物、以充羈旅之資用、而本國司偁、依詔復係、養物之數、三分減一、然則留國之民、旣蒙十日之復、上京之丁猶苦一年之役、凡在勞逸、彼此不同、望請、依舊被給、太政官處分、宜加增養丁、滿例輸數、即下知東海、東山、北陸、山陰、南海道、依件行之、○十九日丙寅、於內裏始修佛名懺悔、勅曰、權僧正壹演公、朕以、公有浩大之恩、故委之以綱維之任、事詳前詔、何假縷談、惟公翠草吐榮、紅雲凝質、體無我之奧理、勤

○流汗、汗は原本行に作る谷本宮本及類史に據て改む
○啞羊、四種僧の一、羊の啞なるものの如く愚痴なるを云
○徒明四河之同名、徒は原本從に作る諸本及類史に據て改む、釋迦の弟子の名を明りにすさなり四河は印度の四大河なり各名を異にすれど海に入れば別なきが如く刹利婆羅門長者居士種の四姓の人も出家すれば釋迦弟子の名を同くす故にかく云
○難企六波之一岸、六波は六波羅密なり波羅密は一に到彼岸さ譯し生死の此岸より涅槃の彼岸に至る行法なり六事の一も企及び難しさなり
○無德、德は原本能に作る諸本及類史に據て改む
○法務之綱維、之は同上に據て補ふ
○旦奭之賢佐、旦は周公旦、奭は召公奭
○宣風、宣は原本直に作る穀本谷本及類史に據て改む
○甘詮鑒、甘は原本已に作る諸本に據て攸む
○允釐、原本元鑒に作る

諸本及類史に據て改む允釐は尙書堯典に允釐百工、傳に允信釐治とあり○而今、今は閣本前本淀本及類史に據て補ふ○天造、造は恩なり○愍物情、物は原本抱に作る諸本及類史に據て改む○玄澤、澤は原本慷に作る諸本及類史に據て改む玄は天なり澤は恩澤なり○幸免於陋質、原本幸を奉に陋を隨に作る閣本尾本淀本及類史に據て改む○本國司偁、偁は原本稱に作る黑川校本に據て改む○宜加增養丁滿例輪數、原本宜字なく滿を恒に作る諸本に據て改め補ふ○壹演公、類史百八十五は演公に作る○浩大之恩、浩は原本洪に作る類史に據て改む○利他之深思、思は原本恩に作る宮本及類史に據て改む○治化、治は原本淳に作る類史に據て改む閣本尾本前本等沼に作るは治の訛なり○道溫云云、義楚六帖法施傳燈部に道溫別駕、姓

利他之深思、朕賞其神韻、欽其德輝、殊加褒崇、願助治化、而頻陳表章、欲遂辭退、唯有謙光之美、恐睽博愛之途、昔道溫不拒宋武之詔、僧理猶奉湘東之命、斯皆感景慕之至誠、豈可以羈束而爲累哉、公宜永持綱領、能鎭衆心、使禪室俱仰棟梁之材、法流競資舟楫之用、然則酬恩之望、既申於朕情、應物之規、何損於公德、義在忘言、旨不多及、自今而後、更勿重陳、是日、制、信濃國勅使牧御馬、元八月廿九日貢之、今定十五日、冷然院諸牧、元八月廿五日貢之、今定十一日、○廿日丁卯、令甲斐國於山梨郡致祭淺間明神、一同八代郡、○廿一日戊辰、授下野國正三位勳四等二荒神從二位、武藏國正五位下氷川神從四位下、駿河國從五位下御廬神從五位上、正六位上大井神從五位下、○廿四日辛未、勅遣公卿已下、侍從已上於諸山陵墓、奉荷前幣、夜有星、出奎婁北、入抵土司空、○廿六日癸酉、武藏國從五位下伊多之神、參河國從五位下赤孫神、並授從五位上、河內國正六位上酒屋神從五位下、○廿七日甲戌、尾張國言、昔廣野河流、向美濃國、當于斯時、百姓無害、而頃年河口擁塞、惣落此國、每遭

雨水一、動（スレバ）被二巨害一、望請、掘二開河口一、令レ趣二舊流一、太政官處分、依レ請、○卅日丁丑、

大二祓於朱雀門前一、大儺並如二常儀一、

皇甫安定人、逮初中勅下レ詔止二中興寺一大明中（南北朝宋武帝年號）勅爲二都邑僧正一（節略）とあり
○僧理云云、理恐くは瑾の訛なるべし僧瑾は宋（南北朝）の世祖勅爲二湘東王師一こと義楚六帖法施傳燈部に見ゆ
○豈可以羈束、可は原本不に作る閣本前本谷本及類史に據て改む
○資舟檝之用、資は原本次に作る類史に據て改む
○勅使牧御馬、左馬寮式御牧の條に信濃國には山鹿牧以下十六箇處を擧ぐ、公事根源駒牽條に八月十六日けふは信濃の勅旨の牧の馬を奉るもとは十五日にて侍りしかども朱雀院の御國忌にあたるによて十六日になさるさ見ゆ、御は原本野に作る諸本に據て改む
○二荒神、元年正月甲申紀に見ゆ
○氷川神、同上
○御廬神、神名式駿河國廬原郡御穗神社、今清水市三保町
○大井神、式外、神祇志に在二志太郡嶋田驛大井川邊一とあり

○奎婁、廿八宿中の二宿名、北極の西にあり

○土司空、奎宿の南にある星なり土は原本上に作る閣本尾本前本等に據て改む

○伊多之神、式外、所在未詳或は伊波比の訛か伊波比神社は橫見郡にあり

○赤孫神、文德紀仁壽元年十月乙巳紀に見ゆ

○河內國、國は原本郡に作るを改む

○酒屋神、屋は原本泉に作る式に據て改む、神名式河內國丹比郡酒屋神社、中河內郡三宅村三宅屯倉神社境內

○掘開、掘は原本堀に作る諸本に據て改む

○朱雀門前、前は類史七十四に據て補ふ

○卷第十一、原本此下に終字あり諸本に據て削る

日本三代實錄卷第十一

【貞觀八年】八年、原本年下に丙戌の二字あり祕本閣本前本谷本欄外頭注とす本文に非ず故に削る
○天安寺、天は原本大に作る紀略に據て改む上文天安二年十月甲辰紀に陵邊修二三昧一沙彌廿口令レ住二雙丘寺一元是右大臣清原眞人夏野之山莊今所謂天安寺也とあり文德天皇御陵の附近にあるに據て天皇の御爲に特に讀經せしめられしなり
○田邑天皇、文德天皇
○右大辨(音人)、大は原本中に作る諸本及五年二月癸卯紀に據て改む
○權中將(常行)、權は下文正月庚子紀及三月己亥紀に據て補ふ
○並從四位上、並は諸本に據て補ふ
○行平、平は原本年に作

日本三代實錄卷第十二

起貞觀八年正月盡五月

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

(丙戌)八年春正月戊寅朔、天皇不受朝賀、七曜曆、藏氷樣、腹赤御贄等、所司付內侍奏、賜親王以下飮於宜陽殿西廂、賜御被、○二日己卯、所司獻剛卯杖、天皇不御紫宸殿、付內侍奏、○五日壬午、於天安寺、限以三日、奉爲田邑天皇、轉讀金剛般若經千卷、般若心經萬卷、○七日甲申、天皇御紫宸殿、觀靑馬、賜宴群臣、賜祿各有差、授參議正四位下行左衛門督源朝臣多從三位、參議左近衛中將從四位下兼行伊豫守藤原朝臣基經、參議右大辨兼行播磨權守大枝朝臣音人、參議右近衛權中將藤原朝臣常行、越中守棟貞王、散位朝右王、並從四位上、無位興基王從四位下、從四位上行左兵衛督兼備前權守在原朝臣行平正四位下、左近衛權少將正五位下兼行阿波守清原眞人秋雄、左中辨兼行皇太后宮亮藤原朝

る諸本に據て改む
○多治眞人貞岑、岑は原本岸に作る五年二月己酉紀及七年六月乙亥紀に據て改む下文二月丁卯紀に據るに多治は丹墀とあるべきなり
○近江權介、良尙は三年二月己巳に正介となる權字衍なるべし
○大宰少貳(安貞)、少は原本大に作る五年二月癸卯紀に據て改む下文十一月庚午紀にも少貳とあり
○豐宗、豐は原本晨に作る諸本に據て改む
○源朝臣湛、山田本云源湛貞觀五年正月七日叙㆓從五位下㆒此又授㆓從五位㆒恐誤
○蔭子春澄朝臣具瞻、蔭子の二字は諸本に據て補ふ
○藤原朝臣飽永、朝臣の二字は諸本に據て補ふ
○太皇太后宮少進、皇太の二字は諸本に據て補ふ
○安主、主は原本正に作る祕本閣本前本等に據て改む
○左近衞將監(房雄)、左は原本右に作る下文十月丙申紀に據て改む
○枝並、諸本枝を岐に作

臣家宗、右近衞少將兼行讃岐權介藤原朝臣有貞、散位當麻眞人淸雄、並從四位下、從五位上守右中辨多治眞人貞岑、左近衞少將兼行近江權介藤原朝臣良尙、並正五位下、右兵衞權佐從五位下坂上大宿禰瀧守、太皇太后宮亮紀朝臣冬雄、大宰少貳在原朝臣安貞、主稅頭兼行加賀權介家原宿禰繩雄、左少辨藤原朝臣良近、並從五位上、外從五位下行右馬助道嶋宿禰瀧嶋、美濃權介御春朝臣豐宗、助教兼越後介善淵朝臣永貞、右京權亮葛城宿禰永藤、侍醫家原宿禰善宗、散位正六位上秋枝王、源朝臣湛、源朝臣良、右衞門大尉藤原朝臣遠經、蔭子春澄朝臣具瞻、式部少丞藤原朝臣保則、散位藤原朝臣定岑、式部大丞藤原朝臣飽永、散位巨勢朝臣氏宗、左衞門大尉藤原朝臣柄範、太皇太后宮少進藤原朝臣眞常、散位橘朝臣氏高、縫殿助大中臣朝臣岡良、大外記御室朝臣安常、散位藤原朝臣安主、左近衞將監藤原朝臣房雄、文章得業生大中臣朝臣國雄、木工大允紀朝臣助成、內藏大允嶋田朝臣善宗、內膳奉膳高橋朝臣枝並、陸奧權介御春朝臣峯能、大膳大進佐伯宿禰正雄

等、並從五位下、左大史正六位上長峯宿禰恒範、右大史菅野朝臣宗之、針博士深根宿禰宗繼、右近衞將監正七位下長田直利世、太朝臣貞長等、並外從五位下、○八日乙酉、於大極殿始講最勝王經、西大寺僧傳燈大法師位平恩爲講師、授外從五位下行但馬介大神朝臣全雄從五位下、無位親子女王、正五位下甘南備眞人伊勢子、並從四位下、無位平朝臣寛子正五位下、從五位下笠朝臣西子、無位藤原朝臣末子、並從五位上、藤原朝臣道子、藤原朝臣雅子、橘朝臣弘子、大宅眞人重子、當麻眞人淨子、丹墀眞人高子、菅野朝臣廣子、阿閇朝臣以子、菅野朝臣弘子、並從五位下、無位伊統朝臣善子從七位下和邇部臣院子、並外從五位下、日向國人從七位下㫑部清直授借外從五位下、○十三日庚寅、以散位從五位下藤原朝臣弘經爲侍從、從五位下行大外記御室朝臣安常爲大監物、從五位下行大內記巨勢朝臣文雄爲民部少輔、從四位上行大宰大貳藤原朝臣冬緒爲彈正大弼、散位從五位下山田宿禰文雄爲大和介、從五位下清瀧朝臣岑成爲攝津權介、正五位下行右衞門權佐藤

る
○峯能、峯は諸本に據て補ふ
○並從五位下、並は諸本に據て補ふ
○太朝臣貞長、五年九月甲午紀に正六位上とあり、されば此も正六位上とあるべきなり
○並外從五位下、外は諸本に據て補ふ
○全雄、前本谷本淀本全を金に作る
○藤原朝臣道子、此上に位階を脱す
○雅子、雅は原本陸に作る諸本に據て改む尾本は稚に作る
○重子、諸本重を仁童の二字に作る
○當麻眞人、麻は原本摩に作る諸本に據て改む
○和邇部臣、邇は原本爾に作る諸本に據て改む
○並外從五位下、外は諸本に據て補ふ
○㫑部清直授借外從五位下、此十一字は祕本閣本尾本等に據て補ふ
○藤原朝臣弘經、朝臣の二字は諸本に據て補ふ
○從五位下行大外記、以下爲大監物に至る十八字は諸本に據て補ふ

○岑成、岑は諸本峯に作る下同じ
○弘道、道は原本通に作る秘本閣本前本等に據て改む
○從五位上行太政大臣家令、行字は例に據て補ふ
○鎭守將軍、原本守下に府字あり諸本に據て削る
○甘樂麻呂、甘は原本可に作る諸本に據て改む
○加賀守、古今集目錄權守とす
○外從五位下(宗之)、外は上文に據て補ふ
○佐伯宿禰、宿は原本野に作る諸本に據て改む
○高庭、高は原本宿に作る諸本に據て改む
○忠宗、原本忠下に高字あり諸本に據て削る
○源朝臣好爲備前介、原本好を穎に作り爲以下笠朝臣名高に至る二十三字なし諸本に據て改め補ふ
○從五位下(有貞)、五は原本四に作る上文に據て改む
○藤原朝臣有貞、朝臣の二字は宮イ本に據て補ふ

原朝臣廣基爲二參河權守一、右衛門權佐如レ故、外從五位下行左大史長岑宿禰恒範爲二伊豆守一、散位從五位下藤原朝臣弘道爲二甲斐守一、左近衛少將正五位下兼行備中權守源朝臣舒爲二近江權介一、近衛少將如レ故、從五位上行太政大臣家令兼尾張介菅野朝臣弟門爲二大掾一、家令如レ故、從五位下行參河權介安倍朝臣三寅爲二權大掾一、從五位上行民部少輔源朝臣穎爲二美濃守一、從五位下行式部大丞藤原朝臣飽永爲レ介、從五位下鎭守將軍文室朝臣甘樂麻呂爲二上野權介一、將軍如レ故、從五位下行上野權介賀茂朝臣岑雄爲二越前介一、散位從四位上源朝臣能有爲二加賀守一、右京權亮從五位下葛城宿禰永藤爲レ介、外從五位下行右大史菅野朝臣宗之爲二越中介一、從五位下行書博士佐伯宿禰眞敏爲二丹後介一、散位從五位下大春日朝臣高庭爲二因幡權介一、刑部少輔從五位下橘朝臣忠宗爲二石見守一、散位從五位上源朝臣好爲二備前介一、從五位下行陰陽助兼權陰陽博士笠朝臣名高爲二權介一、餘官如レ故、正四位下行右兵衛督源朝臣勤爲二備中權守一、右兵衛督如レ故、從五位下右近衛少將兼讚岐權介藤原朝臣

○從五位下(保則)、五は原本四に作る黑川校本に據て改む

○讃岐權介、狩谷校本に讃岐二字恐誤と云

○住世、宮本內イ本及信友校本住を佐に作る

○有兵衞權佐、古今集目錄に兵衞を衞門とす
○給二分官一人云云、是郎ち年官を給ふなり年官とは每年內外の一分二分等の官を給はるを云一分二分等の名は公廨の分配より起れるにて諸國の史生を一分官といひ目・主典を二分官といひ掾を三分官といふ京官も之に準じて名を立てたり
○常陸國鹿嶋神宮司言、此事三代格一に見ゆ
○苗裔神卅八社、各郡社

有貞爲守、從五位下行式部少丞藤原朝臣保則爲權介、大監物從五位下丹墀眞人瀧雄爲備後守、從五位上行右兵衞權佐坂上大宿禰瀧守爲阿波介、從五位上行主殿頭兼阿波介當麻眞人鴨繼爲讃岐權介、主殿頭如故、左衞門佐從五位下文室朝臣卷雄爲伊豫介、三品中務卿兼上野太守諱光孝天皇親王爲大宰帥、中務卿如故、散位從四位上茂世王爲大貳、從五位下行正親正平朝臣住世爲肥後介、從五位下行伊豫介文室朝臣卷雄爲左近衞權少將、伊豫介如故、從五位上行阿波介坂上大宿禰瀧守爲右近衞少將、阿波介如故、從五位下行備前權介藤原朝臣利基爲左衞門佐、侍從從五位下藤原朝臣國經爲右兵衞權佐、是日、勅、女御從三位藤原朝臣多美子、自今以後、每年給二分官一人、一分官一人、○十四日辛卯、大極殿齋講竟、僧綱已下奉參內裏、論議如常、施御被、○十六日癸巳、踏歌之節、天皇御紫宸殿、宴于侍臣、雅樂寮奏樂、宮人踏歌如常、賜祿各有差、○十七日甲午、勅公卿、於建禮門前、行大射之禮、○十九日丙申、天皇御內裏射場、觀四府賭射、親王已下侍焉、○廿日

數を擧げたれど今詳ならざるもの多し其明かなるものは磐城郡鹿嶋神社・行方郡鹿嶋御子神社・曰理郡鹿嶋伊都乃比氣神社・鹿嶋緒名太神社・黑川郡鹿嶋天足和氣神社・鹿嶋天足別神社・牡鹿郡鹿嶋御兒神社等なり
○曰理郡、原本曰を亘に作る諸本に據て改む
○絶而不奉、絶は格止に作る
○幣料、料は原本斷に訛れるを閣本尾本前本に據て改む
○榲樹、原本榲を椙に作り樹字なし諸本に據て改め補ふ
○四萬株、諸本卌四株に作る或は卌四萬株の誤か
○命加殖、命は令の誤か
○諸所之人、人は諸本に據て補ふ
○燒尾、琅琊代醉十三に燒尾、唐書(蘇瓌傳)言大臣初拜レ官獻二食天子一名曰二燒尾一蘇瓌爲レ相以二食貴一百姓不レ足獨不レ進、然唐人小說所レ載與レ此不レ同乃云士子初登レ科及在レ官者遷除朋僚慰賀皆盛置二酒饌音樂一宴レ之爲二燒尾一云々何子容曰燒尾之義或

丁酉、勅、美濃國多藝郡空閑地六十町施二入貞觀寺一。先レ是常陸國鹿嶋神宮司言、大神之苗裔神卅八社在二陸奥國一。菊多郡一、磐城郡十一、標葉郡二、行方郡一、宇多郡七、伊具郡一、曰理郡二、宮城郡三、黑河郡一、色麻郡三、志太郡一、小田郡四、牡鹿郡一。聞二之古老一云、延暦以往、割二大神封物一、奉二幣彼諸神社一。弘仁而還(ヨリコノカタ)、絶而不レ奉。由レ是諸神爲レ祟、物恠寔繁。嘉祥元年、請二當國移狀一、奉レ幣向レ彼、而陸奥國稱レ無二舊例一、不レ聽レ入レ關。宮司等於二關外河邊一、祓二弃幣物一而歸。自後神祟不レ止、境內旱疫。望請、下二知彼國一、聽レ出二入關一、奉二幣諸社一、以解二神怒一。其幣料用二大神封物一。又言、鹿嶋大神宮惣六箇院、廿年間一加二修造一。所レ用材木五萬餘枝、工夫十六萬九千餘人、料稻十八萬二千餘束。採二造レ宮材一之山在二那賀郡一、去レ宮二百餘里、行路嶮峻、挽運多レ煩。伏見(ルニ)、造レ宮材木多用二栗樹一。此樹易レ栽、亦復早長。宮邊閑地、且栽二栗樹五千七百株、榲樹四萬株一。望請、付二神宮司一、命二加殖兼齋守一。太政官處分、並依レ請。○廿一日戊戌、於二仁壽殿一內宴。近臣奏レ樂賦レ詩、如二常儀一。賜レ祿各有レ差。○廿三日庚子、令三五畿七道諸國大宰府、七日潔齋、轉二讀金剛般若經一、豫防二災

謂虎化爲人唯尾不化須爲焚除乃得成人或謂魚躍龍門唯尾不化必雷火燒之乃成爲龍或又謂新羊入群爲諸羊所觸火燒其尾則定と見ゆ拜官の時食を天子に獻るを云その語源に至りては俗說にして捕捉すべきものなし

○荒鎭、私記に或云酒無度謂荒鎭鎭者沈湎之意也とあれど詳ならず

○求飮及、及は諸本に據て補ふ

○曰撰格所起請、原本曰撰格所の四字を祓除責祓物の五字に作る祓除責祓物は下文に見え此に用なし故に諸本に據て改む此事三代格十九に見ゆ

○天平寶字二年勅書、同年二月紀（續紀上四四四頁）に見ゆ

○勅書偁、偁は原本稱に作る格に據て改む

○道義、義は續紀及格に理に作る

○綸綍、天子の詔書を云禮記緇衣に王言如絲其出如綸王言如綸其出如綍とあるに據れり

○諸所之人、格諸所を所々に作る

疫。制、伊勢大神宮及豐受神宮禰宜授五位者、便以神税給位祿。是日勅、禁斷諸司諸院諸家諸所之人燒尾荒鎭幷責人求飮及臨時群飮。曰撰格所起請偁、去天平寶字二年二月廿日勅書偁、隨時立制、有國通規、議代行權、昔王彝訓、頃者民間宴集、動有違愆、或同惡相聚、濫非聖化、或醉亂無節、便致鬪爭、據理論之、甚乖道義、自今以後、王公以下、除供祭療患之外、不得飮酒、其朋友僚屬、內外親情、至於暇景、應相追訪者、先申官司、然後聽集、如有犯者、五位已上停一年封祿、六位已下解却見任、已外決杖八十、冀將淳風俗能成人善、習禮於未識、防亂於未然者、而今綸綍出後、年代久遠、有司解體、弃而不行、因茲諸司諸院諸家諸所之人、新拜官職、初就進仕之時、一號荒鎭、一稱燒尾、自此之外、責人求飮、臨時群飮等之類、積習爲常、醉亂無度、主人每有竭財之憂、賓客曾無利身之實、若期約相違、終至陵轢、營設不具、定爲罵辱、非啻爭論之萌牙、誠作鬪亂之淵源、望請、准據勅文、嚴加禁止者、但雖聽集者、不當過十人、亦不得飮酒過差、至於鬪爭、若有違者、親王以下、五位已上、並奪食封位祿、自外如前

格、若容隱不糺、同處此科、但可聽之色、具存別式、禁斷諸家諸人被除神宴之日、諸衛府舍人及放縱之輩、求酒食責被物、曰同前起請、儛、諸家諸人、至于六月十一月、必有被除神宴事、絃歌醉舞、欲悅神靈、而諸衛府舍人、并放縱之輩、不緣主招、好備賓位、侵幕爭入、突門自臻、初來之時、似愛酒食、臨將歸却、更責被物、其求不給、忿詬詈辱、或亦託神言叱、恐喝主人、如是濫惡、逐年惟新、推彼意況、不異群盜、豪貴之家、尙無相憚、何況於無勢無告之輩哉、是而不糺、何云國憲、望請、嚴仰所司、一切禁遏者、若有犯者、不論蔭贖、坐從兇鉗、但五位已上、及六位已下把笏者、一如上條、又知見不糺之人、必將科違勅罪、如力不堪相捉者、須錄其名進所司、以從五位下行皇太后宮少進長統朝臣三助爲大進、從五位下行皇太后宮大進高向朝臣公輔爲式部權少輔、伊豆守外從五位下長峯宿禰恒範爲右京權亮、從五位下行皇太后宮少進兼齋院次官藤原朝臣忠主爲齋院長官、正五位下行右衛門權佐兼參河權守藤原朝臣廣基爲攝津權守、右衛門權佐如故、散位從五位上坂上大宿禰貞守爲丹波權守、參

○賓客、賓は諸本及格に據て補ふ
○晋牙、牙は芽に同じ
○亦不得飮酒過差至於鬪爭、原本に不及至の二字なし諸本及格に據て補ふ
○五位已上、諸本及格已を以に作る下同じ
○食封位祿、位は格に據て補ふ
○被除神宴、被除は六月水無月祓、神宴は十一月新嘗の宴なり新嘗の宴は古は上下一般に之を行へり此に神宴といへるは蓋是なり
○責被物曰、曰は原本亦に作る諸本に據て改む
○同前起請、同前は撰格所を云
○六月十一月、原本一を二に作る諸本及格に據て改む六月は祓除に係り十一月は神宴に係る
○不緣主招、緣は原本待に作る諸本及格に據て改む
○賓位、原本位を伍に作る格に據て改む
○侵幕爭入、幕は六月祓に河邊に幕を張れるを云なるべし
○忿詬詈辱、詬詈は格に詬罵に作る

議從四位上行右近衞權中將藤原朝臣常行爲備前權守、本官如故、從五位上行侍從兼齋院長官藤原朝臣水谷爲安藝權守、侍從如故、○廿四日辛丑、制、太皇太后皇太后宮舍人、待職宛文、聽補他職、自今已後、立爲恒例、伊勢大神宮幷豐受神宮禰宜、帶五位者、其資人以神郡人補之、永爲恒例、從四位上行下野權守利基王卒、利基者、二品賀陽親王之第六子也、少年入學、頗涉史漢、承和末年、爲文章生、嘉祥三年、授從四位下、天安三年、任侍從、貞觀五年、加從四位上、俄而遷下野權守、卒時年卌五、○廿五日壬寅、地震、勅以大和國田廿八町借施入石上神宮寺、須待造寺畢還收、○廿六日癸卯、右京人正六位上安峯連小嶋、從六位下安峯連眞魚等五人、改連姓賜宿禰、其先百濟人也、○廿七日甲辰、有星、出織女入女林、○二月丁未朔、釋奠、外從五位下行直講苅田首安雄講周易、文章生等賦詩如常、○二日戊申、春日祭如常、以信濃國伊奈郡寂光寺、筑摩郡錦織寺、更級郡安養寺、埴科郡屋代寺、佐久郡妙樂寺、並預之定額、○四日庚戌、祈年祭、公卿向神祇官、奉祭如常、○七日癸

○坐從髠鉗、髠は剃髮、鉗は鉄を以て頸を束するなり共に古刑法、史記張耳傳に見ゆ
○相捉、捉は原本投に作る格に據て改む
○藤原朝臣忠主、朝臣の二字は九年二月辛巳紀に據て補ふ
○水谷、水は原本永に作る諸本及上下の文に據て改む
○待職兎文、原本待を侍に作り文の字なし諸本に據て改め補ふ
○利基王卒、桓武天皇御孫にて賀陽親王の子なり嘉祥三年四月甲子從四位下貞觀元年正月庚午侍從五年正月庚午從四位上
○賀陽親王、桓武天皇々子にて葛原親王同母弟貞觀十三年十月八日薨七十八
○年卌五、淀本及紀略卌を卅に作る
○借施入、借は類史百八十に據て補ふ諸本には入字なし
○石上神宮寺、大和志に山邊郡永久寺在山口村東、内山、又云石上神宮寺と見ゆ
○安峯連、他に見えず

丑、園韓神祭、公卿向宮内省、奉祭如常、神祇官奏言、信濃國水内郡三和、神部兩神、有忿怒之心、可致兵疫之灾、勅、國司講師虔誠潔齋奉幣、并轉讀金剛般若經千卷、般若心經萬卷、以謝神怒、兼厭兵疫、○十日丙辰、勅、貞觀六年正月七日、詔復天下百姓傜十日、而在諸國造兵司雜工戶、猶役卅日、司徵其料、宜准詔旨同復、○十三日己未、以齋宮頭從五位下藤原朝臣諸房爲中務少輔、散位從五位上藤原朝臣三直爲陰陽頭、從五位上清原眞人利見爲散位頭、伊賀守從五位下粟田朝臣碓雄爲玄蕃頭、散位從五位下藤原朝臣門宗爲刑部少輔、從五位下當世王爲正親正、從五位下藤原朝臣諸藤爲齋宮頭、從五位下行攝津權介清瀧朝臣峯成爲正介、從五位下行鼓吹正上毛野朝臣綱主爲伊賀守、豐後守從五位下藤原朝臣廣守爲伊勢權介、外從五位下行神祇權大祐卜部宿禰眞雄爲參河權介、中務少輔從五位下橘朝臣主雄爲駿河權守、散位從四位上眞内王爲下野權守、從五位下源朝臣矜爲美作權介、從五位下源朝臣双爲備後權守、從五位下守内匠頭藤原朝臣維範爲安

○女林、女は原本羽に作る諸本に據て改む天市垣内の北に女牀あり三才圖會に女牀三星在天紀之北爲後宮御女云云とあり林は牀の訛なるべし

（二月）寂光寺、今座光寺あり座光寺卽ち寂光寺なるべし

○錦織寺、筑摩郡錦服鄕にあり今も村名存す錦織寺は後の岩殿寺なりと云

○安養寺、今詳ならず

○屋代寺、埴科郡屋代鄕にありしなるべし今詳ならず

○妙樂寺、今詳ならず

○三和神部兩神、三和神は神名式信濃國水内郡美和神社とあり今水内郡三輪村にあり、神部神は式外、所在未詳

○兵疫之灾、疫は諸本疾に作る下同じ

○虔誠潔齋、原本虔を至に作り潔齋を齊潔に作る類史十一に據て改む、諸本虔を度に作るは虔の訛なり

○徵其料、料は原本断に作る諸本に據て改む

○齋宮頭、原本宮下に寮字あり諸本に據て削る下同じ

藝權介、內匠頭如故、權大外記正六位上上毛野朝臣澤田授從五位下、爲肥前守、肥前介正六位上紀朝臣繼雄授從五位下、爲豐後守、授從五位下行上總介藤原朝臣萬枝從五位上、神祇官奏言、大和國三歲神、舊無神主、而新置之、致祟咎實由此、仍更停焉、○十四日庚申、神祇官奏言、肥後國阿蘇大神懷藏怒氣、由是可發疫癘、憂隣境兵、勅國司潔齋、至誠奉幣、幷轉讀金剛般若經千卷、般若心經萬卷、大宰府司於城山四王院、轉讀金剛般若經三千卷、般若心經三萬卷、以奉謝神心、消伏兵疫、○十六日壬戌、勅遣十一僧、向於攝津國住吉神社、轉讀金剛般若經三千卷、般若心經三萬卷、以奉謝神心、消伏兵疫、太政官處分、定左右京白米一升直錢卌文、前廿六文、今加十四文、黑米卅文、前十八文、今加十二文、是歲、穀價騰踊、東西津頭、白米一斛直七貫二百文、黑米四貫四百文、由是增定京邑沽價、○廿一日丁卯、左中辨正五位下丹墀眞人貞峯等賜姓多治眞人、先是貞峯等上表曰、因土命氏、百王之彝規、分姓成親、千古之茂典、姓乖其本、何記皇流、氏失其初、誰知天應、私撿古記、檜隈廬

○粟田朝臣雄雄、原本粟を篥に訛れり諸本に據て改む
○卜部宿禰眞雄、宮本內イ本眞雄を平麻呂に作るは非なり
○眞內王、嘉祥二年正月壬戌紀・仁壽元年四月癸卯紀何れも貞內王とあり眞は貞の訛か
○三歲神、神名式大和國葛上郡葛木御歲神社（名神大月次新嘗）とある是なり
○憂隣境兵、憂は原本擾に作る秘本前本淀本及類史十一に據て改む
○四王院、大宰府にあり又四王寺と云
○般若經三千卷云云、十六日壬戌の條三千卷以下消伏兵疫に至る十九字秘本閣本等の諸本なし衍かと思へど類史十一にはあり故に舊に仍て改めず
○白米一斛直、直は諸本に據て補ふ
○四貫四百文、百上の四字は諸本及類史八十に據て補ふ
○多治比眞人、錄左京皇別に多治比眞人宣化天皇々子賀美惠波王之後也とあり

○因士命氏、左傳隱八年に天子建德因生以賜姓胙之土而命之氏とあるに據れり
○撿古記、原本古を吉に作り記字なし諸本に據て改め補ふ
○檜隈廬入野宮、檜以下の四字は諸本に據て補ふ
○宣化天皇、化は原本和に作る諸本に據て改む
○惠波皇子、古事記に惠波王とあり書紀には上殖葉皇子とあり惠波は記に據れり原本には惠上に加美の二字あれど今秘本以下の諸本に據て削る
○多治比花、多治比は虎杖なり諸本多比の二字なく治花とあり多治比花を修して治花といへるなるべしと思へど姑く舊に仍る
○多治比古男、諸本治字なし
○此時、原本此を斯に作る諸本に據て改む
○無敢駁論、原本敢字なく論下に之字あり今諸本に據て補ひ削る
○貴不失眞、前本眞上に其字あり
○則容因實、容は原本言に作る諸本に據て改む

入野宮御宇宣化天皇皇子惠波皇子生十市王、十市王生多治比古王、此王生産之夕、忽多治比花、飛浮湯沐釜、以斯冥感、名多治比古王、成長之後、固執謙退、奏請求姓、因賜姓多治比公、便以名爲姓、存其舊意、飛鳥淨御原(天武)天皇十三年十一月一日、定八姓十三氏、是時多治比古男、左大臣正二位志摩公賜姓眞人、志摩眞人是貞峯之高祖父也、天平六年、遣唐使正三位行中納言兼皇太子傅式部卿多治比眞人廣成入唐之日、改作丹墀、復命之後、猶用舊姓、傳來百年、無心變改、天長九年四月廿五日、木工頭從五位上多治比眞人貞成等、奏請改多治比三字、爲丹墀兩字、當于此時、貞峯等、身非氏長、不預私議、心懷不穩、無敢駁論、夫物貴不失眞、理則容因實、豈偏貴入唐之新文、訛所生之舊字乎、加之、竊案文辭、倩(ツラく)思義理、丹墀眞人、是渉忌諱、伏願、以古多治字、換今丹墀姓、但緣煩文、請省比字、雖除一字、稱謂不變、然則存先祖之感生、貽孫謀於不朽、不勝懇款之至、拜表以聞、詔許之、○廿九日乙亥、勅、飛驒國年貢匠丁一百人、三箇年間、停卌人、貢六十人、○三月丁丑朔、圖書寮置寮掌一員、把笏、

以眞言宗僧、任東寺三綱、經階業者、任西寺三綱、永以爲例、○二日戊寅、授大和國從五位下神皇産靈神正五位下、是日、勅、沙彌深寂賜姓貞朝臣名登、叙正六位上、貫右京一條一坊、先是貞觀五年九月廿日、三品行中務卿諱光孝天皇親王、四品兵部卿兼行上總太守本康親王、參議正四位下左兵衞督源朝臣多、從四位上行伊勢守源朝臣冷、散位從四位上源朝臣光等奏言、深寂是仁明天皇更衣三國氏所生也、承和之初、賜姓源朝臣、預時服月俸、厥後依母過失、被削屬籍、仍出家入道、嘉祥之末、更垂優矜、同於法榮、尋道之列、預時服月料、聖躬不豫之間、與諱等共侍嘗藥、登遐之時、緣身出家、不預處分、今善緣不遂、再落俗塵、所生之子、隨亦有數、而名猶編僧身、未有貫附、出仕之理既絶、沉淪之悲良深、夫爲子之道、緇素無別、出家之時、既列皇子、還俗之日、何爲非兒、然則准之人間、宜復本姓、但伏聞、嵯峨遺旨、母氏有過者、其子不得爲源氏、望請、賜姓名貞朝臣登、叙位階、貫京職、至是詔許之、○三日己卯、天皇潔齋奉燈如常、○四日庚辰、大宰府解偁、觀音寺講師傳燈大法師位性忠申牒偁、寺家人淸

○感生、其の感じて生るゝ所のもの卽ち多治比花を云
(三月)寮掌一員、寮は諸本及類史百七に據て補ふ
○神皇産靈神、式外、所在未詳
○右京一條、一條は古今集目錄に四條に作る
○三國氏、內藤廣前云氏當作町、古今目錄曰三國町正四位下紀名虎女仁明天皇更衣貞登母登者仁明天皇第十五子也按三國氏他書無所見
○月料、料は原本俸に作る下文及古今集目錄に據て改む
○法榮尋道之列、大日本史注に共未詳何人法名とあり、之は原本三に作る諸本に據て改む列或は例の訛か
○嘗藥、嘗は原本掌に作る諸本に據て改む
○不預處分、預は原本豫に作る諸本に據て改む
○申牒偁、偁は諸本に據て補ふ

○貞雄宗主、原本貞雄の二字なく主を位に作る諸本に據て補ひ改む
○天平年中、諸本年字なし
○披訴、訴は原本許に作る黑川校本に據て改む
○裁許、原本勅裁に作る諸本に據て改む
○從良、原本徙居に作る諸本に據て改む
○竹野郡、今浮羽郡に入る
○香山、天平勝寶元年閏五月癸丑紀（續紀上三六七頁）に見えし香山藥師寺是なり大和志に十市郡興善寺在戒下村一名香山寺とあり
○太政官判定云云、此事三代格六に見ゆ參看すべし
○諸國公廨公廨田、國下の公廨二字は類史八十四に據て補ふ
○土左、原本左を佐に作る諸本及類史に據て改む
○百花亭、良相の第なり山城志に西三條、三條北朱雀西壬生東又號百花亭とあり
○玄髻、張衡七辯に秀色美艷鬢髮玄髻とあり婦女を云

貞、貞雄、宗主等三人、從五位下笠朝臣麻呂五代之孫也、麻呂、天平年中爲造寺使、麻呂通寺家女赤須、生清貞等、卽隨母爲家人、清貞祖父夏麻呂、向太政官幷大宰府、頻經披訴、而未蒙裁許、夏麻呂死去、清貞等愁、猶未有止、寺家覆察、事非虛妄、望請、准據格旨、從良貫附筑後國竹野郡、太政官處分、依請、○五日辛巳、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、於近京廿六箇寺、及大和國香山、長谷、壺坂等寺、三箇日間、轉讀金剛般若經、○七日癸未、太政官判定新置介掾諸國公廨、公廨田、事力數、甲斐、能登、丹後、石見、周防、長門、土左、日向八箇國介給公廨四分、公廨田一町六段、事力五人、飛驒一國掾公廨三分、公廨田一町二段、事力四人、○八日甲申、勅遣大安寺僧傳燈法師位一如、於筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後等國諸神社讀經、○廿一日丁酉、殞霜、○廿三日己亥、鑾輿幸右大臣藤原朝臣良相西京第、觀櫻花、喚文人賦百花亭詩、預席者卌人、四位四人、五位八人、六位廿八人、天皇御射庭、賜親王以下侍從已上射、左右近衛中少將預焉、中鵠者賜布、伶官奏樂、玄髻稚齒十二人、遞出而舞、

○遞出、遞は原本逓に作る諸本及類史三十一に據て改む
○晩奏女樂、晩は原本脱に作る諸本及類史に據て改む
○還宮、宮は諸本及類史に據て補ふ
○右近衛權中將、此下諸本に從字あり私記には有侍從二字とあり
○左近衛中將、原本中の上に權字あり諸本及類史に據て削る五年二月癸卯紀に爲中將とあり權中將にあらず
○直方、類史眞方に作るは非なり
○眞繼、眞は原本直に作る類史及十二年正月戊寅紀に據て改む
○伊統朝臣、伊統は原本紀伊に作る諸本に據て改む
○物部神、五年六月己亥紀に出づ
○美和神、同上
○宇波刀神、神名式甲斐國巨麻郡宇波刀神社、今北巨摩郡上手村
○百廿歩、原本二十七歩に作る諸本に據て改む
○建請者、建は原本違に作る[illegible]閣本谷本に據て

晩奏女樂、歡宴竟日、賜扈從百官祿各有差、夜分之後、乘輿還宮、是日、進參議右大辨從四位上兼行播磨權守大枝朝臣音人、參議右近衛權中將兼備前權守藤原朝臣常行、參議左近衛中將兼伊豫守藤原朝臣基經階、並加正四位下、授從五位上行少納言兼侍從藤原朝臣諸葛正五位下、從五位下左兵衛權佐藤原朝臣直方從五位上、散位正六位上大枝朝臣氏雄、木工少允從七位下布勢朝臣眞繼、並從五位下、外從五位下伊統朝臣善子從五位下、已上叙位、並是宴餘之殊奬也、○廿八日甲辰、甲斐國從五位上勳十二等物部神、美和神、並授正五位下、從五位下宇波刀神從五位上、大和國平城京内田地十六町三段百廿歩、賜從四位下行山城權守在原朝臣善淵、先是善淵奏言、奉爲平城太上天皇、建精舍於陵次、買得舊京荒地、墾闢爲田、充修理精舍之資、而内藏寮稱格旨、收爲勅旨田、請賴恩奬、永爲私田、詔許之、○閏三月丙午朔、鑾輿幸太政大臣東京染殿第、觀櫻花、王公已下及百官扈從、天皇御釣臺觀釣魚、還射殿、御弓矢、王公已下以次射、御東門覽耕田農夫田婦、雜樂皆作、還

御望遠亭、覽翫花樹、伶人陪於歌樹、鼓鐘備陳、絲竹繁會、童男妓女、花間迭舞、喚能屬文者數人、賦落花無數雪詩、終日樂飲、皇歡是洽、群臣具醉、宴竟、親王已下五位已上、及六府將監尉已下、賜祿各有差、五位已上未得解由者預焉、日暮車駕還宮、是日、召集京城貧窮者於鴨河邊、以新錢五萬文、飯二千五百裹、頒給焉、於近京卅三箇寺、轉讀金剛般若經、般若心經、○五日庚戌、地震、授近江國正六位上天社神從五位下、加賀國司言、居住國內之輩、便任國司、幷士民爲博士醫師者、二箇年間、不給事力、勅許之、但得試之人不在此限、○七日壬子、進伊豫國從三位大山積神階、加正三位、近江國從四位上山津照神、伊豫國從四位上礒野神、野間天皇神、伊豫村神、並授正四位下、近江國從四位下動八等伊香神、伊豫國從四位下瀧神、並從四位上、山城國正六位上降居神從五位下、○十日乙卯、夜、應天門火、延燒棲鳳翔鸞兩樓、○十三日戊午、伊勢國正五位下員辨神、紀伊國從五位上堅眞音神、並授從四位下、○十四日己未、美作國飢疫、賑給之、○十五日庚申、日出之時、營頭出室、入紫微宮、

改む
○勅旨田、田字は諸本になし
(閏三月)遷御、遷は還の訛か
○歌樹、樹は臺の誤あるを云原本樹に作る類史三十一に據て改む
○是洽、洽は原本給に作る類史に據て改む
○召集、集は原本進に作る諸本及類史紀略に據て改む
○天社神、式外、天は尾本閣イ本前イ本及類史十六大に作る、新抄格・勅符抄にも見ゆ
○大山積神、二年閏十月壬戌紀に見ゆ
○山津照神、神名式近江國坂田郡山津照神社、息長村能登瀬
○礒野神、天平神護二年四月甲辰紀(續紀下一三三頁)に出づ式に伊曾乃神社とあり
○野間天皇神、同上に見ゆ天皇の二字或は皇の一字は衍なるべし
○伊豫村神、同上に見え伊豫神に作れり四年九月甲申紀にも見ゆ
○伊香神、元年正月甲申紀に見ゆ

○瀧神、二年閏十月癸亥紀に見ゆ神名式には多伎神社とあり
○降居神從五位下、類史十六にも降居神とあれど傍注に阿刀とあるが正しかるべし草體相似たるより誤れるならむ阿刀神社は神名式山城國葛野郡に見え嵯峨村上嵯峨にあり
○原本從上に並字あり閣本谷本及類史に據て削る
○乙卯夜、夜は類史百七十三になし
○應天門、八省院の正門なり、棲鳳樓は其左に、翔鸞樓は右にあり
○貝猁神、元年五月辛巳紀に見ゆ式は猪名部とす
○堅眞音神、同上に見ゆ音は諸本及式に據て補ふ
○營頭、星名なり晉書天文志に營頭有雲如壞山墮所謂營頭之星所墮其下覆軍流血千里とあり
○紫微宮、北辰天皇大帝の居所星宿の北
○正六位上村主八鈞、宮本上の下に上字あり
○上村主貞成、上字は諸本に據て補ふ
○廣階宿禰、錄右京諸蕃に出自魏武皇帝男陳思王植之後也とあり

色赤黃、○十七日壬戌、左京人左少史正六位上村主八鈞、前出雲大目正七位下上村主貞成等、賜姓廣階宿禰、自言、魏陳思王曹植之後也、左京人木工少屬從七位上日置臣岡成賜姓菅原朝臣、其先與土師宿禰等同祖也、右京人散位外從五位下長田直利世、改直姓賜朝臣、丹後國丹波郡人左近衞將曹從六位上丹波直副茂、改本居貫附山城國愛宕郡、○十八日癸亥、授甲斐國正五位下勳十二等物部神從四位下、○廿二日丁卯、會百官、大祓於會昌門前、以應天門火也、是日、於崇福寺、請廿僧、限以七日、轉讀大般若經、於梵釋寺、請十僧、修四王祕法、限七日訖、並以消災變也、以河內守從五位下菅野朝臣豐持、爲修理知識寺佛像別當、○廿七日壬申、遣廿一僧於山城國河陽離宮、限以六日、轉讀大般若經二部、○夏四月乙亥朔、天皇不御紫宸殿、以停飮宴也、新鑄銅印一面賜隼人司、○四日戊寅、廣瀨龍田祭如常、○五日己卯、於近京十六箇寺及近江國梵釋等寺、限以三日、轉讀金剛般若經般若心經、○七日辛巳、授薩摩國從四位下開聞(ヒラキ)神從四位上、正五位下賀紫久

○菅原朝臣、錄右京神別に菅原朝臣土師朝臣同祖乾飯根命七世孫大保度連之後也とあり
○丹波直副茂改本居、此事十四年八月己亥紀に重出す
○物部神、五年六月己亥紀に出づ
○崇福寺、十大寺の一近江國志賀郡にあり
○梵釋寺、同じく志賀郡
○四王秘法、持國・增長廣目・多聞の四天王を本尊として災厄を攘ひ福德を請招する修法なり
○並以、以は原本此に作る閣本尾本秘イ本及紀略に據て改む並は閣本尾本になし
○知識寺、河內國にあり
（四月）停飲宴、宴は二孟の旬宴なり
○梵釋等寺、原本等寺を倒置す諸本に據て改む
○開聞神、二年三月庚午紀に出づ神名式は枚聞に作る
○賀紫久利神、仁壽元年六月戊午紀に見ゆ
○紫美神、式外、神祇志に所在伊佐郡司野村とす
十年三月壬寅紀重出是非を決め難し

利神正五位上、正六位上紫美神從五位下、式部省奏成選擬階簿、天皇不御紫宸殿、勅大臣、令省行之、以近江國志賀郡延祥寺、預之定額、尾張阿波兩國風澇、百姓飢饉、借貸尾張國正稅稻六萬束、阿波國八萬束、以救民弊也、○八日壬午、灌佛於仁壽殿、如常儀、○九日癸未、授讃岐國從五位下水主神從五位上、○十日甲申、平野祭如常、大祓於建禮門前、以鼓吹司人死也、○十一日乙酉、梅宮祭如常、遣使攝津國住吉神社、奉神財、近江國言、播磨國賀古美嚢二郡夷俘長宇賀古秋野、尺漢公手纏等五人、妄出越境、來在此國、太政官下符播磨國、稱凡夷俘之性、野心無悔、放縱如此、往來任意、出入自由、是則國司防禁疎略、無心存恤之所致也、須守三原朝臣永道專當其事、曉以法教、兼加優恤、慰其愁苦、懲其罪過、自今已後、不得出堺、下知攝津、和泉、播磨、備前、備後、安藝、周防、長門、幷南海道諸國曰、去貞觀四年五月廿日、七年六月廿八日、宣告應追捕海賊之狀、而今有聞賊黨群起、掠奪無息、是則國司不勤肅清也、若不搜捕、猶致殘暴、科罪牧宰、曾無在宥、其捕獲之數、具狀言上、○十

○延祥寺、今詳ならず
○借佃、佃は谷本貸に作る貸佃に同じ
○正税稲、税は諸本及類史八十四に據て補ふ
○水主神、承和三年十一月壬申紀（續後紀九五頁）に見ゆ
○美嚢、倭名抄國郡部に美奈木さ訓めり
○手纒、手は原本平に作る諸本に據て改む
○太政官下符、下は原本太上にあり諸本に據て改移す
○爽俘之性、性は原本姓に作る諸本に據て改む
○若不捜捕、原本不字なく捜を追に作る秘本閣本前本等に據て改め補ふ
○曾無在有、原本在を任に作り有上に無字あり衍なり秘本以下の諸本に據て改め削る
○若狹國、原本國下に曰字あり諸本に據て削る
○可有来竊、有は諸本に據て補ふ
○過所、關市令に凡欲度關者皆經本部本司請過所とあり關を通過する手形にて旅行券なり
○警急、原本驚怱に作る諸本に據て改む

四日戊子、勅、去閏三月十日夜、應天門及東西樓觀、忽有火災、皆悉灰燼、求之蓍龜、猶見火氣、自非神助、災何消伏、宜令五畿七道、奉幣境內諸神、仍須長官潔齋、躬向社頭、敬以奉進、必致如在、○十五日己丑、公卿就太政官曹司廳、賜文武官成選位記、宣制如常、○十六日庚寅、下知山城、若狹國、警戒兵事、卜筮所告、兩國應愼、○十七日辛卯、下知大宰府曰、迺者京師頻視恠異、陰陽寮言、隣國兵可有來竊、安不忘危、宜勤警固、譴責豐前、長門等國司曰、關司出入、理用過所、而今唐人入京、任意經過、是國宰不愼督察、關司不責過所之所致也、自今以後、若有警急、必處嚴科、○十八日壬辰、若狹國言、納印公文庫、幷兵庫鳴、下知國司曰、今月十六日、宜告彼國、戒愼兵事、今言、兵庫自鳴、陰陽寮言、遠國之人、當有來投、兵亂天行、成災相仍、宜益警衞、兼防災疫、○廿一日乙未、大祓於建禮門前、以辨官大藏省並有穢也、○廿二日丙申、諸衞警固、緣賀茂祭也、○廿三日丁酉、賀茂祭朝使、幷齋內親王、不向於社、山城國隨例奉祭、○廿四日戊戌、諸衞解嚴、○廿五日己亥、延屈七僧於太政官候廳、限以三日、轉讀金

〇戢傾兵事、諸本事を戒に作る戒の訛なるべし
〇消餘殃、消は原本清に作る秘本閣本及紀略に據て改む
〇安倍朝臣貞行、貞は原本眞に作る三年正月戊子紀及文德紀天安二年二月辛卯紀(其他にも見ゆ)に據て改む
〇地子田、地子を收めて人民に耕作せしむる田を云
(五月)度補國分寺僧、度は得度なり諸本寺字なし
〇宮成、宮は原本官に作る秘本閣本に據て改む
〇狛人野宮成、錄山城神別に狛人野大物主命兒栫日方命之後也とあり
〇橘朝臣永名薨、永名の事蹟は續後紀天長十年三月癸巳紀に初見、文德紀には見えず本史には貞觀二年十一月壬辰紀に見ゆ
〇天長元年、長は原本年に作る諸本に據て改む
〇二年授從五位下、二年の二字は諸本に據て補ふ

剛般若經、先是今月十四日、應南廊顛仆、仍修善攘災、〇廿六日庚子、勅、修理漏剋之間、賜兵庫大鼓一面於陰陽寮、東西兩寺、及五畿七道、轉讀仁王般若經、以應天門火、消餘殃也、〇廿七日辛丑、上野國言、從五位上行介安倍朝臣貞行催勸百姓、開發田四百卌七町、太政官處分、未班之間、爲地子田、〇是月、自朔至今、霖雨未止、〇五月甲辰朔、日有蝕之、〇五日戊申、停端午之節、〇八日辛亥、霖雨、請六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、〇常陸國久慈郡人椿戸門主、嘉祥三年出家、度補國分寺僧、今自修解文、偁、親父宮成、任久慈郡權主政、貞觀六年死、弟妹多數、無人育養、望請返附本貫、以繼家業、詔許之、〇伊賀國飢、賑給之、〇九日壬子、醫得業生從六位上狛人野宮成進位二階、以奉試及第也、是日太政官處分、出羽國位祿物價、一准陸奧國、〇十日癸丑、散位從三位橘朝臣永名薨、永名者、左京人、贈太政大臣正一位奈良麻呂孫、而從四位下入居第四之子也、弘仁之末任但馬掾、天長元年任春宮少進、二年授從五位下、爲大藏少輔、未幾遷民部少輔、明年遷春宮大進、兼丹波權介、

○逸勢謀逆之事、承和九年七月なり
○嘉祥二年、二は原本三に作る秘本閣本尾本及嘉祥二年十一月壬申紀に據て改む
○命式部省輔讀擬文訖、原本輔及訖字なし輔は諸本に據り訖は伴校本に據て補ふ秘本前本等訛に作り閣本訛に作るは並に訖の訛なり
○飢儉、儉は歲歉也（歲不登曰歉）
○六尺三寸以上者、以上の二字は宮本伴校本に據て補ふ
○天長四年云云、天長四年九月廿六日の太政官符なり三代格十六に見ゆ
○巡撿、巡は原本邊に作る諸本に據て改む下同じ
○疎漏、疎は原本踈に作る格に據て改む
○曾不作營彼此閑廢、原本營を勞に作り曾字なし格に據て改め補ふ
○令盡地利者、者は原本自に作る格に據て改む
○勞作、勞は格營に作る

九年授從五位上、十年授正五位下、同年授從四位下、承和初任播磨守、數年爲右兵衛督、加爵從四位上、九年七月坐弟逸勢謀逆之事解任、十三年爲彈正大弼、十四年遷神祇伯、嘉祥二年授正四位下、貞觀二年進爵爲從三位、薨時年八十七、○十一日甲寅、式部省奏諸國銓擬郡司擬文、天皇不御紫宸殿、勑大臣於仗下命式部省輔讀擬文訖、大臣覆奏如常、○十三日丙辰、雷雨、諸衛人仗陣於殿下、○十七日庚申、紀伊國飢、賑給之、○十九日壬戌、京師飢儉、賑之、下知相摸、武藏、上總、下總、常陸等國、選進長人六尺三寸以上者、太政官處分、停伊勢、越前、加賀、越中、丹波、丹後、因幡、播磨、備中等九國年貢馬革百張、造兵司修理年料甲百領、令諸國貢馬革二百張、以充彼料、貞觀五年、減修理五十領、仍半折輸焉、○廿一日甲子、勑左右京職、分明勸糺、以京中閑廢地賜願人、先是天長四年右京職言、弘仁十年十一月五日格云、左右京兩職解偁、巡撿京中、閑地不少、或貧家疎漏、徒餘空地、或豪門占買、曾不作營、彼此閑廢、多失地利、須並加勸課、令盡地利者、勑許之、自後課條喩戶、勤俾勞作、而人稀

居少、不事耕營、徒過日月、稍成藪澤、或他人加功、其主妨奪、因茲人倦競作、無心勤營、荒廢之由、事緣於此、彈正巡撿之日、恒責過狀、每月贖銅、爲彼閑地、時入厥罪、官人之愁、莫大於斯、望請、如此空閑之地、自今以後、賜冀求之輩、永爲彼常地、于時有勅曰、愚暗之民、可共樂成、宜惣計閑地先中其數、重課其主、悉令耕種、一年不耕者、收賜冀人、若授地之人、二年不開者、改判賜他人、遂以開熟之人、永爲彼地主、但外任之宰、解秩之間、環堵爲墟、況園地乎、此等地者、非勘勾限、左京准此、雖格立之後多經年序、而荒廢倍先、勸督無聞、是所司疎略、不愼格旨、今擬欲改張、恐愚民失所、須職吏存心、今年之間、子細告誘、勸令耕營、若猶有不遵者、始自明年、改給他人、一如格旨、○唐人任仲元、非有過所、輙入京城、令加譴詰、還大宰府、重下知長門大宰府、嚴關門之禁焉、○廿二日乙丑、授土左國從五位下殖田神從五位上、正六位上殖田上神、峯本神、祈年神、並從五位下、○廿三日丙寅、公卿就太政官曹司廳、任諸國郡司、策命如常、○廿四日丁卯、以大和國平群郡雲甘寺從五位下檜本神、列於官社、○廿六日己巳

○愚暗之民、原本暗を晴に作る諸本に據て改む
○開熟之人、熟は墾の訛かと思へど格にも熟とあり開墾して熟田とする意なるべし
○外任之宰、地方官を云任は原本住に作る諸本に據て改む
○園地乎、乎は原本弃に作る諸本及格に據て改む
○非勘勾限、勾は原本糺に作る諸本及格に據て改む
○不遵者、遵は原本導に作る諸本に據て改む
○土左國、左は原本佐に作る秘本閣本に據て改む
○殖田神、神名式土左國長岡郡殖田神社、久禮田村殖田
○殖田上神、式外、殖田神社後方山上にありと云
○峯本神、峯は原本岑に作る今諸本に據る神階記には峯本神を朝岑神坂本神とす神祇志料は之に據て訂正したれど秘本閣本前本及類史十六にも峯本神とあれば改めず
○並從五位下、並字は諸本に據て補ふ
○檜本神、貞觀三年十月

○壬戌紀に出づ
○奉參神宮、參は原本祭に作る秘本に據て改む
○薩都神、續後紀承和十三年九月丙午紀に出づ
○天之白羽神、神名式常陸國久慈郡天之志良波神社、佐都村白羽、天之の二字は諸本及類史十六に據て補ふ
○天之速玉神、同式同郡天速玉姫命神社、今多賀郡坂上村水木
○圓珍、智證大師年譜に詳に見ゆ
○止觀、天台宗を云天台大師南嶽より三種の止觀を傳受す
○寂澄、寂は原本最に作る今諸本に據る
○父師、圓珍は義眞の弟子にて義眞は寂澄の弟子なれば寂澄を祖師といひ義眞を父師と云
○延暦年中入唐、寂澄義眞は延暦廿三年共に入唐
○金剛頂蘇悉地經業、叡山要記に嘉祥三年奏請置一金剛頂蘇悉地兩業得度者とあり金剛頂經と蘇悉地經との兩業なり頂蘇の二字は諸本に據て補ふ
○圓珍入唐、仁壽三年入

勅、伊勢齋內親王來六月祭停ㇾ參二神宮一、先ㇾ是大神宮司言、頃年國內疫病繁發、神郡百姓病死者衆、經二觸邪穢一無二人駈役一、望請准二據舊例一、停下齋內親王奉二參神宮一之儀上、但祭祀之禮、宮司供奉、○廿七日庚午、授二常陸國從五位上勳七等薩都神正五位上、正六位上天之白羽神、天之速玉神並從五位下一、備前國旱疫、以二正稅十萬束一、假二貸窮民一、○廿八日辛未、典侍從四位上藤原朝臣有子卒、勅贈二從三位一、有子者、贈太政大臣長良朝臣之長女也、爲ㇾ性婉順、儀貌閑雅、仁壽四年授二從五位下一、天安二年爲二典侍一、貞觀二年授二從四位下一、六年加二從四位上一、有子適二大納言平朝臣高棟一、生二二男二女一、○廿九日壬申、勅令三內供奉十禪師傳燈大法師位圓珍、弘二傳眞言止觀兩宗敎一、先ㇾ是圓珍奏言、祖師十禪師傳燈大法師位寂澄、父師十禪師傳燈大法師位義眞、延暦年中、奉ㇾ勅入唐請益、皈朝之日、並蒙ㇾ賜二勅印公驗一、又師兄前入唐天台宗請益十禪師傳燈大法師位圓仁復命之時上奏、春秋二季、永修二灌頂一、兼加二金剛頂蘇悉地經業年分度者一、皆爲二永代不朽之驗一也、圓珍奉ㇾ詔入唐、傳二得眞言天台兩宗敎文一、以添二先師之遺

唐、齊衡三年歸朝

○驛馬、驛に原本驛に作る前本谷本に據て改む
○是月、月は原本日に作る宮イ本黑川校本に據て改む

跡、奉翼皇王之至化、伏乞准例、蒙賜牒身公驗、兼下知所由、隨力流傳、擁護國家、利益群生、酬先師恩、謹具求法來由、伏聽天裁、從之、太政官處分、伊勢國度會郡驛馬、割國內驛馬直、預大神宮司買充之、立爲永例、○是月、淫霖、

○第十二、原本此下に終字あり諸本に據て削る

日本三代實錄卷第十二

日本三代實錄卷第十三

起貞觀八年六月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

六月甲戌朔、授信濃國無位武水別神從二位、無位會津比賣神、草奈井比賣神、並從四位下、伊勢、因幡國飢疫、並賑給之、○三日丙子、遣木工權大允正六位上藤原朝臣直宗、率史生長上將領等、向近江國、大允從六位下中臣朝臣伊度人率史生將領等、向丹波國、並採造應天門幷東西樓料材、太政官處分、止觀眞言、雖異其業、至于說盡佛法、究竟實敎、其致一也、是以故傳燈大法師位寂澄、詳知兩業一味、誓以護國、彼此兼行、譬猶如人之兩目、鳥之雙翼者也、先師既開兩業、以爲我道、代代座主相承、莫不兼傳、在後之輩、豈乖舊迹、如聞、山上僧等、專違先師之誓、互成偏執之心、殆以不顧扇揚餘風、興隆舊業、凡厥師資之道、闕一不可、傳弘之勤、寧不兼備、自今以後、宜以通達兩業之人、爲延曆寺座主、立爲恒例、

○左近衞大將、衞は秘本前本谷本に據て補ふ

【貞觀八年】武水別神、神名式信濃國更級郡武水別神社(名神大)神祇志に今在八幡村、社傳有稱武水分地之云

○會津比賣神草奈井比賣神、並に式外、會津比賣神は所在未詳、草奈井比賣神は神祇志に所在諏訪郡北眞志野村とす

○直宗、二年十一月壬辰紀に眞宗とあり是非決め難し

○將領、職名、匠丁の頭となる人

○止觀眞言云云、天臺座主記に見ゆ

○其業、其は諸本に據て補ふ

○雙翼、雙は原本羽に作る諸本に據て改む

○師資之道、師資は師弟なり云云弟子は師を資助するを以て資と云老子廿七章

に善人不善人之師不善人善人之資とあり
○四日丁丑勅、太政官符として三代格三に出づ
○今年正月廿三日云云、已に見ゆ
○唯爲俗人、原本人下に之字あり衍なり格に據て削る
○嫌疑、諸本疑殆に作る格は此に同じ
○致清愼、致は原本令に作る格に據て改む
○複試業、複は原本復に作る前本及格に據て改む
○宜禁僧侶飲酒及贈物若、此十字格に亦宜同禁猶の五字に作る
○即與同罪、原本格に據て此下に曾不寬宥の四字を補ひたれども祕本以下の諸本になし故に之を削る
○高子內親王薨、紹運錄に高子內親王齋宮母百濟氏とあり要記高子に作る
○燕、類史(百六十五)紀略に鷰に作る
○皇女、皇は諸本及紀略に據て補ふ
○敎俊、俊は原本復に作る祕本尾本及紀略に據て改む
○卜爲、卜は原本下に作る谷本に據て改む

○四日丁丑、勅、頃年習俗澆薄、飲宴無度、損人費物、職此之由、是以今年正月廿三日、殊施嚴科、重加禁止、唯爲俗人、制茲淫費、即於僧侶、有何嫌疑、然恐有破戒濫行之輩、違佛教乖王法、非因療病、妄白飛觴、不知有識之嘲、無顧護法之厭、宜令所司牒示僧綱、下知諸寺、嚴加禁遏、勤致清愼、若有違越者、必錄其名、令送所司、科罰一如法條、又出家之人、理無生產、唯仰一鉢、當有何蓄、而今或聞、複試業之時、資供豐盈、贈遺煩費、是以身素清貧、無階營設者、雖有高才、難果其業、豈云釋迦之元意、緇徒之淑行乎、自今而後、宜禁僧侶飲酒及贈物、若有犯、其罪准上、僧綱三綱、知聞不糺、及隱忍不言、即與同罪、○七日庚辰、地震、○九日壬午、令五畿七道奉幣境內諸神、兼轉讀金剛般若經、旱也、○十一日甲申、停月次祭、神今食祭、以有穢也、大祓於建禮門前、○十三日丙戌、武藏國去年風雨、今年飢旱、賑給之、○十四日丁亥、丹波國獻白燕一、○十六日己丑、地震、無品高子內親王薨、喪家固辭、故不任緣葬之司、輟朝三日、內親王者仁明天皇之皇女、母百濟王氏、從五位上敎俊之女也、承和初、卜爲賀茂齋、仁

○大極殿、極は諸本及紀略に據て補ふ
○上左國、原本左を佐に作る諸本に據て改む下同じ
○朝岑神、神名式土佐國長岡郡朝峯神社、今同郡介良村
○人功恒乏、恒は原本粗に作る祕本に據て改む閣本尾本谷本等相に作るは恒の訛なり
○衆例、例恐くは列
○階業、階とは五階（試業、複、維摩立義、夏講供講）三階（試業、複、維摩立義）の類を云
○舍利會、舍利講又は舍利報恩講と云佛舍利を供養する法會なり
○圓仁阿闍梨、阿は原本授に作れるを改む

明天皇崩後、停齋歸第焉、○十八日辛卯、請六十八僧於大極殿、限以三日、轉讀大般若經、以祈雨也、是日、雷而不雨、大祓於建禮門前、○廿日癸巳、授土左國從五位下朝岑神從五位上、○廿一日甲午、爲延曆寺、立式四條、其一、禁制修灌頂日職掌僧闕怠曰、灌頂法者、鎭國御願、修來尙矣、而年序既積、人心漸薄、遂使差職掌僧、多致辭退、辨行諸事、人功恒乏、若不立法制者、後代何修、今須一年不參者、一年不聽齒衆、二三年衆闕者、永不預衆例、亦拘階業、既遂階業之輩、一年不參、至於擬補、一年抑止、既得所之類、有闕怠者、觸寺家、所請之事、一切不判行、但沈重病、及居師僧父母喪者、不在此限、其二、禁制供舍利會職掌僧闕怠曰、舍利會者、故座主圓仁阿闍梨、誓以護國、合寺衆僧、上中下倶隨喜、連名同爲檀越、闍梨生前、加署奉行、豈至沒後、早致背忘、況是奉酬釋迦之德、亦乃鎭護朝家之事乎、而頃年差職掌僧、無心助修、永代事業、何不嚴制、今須永爲公會、世々勤修、其有闕怠之類、一准灌頂、將懲其怠、其三、禁制寺裏養馬曰、太政官去貞觀元年九月十七日牒偁、伽藍之風、潔淨爲本、况深山絕頂、

豈有損穢乎、今聞、或人妄養乘馬、踏汙佛壠、食損庭花、自今以後、莫令更然、若乖此制、有濫犯者、一度教喩、返與其主、再有犯者、須捉其馬送於左右馬寮、而愚昧僧等、猶致違犯、雖捉其馬送於寮家、各有所託、隨郎返請、寺司徒有送馬之煩、僧徒都無愼制之意、今須捉馬送寮之日、申請上宣、令寮勤守、若其馬主改心懺悔者、寺家申官、令寮返與、若不觸寺司、請返之類、勿齒僧中、其四、禁制山僧著美服、曰、美麗衣裳、先師所制、故座主圓仁闍梨、亦加嚴制、而山僧等猶頗有著、雖是親族所與、檀越所施、而猶違先式、損山家風、今須一切禁斷蘇芳滅紫靑赤白橡等之色、專以壞色、爲其衣裳、若有違犯者、不預衆例、先是寺家申請施此制、至是聽之、○志摩國飢疫、以尾張國正稅穀賑給之、○廿八日辛丑、是月天下大旱、民多飢餓、東堀河多鮎魚、京師人捕噉之、夜有星、出奎入大陵、○廿九日壬寅、晦、先是大和國言、楯列山陵守等多伐樹木、神祇官卜云、炎旱之灾、實因伐木、是日遣使申謝、告文云、天皇掛畏岐御陵爾恐美恐美毛申賜部止申久、比來涉旬天不雨之天、農業失便利、是有何祟咎天所致乃灾奈良牟止、左右爾

○或人、狩谷校本に人恐衍字と云り
○須捉其馬、捉は原本投に作る諸本に據て改む
○各有所託、託は原本紀に作る祕本閣本尾本に據て改む
○隨郎、郎は原本則に作る閣本前本谷本に據て改む
○僧徒、徒は原本從に作る諸本に據て改む
○今須捉馬、原本須下に令の字あり捉を投に作る祕本閣本尾本等に據て改め削る
○勤守、勤は黑川校本に一本勒に作ると云
○懺悔者、者は原本著に作る閣本尾本宮本に據て改む
○蘇芳、抄調度部染色具に蘇枋(俗音須方)人用染色とあり
○滅紫、紫色の一種縫殿寮式に見ゆ、原本滅を染に作る祕本閣本尾本等に據て改む
○橡、衣服令義解に橡櫟木實也以橡染繒俗云橡衣とあり
○壞色、僧尼令義解に失錯常色漫壞非全者也とあり

○衆例、例恐くは列
○辛丑是月云云、私記に山田本云是月以下至捕噉之當在廿九日壬寅條とあり
○大陵、三才圖會に大陵(八星)在胃北主陵墓、明而大或中星多則天下多死喪或兵起とあり
○楯列山陵、神功皇后の御陵
○恐美恐美毛、恐美の二字は例に據て補ふ
○言上多良久、言は祕本閣本尾本に據て補ふ多は内イ本に須に作る
○畏利天、天は原本支に作る諸本に據て改む
○助賜波牟止、原本賜字なく波を恣に作る賜は諸本に據て補ひ波は宮本及信友校本に據て改む
○恐美、此二字は例に據て補ふ
(七月)高山祭、上に見ゆ
○宮城中、宮城中の神とは神祇官西院坐す神を始め宮内省坐神以下の神等を申せり
○河上、河は祕本川に作る
○大宮柱、原本大の上に貝字あり衍なり類史十一

憂歎岐賜布間爾、大和國司言上多良久、掛畏岐御陵乃木乎、陵守等數多久伐損利、依此天、旱災波所致奈留部之度申世利、此爾驚畏利天、御卜爾令問求爾此事實奈利止卜申世利、是以謹恐懼己止限量毛奈之、犯過留陵守、幷能不巡撿留諸陵司等乎波、今任法爾勘倍賜比罪奈倍賜波牟止須、此狀乎參議正四位下行右衞門督兼讚岐守藤原朝臣良繩、散位從四位下秀世王等乎差使天、謝申天畏申爾奉出須、掛畏岐御陵平久聞食天、時毛換左須甘雨令零女賜比、國家無事久、農稼無妨久、矜惠比助賜波牟止、恐美恐美毛申賜波久止申。大祓於朱雀門前、如常。○秋七月癸卯朔、二日甲辰、大祓於建禮門前、發遣高山祭使從四位下行大學頭潔世王、外從五位下行音博士清内宿禰雄行等。○三日乙巳、班幣宮城中及京畿七道諸神、黑馬一疋奉大和國丹生川上雨師神、並以祈雨也。○四日丙午、廣瀨龍田祭如常。伊勢國大神宮封多氣度會兩郡百姓飢饉、遣使賑給之。○五日丁未、雷雨、諸仗陣於殿前。是日、修月次祭神今食祭於神祇官、去六月十一日、因穢停止、仍今日修焉。○六日戊申、遣使於伊勢大神宮、告以應天門火、

告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃河上乃下都磐根爾大宮柱廣敷立、高天乃原爾千木高知天、稱辭定奉留天照坐大神乃廣前爾申賜倍止申久、去閏三月十日爾、應天門幷東西樓爾火災在天燒盡奴、其後頻有物恠爾依天卜求爾、御體爾御疾事、又火災兵事等乃事可有止卜申世利、因茲掛畏岐皇大神乎仰恃奉天、大幣帛奉出賜牟止所念行須間爾、穢事頻有天至于今未奉出賜、恐懼祇畏利御坐須、因改月擇日天、大舍人頭從五位上磯江王、神祇大副從五位下大中臣朝臣豐雄等乎差使天、忌部神祇權大祐正六位上齋部宿禰高善我弱肩爾、太襁取掛天、禮代大幣帛爾、大唐綵帛錦綾乃妙麗乎添加天、持齋利令捧持天、奉出賜布、此狀乎神奈加良聞食天、今毛今毛如此等乃災波、未然之外爾消滅賜天、天皇朝廷乎與日月共爾、常磐堅磐爾、夜守日守爾護幸奉給止、申賜波久止申、辭別申久、今年旱災有天、百姓農業皆悉枯損奴、此又皇大神乃厚助爾依天之甘雨令降賜天、五穀豐登之女給比、國家安平仁矜幸賜止申給波久止申、又班幣南海道諸神、告文曰、天皇我詔旨止、南海道諸名神乃廣前爾申給久、去四

に據て刪る
○高天乃原爾、爾は類史に據て補ふ
○天照坐大神、大は原本太に作る諸本に據て改む下同じ
○依天、天は類史に據て補ふ
○兵事等、事は諸本に據て補ふ類史には事字あり
○畏利御坐須、御は類史に據て補ふ
○權大祐、祐は原本副に作る祕本閣本尾本及類史に據て改む
○高善我、我は信友校本及類史に據て補ふ
○太襁、太は原本大に作る類史に據て改む
○令捧持天、捧は原本掛に作る諸本及類史に據て改む
○今毛今毛、一の今毛の二字は諸本及類史に據て補ふ
○堅磐爾、爾は類史に據て補ふ、日守爾の爾字も同じ
○農業、業は原本稼に作る諸本及類史に據て改む
○厚助、厚は原本原に作る谷本及類史に據て改む
○依天之、之は諸本及類史に據て補ふ

月十五日并度々爾、神祇伯從四位下中臣朝臣逸志之天禱申給之久、去閏三月十日夜、八省乃應天門并左右樓爾失火事有岐、因茲神祇陰陽等乃官乎之天令占求爾、今亦火灾兵警御病事等可有止卜申利、如是岐咎灾乎波、皇神達乃厚護惠爾依天、防掃給部支止念行之天、禱申給布事乎、天神地祇乎平久聞食天、若狂人乃國家乎亡止謀留事奈良波、皇神達早顯出給比、若神達乃御意止之天出給我止謹恐利給布事乎、乍神毛聞食天、種々灾皆悉爾銷亡給比、天皇我御躰乎、常磐堅磐爾、寶祚無動護惠給、天下國家平久、百姓乃作食五穀茂豐爾令登女給倍止、名神達爾波、京庫乃幣帛乎差使天奉牟、天神地祇仁波國別長官親自潔齋天、以正稅天交易天、可奉狀乃官符乎下給布、乍神毛聞食天、平久安久護惠助給止禱申給岐、自爾以降、宮內仁相仍天、穢事依有天、于今延怠利、今穢過後爾、使爾內竪正八位上齋部宿禰社雄乎卜定天、奉出給布詔旨乎平久聞食天、今毛今毛御體乎、天地日月共爾、護惠比助給比、旱魃風雨災無久助給止、恐美恐美毛申給止申、辭別天申久、念行須御意御坐爾依天、國乃麗色止有留纐纈并白綾乎、捧副天奉給布事乎、平久

○南海道諸神、道字は秘本閣本前本等なし紀略は此に同じ
○度々爾、爾は諸本及類史に據て補ふ
○八省、八省院なり
○兵警、警は原本驚に作る類史に據て改む
○御病事等、等は類史になし
○掃給部支止、部支は原本之波に作る類史に據て改む
○出給我止、狩谷氏は出恐歟また我恐哉と云
○名神達、式の名神祭に預り給ふ神を云
○平久安久、安久の二字は諸本及類史に據て補ふ
○禱申給岐、岐は原本波に作る諸本及類史に據て改む
○奉出給、出は例に據て補ふ
○恐美恐美毛、美毛の二字は類史に據て補ふ
○奉給布、布は諸本及類史に據て補ふ
○知御意久、久は原本之

聞食天、如御意久幸惠比奉給止申給久止申、○九日辛亥、先是尾張國言、奉太政官處分、掘開廣野河口、令趣舊流、而美濃國各務郡大領各務吉雄、厚見郡大領各務吉宗等、率兵衆歩騎七百餘人、襲來河口、殴傷郡司、射殺役夫、河水流血、野草露青、成功將畢、有此相妨、至是太政官下符美濃國司、偁、河流利害、兩國爭論、彼此相持、歷代無施、於是重遣詔使、與兩國司相共勘定、更復朝議、審其得失、下知兩國、令其掘開、而豎子功役已發、作事稍成、多興兵仗、傷人流血、雖云郡司之無狀、抑亦國吏之失、靜而言之、理豈合然、宜早令掘開、又擅興兵衆、法禁是重、而數過七百、害及殺傷、須禁固亂首吉雄等、兩國司相共錄死傷人數、依實言上、○十日壬子、遣使奉幣於伊勢大神宮、○十三日乙卯、雷雨、鳥囀拔內豎傳點籌木、大鳥集大藏省正藏院納藥倉上、播磨國無位速素戔烏神、速風武雄神、並授從五位下、○十四日丙辰、班幣賀茂御祖、別雷、松尾、丹生川上、稲荷、水主、貴布禰神、賽前日禱、兼祈嘉澍也、告文云、天皇我詔旨止、掛畏岐松尾大神乃廣前爾、恐美恐美毛申給久止申久、不慮之外爾天下爾有旱災天、農

に作る類史に據て改む
○申給久止、止は類史に據て補ふ
○廣野河口、七年十二月甲戌紀に見ゆ今美濃國羽島郡中屋村と稲葉郡各務野との間なり
○役夫、役は諸本に據て補ふ
○流血、流は秘本以下諸本添に作る
○多興兵仗、原本多興又歟に作る興は秘本閣本尾本興に作り歟は諸本仗に作る前後の文を考るに又は兵の訛なりと思はる故に本文の如く改む
○國吏之失、失は諸本不辨の二字に作る
○禁固、固は原本國に作る諸本に據て改む
○鳥囀拔、鳥は原本烏に作る紀略に據て改む
○傳點籌木、漏刻の點數を記せる籌木なり
○正藏院、正倉院とも書けり諸國より貢る正税を納るゝ藏なり
○速素戔烏神、式外、所在未詳
○速風武雄神、式外、神祇志に今在飾東郡と云
○廿雨、廿は原本某に作る黑川校本に據て改む

作廿とあり
○此狀袁、袁は祕本閣本なに、尾本遠に作る
○今毛今毛、一の今毛の二字は諸本に據て補ふ
○天下饒足米賜比、此七字諸本に據て補ふ
○常磐堅磐爾、堅磐の二字は同上に據て補ふ
○護幸奉給倍止、給は例に據て補ふ
○基肄郡、肄は原本肆に作る倭名抄に據て改む
○豐穗、穗は原本稻に作る紀略及下文に據て改む
○教造、狩谷校本に教恐效とあり
○大刀主、恐くは氏を脱したるか
○卌五人、淀本卌を卅に作る
○掘開、掘は原本堀に作る上文に據て改む下同じ
○眉眼、眉は原本肩に作る狩谷校本に肩恐眉とあるに據て改む
○隱藏、隱は原本陰に作る

稼枯損奴、因茲掛畏岐大神乎奉憑天、大幣帛奉出給牟止祈申岐、而爾祈申志毛驗久、甘雨令零米賜倍利、因歡奈我良、散位從五位下大中臣朝臣國雄乎差使天、大幣帛乎令捧持天奉出賜布、此狀袁平久聞食天、今毛今毛、風雨調和米給比、五穀豐登米賜比、天下饒足米賜比、天皇朝廷乎寶祚無動久、常磐堅磐爾、夜守日守仁、護幸奉給倍止申給波久止申、自餘社告文並同焉、備前國飢旱、賑給之、○十五日丁巳、大宰府馳驛奏言、肥前國基肄郡人川邊豐穗告、同郡擬大領山春永語豐穗云、與新羅人珍賓長共渡入新羅國、教造兵弩器械之術、還來將擊取對馬嶋、藤津郡領葛津貞津、高來郡擬大領大刀主、彼杵郡人永岡藤津等、是同謀者也、仍副射手卌五人名簿進之、○十六日戊午、陰陽寮言、天下可憂水疫、是以令五畿七道頒幣國內諸神、轉讀金剛般若經、○廿日壬戌、下知尾張國司、暫停掘開河口之事焉、○廿五日丁卯、紀伊國言、伊都郡人六人部由貴繼、生白人男女二人、男年二歲、長二尺四寸、女五歲、長三尺一分、兩兒生而肌膚鬢髮眉眼、與身純白如雪、因得見暗夜、不能向白日、父母隱藏養成、今圖其形進之、

○廿六日戊辰、先レ是尾張國言、美濃國各務郡大領各務吉雄、厚見郡大領各務吉宗等作レ亂之後、未レ經幾日、率二人夫數百人一、斫二壞倉一、流二失河水一、運二積沙石一、埋二塞河口一、吉雄等引二百餘騎一、往二還河邊一、欲レ發二隨近之兵一、糺二彼逆亂之由一、恐レ鬪爭起レ自二掘河之論一、遂至二兩國接レ及之隙一、因停二掘開一、伏待二裁下一、中嶋郡人礒部逆麻呂等三人、身從二掘レ河之役一、同爲二吉雄一所二射殺一、是日太政官下二知美濃國司一、推二糺吉雄等之犯過一焉、○八月癸酉朔、二日甲戌、下總國飢旱、賑二給之一、○三日乙亥、左京人備中權史生大初位下大宅首鷹取、告二大納言伴宿禰善男、右衞門佐伴宿禰中庸等、同謀行レ火（ツケテ）燒二應天門一、○四日丙子、禁二鷹取身一、下二左撿非違使一、○五日丁丑、釋奠、直講從七位下船連副使麻呂講二左氏傳一、文章生等、賦レ詩如レ常、○六日戊寅、明經博士得業生等奉レ參二內裏一、不レ獲二召見一、賜レ祿而罷、○七日己卯、授二土左國從五位下大川上美良布神從五位上一、正六位上神奈地祇神從五位下一、勅二參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名、參議正四位下行右衞門督兼讃岐守藤原朝臣良繩、於二勘解由使局一、鞫二問大納言正三位兼行民

る閣本前本谷本に據て改む
○斫壞倉、倉の上下に恐くは一字を脱す
○流失河水、失は決の誤か
○遂至、至は生の誤か
○太政官、官は原本大臣の二字に作る宮本及上下の例に據て改む
（八月）大宅首鷹取云云　宇治拾遺十に伴大納言應天門をやく事云々と見え備中權史生を右兵衞舍人とし名を書さず
○左撿非違使、使廳は左京近衞北堀河西にあり故に左撿非違使と云
○直講、原本直行に作る諸本に據て改む原本頭注に當レ作二從七位下行直講一とあり
○土左國、左は原本佐に作る諸本に據て改む
○大川上美良布神、承和八年八月紀（續後紀二〇〇頁）に見ゆ類史十六に大上の從五位下の字なし
○神奈地祇神、式外、奈は類史に岑に作り神祇志之に據る
○興我萬代繼神、式外、或は式內乙訓郡久何神社是か

○奏賜倍止、奏は原本奉に作る黒川校本に據て改む
○美久、久は原本之に作る同上に據て改む
○經世、經は原本繼に作る天安二年十月癸丑紀及貞觀元年七月丁卯紀に據て改む
○奉出賜布、賜は原本給に作る諸本に據て改む
○恐美恐美毛、上の恐美の二字は諸本に據て補ふ
○遂日、馬行の速なるを云洞冥記に修彌國有馬如龍騰虚遂日とあり
○淩害、大空を淩ぐの意
○軒昊、軒は黄帝軒轅氏昊は太昊伏羲氏
○成昭、周成王と漢昭帝となり成は原本戊に作る諸本に據て改む
○泣辜之惠、夏禹の故事にて說苑君道篇に見ゆ庶民罪を犯すは我不德によれりと罪人を見て泣けるを云
○蔭暍之仁、淮南子人間訓に武王蔭暍人於樾下左擁而右扇之而天下懷其德とあり暍は傷暑也
○日就而不背、日就は毛詩周頌敬之章に日就月將とあり就は成なり背は限

部卿太皇太后宮大夫伴宿禰善男、越前國今立郡大領外正六位上生江臣氏緒授借外從五位下、以獻稻十萬束充公用也、○八日庚辰、屈六十僧紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○十四日丙戌、授山城國正六位上興我萬代繼神從五位下、○十五日丁亥、地震、○十八日庚寅、分遣使者於諸山陵、告應天門火也、田邑(文德)山陵告文云、天皇掛畏岐御陵爾恐美恐美毛奏賜倍止奏久、去閏三月十日夜、應天門及東西樓爾、有火災天、皆悉燒失奴、其咎乎卜求禮波、掛畏岐御陵乎犯穢世留事在、又猶火事可有、又疾事毛可有止卜申利、因茲恐畏利天申奉出給牟止須留間爾、頻有穢事天、至今延怠禮利、因以去十四日巡撿留爾、御陵乃木數多久伐事阿利止撿申世利、今御陵守等乎波、隨法爾罪那倍賜牟止須、爲申此狀、中納言正三位兼行陸奧出羽按察使源朝臣融、少納言從五位上良峯朝臣經世等乎、差使天奉出賜布、此狀乎聞食天牟、久安久護幸賜止恐美恐美毛奏賜波久止奏、自餘山陵告文准此、○十九日辛卯、勅太政大臣、攝行天下之政、遣內供奉十禪師傳燈大法師位忠戒於五畿內、撿察境內諸寺破損、○廿二日甲午、太

政大臣從一位藤原朝臣良房抗表言、竊以、疲駿倦路、難責以逐日之能、病鶴忘飛、豈望其凌霄之効、伏惟聖朝陛下、聽跨軒吳、德駕成昭、泣辜之惠非深、扇暍之仁猶薄、臣以庸材、謬膺佐命、唯獻血誠之无比、潛欽日就而不昔、遂乃天從人願、神感聖仁、大成之日已來、歸老之期行及、臣不敢忘盈滿之誡、又深企二疏之風、然而聖慈不許出於直廬之外、臣誠不忍離白玉階之前、徘徊恩澤、猶侍禁中、而去六年冬大病以還、體氣疲苶、心魂惘然、坐念立忘、昨知今惑、加以、長樂宮御藥之事、夙夜剗思、無顧私第、自然心將事懶、性與物疎、唯欲助襄以叨恩、那堪勤政以贊化、而今忽降綸言、更預機務、乍承驚悚、諮謝忘方、臣雖質情之愚薄、而當昔之全狀、唯以勤恪之力、幸獲免於罪戾、而今身已衰朽、勤勞何申、心已昏迷、恭恪胡施、即知、於公无益、爲私多傷、徒招眼下之耻、還損身後之名、臣竊想古人敎射之言、夫去楊葉百步而射、百發而百中、然其弓撥矢鉤、氣衰力倦、則百發之功盡廢矣、何况平生材望幸賴偶中、器局力衰之後、更向百步之葉、假令雖專、愚者猶當知其不可焉、伏願陛下、察其深衷、矜其疲苶、更廻

なり
○大成之日已來、清和天皇御年長じ聖德の大成し給ひしを云
○歸老之期行及、歸老は隱居するを云行は狩谷校本に行一本作漸とあり
○二疏之風、二疏は疏廣疏受二人なり漢書疏廣傳に地節三年立皇太子廣爲太傅廣兄子受爲少傅朝庭以爲榮廣謂受曰知足不辱知止不殆功遂身退天之道也遂上疏乞骸骨(節略)とあり
○然而、然は原本愁に作る諸本に據て改む
○疲苶、筋力憊乏するを云
○長樂宮云云、長樂宮は皇太后を申す御は原本禦に作る諸本に據て改む
○無顧私第、原本私字なく顧を願に作る諸本に據て改め補ふ
○忘方、方は原本言に作る尾本前本谷本に據て改む
○質情、狩谷校本に情恐性とあり
○勤恪、恪は原本格に作れるを改む
○眼下之耻、眼下は日前と云に同じ

璽誥、改賜旒聽、則巍々聖帝、無偏之德彌新、欵々微臣、有涯之生少損、無任誠懇之至、謹拜表以聞、不許、勅曰、廼者災異荐臻、內外騷然、須賴公助理、且得謐靜、〇廿三日乙未、暴風雷雨、〇廿四日丙申、太政大臣重抗表言、先傾丹實、仰叩紫闈、而天顧弗迴、叡情無感、愚衷尙屈、獎喩彌申、跕焦原而非危、履虎尾而倍懼、臣聞、日月猶示盈昃、山川未免崩沖、物理自然、人事何忒、臣德薄才拙、任重位高、儻賴聖哲欽明、天人叶贊、得免罪戾、久塵宸階、常愧深恩不窮、淺効無答、如踏鑪炭、似履春氷、況今老大逼來、疲痾交集、藥餌無聞、每闕趍奉、素飡之慙、彌倍平常、安得以此疲勞、重掌機密、上黷國采、下貽身累、況復神鑒害盈、鬼瞰貽禍、何忘止足之分、坐待幽冥之責、臣頹齡漸迫、殘命尙危、若能迴聖慈、矜臣深志、賜以優閑、任其將息、則再造之恩更渥、三舍之惠彌深、豈敢偏惜衰朽之身、唯貪久視太平之化、伏願陛下別垂哀許、不省焉、〇廿九日辛丑、禁右衛門佐從五位上伴宿禰中庸於左衛門府、是日、拷訊殺大宅鷹取女子者生江恒山、〇卅日壬寅、拷訊與恒山同謀者伴淸繩、並是大納言伴宿禰善男之僕從也、

〇古人敎射之言云云、史記周本紀に楚有養由基者、去柳葉百步而射之、百發而百中之、有一夫立其旁曰、善可敎射矣、養由基怒客曰、非吾能敎子、支左詘右也、夫去柳葉百步而射之、百發而百中之、不以善息、少焉氣衰力倦、弓撥矢鉤、一發不中者、百發盡息、(節略)とあるに據れり、百發而の三字は閣本尾本前本に據て補ひ、矢鉤の矢字は史記に據て補ふ、撥は弓反也、鉤は矢鋒屈也
〇平生、平は原本平に作る、狩谷校本に據て改む
〇疲苶、苶は原本劣に作り、諸本者に作る、上文に據て改む
〇璽誥、璽誥は勅語なり
〇旒纊、旒纊、聖聰に同じ
〇欵々、字書に志純一也とあり
〇內外騷然、原本然上に騷字あり衍なり、諸本に據て削る
〇丹實、丹誠に同じ、實は原本寶に作る、宮本に據て改む
〇仰叩紫闈、原本叩字なく、闈を聞に作る、祕本閣本前本に據て改め補ふ、紫闈は禁門なり

○奨喩彌申、解表を尽けて奨め給ふを云　○古焦煎、已に注す　○履虎尾云云、尚書君牙に心之憂危若蹈虎尾渉于春氷とあり又見ゆ　○崩沮、沮は壊也　○深思、思は原本恩に作り尾本谷本に據て改む　○請德咎、韓非子説林に鬼吏請曰德咎とあり熟本閣本以下の諸本蹈を踏に作る　○変府、府は説文に俛病也とあり原本府を病に作る諸本に據て改む　○乗偏低間、間は聞の誤なるべし　○神害盗、易謙卦象傳に鬼神害盈而福謙とあり豎は原本豎に作る諸本に據て改む　○止足之分、老子四十四章に見ゆ　○恃息、養生に同じ将は養なり　○再造之恩、文選到大司馬記室牋に千載一逢再造難答注に易曰天造草昧言王者之恩同於上帝故云再造也とあり　○三舍之惡、考に舎音赦周禮秋官司刺掌三赦之法壹赦曰幼弱再赦曰老耄三赦曰惷愚とあり　○垂哀矜、垂は原本無に作る宮本及黒川校本に據て改む　○左衛門府、左は紀略右に作る

○九月癸卯朔、三日乙巳、天皇潔齋奉御燈如常、○七日己酉、美作國言、兵庫鳴、聲如擊鉦鼓、○八日庚戌、以出羽國瑜伽寺預於定額、○九日辛亥、停重陽之宴、觴侍臣于宜陽殿西廂、錄在座者而奏之、後以大藏省綿賜焉、○十日壬子、伊勢齋宮寮允以上並有穢、不堪其供祭、故勅遣中務少輔從五位下藤原朝臣諸房、向大神宮行事、○十一日癸丑、遣使奉幣於伊勢大神宮、○十七日己未、先是太政官厨家募越前國地子、借用官米四百七十斛、至是詔從原免、○廿日壬戌、丹波國何鹿（イカルカ）郡人漢（アヤ）部（ベ）福刀自、伉儷亡後、歷廿二年、獨居盧室守節、是貞節婦、特加優奬、叙位二階、免戸內租、以表門閭、○廿二日甲子、勅、禁葬歛山城國愛宕郡神樂岡邊側之地、以與賀茂御祖神社隣近也、是日、大納言伴宿禰善男、男右衛門

（九月）潔齋、齋は諸本に據て補ふ
○出羽國瑜伽寺、羽前國東村山郡大曾根村滝之平に廢址ありと云羽は諸本雲に作る類史百八十及紀略此に同じ
○預於定額、於は原本之に作る諸本に據て改む
○在座者、原本在下に入字あり座を坐に作る類史七十四に據て改め刪る按に座を入坐の二字に訛れるなるべし
○其供祭、類史三に其字なし
○募越前國地子、狩谷校本に或云募恐券とあり
○男右衛門佐、男は祕本閣本に據て補ふ

○土左國、左は原本佐に作る諸本に據て改む
○河男、河は原本阿に作る淀本及上文に據て改む
○文武百官、百は諸本に據て補ふ
○憂禮比、此三字は諸本になし
○熱加比、此三字は諸本に據て補ふ但し諸本熱を勢に作るは訛なれば改む熱加比は惱み煩ふ意
○間引都々、都々は原本之都に作る諸本に據て改む
○早爾、本居翁云早字當訓登美
○息子、史記高祖本紀注に息は生也とあり息子はムスコと訓べしムスコは源氏箒木に御むすこの君たちと見ゆ

佐伴宿禰中庸、同謀者紀豊城、伴秋實、伴清繩等五人、坐燒應天門當斬、詔降死一等、並處之遠流、善男配伊豆國、中庸隱岐國、豊城安房國、秋實壹岐嶋、淨繩佐渡國、相坐配流者八人、從五位上行肥後守紀朝臣夏井配土左國、從五位上行下野守伴宿禰河男能登國、上總權少掾正八位上伴宿禰夏影越後國、伴冬滿常陸國、紀春道上總國、伴高吉下總國、紀武城日向國、伴春範薩摩國、公卿就太政官曹司廳、會文武百官宣制、其詞曰、天皇我大命良萬止宣久、去閏三月十日之夕爾、應天門幷左右樓等、不慮之外爾、忽然燒盡多利、因茲日夜無間久憂禮比念保之熱加比御坐須、然間爾、備中權史生大宅鷹取告言世良久、大納言伴宿禰乃所爲奈利、爰或諸人等、又並口天無疑留倍久告言己止在、然止毛件事波、世爾毛不在止思保之食天那毛、日月乎延引都々早爾罪那倍不賜御坐都留、而今勅使等鞫問志天奏須良久、初問伴宿禰爾、每事固爭天不承伏、從者生江恒山、伴清繩等乎拷訊留爾、伴宿禰身自波不爲志天、息子右衞門佐中庸等加爲奈利介利、雖然清繩恒山等加所申口狀乎以天、中庸加申辭爾參驗須留爾、伴宿禰乃初

所爭言乃殺人留事、既知巧詐、卽中庸波父之敎命乎受天、所爲止云事無疑、仍與明法博士等勘定留、大逆之罪共難可避、須同久斬刑爾當處止奏聞世利、然禮止毛、別爾依有所思奈毛、斬罪乎一等波天、遠流罪爾治賜布、又同謀從者豐城等三人、幷其兄弟子孫等、從遠流信賜波久止宣天皇我大命乎、衆聞食止宣、善男者左京人也、祖繼人、官爲從五位下左少辨、延曆四年爲皇太子謀、與右衞門大尉大伴竹良、射殺中納言兼式部卿藤原朝臣種繼、皇太子坐而見廢、繼人繫死獄中、父國道緣坐其父繼人事、配流於佐渡國、爲人聰敏頗有才、國宰優愛、引爲師友、至有疑難、每事取決、案牘文簿、成於其手、廿四年會恩赦得入都、職歷內外、常居淸顯、爵至從四位上、官登參議、善男、是國道之第五子也、生而爽俊、天資鬼脉、見之者、皆曰黠兒、爲人奇貌、深眼長鬢、身躰矬細、意氣半岸、弱冠入直校書殿、侍奉仁明天皇、稍被知寵、任寄日重、承和八年爲大內記、九年遷爲式部大丞、十年春授從五位下、爲讃岐權介、不之官、十一年遷右少辨、十四年正月、加從五位上、二月轉右中辨、十五年正月、超授從四位下、拜參議、二月爲

○延曆四年云云、竹良の種繼を射殺したるは四年九月乙卯紀なり
○皇太子、早良親王
○右衞門大尉、右は原本兵に作る林本に據て改む
○國道、古麻呂の孫にして繼人の子天長元年五月參議に任じ五年十一月卒す
○鬼脉、原本魁儻に作る諸本に據て改む鬼脉は方言に虔儇慧也自關而東趙魏之間謂之黠或謂之鬼郭璞注に言鬼脈也とあり脈は脉に同じ狡猾なるを云
○矬細、矬は短身を云
○半岸、半は原本平に作る諸本に據て改む半岸は蓋し畔岸なるべし畔岸は自ら縱にする意、畔は違背也背叛也、岸は廉稜あることさ崖岸の形の如きを云
○弱冠、禮記曲禮に二十曰弱冠

○至正三位、正は宮イ本及伴校本に據て補ふ
○中宮大夫如故、二年正月丁卯紀には皇太后宮大夫如故とあり
○口辯、辯は原本辨に作る閣本前本谷本に據て改む
○舛剝、字書に舛は相背也剝は傷害也とあり
○黴倖明承、黴倖は利を求めて止まざるをいひ明承は上の意に逢迎するを云
○縱橫、縱は原本從に作る宮イ本に據て改む

右大辨、嘉祥二年兼下野守、俄兼右衛門督、數月停右大辨、兼式部大輔、三年進從四位上、爲中宮大夫、自餘如故、仁壽元年、自下野守遷兼美作守、二年母服解職、未幾詔以本官起之、齊衡元年、兼讃岐守、二年授從三位、貞觀元年、兼伊豫權守、是年夏、至正三位、冬兼民部卿、二年正月、拜中納言、中宮大夫如故、六年轉大納言、太皇太后宮大夫如故、善男性忍酷、有口辯、當官幹理、察斷機敏、政務變通、朝庭制度、多所詳究、問無不對、但心不寛雅、出言舛剝、彈斥人短、無所畏避、黴倖明承、爲人主所愛也、自初爲內記、累遷顯要、八年之間、早登公卿、位望漸貴、物議咸忌、嘗承和中、爲右少辨之時、法隆寺僧善愷、向官告檀越少納言登美眞人直名所犯之狀、參議左大辨正躬王及傍官、與善男爭論律私曲相須之義、縱橫不一、分背舛馳、遂誣正躬王等許容善愷違法之訴、令明法博士讃岐朝臣永直等斷之、永直所執不同善男、左大辨正躬王、及左中辨伴宿禰成益、右中辨藤原朝臣豐嗣、左少辨藤原朝臣岳雄、明法博士永直等、遂坐解官、貞觀之初、與左大臣源朝臣信有隙、數年之後、誣告大臣謀爲反逆、殆欲

○必有餘殃、必は尾本に據て補ふ易文言傳に積善之家必有餘慶、積不善之家必有餘殃、とあり
○侍詔、侍は待の誤か或は詔侍の倒置にもあるべし
○授文堂、詳ならず或は篁の堂號か
○紀三郎、善岑の第三子なればいふ
○轉益、轉は宮イ本傳に作れど恐くは輔の誤なるべし
○國郡、國は諸本土に作る
○糙納、糙は名義抄に糙音造モミコネ一云カチシネ字類抄にも糙米モミコネ又カチシネとあり黑米

陷害、其後犯大逆之罪、父子自絶於天、積惡之家、必有餘殃、蓋斯之謂歟、夏井者左京人、美濃守從四位下善岑之第三子也、夏井眉目疎朗、身長六尺三寸、性甚溫仁、雅有才思、承和初、以善隸書、侍詔於授文堂、就參議小野朝臣篁、受用筆之法、篁歎曰、紀三郎可謂眞書之聖也、文德天皇卽位、詔徵見之、夏井衣履疎弊、左右見者咸笑之、上曰、是瘦駿也、非汝所知、遂有殊寵、嘉祥三年七月、擢拜少内記、仁壽四年、兼美濃少掾、讓之異母兄大枝、齊衡二年、轉大内記、是年秋九月、授從五位下、遷爲右少辨、上以其忠正淸貧無宅、賜宅一區、夏井秉志忠直、時有規諫、上以此逾重之、四年春加從五位上、兼播磨介、俄而兼式部少輔、未幾轉右中辨、式部少輔播磨介如故、夏井天性聰敏、臨事不滯、恩寵優渥、任用轉重、內外機務、多所轉益、天安二年八月、文德天皇晏駕、夏井出爲讚岐守、政化大行、吏民安之、境内翕然、不忍相欺、秩滿將歸、百姓相率、詣闕乞留、因斯更留二年、黎庶殷富、倉廩充實、於是新造大藏於國郡、惣四十宇、皆糙納以爲不動之蓄、及去吏民送別者、贈遺甚多、夏井一無所受、歸都之後、米宍玩好、以

なりと云説あれど黒米とは別なるべし
○米宍、宍は原本完に作る黒川校本に據て改む
○唯留紙筆、唯は諸本に據て補ふ
○肥後民庶、庶字は諸本に據て改む
○土左路、左は原本佐に作る諸本に據て改む下同じ
○嘗父善岑、嘗は原本堂に作れるを改む
○少勝雄爲介、少は祕本閣本尾本及上下の文に據て補ふ
○超于、于は原本子に訛れるを改む
○射覆、漢書東方朔傳に見ゆ注に於覆器之下而置諸物令闇射之故云射覆とあり
○藏鉤之戲、仁壽三年二月乙丑紀（文德紀七六頁）に見ゆ、戲は原本藏に作る諸本に據て改む
○揲著布卦、原本頭注に揲著作著卦作封今改さとあり

送其家、夏井唯留紙筆、悉返其餘、貞觀七年、拜肥後守、母石川氏、聞而哭之、人問其故、答曰、吾聞肥後風俗、國宰至清、身必不全、吾子其不終乎、有異母弟豐城、夏井以其放誕、數加督責、豐城苦之、遂託身大納言伴宿禰善男、應天門火、善男坐、以男中庸行火燒之、父善男應知之焉、豐城爲善男之從、夏井爲豐城之兄、轉相緣坐、被處遠流、夏井隨使出境、肥後民庶遮路悲哭、如喪考妣、夏井私歎曰、凡法律所謂首從之坐、必有差降、予是從之兄、亦緣坐也、今與善男同配遠流、何其無別哉、向土左路、過讃岐境、百姓男女老少、皆弃其室、逢迎道路、數十里之間、哭聲相接、數年母亡、夏井至孝冥發、居喪過禮、建立草堂、安置骸骨、晨昏之禮、無異生時、本自崇信佛理、至是於草堂前、毎日讀大般若經五十卷、以終三年之喪、夏井粂能雜藝、尤善圍碁、伴宿禰少勝雄以善弈碁、延暦聘唐之日、備於使員、以碁師也、嘗父善岑爲美濃守、少勝雄爲介、夏井時年十餘歳、習圍碁於少勝雄、一二年間、殆超于少勝雄、又善射覆、文德天皇與宮人、爲藏鉤之戲、一鉤藏在百手之中、密令夏井筮之、揲著布卦曰、有小女著青衣、以白花

○柏原、桓武天皇
○深草、仁明天皇
○深草御陵告文、深草御陵の四字は諸本になし衍なるべし
○燒盡多利、盡は尾本前本谷本に據て補ふ
○天火人火、左傳宣十六年に凡火人火曰火天火曰災とあり
○耻畏末利、末は原本米に作る諸本に據て改む
○正身、本人を云

揮首者、鉤在其左手中、帝乃採得大悅焉、又閑醫藥之道、配土左之後、自往山澤、採藥合練、以施民、民多得其驗、嘗有一人、中風被髮狂走、夏井與一七散藥、以令服之、此人立癒、皆此之類也、○廿五日丁卯、勅京畿七道、勘錄庶人伴善男等資財田宅、中庸男、元孫年八歲、叔孫年五歲、並隨父遣配所、詔愍其幼稚、自道召還焉、是日、遣使於柏原深草山陵、告以配流善男等、深草御陵告文曰、天皇我大命止、掛畏岐深草御陵爾奏賜倍止奏久、去閏三月十日夕爾不慮之外爾、應天門幷左右樓等、有失火事天忽然燒盡多利、因茲、天火人火止毛不知之天、晝夜無間久、憂念耻畏末利賜布、纔經三箇月後爾、或人告言久、大納言伴宿禰善男可所爲奈利、驚恠比賜比天、令所司勘定爾、正身固爭天不承伏止云止毛、子幷從者等乎拷訊須留爾、事端既顯天、更無可疑、須善男乎始天、同謀人等乎、隨法爾斬罪爾當給志、然止毛善男掛畏岐山陵爾、平生爾奉仕禮留舊功、又每年爾八講會乎設天、山陵飾奉留勞等在爾依天、一等減天、遠流賜布、又御陵乃前頭爾、嘉祥寺乃食堂乎作天、汙穢事等在介利、因茲令破弃天、潔久掃奉仕志牟、此狀乎從三位守

○柏原御陵告文曰、柏以下五字諸本になし之に據らば文は又の訛にて又曰とありしを後に五字を補ひしなるべし
○營作夏之米、原本營を勞に作り良上に太字あり營は勞に誤れる例多ければ此もそれなるべしと思ひて改む太は諸本に據て削る
○萬代宮、萬代に變るまじき宮を云、宮下の止字は諸本とに作る
○國乃面、八省院は天皇の正殿のある所にて帝都の正面にあれば國の面といふなり
○灾事、私記に灾恐火誤と云
○天災、政文に災恐火上文可合考と云
○當賜介禮止、原本止字なし禮は利の誤なりと云る説あれど利とすれば此下に上文の例に據て然止毛の三字を補はざれば通ぜず依て止を補ひたり
○埋世在、世は誤なるべし諸本止とあれどそれも通ぜす
○若事有實者、祕本に事字なし
○撥屍、撥は字書に除也

權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗乎差使天、聞奉出賜布、掛畏岐山陵平聞食天、天皇朝廷乎平安爾矜賜止、恐美恐美毛奏賜波久止奏、柏原御陵告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐柏原御陵爾申賜倍止申久、去閏三月十日夕爾、應天門幷左右樓等有失火事天、忽然燒盡多利、此宮波、掛畏岐天皇朝廷乃營作夏之米賜天、萬代宮止定賜留處奈利、就中爾八省院波、殊留御意天國乃面止作粧賜岐止奈毛聞賜布留、而不慮之外爾、有此灾事、因茲、天災人火止毛不知志天、晝夜無間久、憂念耻畏末賜布、纔經三箇月後爾、或人告言久、大納言伴宿禰善男加所爲奈利、驚恠比賜比天、令所司勘定爾、正身波固爭天不承伏止云止毛、子幷從者等乎拷訊須留爾、事既顯天、更無可疑、仍須善男與利始天、同謀人等乎、隨法爾斬罪爾當賜介禮止、善男加御代々爾奉仕禮留有舊功爾依天、一等減天、同遠流賜布、又善男掛畏岐山陵乃兆域乃內爾佛堂乎建天、死屍乎埋世在止申事在、仍令所司委曲勘定、若事有實者、卽破堂撥屍天、淨掃比奉仕志米牟、此狀乎參議正四位下行右大辨兼播磨權守大枝朝臣音人乎差使天、聞奉出賜布、掛畏岐山陵平聞食天、

天皇朝廷乎平安爾矜賜止、恐美恐美毛申賜波久止申、○廿九日辛未晦日、大祓於朱雀門前、以配流罪人也、○冬十月壬申朔、天皇不御紫宸殿、以停宴飲也、是日、勅、令七道諸國特愼警固、○三日甲戌、先是九月一日、大唐商人張言等卅一人、駕船一艘、來著大宰府、是日、勅大宰府、安置鴻臚館、隨例供給、○八日己卯、授因幡國无位大野見宿禰神從五位下、左京人六世男藤王、豐野王、河內王、藤顏王、淨直王、七世直本王、緒本王七人、並賜姓淡海眞人、天命開別天皇之後也、是日制、諸國浪人土民、便任當國史生已上及博士醫師者、停給交替丁、備中國、哲多英賀兩郡百姓、給復二年、以旱疫也、○十四日乙酉、遣使於山階田邑等山陵、申謝陵中樹木多被伐損之狀、告文曰、天皇掛畏岐山階乃御陵爾、恐美恐美毛申賜止申久、掛畏岐御陵乃木乎陵守數多伐損世利、依此天犯過留陵守、并能不巡撿留諸陵司等乎、任法爾勘賜比罪奈倍賜倍岐狀乎、去六月七日爾、從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗等乎差使天、謝申天畏美申爾奉出賜倍利、而今勘賜爾、諸陵戶等或畏罪天逃退多利、或依病不

○奉仕志米牟、牟は原本利に作る諸本に據て改む
○播磨權守、權は諸本に據て補ふ
○晦日、日は紀略になし衍なるべし
○(十月)宴飲、類史七十五に飲宴に作る
○大野見宿禰神、神名式因幡國高草郡大野見宿禰命神社、今氣高郡大正村德尾
○直本王、直は諸本眞に作る
○天命開別天皇、天智天皇
○是日制、此事三代格六に貞觀八年十月八日太政官符應停給不歸故鄕國司幷博士醫師交替丁事云々と見え要略五十九にも見ゆ參看すべし
○停給交替丁、交替丁は國司交替して故鄕に歸るを送らしむる丁なり、當國の人は其必要なければ之を給ふことを停められしなり、原本丁を下に作り其下に知字ありしを諸本に據て改め削る
○乙酉遣使云云、類史卅六に見ゆ山階は天智天皇田邑は文德天皇の御陵
○天皇、原本皇下に我字

あり類史及下文田邑御陵の例に據て削る
〇六月七日、諸本七日を廿七日とす類史は此に同じ
〇諸陵戸、諸字は衍なるべしされど類史にもあり
〇逃退多利、諸本に多字なし
〇同前使、同は原本司に作る諸本に據て改む
〇申賜波久止、原本賜の字なく波を佐に作る諸本及下文に據て改め補ふ
〇播磨權守、權は諸本に據て補ふ
〇音人、以下大枝朝臣に至る十二字は諸本に據て補ふ

參、仍其身侍留限波、且任法爾勘賜比罪奈倍賜都、但彼病及逃退輩波相續勘賜牟、此狀乎同前使氏宗乎差天、聞申爾奉出賜布、掛畏岐御陵平久聞食天、天皇朝廷乎護幸倍賜比、天下無事久矜賜倍止、恐美恐美毛申賜波久止申、又、天皇掛畏岐田邑御陵爾、恐美恐美毛申賜止申、掛畏岐御陵乃木乎、陵守等數多伐損世利、依此天犯過留陵守、幷能不巡撿留諸陵司等乎、任法爾勘賜比罪奈倍賜倍岐狀乎、六月廿一日爾、正三位行中納言兼陸奧出羽按察使源朝臣融乎差使天、謝申之畏利申爾奉出賜倍利、而今勘賜爾、陵戸等或畏罪天逃退多利、仍其身侍留限波、且任法爾勘賜罪奈倍賜都、但逃退輩波、相續勘賜牟、此狀乎參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名乎差使天、聞申爾奉出賜布、掛畏岐御陵平氣久聞食天、天皇朝廷乎護幸倍賜比、天下無事久矜賜倍止恐美恐美毛申賜波久止申、〇十五日丙戌、先是參議正四位下行右大辨兼播磨權守大枝朝臣音人、散位從五位下大枝朝臣氏雄等上表曰、去延暦九年十二月勅書云、春秋之義、祖以子貴、此則禮經之垂典、帝王之恒範、宜朕外祖母土師宿禰追贈正一位、其改

○延曆九年十二月勅書、同年同月壬辰紀（續紀下五〇一頁）に出づ
○祖以子貴、已に注す
○土師宿禰、大江朝臣眞妹なり
○追贈、贈は祕本閣本尾本賜に作る
○其改土師氏、其は原本某に作る續紀に據て改む
○春秋曰、左傳桓二年に見ゆ
○漢書曰、灌夫傳に見ゆ但し支大ニ於幹ニ脛大ニ於股ニ不レ折必披とあり
○必披、披は原本摧に作り諸本枝に作る枝は披の訛なり漢書に據て改む補注に披は分折也とあり
○在遺民而變革、而字は祕本閣本尾本に據て補ふ
○一門危樹、枝大なれば危し故に危樹と云
○去鳴柯、去は原本不に作る祕本閣本等諸本に據て改む枝字を去りて江字とするを修飾して云
○宗辭海、宗は主也辭海は文字を云江字の縁にて海と云り江の字を宗主として其の意に因みて盡ることなく繼續せむとなり
○限以三日、限は宮イ本に據て補ふ

土師氏爲大枝朝臣者、謹案、春秋曰、國家之立也、本大而末小、漢書曰、枝大於幹、不折必披、是知、枝條已大、根幹由其摧殘、譬猶子孫暫榮、祖統從此窮盡、然則以大枝爲姓、誠非本枝長固、子孫無疆之義也、但此姓已生自先皇之恩給、不欲在遺民而變革、望請不敢改稱謂、但將以枝字爲江、然則一門危樹、去鳴柯而永春、千里大江、宗辭海而無盡、至是詔許之、○十九日庚寅、地震、○廿日辛卯、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、勅、山城國乙訓郡相應寺者、元是漁商比屋之地也、往年權僧正壹演泛水觀行橋頭、遭天暑熱、上岸風涼、有一老嫗、避舍獻地、壹演便在其中、聊作壇法、鏟平地中、得舊佛像、因縁相應、靈瑞頻現、太政大臣歎其希有、奏建道場、卽發工夫、忽備輪奐、遂定寺名、以爲相應、宜賜四履、永爲寺堺、東至橋道、南至河崖、西至作山、北至大路、是日、禁五畿七道國司庶人縱養鷹鷂、○廿三日甲午、贈太政大臣藤原朝臣墓在大和國宇智郡阿陀鄕、詔置守冢傜丁十二人、伊豫國浮穴郡置少領一員、○廿四日乙未、授伊勢國無位火雷神從五位下、○廿五日丙申、於東大興福、元

○相應寺、名勝志に乙訓郡相應寺離宮八幡東南有小堂是舊跡也土人呼新堂とあり今昔物語・土佐日記等にも見ゆ
○漁商比屋之地、淀川に臨み山崎驛に近くして人家多きを云
○橋頭、河陽橋頭なり
○太政大臣、良房なり
○忽備輪奐、原本勿備輪に作り諸本輪を輪に作る類史百八十に據て改め補ふ、輪奐は高大華美なるを云
○作山、作は宮本佳に作り原本頭注に類聚國史作佳とあり
○藤原朝臣墓、諸陵式阿陀墓贈太政大臣藤原朝臣良繼日本根子推國高彦尊天皇外祖父在大和國宇知郡とあり
○浮穴郡、今上浮穴郡と稱す
○火雷神、式外、神祇志に今在三重郡采女鄕八木村とあり、火は類史十六大に作り同柳本は此に同じ
○延曆等寺、原本等寺を倒置す紀略に據て改む
○太政官論奏、類史八十七に出づ

興、藥師、西大、大安、法華、延曆等寺、請七十僧、轉讀大般若經、太政官論奏曰、刑部省斷罪文云、讃岐國浪人江沼美都良麻呂、殺香河郡百姓縣春貞、春貞妻秦淨子申訴云、美都良麻呂於春貞宅、相共飲酒、言論相鬪、春貞叫曰、吾爲美都良麻呂被刺之、驚而見之、血出自左脇、卽死、同郡人秦成吉等、與春貞美都良麻呂等、同飲之人也、而相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不相救助、國司斷云、鬪訟律云、鬪毆殺人者絞、以及故殺人者斬、雖因鬪而用兵及殺者、與故殺同、准犯據律、合斬刑者、又捕亡律云、隣里被殺、人告而不助救者杖一百、成吉等在殺人處不助救、准律條、各處杖一百、刑部省覆斷云、國斷有失、何者案律、鬪而用及、卽有害心、仍處斬刑、但不同於故殺、而引故殺及用兵及殺等之文、此國司之謬斷也、又淨子詞云、成吉等與春貞美都良麻呂相鬪之場、雖以言詞相諫、而遂不救、淨子聞春貞之叫、纔知被刺、然則成吉等、醉中不覺美都良麻呂害春貞之心、非聞告而不助、見刺而不救者也、仍改斷無罪、斷獄律云、官司斷罪、失於入者減三等、名例律云、五位及七位以上、犯流罪以下、各減一等、判

斷之失、既由判官、仍正七位下行掾高階眞人全秀、正六位上行左近衞將監兼權掾藤原朝臣房雄爲首、全秀身帶七位、例減一等、合杖六十贖銅六斤、房雄遙授、不預其事、合免其罪、從五位下行介藤原朝臣有年爲第二從、減四等、合杖六十、身帶五位、請減一等、合笞五十贖銅五斤、參議正四位下行右衞門督兼守藤原朝臣良繩、從四位上行皇太后宮大夫兼權守藤原朝臣良世爲第三從、亦是遙授、合免其罪、正六位上行大目秦忌寸安統、正七位上行少目阿岐奈臣安繼爲第四從、減六等、合笞四十、身帶七位以上、例減一等、合笞三十贖銅三斤、越前國足羽郡人生江恒山、因幡國巨濃郡人占部田主等、毆傷備中權史生大宅鷹取、幷毆殺鷹取女子、恒山等言、隨私主右衞門佐伴宿禰中庸教、毆殺鷹取女子、鬪訟律云、威力使人毆擊、而死傷者、雖不下手、猶以威力爲重罪、下手者減一等、又云、故殺人者斬、恒山田主等、隨中庸教、非因鬪爭殺鷹取女子、須以中庸爲首處斬刑、而身犯大逆、降配遠流、不更斷罪、恒山田主爲從減一等、並合遠流者、降恩詔、斬刑減死一等、處之遠流、自餘並依省斷、○廿

○叫曰、原本叫を叫に作るは俗字今祕本閣本前本に據る
○彼剩之、類史之字なし
○以言詞相諫、相は類史に據て補ふ
○雖因鬪、因は原本相に作る閣本尾本谷本及類史に據て改む
○春貞之叫、諸本叫字なく類史言に作る
○失於入者云云、原本失を先に入を人に作る失は類史に據り入は諸本及類史に據て改む、入とは入を罪に入るゝをいひ失とは判斷を誤るを云政治要略所引斷獄律に斷罪失於入者各減三等失於出者各減五等とあり
○阿岐奈臣、岐は原本波に作る諸本及類史に據て改む、錄攝津皇別に阿支奈臣武內宿禰男葛城曾豆比古命之後也とあり
○生江恒山、及占部田主等大宅鷹取幷其女毆殺斷罪の事十三年十月廿五日丁卯紀に重出す
○毆傷、傷は祕本閣本尾本及類史に據て補ふ
○幷毆殺鷹取女子、幷以下五字は諸本及類史に據て補ふ

○毆殺、殺は諸本及類史に據て補ふ

○威力使人毆擊、威力は權力に同じ我權力を以て他人をして毆擊せしむるを云

○因支首、和氣系圖に武國凝別皇子第三子津守別命之子和備乃別命之子阿佐乃別命之子弟子乃別命之子麻呂子乃別命之子眞淨別君之子忍尾別君此人從伊豫國到來此土娶因支首長女生子忍波次與呂豆此二人隨母負因支首姓と見ゆ

○巨足、前本谷本淀本は巨を臣に作る

○武國凝別皇子之苗裔、和氣系圖に纒向日代宮御宇景行天皇大足彥忍代別尊皇子合廿四柱（男十七女七）武國凝別皇子母阿倍氏木事之女高田媛伊豫國御村別君讚岐國因支首等始祖貞觀八年改和氣公とあり弘記に或曰以因支首係諸皇子者謬矣と云

（十一月）次邑刀自甕神、從五位下に敍せられし年月詳ならず邑は原本色に作る文德紀及延喜造酒式に據て改む大邑刀自

七日戊戌、於近京四十三寺、轉讀金剛般若經、般若心經、以消伏災禍也、讚岐國那珂郡人因支首秋主、同姓道麻呂、宅主、多度郡人因支首純雄、同姓國益、巨足、男綱、文武、陶道等九人、賜姓和氣公、其先武國凝別皇子之苗裔也、○十一月壬寅朔、日有蝕之、造酒司從五位下次邑刀自甕神、准大邑刀自、小邑刀自甕神等、預春秋二季祭、○二日癸卯、中務省率陰陽寮、奉進明年御曆、天皇不御紫宸殿、所司付內侍奏之、○四日乙巳、大和國正四位下波寶神、波比賣神、伊勢國從四位上阿射加神、並授從三位、勅、大炊大屬正六位上民伊美吉能津、救應天門火、頗立功遠、今請改居、誠合優許、仍改本居山城國紀伊郡、貫附右京三條、○五日丙午、夜有星、出大畢抵貫大角、入攝提、○七日戊申、平野祭如常、停春日祭以有穢也、此夜、地震、○八日己酉、梅宮祭如常、割伊豫國宇和郡爲宇和、喜多兩郡、○十日辛亥、勅近江國夷長二人把笏、○十二日癸丑、園韓神祭如常、○十三日甲寅、鎭魂祭如常、○十四日乙卯、新嘗祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿行事、所司供奉如常、○十五日丙辰、天皇御紫宸殿、宴

小邑刀自の邑も同じ
○大邑刀自小邑刀自甕神、齊衡三年九月辛亥紀に二座並に春秋祭に預ること見ゆ
○波弖麻波比賣神、天安二年三月己丑紀及貞觀六年六月戊寅紀に出づ
○阿射加神、承和二年十二月甲申紀貞觀元年正月甲申紀に出づ
○大畢、廿八宿中の畢宿を云るか
○抵貫大角入攝提、史記天官書に大角者天王帝廷其兩旁各有三星鼎足句之曰攝提とあり廿八宿中の亢宿にあり
○宇和喜多南郡、宇和は現今東西南北四郡に分る喜多は古に同じ
○常寧殿、承香殿の北貞觀殿の南にあり后町と稱す先是天皇東宮より內裏に遷御あらせられし故に皇太后も亦內裏に遷らせ給ひしなり
○健兒、諸國に之を置き兵馬に練習せるものを以て充つ之をチカラヒトといふ力ある人の意、皇極紀元年七月（書紀下一五一頁）天平六年四月紀（續紀上二四七頁）に見ゆ

于群臣、大歌五節舞如常儀、賜祿各有差、○十七日戊午、皇太后遷自東宮御常寧殿、勅曰、廼者恠異頻見、求之蓍龜、新羅賊兵、常窺間隙、災變之發、唯緣斯事、夫攘災未兆、遏賊將來、唯是神明之冥助、豈云人力之所爲、宜令能登、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、長門、大宰等國府、班幣於邑境諸神、以祈鎭護之殊效、又如聞、所差健兒、統領、選士等、苟預人流、曾無才器、徒稱爪牙之備、不異蟷蜋之衞、況復可教之民、何禦非常之敵、亦夫十步之中、必有芳草、百城之內、寧乏精兵、宜令同國府等、勤加試練、必得其人、○十八日己未、勅、二品式部卿忠良親王聽養鷹二聯、鷂二聯、左大臣正二位源朝臣信鷹三聯、鷂二聯、○廿日辛酉、進山城國從一位勳二等松尾神階加正一位、授從四位下水主神從四位上、○廿一日壬戌、大祓於建禮門前、以圖書寮有人死也、○廿三日甲子、大原野祭如常、○廿五日丙寅、勅、阿波國名方郡加置主政主帳各一人、○廿九日庚午、以散位從五位下紀朝臣本道爲下野守、從五位上行大宰少貳在原朝臣安貞爲肥後守、是日勅、聽二品仲野親王養鷹三聯、鷂一聯、正三位行中納言

○統領選士、選士は大宰府に之を置き分番して九國二嶋の防禦に充つ統領は選士の統率者なり軍團の軍毅に準ず三代格十八天長三年十一月の太政官符を參考すべし、士は原本手に作る諸本に據て改む
○預人流、流は擇也求也人流とは多くの人の中より選擇したるを云
○爪牙之備、爪牙は鳥獸の武器にて之を以て防衞に充つ故に武臣を稱して爪牙と云
○蟷蜋之衞、文選魏都賦に弱卒瑣甲無異蟷蜋之衞とあり莊子人間世篇に汝不知夫蟷蜋乎怒其臂以當車轍不知其不勝任也とあるに出づ
○可教之民、可は宮イ本に不とあり是なるべし
○十步之中云云、隋書煬帝紀に方今宇宙平一文軌攸同十步之內必有芳草四海之中豈無奇秀とあり
○水主神、承和十一年五月甲辰紀及貞觀元年正月甲申紀に見ゆ
○名方郡、現今名東名西の二郡となる

陸奥出羽按察使源朝臣融鷹三聯、鶴一聯、從五位下行內膳正連扶王鷹二聯、從五位上行丹波權守坂上大宿禰貞守鷹一聯、從五位上行近江權大掾安倍朝臣三寅鷹三聯、從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗抗表言、伏奉恩制、得備宿衞、光寵自天、懼心無地、臣才非文武、智謝股肱、忝假納言之名、空竊大將之號、一以慙於過分、一以耻於非據、況乎桑楡景暮、蒲柳氣衰、僅可陪縉紳之臣、何堪預陛戟之列、仍先再修上表、請解右大將、遂無聞天之聲、逾益伏地之恐、臣以爲、甲冑未必忠信、忠信自爲甲冑、望請、解罷所帶、避路後賢、臣尸素可以除、臣愚丹可以盡、不勝懇欵、抗表以聞、不許焉、○十二月壬申朔、五日丙子、勅、鎭守府醫師、以六年爲秩限、○八日己卯、天皇降手勅、進參議正四位下行左近衞中將兼伊豫守藤原朝臣基經階加從三位、任中納言、右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相抗表請解職言、臣聞、日月經天、未免虧昃、山河紀地、尚爾沖危、玄功妙造、理既必然、世道人倫、盈何可久、臣器業無取、聲華素貪、謬辱聖慈、頻深丹臒、文官武職、秩峻班高、既慙伐檀之譏、深惕濡

尾之誠、未嘗一日一時、不懷恬退之志、而皇恩不遐、粉骨欲酬、忍謗忘危、偸安日月、上天降責、尫病常添、去春殊劇、還第醫療、經旬涉月、未及能痊、中使頻臨、辭弗獲命、遂乃力疾拂巾、强入禁省、朝謁未幾、病更發動、彌留綿篤、命危如薤露、誠是久妨賢路、長忍素飡之所致也、竊以、舟不輕載、無以免風浪之危、車仍重任、何得踰嶮難之急、聖主陛下、若能悲此積痾、顧夫冥譴、却臣重職、減臣高俸、許其抽簪養病、散髮飡和、則冀既遊之魂、返於岱嶺、其亡之壽、繫于苞桑、假使鬼瞰中休、天誅已塞、幸預特進之殊品、久叨訪建之篤恩、乃至還復舊任、何妨之有矣、伏乞陛下枉廻聖聰、特賜哀察、俾夫乾坤之德、施而彌新、日月之明、照而更盛、不勝慊切之至、謹奉表以聞、優詔不許、是日、沒入庶人伴善男宅地資財、付內藏寮、佛像經論書籍付圖書寮、禁五畿國非有裁許、輙開用不動穀、若不勤愼、罪以違勅、○十日辛巳、地震、○十一日壬午、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿行事、右大臣藤原朝臣良相重抗表言、臣不任沉痾、陳表謝盈、天感未降、更賜敦奬、心影相疚、精爽震越、臣聞、四時之序、功畢即遷、兩

○運扶王驚二聯、原本扶を枝に作る元年二月己亥紀及九年正月戊申紀に據て改む諸本二を一に作る
○從五位上(二三頁)、祕本閣本尾本上を下に作る
○氏宗抗表、此表は菅家文草十に載す
○桑榆景暮、晚年の意、續後紀(四八頁)に注す
○陛戟、漢書霍光傳注に陛戟謂執戟以衞陛下也とあり
○聞天之聲、毛詩小雅鶴鳴章に鶴鳴于九皐聲聞于天とあり
○忠信自爲甲冑、禮記儒行に儒有忠信以爲甲冑とあり
(十二月)丙子勅、三代格五に出づ
○山河紀地、晉書地理志に星象麗天山河紀地とあり
○素貪、貪は貧の訛なるべし
○丹雘、雘は丹也、原本護に作る祕本閣本に據て改む
○伐檀之譏、毛詩魏風伐檀章序に伐檀刺貪也在位貪鄙無功而受祿君子不得進仕爾とあるに據れり

○惕濡尾之誡、易未濟卦に小狐汔濟濡其尾、象傳に濡其尾亦不知極也とあるを云
○拂巾、巾は幘にて冠の屬なり巾を拂ふは出仕するを云此語後漢書左雄傳論に見ゆ
○彌留綿篤、疾の重く危篤なるを云
○如薤露、薤の上の露の消えやすきが如しとなり初學記挽歌詞に薤露蒿里二章あり、祕本閣本尾本等薤露の二字を誕の一字に作る
○誠是久妨賢路、此六字諸本に據て補ふ
○抽簪、簪纓は仕官する者の飾にて簪を抽くは官を棄つる意なり此語南史庾于陵傳に出づ
○散髮、張協の詩に抽簪解朝衣、散髮歸海隅とあり
○湌和、湌は原本食に作る諸本に據て改む、晉書阮籍傳論に其退也餐和履順以保天眞とあり
○既遊之魂云云、已に注す
○其亡之誡云云、易否卦の九五に其亡其亡繫于苞桑、疏に繫于苞桑、者苞本也

耀之明、未恒其盛、雖云在賢智之人、而持滿難久、何況於斗筲之器任重年深乎、臣不才不敏、德薄才輕、然猶頗覺利害之端、苟知止足之分、又素貪禪念、酷厭囂塵、所以久掌機要、俳徊禁省者、亦緣志憚孤恩、誠深報國、也、即欲長勤衆群之望、遂見深拱之化、而今寢患彌留、居諸荏苒、良醫上藥、未覺殊功、若臣天算有盡、則當早殞絕、而經時送月、猶延視息、知是上天冥助、顧臣殷勤、欲其覺悟去盈保全餘年也、若能當于此時、解却職任、將必使上天收責、司命全算、若猶輕居權寵、無所謙損、則臣塡溝壑、非旦則暮、假令愚臣暫延歲月之命、則於陛下、尚納塵涓之効、若一旦無祿、則愚臣徒失深志、陛下亦失一廝、愚臣陛下共無所得、伏願照此深哀、悲其匪飾、以盛陛下好生之德、以全愚臣惜命之誠、不勝懇切之至、謹拜表以聞、不許、○十三日甲申、右大臣藤原朝臣良相重抗表言、臣前後表誠、雖蒙哀許、病中慙悚、精守罔居、臣聞、人心難奪、物性好偏、故唐堯盛德、不屈潁陽之高、漢祖中興、猶容商春之遯、臣自有知識、浪恩能仁、年老齒衰、此意彌切、雖寄勿在公、而身俗心眞、刹那之間、禪念無忘、但以弈代承恩、塵

涓尙淺、釋迦深教、忠孝亦存、故勉勵駑拙、久濫樞要、見天使之頻來、耻出家之尙遲、而病深膏肓、命繫絲髮、冀先無常之使、早殖出世之因、伏惟先皇陛下、慈超和墨、德跨飛行、昔滿一切之願、今享萬乘之尊、何使臣坐罹盈滿之灾、失菩提之願、儻諸佛慈悲、帝釋隨喜、頽齡更駐、法衣在身、則至心專念、誓護聖朝、聖朝得其利益、決定勝於在俗之時、又縱生命有涯、不可更延、則臣尙得志於眼前、多福於身後、豈同懷謗而終生、尸祿而空死、伏望、陛下更入知實印門、新廻大悲璽詰、除爲聖朝之具臣、聽作釋迦弟子、然則恩浹始終、德深存歿、豈唯梵志樹提隨女人之欲、帝釋蘇摩救衆生之病而已哉、不勝丹款之至、謹奉表以聞、○十六日丁亥、詔以從三位守權大納言兼右近衞大將藤原朝臣氏宗爲左近衞大將、參議正四位下行右近衞權中將兼備前權守藤原朝臣常行爲右近衞大將、○廿日辛卯、頒奉諸山陵墓荷前之幣、天皇不御幣所、公卿行事、是日、於內殿始修佛名懺悔、例也、○廿二日癸巳、勅改定深草山陵四至、東至大墓、南至純子內親王家北垣、西至貞觀寺東垣、北至谷、○廿五日丙申、詔以藤

凡物繫于桑之苞本一則作岡也とあり
○鬼瞰、已に注す
○久叨訪建之篤恩、原本久を入に作り訪字なし諸本に據て改め補ふ
○施而彌新、施は原本施に訛れるを改む
○罪以違勑、以は原本准に作る諸本に據て改む
○心影、心身の意
○精爽、靈魂を云、左傳昭廿五年に心之精爽是謂魂魄と見ゆ
○兩耀、日月を云
○斗筲之器、器量の小なるを云論語子路篇に出づ
○任重、任は原本位に作る諸本に據て改む
○孤恩、恩に報いざるを云李陵答蘇武書に見ゆ
○深拱之化、深拱は無爲の意、史記李斯傳に見ゆ
○居諸、日月の意、毛詩邶風柏舟章に日居月諸とあるに出づ
○視息、生命の意、宋書徐湛之傳に見ゆ
○殷勤、殷は原本勸に作る閣本尾本に據て改む
○塡溝壑、非運にして死するを云、史記范雎傳に見ゆ
○無祿、祿は祿命なり論

銜命義篇に人有命有祿云々命者貧富貴賤也祿者盛衰興廢也とあり
○一斷、斷は字書に謂折薪養馬者とあり
○深哀、哀は衷の訛なるべし
○匪飾、飾は原本餙に作る黑川校本に據て改む
○人心難奪、論語子罕篇に三軍可奪帥也匹夫不可奪志也とあるに出づ
○物性好偏、後漢書延篤傳に物性好偏故所施不同事少兩兼者とあり
○不屈潁陽之高、後漢書逸民傳論注に潁陽謂巢許也とあり巢父許由は堯の天下を讓むとするを避けて隱遁せし高士にて潁陽は隱栖の地なり
○富春之遯、後漢の嚴光なり、光武帝其賢を思ひ屢起用せむと欲し遂に諫議大夫に除せしに屈せずして富春山に耕すと云逸民傳に詳なり
○知識、知は原本和に作る富本黑川校本に據て改む、知識は所謂善知識にて我を善道に導く者を云
○思能仁、佛に歸依するを云能仁は釋迦なり
○密勿、勿は諸本に據て

原朝臣須惠子、爲春日并大原野神齋、○廿六日丁酉、授近江國從四位上勳八等兵主神正四位下、遠江國正六位上蟾渭神、鳥飼神、並從五位下、從三位守權大納言兼左近衛大將藤原朝臣氏宗上表、辭大將言、伏奉今月十六日詔旨、以臣爲左近衛大將、明命由衷、鑒拔意外、兢魂戰股、如臨千仞、臣自知庸淺、謬忝朝行、每念虛受、唯增重灼、近請解右大將、至于再至于三、容澤更加、遷轉逾高、當須警巡終老、跼蹐竭誠、申其分寸、効以絲髮、而今脊力已衰、難堪堅銳、思慮多爽、何備帷幄、縱雖僶俛從事、匍匐奉職、不啻恩德是負、實亦軍陣可憂、伏望、乾照特賜寬假、迴授中將藤原朝臣基經、在於清朝、允愜官才、在於素飡、既免謗議、無任瀝欵懇迫之至、謹上表陳讓以聞、不許、○廿七日戊戌、以從五位下藤原朝臣高子、爲女御、○廿九日庚子、以從四位上忠範王、從五位上礒江王、橘朝臣三夏、藤原朝臣直方、從五位下滋野朝臣善根、滋岳朝臣川人、源朝臣弼、藤原朝臣維範、並爲次侍從、○卅日辛丑、大祓於朱雀門前、并大儺如常、

補ふ、字書に猶二黽勉一也又謂下在二天子之側一掌二樞要之政一者上とあり漢書劉向傳に出づ　○先皇陛下、先は天の誤なるべし　○慈超和墨德跨飛行、超以下五字は原本悲の一字に作る諸本に據て改む、和墨は詳ならず飛行は飛行皇帝にて轉輪聖王の別名なり　○隨喜、修懺要旨に隨二他修一レ善喜二他得一レ成とあり　○聖朝得共利益、聖朝の二字は諸本に據て補ふ　○具臣、無能の臣を云、論語先進篇に出づ　○梵志樹提、梵志は演密鈔に梵者淨也謂以二淨行一爲レ志名爲二梵志一とあり樹提は樹提伽の略にて長者の名、佛說樹提伽經あり　○蘇摩、蘇婆呼の略なり蘇婆呼菩薩あり　○衆生之病、之字は原本なきを補ふ　○右近衞權中將、權は上文三月己亥紀に據て補ふ　○深草山陵、仁明天皇　○純子內親王、純は原本紀に作る貞觀三年六月庚申紀に據て改む　○丙申詔、須惠子を春日大原野神齋とする太政官符三代格一に見ゆ　○須惠子、十年閏十二月庚戌紀に可多子と改むと見ゆれど格には已に可多子とす　○神齋、卽ち齋女なり格には齋女とあり　○兵主神、貞觀四年正月己丑紀に出づ　○蟾渭神、神名式に遠江國引佐郡渭伊神社とあり、今井伊谷村にあり蟾は膽の誤なるべし　○鳥飼神、式外、所在未詳　○由衷、衷は原本裹に訛れるを改む　○虛受、文選求二自試一表に君無二虛授一臣無二虛受一云々虛受謂二之尸祿一とあり　○重灼、重は薰の訛なるべし薰灼は易艮卦九三厲レ薰レ心の注に危亡之憂乃薰二灼其心一也と見ゆ薰は燒灼の意なり　○踟躕竭蹶、踟躕は恐懼する貌、竭は諸本に據て補ふ　○何備帷幄、帷幄は謀臣を云　○匍匐奉職、匍匐は毛詩邶風谷風章に匍匐救レ之、箋に言レ盡レ力也とあり　○官才、文選九錫文に官レ才任レ賢、注に官者必以二其才一任とあり　○在於素飡、素飡は自身を云　○瀝欵懇迫、原本瀝を歷に懇を邇に作る瀝は諸本に據り懇は意を以て改む前本には邇字なし　○從四位上（忠範王）、山田氏云按忠範王六年正月甲午授二從四位下一其後不レ見二進叙一十年二月辛巳條仍書二從四位下一而此條及十八年十二月庚申元慶元年七月戊午條皆書二從四位上一前後矛盾其說未レ詳　○滋岳朝臣川人、原本臣下に善根滋岳朝臣の六字あり衍なり諸本に據て削る　○卷第十三、原本此下に終字あり諸本に據て削る

日本三代實錄卷第十三

日本三代實錄卷第十四

起貞觀九年正月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

九年（丁亥）春正月壬寅朔、天皇不㆑受㆓歳賀㆒、七耀御暦、藏氷樣、腹赤魚等、所司付㆓內侍㆒奏、天皇御㆓紫宸殿㆒、宴㆓于侍臣㆒、賜㆑祿、○二日癸卯、所司獻㆓剛卯杖㆒如㆑常、天皇不㆑御㆓紫宸殿㆒、付㆓內侍㆒奏、○七日戊申、天皇御㆓紫宸殿㆒、觀㆓青馬㆒、賜㆓宴群臣㆒、賜㆑祿各有㆑差、授㆓无品惟彦親王四品、從三位守權大納言兼左近衛大將藤原朝臣氏宗正三位、從四位下行攝津守忠貞王從四位上、无位基世王從四位下、從五位下行內膳正連扶王、少納言兼侍從久須繼王、並從五位上、散位正六位上弘道王從五位下、神祇伯從四位下中臣朝臣逸志從四位上、左近衛少將正五位下兼行近江權介源朝臣舒、右衛門權佐兼攝津權守藤原朝臣廣基、並從四位下、從五位上行兵部少輔源朝臣直、主殿頭兼行讃岐權介當麻眞人鴨繼、並正五位下、散位從五位

【貞觀九年】春正月、原本春上に丁亥の二字あり諸本欄外頭注とす故に之を削る

○惟彦親王、文德天皇第四皇子母は滋野貞主の女

○兼左近衛大將（氏宗）、兼は前後の例に據て補ふ

○基世王、仲野親王の男下文戊午仲野親王傳に見ゆ

○源朝臣直、原本直下に士字あり衍なり諸本に據て削る

下多治眞人河雄、橘朝臣春成、小野朝臣春枝、勘解由次官兼行筭博士家原宿禰氏主、式部權少輔高向朝臣公輔、右兵衛權佐藤原朝臣國經、左近衛權少將兼行伊豫介文室朝臣巻雄等、並從五位上、散位外從五位下山口宿禰稻床、菅野朝臣高松、三善宿禰清江、直講苅田首安雄、正六位上源朝臣建、貞朝臣登、左近衛將監平朝臣正範、式部大丞藤原朝臣春景、中監物藤原朝臣行直、大内記小野朝臣俊生、左衛門大尉良岑朝臣晨直、藤原朝臣生丘、兵部大丞藤原朝臣安嶺、右衛門大尉橘朝臣博覽、豐前權介藤原朝臣仲直、右近衛將監上毛野朝臣上長、散位橘朝臣氏繼、大外記伴宿禰興門、治部大丞安倍朝臣興氏、近江少掾上毛野朝臣藤野等、並從五位下、左大史正六位上和氣朝臣時雄、左近衛將監道嶋宿禰村嶋、直講船連副使麻呂、侍醫藏人貞野、散位難波朝臣實得、暦博士家原宿禰鄕好、皇太后宮宮主直千世麻呂等、並外從五位下、○八日己酉、始講最勝王經於大極殿、以藥師寺僧法相宗傳燈大法師位平智爲講師、甲斐介正六位上藤原朝臣安繩、近江權少掾正七位上安

○貞朝臣登、原本貞下に源字あり閣本谷本に據て削る按に八年三月戊寅紀に沙彌深寂賜姓貞朝臣名登とあれば源字は衍なること明なり
○俊生、俊は諸本後に作る恐くは非
○博覽、廣相の前名公卿補任元慶八年條に貞觀九年十月十一日改博覽爲廣相とあり同頭書には貞觀十年十月十一日とし舍利佛別號博覽比丘望請改爲廣相者許之とあり
○興門、興は原本與に作る下文二月辛巳紀及十一年正月辛未紀に據て改む
○興氏、興は原本與に作る三年十月戊辰紀及十一年正月辛未紀に據て改む
○藏人貞野、藏人は錄攝津諸蕃に見ゆ内イ本人を史に作るは非
○皇太后宮宮主、原本宮一字なし前本谷本淀イに據て補ふ下文八月丁亥紀には皇太后宮を太皇太后宮とす

○賀祐臣祖繼、原本繼を挺に作る諸本に據て改む賀祐の祐は祜の誤なるべし
○近江國夷、閣本尾本等には近上に授字あり
○河繼並外從五位下、原本河を阿に作り外字なし祕本尾本前本等に據て改め補ふ
○興子、興は原本輿に作る諸本に據て改む
○外從五位上江沼臣河子、河は原本阿に作る祕本尾本前本等に據て改む上は上文下に作る
○佐美子、祕本に美字なし
○俊賢子、俊は諸本後に作る
○乙三野、乙は諸本に據て補ふ
○興基王、興は原本輿に作る諸本及八年正月甲申紀十二年正月戊寅紀に據て改む
○從五位上公輔、上は原本下に作る上文戊申紀に據て改む
○行河內權守、行は諸本に據て補ふ

倍朝臣利柯、並授從五位下、內匠大允正六位上賀祐臣祖繼、近江國夷外從六位下爾散南公河繼、並外從五位下、從五位上藤原朝臣興子從四位下、從五位下藤原朝臣高子、林朝臣氏子、並正五位下、无位滋野朝臣岑子從五位上、外從五位上江沼臣河子、大和朝臣仲子、无位藤原朝臣佐美子、小野朝臣俊賢子、田中朝臣原子、和朝臣宜子、並從五位下、无位紀朝臣全子、賀陽朝臣乙三野、並外從五位下、○十二日癸丑、以從五位下行木工權助和氣朝臣彝範、爲少納言、參議正四位下行右大辨兼播磨權守大江朝臣音人爲左大辨、播磨權守如故、從四位上行彈正大弼藤原朝臣冬緒爲右大辨、侍從從五位下藤原朝臣千乘爲右少辨、散位從四位下興基王爲侍從、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名爲民部卿、勘解由長官如故、從五位上行式部權少輔高向朝臣公輔爲正少輔、散位正五位下藤原朝臣本雄爲大和權守、從四位上行河內權守平朝臣房世爲正守、大監物從五位下御室朝臣安常爲和泉守、散位從五位下吉備朝臣全繼爲尾張守、從五位下大中臣朝臣

○外從五位下（貞長）、原本外字なく貞を眞に作る外は宮本及八年正月甲申紀に據て補ひ貞は諸本及八年正月紀十一年三月辛巳紀に據て改む
○惟喬親王、喬は原本高に作る諸本に據て改む
○良岑朝臣、岑は諸本峯に作る

岡良爲介、外從五位下太朝臣貞長爲參河介、從五位下清原眞人道雄爲駿河守、參議大藏卿正四位下源朝臣生爲相摸守、大藏卿如故、從五位上橘朝臣春成爲武藏守、四品惟條親王爲上總太守、四品守彈正尹惟喬親王爲常陸太守、彈正尹如故、二品行治部卿賀陽親王爲上野太守、治部卿如故、從五位上行美濃守源朝臣穎爲信濃守、散位外從五位下長田朝臣利世爲下野介、從五位上行少納言兼侍從良岑朝臣經世爲陸奧守、散位從五位下嶋田朝臣善宗爲若狹守、左京權亮從五位下紀朝臣當仁爲越後守、散位從五位下三善宿禰清江爲丹波介、勘解由次官從五位下大春日朝臣澤主爲丹後守、從五位上守大藏大輔滋野朝臣善蔭爲但馬守、從五位上行大和權守良岑朝臣長松爲權守、從五位上行縫殿頭伴宿禰須賀雄爲介、縫殿頭如故、從五位下行因幡權介大春日朝臣高庭爲正介、左京亮從五位下廣階宿禰貞雄爲美作介、從五位下行兵部大丞藤原朝臣安嶺爲長門守、從五位下行左近衞將監藤原朝臣房雄爲紀伊守、散位從五位下菅野朝臣高松爲介、從五位上

○豐前權介(仲直)、權字は上文戊申紀に據て補ふ
○行左大史、行は例に據て補ふ
○仲野親王薨、紹運錄に仲野親王二品式部卿贈一品太政大臣宇多天皇爲外祖故也とあり墓は諸陵式に高畠墓贈一品太政大臣仲野親王在山城國葛野郡墓戶一烟と見え大秦村太秦にあり
○第十二皇子、諸本に皇字なし
○四皇女、安勅・大井・紀伊・善原內親王なり
○乘輦車、車は諸本に據て補ふ
○奏壽宣命之道、壽詞を奏し宣命を宣讀する法なり

行陰陽頭藤原朝臣三直爲阿波權守、參議民部卿正四位下兼行勘解由長官南淵朝臣年名爲伊豫守、餘官如故、從五位下守右少辨藤原朝臣元利萬侶爲大宰少貳、散位從五位下藤原朝臣安棟爲筑前守、右京權亮外從五位下長岑宿禰恒範爲權介、從五位下行豐前權介藤原朝臣仲直爲守、外從五位下行左大史和氣朝臣時雄爲權介、從五位下行伊勢介藤原朝臣宗枝爲右衞門佐、○十四日乙卯、大極殿齋講竟、僧綱率諸宗僧、奉參內裏、論義如常、○十六日丁巳、踏歌之節、天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、宮人踏歌如常、日暮賜祿有差、○十七日戊午、勅公卿、行射禮於建禮門前、○二品仲野親王薨、親王者桓武天皇之第十二皇子也、母從四位下藤原朝臣河子、從四位上大繼之女、桓武天皇納之、生親王及四皇女焉、親王幼辨惠、性寬裕、弘仁五年授四品、天長七年爲大宰帥、十年加三品、承和九年拜彈正尹、十四年賜二品、嘉祥三年遷爲式部卿、仁壽三年以本官兼常陸太守、貞觀三年兼上總太守、五年遷大宰帥、六年勅聽乘輦車出入宮中、親王能用奏壽宣命之道、音儀詞語、足爲模範、當

○勅參議藤原朝臣基經、藤原以下受習の受に至る二十字は諸本に據て補ふ、但し竟字は疑はしけれど姑く舊に據る

○茂世、以下十四人は紹運錄に淸世王刑部卿從四下・輔世王從四上伊豫守・季世王從四上美作守・秀世王從四上美作守・房世王正五下因幡守賜二平姓一・當世王從四下・基世王四位因幡守・潔世王從四上山城守・實世王從四上攝津守・十世王參木從三・在世王四位[illegible]守・康世王從四上河內守・利世王備後守・惟世王從四上大舍人賜二平姓一とあり

○輔世、原本に此二字なく頭注に茂世次脫二輔世以下四人名一今以二紹運圖一補レ之といひ輔世季世秀世房世の八字を補ひたれど諸本輔世の二字のみありて季世秀世房世の六字なし故に今諸本に從ふ

○十人、原本頭注に十人間脫二二字一今補とあれど茂世以下九人にて十人に非ず一人脫ちたるか或は十は九の誤にもあるべし故に疑を存して後考を俟つ

時、王公、卒議其儀、勅參議藤原朝臣基經、大江朝臣音人竟、就親王六條第、受習其音詞曲折焉、故致仕左大臣藤原朝臣緒嗣、授此義於親王、親王襲持、不失師法焉、薨時年七十六、有男十四人、女十五人、茂世、輔世、當世、基世、潔世、實世、十世、在世、康世十人爵爲四位、十世、官至參議、惟世、利世二人、賜姓平朝臣、並爲五位、女諱班子、光孝天皇龍潛之日、納之藩邸、生朱雀太上天皇、天皇踐祚之日、尊爲皇太夫人、追贈親王一品太政大臣、今上卽位、尊皇太夫人、爲皇太后、○廿一日壬戌、停內宴、以仲野親王薨也、○廿四日乙丑、從四位上行神祇伯中臣朝臣逸志卒、逸志者左京人也、祖正五位下道成、父從五位下益繼、官爲伊賀守、逸志承和三年爲內藏少允、轉大允助、十一年授從五位下、十二年母喪解官、詔以本官起之、十五年轉頭、嘉祥二年爲神祇權少副、內藏頭如故、明年轉大副、仁壽元年授從五位上、貞觀之初加正五位下、一年而爲伯、數歲爵至從四位下、今月七日進從四位上、卒時年七十四、○廿五日丙寅、授大和國正六位上馬立伊勢部田中神從五位下、○廿六日丁卯、授內膳司從五位上

○惟世利世、此には並に五位とあれど紹運錄には惟世を從四位上とす又利世は賜姓の事見えず賜姓ありしは傳世とす
○朱雀太上天皇、私記に玄道云朱雀太上天皇ハ宇多天皇ニ當ル菅家文草扶桑略記等可ニ徵蓋稱ニ朱雀ト者ニ天子ト曰宇多天皇曰寬[illegible]天皇曰圓融天皇と云
○爲皇太夫人、紀略に仁和三年十一月十七日丙戌以ニ親母王氏ニ爲ニ皇太夫人とあり
○追贈親王一品、同年閏十一月甲寅なり紀略に見ゆ
○今上、醍醐天皇
○爲皇太后、寬平九年七月廿六日己亥
○中臣朝臣逸志幸、逸志は文德紀嘉祥三年九月乙酉紀中臣朝臣逸志と見ゆされば（イチシ）と訓べきなり大神宮例文宮主の條に大鴫朝臣[illegible]伊賀守[illegible]一男貞祥[illegible]年九月任[illegible]十六年貞觀九年正月廿九日卒とあり
○馬首伊勢、[illegible]田中神、式外、大和志に馬首伊勢[illegible]田中神社[illegible]高市郡[illegible]田中村[illegible]今

庭火皇神從四位下。○神祇官陰陽寮言、天下可レ憂疫癘、由レ是令二五畿七道諸國、轉讀仁王般若經、幷修鬼氣祭。○廿七日戊辰、地震。○二月辛未朔、地震。○二日壬申、春日祭如常。○三日癸酉、齋宮寮火、延（ヒホコリテ）燒官舍十二宇。○四日甲戌、祈年祭如常。○五日乙亥、授伊豫國從四位上瀧神正四位下、從五位上村山神正五位下、正六位上浮嶋神從五位下。○七日丁丑、釋奠、幷園韓神祭如常。○九日己卯、大原野祭如常。○十一日辛巳、公卿就太政官曹司廳、列見文武官人成選者、以從四位下行山城權守在原朝臣善淵爲神祇伯、散位從五位下源朝臣加爲侍從、從五位下橘朝臣岑守爲大監物、齋院長官從五位下藤原朝臣忠主爲皇太后宮大進、齋院長官如故、民部少輔從五位下巨勢朝臣文雄、從五位下行右衛門大尉橘朝臣博覽、並爲文章博士、從五位下行式部大丞藤原朝臣春景爲民部少輔、從五位下藤原朝臣秋雄爲兵部少輔、從五位下行大內記小野朝臣俊生爲大判事、從五位上守刑部大輔橘朝臣三夏爲大藏大輔、武藏守從五位上橘朝臣春成爲大膳大夫、正五位下行

稱八幡二一村共祭さあり
○庭火皇神、內膳司所祭御竈神三座の一座、已に注す
○疫癘、疫は諸本及類史十一に據て補ふ
○鬼氣祭、陰陽道の祭祀なり
（二月）瀧神、神名式に多伎神社さあり二年閏十月癸亥紀に見ゆ
○村山神、仁壽三年六月甲戌紀に見ゆ
○浮嶋神、式外、神祇志に今在浮穴郡牛淵村
○行右衞門大尉、行字は前後の例に據て補ふ
○後生、後は祕本尾本前本等後に作る
○行兵部少輔、行字は例に據て補ふ
○興門、興は原本與に作る祕本閣本等に據て改む
○守左兵庫頭、守は例に據て補ふ
○齋宮頭、原本宮下に寮字あり諸本に據て削る下同じ
○外從五位下（繼根）、外は閣本谷本及二年十一月壬辰紀に據て補ふ
○從五位上守大膳大夫、從以下五字は祕本閣本尾本等に據て補ふ

兵部少輔源朝臣直爲木工頭、散位從五位下大中臣朝臣國雄爲主殿權助、外從五位下行針博士深根宿禰宗繼爲醫博士、從四位下行右衞門權佐兼攝津權守藤原朝臣廣基爲彈正大弼、攝津權守如故、散位從五位下橘朝臣高成爲左京亮、從五位下行左衞門大尉藤原朝臣生丘爲權亮、從五位下佐伯宿禰子房爲右京權亮、從五位下行大外記伴宿禰興門爲勘解由次官、從五位下守左兵庫頭紀朝臣好雄爲山城介、齋宮頭從五位下藤原朝臣諸藤爲伊勢介、齋宮頭如故、侍從從五位下橘朝臣休蔭爲相摸權介、筑前守從五位下藤原朝臣安棟爲武藏守、從五位上守刑部權大輔紀朝臣有常爲下野權守、木工頭兼左衞門權佐從五位上紀朝臣春枝爲因幡權介、餘官如故、散位外從五位下善道朝臣繼根爲淡路守、從五位下守大判事紀朝臣恒身爲筑前守、從五位上守大膳大夫在原朝臣守平爲右衞門權佐、從五位下行山城介源朝臣撰爲左兵庫頭、○十三日癸未、是年內外儉乏、人庶阻飢、就中畿內特甚、盜賊群起、或遮道路而脅人掠奪、或窺屋舍而行火入盜、仍下知國司、每鄉

○右衞門權佐、佐は原本介に作る諸本に據て改む
○飢儉、儉は玉篇に少也歲歉也とあり年穀乏しきを云或は饉の誤かと云るは非なり
○糿、名義抄に糿モミ、カシキカテとあり字類抄には糿モミ穀同とあり諸本糿を粈に作る粈は玉篇に雜飯也とあり
○委之、狩谷校本に委恐悉と云り
○寄重、寄は原本等に作る諸本に據て改む
○蕭散之性、蕭散は辭源に疏散也とあり
○青宮、初學記に神異經曰東方東明山有宮青石爲牆面一門門有銀牓以青石碧鏤題云天地長男之宮とあり東宮に同じ
○得甚忘筌、莊子外物篇に筌者所以在魚得魚而忘筌云々言者所以在意得意而忘言とあるに據れり
○干木偃息云云、呂氏春秋期賢篇に魏文侯過段干木之閭而軾之請相之段干木不肯受則君乃致祿百萬而時往館之國人皆喜秦欲攻魏司馬唐

結保、督察奸盜。○十七日丁亥、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經。承去年之災旱、京邑飢儉、詔以米三百廿石、糿二千石、鹽卅五斛、新錢一百貫、賑恤東西京乏絕之人。○廿二日壬辰、左大臣正二位源朝臣信抗表辭職、勅答曰、省表委之、公資兼文武、寄重親賢、先朝尙能知其蕭散之性、不責以僶俛之功、況自朕在青宮、年深保傅、以至今日、賴公翼贊、往年遺前學士音人、深喩朕意、既念得甚忘筌、何今煩此辭職、大携絲竹以養眞、翫鷹馬以忘老、自任素性耳、朕亦未之容焉、昔之干木偃息、魏侯高枕、先事不忘、今者收望、宜彌勵乃誠、莫重表請。○廿三日癸巳、右大臣正二位藤原朝臣良相抗表言、臣聞、盈虛有節、天道所以長存、損益隨時、人事由其免害、臣謬以非磷頑、荷華寵、自居陵秩、常念撝謙、臣所當食封、前後并二千戶、先帝察其寸心、聽返千戶、臣向寢患彌留、乞還封爵、九重沖邈、難蒙哀察、徒詠蘀兮、猶恐嗟若、竊聞、比來州郡京邑、承去年旱儉之弊、人用不贍、穀價登躍、加以諸國入少、百官俸乏、帑藏已空、歲用不支、臣辱居端揆、無所彌縫、有慙惶之弗暇、況尸素之胡顏、顧此厚封、自思減

耗、亦竊庶幾古人損有餘、補不足之義也、臣幸蒙陛下不貲之恩、凡厥子弟近親、略皆得拜官爵、仰給資養、得無所乏矣、況亦大將職閑、經用減少、所賜千戸、於臣有餘、伏望、奉返此五百戸、將補國用之萬一、然則詩人羔取衛之刺、鬼神貽福謙之慶、不勝懍款之至、謹奉表以聞、〇廿六日丙申、以河內國大縣郡石神、常世岐姬神、志紀郡林氏神、若江郡加津良神、中村神、並預官社、〇大宰府言、從五位上火男神、從五位下火賣神二社、在豐後國速見郡鶴見山嶺、山頂有三池、一池泥水色青、一池黑、一池赤、去正月廿日池震動、其聲如雷、俄而臭如流黄、遍滿國內、磐石飛亂、上下无數、石大者方丈、小者如甕、晝黑雲蒸、夜炎火熾、沙泥雪散、積於數里、池中元出溫泉、泉水沸騰、自成河流、山脚道路、往還不通、溫泉之水、入於衆流、魚醉死者千萬數、其震動之聲、經歷三日、〇廿七日丁酉、授近江國正四位下勳八等兵主神正四位上、越中國從四位上鵜坂神從三位、從四位下日置神從四位上、正五位上新川神從四位下、〇勅、左右近衞、左右兵衞、分結四番、夜行京內、賜左右馬寮未調御馬而騎焉、〇廿九日己

諫秦君曰段干木賢者也而魏禮之天下莫不聞無乃不可加兵乎秦君以爲然不敢攻之」とあるに據れり千木偃息は魏志徐邈傳に出づ千は原本于に作る祕本谷本に據て改む
〇菲薄、菲薄に同じ薄は……也
〇攜謙、易謙卦の六四に出づ謙遜の意なり
〇沖邈、深遠なるを云
〇哀察、狩谷校本云哀恐衷
〇詠蘀兮、蘀兮は毛詩鄭風の章名なり左傳昭十六年に子柳賦蘀兮注に蘀兮詩取其倡予和汝言已將和從之」とあり即ち徒に恩命に從ひて封爵を受くるを云蘀兮は原本擇兮に作る蘀は諸本に據り兮は祕本谷本に據て改む
〇恐嗟若、易節卦六三に不節若則嗟若、疏に節者制度之卦、處節之時位不可失、六三以陰處陽違節之道、禍將及己、以至哀嗟、故曰不節若則嗟若也」とあるに據れり若は語辭なり
〇彌縫、左傳僖廿六年に彌縫其闕而匡救其災」

昭、舊職二也とあり
○損有餘補不足、老子七十七章に出づ
○幸藉陛下不貲之恩、藉は原本籍に作る祕本に據て改む、貲は限なり
○大將職罷、八年十二月十三日甲申なり
○經用減少、漢書食貨志注に經常也常用之錢也とあり少は諸本に據て補ふ
○所賜、所は諸本に據て補ふ
○取爾之刺、爾は禾の訛なり取禾は毛詩魏風伐檀章に不稼不穡胡取禾三百廛兮とあるを云ふ、箋に是謂在位食祿無功而受祿也とあり
○石神、神名式河內國大縣郡石神社、今中河內郡堅下村太平寺
○常世岐姫神、同式同郡常世岐姫神社、今同郡南高安村神宮寺
○林氏神、同式同國志紀郡伴林氏神社、今南河內郡道明寺村林
○辛國神、同式同郡辛國神社、今同郡藤井寺村岡
○加津良神、同式若江郡加津良神社、今中河內郡八尾町萱振
○中[illegible]神、同式同郡仲村

亥、以權大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗爲大納言、參議正四位下行右衛門督兼讃岐守藤原朝臣良繩爲太皇太后宮大夫、餘官如故、散位從五位下藤原朝臣遠經爲大進、從五位下藤原朝臣貞亮爲治部少輔、從五位上藤原朝臣關主爲刑部大輔、從五位上行勘解由次官兼筭博士家原宿禰氏主爲尾張權守、餘官如故、從五位上守右近衛少將藤原朝臣山陰爲美濃守、少將如故、從五位下行太皇太后宮大進菅野朝臣彥主爲加賀權介、散位外從五位下御輔朝臣直野爲越後權介、主稅頭從五位上兼行加賀權介家原宿禰繩雄爲出雲權守、主稅頭如故、散位從五位下源朝臣湛爲備後權介、從五位下守內匠頭兼行安藝權介藤原朝臣維範爲阿波權介、內匠頭如故、內藏頭從五位上藤原朝臣安方爲土左權守、內藏頭如故、○三月辛丑朔、三日癸卯、天皇潔齋燒燈如常、○九日己酉、前陸奧守從五位上坂上大宿禰當道卒、當道者、右京人也、祖田村麻呂奇卓忠梗、志在匡正、討平東夷、軍功震世、官至大納言、贈從二位、父廣野爲右兵衛督、爵從四位下勳七等、當道少好武

神社、今同郡玉川村菱江
○火男神火賣神、三代實錄仁壽二年六月癸未紀に出づ
○鶴見山、幡田村鶴見にあり
○晃知流黃、原本晃を見に流を疏に作る閣本前本谷本に據て改む流黃は抄天地部水土類に流黃本草疏云石流黃（和名由乃阿和俗云ニ由王ニ）礬石液也とあり
○礬石、石は諸本に據て補ふ
○兵主神、四年正月己丑紀に出づ
○鵜坂神日置神、並に二年五月戊寅紀に出づ
○新川神、式外、所在纂錄には新川郡新庄町にありとす
○藤原朝臣良繩、朝臣の二字は諸本に據て補ふ
○爲太皇太后、原本上の太字なし諸本に據て補ふ
○從五位上行勘解由次官兼竿博士、原本上を下に作り竿字なし祕本閣本前本等に據て改め補ふ
○源朝臣湛、湛は原本堪に作る八年正月甲申紀に據て改む
○爲阿波權介、權字は十年正月辛亥紀に據て補ふ

事便弓馬、㝡善射、兼有才調、承和中爲内舍人、當正月行大射之禮、五位已上不足一人、于時詔以當道滿於其數、未幾爲右近衛將監、累遷左兵衛左衛門二府大尉、齊衡二年授從五位下、拜右衛門權佐、領撿非違使、當道處法平直、威刑不嚴、事乖道理者、雖云權貴、未必容媚、天安之初遷左近衛少將、貞觀元年出爲陸奥守、兼常陸權介、其年冬加從五位上、州秩既終、待代四年、在國九年而卒、時年五十五、當道家行廉正、輕財重義、在任有清理之稱、境内肅如、民夷安之、居貧无貲、臨於棺斂、所有布衾一條、而遺愛在人、至今見思、○十日庚戌、進大和國從一位勳六等石上神階、加正一位、周防國從四位下玉祖神、三坂神、並授從三位、從五位下仁壁神從四位下、无位當麻眞人靜子、安倍朝臣全子、紀朝臣原子、爲奈眞人永子、並授從五位下、角鹿直眞福子外從五位下、○十一日辛亥、信濃國正二位勳八等建御名方富命神進階從一位、從二位建御名方富命前八坂刀自命神正二位、從四位上馬背神從三位、正六位上梓水神、須々岐水神、並從五位下、從五位上行備前介源朝臣好爲守、民部少

○土左權守、左は原本佐に作る祕本前本谷本に據て改む下同じ
《三月》便弓馬、便は原本使に作る閣本前本谷本に據て改む
○滿於其數、原本滿を充に作り於字なし諸本に據て改め補ふ
○玉祖神、神名式周防國佐波郡玉祖神社二座、同郡右田村大崎にあり國幣中社に列す
○三坂神、神名式御坂に作る續後紀承和六年閏正月丁亥紀に出づ
○仁壁神、同式周防國吉敷郡仁壁神社、今宮野村宮野下
○前八坂刀自命神、前は諸本及類史に據て補ふ自は上文貫に作り宮本黑川校本目に改むれど類史十六に刀自を貫の一字に作る故に改めず
○馬背神、二年二月丙戌紀に出づ
○梓水神、式外、神祇志に今在安曇郡大野川村谷梓川上梓岳こと見ゆ
○須々岐水神、式外、同志に今在筑摩郡灣町保昼野こと云
○岡良、岡は原本岡に作

輔從五位下藤原朝臣春景爲介、從五位下行尾張介大中臣朝臣岡良爲土左守、信濃國高井郡人從八位上物部連善常改本居貫山城國紀伊郡、○十二日壬子、天皇曲宴皇太后於常寧殿、天皇稱觴奉壽、申之醼語、自旦訖暮、極歡而罷、太后去年十一月自東宮遷此殿、新居可慶、故有此宴焉、官僚始自大夫至于舍人、賜饗祿各有差、是日、勅進參議正四位下守右近衞大將兼行備前權守藤原朝臣常行階、加從三位、女御從三位藤原朝臣多美子加正三位、○廿三日癸亥、山城國愛宕郡地四町、賜典藏從五位上笠朝臣西子、聽建道場、○廿五日乙丑、令大和國禁止百姓燒石上神山、播蒔禾豆、○廿六日丙寅、詔以信濃國從二位武水別神、列於官社、授從五位上行陸奥守良岑朝臣經世正五位下、○廿七日丁卯、下知五畿七道、頃年搜捕海賊、督察姧盜之狀、頒下數度、警告稠疊、而今如聞、凶徒不絶、侵盜尚繁、水浮陸行、皆憂賊害、實是牧宰不勤肅淸之所致也、夫五家相保、一人爲長、以相撿察、載在法條、又容隱盜賊、科罪非輕、然則事須隣伍之內、必置保長、察以行來、詳以去就、亦其市津

る、總じて閣本宅本及上文正月癸卯紀に據て改む
○偵、縮本誤、原本谷本債に作る諸本及類史卅二に據て改む
○醼語、醼は宴に同じ宴飲歡語するを云ふ
○白且、且は原本且に作る閣本前本谷本に據て改む
○禁止、禁は原本集に作る諸本に據て改む
○禾豆、禾は毛詩豳風七月章黍稷重穋禾麻菽麥の箋に禾是大名也、非徒黍稷重穋四種而已、其餘稻秫菰粱之輩皆名爲禾とあり
○武水別神、八年六月甲戊紀に出づ
○良岑朝臣經世、山田以文云按經世位署恐誤
○丁卯下知五畿七道、此事三代格十九に太政官符應勤施方略早斷盜賊事云々と見ゆ
○五家相保、以下相撿察に至るまでは戸令の文なり
○察以行來云云、諸人の往來去就を詳に察知するなり
○偵邏、探偵なり
○容含之事、容含は罪人

及要路、人衆猥雜之處、勤施方略、多設偵邏、募以捕獲之賞、示以容含之事、使姦濫之徒、無所留跡、若不加愼行、重致解體者、必處重責、不曾寬宥、

○夏四月庚午朔、天皇不御紫宸殿、於宜陽殿西廂、賜飲侍臣、賜祿各有差、以從四位下嘉子女王爲女御、○二日辛未、遣神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道、向近江國伊福伎神社、奉弓箭鈴鏡、○三日壬申、平野祭如常、令豐後國、鎭謝火男火賣兩神、兼轉讀大般若經、緣三池震動之恠也、○四日癸酉、廣瀨龍田幷梅宮祭如常、是夜、太政官廚北邊小宅失火、延燒卅餘家、散位從五位下齋部宿禰文山卒、文山者右京人也、出自寒素、以巧藝見知、齊衡二年、東大寺毗盧遮那佛像頭墮在地、無巧師之可能造續者、文山究轆轤之術、搆雲梯之機、引上斷頭、續大佛頸、宛如新造、既復本體、貞觀二年、朝廷設以大會、莊嚴供養、於法會庭、賜文山從五位下告身、卽時著緋衣、觀者榮之、卒時年卅六、○七日丙子、式部省奏成選擬階簿、天皇不御紫宸殿、詔於省令行、○八日丁丑、灌佛於仁壽殿、出雲國從二位勳七等熊野神、從二位勳八等杵築神、並授正

二位、正五位下佐陁神正五位上、伯耆國正五位下伯耆神、訓坂神、大山神、並正五位上、正六位上湊神、賀茂神、並從五位下、備後國從五位上甘南備神、高諸神、並正五位下、是日、勅令出雲國吏郡司幷雜色人等帶劒、○十日己卯、大祓於建禮門前、以太政官廚邊火近宮城也、○十一日庚辰、以從五位上行侍從兼安藝權守藤原朝臣水谷、爲民部少輔、若狹守從五位下嶋田朝臣善宗爲宮內少輔、從五位下藤原朝臣數守爲若狹守、從五位下守大判事兼行明法博士宍人朝臣永繼爲越前權介、餘官如故、從四位上茂世王爲大宰大貳、茂世去年正月任大宰大貳、丁父憂去職、今詔起之、○十五日甲申、公卿就太政官曹司廳、授文武官成選位記、策命如常、是日、諸衞警固、緣賀茂祭也、○十六日乙酉、賀茂祭如常、○十七日丙戌、諸衞解嚴、以散位從五位下春澄朝臣具瞻爲侍從、○十九日戊子、以神祇伯從四位下在原朝臣善淵爲兼河內權守、○廿日己丑、大雨、節婦上總國夷灊郡人春部直黑主賣叙二階、免戶內役、以表門閭、○廿二日辛卯、東西京始置常平所、出官米而糶之、米一升直

たかくまふを云罪人を容含する罪重しと云ことを一般に知らするなり格には事を寧に作る
○若不加愼行云云、以下不曾寬宥に至る十八字は宮本作校本及三代格十九に據て補ふ
（四月）嘉子女王、棟貞王の女、貞純親王を生む
○伊福伎神社、神名式に近江國坂田郡伊夫伎神社とあり特に奉幣の事由詳ならず
○梅宮祭如常、諸本祭下に並字あり
○雲梯之園、武備志に雲梯以大木爲牀下施六輪上立二梯各長二丈餘中施轉軸云々とあり三年三月戊子紀呪願文にも註す
○貞觀二年、二は當に三に作るべし
○青緺衣、緋衣郎ら五位の服なり
○墉六、原本三十六に作る杉本閣本尾本等に據て改む東大寺要錄所引四十七とす
○熊野神、元年正月甲申紀に出づ
○[illegible]神、同上
○佐陁神、元年七月甲子

新錢八文、京邑之人、來買者如雲、是時穀價騰躍、內外飢饉、米一斛直新錢一千四百、由是官糴以救俗弊焉、○廿三日壬辰、阿波國從五位上葦稻羽神、大麻比古神、並授正五位上、大和國正六位上高生神從五位下、○廿五日甲午、主稅少允從六位上錦部連三宗麻呂、木工少允正六位上錦部連安宗賜姓惟良宿禰、其先百濟國人也、伊賀權目正六位下韓人眞貞賜姓豐瀧宿禰、其先任那國人也、河內國丹比郡人太政官史生正八位下土師宿禰長雄、散位從七位上土師宿禰常見、改本居貫右京職、○廿八日丁酉、勅令伯耆國吏郡司、并雜色人等帶劍、夜雷雨、諸衞陣於殿前、○是月、霖雨、○五月己亥朔、日有蝕之、○二日庚子、出雲國從五位下能義神、揖屋神、並授從五位上、○三日辛丑、班幣畿內諸神、祈止霖雨、告文曰、天皇我詔旨止、稻荷神乃廣前爾申給倍止申久、方今百姓乃耕種乃時奈利、而自去四月霖雨不止天、農業流損倍之、皇神乃厚助爾依天此灾波可止止奈毛所念行須、故是以、神祇少副正六位上大中臣朝臣有本乎差使天、禮代乃幣帛乎令捧持天、申奉出須此狀乎、神奈加良毛聞食天。

紀に出づ
○伯耆神、文德紀齊衡三年八月乙亥紀に出づ
○訓坂神、上文及神名式に國坂神とあり齊衡三年八月乙亥紀に見ゆ
○大山神、神名式大神山神社とあり、同上に注す
○湊神、式外、神祇志に在河村郡橋津村とあり今東伯郡橋津村
○賀茂神、式外、所在未詳
○廿南備神、備後國葦田郡賀武奈備神社、今蘆品郡府中町出口
○高諸神、同式同國沼隈郡高諸神社、今同郡今津村
○守大判事、守は諸本に據て補ふ
○公卿就太政官云云、就以下廿一字閣本尾本前本等なし
○諸衞警固、以下丙戌に至る廿四字は祕本以下諸本及類史五に據て補ふ
○夷灊、抄國郡部に上總國夷灊(伊志美)とあり
○春部直黑主賣、春の下に日字を略せしなるべし(尾張春部郡の類)主は原本生に作る類史五十四に據て改む

○東西京、京は諸本及類史八十に據て補ふ
○常平所、元慶二年正月癸亥紀には置常平司出賣官米とあり天平寶字三年五月甲戌勅に宜隨國大小割出公廨以爲常平倉逐時貴賤糶糴取利普救還脚飢苦云々兼調京中穀價と見え諸國の調貢を運ぶ脚夫の飢苦を救ひ兼て京中の穀價を調節する爲に常平倉を設け必要に應じて常平所を置き常平倉の米を出して安く賣拂ふなり
○一千四百、一千四百文なり百下に文の字あるべきかと思へど類史にもなし故に舊に仍る
○葦稲羽神、式外、承和九年十月壬戌紀に出づ
○大麻比古神、元年正月甲申紀に出づ
○高生神、式外、大和志に高市郡高生神祠昔在高取山上天正中遷座清水谷村とあり
○錦部連、錄河内諸蕃錦部連百濟國速古大王之後也とあり
○韓人、錄攝津諸蕃韓人豐津造同祖左李金之後也とあり

降雨忽霽天、風旱之灾比不起、五穀无損久、天下饒足之米賜比、天皇朝廷乎寶祚无動久、常磐堅磐爾、夜守日守利爾、護幸奉賜倍止申賜久止申、自餘諸社亦復准此、是日、式部省奏諸國銓擬郡司擬文、天皇不御紫宸殿、勅大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗、於仗下行之、○四日壬寅、大雨洪水、往還難通、○五日癸卯、停端午之節、○八日丙午、勅定近江丹波兩國年中下觸符雜色人之數、近江國百人、式部省七十四人、治部省六人、兵部省廿人、丹波國五十人、式部省卅四人、治部省三人、兵部省十三人、○十日戊申、請六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、令諸司官人已下雜色已上、讀般若心經、其卷數十三日進太政官、是日勅曰、延暦十七年九月廿三日格云、用錢之道、取於輕便、有无均利、彼此得宜者也、如聞、外國吏民、多有貯蓄、京畿士庶、還乏資用、既乖均利之義、亦失得宜之方、宜下嚴制、不得更然、所有之錢、盡皆納官、仍用正税、准價給之、送京之功、亦用正税、如有藏而不進、爲他被告、不論蔭贖、科違勅罪、五分其物、一分給告者、四分沒官、但伊賀、近江、若狹、丹波、紀伊等國、不在禁

○雜色人、人は諸本に據て補ふ

（五月）能義神、神名式出雲國意宇郡野城神社、今能義郡能義村

○揖屋神、同式同郡揖夜神社、今八束郡揖屋村

○大納言正三位、正三位の三字は上文二月己亥紀に據て補ふ

○下錙符雜色人、錙符には租役を免除する符なり、式部治部兵部三省にて使役する雜色の人にて錙符を下す人の數は國の大小に依て之を定む、其數は民部式に每年所載錙符雜色人數大國五十人上國卌人中國卅人下國廿人と見ゆるが近江丹波兩國は之に據らずして特定せられしなり此格三代格十七に太政官符應每年立限載錙符雜色人數事と見ゆ亦要略五十九にも見ゆ原本下を丁に作る諸本に據て改む

○是日勅曰、此勅は三代格十九に太政官符應禁制貯錢事とあり

○貯蓄、蓄は原本畜に作る谷本及格に據て改む

○乖均利之義、乖は原本埀に作る諸本及格に據て

制限者、而今畿外諸國富豪之輩、不愼格旨、猶事貯積、聞其由緒、非充資用、徒貪富强之名、各爭聚集之影、邊鄙既無通用之理、朝家永增鑄作之勞、靜論其費、誠須懲革、宜令伊賀、伊勢、志摩、近江、美濃、若狹、越前、丹波、丹後、但馬、山陽、南海、大宰國府等、更施嚴制、一切禁斷、其所有之錢、依先格行之、若隱藏不進、科罪亦如前、唯告言者三分給一、國司仍須勅到之後卅日內、勘錄錙數、專脚言上、夫搜勘无私、言上合期、不論多少、特加褒擢、若乖違勅旨、延引无申、及許容不勘、爲他被告、同處違勅、不曾寬宥、又伊賀近江等五箇國、先格已稱不在禁限、宜聽其資用、禁其貯蓄、○十二日庚戌、散事從四位下藤原朝臣津子卒、○十三日辛亥、地震、○十七日乙卯、授讃岐國正六位上高家神從五位下、節婦越後國頸城郡人高志公今子叙二階、免戶內課役、以表門閭、○十九日丁巳、大納言正三位平朝臣高棟薨、高棟者桓武天皇孫、而一品葛原親王之長子也、高棟長六尺、美鬚髯、幼而聰悟、好讀書傳、弘仁十四年授從四位下、拜侍從、天長元年爲大學頭、累遷中務兵部大輔、二年賜姓平朝臣、七年加從四位上、拜

○改む
○各爭聚集、各は宮本及格に據て補ふ
○鑄作之勞、勞は原本費に作る諸本及格に據て改む
○如前、格に如先格とあり
○勅到、格は符到に作る
○卌日、格は卌日に作る
○鏹數、鏹は錢貫なり通じて繈に作る
○若乖違勅旨云云、旨以下同處違勅に至る十八字は原本なし祕本閣本前本等に據て補ふ格には勅を符に作り處違勅の下に罪字あり
○不在禁限、限は諸本及格に據て補ふ
○高家神、式外、所在未詳
○平朝臣高棟薨、薨は原本卒に作る諸本及類史(六十七)紀略に據て改む高棟の事蹟續後紀には承和七年八月乙丑以下に、文德紀には嘉祥三年三月庚子以下に屢見ゆ叙任の年月は補任に詳に大日本史百十九に傳見ゆ
○聽借、原本聽語に作る聽は諸本に據り借は宮本に據て改む

大藏卿、俄遷刑部卿、承和九年進正四位下、更拜大藏卿、十年授從三位、仁壽元年拜參議、三年六月親喪解職、哀毀過禮、七月詔奪情、以本官起之、明年爲春宮大夫、天安二年拜中納言、是年冬進爵爲正三位、抗表固辭中納言職、不許焉、貞觀元年領陸奧出羽按察使、六年拜大納言、以年老上疏讓職、優詔不許、在官四年、薨時年六十四、高棟天性質厚、不事華飾、所歷官職、政尚寬容、晩年栖心釋教、誦讀佛經、嘗以山城國葛野郡別墅爲道場、詔賜額曰平等寺、拜大納言後、所食戸邑、多資佛事、有子男十七人、實雄、正範、季長、惟範、四人最知名、○廿一日己未、詔、又以因幡國正三位天穗日命神、列於官社、○廿五日癸亥、公卿就太政官曹司廳、任諸國郡司、策命如常、○廿六日甲子、造八幅四天王像五鋪、各一鋪下伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等國、下知國司曰、彼國地在西極、堺近新羅、警備之謀、當異他國、宜僉命尊像、勤誠修法、調伏賊心、消却災變、仍須點擇地勢高敞、瞼瞰賊境之道場、若素无道場、新擇善地、建立仁祠、安置尊像、請國分寺及部內練行精進僧四口、各當像前依最勝王經四天王護國品、晝

○二年賜姓、補任に天長二年閏七月癸酉賜二平朝臣姓於從四位下高棟王一とあり
○拜參議、拜は諸本に據て補ふ
○拜中納言、天安二年九月壬申紀に爲二權中納言一とあり
○平等寺、山城志に在二大秦廣隆寺西一とあり
○詔又、又は恐くは衍
○天穗日命神、神名式因幡國高草郡天穗日命神社今氣高郡大鄕村福井
○五鋪、鋪は諸本條に作る
○飯命、尊信するを云
○高徹、徹は高顯也又開也
（六月）○仰忍、大系本に忍疑當レ作レ恩と云
○壯年、原本頭注に壯誤作レ狀今改正と云
○貫前神、元年正月甲申紀に出づ
○赤城神、續後紀承和六年六月壬申紀に出づ
○伊賀保神、同上
○甲波宿禰神、嘉祥三年十二月庚戌紀に出づ
○妙法寂勝兩精舍、比良山の麓に最勝寺野ありこれ廢寺の址なりと云

轉經卷、夜誦神咒、春秋二時別一七日、清淨堅固、依法薫修、○廿九日丁卯晦、六月十一日可修月次神今食之祭、而宮城京邑、病苦死喪者衆、仍大祓於朱雀門前、○自去月迄此月霖雨、人頗苦之、○六月戊辰朔、九日丙子、勅、山城國相樂郡舊鑄錢司地廿町、貞觀七年爲採銅地、今返賜左大臣源朝臣信、但採銅之事、依舊行之、○十一日戊寅、於神祇官修月次祭、於神嘉殿修神今食祭、遣親王公卿奉祭、○十五日壬午、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗上表、請罷大將職言、頻修表奏、請罷左大將、愚款難達、至于再至于三、夫禁衛之設、備非常也、臣老倍去年、病加前日、若仰忍居官宅、豈是臣節、伏望、早罷虚課、避之壯年、臣始讓之時、自謂養病也、臣固辭之日、自謂輸忠也、今不勝悃誠、拜表抗辭、優詔不許、○廿日丁亥、授上野國從四位下勳八等貫前神從四位上、從五位上赤城神、伊賀保神、並正五位下、從五位下甲波宿禰神從五位上、○廿一日戊子、詔以近江國滋賀郡比良山妙法、最勝兩精舍爲官寺、故律師傳燈大法師位靜安所建也、靜安弟子傳燈大法師位賢眞、從唐還此、自申牒

請㆑預㆓於官寺㆒、從㆑之、○卅日丁酉、地震、○秋七月戊戌朔、以㆓從五位上守大藏大輔橘朝臣三夏㆒、爲㆓但馬守㆒、從五位下守大判事小野朝臣俊生爲㆓石見守㆒、○四日辛丑、廣瀨龍田祭如㆑常、○十二日己酉、權僧正法印大和尙位壹演卒、壹演者右京人也、俗姓大中臣朝臣、名正棟、曾祖淸麻呂、寶龜中爲㆓右大臣㆒、祖諸魚、參議正四位上左大辨兼近衞大將神祇伯、父治知麻呂、從五位上備中守、壹演幼而淸警、孝順天至、弱冠喪㆑父、殆致毀滅、服闋志㆑學、以㆓幹用㆒見㆑稱、弘仁末擢爲㆓內舍人㆒、宿植有㆓出樊籠之心㆒、逮㆓乎二兒相續夭亡、累遭㆓家喪㆒、心馬難㆑繫、遂剔爲㆓沙門㆒、承和之初受㆓具足戒㆒、讀㆓金剛般若經㆒以爲㆑業、未㆓嘗退轉㆒、弘仁之廢皇太子入道爲㆑僧、作㆓眞言宗之阿闍梨㆒、其名眞如、聞㆓披緇之中壹演法師亭々秀出㆒、應㆑作㆓釋家之棟梁㆒、於㆑是所㆑居院側、別構㆓一房㆒、招㆓壹演㆒居、授㆓眞言密敎㆒、壹演受好領悟、无㆓復所㆑遺、然猶不㆑厭㆓倦金剛般若之業㆒、于㆑時皇太后御體乖㆑和、屈㆓請壹演㆒、令㆑侍㆓看病㆒、默念所㆑感、醫藥停㆑方、壹演不㆑定㆓居處㆒、去留任㆑意、或時寄㆓寓市肆之中㆒、或時居㆓止流水之涘㆒、嘗乘㆓扁舟㆒、信㆑波浮蕩、到㆓河陽橋邊㆒、暫留㆓住水次㆒、爰有㆓一老嫗㆒、

(七月)俊生、諸本俊を後に作る
○壹演卒、中臣系圖に正棟智治麻呂三男內舍人從六位上權僧正出家法名壹演承和三年得度受戒貞觀七年九月三日任㆓權僧正㆒授㆓法印大和尙位㆒同九年九月十二日入滅諡曰㆓慈濟㆒六十五さ見ゆ
○左大辨兼近衞大將、近の上に左或は右の字を脫す中臣系圖亦同じ
○治知麻呂、中臣系圖に智治麻呂備中守從五位上母典侍從四位下大和宿禰嫄子さあり五男あり正棟は第三男なり系圖に據るに治知は知治の倒置なるべきか
○弱冠、冠は意を以て補ふ
○幹用、幹は能㆑事也用は有用なるを云後漢書黃香傳に出づ
○宿植有出樊籠之心、宿緣にて出家の心ありさなり樊籠は業煩惱の繫縛なるに譬へしなり
○心馬難繫、心馬は意馬に同じ梵網經に出づ馬は原本正に作り諸本焉に作る狩谷校本に正一本作㆑馬さあるに據て改む

○弘仁之廢皇太子、平城天皇々子高岳親王
○授眞言密敎、授は原本校に作る諸本に據て改む
○乘扁舟、扁は諸本に據て補ふ
○河陽橋、遊女記に自山城國與度津浮巨川西行一日謂之河陽とあり山崎の別名なり
○鍾平、鍾は側なり
○相應寺、八年十月辛卯紀（三二三頁）に見ゆ
○爲靜識限之地、限は原本浪に作る尾本祕イ本閣イ本に據て改む狩谷氏は浪恐衍と云
○時得咒驗、時恐特と狩谷氏云
○爲權僧正、七年九月癸未勅以藥師寺僧壹演爲權僧正と見え策文をも載す
○年六十五、釋書には七十五とあり
（八月）伊佐奈岐伊佐奈彌神、神名式伊勢國度會郡伊佐奈岐宮二座（伊佐奈彌命一座並大月次新嘗）とあり所攝別宮の一にして同郡四郷村大北中村月讀宮域内にあり
○乞索兒、抄人倫部に乞索兒（楊氏漢語抄云乞索兒

避居宅與壹演云、願建精舍住於其中、此地累代商賈之塵、逐魚鹽利之處也、壹演受檀越之所施地、鍾平欲立小堂、地中得上古朽損之佛像、形體不具、手足分折、奏聞事由於天子、有詔令木工寮、構造堂舍、賜額曰相應寺、壹演留迹、坐禪修念、爲靜識限之地、壹演聚黑土、築方丈壇、安置尊影、壇上變白、恰似塗粉、觀者奇之、莫不欽感、貞觀六年、太政大臣寢疾彌留、百方無效、延屈壹演、令其加持、痛惱忽除、時得咒驗、天皇歡喜、甚見珍敬、明年詔爲權僧正、壹演抗表固辭、遂不許之、定業有限、小疾難免、爰命小船、浮於水上、奄然遷化、時年六十五、謚曰慈濟、○廿二日己未、復美作國大庭眞嶋兩郡百姓課役一年、以山谷之間、黎庶貧弱也、○廿四日辛酉、星晝見、○廿五日壬戌、地震、天皇御紫宸殿、觀相撲、親王公卿侍焉、○八月丁卯朔、二日戊辰、勅、伊勢國伊佐奈岐伊佐奈彌神、改社稱宮、預月次祭、幷置内人一員、○三日己巳、先是、令木工寮、造東西京乞索兒宿屋二宇、至是令左右京職、載年終帳、勤加撿挍、○六日壬申、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、大宰府言、肥後國阿蘇郡正二

保加比々斗今案乞康兒卽乞兒也和名加多井）とあり
○健磐龍命神正四位下姬神、命及姬神の三字は諸本に據て補ふ
○五十許丈、許は原本餘に作る諸本に據て改む下同じ
○如常儀、儀は諸本に據て補ふ
○信濃國、國は紀略に據て補ふ
○出雲神、神名式周防國佐波郡出雲神社二座、出雲村堀
○石城神、同式同國熊毛郡石城神社、鹽田村
○比美神、此三字は諸本及類史十六に據て補ふ式外神にて神祇志に今在都濃郡須萬村秋尾之地とあり
○劒神、神名式周防國佐波郡劒神社、右田村高井
○二俣神、天安二年三月甲戌紀に出づ
○火男神火咩神、嘉祥二年六月癸未紀に出づ
○樫生龍穴神、神名式大和國宇陀郡室生龍穴神社、室生村
○從五位下武雷神保沼雷神、從五位下の四字は類

位勳五等健磐龍命神、正四位下姬神所居山嶺、去五月十一日夜、奇光照耀、十二日朝、震動乃崩、廣五十許丈、長二百五十許丈、○八日甲戌、下知大宰府、令豐後國鎭謝神山崩之恠焉、○十一日丁丑、釋奠如常儀、○十二日戊寅、天皇御紫宸殿、喚明經博士等御前、質難經義、畢賜祿各有差、○十四日庚辰、地震、加置美作國苫東郡大領一員、苫西郡少領一員、○十五日辛巳、天皇御紫宸殿、閲覽信濃國貢駒、令左右馬寮擇取各廿疋、賜親王已下、參議已上、及左右近衞中少將、左右馬寮頭助等各一疋、例也、○十六日壬午、周防國正五位上出雲神、石城神、比美神、並授從四位下、從五位上劒神、二俣神、並正五位下、豐後國從五位上火男神、火咩神、並正五位下、大和國從五位下樫生龍穴神正五位下、從五位下武雷神、保沼雷神、並從五位上、○廿一日丙戌、天皇御紫宸殿、閲武藏國貢駒、○廿二日丁亥、太皇太后宮宮主外從五位下直千世麻呂、齋院宮主大初位下直伊勢雄等五人、賜姓直宿禰、○廿五日辛卯、地震、○廿八日甲午、勅遣內藏權助從五位下藤原朝臣積善、向平城藥師寺、爲故

史及上文七年十月丁巳紀に據て補ふ
○齋院宮主、宮主は原本寮の一字に作る祕本閣本尾本に據て改む
○直伊勢雄等五人賜姓直宿禰、等以下の八字は閣本尾本前本等に據て補ふ
○廿五日辛卯、此條閣本前本淀本等及類史（百七十一）紀略に據て補ふ
○廿八日甲午、此條及廿九日乙未、卅日丙申の三條は祕本閣本以下諸本に據て補ふ紀略亦諸本に同じ但し廿九日美濃國以下四十五字及卅日丙申條はなし
○源朝臣濟子、文德天皇皇女仁壽三年六月賜姓
（九月）丁酉朔、以下三日己亥、六日壬寅、九日乙巳、十一日丁未、十二日戊申に至る六條は祕本閣本以下諸本に據て補ふ紀略には文は省略せるも十二日を除くの外各條悉く見え類史には百七十八に三日奉灯の事、同十一に十一日賀茂以下諸社奉幣の事見ゆ
○長年錢、嘉祥元年九月所鑄の長年大寶を云
○其錢納官、官は諸本言

權僧正壹演法師、修轉念功德、嚫新錢一萬、○廿九日乙未、詔以源朝臣濟子爲女御、美濃國厚見郡人從五位下行助教兼越後介善淵朝臣永貞、從六位下行少外記善淵朝臣愛成、改本居隷左京職、○卅日丙申、大雨、○九月丁酉朔、三日己亥、天皇潔齋奉灯如常、美濃國言、搜撿民間勘納長年錢百五十一貫、播磨國言、勘納長年錢二百廿五貫、備中國言、勘納八十四貫、太政官處分、以稻一束宛錢二百文、賜進錢之人、其錢納官、○六日壬寅、地震、○九日乙巳、重陽之節、天皇御紫宸殿、宴於群臣、召文人、命樂賦詩、賜祿各有差、○十一日丁未、遣使於賀茂御祖別雷、松尾、稻荷、貴布禰、丹生川上、住吉、水主、大神、長田、乙訓等神社、奉幣、先月祈五穀、今以賽焉、○十二日戊申、齋宮助正六位上藤原朝臣豐本爲史生從八位上縣造富世所殺、○十四日庚戌、大風雨、拔樹發屋、近江國正六位上山主神、麻氣神、並授從五位下、○十六日壬子、以散位從五位下滋野朝臣善根爲大判事、從五位上行但馬守橘朝臣三夏爲大藏大輔、從五位上行縫殿頭兼但馬介伴宿禰須賀雄爲但馬守、縫殿頭如故、石

に作る伴校本に據て補ふ
○十四日庚戌、此條は原本に九月の二字を冠して廿七日癸亥條の上にあり大風雨拔樹發屋の七字なし今諸本に據て此に移し改む
○山主神、式外、所在未詳
○麻氣神、神名式近江國高嶋郡麻希神社、所在未詳
○十六日壬子、以下爲大判事從五位上行に至る廿七字は祕本閣本尾本等に據て補ふ
○太白在軫、太白は金星、軫は廿八宿の一にて北極の東南にあり
(十月)孟冬之宴會、孟冬の旬宴なり
○主帳外少初位、主帳の二字は諸本に據て補ふ
○久米連、續紀神龜元年五月辛未紀に久米奈保麻呂賜久米連と見ゆ參看すべし
○行掃部頭、行は諸本及頒史七十七に據て補ふ
○繼彦、濱成の子天長五年二月廿七日薨年八十
○上都、長安を云
○禮貴往來、禮記曲禮に禮尙往來、往而不來非

見守從五位下小野朝臣俊生爲介、散位從五位下大野朝臣鷹取爲石見守、散位從五位下藤原朝臣定岑爲日向介、○廿七日癸亥、太白在軫經天、與日相去、可十餘丈、○冬十月丙寅朔、停孟冬之宴會、○三日戊辰、石見國那賀郡權大領外從八位上村部岑雄、主帳外少初位上村部福雄、復本姓久米連、○四日己巳、從五位上行掃部頭藤原朝臣貞敏卒、貞敏者刑部卿從三位繼彦之第六子也、少耽愛音樂、好學鼓琴、尤善彈琵琶、承和二年爲美作掾兼遣唐使准判官、五年到大唐、達上都、逢能彈琵琶者劉二郎、貞敏贈砂金二百兩、劉二郎曰、禮貴往來、請欲相傳、即授兩三調、二三月間、盡了妙曲、劉二郎贈譜數十卷、因問曰、君師何人、素學妙曲乎、貞敏答曰、是我累代之家風、更無他師、劉二郎曰、於戲昔聞謝鎭西、此何人哉、僕有一少女、願令薦枕席、貞敏答曰、一言斯重、千金還輕、既而成婚禮、劉娘尤善琴箏、貞敏習得新聲數曲、明年聘禮既畢、解纜歸鄕、臨別劉二郎設祖筵、贈紫檀紫藤琵琶各一面、是歲、大唐大中元年、本朝承和六年也、七年爲參河介、八年遷主殿助、少選遷雅樂助、九年春授從五

禮也來而不往亦非禮也とあるに據れり贈物を受けて報いざれば禮に違はむと云なり
○謝鎭西、藝文類聚所引語林に謝鎭西著紫羅襦據胡牀在大市佛圖門樓上彈琵琶作大道曲とあり謝鎭西は蓋し晉の謝尚なるべし謝尚鎭西將軍の號を賜ひ音樂を善くすること晉書に見ゆ
○一言斯重云云、史記季布傳に一諾千金とあるに出づ
○紫檀紫藤琵琶各一面、紫藤は南方草木狀に紫藤葉細長莖如竹根極堅實重重有皮花白子黑云々とあり此琵琶の事禁祕抄に玄上累代寶物也置中殿御厨子根源樣人不知之掃部頭貞敏渡唐之時所渡比巴二面其一歟紫檀直甲也とあり
○大中元年、我承和十四年にて承和六年は唐の開成四年なり
○明春、明下恐くは年字を脱す
○時年六十一、年字は尾本に據て補ふ
○田村神、嘉祥二年二月癸丑紀貞觀三年二月丁巳

位下、數歲轉頭、齊衡三年兼備前介、明春加從五位上、天安二年丁母憂解官、服闋拜掃部頭、貞觀六年兼備中介、卒時年六十一、貞敏無他才藝、以能彈琵琶、歷仕三代、雖無殊寵、聲價稍高焉、○五日庚午、地震、○授讃岐國正五位下田村神從四位下、伊賀國從五位下敢國津神、飛驒國從五位下水無神、荏神、槻本神、大津神、荒城神、栗原神、阿多由太神、高田神、越中國從五位下御田神等、並從五位上、遠江國正六位上鴨神、飛驒國正六位上大歲神、走淵神、四天王神、遊幡石神、度瀨神、道後神等、並從五位下、○七日壬申、大祓於建禮門前、去月內裏有犬產穢、不發奉伊勢大神宮幣使、明日可發故、更齋修祓焉、○十日乙亥、右大臣正二位藤原朝臣良相薨、贈正一位、天皇不視事三日、良相朝臣者、贈太政大臣正一位冬嗣朝臣之第五子也、姉太皇太后、兄太政大臣忠仁公、並與大臣同胞也、大臣年在童稚、局量開曠、及於弱冠、始遊大學、雅有才辨、承和元年、仁明天皇徵令侍禁中、拜右兵衛權大尉、遷內藏助、五年授從五位下、明年轉頭、兼因幡守、少頃遷左近衛少將、內藏頭因幡守如故、八年授從五位

紀に出づ
○敢國津神、貞觀六年十月戊辰紀に安倍神とあり
○水無神、神名式飛驒國大野郡水無神社、宮村、國幣小社に列す
○荏神、同式同郡荏名神社、大名田町江名子
○槻本神、同式同郡槻本神社、丹生川村山口
○大津神、同式同國荒城郡大津神社、所在未詳
○荒城神、同式同郡荒城神社、吉城郡國府村宮地
○阿多由太神、同式同郡阿多由太神社、吉城郡國府村木曾垣內、原本由を田に太を大に作る祕本閣本に據て改む
○高田神、同式同郡高田神社、吉城郡細江村太江
○御田神、式外、神祇志に今在二射水郡佛生寺村金鷄山一と云
○鵜神、神名式遠江國磐田郡御祖神社とある是か
○大歳神走淵神、並に式外、神祇志に大歳神社在二杉崎村一、走淵神社在二數河村一、以上二座今並在二吉城郡一と云
○四天王神、式外、同志に四天王神社今在二大野郡灘垣內村天王洞一

上、十年加二正五位下一、遷二阿波守、內藏頭左近衞少將如レ故、十三年至二從四位下一、轉二中將一、餘官如レ故、嘉祥元年拜二參議一、二年兼二相摸守一、同年秋拜二右大辨一、相摸守如レ故、三年授二從四位上一、數月加二正四位下一、尋領二陸奥出羽按察使一、未レ幾遷二左大辨兼春宮大夫一、仁壽元年授二從三位一、拜二權中納言一、四年轉二大納言兼右近衞大將一、齊衡二年進二正三位一、四年拜二右大臣一、天安元年授二從二位一、遷二左近衞大將一、貞觀元年授二正二位一、嘗仁明天皇煎二練五石一、試二觀近侍一、先嘗欲レ知二精粗一、黃門數輩、嬴無二飮服之者一、大臣引レ杯、一擧而盡、帝感二藥劑之間、君臣不レ忘レ義焉、室大江氏、臨二大臣生年卅餘歲一、卒二於舊寢一、大臣本習二內典一、精二熟眞言一、至レ是撤二却腥鮮一、尤事二念佛一、自レ喪二江氏一、無二復娶レ妻、貞觀之初、專二心機務一、志在二匡濟一、當時飛レ鷹從レ禽之事、一切禁止、山川藪澤之利、不レ妨二民業一、皆是大臣所二奏行一也、爲レ人至性、意深睦レ親、勸學院南邊、更建二一院一、號二延命院一、以養二治藤氏生徒、病困無二家業一者上、以二東京六條宅一、名二崇親院一、引二氏中子女、不レ能二自存一者上、以收養、並皆割二封戶一、入二莊田一、給二其資用一、崇親院中建二一小堂一、安二置佛像一、令下二居住者一、每日盥洗、誦二觀音名號一、以植中後世

○遊澤石神、式外、同志に今在吉城郡麻生野村石神畑之地
○度瀨神、式外、同志に今在吉城郡廣瀨鄕廣瀨町、諸本度上に彥字あり
○道後神、式外、今在同國益田郡上加洞村道後
○壬申、此二字淀本及類史(三)紀略に據て補ふ
○正二位(眞相)、正は原本從に作る上文二月癸巳紀に據て改む
○藤原朝臣眞相薨、薨は諸本に據て補ふ眞相の事蹟は續後紀承和五年正月丙寅紀に授從五位下とし見えたるを始として十一條、文德紀には嘉祥三年四月己酉紀以下に廿一條見ゆ、又今昔・大鏡・拾遺往生傳にも傳見えたり
○贈太政大臣(冬嗣)、贈は意に據て補ふ
○姉太皇太后、順子
○太政大臣忠仁公、良房
○遷左大辨、文德紀に嘉祥三年十一月壬寅とあり按察使となりしは其以前なるも年月詳ならず
○四年拜右大臣、齊衡四年卽ち天安元年二月なり
○五石、文選郭璞遊仙詩に王孫列八珍安期鍊五

之善根、自製願文、多詞不載焉、愛好文學之士、擇大學中貧寒之生、時賜綿絹、冬天慘烈、多縫造被、遍賜四學堂夜宿者、時節喚學生能文者、賦詩賚物數矣、是年十月初、直廬得病、退就里第、同月十日、告諸子曰、今日興福寺維摩會之初講、是吾閻浮業之終夕也、儻以此日、皈吾寂滅、舊鄕安知、與彼法會、不有因緣乎、臨終乃命侍兒扶起、正面西方、作阿彌陀佛根本印、俄薨、時年五十五、遺令薄葬、單衾覆棺、大臣蔬菲累年、羸瘦過甚、迄終一身不虧宿誓、其篤信佛道、臨命正念、時人比之姚伯審、有子男女九人、長子常行、官至大納言、自有傳、次直方、忠方、並以才行見稱、忠方寂工隷書、○十三日戊寅、勑加松尾神社封二戶、授安藝國從四位下伊都岐嶋神、速谷神、並從四位上、從五位上安藝都彥神正五位下、正六位上生石神從五位上、正六位上伊都嶋宗形小專神、檻櫝神、並從五位下、出羽國長安寺、預之定額、○十六日辛巳、有虹見太政官候廳版前、○十七日壬午、晝有流星、東南行、光照地、○十九日甲申、石見國言、鹿足郡倉庫自鳴、○廿日乙酉、屈六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、

石」、注に五石者丹砂・雄黃・白礬・石曾・青磁石也とあり　○黃門數輩嬉無飲服、湖亭渉筆に黃門數輩嬉無」欲」服」之とあり黃門は禁門を掌る官なり後世宦官の稱となれり此は侍從を云嬉は原本嬉に作り諸本嬉に作る渉筆に據て改む嬉は字書に心不」欲」爲也とあり　○延命院、元年二月丁酉紀に見ゆ　○生徒、徒は原本後に作る諸本に據て改む尾本從に作る　○崇親院、已に前史に見ゆ　○四學堂、紀傳明經明法算の四學なり堂は原本書に作る諸本に據て改む　○直廬、宜陽殿の東廂にあり　○初講、玄蕃式に興福寺維摩會十月十日始十六日終とあり　○閻浮業之終夕、閻浮は此は現世を云今日の維摩會は吾が此現世に於ける事業の最終なりとの意　○飯吾寂滅、吾は原本于に作る諸本に據て改む　○阿彌陀佛根本印、二手交叉して拳を作り二中指を竪てゝ頭相さゝへ蓮華の形を作す印なり　○遺令薄葬、原本令上に言字あり諸本に據て削る　○蔬非、蔬は疏に通ず疏食なり非は論語泰伯篇に非」飲食」注に菲は薄也とあり精進料理なり陳書姚察傳に見ゆ　○過甚、過は諸本に據て補ふ　○共篤、狩谷校本に共恐甚とあり　○臨命正念、行者死期に臨て三毒の邪念起ることなく專ら菩提の心に任ずるを云　○姚伯審、陳の姚察なり伯審は其の字、陳書に吳興武康人大業二年終」于東都」遺」令薄葬」將」終曾無」痛惱」但西向坐正念云一切空寂其後身體柔軟顏色如」恒（節略）と見ゆ　○伊都岐嶋神速谷神、並に元年正月甲申紀に出づ　○安藝津彥神、以下榲椙神に至るまで並に式外、生石神は沼田郡にあり其他は所在未詳、伊都嶋は都下に恐くは伎字を脫す　○長安寺、詳ならず

○十一月丙申朔、日有」蝕之」、平野春日祭並停、以」日蝕」也、○十日乙巳、下」知攝津、和泉、山陽、南海道等諸國」曰、如聞、近來伊豫國宮崎村、海賊群居、掠奪尤切、公私海行、爲」之隔絕、凡可」捕」件賊」之狀、頻繁仰下、督促慇懃、其後播磨、備中、備後、阿波等國、相尋言」上獲」賊之狀、而今寇盜難」休、流聞如」此、實是國司等欲」消」一境之咎」、不」慮」天下之憂」、无」盡」謀略」、不」精」搜捕」之所」致也、夫海賊之徒、萍」浮南北」、唯殉」其利」、不」恤」其居」、追捕則烏散、寬縱則烏合、仍須」綠海諸國、勠」力同」謀、具記往來之舟航、勒」詳」去就之人物」、儻聞」有」奸謀」、則彼我相移、差」發人兵」、招」募俘囚」、搜」其厓穴」、尋」其風聲」、窮討盡捕、令」无」遺類」、○十一日丙午、勑、在京諸司不」與解由狀、依」理不」盡返却者、十

（十一月）舟航、航は原本就に作る狩谷氏の說に據て改む祕本閣本等𦨵に作るも航の訛なるべし
○勒詳、上句と對照するに詳勒の顚倒せしなるべし祕本尾本前本等勒を勤に作る
○搜其厓穴、原本搜を抉に厓を屋に作る並に諸本に據て改む後漢書儒林傳に穿」求崖穴」とあり
○丙午勑、三代格五に太政官符應」令」補任官長侍」受領之人」事云々と見ゆ
○侍受領之人、侍は原本任に作る格に據て改む閣本尾本前本等侍に作るは待の訛なり
○得相替焉、原本此下に十二日丁未遣使於賀茂云

云の四十九字あり被本閣本尾本等は九月十一日丁未さして九月の條に收め類史十一紀略亦同じ故に彼に收めて此を削る
○灾眚、原本眚を害に作る諸本に據て改む
○新嘗祭、原本嘗下に會字あり類史九及紀略に據て削る
○紀朝臣、錄左京皇別紀朝臣建內宿禰男紀角宿禰之後也とあり
○坂上宿禰、錄右京諸蕃坂上大宿禰出自後漢靈帝男延王之後也とあり
○少從、家令職員令に大從一人掌撿挍家事少從一人掌同大從とあり
○忠良親王、良は原本氏に作る宮本及八年十一月己未紀に據て改む
○賜祿、賜は原本惠に作る類史九に據て改む
○貫內階、諸道勘文に貞觀九年十二月廿三日とす內階は三才圖會に六星在文昌之北天皇之陛也明則吉傾動則凶也と見ゆ
○旱天、天は災也類史十一には妖に作る
○加之、加は原本如に作る類史に據て改む
○陰陽書、唐書藝文志五

日之內、便令改辨、又諸國權任長官、待受領之人、得相替焉、○十三日戊申、平野春日祭如常、今月一日、緣日蝕停祭禮、故是日祀焉、去春神祇官陰陽寮言、可愼疫癘風雨之灾、祈禱神明、豫防灾眚、今秋頗有年、由是班幣五畿七道諸社、以賽焉、○十八日癸丑、園韓神祭如常、○十九日甲寅、鎭魂祭如常、○廿日乙卯、修新嘗祭於神嘉殿、天皇齋居內殿、遣親王公卿行事、左京人從五位下行直講苅田首安雄賜姓紀朝臣、安雄自言、武內宿禰之裔也、外從五位下行侍醫藏人眞野賜姓坂上宿禰、後漢孝靈帝之後也、太政大臣家少從正六位下日置造久米麻呂賜姓名菅原朝臣業利、二品式部卿忠良親王家令正六位上土師宿禰益雄、掃部權大屬從六位下土師宿禰諸澄、伊勢權少目正六位上土師宿禰豐雄等、賜姓菅原朝臣、並阿陁宿禰之後也、河內國丹比郡人外從五位下行直講船連副使麻呂、改本居、隷右京職、○廿一日丙辰、天皇御紫宸殿、賜宴於群臣、大歌五節舞如常儀、賜祿各有差、○廿三日戊午、彗星見紫微宮西、貫內階、長可五尺、○廿九日甲子、勑曰、向者天文告變、地理呈天、謀

行類に王璨新撰陰陽書三十卷さあり
○聞此事、類史此を斯に作る
○納隍、原本意惶に作る閣本尾本前本及類史に據て改む
○罔攸不至、原本罔攸を休徵に作る祕本閣本前本及類史に據て改む
○齋潔、潔は類史蕭に作る
○五師等、五は原本法に作る祕本尾本前本及類史に據て改む等字は類史になし
○葷血、葷は諸本及類史には薰に作る、字書に葷與薰同臭菜也さ見ゆ
○忌殺生、忌は原本忘に作る類史に據て改む
○日上有冠、開元占經卷七に石氏曰、有氣靑赤立在日上、名爲冠さあり
○成珥、同書に石氏曰、日兩傍有氣、短小中赤外靑、名爲珥、釋名曰、珥耳者在日兩傍之名也、珥言似耳在兩傍也さあり
(十二月)源朝臣眞子、一代要記及大日本史七十八には眞を貞に作る十年正月癸卯に從四位下を授くる事見ゆ

龜謀筮、誠匪國慶、加之陰陽書說、來年戊子、當有水旱疾疫之灾、朕每聞此事、思切納隍、日夜用心、罔攸不至、如聞、如來救世、正教過恒、至于護持國界、消却灾難、則般若妙典、爲其先鳴者也、宜告天下諸國、三日齋潔、令奉讀金剛般若、及摩訶般若、又命七大寺、講演仁王般若、以內舍人爲使、勾當其事、與專寺僧綱、及別當三綱五師等、相共勤加撿察、但若來若去、應物隨機、苟无至誠、何通靈感、然則內外文武百官人等、乃至庶人百姓、讀經之頃、至心歸命、不食葷血、愼忌殺生、庶使五大菩薩、大願能彰、八部鬼神、新妖自斷、致眞福於冥助、銷禍胎於未萌、歲稔時和、人平國富、普告遐邇、俾知朕意、○卅日乙丑、日上有冠、左右成珥、色黃白、○十二月丙寅朔、四日己巳、勅、上總國置撿非違使一員、主典一員、帶劒把笏、○七日壬申、源朝臣眞子爲女御、○十一日丙子、月次神今食祭如常、天皇不御神嘉殿、遣親王公卿奉祭、○十八日癸未、庶人伴善男建立道場、在山城國紀伊郡柏原山陵兆域之內、勅令移却、○十九日甲申、故律師靜安弟子東大寺僧傳燈法師位賢護申牒言、承和年中、靜安奏、始修佛名懺悔之

○賢護、江次第賢瀧に作る

○靈山寺、羽前國最上郡(今南村山郡)瀧山寺なるべし

○第十四、原本此下に終字あり尾本谷本に據て削る

法、便頒天下、專修此法、賢護聊捨衣鉢、換以丹朱、造一萬三千佛像八鋪、高一丈八尺、廣一丈四尺、請一鋪奉納豐前國八幡大菩薩宮、七鋪安置北陸道諸國、太政官處分、依請、○廿五日庚寅、奉諸山陵墓荷前幣如常、○廿九日甲午、出羽國最上郡靈山寺、預之定額寺、○卅日乙未、大祓於朱雀門前、幷大儺如常、

日本三代實錄卷第十四

日本三代實錄卷第十五

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

起貞觀十年正月盡閏十二月

十年（戊子）春正月丙申朔、天皇不受朝賀、七曜曆、藏氷樣、腹赤魚、所司付内侍奏、帝御紫宸殿、賜宴侍臣、宴竟賜被、○七日壬寅、天皇御紫宸殿、覽青馬、賜宴群臣、班賚有差、授無位有佐王從四位下、右兵庫頭從五位下廣山王從五位上、散位從四位下高階眞人岑緒、神祇伯兼行河内權守在原朝臣善淵、無位源朝臣效、源朝臣本有、並從四位上、正五位下行大和權守藤原朝臣本雄、右中辨多治眞人貞岑、並從四位下、從五位上行但馬權守良岑朝臣長松、右衞門權佐在原朝臣守平、並正五位下、左京亮從五位下橘朝臣高成、典藥頭藤原朝臣秀雄、散位橘朝臣信蔭、齋宮頭兼伊勢介藤原朝臣諸藤、散位大原眞人眞室、兵部少輔藤原朝臣秋緒、大判事滋野朝臣善根、助教菅野朝臣佐世、天文博士兼攝津權介中臣

【貞觀十年】春正月、原本春上に戊子の二字あり諸本欄外頭注さす故に削る

○宴竟賜被、原本此下に二日丁酉皇太子參大極殿最勝會但不舉音樂以遏密之内也の廿五字あり然るに此時皇太子ましまさず又遏密の内にもあらず蓋續後紀承和十年正月丁酉の文攙入せしものなり諸本になし故に削る

○覽青馬、覽は類史七十一には觀に作る

○賜宴群臣、宴は類史に據て補ふ

○岑緒、諸本峯緒に作る

○多治眞人貞岑、貞は原本眞に作る閣本尾本に據て改む

○藤原朝臣諸藤、諸藤は原本諸蔭に作る九年二月辛巳紀に據て改む

○釆女正正六位上、釆女正は正六位下相當なれば此位署疑はし
○源朝臣精、源氏系圖に大納言定四男とあり
○土左介、原本左馬介に作る谷本に據て改む諸本云左介に作る云は土の訛なり
○有實、補任に有實贈太政大臣冬嗣孫從四位上中宮大夫良仁二男母從四位上濱主女とあり
○福雄、福は原本楅に作る諸本に據て改む
○法勢、勢は類史百七十七埶に作る
○從四位下嘉子女王從四位上、從四位下の四字は諸本に據て補ふ又原本嘉を喜に作り上を下に作る嘉は諸本に據り上は九年四月庚午紀に據て改む
○充子、充は尾本最に作る

志斐連春繼等、並從五位上、外從五位下參河權介卜部宿禰眞雄、釆女正正六位上淸河王、正六位下源朝臣精、式部少丞藤原朝臣忠方、大藏大丞安倍朝臣弘行、右衞門少尉南淵朝臣良棟、土左介藤原朝臣常基、左近衞將監藤原朝臣有實、右近衞將監藤原朝臣高藤、太皇太后宮少進笠朝臣冬人、散位橘朝臣良實、藤原朝臣豐雄、式部大丞文室朝臣行敏、大外記滋野朝臣恒蔭、大內記小野朝臣問道等、並從五位下、左大史正六位上志紀宿禰氏經、皇太后宮少進菅野朝臣愛甲、少外記善淵朝臣愛成、侍醫五百木部公全成、式部大錄大國忌寸福雄等、並外從五位下、○八日癸卯、所司獻剛卯杖如常、始講最勝王經於大極殿、以延曆寺僧天台宗傳燈大法師位法勢爲講師、主殿允正六位上若湯坐連仁高、左近衞醫師紀宿禰春生、並授外從五位下、從四位上潔子女王正四位下、從四位下嘉子女王從四位上、從五位下善宗女王從五位上、無位源朝臣濟子從四位上、源朝臣貞子從四位下、從五位下源朝臣高子、藤原朝臣充子、並從五位上、紀朝臣靜子、春澄朝臣高子、藤原朝臣雲子、小

○紀朝臣靜子、紀上に位階を脫す
○並從五位下、原本此下に最勝會竟引名僧十餘口於紫宸殿令論義訖施御被の廿一字あり諸本にはなし蓋續後紀承和十年正月癸卯の文攙入せしものなり故に削る
○主殿助正六位上、主殿助は從六位上に相當せり此位署疑ふべし
○高津內親王、桓武天皇第十二皇女承和八年四月丁巳紀に傳見ゆ
○精爽、爽魂を云卽ち精神なり
○淸狂不慧、漢書昌邑王賀傳に淸狂不惠、注に淸狂如今白癡也とあり
○論義、義は類史百七十七議に作る
○爲大外記、爲は伴校本に據て補ふ
○正五位下行木工頭源朝臣直、原本正五位下の四字なく直を値に作る伴校本及九年二月辛巳紀に據て改め補ふ
○從四位上(字缺)、四は原本五に作る諸本に據て改む
○貞岑、貞は原本眞に作る諸本に據て改む

野朝臣氏野、並從五位下、○九日甲辰、授主殿助正六位上藤原朝臣扶繩從五位下、○十一日丙午、無品業良親王薨、帝不視事三日、親王者嵯峨太上天皇第二之子也、母三品高津內親王、桓武天皇納從三位坂上大宿禰苅田麻呂女從五位下全子、所誕育也、太上天皇納內親王爲妃、生親王、親王精爽變易、淸狂不慧、心不能審得失之地、飲食如常、無病而終焉、○十四日己酉、大極殿齋講畢、僧綱已下名僧奉參內裏、論義如常、各賜被、○十六日辛亥、踏歌之節、天皇御紫宸殿、宴于侍臣、宮人踏歌、宴竟賜祿如常、以外從五位下行少外記善淵朝臣愛成爲大外記、正五位下行木工頭源朝臣直爲右中辨、從五位上守大判事滋野朝臣善根爲大藏少輔、散位從四位上高階眞人岑緒爲山城守、從四位下行大和權守藤原朝臣本雄爲正守、從四位下行右中辨多治眞人貞岑爲伊勢守、散位外從五位下道嶋宿禰村嶋爲甲斐介、從四位上源朝臣冷爲相摸守、彈正少弼從五位下橘朝臣岑雄爲介、散位從五位下上毛野朝臣上長爲下總介、四品惟彥親王爲常陸太守、參議從三位行左衞門督源朝

○從五位下紀朝臣當仁、原本下の下に行侍醫の三字あり當を常に作る此人侍醫に任ぜられし事なければ誤なること明なり諸本に據て改め削る當仁越後守となれる事九年正月癸丑紀に見ゆ或は喪に依て解官せしを此に至て復任せられしか

○從五位下行侍醫如故、從五位下行の五字は諸本に據て補ふ按に從五位下行侍醫の下に氏尸名爲介侍醫如故などありしが脫漏せしなるべし

○良尙爲備前權守、權字は閣本尾本に據て補ふ十一年正月乙丑紀また證とすべし

○陰陽助兼權陰陽博士、權字は諸本に據て補ふ

○守內匠頭、守は諸本に據て補ふ

臣多爲近江守、左衛門督如故、從四位上行神祇伯兼河內權守在原朝臣善淵爲權守、從五位下行近江權大掾安倍朝臣三寅爲介、散位從五位下平朝臣正範爲權介、從五位下行大外記滋野朝臣恒蔭爲信濃介、大藏少輔從五位下多治眞人高棟爲出羽守、外從五位下行左大史志紀宿禰氏經爲越前介、散位從四位下良秀王爲越中守、從五位下紀朝臣當仁爲越後守、從五位下行侍醫如故、從五位上守刑部大輔藤原朝臣關主爲因幡守、左近衛少將正五位下藤原朝臣良尙爲備前權守、少將如故、從五位下行備後權介源朝臣湛爲權介、從五位下行陰陽助兼權陰陽博士備前權介笠朝臣名高爲備中介、陰陽助權陰陽博士如故、文章博士從五位下巨勢朝臣文雄爲備後權介、文章博士如故、從五位下行式部大丞文室朝臣行敏爲安藝介、主稅頭從五位上兼行出雲守家原宿禰繩雄爲周防守、從五位下守內匠頭藤原朝臣維範爲阿波權介、內匠頭如故、維範去年兼任阿波權介、丁父憂解職、今以本官起之、參議右近衛大將從三位藤原朝臣常行爲讃岐守、大將如故、參議大藏卿正

○實得、閣本得を行に作る
○土左介、左は原本佐に作る祕本尾本前本等に據て改む下同じ

（二月）

○斤斧、斤は玉篇に斧類說文斫木器也とあり原本斤斧を斧斤に作る諸本及紀略に據て改む
○延六十僧、延は原本進に作る紀略に據て改む
○岑緖、原本岑雄に作る閣本尾本前本等に據て改む

四位下兼行相摸守源朝臣生爲權守、大藏卿如故、從五位上行兵部少輔藤原朝臣秋緖爲介、紀伊守從五位下藤原朝臣房雄爲伊豫權介、散位外從五位下難波朝臣實得爲土左介、從五位下御春朝臣岑能爲鎭守將軍、○十七日壬子、天皇御建禮門、觀大射之禮、○十八日癸丑、御射殿、覽四衞府賭射、○廿一日丙辰、內宴於仁壽殿、喚文人賦詩、內教坊奏女樂、宴竟賜祿各有差、○二月乙丑朔、三日丁卯、釋奠如常、○四日戊辰、祈年祭如常、○八日壬申、春日祭如常、○十一日乙亥、公卿就太政官曹司廳、列見文武官成選者、宣制如常、○十三日丁丑、始造應天門、大祓於會昌門前、乃下斤斧焉、是夜、園韓神祭如常、○十四日戊寅、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○十七日辛巳、以山城守從四位上高階眞人岑緖爲神祇伯、從五位上橘朝臣安吉雄爲治部大輔、從五位下橘朝臣葛名爲諸陵頭、從四位下行中務大輔忠範王爲民部大輔、從五位上行勘解由次官兼算博士尾張權守家原宿禰氏主爲主稅頭、算博士尾張權守如故、散位從五位下藤原朝臣忠雄爲兵部少輔、從五位

○藤原朝臣良繩卒、良繩の事蹟は文德紀仁壽二年正月丙申紀に始て見え以下每卷に屢見ゆ叙任年月は補任に詳に大日本史百廿七に傳見ゆ

上藤原朝臣興世爲刑部大輔、從五位上守治部大輔源朝臣包爲木工頭、散位從五位下良岑朝臣晨貞爲掃部頭、從五位下安倍朝臣房上爲彈正少弼、從五位上行周防守家原宿禰繩雄爲兼鑄錢司長官、散位從五位下大神朝臣全雄爲勘解由次官、從四位上行民部大輔輔世王爲山城守、從五位下行美作權介源朝臣矜爲攝津權介、從五位上守左少辨藤原朝臣良近爲越前權守、從五位下安倍朝臣清行爲大宰少貳、清行貞觀六年正月任大宰少貳、丁母憂去職、今以本官起之、○十八日壬午、野火燒損田邑山陵兆域中之樹木、○參議正四位下行右衞門督兼太皇太后宮大夫藤原朝臣良繩卒、良繩字朝台、左大臣內麻呂朝臣孫、而正五位下備前守大津之子也、良繩風容閑雅、舉止詳審、興福寺僧圓壹好相人、見良繩狀貌云、必登卿相、榮寵无比、退語同志云、嗟呼於命獨有可惜矣、承和四年爲內舍人、中務省啓令侍東宮、太子特加意愛、擢補藏人、嘉祥三年、累遷左馬大允、內藏權助、後改權爲正、仁壽二年授從五位下、爲侍從、齊衡元年兼播磨介、俄而拜春宮亮、侍從、內藏助、播磨介並如故、

○及得審問、大日本史には及凶問至に作る
○歐血、歐は原本嘔に作る今諸本に據る、歐は字彙に吐也別作嘔非とあり
○兼內藏權頭、權は諸本に據て補ふ
○遷兼備前守、元年十二月壬寅なり正四位下とならしは二年十一月壬辰なれば此は前後を誤れり
○寢疾疲倦、倦は憂也疲也原本疲倦を瘦弱に作る尾本前本に據て改む大日本史は綿綴に作る
○不接睫、睫は原本睫に作る今閣本尾本谷本に據て改む
○年事老宿、年事は辭源に謂年齒也とあり原本事を高に宿を官に作る諸本に據て改む
○朝家鹽梅、國家に缺く可らざる輔佐の臣を云尚書說命に若作和羹爾惟鹽梅とあるに出づ

是年冬、父大津卒於任國、始聞父疾、卽欲奔赴、天皇不聽、及得審問、歐血氣絶、數尅乃蘇、去職不仕、詔奪情以本官起之、俄而兼左兵衞權佐、二年授從五位上、三年遷右中辨、兼內藏權頭、天安元年加正五位下、兼備前守、未幾兼右近衞中將、右中辨、內藏權頭、春宮亮、備前守並如故、數月之後授從四位下、遷左近衞中將、兼右大辨、勘解由長官、停內藏權頭、二年兼讃岐守、是年九月拜參議、十一月皇太子卽位、是日加從四位上、兼近江權守、貞觀元年、上表辭勘解由長官、許之、是年十一月大嘗之日、授正四位下、遷兼備前守、三年春遷左大辨、左近衞中將備前守並如故、母紀氏寢疾疲倦、良繩晝夜扶侍、不捨左右、衣不解帶、目不接睫、終然丁憂、解去官職、哀號過禮、殆於毀滅、數月之後、以本官起之、是時右大辨南淵朝臣年名、左中辨大江朝臣音人、年事老宿、班皆在良繩下、私語云、彼兩臣、或碩儒宿齒、或朝家鹽梅、吾齡少於兩賢、職在其上、出入進退、常有慙顏、又左近衞少將藤原朝臣基經、少有風骨、才望甚高、時論皆謂、非常之器也、先帝重其雅量、尤見親寵、今共帶四位、豈應安席、其少將有帶四位者、

○有懷遠之慕、大日本史懷二慕遠之志一に作る
○不肯脩職、脩は原本備に作る諸本に據て改む
○寬厚、厚は閣本尾本に據て補ふ
○推心、推は原本惟に作る尾本に據て改む
○特見親用、特は原本特に作る諸本に據て改む
○多委決之、多は閣本尾本谷本に據て補ふ
○諸司、司は原本國に作る尾本前本谷本等に據て改む
○朝台來則苦我云云、朝台は良繩の字なり良繩來て席にある時は同僚窮屈に思ふを云去は良繩の退席を云るなり、苦は原本若に作る祕本閣本尾本等に據て改む
○眞如院、今山城國葛野郡松尾村下山田の西に其址ありと云此院創立の事四年二月乙卯紀に見ゆ
○室入居之女、入居は橘奈良麻呂の子逸勢の父なり、室は諸本下に作る
○廿一日乙酉、此條閣本尾本前本谷本に缺く
○穴師神、承和九年十月己巳紀に注す

中將、辭職、是先賢所傳也、吾雖无古人之行、竊有懷遠之慕、久横賢路、須早避之、遂稱病篤、屢以取假、辭退懇切、不肯脩職、五年以年名、爲左大辨、晋人爲右大辨、基經爲中將、良繩還爲右衞門督、六年兼讃岐守、九年爲太皇太后宮大夫、右衞門督如故、卒時年五十五、良繩素性寬厚、不好花餝、孝謹天至、忠信夙彰、推心奉上、不泄機事、文德天皇特見親用、寵幸加隆、內外之事、多委決之、領諸司諸院別當之事、未嘗有愆失之擧、後母安倍氏性悍、忌諸子皆排却、但至于良繩、殊以重愛、良繩以純謹事之、昔爲內舍人時、諸內舍人皆是豪家年少、奢侈放縱、无所拘束、唯見良繩、悉脩法度、因而語曰、朝台來則苦我、去而莫不思者、於山城國葛野郡、建一道場、名眞如院、母紀氏出俗爲尼、居住其中、良繩割入食封分、捨俸祿以充香火之資、每年八月、文德天皇御忌日、奉爲天皇、講法華經、迄終一生不廢此業、時人以忠孝相許、室入居之女也、名曰田村子、○廿一日乙酉、授和泉國正五位下穴師神從四位下、○廿五日己丑、詔下公卿及諸儒、博議山陵火災、並爲禮制、從四位下行博士兼伊豫權守大春日朝臣雄繼

○廿五日己丑、此條閣本尼本前本谷本に缺け類史には卅六に見ゆ
○禮記曰云云、檀弓下に出づ
○備後權介巨制朝臣、原本權字なし上文正月辛亥紀に據て改む制は勢とあるべきなり
○漢書曰云云、武帝紀及昭帝紀に見ゆ
○錫紵、禮記喪服小記に皮弁錫衰、注に錫治其布使之滑易也とあり紵は麻也喪服なり
○去彩飾、去は原本失に作る紀略に據て改む
○奇怪、奇は類史并に作る恐くは非
○悉津良比、此語未詳
○恐美恐美毛、恐美の二字は類史に據て補ふ
○廿九日癸巳、此條は紀略に據て補ふ
(三月)乙未朔三日丁酉御燈、此九字は類史百七十八及紀略に據て補ふ
○紫美神、式外、神祇志に所在伊佐郡司野村とす
○八縣宿禰命神、式外、所在未詳、八は小の誤か
○十九日癸丑、此條も紀略に據て補ふ
○廿八日壬戌、勅以下の

議曰、禮記曰、有焚其先人之室、則三日哭、然則當據禮而行之、文章博士從五位下兼備後權介巨制朝臣文雄議曰、漢書曰、武帝建元六年四月、高園便殿火、帝素服五日、昭帝元鳳四年五月、孝文廟正殿火、帝及群臣皆素服、山陵失火、未見故實、至于宗廟、前聞如此、公卿本乎漢家之故事、斟酌禮度之所宜、取文雄議而奏、於是帝避正殿、服錫紵、撤去常膳、進御蔬菲、輟朝五日、公卿及諸近臣、皆去彩飾、一准凶儀、遣使於山陵、告以事由、告文曰、天皇掛畏岐田邑御陵爾恐美恐美毛奏賜倍止奏久、去十八日不慮之外爾、野火進引天、御陵乎燒損介利、聞食那加良驚怪懼畏己止無限量志、此驚畏留狀、奇怪比悉津良比令奉仕之事乎、大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣氏宗、從四位下行大學頭潔世王等乎差使天、聞申爾奉出、但不愼護奉天致怠留御陵守等波、令勘罪那倍賜波牟、掛畏岐御陵、平久聞食天、天皇朝廷乎護幸比、國家無事久矜助賜倍止、恐美恐美毛奏賜波久止奏、○廿九日癸巳、從四位下行博士大春日朝臣雄繼抗表曰、云云、不許、○三月乙未朔、三日丁酉、御燈、○八日壬寅、授薩摩國正六位上紫美神從五位

下。○九日癸卯、授信濃國從五位下八縣宿禰命神正五位下。節婦若狹國三方郡人秦勝綱刀自、叙位二階、免戸内租、以表門閭。○十九日癸丑、雷雨、諸衛陣于殿前。○廿八日壬戌、勅令木工寮、與右京職、共監守鴻臚館。○卅日甲子、日蝕。○夏四月乙丑朔、天皇不御紫宸殿、於仗下賜飲侍臣、賜祿各有差。○三日丁卯、遣使於近京十七箇寺、修功德、以天皇聖體不豫也。延曆寺座主内供奉十禪師安慧卒、年七十四。○六日庚午、遣使於賀茂社奉幣、謝申伐木并穢損事。○八日壬申、灌佛於仁壽殿。平野祭如常。四月八日當諸祭祀、停灌佛儀。是日書灌佛、誤歟。○九日癸酉、梅宮祭。○十三日丁丑、地震。月宿至昴。大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣氏宗抗表、請罷大將職、不許。○十四日戊寅、夜月虧、細如三日初生魄。○十五日己卯、成選短册。出羽國言、飽海郡月山、大物忌兩神社前、雨石鏃六枚。○十六日庚辰、遣使十箇寺、轉念功德。令能登國司、延廿僧於氣多神、讀金剛般若經千卷、祈帝病平復也。○廿日甲申、諸衛警固、緣賀茂祭也。○廿一日乙酉、賀茂祭、齋内親王依穢不向於社。○廿二日丙

十五字は十五年三月壬辰紀に重出す紀略を參照するに此を削て彼を存すべきなり
○卅日甲子、此條も紀略に據て補ふ
(四月)賜飲侍臣、孟夏旬宴なり
○三日丁卯、以下九日癸酉梅宮祭に至るまで紀略に據て補ふ
○安慧卒、釋書二に傳見ゆ蓋釋書は本史に據て書けるものなるべし然るに今本史の文散逸せしを以て釋書に據て其略傳を知るべし
○年七十四、七は紀略六に作る釋書に據て改む同書には延曆三年生とあり六は七の誤なること明なり
○月宿至昴、以下十六日庚申條に至るまで紀略に據て補ふ氏は廿八宿の一にて北極の東方にあり
○三日初生魄、魄は明の誤なるべし尚書武成の傳に魄者形也謂月之輪郭無光之處名魄也朔後明生而魄死望後明死而魄生律歷志云死魄朔也生魄望也とあり
○月山大物忌兩神社、兩

社は共に羽後國飽海郡にあり式内名神大社なり已に注す
○氣多神、羽咋郡にあり式内名神大社已に注す
○廿日甲申、及廿一日廿二日の三條は類史五及紀略に據て補ふ
○不向於社、紀略は不參社に作る
○解嚴、嚴は紀略陣に作る
○廿三日丁亥、及廿七日の兩條は紀略に據て補ふ
○大春日朝臣雄繼、續後紀承和十四年正月甲辰紀に始て見え同年八月丁未紀に左京人春日臣雄繼さ見ゆ齊衡三年八月丁酉大春日朝臣さ賜姓
○宍人部永繼、貞觀六年正月甲午紀に始て見ゆ先是正六位上行少史兼明法博士たり此に至て從五位下に進み七年三月庚寅大判事さなり九年四月庚辰越前權介さなる
(五月)甲午朔、以下十四日に至るまで紀略に據て補ふ但し五日の記事は類史七十三に據て補ふ
○歲星犯房、歲星は木星房は廿八宿の一にて北極の東にあり

戌、諸衞解嚴、○廿三日丁亥、從四位下行大學博士大春日朝臣雄繼、從五位下守大判事兼行明法博士宍人部永繼並卒、雄繼年七十九、永繼六十七、○廿七日辛卯、雷而不雨、諸衞陣於殿前、○廿八日壬辰、地震、○五月甲午朔、三日丙申、大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣氏宗重上表、勅答從所請、○五日戊戌、停端午之節、○八日辛丑、延六十僧於紫宸殿、讀大般若經、限三日訖、○十日癸卯、歲星犯房、右服經歷七日、○十四日丁未、郡司擬文、於仗下行之、是日令法隆寺僧、每年預維摩寂勝兩會豎義、立爲恒例、○十九日壬子、地震、○廿六日己未、任官、○是月霖雨、○六月癸亥朔、三日乙丑、以傳燈大法師位圓珍、爲延曆寺座主、使少納言和氣朝臣彝範、淡路國飢、借貸正稅稻一萬束、○十一日癸酉、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、勅王公奉祭、是日、无品宗康親王薨、帝不視事三日、親王者仁明天皇之第二子也、母贈皇后澤子、贈太政大臣總繼之女、與光孝天皇同胞也、本是四品、入道爲僧、今日、中納言從三位兼行左近衞大將藤原朝臣基經抗表、請罷大將、不許、美濃權

○廿六日己未、及是月霖雨の二條は紀略に據て補ふ任官の事は補任に此日藤原基經兼左近衞大將、南淵年名兼右衞門督、大江音人兼勘解由長官、在原行平兼備中守と爲すと見ゆ
（六月）癸亥朔、以下三日乙丑の條使少納言和氣朝臣彝範に至る卅二字は紀略に據て補ふ
○淡路國飢、以下稲一萬束に至る十二字は類史八十四に據て補ふ
○十一日癸酉、以下奉祭に至る廿三字は類史九及紀略に據て補ふ
○是日无品宗康親王薨、以下良幹之父也に至るまで紀略に據て補ふ親王は承和十一年正月庚寅四品を授けられ十二年正月戊午大宰帥嘉祥二年正月戊辰兼中務卿同三年帝不豫落飾僧と爲り給ふ
○總繼、紀略緒繼に作る光孝天皇卽位前紀に據て改む
○滋野朝臣安城卒、安城の事蹟は他に見えず
○良幹、仁和三年正月辛巳紀に見ゆ
○十五日丁丑、此條類史

守從五位上滋野朝臣安城卒、安城尤好老莊、諸道人等、受其訓說、卒時年六十八、良幹之父也、○十五日丁丑、沙門玄修、苦修得驗、經行管內、勅令大宰府、乘傳入京、○廿一日癸未、任郡司、○廿三日乙酉、奉幣賀茂以下諸社十所、祈嘉澍也、○廿六日戊子、撰格所、起請十三條云云、其十二曰、天長二年五月廿五日格云、勘解由使起請偁、延曆十七年正月廿日格云、五畿內七道諸國定額寺資財等帳、附朝集使、每年進官、自今以後、宜停進之、但遷替國司、相續撿挍者、自爾以降、不進件帳、今諸國言上不與解由狀、多載部內定額寺資財堂舍無實破損等、夫有司勘事、文書爲本、既無其帳、何辨眞僞、望請六年一申、以擬勘據者、右大臣宣、奉勅依請者、凡六年一申、爲期遷替、而今秩歷之期、改定四年、資財之帳、猶指六年、去任後申、不便勘據、伏望四年一申、以適勘會、○廿八日庚寅、制、相撲節永隷兵部省、周防國守、兼任鑄錢司長官者、四年爲秩、○秋七月壬辰朔、四日乙未、廣瀨龍田祭、○八日己亥、地震動、內外垣屋、往往頹破、○九日庚子、地震、大和國吉野郡深山、有沙門、名道珠、少年入□□未出、天皇

百八十五に據て補ふ
○玄修、傳詳ならず
○廿一日癸未、及廿三日の兩條は紀略に據て補ふ
○廿六日戊子、此條祕本閣本等諸本になく類史百八十に見ゆ六は原本四に作る類史紀略に據て改む三代格三には貞觀十年六月廿八日太政官符應令四年一進諸國定額寺資財帳事云云とありて廿八日とす
○十三條云云、類史には云云の二字なし
○五畿內、類史內字なし
○不與解由狀、原本與下に勘字あり狀を使に作る類史及格に據て改む
○文書、類史文案に作る
○旣無其帳、旣は類史に據て補ふ
○望請六年、望は格に據て補ふ
○一申、申は類史進に作る下同じ
○擬勘據、擬は類史備に作る
○不便勘據、便は原本使に作る類史及格に據て改む
○廿八日庚寅、八は原本六に作る類史七十三及紀略に據て改む

聞有修驗、遣左近衞將監正六位上丹波直嗣茂、徵道珠、隨嗣茂來謁、留數日、優禮放還、施布米有數焉、○十一日壬寅、授近江國建部神從四位上、○十二日癸卯、地震、美濃國池田郡人守部秀刀自、夫死後、孀居處室、守義不移、造佛寫經、晨昏禮拜、永斷葷血、不事織絍、拜佛之外、哭不絕聲、勅敍位二階、免戶內租、以表門閭、○十三日甲辰、地震、○十五日丙午、播磨國言、今月八日、地大震動、諸郡官舍、諸定額寺堂塔、皆盡頽倒、○十六日丁未、地震、○十八日己酉、雷雨、諸衞陣於殿前、○廿日辛亥、地震、○廿一日壬子、地震、○廿七日戊午、授伊豆國正四位下三嶋神從三位、上總國從五位上勳五等玉埼神從四位下、飛驒國從五位上水無神正五位下、○八月壬戌朔、六日丁卯、釋奠、○七日戊辰、明經博士參內論義、賜祿、○十日辛未、地震、○十二日癸酉、地震、○十四日乙亥、地震、○十五日丙子、天皇御紫宸殿、覽信濃國貢駒、○十六日丁丑、地震、延六十僧於紫宸殿、限以三日、讀大般若、○十七日戊寅、東宮失火、延燒數家、○廿八日己丑、天皇御前殿、覽上野國貢駒、○廿九日庚寅晦、地震、是月霖

○制相撲節永隷兵部省、此九字同上に據て補ふ
（七月）秋七月壬辰朔、秋字及壬辰以下十二字は紀略に據て補ふ
○垣屋、垣は類史百七十一墻に作る
○大和國吉野郡、以下施布米有數焉に至るまで類史百八十五に據て補ふ
○入□「入下約三字許り缺く山多年などの文字ありしにや
○近衞將監、此四字類史には缺字とす十一年正月乙丑紀に據て補ふ
○建部神、舊位階を脫す五年六月己亥紀に從五位下を授くとあり
○盡類倒、類史百七十一盡を悉に作る
○十八日己酉、此條紀略に據て補ふ
○廿日辛亥、此條も類史紀略に據て補ふ
○三嶋神、元年正月甲申紀に出づ
○玉埼神、玉埼は原本王騎に作る元慶元年五月丁巳紀に據て改む、上總國埴生郡（今長生郡）にあり式内名神大社なり
○水無神、九年十月庚午紀に出づ

雨、○九月辛卯朔、大雨、○三日癸巳、御燈、○七日丁酉、地震、此日、遣從五位下守右少辨藤原朝臣千乘、左大史正六位上刑部造眞鯨等於伊勢大神宮、奉大神財寶、是隔廿年所造也、大祓於建禮門前、而發使、今日遣使於十四箇神奉幣、祈止雨、○九日己亥、雨始霽、天皇御紫宸殿、宴于群臣、內教坊奏女樂、文人賦喜晴詩、宴竟賜祿各有差、○十一日辛丑、遣從五位上行少納言兼侍從久須繼王、神祇大副從五位下大中臣朝臣豐雄等、向伊勢大神宮奉幣、是夜有星、出自軒轅、入於紫宮、○十四日甲辰、四品惟條親王薨、帝不視事三日、親王者文德天皇第二子也、母從五位上紀朝臣靜子、正四位下名虎之女也、薨時廿三、○十七日丁未、甲斐國无位檜岑神、上總國正六位上前廣神、神代神、高瀧神、並授從五位下、○廿一日辛亥、授丹後國正六位上熊野神、出雲國正六位上智伊神、斐伊神、溫沼神、並從五位下、○廿五日乙卯、任官、○冬十月辛酉朔、天皇不御紫宸殿、於仗下賜飲侍臣、賜祿各有差、○十一日辛未、文章博士橘博覽、名爲廣相、依爲舍利弗別號也、○廿七日丁亥、賀茂齋儀子內親

（八月）壬戌朔、以下六日七日の兩條は紀略に據て補ふ
○十五日丙子、此條同上
○延六十僧、以下十六字同上
○廿八日己丑、此條及是月霖雨の四字も同上
（九月）辛卯朔、及三日癸巳條も紀略に據て補ふ
○此日遣從五位下云云、以下發使に至る類史（一三）及紀略に據て補ふ但し此日の二字は紀略に據る又刑部造眞鯨は紀略に別部遺貞幹に作り大赦以下十字なし
○今日遣使、以下祈止雨に至る十四字は紀略に據て補ふ
○十四箇神、丹生川上貴布禰等の諸神なるべけれど詳ならず
○雨始霽、此三字は紀略に據て補ふ
○喜晴詩、詩字は類史七十四及紀略に據て補ふ菅家文草一に九日侍宴同賦喜晴應製詩并序を載す注に貞觀十四年とあるは誤なるべし
○十一日辛丑、以下向伊勢大神宮奉幣に至る類史三に據て補ふ但し朝臣の

王、獻物皇太后於常寧殿、奉賀皇太后滿卌之算也、賜親王以下祿、是夜地震、○廿八日戊子、太政官論謹奏曰、刑部省斷罪文云、齋宮寮史生從八位上縣造富世、及殺助正六位上藤原朝臣豐本、伊勢國司從五位上行權守藤原朝臣宜、從五位下行權介藤原朝臣廣守、斷罪違律、前志摩守正六位上高橋朝臣繼善、犯用官物、私營公田、過役雜傜、國掌秦貞雄、毆殺百姓日置福益、法官覆案、富世貞雄、當斬、宜廣守、贖刑、繼善遠流者、詔、富世貞雄、減死一等、處之遠流、自餘論之如法、○十一月庚寅朔、七日丙申、平野春日祭、○十一日庚子、太皇太后獻物於皇太后、慶賀卌之齡、賜群臣祿、○十二日辛丑、園韓神祭、○十四日癸卯、新嘗會、遣親王公卿、就神嘉殿奉祭、○十五日甲辰、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、大歌五節儛如常儀、賜祿各有差、○十七日丙午、授後院從五位下隼神從四位下、○廿三日壬子、大原野祭、今日、无品池上內親王薨、天皇不視事三日、內親王者、桓武天皇之女、母橋氏、從四位下入居之女也、名曰田村子、○廿

二字は類史になし八年七月戊申紀に據て補ふ
○是夜、以下及十四日甲辰條は紀略に據て補ふ
○出自軒轅入於紫宮、軒轅は廿八宿中の星宿の北にありて十七星あり北斗に近し、紫宮垣は十五星ありて北斗の北にあり
○檜岑神、式外、神祇志に今在八代郡上黒駒村
○前廣神神代神高瀧神、並に式外、神祇志料に前廣神は今市原郡養老川の東西廣村に、神代神は同郡今富村の東南五許町神代村に、高瀧神は同郡高瀧庄賀茂村に在りさあり、神代の神字は原本になし神祇志に據て補ふ
○熊野神、神名式丹後國熊野郡熊野神社
○智伊神、神名式出雲國神門郡智伊神社、今簸川郡知井宮村本郷
○斐伊神、同式同國大原郡斐伊神社、今斐伊村里方
○溫沼神、溫沼或は鹽治の訛か鹽治神社なれば神門郡の式社なりされど類史十六にも溫治さあれば姑く舊に仍る
○廿五日乙卯任官、此條

七日丙辰、地震、○廿八日丁巳、雷三聲、大宰府獻白鹿一、放神泉苑、○十二月庚申朔、地震、○五日甲子、勅遣使者於近京卅箇寺、平城卅箇寺、修轉經功德、襯錢寺別有數、賀皇太后春秋盈卌、以禱餘算也、○七日丙寅、天皇曲宴皇太后於常寧殿、王公卿士並侍焉、歡樂竟日、群臣具醉、賜祿各有差、是日、於朱雀門前、召集京邑貧人、賜物有差、○九日戊辰、詔授從四位上行皇太后宮大夫藤原朝臣良世正四位下、從四位下行左中辨兼皇太后宮亮藤原朝臣家宗從四位上、齋院長官從五位下兼行皇太后宮大進藤原朝臣忠主從五位上、外從五位下皇太后宮少進菅野朝臣愛甲從五位下、正六位上藤原朝臣清生從五位下、從四位下上毛野朝臣滋子正四位下、正五位下藤原朝臣宜子從四位下、藤原朝臣御康正五位下、正六位上藤原朝臣貞子、多治眞人安坐、无位大江朝臣告子、並從五位下、七日觴宴之餘慶、特有此殊獎焉、○十日己巳、地震、○十一日庚午、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、王公行事、所司供祭如常、

○十六日乙亥、地震、進攝津國正三位勳八等廣田神階、特加從一位、從四位下勳八等生田神從三位、是夜夜分、正五位下藤原朝臣諱皇太后誕皇子、諱太上天皇○廿二日辛巳、太皇太后請六十僧於東京宮、薰修講經、會京師貧窮者於朱雀大路、賜物各有差、后春秋始滿六十、賀以修善、○廿六日乙酉、制令式部省、年終移諸國權任國司、并史生博士醫師名簿於民部省、永以爲例、○廿七日丙戌、授但馬國從五位上出石神、粟鹿神、並正五位下、從五位下山神、戸神、雷神、樹椒神、海神、並從五位上、○卅日己丑、太政大臣獻物於皇太后、王公並侍、賜祿各有差、○閏十二月庚寅朔、五日甲午、右京職言、外從五位下善道朝臣根莚宅木連理、○十日己亥、遣使於攝津國廣田、生田神社奉幣、告文曰、天皇我詔旨止、廣田大神乃廣前爾申賜倍止申久、大神乎彌高彌廣爾供奉牟止所念行須、而間爾、攝津國解良久、地震乃後爾小震不止、因卜求之牟禮波、大神乃布志己利賜天、所致、賜奈利止申利、又先日爾禱申賜布事毛有介利、因今從一位乃御冠爾上奉利

紀略に據て補ふ
（十月）十一日辛未、及廿七日丁亥の兩條は紀略に據て補ふ
○舍利弗別號、舍利弗は釋迦の弟子なり智度論十一に一切衆生智唯除佛世尊欲比舍利弗智慧及多聞於十六分中猶尙不及一とあり
○皇太后、藤原明子
○謹奏、謹字恐らくは衍
○宜從五位下行權介藤原朝臣、此十二字は類史八十七に據て補ふ但し宜は類史宣に作る
（十一月）庚寅朔、以下十二日に至る三條は紀略に據て補ふ
○太皇太后、順子
○十四日癸卯、及十五日甲辰の兩條は類史九及紀略に據て補ふ
○隼神、二年六月甲午紀に出づ
○廿三日壬子、此條紀略に據て補ふ
（十二月）襯錢、襯は嚫の俗字なり財施を云
○曲宴、曲は原本典に作る紀略に據て改む
○忠主從五位上、上は原本下に作る諸本に據て改む

○藤原朝臣御廉、藤上に位階を脫す上文には從五位下とあり
○安坐、原本坐を子に作る諸本に據て改む
○廣田神階特加從一位、廣田神は元年正月甲申紀に出づ從一位は類史十六には正二位とあれど下文閏十二月己亥告文に從一位とあり或は十二月十六日正二位を授け奉り閏十二月十日更に從一位を授けられしかと思へど告文に其事見えず故に採らず
○生田神、元年正月甲申紀に出づ
○夜分、後漢書光武紀に夜分乃寢、注に分猶半也とあり夜半に同じ
○藤原朝臣諱、高子
○皇子諱、陽成天皇
○后春秋、后は總本閣本尾本等に據て補ふ
○乙酉制、太政官符として三代格十七に見ゆ
○出石神粟鹿神、並に承和十二年七月辛酉紀に見ゆ
○山神戶神雷神櫁椒神海神、並に承和九年十月乙亥紀に見ゆ原本雷下の神字及櫁字なし神は類史十六に據り櫁は神名式に據

崇奉留狀乎、上殿權助從五位下大中臣朝臣國雄乎差使天、御位記乎令捧持天奉出須、大神神那加良毛聞食天、今毛往前毛、天下平安爾、天皇朝廷乎、寶位无動久、常磐堅磐爾夜守日守爾、護幸倍奉賜倍止申賜波久止申、又辭別申久、去八月三日祈申久、風雨旱乃災無之天、五穀無損久、天下饒足之米賜倍止祈申賜比岐、而祈申毛驗久、諸國豐饒爾苅收訖太利、此又皇大神乃厚助奈利止奈毛、歡崇比所念行須、因令禮代乃大幣帛乎令捧持奉出、大神平介久聞食天、天下平安爾、護助賜倍止申賜波久止申、生田神社告文亦同焉、授山城國從五位下櫟谷神正五位下、○十二日辛丑、天皇御建禮門前、頒遣公卿侍從於諸陵墓、獻荷前幣、○十四日癸卯、延六十僧於紫宸殿、限三箇日、轉讀大般若經、○十九日戊申、於內殿始修佛名懺悔、限三日、訖、○廿日己酉、新定內外交替式二卷、撰修甫就、勅頒天下、並令遵行、○廿一日庚戌、授肥後國從四位上阿蘇比咩神正四位下、因幡國從四位下宇倍神從四位上、但馬國正六位上大岡神、左長神、七美神、菅神、播磨國

て補ふ上文には楊を蜀に作る
〔閏十二月〕布志已利、文德紀に見ゆ節凝にて不快の意原本此四字小字させるを類史十一に據て改む
○大神神那加良毛、下の神字は類史に據て補ふ
○常磐堅磐、二の磐字は尾本前本谷本及類史石に作る
○風雨旱、風は諸本及類史に據て補ふ
○皇大神、大は原本太に作る諸本に據て改む
○厚助奈利止奈毛、類史毛を无に作る
○護助賜倍止、賜は閣本尾本前本等給に作る
○櫟谷神、嘉祥元年十一月戊午紀に出づ、櫟は類史十六に棟に作る
○內殿、仁壽殿を云
○新定內外交替式、三代格十七に太政官符頒行新定內外官交替式事右勘解由使撰定所上奏也とあり但し貞觀十二年閏十二月廿日させるは誤なり
○阿蘇比咩神、元年正月甲申紀に出づ
○宇倍神、同年五月庚辰

正六位上射日埼神、土左國無位宗我神、並從五位下、是日宣詔內外曰、春日大原野兩社齋女藤原朝臣可多子、太政官貞觀八年十二月廿五日、下所司符、注藤原朝臣須惠子、今追改焉、○廿五日甲寅、勅令大和國差充騎兵卅人、執杖士廿人、備春日齋女參社之威儀、每至春祭、在前差課國郡司各二人、相共祗承、立爲恒例、○廿八日丁巳、左大臣正二位源朝臣信薨、信朝臣者、嵯峨太上天皇之子、源氏第一郎也、母廣井宿禰氏、大臣率性強雅、風尙不恒、好讀書傳、兼嘉草隷、又工圖畫、丹靑之妙、馬形寫眞、太上天皇、親自敎習吹笛鼓琴箏彈琵琶等之伎、思之所涉、究其微旨、乃至鷹馬射獵、尤所留意、天長二年冬叙從四位上、三年春除侍從、數月遷爲治部卿、五年兼播磨權守、八年拜參議、九年授正四位下、其年爲左兵衞督、播磨權守如故、十年進爵爲從三位、承和二年加正三位、兼近江守、俄遷左近衞中將、近江守如故、四年遷爲左衞門督、八年兼武藏守、九年七月、太上天皇崩、丁憂去職、同月拜中納言、十五年轉大納言、嘉

紀に出づ
○大岡神、式外、神祇志料に今在氣多郡蕨沼鄕大岡寺村大岡山とあり
○左長神、神名式但馬國朝來郡佐囊神社とある是なり山口村佐囊にあり
○七美神、同式同國七美郡志都美神社二座とあり所在未詳
○菅神、同式同國出石郡須義神社是なり神祇志に今在菅谷荒木村（小坂村荒木）とあり
○射目埼神、式外、神祇志に在飾東郡とあり注に一說を擧ぐ
○宗我神、式外、同志に今在香美郡香宗中村（香宗村中）とあり
○春祭、二月上申日
○祇承、承は閣本尾本谷本に據て補ふ
○廣井宿禰氏、氏は祕本閣本尾本前本等に據て補ふ
○强雅、强は諸本湊に尾本には俊とあり或は淵の訛か
○嘉草隷、嘉は閣本喜に作る狩谷氏は嘉恐善と云
○爲從三位、三は原本二に作る諸本に據て改む續後紀天長十年三月癸巳紀

祥三年授從二位、兼皇太子傅、仁壽中兼右近衞大將、齊衡初拜左大臣、天安二年至正二位、貞觀六年冬、先是大納言伴宿禰善男、與大臣相忤、漸積嫌隙、至是有投送書曰、大臣與中納言源朝臣融、右衞門督源朝臣勤等、兄弟同謀、欲作反逆、令時世嗷々、善男乘此、顯言曰、大臣欲爲不善、既有先聞、今欽章知此、可謂其反有端矣、至于七年春、以大臣家人清原春瀧、爲日向掾、左馬少屬土師忠道爲甲斐權掾、左衞門府生日下部遠藤爲肥後權大目、皆是便於據鞍引弓者、雖似奬擢、實奪大臣之威勢也、八年春欲遣使圍守大臣家、善男通諮右大臣藤原朝臣良相所行也、于時太政大臣不知有此事、及至發聞、愕然失色、即便奏聞、探認事由、帝曰、朕曾所不聞也、爰勅遣參議右大辨大枝朝臣音人、左中辨藤原朝臣家宗等、前後慰諭、中使相仍、大臣始則危懼在心、救恤无計、及蒙勅慰、死灰更燃、虎口既免、大臣獻家中所有駿馬十二疋、并賓從卌餘人、以示單子孤獨、无復勢援焉、朝廷不受、皆悉返之、大臣自後杜門、不肯輙出、欲開遣

○證とすべし
○授從二位、二は原本一に作る嘉祥三年四月甲子紀に據て改む
○兼右近衞大將、右は原本左に作る閣本尾本に據て改む齊衡元年八月庚辰紀證とすべし
○歛章、歛は原本表に作る祕本閣本尾本等に據て改む歛章は匿名書を云後漢書蔡邕傳注に歛猶レ隱レ告人姓名無レ可二對問一章者今之表也とあり
○便於據鞍引弓者、便は便習なり騎射に習熟せる者を云
○八年春云云、此事大鏡裏書・宇治拾遺物語等に見ゆ參看すべし
○圍守、守は原本于に作る諸本に據て改む
○太政大臣、良房
○大枝朝臣音人、枝は當に江に作るべし
○氣殆殊、殊は原本絕に作る諸本に據て改む字書に殊は斷絕也傳而未絕と見ゆ
○閉四壁、閉は原本開に作る今閣本前本等に據る
○恭、初名は謙貞觀十八年八月乙巳奏請恭と改む元慶五年六月乙酉紀に從

憂情、向二攝津國一、時出二野中一從レ禽、墮レ馬陷二於深泥一、不レ獲二自拔一、有レ人扶起、氣殆殊、須臾蘇息、輙病而皈、心神恍忽、數日而薨、時年五十九、遺命薄葬、殯斂之日、人多不レ知、平生於二北山嶺下一、造二立一屋一、中置二一床一、居二棺其上一、固閉二四壁一、令下人畜不上レ據犯レ之、子恭、平、有三人、並爵至二四位一焉、明年三月追二贈正一位一、○廿九日戊午晦、大祓幷大儺如レ常、

四位下大和守と見ゆ
○平、仁和三年六月乙卯紀に從四位上行相摸守源朝臣平爲二大膳大夫一と見ゆ
○有、仁和三年二月辛酉紀に從四位下尾張權守と見ゆ
○追贈正一位、十一年三月壬戌紀に見ゆ
○卷第十五、原本此下に終字あり諸本に據て刪る

日本三代實錄卷第十五

日本三代實錄卷第十六

起貞觀十一年正月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

（己丑）十一年春正月己未朔、天皇不受朝賀、停賜宴侍臣之儀、以去年閏十二月廿八日左大臣薨也、○七日乙丑、天皇御紫宸殿、覽青馬、賜宴于群臣、奏女樂、日暮賜祿各有差、授無位兼善王從四位下、大監物從五位下興我王從五位上、無位眞宗王從五位下、右京大夫從四位下橘朝臣貞根、無位源朝臣覺、並從四位上、左近衞少將正五位下兼行備前權守藤原朝臣良尙從四位下、從五位上行因幡守藤原朝臣關主、左馬頭藤原朝臣秀道、右馬頭在原朝臣業平、並正五位下、從五位下行相摸權介橘朝臣休蔭、散位藤原朝臣有年、彈正少弼安倍朝臣房上、散位坂上大宿禰高道、少納言兼侍從和氣朝臣彝範、左衞門佐藤原朝臣利基、內藏權助藤原朝臣積善、神祇大副大中臣朝臣豐雄、散位橘朝臣良基、右少辨藤

【貞觀十一年】十一年春正月、原本年下に己丑の二字あり諸本欄外頭注さす故にこを削る
○左大臣、源信
○賜宴于群臣、賜は類史七十一に據て補ふ、于字恐くは衍
○兼善王、光孝天皇皇子、十二年二月丙申紀に見ゆ
○源朝臣覺、仁明天皇皇子、元慶三年十月丙子紀に傳見ゆ
○休蔭、休は原本信に作る諸本に據て改む休蔭は九年二月辛巳相摸權介さなり現に從五位下なるが信蔭は十年正月壬寅巳に從五位上さなれり故に取らず

○散位外從五位下都宿禰、散位以下七字は諸本に據て補ふ
○正六位上藤原朝臣淸經、正六位上の四字恐くは衍
○興行、興は原本輿に作る諸本に據て改む
○式部大丞高階眞人令範、下文二月甲辰に散位とあり又下文に式部大丞藤原朝臣善友見ゆるに據れば此に式部大丞とあるは疑はし善友は下文辛未に式部大丞藤原朝臣善友爲參河守とあり疑はしきことなきを私記に大或少歟と云ゐは非なり
○苽作、苽は瓜の俗字
○興門、興は原本輿に作る諸本に據て改む下同じ
○大法師位長朗、位は類史百七十七に據て補ふ
○藤原朝臣維邦、朝臣の二字は伴校本に據て補ふ
○栗常、栗は林本粟に作る
○平朝臣寛子、六年八月己卯に女御となる
○藤原朝臣諱、高子

原朝臣千乘等、並從五位上、散位外從五位下都宿禰御酉、文伊美吉園兄、秦宿禰安雄、宮主伊伎宿禰是雄、音博士淸內宿禰雄行、筑前權介長岑宿禰恒範、正六位上源朝臣進、左衞門大尉正六位上藤原朝臣淸經、大內記安倍朝臣興行、散位橘朝臣常雄、式部大丞高階眞人令範、散位藤原朝臣苽作、木工權大允藤原朝臣休樹、造兵正菅原朝臣護祖、右兵衞大尉藤原朝臣發生、散位橘朝臣興門、民部大丞安倍朝臣高貞、式部大丞藤原朝臣善友、少外記嶋田朝臣忠臣、中監物紀朝臣千枝、左近衞將監伴宿禰安雄、散位御春朝臣時雄等、並從五位下、左大史正六位上菅野朝臣良松、主計權助眞野宿禰永德、權針博士下道朝臣門繼、左近衞將監丹波直嗣茂、施藥院使大友村主家人、右近衞將監和（ヤマトノ）藥宿禰弟歲、陰陽允良階宿禰貞範等、並外從五位下、○八日丙寅、始講最勝王經於大極殿、以藥師寺僧華嚴宗傳燈大法師位長朗爲講師、授木工權助正六位上藤原朝臣維邦從五位下、二品行治部卿兼上野太守賀陽親王家令安曇宿禰栗常外從五位下、女御正五位下平朝臣寛子、藤原朝

○御春朝臣眞人仲子、狩谷校本に眞人二字恐衍とあれど朝臣の下に恐くは脱字あるべし

○眞丘、眞は原本直に作る前後の例に據て改む

○有蔭爲伊勢權守、下文十一月甲子紀に重出す

○中納言兼左近衞大將、兼は祕本尾本に據て補ふ

臣諱（皇太后）並從四位下、外從五位下紀朝臣全子、無位藤原朝臣閑子、藤原朝臣宜子、笠朝臣範子、藤原朝臣蔭子、御春朝臣眞人仲子、賀茂朝臣弟子、縣犬養宿禰阿野子、並從五位下、正六位上尾張宿禰清海外從五位下、

○九日丁卯、所司獻剛卯杖、天皇不御紫宸殿、內侍傳奏焉、○十三日辛未、以散位從五位下藤原朝臣忠方爲兵部少輔、從五位下上毛野朝臣安守爲大炊頭、從四位上行大和權守在原朝臣善淵爲山城權守、散位從五位下秦宿禰安雄爲權介、外從五位下行山城權介和氣朝臣時雄爲大和權介、散位從五位下紀朝臣眞丘爲河內守、從五位上橘朝臣安吉爲攝津守、散位從五位下藤原朝臣有蔭爲伊勢權守、從五位下行式部大丞藤原朝臣善友爲參河守、散位外從五位下大國忌寸福雄爲安房守、從五位下橘朝臣宗雄爲下總守、從五位上橘朝臣良基爲常陸介、從五位上行太皇太后宮亮紀朝臣冬雄爲兼美濃權介、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經加陸奧出羽按察使、餘官如故、從五位下行民部大丞安倍朝臣高貞爲能登守、從五位下行內藥正兼侍醫興道

○藤原朝臣有年爲守、下文十一月甲子紀にも爲播磨守とあり
○興世、興は原本與に作る諸本に據て改む
○爲安藝守、二月甲辰紀に安藝守基兄王爲彈正大弼とあり基兄王を未だ免ぜずして興世を並任することを疑ふべし
○源朝臣興、興は原本與に作る諸本に據て改む
○興氏、原本興を與に作る祕本尾本前本等に據て改む
○宮人踏歌、宮は原本官に作る祕本尾本前本及類史七十二に據て改む

宿禰名繼爲介、餘官如故、從五位上行彈正少弼安倍朝臣房上爲丹波權守、散位從五位下橘朝臣良實爲伯耆守、從五位下嶋田朝臣善良爲出雲守、彈正大弼從四位下兼行攝津權守藤原朝臣廣基爲播磨權守、散位從五位上藤原朝臣有年爲守、從五位下南淵朝臣良棟爲介、從四位上朝右王爲美作守、勘解由次官從五位下伴宿禰興門爲備後介、從五位上守刑部大輔藤原朝臣興世爲安藝守、從五位下守左兵庫頭源朝臣撰爲周防介、從四位上行右近衛中將源朝臣興爲阿波守、近衛中將如故、兵部少輔從五位下藤原朝臣忠雄爲大宰少貳、散位從五位下永原朝臣永岑爲筑前介、從五位下橘朝臣子善爲肥後權介、從五位下安倍朝臣興氏爲薩摩守、○十四日壬申、大極殿齋講竟、後僧綱率名僧、奉參內裏、論義如常、○十六日甲戌、踏歌之節、天皇御紫宸殿、宴於侍臣、雅樂寮奏樂、宮人踏歌如常、賜祿各有差、是日以從五位下藤原朝臣有實爲次侍從、○十七日乙亥、勅、遣公卿於建禮門前、行大射之禮、○十八日丙子、天皇御射殿、覽賭射、○廿一日己卯、內宴如常、○廿五日癸未、夜、

○法師爾、狩谷校本に師下一本有二等字一と云
(二月)貞明親王、陽成天皇に坐す
○於內庭、內は諸本に據て補ふ
○並拜受詔命、並は祕本尾本前本等に據て補ふ
○親王諸王、諸王の二字に諸本に據て補ふ
○此之狀、狀は原本將に作る祕本尾本に據て改む
○春宮傅、春宮は東宮とあるべきなり

侍賢門屛火、及二炎未一熾、有レ人撲滅、○廿七日乙酉、任二僧綱一、策命曰、天皇我詔旨止、法師爾白倍支止宣勅命乎白、少僧都慧達乎大僧都爾、權少僧都眞紹乎少僧都爾、權律師慧叡乎律師爾、大法師春德、春賢、宗叡乎權律師爾、任賜事乎白左閉止宣勅命乎白、遣二參議正四位下行左大辨大江朝臣音人、從五位上行少納言兼侍從和氣朝臣彝範、從五位上守右少辨藤原朝臣千乘等、率二所司一、向二西寺綱所一宣制、○二月己丑朔、天皇臨軒、立二貞明親王一爲二皇太子一、公卿已下、五位已上於二內庭一、諸司六位已下於二承明門外一、並拜二受詔命一、策文曰、天皇我詔旨勅命乎、親王諸王諸臣、百官人等、天下公民、衆聞食宣、隨レ法爾可レ有岐政止之天、貞明親王乎立而、皇太子止定賜布、故此之狀悟天、百官人等仕奉禮止詔天皇勅旨乎衆聞食宣、是日、以二大納言正三位藤原朝臣氏宗一爲二兼春宮傅一、文章博士從五位下橘朝臣廣相爲二學士一、參議民部卿正四位下兼行右衞門督伊豫守南淵朝臣年名爲二春宮大夫一、刑部少輔從五位下藤原朝臣門宗爲レ亮、散位從五位下藤原朝臣淸經爲二大進一、○三日辛卯、大原野祭如レ常、○四日壬辰、祈年祭如レ常、

〇延五十僧、紀略は今日以僧十五口に作る
〇欲入、原本此下に東宮の二字あり諸本に據て削る
〇始笄、禮記內則に女子十有五年而笄とあり
〇儀子內親王、清和天皇の御妹
〇從四位下(廣基)、下は原本上に作る上下の文に據て改む
〇播磨權守如故、權は正月辛未紀に據て補ふ

是夜、地震。(一)八日丙申、春日祭如常。是日、齋女始參於社。告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐春日大神能廣前爾、恐美恐美毛申賜倍止申久、先先爾禱申賜布事有天、掛畏岐皇太神乃齋女爾、藤原朝臣可多子乎定天、令奉仕之狀乎聞食天、天皇朝廷乎平久御坐志米、食國能天下毛、無事久令有賜倍止爲天奈毛、從四位上行左中辨兼皇太后宮亮藤原朝臣家宗乎差使天、禮代能大幣帛乎令捧持天奉出賜布、此狀乎聞食天、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾、夜守日守爾、護幸奉賜比、天下平安爾、風雨隨時天、五穀豐登志米賜倍止、恐美恐美毛申賜波久止申。〇九日丁酉、釋奠如常。延五十僧於東宮、轉讀大般若經、依皇太子欲入故鎭之。是日、賀茂齋儀子內親王始笄。〇十一日己亥、先是皇太子誕於太政大臣東京染殿第。是日移入東宮。詔、授無品儀子內親王三品。〇十六日甲辰、以從四位下行播磨權守藤原朝臣廣基爲神祇伯、播磨權守如故。散位從五位下橘朝臣茂生爲大監物、從五位上橘朝臣信蔭爲治部大輔、從五位上行太政大臣家令兼近江大掾菅野朝臣弟門爲刑部大輔、散位從五位下藤原朝臣是行爲少輔、

○四品守兵部卿、山田以文云守字可疑
○外從五位下(弟益)、外は尾本前本谷本及三年正月戊子紀に據て補ふ
○因幡權介、幡は原本播に作る谷本淀本に據て改む
○守刑部大輔、守は祕本尾本前本等に據て補ふ
○興世、興は原本與に作る諸本に據て改む
○左近衞權少將、原本權下に介字あり衍なり諸本に據て刪る
○爲伊豫介、卷雄は八年正月庚寅紀に爲伊豫介とあり此に亦伊豫介とあるは重任せられしならむ
○鎭守府府掌云云、三代格十五に見ゆ
○比樂河、比は紀略法に作る、比樂川は今の手取川なり延喜兵部式に比樂驛見ゆ
○半輪渡子、半輪は雜纂を俛するな云
○六十僧、尾本及紀略僧上に口字あり

從四位上行加賀守源朝臣能有爲大藏卿、正五位下良岑朝臣長松爲宮内大輔、從四位上行安藝守基兄王爲彈正大弼、散位從五位下高階眞人令範爲少弼、從五位下行助教紀朝臣安雄爲勘解由次官、散位從五位下田口朝臣統範爲遠江守、四品守兵部卿本康親王爲上總太守、兵部卿如故、從五位上行民部少輔兼安藝權守藤原朝臣水谷爲信濃權守、民部少輔如故、散位外從五位下多米宿禰弟益爲下野權介、從四位上源朝臣啓爲越前守、從五位下行少外記嶋田朝臣忠臣爲因幡權介、從五位下行右近衞將監藤原朝臣高藤爲播磨權介、大監物從五位下橘朝臣岑守爲安藝守、從五位上守刑部大輔藤原朝臣興世爲紀伊守、從五位上守左近衞權少將文室朝臣卷雄爲伊豫介、少將如故、參議大藏卿正四位下兼行讃岐權守源朝臣生爲右衞門督、讃岐權守如故、散位從五位上久我朝臣三常爲左兵庫頭、○廿日戊申、勅賜鎭守府府掌二人職田各一町、○太政官處分、停遣採長門國銅使、付國宰採進焉、○廿三日辛亥、詔加賀國比樂河置半輪渡子廿五人、○廿六日甲寅、延六

○遍昭、昭は尾本谷本及紀略照に作る釋家官班記上に法眼遍昭延曆寺慈覺智證等弟子號二花山僧正一貞觀十一年二月叙山門僧綱始也とあり
○是月、月は原本日に作る諸本及紀略に據て改む
○未止、原本止を﨔に作る諸本及紀略に據て改む
(三月)太皇太后宮、文德天皇母后順子、宮は紀略に據て補ふ
○當有疾病、當は原本可に作る祕本尾本前本及紀略に據て改む病は紀略疫に作る
○限三箇日、箇は紀略に據て補ふ
○贈故左大臣、贈は原本賜に作る紀略及上文に據て改む
○行右衛門督、行は下文七月戊午紀に據て補ふ
○置弩師、三代格五に太政官符として見ゆ
○調集雜掌、下文十一月庚午紀には朝集掌と見ゆれど紀略にも調とあれば舊に仍る
○稅帳、稅は祕本尾本前本等及紀略に據て補ふ

十僧於大極殿、限以三日、轉讀大般若經、詔授僧遍昭法眼和尚位、○廿八日丙辰、進下野國從二位勳四等二荒神階、加正二位、授從四位下勳五等溫泉神從四位上、无品柔子內親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、帝不視事三日、內親王者仁明天皇之女、母參議正四位下滋野朝臣貞主之女、從四位上繩子也、○廿九日丁巳、地震、○是月霖雨、至今未止、

○三月己未朔、日有蝕之、○二日庚申、太皇太后宮滅年料御服絹綿布幷用度雜物、節級有數、詔所司返納焉、○三日辛酉、天皇潔齋奉燈如常、先是陰陽寮言、今年夏季、當有疾病、至是勅、令五畿七道諸國、班幣境邑諸神、幷轉讀金剛般若摩訶般若等經、限三箇日訖、轉經之間、禁斷殺生、○四日壬戌、以正五位下行陸奧守良岑朝臣經世為上野權介、陸奧守如故、是日、勅贈故左大臣正二位源朝臣信正一位、遣參議正四位下行右衛門督兼讃岐權守源朝臣生、從四位下行大學頭潔世王、就第宣制、○七日乙丑、勅廢隱岐國史生一員、置弩師一員、停越中國調集雜掌一人、免稅帳雜掌調庸、○八日丙寅、雷電暴雨、諸衞陣於殿前、○十二日

○宇奈己呂別神、承和十四年十一月丙寅紀に出づ
○大高山神、承和九年五月甲辰紀に出づ
○伊佐奈美神、神名式阿波國美馬郡伊射奈美神社、所在未詳
○柴田郡、田は原本曰に作る諸本に據て改む
○阿倍陸奥臣、倍は原本波に作る諸本に據て改む
○名取團大毅、原本團な郡に毅な領に作る祕本尾本前本等に據て改む
○高良玉垂命神、前に數々出で貞觀元年正月甲申紀にも見ゆ
○豐比咩神、天安元年十月丁卯紀に見ゆ
○養父神、承和十二年七月辛酉紀に見ゆ
○物部神、神名式石見國安濃郡物部神社、川合村にあり國幣小社に列す
○西寒多神、同式豐後國大分郡西寒多神社(大)、大分郡東稙田村寒田にあり國幣中社に列す
○貞長九年正月任參河介、此十字祕本尾本前本等に據て補ふ信友氏の是後人の加筆なりと云るは非なり
○主計頭、十年正月辛亥

庚午、授陸奥國從五位上宇奈己呂別神正五位下、從五位下大高山神從五位上、阿波國正六位上伊佐奈美神從五位下、○十五日癸酉、陸奥國柴田郡權大領外正八位上阿倍陸奥臣永宗、名取團大毅外正六位上刑坂宿禰本繼、並授借外從五位下、○十六日甲戌、新鑄銅印一面、賜陸奥國前印刓也、○廿二日庚辰、進筑後國正二位高良玉垂命神階、加從一位、授從四位上豐比咩神正四位下、但馬國從五位上養父神、石見國從五位上物部神、並正五位下、豐後國无位西寒多神從五位下、令下總國撿非違使帶劒把笏、○廿三日辛巳、以散位從五位下藤原朝臣是繩爲右京亮、外從五位下太朝臣貞長爲參河介、貞長九年正月、任參河介、以母憂去職、今詔起之、從五位下守左近衛少將藤原朝臣有實爲加賀守、少將如故、散位從五位下源朝臣弼爲越中權介、主計頭從五位上家原宿禰繩雄爲但馬權守、主計頭如故、從五位上源朝臣好爲備前守、好九年三月、任備前守、丁父憂去職、今詔起之、○廿四日壬午、天皇御射殿、閲試春宮擬帶刀舍人射藝、○廿七日乙酉、遣使者於深草田邑兩

○紀には計を衍に作る
○想之、想は原本赴に作る秘本前本谷本に據て改む
○深草、仁明天皇
○田邑、文德天皇
(四月)八日乙未灌佛、此條類史百七十八に據て補ふ
○撰貞觀格畢、貞觀格は法家文書目錄に貞觀格一部十二卷十八篇并序上起弘仁十一年下迄貞觀十年凡卌九年貞觀十一年四月十三日大納言藤原氏宗等奏進さあり
○音人、音は原本守に作る諸本及類史百四十七に據て改む
○都序、此文三代格一及本朝文粹八に載す
○律云、云は原本曰に作る類史及格に據て改む
○斷罪云云、唐律疏議斷獄律に諸斷罪皆須具引律令格式正文違者笞三十さあり
○令云、云は原本曰に作る祕本前本谷本等及類史・格・文粹に據て改む
○犯罪未斷決云云、獄令に凡犯罪未發及已發未斷決逢格改者若格重聽依犯時若格輕聽從輕

山陵、告以立皇太子也、田邑山陵告文曰、天皇恐美恐美毛、掛畏岐御陵爾申賜倍止申久、食國乃法止定賜比行賜部留法隨爾、可有岐政止之天、貞明親王乎立氏、皇太子止定賜布、此狀乎參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守南淵朝臣年名、從四位上行中務大輔棟貞王等乎差使天、恐美恐美毛申賜閉止申、深草山陵告文亦准此焉、○夏四月戊子朔、天皇御紫宸殿、賜飮侍臣、左右近衛府遞奏音樂、賜祿如常、○八日乙未、灌佛、○十三日庚子、撰貞觀格畢、大納言正三位兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨大江朝臣音人、從四位上守刑部卿菅原朝臣是善、散位從五位下上毛野朝臣永世、勘解由次官從五位下紀朝臣安雄等、詣闕奉進、其都序曰、律云、斷罪須引律令格式正文、令云、犯罪未斷決、逢格改者、然則格者、律令之條流、政教之規軌、君與百姓共之者也、君不可失之於上、臣不可違之於下、出言而千里斯應、含和而萬類曲成、時險則峻法以取平、時泰則寬綱以將化、我國家、遐邇承德、天下無虞、風教大同、車書共道、而未

法」とあり未だ其罪を判決せざるに當て格改まらば之に據て改て處分すべしとなり
○律令之條流、條は枝也流は派也律令の枝分派別せるものなりと也沈約內典序に經紀繁廣條流舛散とあり
○政敎之輗軏、輗軏は論語爲政篇に大車無輗小車無軏其何以行之哉とあるに出づ政敎を運用するに必要缺く可らざるものなるを云
○出言而千里斯應、易繫辭傳に君子居其室出其言善則千里之外應之況其邇者乎とあるに據れり
○含和、淮南子泰族訓に聖人懷天氣抱天心執中含和不下廟堂而衍四海とあり
○萬類曲成、萬類は萬物なり曲成は易繫辭傳に曲成萬物而不遺、疏に聖人隨變而應屈曲委細成就萬物而不有遺棄細小而不成也とあり
○將化、將は行なり
○大同、尙書洪範に卿士從庶民從是之謂大同とあり
○車書共道、中庸に天下

能禁符破璽、施無事於群情、設象除刑、馳不犯於比屋、故嚮者、弘仁十一年四月廿一日、施行格十卷、此乃公卿百官、奉詔脩舊史之凡要、抄新制之大綱、推民意而分規、量時宜而立範、不刊之典、遵行眇焉、仍舊之圖、蹤跡斯在、聖上不出戶而知天下、不因敎而辨物情、以爲、虞夏共有其國、刑德斯殊、秦漢不易其民、弛張非一、化俗之本、理有固然、蓋取義於隨時、匪欲期於相反、如今時歷五代、年及六旬、文質暗遷、沿革自至、詔草盈於臺閣、文案溢於縑囊、非所以法止滋章、令除煩變、即詔故右大臣贈正一位藤原朝臣良相等、令因脩舊格、綜緝新符、未及成功、歲月遷往、大納言正三位兼行皇太子傅臣藤原朝臣氏宗等、前與右大臣、共承沖旨、詳悟深規、仍與參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守臣南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨臣大江朝臣音人、從四位上守刑部卿臣菅原朝臣是善、散位從五位下臣上毛野朝臣永世、勘解由次官從五位下臣紀朝臣安雄、大外記正六位上臣南淵朝臣興世、正六位上行左少史臣大春日朝臣安永、正六位上行彈正少忠臣布瑠宿禰道永、正六位下行大

車同軌書同文とあり
〇焚符破璽、莊子胠篋篇に焚符破璽而民朴鄙とあり
〇施無事、施は原本絕に作る類史及格に據て改む文粹も同じ
〇設象、齊語に設象以爲民紀、注に設象設敎象之法於象魏也とあり
〇不犯、漢書刑法志に蓋聞有虞氏之時畫衣冠異章服以爲戮而民弗犯とあり
〇比屋、漢書王莽傳に堯舜之民比屋可封とあり
〇不刊之典、揚雄答劉歆書に是懸諸日月不刊之書也とあるに出づ刊は格及文粹删に作る
〇仍舊之圖、論語先進篇に仍舊貫如之何何必改作とあるに據れり
〇不出戶而知天下、老子四十七章に出づ
〇化俗、祕本尾本前本及格は俗化に作る
〇取義云云、莊子天運篇に三皇五帝之禮義法度其猶柤梨橘柚耶其味相反而皆可於口故禮義法度者應時而變者也とあるに據れり
〇五代、嵯峨・淳和・仁

學大屬臣山田宿禰弘宗等、上起弘仁十載之明年、下至貞觀十年之晩節、擇成規於州郡、捜故實於官曹、事與先格異者、擧而取之、理與舊制同者、推而棄之、凡格者、蓋以立意爲宗、不以能文爲本、故省其繁麗之文、增其精微之典、隨官分類、先勅後符、概皆據古之前摸、非爲今之新意、唯一部之內、事有兩存、頗涉重攜、不以爲例、勘解由使所奏新定內外官交替式所載數事、亦復准之前例、不煩取捨、臣等雖非明于温故、博於前聞、猶欲令之必行、禁之必止、賞一人而海內欣、罰一人而天下懼、謹因詔撰貞觀格十卷奏聞、若理輕作格、事足爲儀、專棄之如遺、兼取之似碎、更撰爲兩卷、同以奏上、准開元留司格、號貞觀臨時格、幷一帙十二卷、象十有二月以成歲、但前格存而如舊、後典續而增新、覽古知今、斯焉在矣、猶慙庸心所集、有違戾於宸襟、管見攸裁、無協應於叡旨、典章不能自擧、待教令而擧之、教令不能自行、待誠信而行之、斯文不墜、百代可知、謹序、是日、以從五位上菅野朝臣佐世爲次侍從、〇五月戊午朔、五日壬戌、停端午之節、〇廿六日癸未、陸奥國地大震動、流光如晝隱映、頃之、人民叫呼、伏不

明・文徳・清和天皇の五代
○六旬、弘仁十一年より貞觀十一年まで凡五十年なれど、おほよそに云へり
○沿革、舊制に仍るを沿といひ之を改むるを革と云
○因脩、脩は格及文粹並に脩に作れど循の訛なるべし
○興世、興は原本輿に作る諸本に據て改む
○舊制、制は前本谷本例に作る
○凡格者云云、以下編修の義例を説明す
○内外官交替式、貞觀の交替式なり今上下二卷の中、上卷は缺て下卷のみ存す
○溫故、論語爲政篇に出づ
○嘉藥之如遺云云、全く之を棄て、採らざれば遺漏あるやうに思はれ採用すればくだくだしきやうなりさなり
○猶懸、懸は格恐に作る
○侍教令、侍は原本待に作る祕本淀本及格に據て改む下同じ
(五月)○停端午之節、一代要記に仁明天皇皇子常康親王仁壽元年出家貞觀

能起、或屋仆壓死、或地裂埋殪、馬牛駭奔、或相昇踏、城墎倉庫、門櫓墻壁、頹落顚覆、不知其數、海口哮吼、聲似雷霆、驚濤涌潮、泝洄漲長、忽至城下、去海數十百里、浩々不辨其涯涘、原野道路、惣爲滄溟、乘船不遑、登山難及、溺死者千許、資産苗稼、殆無孑遺焉、○六月丁亥朔、十一日丁酉、月次神今食祭、遣親王公卿於神祇官奉祭、○十五日辛丑、不雨而雷、大宰府言、去月廿二日夜、新羅海賊乘艦二艘、來博多津、掠奪豐前國年貢絹綿、即時逃竄、發兵追、遂不獲賊、○十七日癸卯、遣使者於伊勢大神宮奉幣、告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐伊勢度會乃五十鈴乃河上爾坐皇大神乃廣前爾、恐美恐美毛申賜倍止申久、頃間有旱災天、百姓乃農業燒損奴倍志、皇大神乃矜賜比助賜牟爾依天、此災乎除滅牟止所念行天、禮代乃大幣帛乎、大舍人頭從五位上礒江王、主殿權助從五位下大中臣朝臣國雄乎差使天、忌部神祇少祐從六位下齋部宿禰伯江加弱肩爾太襁取掛天、持齋波利令捧持天、奉出須此狀乎、平介久聞食天、甘雨忽降之米賜比、五穀豐登之女、天下饒足之米賜比天、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾夜守日守爾幸

倍賜倍止恐美恐美毛申賜波久止申、〇廿六日壬子、勅曰、朕聞、上天不能獨理、故立君以司牧、君道無忒、則玉燭均調、時政失宜、則陰陽乖隔、遠稽帝典、遙計皇猷、重規疊矩、未有違之者、朕以菲虛、嗣守鴻業、德慚寶露、勤切宵衣、常願、令世同於東戶、龕犬得吐菽粟、而今旱雲涉旬、農民失望、班幣以遍群神、屈僧以祈三寶、雖然冥感未通、嘉應難至、朕之不德、百姓何辜、責躬寅畏、未知攸濟、其朕服御常膳等物、並宜減撤、左右馬寮秣穀、一切權絕、令左右京職、收葬道殣、掩骼埋胔、又恐囹犴之中、如有寃結、宜遣使者勤加申理、天安二年以往、調庸未進在民身者、皆從蠲除、方冀精誠感革、遍鴻霈於崇朝、穀稼豐登、欣京坻於急景、布告遐邇、俾知朕意、

十一年五月十四日紀とあり此事此にあるべきなり　〇懸死、懸は原本縣に作る前本谷本淀本及類史（百七十一）紀略に據て改む　〇涌潮、諸本潮を湖に作る恐くは非　〇沂泂漲長、泂は諸本迴に作り長は宮本に溢と云　〇城下、多賀城なり　〇數十百里、十は原本千に作る祕本尾本及類史に據て改む　〇涯涘、涘は水涯也　〇千許、許は原本計に作る類史紀略に據て改む　（六月）〇大舍人頭、頭は原本以に作る諸本に據て改む　〇伯江、伯は祕本佰に作る　〇太獵、太は原本大に作れるを改む　〇持齊、齊は原本齋に作れるを改む　〇此狀乎、乎は十二月丁酉紀の例に據て補ふ　〇壬子勅、三代格十に出づ　〇立君以司牧、左傳襄十四年に天生民而立之君使司牧之とあり、牧は原本物に作る前本谷本及格に據て改む　〇玉燭、爾雅に四時和謂之玉燭　〇乖隔、乖は原本并に作る格に據て改む　〇重規疊矩、郤正釋議に動若重規靜若疊矩とありよく一致するを云　〇寶露、拾遺記卷一に有丹丘之國獻碼碯甕以盛甘露當黃帝時碼碯甕至堯時猶存甘露在其中盈而不竭謂之寶露隨帝世之汙隆時淳則露滿時澆則露竭（節略）とあり、寶は原本垂に作る諸本及格に據て改む　〇宵衣、已に注す宵は原本霄に作る格に據て改む　〇東戶、淮南子繆稱訓に東戶季子之世道路不拾遺とあるに出づ　〇龕犬云云、淮南子覽冥訓に黃帝治天下而力牧太山稽輔之狗彘吐菽粟於路而無忿爭之心（節略）とあるを云、龕は原本龕に作る祕本尾本前本に據て改む　〇祈三寶、原本三を之に作り寶字なし三は祕本尾本に據り寶は諸本に據て改め補ふ格も三寶に作る　〇寅畏、寅は敬也、尚書無逸に嚴恭寅畏とあり、寅は前本谷本淀本及格に夤に作る意同じ　〇攸濟、攸は原本欣に作る格に據て改む　〇令左右京職、令は原本命に作る尾本及格に據て改む　〇道殣、左傳昭三年に道殣相望、注に餓死爲殣とあり、殣は原本墐に作る格に據て改む　〇掩骸埋胔、禮記月令孟春に出づ音義に露骨曰骼有肉曰胔とあり　〇囹犴、牢獄を云犴は原本行に作る格に據て改む　〇感革、革は原本應に作る祕本前本谷本及格に據て改む　〇遍鴻

○秋七月丁巳朔、二日戊午、太政大臣從一位藤原朝臣良房、大納言正三位兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗、正三位行中納言源朝臣融、中納言兼左近衞大將從三位行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經、參議從三位行左衞門督近江守源朝臣多、參議右近衞大將從三位兼行讃岐守藤原朝臣常行、參議正四位下行右衞門督兼讃岐權守源朝臣生、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守南淵朝臣年名、參議正四位下行式部大輔春澄朝臣善繩、參議正四位下行左大辨大江朝臣音人等奏言、昔堯舜以二百姓一爲レ心、禹湯以二萬方一罪レ己、隔レ代齊レ衡、於レ是可レ識、伏奉二去月廿六日詔書一、旱雲渉レ旬、農民失レ望、服御常膳、並宜二減徹一、臣等擎讀循環、不レ勝二感歎一、夫君臣合レ體、諒自二古來一、豐儉同レ分、豈唯今日、伏請、五位已上封祿亦暫減折、裨二纖塵於崇岱一、添二涓滴於谷水一、謹錄二事狀一、伏聽二天裁一、奏可、是日勅、譴二責大宰府司一曰、諸國貢調使吏領將、一時共發、不レ可二先後零疊離

霈於崇朝、鴻霈は大雨なり、崇朝は旦より朝食時迄を云、慈雨直ちに降りて遍く惠を垂れよとなり　○欣京坻於急景、京坻は穀物の收穫豐富にして丘陵の如くなるを云毛詩小雅甫田章に曾孫之庾如レ坻如レ京とあり急景は光陰の迅速なるを云近きうちに豐年を欣ばむとなり、坻は原本城に作る祕本尾本及格に據て改む

（七月）源朝臣生、前本谷本淀本生を史に作る
○以百姓爲心、老子四十九章に聖人無二常心一以二百姓心一爲レ心とあり
○禹湯云云、尙書湯誥に萬方有レ罪在二予一人一、左傳莊十一年に禹湯罪レ己其興也悖焉とあり
○齊衡、衡は原本聖に作る諸本に據て改む
○可識、識は原本議に作る祕本尾本に據て改む
○臣等、等は原本尋に作る諸本に據て改む
○谷水、水は祕本尾本谷本等は生に作る
○使吏、吏は原本史に作る祕本尾本前本に據て改む
○零疊、或は前に或は後になりて互に連絡なきを云
○離其群類、離は原本雖に作れるを改む
○餧虎口、餧は原本飢に作る諸本に據て改む
○亡失官物、亡は原本已に作る宮本伴イ本に據て

其群類、而令豐前一國、獨先進發、亦弱銆人、乘餌虎口、遂使新羅寇盜、乘隙致侵掠、非唯亡失官物、兼亦損辱國威、求之往古、未有前聞、貽於後來、當無面目、雖云使人之可責、抑亦府官之有怠、又或人言、盜賊逃去之日、海邊百姓五六人、冒死追戰、射傷二人、事若有實、寧非忠敬、而府司不申、何近掩善、又所禁之人、雖有嫌疑、緣是異邦最思仁恕、宜停拷法、深加廉問、早從放却、○四日庚申、廣瀨龍田祭如常、○五日辛酉、讃岐國捕獲海賊男二人女二人、勅、男依法行之、女特從放免、是日制、左右京百姓輸調新錢十文、倍十文、五畿内調亦同焉、○六日壬戌、夜、月犯心前星、○七日癸亥、地震、○八日甲子、大和國十市郡椋橋山河岸崩裂、高二丈、深一丈二尺、其中有鏡一、廣一尺七寸、採而獻之、夜、月犯入南斗魁中、○十日丙寅、以前筑後守從五位下清原眞人眞貞、爲採山城國岡田山銅使、判官一人、主典一人、○十三日己巳、雷雨、震武德殿前松樹、諸衛陣於殿前、○十四日庚午、風雨、是日、肥後國大風雨、飛瓦拔樹、官舍民居、顚倒者多、人畜壓死不可勝計、潮水漲溢、漂沒六郡、水退之後、搜摭官物、十失五六、

改む
○射傷、傷は原本場に作る尾本に據て改む
○忠敬、敬は欵の訛か
○近掩善、狩谷校本に近恐逅とあり
○拷法、拷は原本栲に作る尾本に據て改む
○特從放免、特は原本時に作る祕本尾本前本に據て改む
○心前星、心は廿八宿の一なり三才圖會に心三星天王位也中星曰明堂前星爲太子後星爲庶子とあり
○椋橋山、大和志に倉梯山倉梯村上方、峯名小倉とあり
○犯入南斗魁中、南斗は廿八宿の斗宿の一名なり原本犯字なく南を北に作る諸本及紀略に據て改め補ふ
○岡田山、山城國相樂郡にあり今の瓶原山なるべし
○潮水、諸本湖水に作る恐くは非
○搜摭、摭は原本漉に作る狩谷氏の說に據て改む
○延六十僧、六十の二字は總本尾本前本等に據て補ふ

焉、自海至山、其間田園數百里、陷而爲海。○十八日甲戌、延六十僧於紫宸殿、轉讀大般若經、限以三箇日。○十九日乙亥、制、典藥寮乳師藥園師等、並責解由。○廿六日壬午、納印鎰櫃置於承明門內東腋、無故自開、亦無鎖子。○廿七日癸未、加置美作國苫東苫西二郡司、職田十町。○八月丙戌朔、二日丁亥、釋奠如常。○三日戊子、明經博士等參詣內裏、論義如常。○十一日丙申、備前國獻嘉禾二莖、一莖十九穗、一莖六穗。○十五日庚子、天皇御紫宸殿、閱覽信濃國貢駒。○廿日乙巳、天皇御紫宸殿、閱覽武藏國貢駒。○廿六日辛亥、夜大風暴雨、拔樹發屋、宮城京邑損傷甚多。○廿七日壬子、從四位上行越前守源朝臣啓卒。啓者、嵯峨太上天皇之子也、母山田氏、天皇晚年納之、稍蒙寵幸、啓特所鍾愛、勑兄左大臣常朝臣子之、大臣親愛如子、器用服翫、皆以賚之、招大學生有才學者、爲師讀書、尤好文章、兼善射、有音儀、能歌、然不至淫樂、爲人謹厚、諸昆弟皆推敬之、仁壽元年、授從四位上、齊衡中拜越中守、俄而遷加賀守、累歷相摸越前守、並不之任、性崇信釋教、與姪源朝臣直、有親密之契、常相語云、相共出

○乳師、三代格四天長二年四月四日太政官符に應改乳長上爲乳師さあり乳長上は續紀養老三年六月丙子紀に見ゆ
○藥園師、職員令典藥寮に藥園師二人掌知藥性色目種採藥園諸草及教藥園生さあり園は類史八十に據て補ふ
（八月）十一日丙申、原本十三日戊戌に作る一は尾本及紀略に據り丙申は諸本及紀略に據て改む
○宮城京邑、宮は紀略に據て補ふ祕本尾本前本及奈頁本紀略には室城さあり
○母山田氏、紹運錄に母山田近子さあり
○稍蒙、稍は原本積に作る祕本尾本に據て改む
○能歌、歌は原本歎に作る尾本に據て改む

（九月）頒行內外、三代格十七太政官符に頒行貞觀格事、右中納言（位階兼官を略す）藤原朝臣基經宣奉勅宜施之內外、諸使遵行とあり
〇以從五位上、以字は祕本尾本前本及類史百七十一に據て補ふ
〇破家爲國、後漢書李通傳に破家爲國忘身奉主とあり
〇叡蕃、文選顏延年曲水公讌詩に有睟叡蕃、注に諸王者蕃也とあり
〇才非兩獻云云、兩獻は小學紺珠に漢兩獻河間獻王沛獻王とあり河間獻王德は前漢景帝の子、沛獻王は後漢光武帝の子、何れも賢王の稱あり雙河は考に後漢淸河孝王及河間孝王なりと云並に章帝の子なり
〇欽上縑之多情、欽は原本歆に作る祕本尾本前本等に據て改む、後漢書楚王英傳に永平八年詔令天下死罪皆入縑贖英遣郎中令奉黃縑白紈三十匹詣國相曰託在蕃輔過惡累積歡喜天恩奉送縑帛以贖愆罪國相以聞詔報曰楚王誦黃老之微

家入道、此意未果、病發危急、遂落髮爲沙門、未幾而卒、時年四十一、〇廿九日甲寅晦、天皇御紫宸殿、閲覽上野國貢駒、〇九月乙卯朔、日有蝕之、〇三日丁巳、天皇潔齋、奉燈如常、〇七日辛酉、新撰貞觀格十二卷、頒行內外、以從五位上行左衞門權佐兼因幡權介紀朝臣春枝、爲撿陸奥國地震使、判官一人、主典一人、〇九日癸亥、停重陽宴、以秋稼不登也、〇十日甲子、中務卿三品兼行大宰帥諱光孝天皇親王抗表、請賜男子姓言、臣聞、破家爲國、叡蕃之嘉猷、忘己利公、賢戚之茂躅、中謝臣才非兩獻、器謝雙河、荷國恩於丘山、耻身効於涓礫、今兒息漸衆、祿賜居多、爲善未聞、損公彌倍、靜而念之、悚慙无限、臣素乏高人之行、猶深報國之志、比年每聞、官倉不贍、歲用難支、雖向人而不言、常通夜而忘寐、徒欽上緤之多情、却恨短袖之難舞、唯願、削諸男之屬籍、與諸臣而同貫、罷祿賞於歲時、加絲髮於國用、夫男能自謀、女尤足悲、況亦祿留一身、公費斯淺、是以故一品葛原親王等除之、不入於改姓、臣之愚意、苟復同之、竊見、皈燕欲去、顧戀雕梁、老驂將辭、徘徊伏櫪、禽獸猶然、況於人意、既謝皇蔭之尊、何无係慕之義、

言二荷浮居之仁祠一云々何嫌何疑當レ有二悔吝一其還贖以助二伊蒲塞桑門之盛饌一とあるに據れり
○恨短袖之難舞、韓非子五蠹篇に長袖善舞多錢善買とあるに出で家貧少くして意を遂け難きを云
○留一身、留は原本田に作る諸本に據て改む
○荷復、原本荷後に作る尾本前本谷本に據て改む
○老驂、山崎校本に知雄按驂恐驥と云
○無品基貞親王、伴校本に無を三に改めしは下文三品を授くとあるに據れるなるへし然るに親王は嘉祥二年十二月丁亥入道せられ此時無品となられしなるべしされば此に無品とあるは誤にはあらす
○(注)正子、祕本尾本前本には大書す
○三皇子、恒貞親王・恒統親王・基貞親王
○授三品、承和十一年正月庚寅紀に見ゆ
○拜上總太守、同十三年正月乙卯紀に見ゆ
○請入道許之、嘉祥二年十二月丁亥なり
○發病而薨、上文に病危篤上表云々とあるに合は

仍以二宗室朝臣一欲レ爲二其姓一、伏望、天慈曲垂二哀許一、不レ勝二悾款之至一、謹拜表以聞、不レ許、○十一日乙丑、遣二使伊勢大神宮一奉幣、○十四日戊辰、新鑄二銅印一面一、賜二造兵司一、○十五日己巳、以二外從五位下行越前介志紀宿禰氏經一爲二越中介一、散位從五位下紀朝臣春常爲二大宰少貳一、○十六日庚午、外從五位下大判事兼行明法博士櫻井田部連貞雄不麻呂、改二名貞相一、○廿一日乙亥、無品基貞親王薨、帝不レ視レ事三日、不レ任二緣葬諸司一、以二固辭一也、親王者、淳和太上天皇之第四子也、母嵯峨太上天皇皇女諱、正子淳和天皇納レ之、生二三皇子一、立爲二皇后一、親王神姿淸秀、誠孝懇至、承和十一年授二三品一、尋拜二上總太守一、後病危篤、上レ表請二入道一、許レ之、因而剃頭、受二大乘戒一、發レ病而薨、○廿五日己卯、地震、○廿八日壬午、大和國正六位上朝日豐明姬拔田神、朝日豐明姬拔田子神、並授二從五位下一、○冬十月乙酉朔、天皇不レ御二紫宸殿一、賜二飮侍臣於仗下一、賜レ祿各有レ差、○六日庚寅、雷雨、○七日辛卯、太政官處分、大和、和泉、攝津等國四度使、付二目已上一人一、○十三日丁酉、詔曰、羲農異レ代、未レ隔二於憂勞一、堯舜殊レ時、猶均二於愛育一、豈唯地震二周日一、姬文於レ是

責躬、旱流殷年、湯帝以之罪己、朕以寡昧、欽若鴻圖、修德以奉靈心、莅政而從民望、思使率土之內、同保福於遂生、編戶之間、共銷災於非命、而惠化罔孚、至誠不感、上玄降譴、厚載虧方、如聞、陸奧國境、地震尤甚、或海水暴溢而爲患、或城宇頻壓而致殃、百姓何辜、罹斯禍毒、憮然媿懼、責深在予、今遣使者、就布恩煦、使與國司、不論民夷、勤自臨撫、旣死者盡加收殯、其存者詳崇賑恤、其被害太甚者、勿輸租調、鰥寡孤獨、窮不能自立者、在所斟量、厚宜支濟、務盡矜恤之旨、俾若朕親覩焉、○廿日甲辰、以外從五位下行左大史菅野朝臣良松爲加賀介、○廿三日丁未、延六十僧於紫宸殿、轉讀大般若經、限三日訖、是日勅曰、妖不自作、其來有由、靈譴不虛、必應秕政、如聞、肥後國迅雨成暴、坎德爲災、田園以之淹傷、里落由其蕩盡、夫一物失所、思切納隍、千里分憂、寄在牧宰、疑是皇猷猶鬱、吏化乖宜、方失叶心、致此變異歟、昔周郊偃苗、感罪己而弭患、漢朝壞室、據修德攘災、前事不忘、取鑒在此、宜施以德政、救彼凋殘、令大宰府其被災害尤甚者、以遠年稻穀四千斛周給之、勉加存恤、勿令失職、又壞垣毀屋之下、所

ナ受大乘戒と發病との間に脫文あるべし

○朝日豐明姬拔田神朝日豐明姬拔田子神、並に式外、神祇志に今並在山邊郡佐保莊村とと見ゆ朝日豐明姬拔田子神の九字諸本及類史十六に據て補ふ

（十月）丁酉詔、類史百七十一に出づ

○羲農異代云云、伏羲神農は代を異にして天下に王たれども民の爲に憂勞せし事は同じくして隔りなきを云義は原本義に作る類史に據て改む

○地震周日云云、韓詩外傳三に周文王之時莅國八年夏六月寢疾五日而地動有司曰臣聞地之動爲人主也今者君主寢疾五日而地動群臣皆恐請移之文王曰不可夫天之道見妖是以罰有罪也我必有罪故此罰我也昌也請改行重善移之（節略）とあり周は原本同に作る諸本及類史に據て改む

○旱流殷年云云、淮南子主術訓に湯之時七年旱以身禱於桑林之際而四海之雲湊千里之雨至とあり

○欽若、欽は敬也若は順也尚書堯典に出づ

有殘屍亂骸、早加二收埋一、不レ合二曝露一、○廿六日庚戌、太政官論奏曰、刑部省斷レ罪文云、貞觀八年隱岐國浪人安曇福雄密告、前守正六位上越智宿禰貞厚、與二新羅人一同謀反逆、遣レ使推レ之、福雄所レ告事是誣也、至レ是法官覆奏、福雄應二反坐斬一、但貞厚知二部內有二殺レ人者一不二擧訊一、仍應二官當一者、詔、斬罪宜下減二一等一處中之遠流上、自餘論レ之如レ法、○廿九日癸丑晦、神祇大祐正六位上忌部宿禰高善改二忌部一爲二齋部一、其先、出レ自二高御魂命一也、○十一月甲寅朔、三日丙辰、雷電風雨、○七日庚申、春日平野祭如レ常、○八日辛酉、梅宮祭如レ常、○十一日甲子、以二散位從五位下藤原朝臣有蔭一爲二伊勢權守一、從五位上藤原朝臣有年爲二播磨守一、○十二日乙丑、園韓神祭如レ常、○十三日丙寅、鎭魂祭如レ常、隱岐國言、雌雞化爲レ雄、○十四日丁卯、新嘗祭、遣二親王公卿於神嘉殿一奉祭、所司供奉如レ常、○十五日戊辰、天皇御二紫宸殿一、賜二宴群臣一、大歌五節舞如レ常、賜レ祿各有レ差、○十七日庚午、勅停二因幡國朝集雜掌一人一、免二稅帳雜掌調庸一、○十九日壬申、授二武藏國從四位下氷川神正四位下、相摸國從四位下寒川神從四位上、從五位下有鹿神從五位

○保福於遂生、天壽を終ふる福を保持するを云
○編戸之間、漢書高帝紀に諸將故與レ帝爲二編戸民一、とあり人民を云
○銷災於非命、非命に死する災を銷滅せしむるを云
○上玄降譴、上玄は天也
○厚載虧レ方、厚載は地也易坤卦彖傳に坤厚載レ物とあるに出づ方は道なり
○類隤、類は類史頹に作る
○媿懼、媿は類史愧に作る意同じ
○恩煦、煦は熱也恩也
○其存者、存は諸本在に作る
○孤獨、獨は祕本前本谷本及類史になし
○支濟、支は原本與に作る諸本及類史に據て改む
○坎德爲災、坎德は水なり易說卦傳に坎者水也とあり水害を云
○一物失所云云、文選東都賦に人或不レ得二其所一、若已納二之於隍一とあるに據れり、隍は原本皇に作る諸本に據て改む
○分憂、晉書武帝紀に黃初五年天子南巡帝(武帝)留鎭、許昌加二給事中一、錄二

尙書事、帝固辭天子曰吾於庶事以夜繼晝無須臾寧息此非以爲榮乃分憂耳（節略）とあるに出づ
○方失吡心、心は祕本尾本に據て補ふ吡は訛の訛なるべし
○周郊偃苗云云、周成王管叔等の流言に迷ひ周公旦を疑ひしに天大に雷電し風吹て禾盡く偃す成王恐れて金縢の書を啓き見て周公の誠忠を知り己を責めしに天乃ち雨ふりて風を反し禾盡く起きたりと云尙書金縢に詳なり
○漢朝壞室云云、詳ならず私記に後漢獻帝初平四年三月長安宣平城門外屋自壞と云
○合曝露、合は原本令に作る諸本に據て改む
○貞厚、厚は祕本前本谷本等原に作る
○應反坐斬、反は原本及に作る諸本及類史八十七に據て改む
○不擧訊、訊は原本誶に作る類史に據て改む祕本尾本前本刻に作る
○官當、名例律に凡犯私罪以官當徒者五位以上以一官當徒二年八

上、○廿一日甲戌、安藝國旱、詔免當年田租五分、○廿三日丙子、大原野祭如常、○十二月甲申朔、石見國從五位下勳七等伊甘神、大飯神、國分寺霹靂神、並授從五位上、是日、東京火、○二日乙酉、制、加增典藥寮五位官人一員馬料、立爲恒例、山城國旱、免當年田租五分、省長門國史生一員、置弩師一員、○四日丁亥、近江國勢多橋火、○五日戊子、授美濃國從五位上伊奈波神正五位下、正六位上長孫神從五位下、先是大宰府言上、徃者新羅海賊侵掠之日、差遣統領選士等、擬令追討、人皆懦弱、憚不肯行、於是調發俘囚、御以膽略、特張意氣、一合當千、今大鳥示其恠異、龜筮告以兵寇、鴻臚館中嶋館幷津厨等、離居別處、无備禦侮、若有非常、難以應猝、夷俘分居諸國、常事遊獵、徒免課役、多費官粮、請配置要所、以備不虞、分爲二番、番別百人、毎月相替、交相駈役、其粮料者、諸國所擧夷俘料利稻之內、毎國令運輸、以給其用、至是勅曰、俘夷之性、本異平民、制御之方、何用恒典、若忽離舊居、新移他土、衣食无續、心事反常、則野心易驚、遂致猜變、宜簡監典有謀略者、令其勾當、幷統領選士幹事者、以爲

位以上以二一官一當二徒一年一云々とあり法曹至要抄に案レ之犯二重罪一之身有二職位一之時隨二罪法之所一レ指辭二退其職位一者也卽其辭退之差有レ四一者官當・二者免所居官・三者免官・四者除名と云り、當は原本免に作る諸本及類史に據て改む

○改忌部爲齋部、改忌部の三字は諸本に據て補ふ

(十一月)春日平野祭、平野の二字は紀略に據て補ふ秘本尾本前本等に野字のみあるは平字の脫したるべし

○從五位上(有年)、上は原本下に作る諸本及正月乙丑紀に據て改む

○朝集雜掌、雜は上文三月乙丑紀に據て補ふ

○氷川神、元年正月甲申紀に出づ

○寒川神、承和十三年九月丙午紀に出づ

○從五位下有鹿神、右は原本四に作る類史十六に據て改む有鹿神は神名式に相摸國高座郡有鹿神社、海老名村河原口

(十二月)伊甘神、同式石見國那賀郡伊甘神社、下府村

其長、勉加綏誘、能練武衛、設有諸國粮運闕如、卽須府司廻撥支濟、又以百人爲一番、居業難給、轉餉多煩、宜五十人爲一番、○七日庚寅、從四位下行伊豫權守當麻眞人淸雄卒、淸雄者、左京人也、祖從五位下吉嶋、父正六位上治田麻呂、淸雄之姊爲嵯峨天皇之幸姬、生源朝臣潔姬、全姬二皇女、潔姬、是太政大臣忠仁公之室也、生太皇太后、淸雄、承和四年、爲織部佑、尋歷安藝掾諸陵助、仁壽三年、授從五位下、天安之初、拜圖書頭、二歲遷爲諸陵頭、同年爲圖書頭、貞觀元年、加從五位上、爲伊賀守、六年進正五位下、八年至從四位下、爲伊豫權守、卒時年七十六、○八日辛卯、授陸奧國正五位上勳九等苅田嶺神從四位下、丹波國正六位上物部簀掃神從五位下、以右大辨從四位上兼行勘解由長官美濃權守藤原朝臣冬緒拜參議、爲大宰大貳、從四位上行大宰大貳茂世王爲宮內卿、右京人無位岡屋公貞介、岡屋公貞幹賜姓八多朝臣、散位正六位上弘野宿禰河繼、自修解文言、佐比大路南極橋、承要路極、在曲流間、體勢脆小、乘踏無力、四方負重之駑、急傾鞍於水上、九原送終之輩、更留柩於

○大飯神、同式同郡大飯彦命神社、下松山村太田
○國分寺霹靂神、同式同國邇摩郡國分寺霹靂神社
○馬料、式部式に馬料典藥寮十五人從五位官一人とあり
○置弩師、三代格五に見え十一月廿九日の太政官符とす
○伊奈波神、國內神名記に厚見郡正一位伊奈波大神とあり今岐阜稻葉山麓に移祀る、伊奈波は原本伊布岐に作る祕本及類史十六に據て改む
○長採神、式外　國內神名記に多藝郡從四位上長彦明神とあり
○大宰府言上云云、三代格十八に太政官符應レ配二置夷俘一備二警急一事とあり
○御以膽略、膽略ある人を以て俘囚を統御せしむるを云格には衛以二征略一とし特張意氣を意氣激怒に作る
○一合當千、原本合を念に千を于に作る尾本に據て改む格には合を以に作る
○中嶋舘、此三字は祕本前本谷本に據て補ふ
○離居、離は原本雖に作

橋頭、河繼寒門、叢品、當里、微翁、不レ勝二感傷一、欲レ加二斤斸一、如レ非レ降二公裁一、何敢施二家計一、望請、特蒙二恩許一、以レ果二素懷一、但河繼眼前隨レ力修理、至二身後事一、聊有二資儲一、便付二佐比寺一、永代不レ墜レ功、庶令二人物一、但得レ行レ遞之便、存亡同免二陷沒之苦一、太政官處分、依レ請焉、○九日壬辰、能登國羽咋、能登、鳳至、珠洲四箇郡新附百姓四百九十八人、優二復一年一、○十一日甲午、月次神今食祭、天皇不レ御二神嘉殿一、遣二親王公卿一行レ事、○十三日丙申、以二從五位上守右近衛少將兼行阿波介坂上大宿禰瀧守一爲二大宰少貳一、阿波介如レ故、從五位上守左近衛權少將兼行伊豫介文屋朝臣卷雄爲二少將一、伊豫介如レ故、從四位下行左近衛少將兼備前權守藤原朝臣良尙爲二右近衛權中將一、備前權守如レ故、是夜、地震、○十四日丁酉、遣二使者於伊勢大神宮一奉幣、告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃河上乃下都磐根爾大宮柱廣敷立、高天乃原爾千木高知天、稱言竟奉留天照坐皇大神乃廣前爾、恐美恐美毛申賜倍止申久、去六月以來、大宰府度々言上多良久、新羅賊舟二艘筑前國那珂郡乃荒津爾到來天、豐前國乃貢調船乃絹綿乎掠奪天逃退

る格に據て改む
○難以應猝、格には難を誰に猝を響に作る
○配置要所、原本要所を處分に作り諸本には處の一字ありて分字なし今格に據て改む
○番別百人、原本番別を別當に作る格に據て改む
○夾俘料、夾は祕本尾本前本等に據て補ふ
○用恒典、典は諸本に據て補ふ
○離舊居、離は原本雖に作る格に據て改む
○致猜變、猜は原本精に作る尾本前本谷本等及格に據て改む
○幹事者、格に堪能者とあり
○伊豫權守當麻眞人、原本守を介に麻を摩に作る諸本に據て改む
○姉、祕本前本谷本等は姊に作る
○太皇太后、明子
○織部佑、佑は原本佐に作る祕本に據て改む
○二歳、歳は年の誤なるべし
○正五位上勳九等荊田嶺神、五は原本六に作る類史十六に據て改む此神は承和十一年八月丁酉紀に

多利、又聽樓兵庫等上爾、依有大鳥之怪天卜求爾、隣國乃兵革之事可在止卜申利、又肥後國爾地震風水乃灾有天、舍宅悉仆顚利、人民多流亡多利、如此之灾比、古來未聞止、故老等毛申止言上多利、然間爾、陸奥國又異常奈留地震之灾言上多利、自餘國々毛、又頗有件灾止言上多利、傳聞、彼新羅人波、我日本國止久岐世時與利相敵比來多利、而今入來境内天、奪取調物利天、無懼沮之氣、量其意況爾、兵寇之萠自此而生加、我朝久无軍旅久、專忘警備多利、兵亂之事尤可愼恐、然我日本朝波、所謂神明之國奈利、神明之助護利賜波、何乃兵寇加可近來岐、況掛毛畏岐皇大神波、我朝乃大祖止御座天、食國乃天下乎照賜比護賜利、然則他國異類乃加侮致亂倍岐事乎、何曾聞食天、驚賜比拒却介賜波須在年、故是以、王從五位下弘道王、中臣雅樂少允從六位上大中臣朝臣冬名等乎差使天、禮代乃大幣帛遠、忌部神祇少祐從六位下齋部宿禰伯江加弱肩爾太襁取懸天、持齋令捧持天奉出給布、此狀乎平介久聞食天、假令時世乃禍亂止之天、上件寇賊之事在倍岐物奈利止毛、掛毛畏岐皇大神國內乃諸神達乎毛唱導岐賜比天、未發向之前爾、沮拒

出づ
○物部養揺碑、神名式丹波國何鹿郡須波伎部神社とあり今小畑村物部にあり
○冬緒、原本緒を雄に作る尾本前本谷本に據て改む
○八多朝臣、錄右京皇別に武內宿禰命之後也とあり
○佐比大路南極橋、拾芥抄中末西京の地名に細井大路(西洞院)と見ゆる是なり橋は佐比橋なり桂河に架く
○九原送終之輩、佐比里は當時百姓墳墓の地たり故にかく云り十三年閏八月辛未紀を參看すべし
○寒門叢品、寒門は寒族に同じ山田以文は叢恐叢之訛と云
○斤斸、斤は斧、斸は斫なり
○何敢施家計、自己一人の計畫を恣に實施せむやとなり
○至身後事、至は原本主に作る祕本尾本に據て改む
○佐比寺、山城志に廢佐比寺紀伊郡吉祥院村有地名佐比とあり廢寺と

排却賜倍、若賊謀已熟天、兵船必來倍久在波、境內爾入賜須之天、逐還漂沒女賜比天、我朝乃神國止畏憚禮來禮留故實乎澆多之失比賜布奈、自此之外爾、假令止之天、夷俘乃逆謀叛亂之事、中國乃刀兵賊難之事、又水旱風雨之事、疫癘飢饉之事爾至萬天爾、國家大禍、百姓乃深憂止毛可在良牟乎波、皆悉未然之外爾拂却銷滅之賜天、天下无躁驚久、國內平安爾鎭護利救助賜比、皇御孫命乃御體乎、常磐堅磐爾、與天地日月共爾、夜護晝護爾護幸倍矜奉給倍止、恐美恐美毛申賜久止申、○十七日庚子、去夏新羅海賊掠奪貢綿、又有大鳥集大宰府廳事幷門樓兵庫上、神祇官陰陽寮言、當有隣境兵寇、肥後國風水、陸奧地震、損傷廨舍、沒溺黎元、是日勅、命五畿七道諸國、班幣境內諸神、豫防後害、○十九日壬寅、始修佛名懺悔之事、○廿日癸卯、分遣公卿侍從於諸山陵墓、奉荷前幣、○廿二日乙巳、置出羽國國掌二員、○廿三日丙午、地震、○廿五日戊申、授陸奧國正五位上勳九等苅田嶺神從四位下、上野國正五位下赤城神、伊賀保神、並正五位上、從五位上甲波宿禰神、近江國從五位上新川神、並正五位下、美濃國正六位上

○なる
○但得行適之便、但は俱の訛なるべし行適は往來に同じ
○存亡云云、存は上文に四方貢レ重之驚云々とあるをいひ亡は留二柩於橋頭一とあるを云生者と死者となり
○詔旨止、止は祕本尾本に據て補ふ
○稱言、原本彌定に作る稱は祕本に據り言は內イ本に據て改む
○言上多良久、多は原本須に作る諸本に據て改む
○那珂郡、珂は原本河に作る紀略に據て改む
○荒津、福岡市の西北部にて今荒戸と云博多の埠頭なり
○恠、巣神紀・神功紀に恠なシルマシと訓めり驗欲の義かと云
○故老等毛、等は下文石淸水告文に據て補ふ
○世時與利、與は諸本多に作る
○相敵比、比は原本美に作る下文に據て改む
○意況、況は近況景況の況の如し
○(不明)警備、忘は下文に據て補ふ

金神從五位下」。勅令三五畿七道諸國一限以二三日一、轉二讀金剛般若經一、謝二地震風水之灾一、厭中隣兵窺レ隙之寇上焉、○廿八日辛亥、遣二從五位上守右近衛少將兼行大宰權少貳坂上大宿禰瀧守於大宰府一、鎭二護警固一、勅曰、鎭西者是朕之外朝也、千里分レ符、一方寄レ重、況復隣國接レ壤、非常叵レ期、今聞、大鳥示レ恠、龜筮告レ寇、機急之備、豈令二暫輟一哉、宜レ令三瀧守一勾二當警固之事上、是日、瀧守奏言、所下以置二選士一設中甲冑上者、本爲下備二警急一護中不虞上也、謹撿、博多是隣國輻輳之津、警固武衛之要、而埆與二鴻臚一相去二驛、若兵出二不意一、倉卒難レ備、請移二置統領一人、選士四十人、甲冑四十具於鴻臚一、又謹撿、承前選士百人、毎月番上、今以二尋常之員一、備二不意之禦一、恐機急之事、實難二支濟一、請例番之外、更加二他番一、統領二人、選士百人、詔並從レ之、○廿九日壬子、遣二使者於石清水神社一、奉レ幣、告文曰、天皇我詔旨爾坐、掛畏岐石清水乃皇大神乃廣前爾、恐美恐美毛申給止申止、申久、去六月以來、大宰府度々言上良久、新羅賊舟二艘、筑前國那珂郡乃荒津爾到來天、豐前國貢調船乃絹綿乎掠奪天逃退太利、又廳樓兵庫等上爾、依レ有二大鳥之恠一天卜求爾、隣國乃兵革之

事可在止卜申利、又肥後國爾地震風水乃灾在天、舍宅悉仆顚(クツカヘ)利、人民多流亡(ウセ)太利、如此之灾比古來未聞止、故老等毛申止言上太利、然間爾陸奧國又異常奈留地震之灾言上太利、自餘國々毛又頗有件灾止言上多利、傳聞、彼新羅人波、我日本朝止、久岐世時與利、相敵比來多利、而今入來境內天、奪取調物利、无懼沮之氣、量其意況爾、兵寇之萠、自此而生(オコル)加、我朝久無軍旅天、專忘警備多利、兵亂之事尤可愼恐、然我日本朝波、所謂神明之國奈利、神明之護賜波、何乃兵寇加可近來岐、況(ヤ)掛毛畏岐皇大神波、我朝乃大祖止御座天、食國乃天下乎護賜比助賜布、然則他國異類乃加侮致亂倍岐事乎、何聞食天、警賜比拒却介賜須在牟、故是以、從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄乎差使天、禮代乃大幣帛乎令捧持天、奉出須此狀乎、平介久聞食天、假令時世乃禍亂止之天、上件寇賊之事在倍岐物那利止毛、掛畏岐大神、國內乃諸神太知乎唱導(イザナヒ)岐給比天、未發向(イマダイデタヽザル)之前爾、沮拒却賜倍、若賊謀已熟天、兵船必來倍久在波、境內爾入給須之天、逐還(オヒカヘシ)漂沒(オボレシ)米給比、我朝乃神國止畏憚禮來禮留故實乎、澆(ミダシ)太之失比賜不奈、自此外爾、假令止之天夷俘乃逆謀叛亂之事、中

○神明之國、神功紀攝政前紀(紀上一七七頁)に吾聞東有神國謂日本とさ見ゆ
○警賜、警は祕本谷本淀本驚に作る
○王從五位下、王は祕本尾本前本等に據て補ふ
○中臣雅樂少允、中臣の二字は諸本に據て補ふ
○從六位上(冬名)、六は下文七に作る
○伯江、狩谷氏は伯恐佰と云
○持齋、齋は原本齎に作る狩谷校本所引一本に據て改む
○禍亂止之天、之天は原本天之に作る祕本尾本前本等に據て改む
○唱導岐、導は原本道に作る尾本前本谷本等に據て改む
○逐還、逐は原本遂に作る尾本前本谷本等に據て改む狩谷氏は逐恐非卷十七奉宗像社宣命作遂と云り
○畏憚禮來禮留、禮來の二字は諸本に據て補ふ
○中國、國は原本間に作る下文に據て改む
○刀兵賊難、刀も下文に據て補ふ

○疫癘、疫は原本疾に作る同じく下文に據て改む
○躁驚久、久は原本天に作る下文に據て改む
○堅磐爾與天地、原本爾字なく與を小字に作る祕本尾本前本等に據て改め補ふ
○浸溺、溺は尾本前本谷本等に據て補ふ
○懺悔之事、之事は原本如常に作る祕本前本谷本に據て改む
○授陸奧國云云、以下從四位下に至る十九字已に八日辛卯紀に出づ
○赤城神、承和六年六月壬申紀・九年六月丁亥紀に出づ
○伊賀保神、同上
○甲波宿禰神、同上
○新川神、神名式近江國野洲郡上新川神社あり今野洲町にあり
○金神、式外、國內神名記に厚見郡正三位金大神とあり今稻葉郡加納町にあり
○朕之外朝、所謂遠の朝廷なり
○勾當警固之事、諸本警上に緣字あり山崎氏は緣下當有海字云云
○瀧守奏言、三代格十八

國乃刀兵賊難之事、又水旱風雨之事、疫癘飢饉之事爾至萬天爾、國家乃大禍、百姓乃深憂止毛可在良牟乎波、皆悉未然之外爾拂却銷滅賜天、天下無躁驚久、國內平安爾鎭護利救助賜比、皇御孫命乃御體乎、常磐堅磐爾與天地日月共爾、夜護晝護爾、護幸倍矜奉給倍止、恐美恐美毛申賜久止申、○卅日癸丑、大祓於朱雀門前、幷大儺如常、

に太政官符應ニ例番加ニ役徳番外統領二人選士百人ニ事また同官符應ニ統領一人選士卅人甲冑卅具遷ニ置鴻臚館ニ事と見ゆ

○統領、領は原本鎮に作る尾本に據て改む

○申給止申止、申止の二字は衍なるべし

○賊舟、舟は原本船に作る諸本及上文大神宮告文に據て改む

○那珂郡、珂は原本河に作る尾本前本谷本等に據て改む

○陸奥國、國は上文に據て補ふ

○自餘國々毛、々は諸本及上文に據て補ふ

○軍旅天、天は神宮告文には久に作る

○警賜比、警は祕本驚に作る

○禍亂止之天、之天は原本天之に作る諸本に據て改む

○已熟天、熟は原本就に作る祕本尾本前本等及上文に據て改む

○入賜須之天、賜は原本給に作る祕本前本淀本及上文に據て改む　○逐還、逐は原本遂に作る前本及上文に據て改む　○漂沒來賜比、賜は原本給に作る尾本前本谷本等及上文に據て改む　○畏憚禮、禮は諸本に據て補ふ　○夷俘乃逆謀、諸本乃下に來禮留の三字あり　○百姓、百は原本萬に作る尾本及上文に據て改む　○書護、護は原本守に作る諸本及上文に據て改む　○卷第十六、原本此下に終字あり諸本に據て削る

日本三代實錄卷第十六

日本三代實錄卷第十七

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

起貞觀十二年正月盡三月

十二年(庚寅)春正月甲寅朔、天皇不受朝賀、宴群臣於紫宸殿、賜被、七曜曆、藏氷樣、腹赤魚等、所司付內侍奏、是日以從四位上源朝臣本有、並爲次侍從、○二日乙卯、所司獻剛卯杖、天皇不御紫宸殿、付內侍奏、○七日庚申、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、奉引青馬、奏女樂、並如常儀、宴竟賜祿、各有差、○八日辛酉、始講最勝王經於大極殿、以元興寺僧三論宗傳燈大法師位圓宗爲講師、○十一日甲子、授肥前國正六位上甘南備神從五位下、○十三日丙寅、於紫宸殿前、拜大臣以下參議以上、天皇御簾中聽事、策命曰、天皇我詔旨良萬止勅命乎、親王諸王諸臣百官人等、天下公民、衆聞食止宣、比年乃間、國家毛弊衰太禮波、公費在倍岐政波、行給波之止所念止毛、食國之法止定行給部留法隨以、先之先立止、正三位藤原氏宗朝臣波、

○衛、原本衛を將に作る尾本谷本淀本に據て改む

【貞觀十二年】十二年春正月、原本年下に庚寅の二字あり諸本欄外頭注さす故に削る

○宴群臣於紫宸殿賜被、原本宴下に賜字ありて賜被の二字なし諸本及類史(七十二)紀略に據て删補す

○本有、此下に脫文あるべし

○甘南備神、式外、神祇志に今在佐嘉郡春日村甘南備峯下とあり今佐賀郡春日村

○衰太禮波、波は祕本閣本尾本に據て補ふ

○政波行給波之止、原本政波の二字なく波之を倍之に作る諸本に據て改め補ふ

○法隨以、以は爾の誤か

○先之先立止、十四年八月癸亥紀策命に先立先立止さあり之は立の訛か

○上賜治賜、治は原本任に作る諸本に據て改む
○第止之天奈毛、十四年八月策命には可奉岐次爾毛在爾依天とあり第は次第順序として天は原本毛の下にあり諸本に據て改め移す
○大納言官、官は上下の例に據て補ふ
○是日勅、三代格十八に太政官符應宛冑弁手纒各二百具事と見ゆ
○手纒、抄衞藝部射藝具に射韝說文云韝(和名多末岐一云小手也)射臂沓也とあり古事記神代卷にも見ゆ手は原本平に作る諸本に據て改む
○論義、義は類史百七十七に議に作る
○戊辰勅、三代格十八に太政官符として載す
○開閤門、閤は類史百七十二になし
○喚文人、原本喚下に於字あり諸本及類史七十二に據て削る
○鐵官、後漢書百官志本注に凡郡縣出鐵多者置鐵官主鼓鑄とあり
○圜法、錢を云漢書食貨志に見ゆ已に注す
○嫌貨之類改、貨の上下

御代御代爾公務乎、日夜止不云勤勞奉仕爾依天奈毛、右大臣宮爾上賜治賜布、又宣久、繼々奉仕部岐第止之天奈毛、正三位源融朝臣、從三位藤原基經朝臣乎大納言官爾、從三位源多朝臣、從三位藤原常行朝臣乎中納言官爾、正四位下源朝臣勤、正四位下在原朝臣行平、正四位下藤原朝臣良世乎參議爾任賜久止勅布天皇我大命乎、衆聞食止宣。是日勅、充壹岐嶋冑弁手纒各二百具。彼嶋元有甲無冑、大宰府依嶋解請充、從之。○十四日丁卯、大極殿齋講竟、僧綱已下奉參內裏、論義如常、施賜御被。○十五日戊辰、勅命大宰府、遷置甲冑百十具於鴻臚。○十六日己巳、地震。踏歌之節、天皇不御紫宸殿、賜宴群臣、諸仗案列、開閤門、宮人踏歌、皆如常儀、日晚賜祿、各有差。○十七日庚午、勅公卿、於建禮門前行大射之禮。○十八日辛未、天皇御射殿、覽四府賭射。○廿一日甲戌、內宴於近臣、喚文人賦詩、內教坊奏女樂、賜祿各有差。○廿五日戊寅、詔曰、夫古先哲王、所以立鐵官、設圜法者、以其能權斂散通有無、遠近同施、公私共利也、但始終難一、興廢有時、非因變通、何激風化、是以輕重不定、小大无常、沿世而

恐くは一字を脫す
○交貿、貿は原本貨に作る祕本閣本谷本等に據て改む
○杖頭懸而乏用、晉書阮脩傳に善二淸言一常步行以二百錢一挂二杖頭一至二酒店一便獨酣暢とあり
○既非泉流之喩、漢書食貨志に貨寶二於金一利二於刀一流二於泉一布二於布一束二於帛一とあり
○竿計之煩、計は原本許に作る祕本閣本尾本に據て改む
○變舊色於靑蚨云云、靑蚨は錢を云舊錢を變改して新錢を發行し民の耳目を新にせむとなり
○母子相隨、重き新錢を母といひ輕き舊錢を子と云並に通用せしめむとなり
○行左中辨(家宗)、行は祕本尾本前本に據て補ふ
○右中辨源朝臣直、以下從五位上守に至る十六字は諸本に據て補ふ但し閣本には守字なし
○令範、令は原本今に作る十一年二月甲辰紀に據て改む

分レ形、適レ時而異レ稱、朕冀二政令之簡要、嫌二貨之頻改、歲序雖レ積、錢文不レ新、今聞、流弊尤甚、交貿多レ妨、囊裏貯而難レ資、杖頭懸而乏レ用、既非二泉流之喩、還作二竿計之煩、宜下變二舊色於靑蚨、驚中新聽於黔首上、文曰、貞觀永寶、一以當二舊之十、母子相隨、並共通用、庶俾二下民之得レ宜、將レ招二上天之冥祐一、授二正五位下行主殿頭當麻眞人鴨繼從四位下、散位正六位上小野朝臣春風從五位下一、以二從四位上行左中辨兼皇太后宮亮藤原朝臣家宗一爲二右大辨、正五位下守右中辨源朝臣直爲二左中辨、從五位上守左少辨藤原朝臣良近爲二右中辨、從五位上守大藏大輔橘朝臣三夏爲二左少辨、散位從四位下源朝臣兼善爲二侍從、彈正少弼從五位下高階眞人令範爲二兵部少輔、從五位上守治部大輔橘朝臣信蔭爲二大藏大輔、從五位下行播磨介南淵朝臣良棟爲二少輔、參議正四位下行左大辨大江朝臣音人爲二勘解由長官、左大辨如レ故、散位從四位下淸原眞人秋雄爲二大和權守、外從五位下行大和權介和氣朝臣時雄爲レ介、大炊頭從五位下上毛野朝臣安守爲二伊賀守、散位從五位下淸原眞人惟岳爲二遠江守、從五位下伴

○源朝臣有、宮本能有に作るは非なり能有は下文に見ゆ
○源朝臣能有、能は諸本に據て補ふ
○爲陸奥介、爲は祕本閣本尾本に據て補ふ
○問道、問は原本門に作る諸本に據て改む
○從四位上朝右王、上は原本下に作る八年正月甲申紀に據て改む十一年正

宿禰安雄爲駿河介、淡路守外從五位下善道朝臣根莚爲伊豆守、散位從五位下清原眞人長統爲甲斐守、從五位上源朝臣有爲相摸權守、從五位下藤原朝臣柄範爲武藏權介、從五位下菅野朝臣宗範爲安房守、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫伊豫守南淵朝臣年名爲近江守、民部卿春宮大夫如故、從四位上守大藏卿源朝臣能有爲美濃權守、大藏卿如故、刑部少輔從五位下藤原朝臣是行爲介、從四位下行侍從興基王爲信濃權守、從五位上行大藏少輔滋野朝臣善根爲守、散位從五位上小野朝臣春枝爲陸奥介、從四位上源朝臣本有爲越前權守、從五位上行越前權守清瀧朝臣藤根爲正守、散位從五位上大原眞人眞宗爲介、從五位上行大學博士菅野朝臣佐世爲權介、博士如故、散位從五位上朝野朝臣眞吉爲加賀守、侍從從五位下藤原朝臣弘經爲權守、散位從五位下高階眞人菅根爲介、外從五位下和藥宿禰弟歲爲丹後介、從五位下都宿禰御酉爲因幡介、從五位下行大內記小野朝臣問道爲播磨介、散位從四位上朝右王爲美作守、外從五位下行侍醫坂上宿禰

月辛未紀に從四位上朝右王爲㆓美作守㆒とありて此に重出するは事故ありて解任し更に任ぜられしなるべし
○貞野、貞は宮本林一本眞に作る私記にも或眞歟とあり

○兵部少輔從五位下（忠方）、原本少を大に下を上に作る大は十一年正月辛未紀に據り下は祕本閣本に據て改む
○土左權掾、左は原本佐に作る諸本に據て改む下同じ
○丹波直嗣茂、直は原本眞人に作り嗣を副に作る十一年正月乙丑紀・十四年八月己亥紀に據て改む
○從五位上（水谷）、上は原本下に作る諸本及上文

貞野爲㆓權介㆒、侍醫如㆑故、從四位上行兵部大輔藤原朝臣仲統爲㆓備前守㆒、兵部大輔如㆑故、散位從四位上源朝臣效爲㆓權守㆒、左近衞中將從四位下源朝臣舒爲㆓備中權守㆒、左近衞中將如㆑故、外從五位下行加賀介菅野朝臣良松爲㆑介、散位從五位下安倍朝臣宗行爲㆓備後守㆒、從五位下行內匠頭兼備後權介藤原朝臣維範爲㆑介、內匠頭如㆑故、春宮亮從五位下藤原朝臣門宗爲㆓權介㆒、春宮亮如㆑故、參議正四位下行式部大輔春澄朝臣善繩爲㆓讚岐守㆒、式部大輔如㆑故、從五位下守左近衞少將藤原朝臣有實爲㆓權介㆒、少將如㆑故、散位正四位下源朝臣寬爲㆓伊豫守㆒、從四位上守刑部卿菅原朝臣是善爲㆓權守㆒、兵部少輔從五位下藤原朝臣忠方爲㆑介、外從五位下行左近衞醫師紀宿禰春生爲㆓土左權掾㆒、散位從五位下清原眞人眞貞爲㆓筑後守㆒、外從五位下丹波直嗣茂爲㆓豐前介㆒、從五位下巨勢朝臣氏宗爲㆓日向守㆒、從五位下布勢朝臣眞繼爲㆓大隅守㆒、從五位下小野朝臣春風爲㆓對馬守㆒、○廿六日己卯、以㆓從五位上行民部少輔藤原朝臣水谷㆒爲㆓皇太后宮亮㆒、從五位下行近江少掾安倍朝臣利柯爲㆓權大掾㆒、從五位

上守刑部大輔菅野朝臣弟門爲因幡權守、○二月癸未朔、二日甲申、春日祭如常、○四日丙戌、祈年祭如常、○七日己丑、詔授三品行中務卿兼大宰帥諱光孝天皇親王二品、參議正四位下行式部大輔春澄朝臣善繩從三位、善繩寢疾加劇、命在旦夕、詔及生存、有此恩叙、時太政大臣在內裏直廬、脫却朝服、贈加其身、時人榮之、○十二日甲午、先是、大宰府言、對馬嶋下縣郡人卜部乙屎麻呂、爲捕鸕鷀鳥、向新羅境、乙屎麻呂爲新羅國所執、縛囚禁土獄、乙屎麻呂見彼國挽運材木、搆作大船、擊鼓吹角、簡士習兵、乙屎麻呂竊問防援人、答曰、爲伐取對馬嶋也、乙屎麻呂脫禁出獄、纔得逃歸、是日勅、彼府去年夏言、大鳥集于兵庫樓上、決之卜筮、當夏隣兵、因茲頒幣轉經、豫攘灾告、如聞、新羅商船、時々到彼、縱託事賈販、來爲侵暴、若無其備、恐同慢藏、況新羅凶賊、心懷覬覦、不收蠆尾、將行毒螫、須令緣海諸郡、特愼警固、又下知因幡伯耆出雲石見隱岐等國、修守禦之具焉、○十四日丙申、以散位從五位下源朝臣湛爲侍從、從四位上守刑部卿兼伊豫權守菅原朝臣是善爲式部大輔、散位從五位下藤原朝臣

に據て改む
○近江少掾（利柯）、九年正月己酉紀には權少掾さありて其後正さなりしか徵なし

（二月）

○太政大臣、良房

○禁土獄、土は原本干に作る閣本尾本前本等に據て改む
○防援人、罪人を看守する人なり援は原本授に作る黑川校本に據て改む
○無其備、其は原本具に作る閣本尾本に據て改む
○同慢藏、慢藏は用心を怠るな云易繫辭傳に慢藏誨盜冶容誨淫さあり
○蠆尾、左傳昭和四年に鄭子產作丘賦、國人謗之曰其父死於路、己爲蠆尾注に謂子產重賦毒害百姓如蜂蠆之尾さあり
○從五位下（宜）、從五位上なりしこさ上文にて明かなるが、十年十月戊子

紀にも從五位上權守さあれど齋宮寮史生の斷罪を誤まり贖罪に處せられて官を去り一階を下げて更に從五位下に敍せられしなるべし

○元長王、以下十四人は何れも光孝天皇皇子さま〳〵し時の御子なり

○二品中務卿、品下に行字を脱せしか

○宸居悠懇、懇は邈の誤か悠かに遠き意なるべし

○今覆案、今は原本擧に作る狩谷氏の說に據て改む

○吾堯敦序、堯敦は原本鼓敢に作る諸本に據て改む

○苗緒、緒は原本裔に作る諸本に據て改む

○奇之、奇は諸本に妾に

宜爲治部大輔、從五位下弘道王爲玄蕃頭、東宮學士從五位下橘朝臣廣相爲民部少輔、學士如故、散位從五位上藤原朝臣眞數爲刑部大輔、從五位下源朝臣計爲少輔、從五位下安倍朝臣弘行爲大炊頭、從五位下藤原朝臣清身爲彈正少弼、散位從四位下元長王、侍從從四位下兼善王、无位名實王、篤行王、寂善王、近善王、音恒王、是恒王、舊鑒王、貞恒王、成蔭王、清實王、是忠王、是貞王十四人、賜姓源朝臣、先是二品中務卿兼大宰帥諱光孝天皇親王抗表曰、臣先請愚息改姓爲臣、宸居悠懇、微願未信、竊獨沉吟、心魂罔厝、臣素性頑疎、無分可採、而先公後私、一介之節、深企古賢之風、卽今所申請無比例、猶欲察其鄙誠、卽賜哀許、況中代以降、多有此事、至臣一身、何空素望、仍重上表、敢陳丹慊、但先日表曰、女子祿留其身、公損猶少、因願、唯令男兒等改姓、以宗室朝臣、將爲其姓、而今覆案世情、凡雖一宗之胤、而姓號分異、則人心自疎、既屬吾堯敦序之時、盍念同族和穆之義、臣雖不肖、苟爲弘仁朝廷之苗緒、因願同編於源氏之末、以成親親之厚、伏望天從人欲、聖周物情、𤁋深款而降恩、弘至公而成

德、然則帝道无偏、鑒前燭而流化、臣誠无二、添消塵而慰憂、勅答曰、顧省章表、雅懷奇之、惟王才超北海、器浮東平、割情愛於周親、輸忠款而報國、但枝分若樹、影接天光、移列凡栽、實乖素分、故雖非无舊章、然抑而未之許、今重知悾款、更感慇懃、上天必從下人之欲、惟朕寧失賢王之望、因改宿懷、用依後表、停加姓事、又順前表、王夫彌勉奉公之誠、克修爲善之樂、

○十五日丁酉、勅遣從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄、奉幣八幡大菩薩宮、及香椎廟、宗像大神、甘南備神、告文曰、天皇我詔旨爾坐、掛畏岐八幡大菩薩乃廣前爾申賜倍止申久、去年六月以來、大宰府度々言上多良久、新羅賊船二艘、筑前國那珂郡乃荒津爾到來天、豐前國乃貢調船乃絹綿乎掠奪天逃退太利、又廳樓兵庫等上爾、依有大鳥之恠天卜求爾、隣國乃兵革之事可在止卜申利、又肥後國爾地震風水乃灾在天、舍宅悉仆顚利、人民多流亡多利、如此之灾、古來未聞止、故老等毛申止言上多利、然間爾陸奧國又異常奈留地震之灾言上太利、自餘國々毛、又頗有件灾止言上多利、傳聞、彼新羅人波、我日本朝止久岐世時與利相敵比來多利、而今入來境內天

作る姿は接に通じ用ひたるか
○北海、後漢光武帝の姪北海靜王興なり後漢書に傳見ゆ
○浮東平、浮は過なり、東平は光武帝の子東平憲王蒼なり後漢書に傳見ゆ
○輸忠款、輸は原本輔に作る諸本に據て改む
○枝分若樹云云、若樹は親王を云親王の子孫にして皇統を引ける者なるを云
○移列凡栽云云、凡栽は庶民を云臣下に移し降さば本分に乖かむとなり
○更感慇懃、感は原本成に作る諸本に據て改む
○停加姓事、新に宗室朝臣の姓を賜ふことを停め給ふを云
○爲善之樂、後漢書東平憲王蒼傳に帝問東平王處家何等最樂王言爲善最樂とあり
○甘南備神、式外、神祇志に所在肥前國佐嘉郡春日村甘南備峯下とす
○言上多良久、多は原本須に作る諸本に據て改む
○依有大鳥之恠、依は原本恠下にあり上下の例に據て改め移す

○自餘國々、々は上下の例に據て補ふ
○有件灾止、止も上下の例に據て補ふ
○我朝乃顯祖、八幡神は應神天皇なりと稱ふるより顯祖と云るなり
○警賜、警は閣本谷本に驚に作る
○差使天、香椎宗像の例に據れば此下に禮代乃大幣帛乎令捧持天の十一字あるべきなり
○唱導、導は原本道に作る諸本に據て改む
○已熟、熟は原本就に作る尾本に據て改む
○逐還、逐は原本遂に作る黑川校本に據て改む
○假令止之天、原本假を縱に作り之天を天之に作る假は祕本閣本尾本に據り之天は尾本前本淀本に據て改む
○盜兵、盜は上文刀に作る

奪取調物天、无懼憚之氣、量其意況爾、兵寇之萠、自此而生加、我朝久無軍旅天、專忘警備多利、兵亂之事尤可慎恐、然我日本朝波、所謂神明之國奈利、神明之助護賜波、何乃兵寇加可近來岐、況掛毛畏岐大菩薩波、我朝乃顯祖止御座天、食國乃天下護賜比助賜布、然則他國異類乃加侮致亂倍岐事乎、何聞食天警賜比拒却介賜波須在牟、故是以、從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄乎差使天、奉出須此狀乎、平久聞食天、假令時世乃禍亂止之天、上件寇賊之事在倍岐物那利止毛、掛畏岐大菩薩、國內乃諸神多知乎唱導岐賜比天、未發向之前爾、沮拒排却賜倍、若賊謀已熟天、兵船必來倍久在波、境內爾入賜須之天、逐還漂沒米賜比天、我朝乃神國止、畏憚利來禮留故實乎、澆多之失比賜布奈、自此之外爾假令止之天、夷俘乃逆謀叛亂之事、中國乃盜兵賊難之事、又水旱風雨之事、疫癘飢饉之事爾至萬天爾、國家乃大禍、百姓乃深憂止可在良牟乎波、皆悉未然之外爾拂却銷滅之賜天、天下無躁驚久、國內平安爾、鎭護利救助賜比、皇御孫命乃御體乎、常磐堅磐爾、與天地日月共爾、夜守晝守爾護幸倍給倍止、恐美恐美毛申賜久止申、又曰、天皇我

○賜倍止申久、久は諸本に據て補ふ
○卜申利、利は上文に據て補ふ
○兵寇之萠、寇は原本冦に作る上下の例に據て改む
○然我日本朝、然は諸本に據て補ふ
○來禮利介留、諸本には太加禮利介留に作る
○狎侮、狎は押に作る諸本に據て改む
○賜倍岐、岐は原本妓に作る狩谷氏の說に據て改む
○大幣帛、原本大を太に作る例に據て改む

詔旨爾坐、掛畏毛香椎廟乃廣前爾申賜倍止申久、去年六月以來、大宰府度
々言上多夏久、新羅賊船二艘、筑前國那珂郡乃荒津爾到來天、豐前國乃貢
調船乃絹綿乎掠奪天逃退多利、又廳樓兵庫等上爾依有大鳥之恠天卜求
爾、隣國乃兵革之事可在止卜申利、又肥後國爾地震風水乃灾在天、舍宅悉
仆顚利、人民多流亡多利、如此之灾比、古來未聞止故老等毛申止言上多利、
然間爾陸奧國又異常那留地震之灾言上多利、自餘國々毛又頗有件灾止
言上多利、傳聞、彼新羅人波、我日本朝止、久岐世時與利相敵比來多利、而今
入來境內天、奪取調物利天、無懼沮之氣、量其意況爾、兵寇之萠自此而生
加、我朝久無軍旅天、專忘警備多利、兵亂之事尤可愼恐、然我日本朝波、所
謂神明之國奈利、神明之助護利賜波、何兵寇可近來岐、況亦彼新羅人乃
相敵比來禮利介留事波、掛畏岐御廟乃威德爾依天、降伏訖賜天、若干乃代時
乎歷來太利、而今如此爾狎侮氣色乎露出事波、寔是御廟乃聞驚岐怒恚利
賜倍岐物奈利、故是以、從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄乎差使天、
禮代乃大幣帛乎令捧持奉出須、此狀乎平氣久聞食天、假令時世乃禍亂止

○物奈利止毛、原本物奈止利毛に作る諸本に據て改む
○逐還、逐は原本遂に作る谷本に據て改む
○自此之外、此は原本餘に作る諸本に據て改む
○百姓、百は原本萬に作る尾本前本に據て改む
○廣前爾、爾は前本及上文に據て補ふ
○申久、久は總本尾本前本等に據て補ふ
○言上多良久、多は原本須に作る諸本に據て改む

之天、上件寇賊之事在倍岐物奈利止毛、掛畏岐御廟、國內乃諸神太知乎、唱導岐賜比天、未發向之前爾沮拒排却賜倍、若賊謀已熟天、兵船必來倍久在波、境內爾入賜須之天、逐還漂沒米賜比天、我朝乃神國止、畏憚禮來禮留故實乎澆多之失比賜布奈、自此之外爾假令止之天、夷俘乃逆謀叛亂之事、中國乃盜兵賊難之事、又水旱風雨之事、疫癘飢饉之事爾至萬天爾、國家乃大禍、百姓乃深憂止之可在良牟乎波、皆悉未然之外爾拂却鎖滅之賜天、天下無躁驚久、國內平安爾鎭護利救助賜比、天皇朝廷乎寶位无動久、常磐堅磐爾、夜守晝守爾、護幸倍給倍止、恐美恐美毛申賜波久止申、又曰、天皇我詔旨止掛畏岐宗像大神乃廣前爾申賜倍止申久、去年六月以來、大宰府度々言上多良久、新羅賊船二艘、筑前國那珂郡乃荒津爾到來天、豐前國乃貢調船乃絹綿乎掠奪天逃退太利、又廳樓兵庫等上爾、依有大鳥之恠天卜求爾、隣國乃兵革之事可在止卜申利、又肥後國爾地震風水之災在天、舍宅悉仆顚利、人民多流亡多利、如此之灾比、古來未聞止、古老等毛申止言上多利、然間爾、陸奥國又異常那留地震之灾言上多利、自餘國々毛又頗有件灾止言上

○神明之助護爾、原本之を乃に作り小字とす祕本閣本前本等及上文に據て改む
○狎侮、狎は原本押に作る諸本に據て改む
○物奈利止毛、原本物奈止利毛に作る諸本に據て改む
○逐還、原本遂爾還に作る逐は上文に據て改め爾は諸本に據て削る
○百姓、原本百を萬に作る尾本前本に據て改む
○无躁驚、躁は上文に據て補ふ

多利、傳聞、彼新羅人波、我日本朝止久岐世時與利、相敵比來多利、而今入來境內天、奪取調物利天、無懼沮之氣、量其意况爾、兵寇之萠、自此而生加、我朝久无軍旅天專忘警備多利、兵亂之事尤可愼恐、然我日本朝波、所謂神明之國那利、神明之助護利賜波、何乃兵寇加可近來岐、亦我皇大神波、掛毛畏岐、大帶日姬乃彼新羅人乎降伏賜時爾、相共加力倍賜天、我朝乎救賜比崇賜奈利、而今如此爾狎侮氣色乎露出事乎波、寔是皇大神乃聞驚岐怒恚利賜倍岐物奈利、故是以、從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄乎差使天、禮代乃大幣帛乎令捧持天、奉出給布、此狀乎平介久聞食天、假令時世乃禍亂止之天、上件寇賊之事在倍岐物奈利止毛、掛畏皇大神、國內乃諸神太知遠唱導岐賜比天、未發向之前爾、沮拒排却賜倍、若賊謀已熟天、兵船必來倍久在波、境內爾入賜波須之天、逐還漂沒米賜比天、我朝乃神國止懼良禮來禮留故實乎、澆多之失賜布奈、自此之外爾假令止之天、夷俘乃逆謀叛亂之事、中國乃盜兵賊難之事、又水旱風雨之事、疫癘飢饉之事爾至萬天爾、國家乃大禍、百姓乃深憂止之可在良牟遠波、皆悉未然之外爾拂却銷滅之賜天、天下无

○常磐爾、爾は諸本に據て補ふ

○言上多良久、多は原本須に作る諸本に據て改む下同じ

○願太布止、願ひ給ふなり

○助守坐天、坐は原本座に作るを改む

○奉牟止申給、申は祕本閣本尾本に據て補ふ

○深草山陵、仁明天皇

○田邑山陵、文德天皇

躁驚久、國内平安爾、鎭護利救助賜比、天皇朝廷乎寶位无動、常磐爾堅磐爾、夜守晝守爾、護幸倍矜奉給倍止、恐美恐美毛申賜波久止申。又曰、天皇我詔旨止甘南備神乃前爾申賜倍止申久、去年六月以來、大宰府度々言上多良久、新羅賊船二艘、筑前國那珂郡乃荒津爾到來天、豐前國貢調船乃絹綿乎掠奪逃退多利、又廳樓兵庫等上爾、依有大鳥之恠天卜求爾、隣國乃兵革之事可在止卜申利止言上多利、件事毛思保之熱可比憂歎岐御坐之間爾、又言上多良久、新羅賊寇調兵裝船天、我朝之地乎掠侵爾將來須止、皇神乃託宣在利、又被叙位牟止願太布止言上多利、依此天、從五位下乃御位記爾、禮代乃幣帛乎令副捧天奉出給布、今毛今毛國家乎慇懃爾助守坐天、如此岐災難止在倍岐事乎波、未然爾警悟志排鎭坐天、彌高彌廣爾榮餝利崇奉牟止申給止宣布。天皇我詔旨乎申。又遣使於諸山陵、告可禦新羅寇賊之狀、參議正四位下行皇太后宮大夫藤原朝臣良世、從五位上行下野權守紀朝臣有常告深草山陵、參議正四位下行右衞門督兼讚岐權守源朝臣生、右兵庫頭從五位上久賀朝臣三常告田邑山陵、參議正四位下行右兵

衛督源朝臣勤、侍從從五位下藤原朝臣高範告稱列山陵、告文准八幡大菩薩宮、○十九日辛丑、因幡國始置國掌一員、把笏、參議從三位春澄朝臣善繩薨、善繩字名達、左京人也、本姓猪名部造、爲伊勢國員辨郡人、達宦之後、移隷京兆、祖財麿爲員辨郡少領、父豐雄爲周防大目、善繩幼而明慧、骨諳非常、財麿見善奇童、加意養育、爲孫傾產、曾无悋惜焉、善繩齡弱冠、入學事師、耽讀群籍、未嘗輟手、博涉多通、妙於藻思、凡所閱覽、多誦於口、有兼人之敏、時之好學、无能及者、天長之初、奉試及第、被補俊士、四年爲常陸少目、以秩俸充研精之資、五年賜姓春澄宿禰、兄弟姉妹五人同以預之、後改宿禰爲朝臣、停俊士之號、補文章得業生、七年對策、詞義甚高、式部省評、處之丙第、是年春、內記闕、帝本自重士、虛欸此職、以俟善繩、至于夏五月、善繩擢第、六月遂補少內記、文路榮之、尋轉大內記、八年兼播磨少目、九年叙從五位下、十年拜東宮學士、大內記如故、承和元年、兼爲攝津權介、三年遷兼但馬介、九年春、加從五位上、秋七月、嵯峨太上天皇崩、皇（貞恒）太子見廢、善繩以學士左遷周防權守、十年遷文章博士、

○稱列山陵、神功皇后
○宦之後、宦は仕官なり原本宦を冠に作る諸本に據て改む
○骨諳、諳は法又は相の誤か
○善奇童、奇童なりとして之を善みするなり
○悋惜、悋は吝の俗字にて又恡に作る
○事師、原本師事に作る諸本に據て改む
○凡所閱覽、凡は原本夙に作る諸本に據て改む
○被補俊士、被は原本披に作る諸本に據て改む俊士は卽ち文章生なり本朝文粹卷二所載天長四年六月十三日太政官符に應補文章生幷得業生復舊例事去弘仁十一年十二月八日符偁太政官去十一月十五日符偁案唐式云今須文章生者取良家子弟寮試詩若賦補之選生中稍進者省更覆試號爲俊士取俊士翹楚者爲秀才生とあり弘仁十一年に起りしものなるが僅に七年を經天長四年に至て廢せらる
○虛欸此職、原本欸を釋に作る諸本に據て改む欸は缺に同じ

於大學講范曄後漢書、解釋流通、無所淹凝、諸生質疑者、皆洮汰累惑、嘉祥元年、進正五位下、三年授從四位下、仁壽二年、遷爲但馬守、四年遷刑部大輔、齊衡四年正月、爲伊豫守、同年十一月、兼爲右京大夫、天安二年、授從四位上、貞觀二年、拜參議、三年爲式部大輔、四年加授正四位下、五年兼播磨權守、六年遷兼近江守、先是奉詔、撰修續日本後紀廿卷、迄于十一年、筆削甫就、詣闕獻之、藏之太政官、是年春初、病發加劇、二月七日授從三位、薨於東京里第、時年七十四、善繩性周愼謹朴、不以己所長加人、昔者爲文章博士之時、諸博士毎各名家、更以相輕、短長在口、亦弟子異門、互有分爭、善繩謝遣門徒、恬退自修、終不爲謗議所及、爲人信陰陽、多所拘忌、毎有物恠、杜門齋禁、不令人通、乃至一月之中門扉十閇、亦其家宅不治、垣屋日穿、言死、弔問途絶、及登公位、齋忌稍簡、雖年齒頽暮、而聰明轉倍、文章之美、晩路加麗、貞觀年中、追改策刺、進爲乙第、唯子姪之外、家稀嘉客、賓筵不展、風月長閑、有子男女四人、具瞻、魚水、並爵至五品、然无繼家風者、長女治子爲正四位下典侍、○廿日壬寅、公卿奏請減諸

○洮汰累惑、後漢書陳元傳に洮汰學者之累惑注に洮汰猶洗濯也とあり
○嘉祥元年、元は原本九に作る諸本に據て改む
○續日本後紀廿卷、原本續字なく廿を卅に作る諸本に據て改め補ふ
○短長、品隲するを云
○亦弟子、亦は原本之に作る諸本に據て改む
○自修、原本因彼に作る祕本に據て改む
○所及、及は原本反に作る谷本に據て改む
○齋禁、齋は原本齊に作る閣本尾本に據て改む
○弔問、問は原本聞に作る尾本祕イ本閣イ本に據て改む
○晩路、原本脫略に作る諸本に據て改む
○策刺、刺は恐くは判の訛なるべし
○魚水、原本兼永に作る諸本に據て改む元慶八年三月庚午紀證とすべし

王季祿、兼立給祿定額、曰、政因時興、機隨物動、王者詳沿革之理、聖人審變通之規、卽知、字民之道、不必守株、經國之方、无復膠柱者也、伏見故從四位上豐前王等意見表曰、利國之政、節用爲先、今府帑稍空、貢賦少入、當停諸王之祿、存救弊之計者、臣等商量上表之旨、頗有可取、但專停之、則似疎皇親、全給之、則可闕國用、取捨之方、宜勤折中、又王氏蕃昌、萬倍曩日、計其祿賜、所費難支、伏望、當時預祿者、四百廿九人爲定員、後生年足者、隨闕補之、但自願賜姓屬籍者、不以爲闕、重以、去年炎旱、農民失望、聖上撤服御常膳、群下減食封位祿、而至于王祿、依舊不悛、求諸通論、政涉蹐駮、事須准之、位祿同從減折、然則適時之要、理无二途、濟世之權、事從一揆、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、勅大宰府、令新羅人潤清宣堅等卅人及元來居止管內之輩、水陸兩道給食馬入京、先是彼府言、新羅凶賊、掠奪貢綿、以潤清等處之嫌疑、禁其身奏之、太政官處分、殊加仁恩、給粮放還、潤清等不得順風、无由飯發其國、對馬嶋司進新羅消息日記、幷彼國流來七人、府須依例給粮放却、但蕞爾新羅、凶毒狼戾、亦廼者對馬嶋

○守株、韓非子五蠹篇に宋人有耕田者、田中有株、兎走觸株、折頸而死、因釋其耒而守株、冀復得兎、兎不可復得、而身爲宋國笑、とあり
○利國之政、政は原本故に作る諸本に據て改む
○稍空、原本空を定に作る伴信友本宮本に據て改む
○蹐駮、字書に乖舛駮雜也とあり
○處之嫌疑禁其身、原本疑禁の二字を倒置す狩谷氏の說に據て改む
○卜部乙屎麻呂、卜は原本下に作る上文二月甲午紀に據て改む
○挾竊往來、挾は原本狹に作る諸本に據て改む
○誅僇、僇は戮に同じ尾本前本谷本等謬に作る
○交關、原本關を開に作る尾本に據て改む
○亦復有數、復は原本後に作る尾本谷本淀本に據て改む
○基兒王、基は原本共に作る諸本に據て改む
○其一曰、此太政官符は三代格十八寬平六年八月九日符中に見ゆ
○過所、關所を通行する手形なり

○年年出關、年一字は祕本閣本尾本に據て補ふ
○謗讟、讟は誹なり
○所々多致未進、諸本一の所字なし
○公途有閾至、此下に原本有閾至の三字あり衍なり諸本に據て削る
○況復、復は原本後に作る諸本に據て改む
○有自用、用は原本由に作る祕本閣本尾本に據て改む
○五使斯、五使は貢綿朝集正稅大帳調帳使なと云原本五の字なく斯な斷に作る五は諸本に據て補ひ斯は尾本に據て改む
○毎月、月は原本日に作る諸本に據て改む
○若非符宣旨、原本宣下に不字あり旨を背に作る諸本に據て改め削る
○穀倉院、西宮記臨時五に在大學西、納畿內諸國調錢諸國無主位職田及諸官田穴稻等諸庄物、物在中盤日公卿及四位五位別當預藏人等と見ゆ
○交易輕物、交は原本支に作る前本谷本に據て改む
○輸進、進は原本遣に作

人卜部乙屎麻呂、被禁彼國、脫獄逋皈、說彼練習兵士之狀、若彼疑洩語、爲伺氣色差遣七人、詐稱流來歟、凡垂仁放還、尋常之事、挾姧往來、當加誅僇、加之、潤淸等久事交關、僑寄此地、能候物色、知我无備、令放皈於彼、示弱於敵、既乖安不忘危之意、又從來居住管內者、亦復有數、此輩皆外似皈化、內懷逆謀、若有來侵、必爲內應、請准天長元年八月廿日格旨、不論新舊、併遷陸奧之空地、絕其覬覦之姧心、從之、○廿一日癸卯、以勘解由次官從五位下紀朝臣安雄爲兼助敎、從四位上行彈正大弼基兄王爲刑部卿、散位從四位上忠貞王爲彈正大弼、○廿二日甲辰、迎六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿三日乙巳、參議從四位上行大宰大貳藤原朝臣冬緒進起請四事、其一曰、軍旅之儲、烽燧是切、而數十年來、國无機警、雖有其備、未知調用、若有非常、何以通知、今須下知管內國嶋、試以擧烽焚燧、彼此相通、以備不虞、若不言其由、恐驚動物意、望請、下知事旨、依件調練、其二曰、比年之間、公私雜人、或陸或海、來集深入遠尋、營求善馬、及其歸向、多者二三十、少者八九疋、惣計過所、年年出關之

る諸本に據て改む
○左右巧容、色々巧に取繕ふなり、容は原本客に作る前本に據て改む前本祕イ本閣イ本等答に作る
○放還之煩、放は原本故に作る諸本に據て改む
(三月)○多久都神、承和四年二月戊戌紀に見ゆ
○和多都美神、同上
○胡簶神、承和八年八月戊午紀に出づ
○胡簶御子神、承和四年二月戊戌紀に見ゆ、胡簶の二字は諸本及類史十六に據て補ふ
○嶋大國魂神、神名式對馬嶋上縣郡嶋大國魂神社、豐崎村豐、諸本には魂字なく類史玉に作る
○高御魂神、承和四年二月戊戌紀に出づ
○住吉神、同上
○和多都美神、神名式同國下縣郡和多都美神社(名神大)、嚴原町中村
○太祝詞神、承和四年二月戊戌紀に見ゆ
○平神、承和八年八月戊午紀に出づ
○雷神、承和十年九月甲辰紀に見ゆ原本此神を脫す諸本及類史に據て補ふ
○天氐留神、式同國下縣

數、凡千餘疋、夫機急之備、馬尤爲用、而无賴之輩、每年搜取、若有罄乏、如非常何、今將施禁制、翻致謗讟、望請、下知豐前長門兩國、四箇年間、禁止出馬、其三曰、承前之例、諸國雜米、各隨其本色、輸納諸司諸所、而或司全納用盡既訖、或所々多致未進、公途有闕、至有期會、不得迴撥、況復件司等、監典二人、勾當雜務、或時有自用、亦非无判置、貢進之怠、莫不緣此、縱令一任之內、殊立嚴制、猶恐相承之官、任意改更、自非官符、何立後法、望請、五使新之外、庸米幷雜米、惣納稅庫、每月下行、若非符宣旨、輙以下用、監當之官、准法科罪、其四曰、穀倉院地子交易物、比年之間、令監一人勾當其事、每年交易輕物輸進、因玆勾當之人、年初請領直稻既訖、其後府司責其返抄、而左右巧容、不肯究進、遂使不知意之吏、招放還之煩、熟尋其由、理不可然、凡一官之事、官長所行、縱有其人、何愁不濟、而更置專當、還致物煩、望請從停止、府司一向交易奉進、詔並從之、○廿四日丙午、京師飢、賑給之、○廿五日丁未、勅減諸王季祿四分之一、令備中備後兩國採進鑄錢料銅、○廿九日辛亥、佐渡國獻奇龜一、其爲形也、鳥觜赤甲

黑質也、○三月癸丑朔、日有レ蝕之、○三日乙卯、御齋奉燈如レ常、○五日丁巳、詔授對馬嶋正五位上多久都神從四位下、從五位上和多都美神、胡祿神、胡祿御子神、嶋大國魂神、高御魂神、住吉神、和多都美神、太祝詞神、平神、雷神、天氐留神、並正五位下、從五位下大告刀神、天諸羽神、天多久都玉神、宇努神、告刀神、小枚宿禰神、行相神、奈蘇上金子神、嶋御子神、國本神、銀山神、和多都美神、敷嶋神、並從五位上、土左國從五位上立山神正五位下、從五位下小村神從五位上、正六位上大谷神從五位下、○七日己未、地震、○十六日戊辰、從五位下行對馬嶋守小野朝臣春風進レ起請二事、其一曰、軍旅之儲、實在二介胄一、介胄雖レ薄、助以二保侶一、望請、縫二造調布保侶衣千領一、以備二不虞一、其二曰、軍興二不虞一、倍レ日兼行、轉餉易レ絕、輜重難レ給、望請、以二調布一縫二造納糒帶袋千枚一、可レ帶二士卒腰底一、以支二急速之備一、詔從レ之、以二大宰府庫布一造充之、○廿六日戊寅、勅、以二忠子女王一爲二女御一、○廿七日己卯、以二甲斐守從五位下清原眞人長統一爲二右京亮一、從五位下行加賀介高階眞人菅根爲二甲斐守一、從五位上行陸奧介小野朝臣春枝爲二權守一、鎭

郡阿麻氏留神社、船越村原本此神を脱す諸本及類史に據て補ふ
○從五位下大告刀神、式同國上縣郡能理刀神社、豐崎村西泊、原本從五位下の四字なく告を吉に作る從五位下は諸本に據て補ひ告は式に據て改む下同じ
○天諸羽神、式同郡天諸羽命神社、佐須奈村佐護
○天多久都玉神、式同郡天神多久頭多麻命神社、所在同上原本玉を麻に作る諸本に據て改む
○宇努神、式同郡宇努刀神社
○告刀神、式に見えず按に宇努神告刀神とある神告の二字は衍にて宇努刀神なるべきか告は原本吉に作る告の訛なれは改む
○小枚宿禰神、式同郡小枚宿禰命神社、峯村三根
○行相神、式同郡行相神社、下縣郡奴加岳村田
○奈蘇上金子神、式同郡那須加美金子神社、琴村小鹿
○嶋御子神、式同郡嶋大國魂御子神社とある是なり
○國本神、式外、神祇志

に所在上縣郡瀨田村とす
○銀山神、承和七年十一月庚申紀に出づ
○和多都美神、下縣郡住吉神社境內
○敷嶋神、式同郡敷嶋神社、鷄知村加志
○土左國、左は原本佐に作る諸本に據て改む
○立山神、式外　神祇志に所在香美郡香宗土居村とす
○小村神、式外、同志に所在高岡郡日下鄕小村とす
○正六位上大谷神、式外、同志に所在香美郡深淵鄕大谷村とす正六位上の四字は諸本及類史十六に據て補ふ
○介胄雖薄、介胄の二字は尾本谷本に據て補ふ
○助以保侶、侶は諸本に據て補ふ保侶は本朝世紀久安三年七月癸未に重成郎從甲胄之上纒數幅之布（世俗號之保侶）爲禦流矢云云と見ゆホは洞のホ、ロは助語なるべし
○石雄、石は原本右に作る諸本に據て改む下同じ
○吉彌侯部、彌は原本禰に作る尾本前本に據て改

守將軍從五位下御春朝臣峯能爲介、將軍如故、治部少輔從五位下藤原朝臣貞高爲加賀介、從五位下行對馬守小野朝臣春風爲肥前權介、對馬守如故、散位從五位下小野朝臣國梁爲日向守、○廿九日辛巳、從五位下行對馬守兼肥前權介小野朝臣春風奏言、故父從五位上小野朝臣石雄家羊革甲一領、牛革甲一領、在陸奧國、去弘仁四年、賊首吉彌侯部止彼須可牟多知等逆亂之時、石雄著彼甲、討平殘賊、厥後兄春枝進之、望請、給羊革甲、以充警備、歸京之日、全以進官、詔許之、其牛革甲給陸奧權守小野朝臣春枝、○卅日壬午、散位從五位上菅原朝臣峯嗣卒、峯嗣者、左京人也、父出雲朝臣廣貞、長於醫師、官爲正五位下信濃權守、淳和太上天皇龍潛之日、令峯嗣侍春宮藩邸、峯嗣自申請、欲繼家業、仍補醫得業生、醫得業生、自此而始、峯嗣奉試及第、弘仁十三年、除左兵衛醫師、十四年遷醫博士、天長四年、兼內藥佑、七年兼侍醫、八年兼攝津大目、是年讓醫博士於物部廣泉、十年爲春宮坊主膳正、內藥佑侍醫攝津大目並如故、承和二年、授從五位下、淳和太上天皇、思在藩之舊、以峯嗣

む
○醫得業生自此而始、醫得業生の四字は祕本尾本前本等に據て補ふ
○內藥佑、佑は原本佐に作れるを改む下同じ
○年老、年は諸本に據て補ふ
○家名、此二字原本なし、宮本內イ本に據て補ふ
○金蘭方、本朝書籍目錄に金蘭方五十卷菅原岑嗣奉勅與諸名醫撰さあり
○針艾、艾は點灸なり

爲侍者、寵遇優渥、頗超傍人、四年爲尾張權介、六年遷爲美濃權介、不之官、嘉祥二年、爲越後守、岑嗣侍淳和院、奉太后御藥湯方之事、由是遷爲播磨介、以近都亦優其身也、仁壽元年、加從五位上、天安二年、爲典藥頭、貞觀五年、自謝年老、出爲攝津權守、退居豐嶋郡山莊、灌藥養性、不交流俗、十年改出雲姓爲菅原、以土師出雲同祖也、卒時年七十八、岑嗣不墜家名、處治必効、嘗奉勅與諸名醫共撰定金蘭方、又針艾之所加多方注之外、後進之備、至今稱妙焉、

○卷第十七、原本此下に終字あり諸本に據て削る

日本三代實錄卷第十七

【貞觀十二年】禁長門國出馬、上文二月乙巳紀など參看すべし
○以榮爲憂、憂は原本反に作る諸本に據て改む
○止足分、分上に脫字あるべし
○功未爲人所歸云云、後漢書趙典傳に夫無功而賞勞者不勸とあり
○老耄之骸、耄は原本耆に作る閣本尾本前本等に據て改む
○加負乘之重、負乘は易解卦に負且乘致寇至とあるに出づ、加は原本如に作れるを改む
○何心可以安之、諸本心字以の下にあり
○以可堪之、以可恐くは倒置
○徒招謗於人議、原本徒を従に議を儀に作る閣本前本谷本塙本に據て改む
○天譴、譴は原本讒に作

日本三代實錄卷第十八

起貞觀十二年四月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

夏四月癸未朔、天皇御紫宸殿、宴于侍臣、賜祿各有差、○二日甲申、平野祭、○三日乙酉、梅宮祭並如常、○四日丙戌、廣瀨龍田祭如常、○五日丁亥、勅禁長門國出馬、○八日庚寅、灌佛、其儀如常、○十四日丙申、諸衛警固、緣賀茂祭也、○十五日丁酉、賀茂祭如常、○十六日戊戌、諸衛解嚴、○廿七日己酉、正三位守右大臣兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗上表曰、伏奉恩詔、以臣居右大臣之職、臣夙夜戰慄、以榮爲憂、止足分、臣所宜守、臣聞、德未爲人所服、而受高爵、則使才臣不進、功未爲人所歸、而荷厚祿、則使勞臣不勸、今臣以疲駑之質、增非次之榮、老耄之骸、加負乘之重、何心可以安之、何力以可堪之、方今邊甿不晏、外盜有聞、府帑空竭、公用乏絕、豈非在位者、奉職無效之罪哉、況統理衆務、選擧群材、非臣所可克

行、非臣所可克察、徒招謗於人議、必得罪於天鑒、旣不免先責、何更復超昇、伏望殊蒙降照、罷退崇班、若爲堪朝廷之老、猶優居大納言之職、事君之道、未必富貴、竭節盡忠、抽誠在此、臣之所陳、不敢虛請、不堪丹款、忝以抗聞、不許、○廿八日庚戌、制、責侍從厨預解由、立爲恒例、○五月壬子朔、五日丙辰、停端午之節、以无品眞子內親王薨、不任緣葬諸司、以喪家固辭也、帝不視事三日、內親王者、仁明天皇之女、母正五位下紀朝臣種子、從四位上名虎之女也、○六日丁巳、地震、○九日庚申、右大臣藤原朝臣氏宗重抗表曰、臣以去月廿七日上表、陳請退右大臣、降忝大納言之狀、卽有勅不省、臣欽承失圖、啓處無地、臣遇時交泰、執性庸虛、自忝八座、遂無一效、徒以國之元老、超爲士民之首、苟榮還愧、翰音起於微躬、食祿計知、素飡屬於拙任、再三辭讓、前後無休、畏若火炎、重如山壓、今奉恩渙、猶蒙斯寵、縱令天下睚眦臣之非分、何違聖情、慇懃己之免謗、今所可食職封二千戸、此則祿法所當、何敢專辭、然而素飡之責、自古多難、虛賞之譏、在今何避、伏望分減今所可食職封九百戸、與先所許一百戸、慮爲一千戸、

る諸本に據て改む
○忝以抗聞、忝は恭の誤なるべし
(五月)仁明天皇之女、之は諸本に據て補ふ
○正五位下紀朝臣種子、下は原本上に作る續後紀承和六年正月辛酉紀に據て改む
○從四位上名虎、續後紀承和十四年六月己酉紀に正四位下とあり從四位上は誤なり
○遇時交泰、遇は原本過に作る狩谷校本に過恐遇とあるに據て改む
○八座、文選文宣王行狀注に八座謂二六尙書二僕射一とあり
○徒以、徒は原本從に作る閣本尾本前本谷本に據て改む
○士民之首、士は原本土に作る祕本閣本谷本に據て改む
○翰音起於微躬、易中孚卦の象傳に翰音登于天、何可長也、疏に翰高飛也、飛音者音飛而實不從之謂也、忠篤內喪華美外揚若鳥之翰音登于天虛聲遠聞也とあり微躬は微身なり、翰は原本輪に作る諸本に據て改む

○山曆、曆は原本厤に作る諸本に據て改む
○睚眦、憎み嗔るを云ふ史記范睢傳注に睚眦謂相嗔怒而見齒也とあり
○慇懃、慇は原本殷に作る諸本に據て改む
○職封二千戸、祿令に凡食封者左右大臣二千戸とあり
○多難、難は諸本歎に作る
○慮爲一千戸、漢書賈誼傳に慮亡不帝制而天子自爲者注に慮大計也とあり狩谷校本には慮當作盧とあり
○公府、府は原本符に作る宮本及紀略に據て改む
○歎懇、原本難懇に作る諸本に據て改む
○聞之、聞は原本開に作る諸本及都氏文集に據て改む
○重賞甘餌、後漢書耿純傳に重賞甘餌可以聚人者也、注に黃石公記曰芳餌之下必有懸魚重賞之下必有死夫とあり
○膂壤腴土、原本壤を壞に、土を亡に作る祕本谷本蒲本に據て改む
○藏器於身、易繫辭傳に君子藏器於身待時而動

返收公府、又職分資人職田季祿等、一准大納言、更不被加給、恐不計聖朝之深恩、頻輙陳凡庸之淺慮、臣文辭之用、誠慤難移、有累再三、願必垂天聽、不堪歎懇、忝以陳聞、勅答曰、省表聞之、朕重賞甘餌、爲賢輔而莫愛、膂壞腴土、賚勳德而斯分、卿藏器於身、運機在慮、況亦先天雞而早起、爲國之勤急焉、後林鳥而晩歸、顧家之念綏矣、靜言夙夜之勞、還慙稟餼之薄、而表輸相望、守素之請無已、肝膽皆露、推赤之懷可知、至于再三、難以違之、仍降此一切之制、減彼千戸之封、但至如職分資人職田季祿等、既由舊典、未許新辭、若苟任來誠、以闕往法、則恨卿損削之美有餘、朕優賽之意不足、宜得此趣、且韜謙光、○十四日乙丑、以散位正六位上巨勢朝臣四輔爲造山崎橋使、判官一人、主典二人、○十六日丁卯、右大臣藤原朝臣氏宗重抗表曰、臣先修表狀、求退右大臣、丹心不融、玄覽無違、復重陳懇誠、請減省封戸并俸料、幸蒙減半封、猶停省雜俸、雖德之攸及、遂有典成、而臣之所陳、未遭兼濟、今臣齡已暮矣、欲殺身以報國恩、臣職甚危焉、何厚己以豐家產、許容之後、減省之餘、伏臘可支、子孫同飽、伏望特廻

降鑒、重賜卑聽、臣職分賁人職田季祿等之類、悉准大納言、以斯庸虛、不敢盈溢、恐緣愚執、妄致抗聞、不許、○十九日庚午、勅出雲國、廢史生一員、置弩師一員、永以爲例、卽以權史生從八位下鴈高宿禰松雄爲弩師、以善作弩也、○廿四日乙亥、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿六日丁丑、河內國年穀不登、民苦飢饉、太政官處分、借境內富豪貯稻一萬三千束、班給百姓、待秋返給、○廿九日庚辰、詔授越中國正五位上雄神從四位下、伊豆國從五位上楊原神正五位下、近江國正六位上飯河內神、筑前國正六位上背布利神、並從五位下、○六月壬午朔、二日癸未、勅、因幡國守已下、雜任已上、並帶劒、陸奧國菊多郡人丈部繼麻呂、丈部濱成等男女廿一人、賜姓湯坐菊多臣、○七日戊子、勅大宰府、置對馬嶋選士五十人、○十日辛卯、自五月霖雨、至此未止、奉幣賀茂、貴布禰神、祈止雨、告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐賀茂大神乃廣前爾申賜倍止申久、近來雨降涉旬天、百姓乃農業流損倍志、掛畏岐大神乃厚助爾依天志、此災波可止志止所念行天奈毛、神祇權大祐正六位上齋部宿禰高善乎差使天、大

さあるに出づ
○天雞、玄中記に桃都山有大樹、曰桃都、上有天雞、日初出照此木、天雞卽鳴、天下雞皆隨之とあり
○稟餼、稟は賜、穀也、餼は饋餉也俸祿を云ふ狩谷校本には稟當作廩と云ふ廩は給也都氏文集餼を餘に作る
○守素。素は志也都氏文集守素を減抱に作る
○推赤、後漢書光武紀に蕭王推赤心置人腹中とあるに出づ都氏文集推赤を擒謙に作る
○減彼千戶之封、減は文集留に作る
○由舊典、由は原本曰に作る狩谷校本に據て改む
○任來誠、減封を請ひ來れる誠心に任するを云
○優賚、私記に賚一作賞と云
○四輔、輔は原本甫に作る諸本及紀略に據て改む
○玄覽、覽恐くは鑒の誤
○復重、復は原本後に作る祕本閣本谷本に據て改む
○典成、典恐くは曲の誤
○厚已、厚は原本原に作る閣本尾本前本等に據て改む

幣乎令捧持、奉出須此狀乎聞食天、降雨急晴天、五穀不損天、天皇朝廷乎、常磐堅磐爾護幸倍賜比、天下平安爾助賜比矜賜倍止、恐美恐美毛申賜波久止申。貴布禰神告文同焉。是日、夜白虹見東北、首尾著地。○十一日壬辰、先是月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、遣親王公卿奉祭。○十三日甲午、先是大宰府言、肥前國杵嶋郡兵庫震動、鼓鳴二聲、決之著龜、可警隣兵。是日、勅令筑前、肥前、壹岐、對馬等國嶋、戒愼不虞。又言、所禁新羅人潤清等卅人、其中七人逃竄。○十七日戊戌、頻月淫霖、京師飢饉、賑給之。○廿二日癸卯、奉幣賀茂御祖、別雷兩社、祈止霖雨。告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐賀茂大神乃廣前爾申賜倍止申久、近來霖雨難晴天、百姓乃農業頗流損世利、因茲天皇大神御社爾犯穢事止毛在止令巡撿爾、上宮四至之內爾伐木、幷穢損事在止勘申世利、仍午驚懼其畏利爲、令申爾、神祇伯從四位下藤原朝臣廣基乎差使、禮代大幣乎令捧持天奉出賜布、掛畏岐皇大神、此狀乎聞食天、相共爾助矜賜天、百姓乃農業豐登良志米、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾、夜守日守爾護幸賜倍止、恐美恐美毛申賜波久止申。御祖社

○伏臘可支、文選閑居賦に牧羊酤酪以俟伏臘之費、注に孟康曰六月伏日曆忌釋曰伏者何也金氣伏藏之日也臘獵也言田獵取獸以祭其先祖翰曰伏臘謂夏有伏冬有臘とあり祖先の祭祀の用にも事缺かざるなと云
○卑聽、卑は原本旱に作る諸本に據て改む
○愚執、執は原本熱に作る諸本に據て改む
○妄致抗聞、妄は原本忘に作る諸本に據て改む
○庚午勅、三代格五に太政官符として載す
○雄神、神名式越中國礪波郡雄神神社
○楊原神、元年正月甲申紀に出づ
○飯河內神、式外、所在未詳
○背布利神、式外、神祇志に在早良郡今在背振山上社地屬肥前神崎郡と云ふあり
（二六月）雜任以上、任は原本仕に作る諸本に據て改む
○陸奥國、國字は例に據て補ふ
○丈部濱成、原本丈を大に作る上文に據て改む

○選士、天平六年紀（續紀上二四七頁）に止す
○令捧持、持は諸本に據て補ふ
○杵嶋郡、杵國郡部に杵嶋は岐志萬と訓り今も同じ
○犯穢事止毛在止、毛は狩谷氏の說に據て補ふ在止の下に或は聞食天の三字脫ちたるか
○巡撿、巡は原本處に作る祕本前本谷本等に據て改む
○上宮、別雷神社なり
○畏利、謝罪なり
○廿七日戊申、此條本朝月令に八月の事さす
○月粮、月は原本日に作る諸本に據て改む
（七月）四日甲寅、諸本寅を戊に作るは非なり
○菅野朝臣宗範、野は原本原に作る正月戊寅紀に據て改む
○從儀師、從は原本位に作る諸本に據て改む
○三歲神、大和國葛上郡葛木御歲神社なり
○廣瀨神、神は尾本谷本に據て補ふ

告文同焉、○廿七日戊申、松尾神社物忌一人充月粮、立爲永例、○廿八日己酉、置中務省扶省掌二員、○秋七月辛亥朔、二日壬子、以從五位上行少納言兼侍從和氣朝臣彝範、爲撿河內國水害堤使、判官一人、主典二人、○四日甲寅、廣瀨龍田祭如常、○五日乙卯、以從五位下行安房守菅野朝臣宗範、爲河內介、散位外從五位下若湯坐連仁高爲安房守、從五位上守右中辨藤原朝臣良近爲築河內國堤使長官、散位從五位下橘朝臣時成、從五位下賀茂朝臣峯雄、並爲次官、判官四人、主典三人、○九日己未、從四位下行伊勢守多治眞人貞峯獻蓮一莖二花、○十七日丁卯、置播磨國國掌二員、把笏、○十九日己巳、置大和國國掌二員、把笏、阿波國三好郡少領外從八位上仕直淨宗等五人、賜姓佐伯直、○廿日庚午、遣大僧都法眼和上位慧達、從儀師傳燈滿位僧德貞、將導師藥師寺別當傳燈大法師位常全、西寺權別當傳燈法師位道隆、元興寺僧傳燈法師位玄宗等於河內國、勞視築堤、○廿二日壬申、是日遣朝使、築河內國堤、恐成功未畢、重有水害、由是奉幣大和國三歲神、大和神、廣瀨神、

○雨勞　勞は澇なるべし
○山頽、諸本及紀略頽を頹に作る
（八月）兼美濃權介、此五字下文に據て補ふ
○遠經、經は原本續に作る諸本に據て改む
○八十九人、狩谷氏云此下恐脫文
○太皇太后宮、仁明天皇皇后藤原順子
○淳和院、淳和天皇皇后正子内親王
○學士生、士恐くは衍
○學生等祿、原本等祿を祿等に作る上文に據て改む
○陣法式、陣は原本陳に作る諸本に據て改む
○隱岐國、岐は閣本谷本淫本佼に作る
○以國宰申請也、以國の二字は閣本尾本前本等に據て補ふ
○上野國群馬郡、群馬の二字は諸本に據て補ふ
○加賀伊勢大神宮司、此事太政官符として三代格一に載す

龍田神、祈無雨勞、以河內水源、出自大和國也、○廿八日戊寅、天皇御紫宸殿、覽相撲、王公侍殿上、○廿九日己卯、山城國言、綴喜郡山本鄉山頽裂陷、長廿二丈、廣五丈一尺、深八尺、底廣四丈八尺、相去七丈、小山推起、草木無變動、時人疑陷地入地中、更推起成山歟、○八月辛巳朔、二日壬午、以從五位下行主殿權助大中臣朝臣國雄、爲神祇大副、從五位下行太皇太后宮大進兼美濃權介藤原朝臣遠經爲亮、美濃權介如故、○五日乙酉、免除隱岐國貞觀七八兩年疫死百姓二千一百八十九人、是日、鑄錢司進新錢貞觀錢一千一百十貫文、勅進獻太皇太后宮及淳和院、各五十貫文、賜東宮廿貫文、頒賜親王已下、五位已上見參者、各有差、自諸司六位官人、迄諸衛府舍人與丁衛士、皆預恩賚焉、○七日丁亥、釋奠如常、○八日戊子、天皇御紫宸殿簾中、令明經博士學生等論義、親王已下、參議已上侍焉、禮畢賜博士學生等祿各有差、○十日庚寅、寫鼓吹司陣法式一通、賜隱岐國、以國宰申請也、○十五日乙未、上野國群馬郡外散位正八位上壬生公石道賜姓壬生朝臣、○十六日丙申、加賀

伊勢大神宮司一員、○十九日己亥、延六十僧於大極殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿日庚子、制、諸國權史生、博士、醫師遷任者、纔得注所遺歷、依讓相代者、注前人歷、○廿三日癸卯、從五位上行天文博士中臣志斐連春繼卒、○廿六日丙午、以山城國葛野郡觀空寺、預之定額、勅、觀空寺者、嵯峨太上天皇創建、宜以其後親王源氏爲檀越、永爲恒例、○廿八日戊申、先是對馬嶋言、境近新羅、動恣侵掠、既無其師、將機何用、絕域孤嶋、誰救警急、適者有聞、彼國寇賊、學翻習戰、若不豫備、恐難應卒、望請置弩師一員、勅大宰府、簡擇其人、補任言之、立爲恒例、○授伊豫國正三位大山積神從二位、正四位下礒野神、野間神、瀧神、伊豫村神、並正四位上、正五位下村山神正五位上、常陸國從四位上筑波男神正四位下、從四位下筑波女神從四位上、從五位下羽梨神從五位上、參河國正五位下智立神、砥鹿神、並正五位上、從五位上狹投神正五位下、出羽國白磐神、須波神、並從五位下、○九月庚戌朔、日有蝕之、○三日壬子、御齋燒燈如常、○七日丙辰、明日應遣使於伊勢大神宮、由是大祓於建禮門前、○八日

○注所遺歷、狩谷氏に歷下當に名字二字ありと云はれど下文に前人歷とあれば脫字とも見えず、總本閣本等に遺を遺に作る
○中臣志斐連春繼卒、二年十一月壬寅紀に從五位下を授けられ十一年十月壬寅從五位上に進む
○觀空寺、山城志に葛野郡觀空寺村小堂一宇僅存すとあり
○動恣侵掠、恣は原本恐に作る尾本に據て改む
○補任言之、言は原本啓に作る諸本に據て改む
○大山積神、續後紀承和四年八月戊戌紀及貞觀二閏十月壬戌紀に出づ
○礒野神、八年閏二月壬子紀に出づ
○野間神、三年五月甲午紀に出づ
○瀧神、二年閏十月癸亥紀に出づ瀧は原本龍に作る總本閣本尾本等に據て改む
○伊豫村神、四年九月甲申紀に出づ
○村山神、仁壽三年六月甲戌紀に注す
○筑波男神筑波女神、天安二年五月壬戌紀に出づ
○羽梨神、神名式常陸國

國茨城郡羽梨山神社、今西茨城郡岩間町岩間上郷
○智立神祇鹿神狹投神、何れも六年二月丙子紀に出づ
○白磐神、式外、所在未詳、今羽前國西村山郡に白岩町あり由あるか
○須波神、式外、所在未詳
（九月）賦天錫難老詩、菅公此時の文人中にあり賦詩並序を菅家文草一に載す
○申事由、申は諸本及類史三に據て補ふ
○[illegible]門皇子、貞保親王延長二年六月十九日薨
○僧香嵩、香は諸本に據て補ふ
○[illegible]馬、馬は諸本焉に作り下文官宣には祕本爲に[illegible]
○眞平、諸本眞午に作る
[illegible]過無人とあり
[illegible]
[illegible]

丁巳、遣正五位下守左中辨源朝臣直、右大史正六位上廣階宿禰八釣於伊勢大神宮、奉神寶、是日、太政官停尋常政、但非廢務之例也、○九日戊午、重陽節、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、喚文人賦天錫難老詩、內教坊奏女樂、宴竟賜祿各有差、○十一日庚申、去八日、內裏有犬產穢、仍停奉伊勢大神宮幣使、遣大舍人頭從五位上礒江王、神祇大副從五位下大中臣朝臣國雄、申事由、大祓於建禮門前、而發之、文章得業生正六位下菅原朝臣道眞加叙一階、以對策得中上第也、須依格旨、加進三階、而本位正六位下、仍叙一階、○十三日壬戌、第四皇子誕、皇太子同母弟也、○十五日甲子、遣新羅人廿人配置諸國、淸倍、鳥昌、南卷、安長、全連五人於武藏國、僧香嵩、沙彌傳僧、關解、元昌、卷才五人於上總國、潤淸、果才、甘參、長馬、才長、眞平、長淸、大存、倍陳、連哀十人於陸奥國、勅、潤淸等處於彼國人掠取貢綿之嫌疑、須加重譴、以肅後來、然肆眚宥過、先王之茂典、宜特加優恤、安置彼國沃壤之地、令得穩便、給口分田營種料、幷須其等事一依先例、至于種蒔秋獲、並給公粮、僧沙彌等安置有供定額寺、令其供給、路次

諸國、並給食馬隨身雜物、充人夫運送、勤存仁恕、莫致寒苦、太政官宣久、新羅人大宰府乃貢綿乎盜取禮利、潤清等廿人同久此疑當遣在利、須久波其由乎責勘天、法乃任爾罪奈倍給倍久有止毛、罪乎免之給比、身乎矜給比天、安可留倍岐所止量給天、潤清等五人乎波武藏國爾、元昌等五人乎波上總國爾、潤清等十人乎波陸奧國爾退給波久止宣、潤清、長馬貢平等、才長於造瓦、預陸奧國修理府料造瓦事、令長其道者、相從傳習、律師法橋上人位長賢卒、○冬十月己卯朔、天皇不御紫宸殿、於仗下賜飲侍臣、有勅令左右近衛府、遞擧音樂、○二日庚辰、美作國置國掌二人、把笏、淳和院返封三百七十五戶、○七日乙酉、地震、○十九日丁酉、請六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿五日癸卯、伯耆國飢、疫死者衆、優復河村久米會見日野四郡百姓一年、○十一月己酉朔、四日壬子、河內伯耆兩國置國掌各二員、把笏、○八日丙辰、先是九月十一日、內裏有犬產穢、停奉幣伊勢大神宮使、是日遣大舍人頭從五位上礒江王、奉常幣幷鑄錢司及山城國葛野郡鑄錢所等新鑄錢、○十二日庚申、平野春日祭如常、

○令得[illegible]、令は原本今に作る朝本に據て改む
○[illegible]利、利は原本[illegible]に作る諸本に據て改む
○大宰府乃、府は尾本に據て補ふ
○安可留倍岐、留は原本爾に作る諸本に據て改む
○令長其道、令は原本今に作る諸本に據て改む
○長賢卒、四年正月丁丑紀に見ゆ本朝高僧傳に傳あり
(十月)河村久米會見日野四郡、河村久米は今東伯郡に、會見は西伯郡に入り日野は今も同じ
(十一月)奉常幣、常は諸本及類史三に據て補ふ

○眞繼、眞は原本直に作る諸本に據て改む下同じ
○主水佑、佑は原本祐に作る閣本尾本谷本等に據て改む
○從七位上(冬名)、十一年十二月丁酉紀七を六に作る
○宗像櫟谷淸水堰小社五神、何れも式外なり宗像櫟谷は葛野郡櫟谷にあり淸水は嵐山蛇谷に、堰神は大堰神社と稱し下嵯峨大堰川北岸に、小社は上山田村にあり
○前爾、堰神告文にも前とあり前上に廣字を加ふるは私意なり
○賜倍止申久、申久の二字は諸本に據て補ふ
○饒益神寶、饒は原本鐃に作る閣本前本淀本に據て改む
○加太部加太部、此六字原本加太之の三字に作る諸本及紀略に據て改め補ふ下同じカタへはカタは堅むる意にて鍛の字當る
○早穗、ハツホと訓むべし最初に鑄たる錢を云稱

○十二日辛酉、筑後權史生正七位上佐伯宿禰眞繼奉進新羅國牒、即告大宰少貳從五位下藤原朝臣元利萬侶與新羅國王通謀、欲害國家、禁眞繼身、付撿非違使、○十七日乙丑、園韓神祭如常、是日、分遣使者諸社、奉鑄錢司及葛野鑄錢所新鑄錢、賀茂御祖別雷兩社使前安藝介從五位下大中臣朝臣是直、松尾社使神祇權大祐正六位上齋部宿禰高善、稻荷社使神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道、石淸水社使主水佑正六位上大中臣朝臣坂田麻呂、平野社使神祇少副正六位上大中臣朝臣有本、梅宮社使大監物從五位下橘朝臣茂生、春日社使雅樂少允從七位上大中臣朝臣冬名、大原野社使主水正正六位上大中臣朝臣鹿主、又近於葛野鑄錢所宗像、櫟谷、淸水、堰、小社五神、奉鑄錢所新鑄錢、告文曰、天皇我詔旨止、宗像神乃前爾申賜倍止申久、依年序漸積、貨幣已賤天、改饒益神寶、爲貞觀永寶、常乃鑄錢司路遠妨多爾依天、加太部加太部於山城國葛野郡天令鑄作、今神社作鑄錢所爾近久坐須、仍所鑄作之早穗廿文乎、左馬助從五位下多治眞人藤吉乎差使天、令捧持天奉出賜布、

にいふも同じ
○申賜波久止、此五字諸本に據て補ふ
○令捧持天奉出賜布、令以下四字は諸本に據て補ふ
○追禁、追は原本進に作る諸本に據て改む
○主工上、上は原本王に作る今諸本に據る狩谷氏は當レ作二主工正一と云り
○清原宗繼、宗は原本崇に作る祕本閣本前本等に據て改む
○土左國、左原本佐に作る諸本に據て改む
○伊勢神、式外、神祇志所在吾川郡本宗上分村とす
○佐伯眞繼、上文の例に據らば正七位上佐伯宿禰眞繼とあるべきを位階と尸とを略せり
○防援、援は原本授に作る宮本に據て改む
○以從五位上、以は祕本閣本尾本に據て補ふ

此狀乎聞食天、國家平安志天、貨幣豐足之米賜倍止申賜波久止申、又曰、天皇我詔旨止、掛畏神乃前爾申賜倍止申久、依年序漸積、貨幣已賤天、改鑄益神寶、爲貞觀永寶、當乃鑄錢司路遠妨多爾依天、加太部加太部於山城國葛野郡天令鑄作、今神社作鑄錢所爾近久坐有、仍所鑄作之早穗十五文乎、左馬助從五位下多治眞人藤吉乎差使天、令捧持天奉出賜布、此狀乎聞食天、國家平安志天、貨幣豐足之米賜倍止、申賜波久止申、櫟谷、清水、小社神告文准此、勅大宰府、追禁少貮藤原朝臣元利萬侶、前主工上家人漢人清原宗繼、中臣年麻呂、興世有年等五人、以從五位下行大內記安倍朝臣興行、爲遣大宰府推問密告使、判官一人、主典一人、○十八日丙寅、鎭魂祭如常、○十九日丁卯、夜、天皇御神嘉殿、齋肅親奉新嘗祭、○廿日戊辰、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、大歌五節舞如常、宴畢賜祿各有差、○廿三日辛未、授土左國正六位上伊勢神從五位下、讃岐國置國掌二人、把笏、○廿五日癸酉、地震、○廿六日甲戌、筑後權史生佐伯眞繼差加防援、下大宰府、○廿八日丙子、以從五位上行散位頭正峯王爲少納言、從四位

○仲統爲備前守、此事上文正月戊寅紀に出て此に重出す其由詳ならず
○(十二月)華風、華は原本花に作る今諸本に據る
○群盜之徒、徒は原本從に作る諸本に據て改む
○革面、易革卦の象傳に小人革面順以從君也とあり
○麁獷之輩、獷は原本擴に訛る諸本に據て訂せり獷は麁惡なるを云
○侵牟、牟は原本于に作る諸本に據て改む、漢書景帝紀に侵牟萬民、注に李奇曰牟食苗根蟲也侵牟食民比之蟊賊也とあり
○分大野郡爲兩郡、大野益田の兩郡としたるなり
○安隆寺、羽後國仙北郡細屋村安城寺其遺址かと云、一說には由曲驛安養寺を以て之に擬す
○和顏悅色、陶潛庶人孝傳贊江革傳に和顏悅色以盡歡心とあり孝子の親に事ふる容を云
○墓次、墓は原本暮に作る安田本黑川校本に據て改む墓次は墓邊の意
○哀紘、紘に泣若、は泣の訛なるべし

上行兵部大輔藤原朝臣仲統爲備前守、兵部大輔如故、○十二月戊寅朔、二日己卯、太政官下符上總國司、令教喩夷種曰、折取夷種、散居中國、縱有盜賊、令其防禦、而今有聞、彼國夷俘等、猶挾野心、未染華風、或行火燒民室、或持兵掠人財物、凡群盜之徒、自此而起、今不禁遏、如後害何、宜勤加捉搦、改其賊心、若有革面向皇化者、殊加優恤、習其性背吏教者、追入奧地、莫使麁獷之輩、侵牟柔良之民、○八日乙酉、勅分飛驒國大野郡爲兩郡、出羽國由本郡安隆寺、預之定額、先是、若狹國言、遠敷郡人丹生弘吉、幼失其父、與母俱居、和顏悅色、冬溫夏涼、始自貞觀元年、爰及今茲、春講寂勝王經、秋演妙法華經、朝就墓次、擗踊哀紘、暮還閭門、孝敬周備、其母常聞善誘、落髮入道、耕種穀稼、不爲水旱風蝗所損傷、隣里以爲、孝感之所致也、勅叙位二階、○九日丙戌、陸奧國安積郡人矢田部今繼、丈部淸吉等十七人、賜姓阿倍陸奧臣、○十一日戊子、月次神今食祭、天皇御神嘉殿、親奉幣祭、○十三日庚寅、勅收山城國葛野郡百姓地六段三百五十二步、賜鑄錢所、以乘陸田相博給本主、○十七日甲午、獻青

前幣於諸山陵墓、天皇御建禮門發使、是日、復常陸國信太那珂兩郡百姓一千二百人、以旱飢也、○廿五日壬寅、制、越後隱岐兩國調庸未進、當年不究者、限明年十二月卅日以前、爲究進之期、諸國非受業博士醫師、以四年爲秩限、但出羽及大宰管內諸國、五年爲限、又遂任之人、其歷四年、至讓他人、全滿六年、令須計遂任歷、令終歷、又諸衞府官人舍人、兼任諸國史生者、令式部省移兵部省、又自文官遷武官、自武官遷文官之人、令式部兵部兩省、互相移送、其自他司遷兵部被管之輩、亦復同此、又諸國司已下、解退之後、不待解由與不、身去他處、及逋避不署不與解由狀、科公事稽留之罪、其狀直下所司、令勘奏、不許申請、若新司不載前司所執、致令愁訴、亦科公事稽留之罪、奪其俸料、又諸國博士醫師受業師料、割所請公廨十分一、送納本寮、又諸國損戸課丁、與得丁同率、又諸國朝集雜掌二人、免其調庸、今停一人、免稅帳雜掌一人調庸、其不免調庸之輩、以諸國給食料、又朝集雜掌二人、在京之日給公粮、今從停止、以省公費、又諸國工匠

○閨門、小門なり家な云閨は原本國に作る諸本に據て改む
○耕種穀稼、種は祕本閣本尾本等に據て補ふ
○吏部清吉、原本吏を大に清を清に作る吏は黑川校本に據り清は祕本閣本谷本に據て改む
○奉幣祭、紀略には幣字なし類史九は此に同じ
○乘陸田、班田に餘れる畑なり
○相博、博は字書に貿易也とあり原本博を轉に作る閣本前本谷本等に據て改む
○十二月卅日、卅は原本世に作る諸本に據て改む
○爲究進之期、此下に又字あるべし
○不待解由與不、與不は原本不與に作る諸本及類史八十に據て訂す
○稽留之罪、罪は原本非に作る諸本に據て改む
○俸料、料は原本斷に作る同上に據て改む
○諸國博士醫師受業師料云云、太政官符として三代格六に出づ
○諸國損戸課丁云云　同じく格八に出づ
○諸國給食料、料は原本

断に作る諸本に據て改む
○不聽禁色爲下衣、彈正式に凡諸禁色者、惣雖下衣不聽服用とあり禁色は禁止せられし色彩なり其色種々あり彈正式に詳なり
○烏犀帶、彈正式に凡烏犀帶聽六位以下著用、但有通天文者不在聽限とあり通天の文とは斑犀の事なり鵜又は鴛など空なかくるもの、模樣あるなど云
○著諸禁色云云、是も彈正式に見ゆ
○依法、依は原本仍に作る閣本前本淀本に據て改む
○家門聽建大路、彈正式に見ゆ建は原本達に作る祕本尾本及式に據て改む
○亦聽之、此下に又字あるべし
○運廩院雜物車馬云云、彈正式に見ゆ拾芥抄中末に廩院は在民部省東納諸國庸租米充公用納下厨家之殘とあり廩は原本稟に作る拾芥抄及文德紀仁壽二年閏八月己酉紀に據て改む
○美福門腋門、腋門の二字は祕本閣本尾本及式に

役夫、米鹽之外、加給醴魚和布等。又定交易商布直稻十束、凡商布直六束。又諸國雜交易物、有未進者、准未進之數、沒郡司職田直。又五畿七道諸國百姓請開荒田者、未及六年身死、更延六年、聽子孫耕食。又諸國司已下、到任之後留京者、停給事力公廨田、但殊被徵召、未經一年皈國者、不在此限。又撿疫死、幷賑給使、准撿不堪田使、爲程期。又內記監物解由狀、一准判事。又不聽禁色爲下衣。又聽六位已下著烏犀帶、但有通天文者、不在聽限。又著諸禁色、皆從破却、但五位已上錄名奏聞、僧尼著禁色、依法苦使、律師已上錄名奏聞。又三位已上、及四位參議家門、聽建大路、薨卒之後、子孫居住者、亦聽之。无位一世王、遇三位下馬、七位已下、遇无位二世王不下馬。又運廩院雜物車馬、聽出入自美福門腋門、大膳職自郁芳門、春宮坊自待賢門、中院木屋自談天門。又省中務省史生六人。又內舍人闕荷前使者、奪一年季祿、大舍人奪夏冬衣服。又齋宮寮幷所管諸司始任者、並給鐵符。又諸大寺幷有封寺別當三綱、以四年爲秩限、遷代之日、即責解由、但廉節可稱之徒、不論

據て補ふ
○中院本屋、本屋は原本等至に作る諸本及式に據て改む
○可稱之走、往は原本從に作る諸本に據て改む
○未得解由之輩永不任用云云、之字は元慶六年六月甲戌紀に據て補ふ用以下別勅任に至る十二字は諸本に據て補ふ
○又諸寺、寺は原本司に作る元慶六年六月紀に據て改む
○覺擧遺編、原本擧を奉に遺を遺に作る諸本に據て改む
○依理不盡、依は原本仍に作る同上に據て改む
○與不之狀、與不は原本不與に作る同上に據て訂す
○半分已上死、死は原本充に作る尾本閣イ本に據て改む
○葬料、料は原本斷に作る諸本に據て改む
○宇摩郡、摩は原本和に作る諸本に據て改む
○勘糺、糺は原本記に作る類史百七に據て改む
○又諸國雜交易物云云、上文廿五日條に出づ重複なるべし

年限、殊錄功績、申官重賞、自餘諸寺、依官符任別當、及尼寺鎭、並同此例、其未得解由之輩、永不任用、亦不預公請、但僧綱別勅、任別當者、不在此限、又諸寺以別當爲長官、以三綱爲任用、解由與不勘知、並覺擧遺編、及依理不盡返却等之程、一同京官、其與不之狀、令綱所押署、又北陸、山陽、南海、西海等道、諸國官物、運京人物漂損者、惣計所乘之人、半分已上死、乃從原免、又大宰府、及管內國司卒死者、停殯歛料、只賜賻物、諸賻物之上、兼賜葬料者、同從停止、○廿六日癸卯、伊豫國宇摩郡人從七位上苅田首倉繼、苅田首淨根等、賜姓物部連、○廿七日甲辰、制、彈正臺復天長九年十一月廿九日格、每月巡撿京中、幷勘糺諸司諸院諸家及內外主典已上犯狀、直移式部兵部二省、貶奪考祿、又諸國雜交易物、有未進者、進未進之數、沒郡司職田直、○廿九日丙午、以從四位上棟貞王、從五位上連扶王、從四位上源朝臣覺、從四位下源朝臣元長、從五位上藤原朝臣興世、橘朝臣春成、家原宿禰氏主、高向朝臣公輔、藤原朝臣積善、從五位下春道宿禰永藏、興道宿禰名繼、藤原朝臣宗枝、巨勢朝臣文雄、

〇源朝臣覺、原本覺を寛に作る諸本に據て改む

平朝臣季式、多治眞人藤善、藤原朝臣門宗、藤原朝臣遠經、橘朝臣廣相、高階眞人令範等、並爲二次侍從一、是日、藥師寺僧傳燈大法師位平勢爲二權律師一、策文曰、天皇我詔旨止、法師等爾白左倍止宣勅命乎白、大法師平勢、仕レ公年久、而今身沈二重病一天、起居失レ便天波部利、此乎聞食憐多末比天、殊爾權律師爾任賜事乎、白左部止宣勅命乎白、上總國置二國掌二員一把レ笏、大祓於朱雀門前一、并追儺如レ常、

本尾等此下に可七日下書入こあり、公卿補任及古今目錄を按ずるに此日源冷を正四位下に源直藤原諸葛を從四位下に藤原保則を從五位上に藤原高經を從五位下に叙すさあり尚ほ多かるべし
〇(注)男一人女十一人、本定書寫の時に抄略せしもの記入せしならん
〇大極殿齋講、大極殿の三字は類史百七十七及紀略に據て補ふ
〇太白、金星なり
〇壹伎嶋、伎は原本岐に作る閣本谷本蓬本に據て改む下同じ
〇賜宴侍臣、原本賜宴を宴賜に作る類史七十二及紀略に據て改む
〇雅樂奏樂、雅樂の二字は類史に據て補ふ
〇如常、類史各有差の三字に作る
〇大射之禮、之字は類史に據て補ふ
〇皇太后御體不豫、原本后下に宮字あり諸本及類史(七十二)紀略に據て削る
〇廿四日、此條諸本に缺く
〇(注)云云廿二人、此廿

歌之節、天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、雅樂奏樂、宮人踏歌、日暮賜祿如常、〇十七日甲子、天皇御建禮門、觀大射之禮、〇十八日乙丑、天皇御射殿、觀四府賭射、〇廿一日戊辰、皇太后御體不豫、仍停内宴、〇廿四日辛未、大雨雪、〇廿九日丙子、二品行式部卿忠良親王爲上野太守、式部卿如故、二品行治部卿賀陽親王爲大宰帥、治部卿如故、云云、廿二人、〇二月丁丑朔、釋奠如常、〇四日庚辰、祈年祭、〇八日甲申、自去正月、公卿未聽太政官尋常政、是日始聽之、時改巳一刻、用辰四刻、遵河魁暦滅門也、是日、春日祭、〇九日乙酉、二品行治部卿兼大宰帥賀陽親王抗表、長請罷治部卿、〇十四日庚寅、天皇御紫宸殿視事、承和以往、皇帝毎日御紫宸殿、視政事、仁壽以降、絶無此儀、是日、帝初聽政、當時慶之、〇節婦出羽國田川郡人大荒木臣玉刀自、夫死之後、廬於墓側、歸念佛理、守節不移、叙位二階、免戸内租、表於門廬、〇十六日壬辰、授近江國正六位上天若御子神從五位下、〇十七日癸巳、天皇御紫宸殿視事、〇廿六日壬寅、授常陸國正四位下筑波男神從三位、因幡國從四位下宇倍大神正四位下、阿

二人中其氏名の明なるは菅原道眞は玄蕃助に忠貞王は大和守に源興基は播磨權守に藤原□則は備中守に安倍清行は周防守に任ぜらる
〔三月〕四日庚戌、此條類史十及紀略に據て補ふ
○日去正月、自は紀略に據て補ふ
○避河魁曆滅門、河魁は辭源に叢神名月內凶神也在月建前三辰子月起酉順行十二辰ごあり叢神は星命家の說にて十二辰に當ふ所の善神惡殺なり滅門は年中三惡日の一にて滅門日あり
○是日春日祭、此五字は紀略に據て補ふ
○長講經治部省、長字は衍なるべし紀略には卿下に去云の二字あり此に上表ありしを抄略せしなり
○門盧、盧は閭の誤なるべし
○天若御子神、式外、神祇志に所引大上郡門屋村にあり
○猶渡も神、已に注す
○宇倍人神、同上
○天石門和氣八倉比咩神七年二月己卯紀に出づ
三月、□日二十人、紀

波國從四位下天石門和氣八倉比咩神從四位上。○三月丁未朔。日有蝕之。○二日戊申。除目。二十人。○三日己酉。御齋燒燈如常。○八日甲寅。延六十僧於紫宸殿。限以三日。轉讀大般若經。○十一日丁巳。除目。八人。○廿六日壬申。授神階。河內國去年水旱。農民失業。詔以攝津國正稅稻五萬束賜之。○是月霖雨。京師多偸兒。詔遣左右近衞府官人已下十人。騎左右馬寮細馬。警夜監察。○夏四月丁丑朔。天皇不御紫宸殿。於仗下賜飮侍臣。有勅令左右近衞府遞奏音樂。○三日己卯。授下總國正五位下意富比神正五位上。石見國從五位下大歲神。大原神。並從五位上。山城國正六位上澄水神。市河神。出羽國利神。伯耆國勝宿禰神。石見國霹靂神。國府中神。肥前國宗形天神。並從五位下。○四日庚辰。廣瀨龍田祭。近江國勢多橋火。○六日壬午。因幡國兵庫火。○八日甲申。停平野梅宮祭。以有穢也。○灌佛於內殿。如常。○十日丙戌。勅。功多者賞厚。先王之通規。德茂者位尊。往哲之彝訓。是故蒼精既著。增高於曲阜之基。朱火以光。加映於博陸之地。爰及本朝。亦有舊典。皆迹存於鉛槧。事絢於緹蒸。太政

等には單に任官さあり除目以下の五字は後人の加筆ならむ此廿人の中に氏名の明なるは藤原家宗參議に菅原道眞少内記に任ぜらる

○除目八人、此中氏名の明なるは藤原諸葛兵部大輔に在原友于左京少進に紀有常信濃權守に藤原高藤備中權介に任ぜらる

○廿六日壬申、此條紀略に據て補ふ

○是月霖雨、霖雨の二字も紀略に據て補ふ

(四月)不御紫宸殿云云　此條類史七十五には天皇御紫宸殿賜宴侍臣賜祿各有差さあり紀略は略文なれど御紫宸殿賜於侍臣とあり然れば不御の不は衍なるべし

○意富比神、五年五月戊子紀に出づ

○大歳神、神名式石見國那賀郡大歳神社、所在未詳

○大原神、同式同國邑智郡大原神社、所在未詳

○澄水神、十二年十一月乙丑紀清水に作る

○市河神、式外、神祇志所在葛野郡太秦廣邑市河西

大臣外祖父藤原朝臣、風槩沈遠、器度淹灑、攝籙之寄收歸、籌計之任是重、朕自在襁褓、賴其保生、義爲君臣、恩過父母、蓋有不世之功、須受非常之寵、而鳴謙在心、卑損無已、所以行纈書之績、春秋業茂、成隆崇之典、歲月寖寡、今朕已得成人、大臣頽齡漸暮、若遂捨多之美、不崇加異之章、則恐當時後代、將敗謗於朕躬、夫太政大臣、法當食邑三千戶、及隨身兵仗、國有成式、又准三宮給年官、先帝之恩寵也、而至于封邑、固讓二千、唯享千戶、隨身等事、皆辭不受、朕以、祿法所當、古賢不辭、既能有其功、居其位、何不食其祿、增其威、然則所辭封邑等事、乖元老崇班之義、非國家褒飾之心、故今不敢踰法、唯盡其所當、宜其封戶全食三千、以內舍人二人、左右近衞、左右兵衞各六人、爲其隨身之兵、又給帶仗資人卅人、年官准三宮事、亦當奉遵先帝之遺詔、又大臣所保官爵、皆是先朝之寵章也、於朕之時、無一加益、仍欲增一位之餘階、而深忌亢極、固自遜辭、朕不敢睽違、全其沖挹、斯亦屈己之志、成人之美也、普告遐邇、令知朕意、○十三日己丑、從五位下行陰陽助兼陰陽博士笠朝臣名高卒、云云、○十四日庚寅、

○利神、原本頭注に利蓋副川之誤とあり副川神は式出羽國山本郡副川神社今南秋田郡内川村浦大町
○勝宿禰神、式外、神祇志所在久米郡下田中村
○韓竈神、神名式石見國邇摩郡韓竈神社、湯里村湯里
○國府中神、式外、神祇志所在那賀郡下府村伊甘社地
○宗形天神、式外、同志所在松浦郡田平村宗形
○廣瀨龍田祭、此五字紀略に據て補ふ
○丙戌勅、都氏文集四に出づ良香勅を奉じて奏する所なり
○菅精頎菅云、菅精は周なり周興りて周公旦を曲阜に封じ其功に報いたるを云
○朱火以光云云、朱火は漢なり漢興りて功臣霍光を博陸侯とせしを云
○鉛槧、鉛は文字を書く具、槧は書き截する爲の木版なり書籍を云西京雜記に揚雄懷鉛提槧とあるに出づ
○絢於緹蕉、絢は文彩貌なり緹蕉は詳ならず文集絢を徇に蕉を菌に作る

太政大臣從一位藤原朝臣良房抗表曰、臣伏奉今月十日勅旨、賜臣以食邑如舊命、年官准三宮、帶刀資人、隨身兵仗等事、苟恩不力、銜膽無間、臣聞、太政大臣者、上理陰陽、下經邦國、一人有慶、師範猶施、四海無波、儀形白用、而先帝不棄臣庸瑣、委以此崇班、純陽未免履氷、臘月逾添流汗、自愧形影、深執撝謙、唯許減封、三分有一、又隨身兵仗等事、雖舊貫、臣不敢當其仁、年官則恩是新情、臣未堪爲其首、故臣並固辭、以視不虛受、今陛下、更憲章先帝、重宜慰鴻私、忠誠不移、先後惟一、臣欲推賢以避路、何私陛下公選之官、將扶老以干城、何分陛下宿衞之士、況比年調和不偶、水旱重仍、倉廩少禮節之資、城池失金湯之險、故去十一年六月廿六日、聖主下勅曰、服御常膳、並宜減撤、同年七月二日、公卿上奏曰、五位已上封祿、亦暫減折、其議未復、其事猶存、豈君臣偏好卑謙、蓋內外共待豐稔、若以斯時、全食彼邑、欺恥格於先帝、而取嫌猜於當時也、且尸素者、天奪其鑒、充盈者鬼瞰其家、溫飽有餘、何以忘止足、年齡已暮、暫欲養遊魂、臣所以不奉遵、公私兼濟而已、不任懇款屛營之至、謹修表狀、陳讓以聞、不

許、○十五日辛卯、月行奄心前星、呑蝕其中大星、○十八日甲午、太政大臣重抗表曰、去十五日、中使中納言藤原朝臣基經至、奉宣聖旨、返臣上表、將遂先勅、頻苦刻肌、再黷聾耳、中謝、臣自謂、功之輕薄、鴻毛則其重萬鈞、賞之深淵、滄海則其淺三尺、蓋荒年祭祀、禮不必充豐、嗛歲威儀、事或從儉約、今陛下藜羹自存、王公茅土且減、臣全不食邑之意、將斷先己之嫌、若事不得已、義可必行、五稼登年、群臣復舊、然後同享所減、臣願足矣、又陛下不許臣就私第、賜直廬於禁中、需仗百重、隨身何用、虎賁千列、帶仗安施、臣所以固辭、亦復在此、臣所有一兩僕隸、皆是陛下幼年之侍童也、隨分得官者、或年三四人、陛下以爲慰舊功力、臣以爲拜家數人、未報萬乘之先恩、何擬三宮以新制、臣持心不重、暫欲樂地中之山、稟質猶輕、恐不爲風下之草、今不堪悃誠、重表以聞、勅答曰、表翰累沓、含咀雅言、來誨慇懃、反覆而已、公仁爲己任、化導朕躬、所以推朕之心、置公之腹久矣、蓋功被天下者、當受天下之重賞、而公風素在懷、雪白其節、不履肥美之地、屢吐降挹之詞、夫謙云損云、減省所享之謂也、今公空有上台之號、

○太政大臣外祖父、文集に外祖父太政大臣とあり良房なり
○頻黷、考に謂事之要約乎黷纖也約也と云文集には橋藤に作る
○據計、計は閣本尾本前本谷本淀本斗に作る
○襤褸、原本襤褸に作る前本及文集に據て訂す
○義爲君臣云云、後漢書馮異傳に將軍之於國家義爲君臣恩猶父子とあり
○鳴謙、易謙卦の語、謙遜な云
○所以、以は文集に據て補ふ
○隆崇之典、隆は原本降に作る文集に據て改む
○寂寞、寞は文集寥に作る
○捨多之美、易謙卦の象傳に君子以裒多益寡稱物平施、音義に裒字書作捊廣雅云捊減とあり謙讓の美德を云
○准三宮、太皇太后皇太后及皇后に准じて待遇するを云
○年官、毎年據一人目一人內官一人を給與せられ其收得を賜はれる家に收むるなり原本官下に給字

顧辭以其封賞、豈非行過於謙、事違於法乎、仍以先辭之封賞、纔爲今日之褒賜、皇天猶當降以禍、鬼神未可害其盈、何貪公好謙之高義、不顧朕忘德之醜名、今朕剗戾崇餝之典、孤負長養之恩、公是朕之鷹鸇、亦須從其熊虎、加公之威重、增朕之干城、豈以在直廬之故、闕其隨身之兵仗、又年官者、先帝之遺規、非朕之新意、孝子善述父志、忠臣不失主心、公爲忠臣、朕爲孝子、不亦美乎、但來表以爲穀祿載登、鳧雁在御、然後食邑、固不敢當、朕重違元老之意、欲開福謙之門、宜分爲三、以享其二、自餘一如前詔、卽斷後章、○廿日丙申、諸衞警固、緣賀茂祭也、○廿一日丁酉、停賀茂祭、使有死穢也、○廿二日戊戌、諸衞解嚴、

あり紀略及文集に據て刪る
○而至于封邑、而字は文集に據て補ふ
○唯享千戸、唯は原本准に作る紀略に據て改む
○元老、毛詩小雅采芑章に方叔元老、古註に元大也五官之長、出於諸侯、曰天子之老とあり
○不敢踰法、不は文集に據て補ふ
○左右兵衞、此の四字は紀略及文集に據て補ふ
○奉遵、遵は原本導に作る諸本に據て改む
○增一位之餘階、文集には授正一位とす
○元極、元は至高也
○謙遜、謙は諸本及文集に據て補ふ謙は遜なり
○沖挹、謙退なり晉書恭帝紀に出づ

○成人之美、之は伴校本及文集に據て補ふ　○笠朝臣名高卒云云、云云は傳ありしを略せしなり名高は齊衡三年正月辛未正六位上より外從五位下に陞從五位下に進み官は陰陽介播磨介備前權介備中介等を歷任す　○良房抗表、此表は菅家文草十に出づ　○衛贍、原本衛瞻に作る祕本及文草に據て改む衛贍は幹當するを云晉書武帝紀に出づ　○上理陰陽云云、職員令に太政大臣右師範一人儀形四海經邦論道燮理陰陽とあり　○純陽云云、純陽は五月仲夏の月なり盛夏すらなほ恐懼することは薄氷を履むが如きを云　○臘月云云、同じく恐懼するを云臘月は十二月なり　○撝謙、謙退を云易謙卦の語　○臣不敢當其仁、臣は文草に據て補ふ　○恩是新情、年官を賜はるは從來例のなき新なる御恩情なりとなり　○鴻私、鴻恩なり私は特に恩寵を受くるを云唐章懷太子請修書表に見ゆ　○將扶老以干城云云、已日身に老齡の身を扶持して國家の守とならむことを願へは況や陛下宿衞の士を己か警身兵仗に賜りて衞士の勢を殺ぐことをせむやとなり　○不偶、偶は諧也合也　○少禮節之實、原本頭注に實本作賓今依文草正しきことあり管子牧民篇に倉廩實則知禮節衣食足則知榮辱とあるに據れり　○失金湯之險、後漢書光武帝紀贊に金湯失險、注に金城湯池不可攻矣言以喩堅固其熱とあり　○斷時、原本頭注に舊誤斷作期今以文草改之とあり　○寡恥格於先帝、恥格は論語爲政篇に道之以德齊之以禮有恥且格とあるに出づ格は正也恐懼慚愧するを云先帝に對し食邑等を辭し奉りしは慚愧の體を以て欺き奉りし事となるべしとなり　○臣寄耳璧、寄は原

は奮に作る文章に據て改む左傳僖二年に天奪之鑒而益其疾也とあるに出づ　○遑顧有餘何以忘北足、原本頭注に舊闕餘字今以文草補入誤忘作忘闕北足二字今以文草改補とあり　○屏營、恐惶の意　○毎心前星、毎は原本毎に作る諸本及紀略に據て改む毎は淹留也心は廿八宿の一にて北極の東にあり　○重抗表、同じく文草十に載す　○中納言藤原朝臣基經、或說に公卿補任是年藤氏中納言常行一人也而菅家文草傍書基經二字今以義文傍義者恐當除此二字と然るに紀略にも基經とあれば必しも誤といふべからず　○將遂、考に遂疑逐と云　○刻肌、文選上責躬詩表に刻肌刻骨、注に深自誡也とあり　○蕃耳、蕃は飛に通ず世人への聞えを云前表の取嫌猜於當時の意なり　○中壽、此二字文草に據て補ふ　○功之輕薄云云、輕き鴻毛すら我功に比すれば萬鈞の重さあり深き滄海すら恩賞に比すれば一尺の淺さに過ぎずと云ふこゝろなり　○禮不必奉豐、禮は文草に據て補ふ　○嗛哉、穀梁傳襄廿四年に一穀不升謂之嗛とあり　○茅土、文選答蘇武書の注に天子將封諸侯各取方土苴以白茅以爲社とあり封土を云　○不食邑、原本頭注に食本作全今以文草正之とあり　○五稼登年、五稼は五穀なり年は五穀熟するを云　○霜仗、兵仗に同じ李白の詩に霜仗懸秋月とあり　○虎賁、近衛の士を云周禮夏官に虎賁氏あり天子の出入の先後儀衞を掌る　○持心、原本頭注に心舊作以今以文草正之とあり　○地中之山、易謙卦の象傳に地中有山謙とあるに據りて謙退の意を表す　○風下之草、論語顏淵篇に君子之德風小人之德草草上之風必偃とあるに據れり　○栁咨、都氏文集四に出づ　○表輸、輸は原本喩に作る閣本尾本に據て改む　○推朕之心云云、後漢書光武紀に蕭王推赤心置人腹中とあるに據れり　○蓋功被天下、天以下受に至る五字は諸本及文集に據て補ふ　○降挹、挹は抑と通ず遜讓辭退するを云　○減省所享之謂也、謂は原本封に作る祕本閣本尾本等及文集に據て改む　○違於法、違は文集遠に作る　○今朕剗戾、原本今を令に作る文集に據て改む剗は削也　○猴之鷹鸇、左傳襄廿五年に子產始知然明問爲政對曰視民如子見不仁者誅之如鷹鸇之逐鳥雀也とあるに據れり　○熊虎、隨身兵仗を云脟書牧誓に如虎如貔如熊如羆とあり壯士の勇猛を形容す　○兵仗、仗は文集になし　○孝子善述父志、中庸に夫孝者善繼人之志とあり　○廿日丙申、此條及廿一日丁酉廿二日戊戌の三條は類史五及紀略に據て補ふ但し廿一日條の依以下五字は類史になし

○五月丙午朔、二日丁未、制、筑前國所輸攝津國住吉神封戸調庸綿便付大宰貢綿使、送彼神社、永以爲例、○三日戊申、去四月上申、當祭平野神、而觸穢之人、入於內裏、仍以停焉、是日修祭、○四日己酉、梅宮祭如常、○五日庚戌、停端午之節、○六日辛亥、太政大臣重抗表、苦辭隨身兵仗封邑、及年官准三宮之恩賞、優詔不許、○十日乙卯、佐渡國司言、兵庫震動、○十一日丙辰、分遣使者諸山陵、奉荷前幣、公卿行事、○十四日

(五月)丁未制、此事太政官符として三代格一に出づ
○當祭平野神、原本祭字なく神を祭に作る祭は紀略に據り神は諸本及紀略に據て改め補ふ
○重抗表、第三表は菅家文草十に載す
○十一日丙辰、諸本一を五に作る十五日丙辰は下文十二月十五日と干支同じ五月に荷前奉幣の事あるべきにあらず誤て此に出せるか紀略にも十二月

には見ゆれど五月には見えず亦以て證とすべし
○十四日己未、此條は紀略に據て補ふ
○人跡、跡は原本蹟に作る諸本及紀略に據て改む
○泛溢、泛は同上に據て補ふ
○擁塞、擁は壅に同じ
○緣河苗稼、河苗稼の三字は諸本及紀略に據て補ふ
○朽而不生、原本朽而を猶の一字に作る諸本に據て改め補ふ
○山中見火、山中の二字は祕本閣本尾本に據て補ふ
○汚其山水、汚は諸本汙に作る
○由是、由は原本田に作る祕本尾本に據て改む
○去舊骸幷行鎭謝之法、原本骸下に汙字あり幷以下六字なし諸本に據て刪補
○十九日甲子、此條は紀略に據て補ふ
○一二毛擧、微細なる貲擧を兎や角譏退するなどい一二は何か古辭を用ふるならん
○流謙、易謙卦彖傳に地道變盈而流謙とあり

己未、迎六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○十六日辛酉、先是出羽國司言、從三位勳五等大物忌神社、在飽海郡山上、巖石壁立、人跡稀到、夏冬戴雪、禿無草木、去四月八日、山上有火、燒土石、又有聲如雷、自山所出之河、泥水泛溢、其色青黑、臭氣充滿、人不堪聞、死魚多浮、擁塞不流、有兩大虵、長十許丈、相流出入於海口、小蛇隨者、不知其數、緣河苗稼、流損者多、或染濁水臭氣、朽而不生、聞于古老、未嘗有如此之異、但弘仁年中、山中見火、其後不幾、有事兵仗、決之蓍龜、並云、彼國名神因所禱未賽、又冢墓骸骨、汚其山水、由是發怒燒山、致此災異、若不鎭謝、可有兵役、是日、下知國宰、賽宿禱、去舊骸、幷行鎭謝之法焉、○十九日甲子、遣使於丹生川上雨師神社、奉幣、祈雨也、○廿日乙丑、先是今月六日、太政大臣重抗表、辭加增封邑帶仗資人、是日勅答、前後之章、一二毛擧、在於茂積、當有殊加、事之舊也、今公露款瀝懷、流謙見底、銷浮雲於心壑、澄晧氣於胸陂、愊之至矣、朕嘉損挹之爲美、更恨成典之猶淹、望其必享、豈有量乎、而公志貞夫、一讓過于三、匪席之心、朕何卷焉、所以許此辭邑之高、永彼

有隣之日、但至于圓闕鳴秋、群封復舊、自如前詔、其餘命有司施行、難以收汗、誠宜減言、○廿二日丁卯、勅、捨秀良親王家池水、漑城南百姓田、旱也、○廿三日戊辰、除目、七人、○廿九日甲戌、太政官廚贈酒饌、饗造應天門工匠以上、公卿會飮、竟日乃罷、

日本三代實錄卷第十九

○猶浮雲於心寂、論語述而篇に不義而富且貴於我如浮雲とあるに據れり、寂は原本節に作る諸本に據て改む
○醋氣、醋は浩に作るべし孟子に我善養吾浩然之氣とあるに出づ
○愊之至、愊は字書に誠志也とあり
○成典、典は諸本に據て補ふ
○一讓過于三、考に晉語曰趙衰三讓不失義讓推賢也義廣德也德廣賢至有何患矣と云
○匪席之心云云、毛詩邶風柏舟章に我心匪席不可卷也とあるに據れり
○有隣之日、有隣は論語里仁篇に德不孤必有鄰とあるに出づ
○圓闕、三輔黃圖に建章宮宮門北起圓闕高廿五丈上有銅鳳凰とあり宮闕を云鳴秋は私記に恐鴻秩と云り
○收汗、勅命を取消すを云
○百姓田、田は紀略に據て補ふ
○除目七人、補任に參議藤原仲統爲備中守とみゆ七人の中の一人なり　○日本三代實錄卷第十九、原本此下に終字あり尾本前本に據て刪る祕本閣本谷本には此十字なし

日本三代實錄卷第二十

起貞觀十三年六月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

六月丙子朔、二日丁丑、新鑄銅印、充春日齋院、去貞觀八年、出春興殿甲冑七十三領、下造兵司、修理事畢、是日運納、○八日癸未、授丹後國正五位下籠神從四位下、復美濃國土岐惠奈兩郡百姓調庸一年、○十日乙酉、自朔不雨、至是班幣諸神社、祈雨也、是日、無雲而雷、○十一日丙戌、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、遣親王公卿供祀、○十三日戊子、勅東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海道諸國、班幣境內名山大澤諸神、并轉讀大般若金剛般若等經、祈甘雨也、○十五日庚寅、延六十僧於大極殿、限以三日、轉讀大般若經、苦請澍雨、○十六日辛卯、大雷澍雨、○十七日壬辰、更延講經三箇日、緣不快雨也、是日、太政官候廳前、晨見鬼跡、所謂候廳者、公卿聽政、外記所直侍之處也、○廿日乙未、太政官候廳、晝見

○日本、此二字禮谷本になし
○左大臣云云、此行諸本なし
【貞觀十三年】春日齋院、賀茂齋院に准じて設けられしなり
○去貞觀八年云云、以下是日運納に至る廿七字は紀略に據て補ふ
○籠神、嘉祥二年二月庚戌及貞觀六年十二月甲戌紀に出づ
○十日乙酉、此條紀略に據て補ふ
○供祀、祀は原本禮に作る、諸本及類史九に據て改む
○勅東海東山云云、東海の二字及也の字は紀略に據て補ふ
○三箇日、三は紀略六に作る
○所謂候廳者云云、以下十七字後人の加筆と云ふ說あれど然らざるべし
○瓢牝牡二、牡は禮本闕、本尾本に據て補ふ

○有人捕得云云、諸本人下に馬牛の二字、得下に濫字あり
○廿九日甲辰、此條紀略に據て補ふ
（**七月**）二日丙午、此條及四日戊申十日甲寅の三條は紀略に據て補ふ
○廿五日己巳、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
○是日无品勝子內親王薨、是日の二字は紀略に據て補ふ
○天皇不視事、以下貞主女也に至る廿三字は紀略に據て補ふ
（**八月**）奉參內裏、奉は諸本に據て補ふ
○賜祿而罷、而罷の二字は紀略に據て補ふ
○七日辛巳、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
○十三日丁亥、此條祕本閣本前本等閏八月に係く、これど閏八月にては干支合はず
○十六日庚寅、此條原本閏八月十六日己未に係け諸本も同じく閏八月に收めたれど干支を庚寅とす、庚寅は八月十六日にて閏八月に非ず故に紀略に據て此に移收む

狐牡牡一、有人捕得、放河南野中、○廿九日甲辰、朱雀門前大祓、○秋七月乙巳朔、二日丙午、雷雨、諸衛陣於殿前、○四日戊申、廣瀬龍田祭、○十日甲寅、地震、○十九日癸亥、狐晝鳴入太政官候廳、捕得放河南野中、○廿五日己巳、地震、○廿八日壬申、天皇於綾綺殿前、覽相撲、是日、无品勝子內親王薨、云云、天皇不視事三日、文德天皇女、母參議滋野朝臣貞主女也、○八月乙亥朔、三日丁丑、釋奠、停講論宴飲、以勝子內親王薨後、輟朝三日之限、在此日也、○四日戊寅、明經博士等奉參內裏、不喚御前、賜祿而罷、○七日辛巳、地震、○十一日乙酉、雷雨、東京有人震死、○十三日丁亥、節婦近江國高嶋郡人川內史能子叙位二階、免戶內租、表其門閭、○十六日庚寅、左京人散位從五位下有道王男二人女二人姪女一人、賜姓清原眞人、舍人親王之後也、○十七日辛卯、地震、○廿三日丁酉、勅出羽國、始置漏尅、是夜有大流星、出東方入天市中、其色赤白、入後其尾白而曲環、○廿五日己亥、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、是日撰貞觀式畢、正三位守右大臣兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗、

○十七日辛卯、此條類史紀略に據て補ふ
○勅出羽國、以下漏赳是に至る九字は紀略に據て補ふ此九字原本には閏八月廿三日に收む然るに閣本前本谷本等丁酉とす丁酉は八月廿三日にて閏八月に非ず故に紀略に據り彼を削りて此に收む
○天市、尾宿の東北にあり
○貞觀式、本朝書籍目錄に貞觀式廿卷貞觀十三年奏進右大臣氏宗公撰貞觀儀式十卷とあり
○藤原朝臣氏宗、秘本以下の諸本何れも參議民部卿云云より謹序に至るまでを略して等詣闕奉進其都序曰云云とせりされば板本は類史百四十七に據て補ひしものなるべし
○夔拊龍言、尚書舜典に帝曰夔命汝典樂教冑子夔曰於予擊石拊石百獸率舞帝曰龍命汝作納言夙夜出納朕命惟允(節略)とあるに據れり
○弼予弘化、尚書周官に少師少傅少保曰三孤貳公弘化寅亮天地弼予一人とあり
○儇才、儇は原本偎に作

參議民部卿正四位下兼行春宮大夫近江守南淵朝臣年名、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官大江朝臣音人、從四位上行式部大輔菅原朝臣是善、勘解由次官從五位下兼行下野介紀朝臣安雄等、詣闕奉進、其都序曰、昔唐虞膺籙、稽古建官、夔拊龍言、弼予弘化、自後司存倍百、職事滋事、流例委波、政津難渉、雖復俊德敬風、儇才莅事、不緣溫故、難得允釐、夫然、舊儀彰於漢代、要錄著于梁時、事之不以可已、蓋其在此乎、粤若弘仁聖帝、風超踐翼、化軼滋源、憲章日新、文物咸秩、爰降沖旨、以脩撰作諸司式四十卷、雖機杼已遠、衣被無窮、然自燕而觀、有不盡矣、況復帝載彌久、風猷積億、譬夫調琴瑟、有時當弛張焉、伏惟今上陛下、涵元孕象、迪哲重光、臨衢室而凝神、御法宮而軫慮、思夫所以衡策無闕、璣衡克齊、除梗澁於政途、隆輪奐於堂搆、近故右大臣贈正一位藤原朝臣良相、知聖旨欲有興作、與太政大臣從一位藤原朝臣良房定議、奏可撰格式之狀、詔令右大臣正二位兼行皇太子傅臣藤原朝臣氏宗、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫近江守臣南淵朝臣年名、參議正四位下行左大

辨、兼勘解由長官臣大江朝臣音人、從四位上行式部大輔臣菅原朝臣是善、與勘解由次官從五位下兼行下野介臣紀朝臣安雄、右大史正六位上臣大春日朝臣安永、正六位上行彈正少忠臣布瑠宿禰道永、正六位下行大學大屬臣山田宿禰弘宗等、尚推古今、折衷文武、詳其流變、補彼舊章、設有取捨之宜、未知其辨、即請雌黃於上台之口中、更忝天聽、式終筆削、然史舊式卷軸前修、久爲代典、於後以芟夷鮮焉、且恐似不率由、故准據其誤謬遺漏、及變古宜今者、別錄爲二十卷、名曰貞觀式、方冀新舊兩存、本枝相待、不掩美於前覺、將垂裕於後昆、行之可久、用而無窮、均兩儀之貞觀、歷千古而景式、至若朝會宴饗、蕃客祭禮、諸儀注等、文繁事碎、不載於斯、然厥辭意紛錯、式妨履行、詳加討論、用從修正、欲其與式參酌、雙流於世、臣等才非博物、業謝通機、徒感江鐏之從風、却慙玉繩之垂象、謹序、

る類史に據て改む　○假才、假は字書に慧利也とあり才のさときを云　○允釐、尙書堯典に允釐百工庶績咸熙、傳に允信釐治とあり原本允を先に作る類史に據て改む　○舊儀影於漢代、隋書經籍志に漢舊儀四卷衞敬仲撰とあり　○要錄著于梁時、同志に職官要錄三十卷（梁）陶藻撰さあり　○弘仁聖帝、嵯峨天皇を申す　○風超踐翼云云、超は原本起に作る類史に據て改む　○機杼已遠、機杼は文章を作成するを云弘仁式の成れるを云なり文選曹植雜詩に明晨秉機杼日昃不成文とあり　○光被、恩惠を及ぼすを云　○自燕而觀云云、燕は類史に據て補ふ自燕而云云さは弘仁式も今より見れば未だ盡さゞる事もありさなり　○帝哉彌久云云、帝哉は帝治、風猷は治道なり此にては法令格式の類を云　○譬夫調琴瑟云云、漢書董仲舒傳に仲舒對曰今漢繼秦之後、雖欲善治之亡可奈何、竊譬之琴瑟不調甚者必解而更張之迺可鼓也、爲政而不行甚者必變而更化之迺可理也（節略）とあるに據れり　○通元孕象、原本通を遂に作る類史に據て改む　○迪哲重光、迪哲は已に注す重光は尚書顧命に昔君文王武王宣重光奠麗、傳に言先君文帝布其重光累聖之德と見ゆ　○臨衢室、管子桓公問篇に堯有衢室之問者下聽於人也とあるに出づ　○凝神、凝は原本嶷に作る類史に據て改む

○御法宮、法宮は漢書鼂錯傳に五帝神聖其臣莫能及故自親事處法宮之中、注に法宮路寢正殿也とあり、原本宮を言に作る類史に據て改む　○衛策無闕、闕は原本闘に作る類史に據て改む　○璣衡云云、璣衡は璿璣玉衡なり尙書舜典に在璿璣玉衡以齊七政とあり　○堂搆、搆は原本措に作る類史に據て改む已に注す　○正三位(氏宗)、三は原本二に作る類史に據て改む　○勘解由長官臣、臣は類史に據て補ふ　○與勘解由次官、與は同上に據て補ふ　○尙推、類史尙推に作る狩谷云恐爾推之訛　○補彼舊章、舊章は弘仁式　○雌黃云云、雌黃は文章を修正するを云上台は上司なり　○鮮試、鮮は原本掛に作る類史に據て改む　○本枝相待、本枝は弘仁式と貞觀式となり兩式並行ふを云　○前覺、前賢を云文選吳都賦に藏理於終古而未寤於前覺也と見ゆ　○均兩儀之貞觀、兩儀は天地を云易繫辭傳に天地之道貞觀者也、疏に天覆地載之道以貞正得一故其功可爲物之所觀也とあり、原本均を猶に作る類史に據て改む　○祭禮、狩谷氏禮恐祀と云　○修正、原本條正に作る類史に據て改む　○博物、左傳昭元年に晉侯聞子產之言曰博物君子也とあり　○通機、淮南子原道訓に聖人內有以通天機(節略)とあり　○徒感江籬之從風、江籬は紅蘺の訛か紅蘺は落葉なり、徒は原本從に作る類史に據て改む　○玉繩之乖象、玉は原本王に作る同上に據て改む、考に張協七命曰望玉繩而結極、注に春秋元命包曰玉衡北兩星爲玉繩、按以江籬譬棄材以玉繩喩文教と云

(閏八月)長直、皇極紀三年に見ゆ錄和泉神別の長公と同祖なり　○班幣諸神社請止雨、神及請止雨の四字は諸本に據て補ふ　○卅五家、紀略卅を廿に作る　○六百卅家、紀略卅の下に三の字あり　○三千九百、紀略三の字なし　○堤絕河決、原本堤絕の二字を也の一字とす諸本に據て改む　○壖郊、壖は字彙に城下田也又岸邊地とあり原本濡行に作る諸本及三代格八に據て改む　○遂令遠近百姓、遂令の二字は諸本に據て補ふ

○閏八月甲辰朔、日有蝕之、○四日丁未、節婦阿波國勝浦郡人長直大富賣叙位二階、免戶內租、表於門閭、○七日庚戌、雷、大雨、諸衞陣於殿前、河水暴溢、京師道橋、流損者衆、壞人廬舍、不知其數、頒遣使者、班幣諸神社、請止雨、○十一日甲寅、霖雨未止、東京居人、遭水損者卅五家、百卅八人、西京六百卅家、三千九百九十五人、賜穀鹽各有差、○十四日丁巳、勅、夫積土築堤、尤爲避水、堤絕河決、其害難防、而今有聞、細民之愚昧於遠慮、或公請空閑之明驗、或私逐地利之膏腴、開發田疇、穿渠灌溉、霑潤之漸、遂及壞堤河、壖郊之地者、京邑及諸國輸貢之徒、古來所芻牧也、而求利之輩、占爲田園、遂令遠近百姓、專失放牧之便、寧恣一家之所利、永

忘萬民之爲愁、宜禁止鴨川堤邊、除公田之外、諸所耕營水陸田、縱雖公田、可成堤害者、莫令耕作、犯者罪之、○廿八日辛未、制定百姓葬送放牧之地、其一處在山城國葛野郡五條荒木西里、六條久受原里、一處在紀伊郡十條下石原西外里、十一條下佐比里、十二條上佐比里、勅曰、件等河原、是百姓葬送、并放牧之地也、而愚昧之輩、不知其意、競好占營、專失人便、須令國司屢加巡檢、勿令耕營、犯則有法焉、○廿九日壬申、夜有流星、出東南、入女林、星大如柚子、青而有光、○授隱伎國從五位上天健金草神從四位下、從五位上比奈麻治比賣神正五位下、正六位上蘐若酢神、無位日乃賣神、並從五位下、○左京人有氏王賜姓清原眞人、其先、舍人親王之後也、○九月甲戌朔、二日乙亥、地震、○三日丙子、御齋燒燈如常、○九日壬午、停重陽之節、於宜陽殿西廂、賜菊酒侍臣、賜祿各有差、○十一日甲申、遣使者於伊勢大神宮、奉例幣、兼賽宿禱、告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃河上乃下津磐根爾大宮柱廣敷立、高天乃原爾千木高知天、天皇孫乃尊乃稱辭竟奉留天照坐大神乃廣前

○縱雖公田、縱は尾本前本谷本及格に據て補ふ
○犯者罪之、原本此下に十六日己未廿三日丙寅の二條あり八月に移す
○久受原、久は格に文に作る
○十二條上佐比里、此七字は祕本閣本尾本等及格に據て補ふ
○佐比里、上に出づ
○女林、女は原本羽に作る諸本に據て改む天市垣中の北方に女牀星あり林は牀の訛か
○隱伎國、伎は原本岐に作る諸本に據て改む
○天健金草神、神名式隱伎國穩地郡天健金草命神社、都萬村
○比奈麻治比賣神、承和五年十月甲午紀に見ゆ
○蘐若酢神、神名式隱伎國周吉郡玉若酢命神社、磯村下西
○日乃賣神、神祇志に所在周吉郡とあり
（九月）二日乙亥、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
○遣使者、者は諸本及類史三に據て補ふ
○天照坐大神、坐は諸本及類史に據て補ふ

爾、恐美恐美毛申賜止申久、常毛奉留九月乃神嘗乃大幣帛乎、王大監物從五位上興我王、中臣神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道乎差使天、忌部神祇權大祐正六位上齋部宿禰高善加、弱肩爾、太襁取懸、持齋波利令持捧天、奉出賜布此狀乎聞食天、天皇朝廷乎、寶位無動久、夜守日守爾護助賜倍止申賜波久止申、云云、○十四日丁亥、夜有星、出文昌第二第三星與太陽守星中、歷紫微宮、指西南行、長可三丈、其色赤黃、有光照地也、○廿八日辛丑、地震、是日、太皇太后崩、太皇太后姓藤原氏、諱順子、贈太政大臣正一位冬嗣朝臣之女也、母尚侍贈正二位藤原朝臣美都子、后美姿色、雅性和厚、嘗在父大臣家、晨起澡手、有小虹、降亘兩器、卜占者曰、至貴之祥、其慶不可言焉、仁明天皇儲貳之日、聘以入宮、寵遇隆篤、生文德天皇、天長十年仁明天皇踐祚之初、授從四位下、承和十一年加從三位、嘉祥三年四月甲子、文德天皇即位、是日尊爲皇太夫人、齊衡元年爲皇太后、天安二年八月乙卯、文德天皇崩、后哀慟柴毀、後遂落彩爲尼、請東大寺戒壇諸僧於五條宮、受大乘戒、屈延曆寺座主圓仁、受菩薩戒、崩葬山城

○大幣帛乎、乎は類史に據て補ふ
○申賜波久止申云云、此下に宿禰を賽する辭別の文ありしを略したるは惜むべし諸本に此に辭別十四年九月十一日戊寅不奉伊勢大神宮幣以太政大臣薨也大祓於建禮門前の三十四字あれど全文卷廿二に出て攙入なり
○文昌、北極紫微垣中西方にあり其數六
○太陽守星、同じく北極紫微垣中天相星の西
○其色赤黃、赤は原本朱に作る諸本及紀略に據て改む
○照地也、也は紀略になし衍なるべし
○是日太皇太后崩、是日の二字は紀略に據て補ふ
○藤原朝臣美都子、大鏡裏書に母尚侍贈正一位藤原美都子阿波守眞作女とあり
○兩器、兩は原本盥に作る諸本に據て改む亘兩器は甲乙の兩器に亘るなり
○天長十年、此四字は諸本に據て補ふ
○柴毀、柴は瘠也毀は哀也喪に遭ひて哀しみ瘠するを云晉書許孜傳に二親

沒柴毀骨立とあり
○落彩、この二字は諸本に據て補ふ
○後山階山陵、諸陵式に後山階山陵太皇太后藤原氏山城志に在二音羽村一唯有二地名御陵臺一、陵墓要覽に宇治郡山科村御陵とあり
○禮則脩備、脩は尾本谷本に據て補ふ
○求古、求は原本永に作る諸本に據て改む
○安祥寺、山城志に在二御陵村一號二吉祥山一と見ゆ
○太皇太后、太皇太后の御事は大鏡一に御母の后貞觀三年辛巳二月廿九日御出家同八年丙戌正月七日皇太后宮に上りゐ賜ふ是を五條后と申す同裏書に同十三年九月廿八日崩年六十三と見ゆ
○皆華、原本華を花に作る今諸本に據る
(十月)素菲、原本著素に作る祕本閣本尾本に據て改む素は素服なり菲は字彙に薄也論語菲二飲食一とあり
○喪服經、服は諸本に據て補ふ
○不杖齊衰、原本不杖の二字は衰の下にあり曰字

國宇治郡後山階山陵、后貞固天、禮則脩備、母儀之範、求古少比、深信釋教、建立精舍、額曰安祥寺、資財田園、割給甚多、年分度僧、修大乘道焉、○廿九日壬寅晦、諸衞警固、令伊勢近江美濃等國諸關警固、勅曰、今月廿八日、太皇太后崩、事須遣使警固、然而時在秋收、恐妨農業、況復牧宰其人、宜停發使、一委國吏、勤令警察、○是月、櫻梨桃李皆華、○冬十月癸卯朔、四日丙午、太皇太后遺令、不聽天下素菲、仍令京畿七道、停擧哀幷著素服、○五日丁未、天皇服錫紵、近臣皆素服、葬太皇太后於山城國宇治郡後山階山陵、是時、天皇爲祖母太皇太后、喪服有疑未決、於是令諸儒議之、從五位上行大學博士兼越前權介菅野朝臣佐世、從五位下行助教善淵朝臣永貞等議云、儀禮喪服經、不杖齊衰朞章曰、祖父母傳曰、何以朞也、至尊也、又隱公元年左氏傳曰、弔生不及哀、杜預曰、諸侯以上、既葬則衰麻除、無哭位、諒闇終喪也、孔穎達曰、諸侯既葬、則免喪服、諸侯既然、知天子亦爾、不除則群臣莫敢除、故屈己以除之、而諒闇以終制、天下之人皆曰、我王之仁也、屈己以從宜、皆曰、我王之教也、據此等文、祖母

なし諸本に據て改め補ふ
儀禮喪服に不杖麻屨者(此亦齊衰)祖父母、傳に何以期也至尊也とあり
○何以朞也、也は諸本及儀禮に據て補ふ
○衰麻除無哭位、原本除字なく位を泣に作る除は左傳に據て補ひ位は諸本及左傳に據て改む
○諒闇終喪、左傳隱元年に弔生不及哀、疏に古者天子諸侯三年之喪始服齊斬、既葬除喪服、諒闇以居心喪終制、不與士庶同禮とあり
○我王之教也、左傳疏には教を孝に作る
○卽告、告は吉の訛なるべし下同じ卽吉は喪服を去るを云ふ晉書禮樂志中に帝及群臣除喪卽吉とあり
○於父母尚爾、尚は諸本に據て補ふ
○可合杜之說、原本合を卽に杜を位に作る合は諸本に據り杜は尼本閣イ本谷イ本に據て改む
○所稱祖父母、原本所を可に作る諸本に據て改む
○喪服一篇云云、儀禮卷首の疏に喪服一篇總包天子以下服制之事とあり

服制如此、春秋之義、天子之位至尊、萬機之政至大、故三年之喪、既葬卒哭、除喪卽告、依此言之、天子於父母尚爾、況祖母乎、然則葬後除喪卽告、可合杜之說、問曰、儀禮齊衰朞章、所稱祖父母者、含太上皇及三后歟、將只指凡人歟、答曰、賈公彥疏曰、喪服一篇、惣包天子以下喪服之事者、以此言之者、祖父母之文、上至天子、下苞士庶、公彥雖不云后之尊與天子同、然則太上皇及三后、雖經典無文、而天子之文、可以苞之、大學頭從五位上兼行文章博士巨勢朝臣文雄議曰、晉隆安四年、孝武太皇太后李氏崩、尚書左僕射王雅、尚書車胤、孔安國、祠部郎徐廣等議、春秋之義、母以子貴、成風者莊公之妾、僖公之母、文公之祖母、薨於文公之世、文公同於夫人、服三年之喪、凡子於父之所生、體尊義重、且禮祖不厭孫、故仲尼書之、不復追貶、合情禮故也、於是安帝遂服齊衰朞、百僚亦一朞者、今據撿件文、是古行三年喪、時之禮也、然而本朝制令、三年之喪、降爲一年、周朞之喪、亦爲五月、自茲以下、皆有降殺、然則若依晉禮而行之者、今須成五月之服耳、但案唐禮曰、皇帝本服大功已上親喪、皇帝不親視事三

日、又喪葬令曰、皇帝皇太后皇后皇太子、爲五服之內親擧哀、本服周者、三朝哭而止、大功者其日朝晡哭而止、小功以下者、並一擧哀而止、其擧哀者皆素服、皇帝擧哀之日、內敎坊及太常並停樂、又案本朝令條曰、皇帝二等以上親喪、皇帝不視事三日、又曰、天皇爲本服二等以上親喪、服錫紵、義解云、凡人君卽位、服絕傍朞、唯有心喪、故云本服者、今據此等文而案之、皇朝之令、既同唐典、君上之儀、誠異臣下、然則自非別有遺制、盈縮期程者、事須必依新禮、三日成服、三日之後、無妨卽吉、豈容遠考古禮、還爲今疑哉、民部少輔兼東宮學士從五位下橘朝臣廣相議曰、天皇爲太皇太后、可服錫紵五月、所以服錫紵者、據喪葬令文也、所以喪期五月者、據儀禮喪服經曰、不杖麻屨者祖父母、鄭玄注云、此齊衰文也、又戴德喪服變除曰、爲祖父母、十三月而祥、祥而除、又劉表喪服後定、亦同此文、又隋江都集禮、齊衰不杖朞、祖父母之喪、又唐開元禮、爲祖父母齊衰不杖周、又田瓊喪服條例曰、天子不降其祖父母、言天子絕朞喪、唯不降其祖父母等、然則唐天子爲祖母太皇太后齊衰朞、國家殊制喪服、降斬衰三年、爲一年服、降齊衰一年、爲五月服、下至大功小功緦

り總苞は狩谷氏五經文字云苞經典或作包ゝ云
○行文章博士(文雄)、行は十四年五月壬辰紀に據て補ふ
○隆安、安帝の年號
○尚書左僕射、狩谷校本に據晉書禮志中一射下恐脫何澄右僕射五字一ゝ云
○母以子貴、公羊傳隱元年に子以母貴母以子貴とあり
○僖公之母文公之祖母、母文公之の四字は諸本に據て補ふ
○祖不厭孫、祖父母は孫より祭祀喪葬して可なるを云
○三年之喪降爲一年云云、喪葬令に詳なり
○唐令曰、狩谷校本に唐書藝文志載武德令三十一卷貞觀令二十七卷永徽令三十卷開元令三十卷とあり
○五服之內親云云、群書拾唾人倫禮用に五服斬衰(三年)齊衰(周年)大功(九月)小功(五月)緦麻(三月)服制令云父斬衰三年母齊衰三年祖父母伯叔父母姑兄姉齊衰周年同堂兄弟大功九月再從伯叔父母姑兄姉小功五月三從伯

麻皆從降殺、故喪期當五月、或人疑曰、儀制令、皇帝二等已上親喪、皇帝不視事三日、又喪葬令義解曰、天子服絕傍朞、唯爲考妣、依式處分者、然則皇帝除考妣之外、不應有服、但應不視事三日、服錫紵耳、今釋之曰、服絕傍朞者、是戴德喪服變除、及白虎通之文也、說此文者卽云、不降其祖父母曾祖父母也、而作義解者、只擧考妣、不及祖父母者、蓋以爲、令文僻爲二等已上親也、服錫紵者、錫紵是君弔臣喪之服、而非喪服也、唐天子喪服、用斬衰齊衰、而國家制令、殊以錫紵爲喪服、至于爲考妣服此、則恐甚輕、故云、爲考妣依式處分者、是則謂喪服所服之衣色也、非謂喪服日月之數也、儀制令不視事三日者、是只謂不視事之日數也、非謂喪制之日數也、至於喪制、則唐令無文、唯制唐禮、以據行之、而國家制令之日、新制服紀一條、附喪葬令之末、夫喪禮委曲、條流千萬、而一條之內、事自不盡、自成此疑也、然則儀制令、只說不視事之日數也、喪葬令只說喪服之衣色也、至于喪制、日月、則引禮而准行耳、又疑曰、喪葬令服紀爲君一年者、太皇太后既君也、然則應服一年、今釋之曰、爲君一年、義解云、君謂天

叔父母姑兄姉總麻三月此謂五服とあり朝晡は朝さ夕なり
○(注)舉哀之日、諸本之字なし
○本朝令條、儀制令喪葬令を指す
○絕傍朞、傍朞は傍親にして朞年の喪を服すべき者を云ふ
○皇朝之令、朝は原本帝に作る閣イ本谷イ本に據て改む
○據喪葬令文也、文は諸本に據て補ふ
○此齊衰文也、此は原本比に作る諸本に據て改む
○戴德喪服變除、唐書藝文志に大戴德喪服變除一卷とあり
○十三月而祥、祥は服喪中の祭を云ふ禮記間傳に父母之喪期而小祥(節略)とあり
○劉表喪服後定、劉表は後漢書に傳見ゆ
○隋江都集禮、唐書藝文志に牛弘潘徽隋江都集禮一百二十卷
○唐開元禮、同に開元禮一百五十卷
○齊衰不杖周、周は朞に同じ
○田瓊喪服條例、原本田

瓊の二字を日の一字とす諸本に據て改む
○依式處分、原本頭注に式字誤作試今以義解改と云
○白虎通之文、白虎通喪服には天子爲諸侯絕期とあり
○令文偁、偁は原本條に作る諸本に據て改む
○斬衰齊衰、齊は原本衰に作る閣本尾本に據て改む
○非謂喪服、謂は諸本に據て補ふ
○新制服紀一條、喪葬令に凡服紀者爲君父母及夫本主二年祖父母養父母五月云云とある是なり
○一條之內事白不盡、一及事字は諸本に據て補ふ
○譙周、三國蜀人
○爲君之祖母、爲は諸本に據て補ふ
○准君所服之也、之は原本君下にあり諸本に據て改む
○喪服圖、圖は原本問に作る諸本に據て改む
○菅原朝臣道眞、道眞の二字は原本空白とす今意を以て補ふ
○周官司服云云、周禮春官司服に王爲三公六卿

子也、又禮日、爲君之祖母朞、又譙周曰、臣爲君祖母齊衰、又戴德喪服變除曰、爲君之祖母、與孫之爲祖父母同、據此等文、則君者指謂天子一人也、君之祖母、謂太皇太后也、若謂太皇太后爲君、則君之祖母、謂誰人哉、若天子爲太皇太后、爲君服、則太皇太后於臣下、是君之君也、古今豈有君之君服者哉、若天子爲祖母服、臣下爲君服、則變除參差、吉凶相犯、恐非禮經從服之義、又疑曰、近臣與百僚喪服、同耶異耶、今釋之曰、禮記服問曰、君之母非夫人、則群臣無服、唯近臣僕從、准君所服之也、此謂君之母若祖母、非皇太后及太皇太后者也、與今事既異、不可更議、須近臣同百僚、又儀禮喪服經曰、不杖麻屨者、爲君之祖父母、傳曰、何以朞也、從服也、又譙周喪服圖曰、臣爲祖母齊衰、據此等文、則唐齊衰朞、故國家當五月、然則百官可服五月、正六位上行少內記都宿禰言道、菅原朝臣道眞等議曰、儀禮喪服經、爲祖父母齊衰朞、本朝喪葬令云、天皇爲本服二等以上親喪、服錫紵、義解云、人君卽位、服絕傍朞、唯有心喪、國家別制令、降朞以爲五月、今須皇帝爲祖母太后心喪五月、又據周官司服、錫衰是君

弔臣之服、不可爲祖母太后施之、然則先葬曁服齊衰、既葬卽便除之、昔者晉武帝楊皇后崩、依漢魏舊制、既葬帝及群臣皆降服、時疑皇太子亦應除服否、尙書杜預以爲、古者天子諸侯三年之喪、始服齊斬、既葬除服、諒闇以居、心喪終制、傳曰、三年之喪、自天子達士庶、此謂天子絕朞、唯有三年之喪也、非謂居喪衰服三年、與士庶同也、周公不云服喪三年、而云諒闇三年、此釋服心喪之文也、皇太子亦配至尊、與國爲體、當復古禮諒闇終制、從之、謹案、惠帝爲太子、喪其母后、既葬除服、況以皇帝比於祖母乎、誠宜哀戚積於內、而衰服除於外也、勘解由次官從五位下安倍朝臣興行議曰、伏見諸儒所議、遠稽唐禮、近酌朝典、論之詳矣、而至制服事、或五月爲限、或三日爲斷、竊所不同何、則夫恩厚者其服重、猜臣者其痛深、故齊縗以上、含閏持久、大功以下、計閏爲數、今若三日爲斷、則恐傍降下殺、無復所施、但神化所務、一日萬機、若五月制、則縗麻在身、事絕臨朝、甚不可也、以愚管思之、機務殷重、祭不可廢、以日易月、權變所宜、然則心喪五月、制服五日、是爲允焉、外從五位下守大判事兼行明法博士櫻井田

錫衰、注に君爲臣服弔服とあり
○錫衰、尾本錫下に紵字あれど周禮にはなし故に取らず
○晉武帝楊皇后崩云云、晉書禮樂志に見ゆ
○自天子達士庶此謂天子絕朞、士庶の二字諸本及晉書になし
○配至尊、晉書には皇太子配貳之至尊とあり
○與國爲體、與は原本子に作る諸本及晉書に據て改む
○安倍朝臣興行議曰、朝臣以下服制三日焉に至る諸本に據て補ふ
○或五月爲限云云、喪葬令義解に五月以下並計閏也とあり
○猜巨者云云、禮記三年問に創鉅者其日久痛甚者其愈遲三年者稱情而立文所以爲至痛極也斬衰苴杖居倚廬食粥寢苫枕塊所以爲至痛飾也とあるに據れり
○齊縗以上含閏、齊縗は一年の喪なり一年以上の喪は閏月あらばこれを含め十三月を以て一年と計算するを云
○計閏爲數、五月以降の

喪は閏月を計算に加ふるを云
○祭不可廢、祭字は幣の誤か

○古律、養老律に對して大寶律を云
○七日己酉、此條及八日庚戌の二條は諸本及紀略に據て補ふ但し諸本は帝不視事以下の十四字を云々の二字に作る
○賀陽親王薨、親王母は多治比眞人參議長野の女なり紹運錄に薨年七十八と見ゆ
○廿一日癸亥、以下此殿又災に至る百廿六字は祕本閣本尾本前本等に據て補ふ
○應天門、拾芥抄中末に洛都宮城門是謂應天門、案禮含文嘉四門順人心應於天、然則應天之名蓋取諸此歟とあり四陽の四は日の誤なるべし

部連貞相議曰、或人問曰、喪葬令云、天皇爲本服二等以上親喪服錫紵、義解云、凡人君卽位、服絕傍朞、唯有心喪、故云本服、其三后及皇太子、不得絕傍朞、故律除本服字也者、今案此義解、天皇於本服二等以上親絕傍朞、但爲三后皇太子、不可絕傍朞、可同庶人、何以故者、稱律除本服字者、是爲人主所言文之故也、答曰、撿名例律、六議條云、一曰議親、注云、謂皇親、及皇帝五等以上親、及太皇太后皇太后四等以上親、皇后三等以上親、古律同條云、議親、注云、謂皇親、及太皇太后皇太后本服七日以上親、皇后本服一月以上親者、案此等文、除古律三后本服字、新律止計等親、示蔭法、是則義解所謂、律除本服字者也、然則稱除本服字者、是爲三后、非帝王事、則知三后者爲等親、不可絕傍朞、人君者爲三后、猶須絕傍朞、爲一日萬機事、異臣下故也、朝議定心喪五月、服制三日焉、○七日己酉、天皇釋服、近臣隨除、諸衛解嚴、令伊勢近江美濃等國解關、○八日庚戌、二品行大宰帥賀陽親王薨、帝不視事三日、桓武天皇第七子也、○廿

○高堂隆云云、魏志高堂隆傳に「隆曰夫災變之發皆所以明教戒、借高其臺、天火爲災、今宜罷散民役、宮室之制務從約節」〔節略〕とあり堂は諸本に據て補ふ
○復崇華殿、原本華下に殿字あり殿を經に作る殿は諸本に據て改め殿は後人の私意を以て加へたること明なれば削る
○九龍殿、魏志高堂隆傳に時郡國有九龍見、故改曰九龍殿」とあり
○東京、京は諸本に據て補ふ
○修復之後、後は原本深に作る諸本に據て改む
○陽順人心、陽は原本湯に作る諸本及拾芥抄に據て改む
○取諸此歟、歟は諸本守に作る守は乎の誤か
○羅城復道、復は原本復に作る諸本に據て改む

一日癸亥、應天門火災之後、修復既訖、令明經文章等博士議應天門可改名歟、又名應天門、其義何據、又朱雀羅城等門、名義如何、從五位上行大學頭兼文章博士巨勢朝臣文雄議言、宮殿城門等、火災之後、更改其名者、兩漢以上、未必有此事、但魏明帝青龍二年四月、崇華殿災、延于南閣、繕復之後、至三年七月、此殿又災、高堂隆以爲、不可更爲營造、帝不從、遂復崇華殿、曰九龍殿、唐玄宗天寶二年、東京應天門災、延燒至左右延福門、十一月應天門成、改曰乾元門、本朝制度、多擬唐家、凡天災人火、其名雖異、惣而論之、皆是非國之休徵、然則修復之後、除其舊號、更制嘉名、不亦宜哉、又洛都宮城門、是謂應天門、案禮含文嘉曰、陽順人心應於天、然則應天之名、蓋取諸此歟、又長安南面皇城門、是謂朱雀門、又大明宮南面五門正南、曰丹鳳門、夫丹鳳朱雀、其義是一、然則以其在南方、故謂之朱雀乎、又稱羅城門者、是周之國門、唐之京城門、西都謂之明德門、東都謂之定鼎門、今謂之羅城門、其義未詳、但大唐六典注云、自大明宮夾東

○定二年、原本定下に公字あり諸本に據て削る
○雉門及兩觀、左傳の疏に正義曰明堂位云庫門天子皐門雉門天子應門是魯之雉門公宮南門之中門也釋宮云觀謂之闕とあり
○毛詩云廼立皐門云云、毛詩大雅緜章に見ゆ傳に王之郭門曰皐門伉高貌王之正門曰應門將々嚴正也とあり
○(注)諸侯之宮、宮は閣本尾本に據て補ふ祕本前本谷本は曰に作る
○正義云、正義は春秋左氏傳正義なり上の注に引用せり云は原本曰に作る諸本に據て改む
○明堂位云、正義中に禮記明堂位の文を引けるなり
○制之如皐應、應は原本雉に作る諸本に據て改む
○魯以周公之故云云、禮記明堂位に成王以周公爲有勳勞於天下是以封周公於曲阜命魯公世々祀周公以天子之禮樂とあり褒は多也原本哀に作る諸本に據て改む
○制二兼四、庫雉の二門を制りて皐應庫雉の四門

羅城複道、經通化門礎道、而入興慶宮焉、今案其文勢、蓋此羅列之意乎、從五位上行大學博士兼越前權介菅野朝臣佐世、從五位下行助教善淵朝臣永貞、外從五位下船連副使麻呂等議言、定二年、左傳云、夏五月壬辰、雉門及兩觀灾、冬十月新作雉門及兩觀、毛詩云、廼立皐門、皐門有伉、廼立應門、應門將々、(諸侯之宮、外門曰皐門、朝門曰應門、內有路門、天子之宮加以庫雉也、)正義云、魯有庫門雉門、明堂位云、庫門天子皐門、雉門天子應門、是則名之曰庫雉、制之如皐應、魯以周公之故、成王特褒之、使制二兼四、則其餘諸侯不然矣、與群臣決事之朝、在應門之內、故以應門爲朝門也、撿件等文、魯有三門、庫雉路、兼天子五門皐庫雉應路、然則彼魯三門、與本朝三門、其義相當、卽雉魯之天灾、猶不改名、今此應天門、既是人火、仍舊之謂、何必更改、但名曰應天、朱雀羅城之義、經典无見焉、○廿二日甲子、勅頒貞觀式、施之內外、盡使遵行、○廿三日乙丑、太政官論奏曰、越前國守從四位下弘宗王、爲百姓所訴、增出擧之數、欲私其息利、左京人大初位下佐伯宿禰彌惠、僞造

○を兼ぬるを云
○皐庫雑應路、應は諸本に據て補ふ
○此應天門、此は原本比に作る諸本に據て改む
○仍傳之謂、原本之謂を謂之に作る諸本に據て改む
○經典无見焉、原本焉を爲に作り无上にあり諸本に據て改移す
○廿二日甲子、此條類史百四十七に據て補ふ紀略には燕使邏行の四字なし
○所訴、訴は原本新に作る諸本及類史八十四に據て改む
○僞造内印、原本造下に知字あり尾本閣イ本及類史八十七に據て削る
○廿四日丙寅、此條は紀略に據て補ふ、原本此下に廿五日丁卯條あり八年十月廿五日紀に已に出づ錯簡なり故に削る
（十一月）癸酉朔雷雨、秘本閣本前本等雷雨の上に壬寅の二字あり尾本には丙子とし紀略には見えず按に癸酉丁丑の間に壬寅あるべきにあらず下文十二月壬寅朔雷雨とありしを此に謬出せしなるべし尾本に丙子とあるは四日

内印、刑部省、斷曰、弘宗身卒、不更論罪、彌惠罪應絞刑、詔、絞刑宜減一等、處之遠流、○廿四日丙寅、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿八日庚午、雷一聲、○廿九日辛未、應天門成、所司設饌、饗大工已下、公卿大夫莫不畢會、○十一月癸酉朔、雷雨、○五日丁丑、鷺集于綾綺殿、○十日壬午、雷雹、是日、授武藏國正五位上勳七等秩父神從四位下、從五位下椋神從五位上、飛驒國正五位下水無神正五位上、出雲國正五位上湯神、佐陁神、並從四位下、從五位下能義神、佐草神、揖屋神、女月神、御譯神、阿式神、並正五位下、從五位下斐伊神、智伊神、濕沼神、越中國從五位下楯桙神、並從五位上、○十一日癸未、授丹後國從五位上大河神正五位下、下總國從五位下茂侶神從五位上、○十三日乙酉、伊豫國越智郡人外從五位下行直講越智直廣峯、改本居貫隷左京職、○十七日己丑、停園韓神祭、○十八日庚寅、停鎭魂祭、○十九日辛卯、停新嘗會、又平野春日梅宮大原野等祭、並隨停止、以太皇太后崩也、○廿二日甲

にて干支は合へども意を以て補へりと思へば採らず
○雷電是日、此四字紀略に據て補ふ
○秩父神、四年七月戊子紀に出づ
○椋神、神名式武藏國秩父郡椋神社
○水無神、九年七月庚午及十年七月戊午紀に出づ
○湯神、神名式意宇郡玉作湯神社とある是なり
○佐陁神、九年四月丁丑紀に出づ
○從五位下能義神、原本下を上に義を美に作る下は諸本及九年五月庚子紀に據り義は同紀に據て改む
○佐草神、仁壽元年九月乙酉及七年十月丙子紀に出づ
○揖屋神、九年五月庚子紀に出づ
○女月神、神名式に賣豆紀神社とあり七年十月丁巳紀に出づ
○御譯神、七年十月丙子紀に出づ譯は原本澤に作る諸本に據て改む
○阿式神、同紀に出づ阿は原本河に作る諸本に據て改む

午、雷、地震。大鳥一集于神泉苑乾臨殿東鴟尾上。○廿九日辛丑晦、地震。大祓於建禮門前。○十二月壬寅朔、雷雨。○三日甲辰、日有蝕之。太白從西貫東、共在危宿。○五日丙午、大宰府言、肥前國木連理一。制、諸司年終帳、永留弘仁十三年、天長四年帳、以爲證帳、自餘年帳、留三箇年、依次撿除、永以爲例。○十一日壬子、於神祇官修月次神今食祭、親王公卿行事。渤海國入覲使楊成規等百五人著加賀國岸。○十三日甲寅、於宮內省修鎭魂祭、東宮鎭魂同日行之、以太皇太后崩故、十一月不修此祭、今日行之。○十四日乙卯、陰陽寮言、明年當有天行之灾、又古老言、今年衆木冬華、昔有此異、天下大疫、勅令五畿七道諸國、頒幣境內諸神、於國分二寺轉經、禱冥助於佛神、銷凶札於未萠。○十五日丙辰、諸山陵奉荷前幣。○十八日己未、大雨雪。○十九日庚申、始修佛名懺悔如常。○廿五日丙寅、僧綱申牒、承和七年七月廿八日格云、正月寂勝御齋會讀師、以持律持經、及苦修練行三色禪師、輪轉請用、貞觀六年十二月十五日

宣旨、以內供奉十禪師、次第請用、而頃年十禪師中六人、固辭不肯應、遞請四人、事似不遍、請依先後格旨、不論十禪師三色僧、請其中英者、太政官處分、從之、但請用之時、錄其名簿、先申官、不得輙恣、○卅日辛未、大祓朱雀門前、幷追儺如常、

○斐伊神、及智伊神溫沼神並に十年九月辛亥紀に出づ
○楯桙神、六年三月己酉紀に出づ
○大河神、元年正月甲申紀に出づ
○茂侶神、神名式下總國葛飾郡茂侶神社、神祇志所在三輪山村とす
○新嘗會、類史九には會を祭に作る
○又平野、又は原本向上の二字に作る紀略に據て改む
○神泉苑乾臨殿東鷄尾上、拾芥抄中末に神泉院乾臨閣謂之正殿とあり原本乾を朝に鷄を嶋に作る乾は諸本に據り鷄は狩谷氏の說に據て改む鷄尾は抄に鷄尾唐令云宮殿皆四阿施鷄尾弁色立成云久都賀太也とあり
(十二月)日有蝕之、日は紀略に據て補ふ
○共在危窮、危は紀略に據て補ふ、共字恐くは衍紀略にはなし
○本源理一、一は諸本及紀略に據て補ふ
○凶札、札は長篇に民死爲札とあり
○讀師、讀は類史百七十

七譜に作る
○十禪師中六人、中は原本人下にあり類史に據て移す
○事似不遁、似は原本以に作る類史に據て改む
○第二十、此行祕本閣本谷本になし原本十下に終字あり前本淀本に據て削る

日本三代實錄卷第二十

○日本三代實錄、日本の二字祕本閣本谷本なし
○左大臣云云、此一行は祕本閣本前本等なし
【貞觀十四年】春正月、原本春上に壬辰の二字あり諸本十四年の上に分注とす故に削る
○宅成、宅は原本定に作る諸本及類史(百九十四)紀略に據て改む
○攤人、抄人倫部に攤人唐韻云攤(久知止利)とあり馬の轡を取る人
○不裝飾、御心喪中なればなり
○但不擧音樂、是も御心喪の中なればなり但は諸本及類史(七十二)紀略に據て補ふ
○僧綱引名僧、綱以下四字は諸本及類史百七十七に據て補ふ
○烏噬拔、烏は原本鳥に作る尾本に據て改む
○是月京邑云云、月は原本日に作る祕本尾本谷本に據て改む

日本三代實錄卷第廿一

左大臣從二位兼行左近衛大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

起貞觀十四年正月盡六月

(壬辰)十四年春正月壬申朔、天皇不受朝賀、以太皇太后崩、心喪未畢也、○六日丁丑、以正六位上行少內記菅原朝臣道眞、從六位下行直講美努連清名、爲存問渤海客使、園池正正六位上春日朝臣宅成爲通事、○七日戊寅、天皇不御紫宸殿、以停節會也、召左右馬寮青馬各七疋於內殿前、覽之、青馬及攤人並不裝飾、○八日己卯、春宮坊及所司獻剛卯杖、天皇不御紫宸殿、付內侍奏、是日、於大極殿、始講最勝王經、以元興寺僧法相宗傳燈大法師位長源、爲講師、但不擧音樂、○十四日乙酉、大極殿齋講畢、僧綱引名僧、奉參內裏、論義如常、施被而罷、石見國廳事壇三處自開陷、一處深七尺、徑二尺、一處深五尺、徑二尺、一處深七尺、徑一尺五寸、烏噬拔內竪傳點籌木、○十五日丙戌、律師法橋上人位最教卒、

○十六日丁亥、停踏歌之節、○十七日戊子、不行射禮、○廿日辛卯、是月、京邑咳逆病發、死亡者衆、人間言、渤海客來、異土毒氣之令然焉、是日、大祓於建禮門前以厭之、○廿二日癸巳、地震、○廿六日丁酉、以正六位下行少外記大春日朝臣安守爲存問渤海客使、以少內記菅原朝臣道眞丁母憂去職也、◯二月辛丑朔、三日癸卯、大原野祭如常、使等不歌舞、○四日甲辰、祈年祭如常、○七日丁未、釋奠、大學助教從五位下善淵朝臣永貞講毛詩、所司不給百度、大學寮設酒食、未開講之前、公卿就而饌之、不召文人及諸道學生等、以去年九月太皇太后崩、主上心喪日未滿之故也、是日、正三位守右大臣藤原朝臣氏宗薨、五六、輟朝三日、贈正二位、遣參議在原朝臣行平等、齎勅書告身、就東山白河第宣制、依遺命孝子等不受、○八日戊申、春日祭如常、使等不歌舞、○十四日甲寅、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○十五日乙卯、廼者少納言正四王依病不上、和氣朝臣彝範染穢請假、藤原朝臣高範父憂去職、勅以右中辨藤原朝臣良近、行少納言事、爲判少納言、○廿一日辛酉、佐渡國言、

○人間言、諸本間を問に作る恐くは非
○建禮門前、前は類史(百七十三)紀略に據て補ふ
○廿六日丁酉、安守を存問渤海使と爲すこと下文二月廿六日丙寅紀に重出す類史百九十四及紀略に據り彼を削て此を存す
○正六位下(安守)、六は原本五に作る類史及下文五月甲午紀に據て改む
(二月)助教(永貞)原本大學助に作る諸本及十三年十月丁未紀に據て改訂す
○百度、延喜主計式に凡出納官物諸司毎日給百度食所司總計百度之料一度請受供給とあり延人員百度の分をまとめて給するより起りし名稱か朝野群載六には百依料とあり古語にはモヽヨリといひしなるべし
○藤原朝臣氏宗薨、續後紀承和五年正月丙寅に初見、式部少輔右少辨右近衞少將右中辨右近衞中將右大辨等を經て仁壽元年十二月壬戌參議を拜し貞觀三年正月戊子中納言六年正月癸卯權大納言九年二月己亥正大納言となり

十二年正月丙寅右大臣となる補任に中納言葛野麻呂七男母從三位和氣朝臣清麻呂女延曆十四年生薨時年六十二とあり
○輟朝三日、以下孝子等不受に至る卅九字は紀略に據て補ふ
○十四日甲寅、此條紀略に據て補ふ
○不上、上は原本參に作る符宣抄に據て改む祕本閣本前本等止とあるは上の訛なり
○父憂去職、四字の句なり父の上に丁字を脫したるにはあらず
○判少納言、符宣抄六に大納言藤原卿（基經）宣奉勅右中辨正五位下藤原朝臣良近爲判少納言者貞觀十四年二月十五日大外記善淵朝臣愛成奉少納言正岑已依病不上云云仍擇此司權置此官とあり
○正五位下（守平）、原本從四位下に作る十年正月壬寅紀に據て改む從四位下を授けられしは元慶元年正月乙亥紀なり
○爲民部大輔云云、云云は諸本に據て補ふ
○爲常陸太守云云、此云云

紫雲見。○廿九日己巳、以散位正五位下在原朝臣守平爲民部大輔、云云、四品惟恒親王爲常陸太守、云云、從五位上守左近衞少將文室朝臣卷雄爲美濃守、少將如故、四品守彈正尹惟喬親王爲上野太守、彈正尹如故、云云、二品行式部卿兼上野太守忠良親王爲大宰帥、式部卿如故、從五位上守右近衞少將兼大宰少貳坂上大宿禰瀧守爲大貳、少將如故、云云、從五位下藤原朝臣蕃作爲日向介、云云、前皇太后宮亮從五位下兼行美濃權介藤原朝臣遠經爲右衞門權佐、除目六十四人、叙位六人（從五位下五人、外從一人）、○卅日庚午、去年九月廿八日太皇太后崩、十月五日葬、自十月計之、至于是月、滿於天皇心喪五月之限、仍大祓於建禮門前、○三月辛未朔、三日癸酉、御齋燒燈如常、○四日甲戌、自去年九月廿九日、內竪不奏時剋、以天皇心喪也、是日始奏之、○七日丁丑、太政大臣忠仁咳逆、去二月十五日、出自禁中直廬、在私第、是日賚錢五十萬、以充祈禱之費、○九日己卯、詔曰、酌訓皇源、陶風帝籙、未有不施厚恩、以崇盛德、降殊貸以慰元功者、朕外祖父太政大臣藤原朝臣、功高三代、位極上台、仁襟被九州、而

云も諸本に據て補ふ
○推喬、喬は原本高に作る諸本に據て改む
○彈正尹如故云云、云云は諸本に據て補ふ
○上野太守忠良親王、守上の大字及忠以下從五位上守に至る十八字諸本に據て補ふ
○右近衞少將、右は原本左に作る諸本に據て改む
○少將如故云云、云云は諸本に據て補ふ
○爲日向介云云、云云は同上
○除目六十四人、六十四人中此に見ゆるは八人なるが其他は上文に云云とある所にて略せられしなり補任に據るに此日任官ありしは源光は相摸權守に大江音人は兼近江權守に藤原良世は兼讃岐守に任ぜられたり
○叙位六人、氏名詳ならず
（三月）太政大臣、良房
○盛德、盛は原本威に作る閣本尾本前本に據て改む
○殊貸、殊恩に同じ
○功高三代、三代は仁明文德・清和天皇なり高は原本蓋に作る諸本に據て改む

有餘、德水露千里而無盡、自朕在繈褓、以至今時、言其顧復保佐之勤、豈以周旦漢光爲伍、朕念不賞之功、將加非常之寵、知其至謙之性、不敢開口而言、聊且欲褒爵加封、以酬萬一、而損挹彌深、遜讓尤切、感夫乃情、不忍相忤、朕之庶幾、頼彼撝謙之誠、增其延壽之福、長生久視、輔導朕身、令若倚南山坐平原也、是以屈己從人、不奪其志、悉天下以朕爲不知恩也、而今寢瘵私第、日月彌留、珪幣相尋、祈禱未効、朕自鍾此患、寢食無安、心墮思焦、言與涙但、深慮救復之方、誠無所不到矣、聞諸內經、度人歸道之功、能救人之厄命、又先王德政、議獄緩刑、矜老養孤、若施斯仁貸、副朕篤情、縱雖病在膏肓、幸使箴藥得力、宜賜度者八十人、又大赦天下、今日昧爽已前所犯、大辟已下、罪无輕重、已結正、未結正、已發覺、未發覺、皆赦除、唯犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、及強竊二盜、常赦所不免者、不在赦限、又天下道俗高年者、鰥寡孤獨、篤癃之類、量加賑恤、普告遐邇、俾知此意、○十日庚辰、大風雨、賑給京師絕乏者、○十四日甲申、詔存問渤海客使大春日安守、美努清名、並兼領客使、○廿日庚寅、甲斐國都留郡大領外正六

改む
○德水露千里、水は原本氷に作る祕本閣本尾本等に據て改む露は漢書晁錯傳に覆露萬民、注に露膏澤也とあり
○顧復保佐之勤、復は原本複に作る閣本前本淀本に據て改む勤は祕本尾本前本等勤に作る勷の訛なるべし顧復は毛詩小雅蓼莪章に顧我復我とあるに出づ
○周旦漢光、周公旦と漢の霍光となり旦は幼主成王を輔佐し霍光は昭帝を輔佐す
○麋爵、麋は原本糜に作る今閣本尾本前本に據る狩谷氏は麋恐槊といひ考は糜當作褒と云
○乃情、後漢書袁安傳論注に乃情猶弱情也とあり
○輔導、導は原本道に作る閣本前本に據て改む
○珪幣、珪幣は神祇に幣帛を奉りて祈るを云
○言與涙俱、俱は俱の訛なるべし狩谷氏は俱恐供と云
○深慮、慮は原本悪に作る諸本に據て改む
○內經、內典と云に同じ

位上矢作部宅雄、少領外從八位上矢作部每世、賜姓矢作部連。○廿三日癸巳、今春以後、內外頻見恠異、由是分遣使者諸神社奉幣、便於近社道場、每社轉讀金剛般若經、以參議民部卿正四位下兼行春宮大夫南淵朝臣年名、爲賀茂兩社使、參議正四位下行右兵衞督兼近江守源朝臣勤爲松尾梅宮兩社使、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人爲平野社使、參議右大辨從四位上兼行讚岐權守藤原朝臣家宗爲大原野社使、從五位上行少納言兼侍從和氣朝臣彝範爲石清水社使、神祇伯從四位下藤原朝臣廣基爲稻荷社使、石清水社告文曰、云云、又辭別天申、去年陰陽寮占申久、就蕃客來天、不祥之事可在止占申世利、今渤海客、隨盈紀例天來朝世利、事不獲已、國憲止之天可召大菩薩此狀乎毛、聞食天遠客參近止毛、神護之故爾、無事久矜賜倍止恐美恐美毛申賜波久止申、自餘社文一准此例。○廿七日丁酉、地震。○廿八日戊戌、尾張國海部郡清林寺列之定額。○廿九日己亥、正四位下行播磨守紀朝臣今守卒、云云。○夏四月庚子朔、大雨、天皇不御紫宸殿、賜飲侍

佛經を云
○厄命、狩谷氏云厄恐危
○使箴藥得力、箴は字彙に與鍼同、醫者以箴石刺病故有所譏刺而救其失者謂之箴、古醫以石今以鐵とあり、力は秘本閣本尾本等に據て補ふ
○宜賜度者、原本宜上に其字あり衍なり秘本閣本に據て削る
○故殺謀殺、前本殺下に何れも人の字あり
○不在赦限、赦字は紀略に據て補ふ
○大春日安守、原本日下に朝臣の二字あり諸本及類史(百九十四)紀略に據て削る
○美努清名、原本努下に連字あり同上に據て削る
○矢作部造、神名式甲斐國八代郡弓削神社あり此國には矢側矢作部兩氏共に蕃衍せしなるべし
○分遣使者、分は原本各に作る秘本前本淀本及類史百九十四に據て改む
○便於近社、便は原本使に作る類史に據て改む
○毎社轉讀、毎社の二字衍かと思へど類史紀略並に同じ、されば毎社の爲にの意なるべし

臣於宜陽殿西廂、先是太政大臣賜直廬於禁中、常留不出、適者病發、退出外第、由是左右近衛府不擧音樂、賜侍臣五位已上祿、各有差、○十三日壬子、存問渤海客使少外記大春日安守等、開大使楊成規所賫啓牒函、詰問違例之由、問答狀、及記錄安守等向加賀國途中消息、馳驛奏上、○十六日乙卯、以正六位上行少內記都宿禰言道、正六位上行式部少丞平朝臣季長、爲掌渤海客使、常陸少掾從七位上多治眞人守善、文章生從八位下菅野朝臣惟肖、爲領歸鄕渤海客使、○十九日戊午、尾張國去年澇旱、乏絶者賑給之、○廿四日癸亥、宮主從五位下兼行丹波權掾伊伎宿禰是雄卒、是雄者壹伎嶋人也、本姓卜部、改爲伊伎、始祖忍見足尼命、始自神代、供龜卜事、厥後子孫傳習祖業、備於卜部、是雄卜數之道、尤究其要、日者之中、可謂獨步、嘉祥三年、爲東宮宮主、皇太子卽位之後、轉爲宮主、貞觀五年、授外從五位下、十一年叙從五位下、拜丹波權掾、宮主如故、卒時年五十四、○廿六日乙丑、除目五人云云、○五月庚午朔、五日甲戌、停端午之節、无品人康親王薨、輟朝三日、仁明天皇第四子、與光

○占申久、久は類史に據て補ふ
○此狀平毛聞食天、原本毛字なく天を食に作る諸本及類史に據て改め補ふ
○恐美恐美毛申賜波久止此十字類史に據て補ふ
○自餘就文一准此例、此八字同上に據て補ふ
○廿八日戊戌、此條類史百八十及紀略に據て補ふ
○清林寺、今甚目寺村坂牧延命寺藥師堂是也と云
○播磨守紀朝臣今守卒云云、原本守上に標字あり云云の二字なし秘本閣本前本等に據て刪補す今守は續後紀承和十三年正月己酉紀に初見、筑前守美濃守近江權守攝津守山城守大和守筑後守左京大夫玄蕃頭等を歴任す
〔四月〕少外記大春日、此六字は類史百九十四に據て補ふ
○正六位上行少內記都宿禰、正六位上行及宿禰の七字は類史に據て補ふ
○正六位上行式部少丞、正六位上行及少の六字も同じく類史に據て補ふ
○從七位上多治眞人、從七位上の四字は同上
○從八位下菅野朝臣、從

孝天皇同胞也、○六日乙亥、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○七日丙子、掌渤海客使少內記都言道自修解文、請官裁稱、姓名相配、其義乃美、若非佳令、何示遠人、望請改名良香、以遂穩便、依請許之、○十五日甲申、勅遣從五位上守右近衛少將藤原朝臣山陰、到山城國宇治郡山科村、郊迎勞渤海客、領客使大春日安守等、與郊勞使共引渤海國入覲大使政堂省左允正四品慰軍上鎭將軍賜紫金魚袋楊成規、副使右猛賁衛少將正五品賜紫金魚袋李興晟等廿人入京、安置鴻臚舘、右京人左官掌從八位上狛人氏守賜姓直道宿禰、氏守爲人長大、容儀可觀、權爲玄蕃屬、向鴻臚舘、供議饗送迎之事、故隨氏守申請、聽改姓、其先高麗國人也、○十七日丙戌、勅遣正五位下行右馬頭在原朝臣業平、向鴻臚舘、勞問渤海客、是日賜客徒時服、○十八日丁亥、勅遣左近衛中將從四位下兼行備中權守源朝臣舒、向鴻臚舘、撿領楊成規等所賚渤海國王啓及信物、啓云、玄錫啓、季秋極冷、伏惟、天皇起居萬福、即此玄錫蒙恩、肇自建邦、常與貴國、通使傳命、阻年寄音、久要之情、至今彌厚

○八位下の四字同上
○壹伎嶋、伎は原本岐に作る祕本閣本前本等に據て改む
○改爲伊伎、伎は原本岐に作る諸本に據て改む
○忍見足尼命、顯宗天皇三年二月紀（紀上三〇二頁）に見ゆ
○日者、史記索隱に占候卜筮通謂ニ之日者ーとあり
（五月）庚午朔、此三字は尾本及紀略に據て補ふ
○人康親王薨、親王は承和十五年正月戊辰四品に叙し上總太守常陸太守彈正尹等に任ぜられ貞觀元年五月壬戌入道せらる
○輟朝三日、以下同胞也に至る十九字紀略に據て補ふ諸本には云云として省略せり
○六日乙亥、此條も紀略に據て補ふ
○遂穩便、遂は閣本尾本前本逐に作る
○山陰、陰は原本蔭に作る諸本及類史（百九十四）紀略に據て改む
○大春日安守、原本日下に朝臣の二字あり諸本及類史紀略に據て刪る
○慰軍、類史此下に大將軍の三字あり

玄錫繼先祖之遺烈、修舊典之餘風、盈紀感心、善隣顧義、受授使節、仍令聘覲、伏冀天皇俯矜遠客、准例入都、幸甚幸甚、限以滄波、不獲拜伏、下情無任惶懼、謹差政堂省左允楊成規、謹奉啓起居、不宣謹啓、中臺省牒曰、牒、奉處分、天崖路阻、日域程遙、常限紀以修和、亦期年而繼好、隣交有節、使命無愆、音耗相通、歲月長久、今者星霜易變、雲物屢移、一紀已盈、寶當聘覲、所以仰據前典、適尋舊規、向日寄情、發星軺之一使、占風泛葉、蹹渤澥之澗波、萬里途程、寸心所指、往復雖邈、欽慕良深、謹差政堂省左允楊成規、令赴貴國、尋修前好、宜准狀牒上、日本國太政官者、謹錄牒上、謹牒、其信物大蟲皮七張、豹皮六張、熊皮七張、蜜五斛、○十九日戊子、勅遣參議正四位下行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人、向鴻臚館、賜渤海國使、授位階告身、詔命曰、天皇詔旨良萬止、勅命乎客倍衆聞食止宣、國乃王楊成規等乎差天進度志天、天皇我朝廷乎拜奉留事乎、矜賜比慈賜比天、冠位上賜比治賜布、然常都例波、大宮乃內爾召天治賜介理、此廻思女須大心大坐麻須爾依天奈毛、使乎遣天治賜波久止勅天皇我大命乎、聞食止

○李興晟、興は原本與に作る祕本閣本及類史に據て改む以下同じ
○狛人、狛は原本狗に作る諸本に據て改む錄河內雜姓狛人高麗國須牟祁王之後也とあり
○玄錫、元年五月乙丑紀に見ゆる渤海王虔晃に次ぎて立ちし王なり唐書渤海傳に見ゆ
○久要之情、久要は論語憲問篇に久要不忘平生之言注に久要舊約也とあり
○盈紀、十二年を一紀とす
○聘覲、聘は原本娉に作る類史に據て改む下同じ
○亦期年、亦は原本示に作る閣本前本及類史に據て改む
○音耗、耗は原本札に作る下文及類史に據て改む耗は消息也
○星軺之一使、使者なる星軺は星は星使の星にて軺は使者の乘る車なり
○渤海之淵波、淵瀾は東海なる初學記に案東海之別有渤澥故東海共稱渤海とあり淵は原本潤に作る祕本尼本及類史に據て改む

宣布、大使已下相共拜舞、訖授大使楊成規從四位下、判官李周慶、賀王眞、並正五位下、錄事高福成、高觀、李孝信、並從五位上、品官以下、并首領等、授位各有等級、及天文生以上、隨位階各賜朝服、去年陰陽寮占曰、就蕃客來朝、可有不祥之徵、由是不引見、白鴻臚館放還焉、○廿日己丑、內藏寮與渤海客、廻易貨物、○廿一日庚寅、聽京師人與渤海客交關、○廿二日辛卯、聽諸市人與客徒私相市易、是日、官錢四十萬賜渤海國使等、乃喚集市廛人、賣與客徒此間土物、以前筑後少目從七位上伊勢朝臣興房、爲領歸鄉客使通事、○廿三日壬辰、勅遣大學頭從五位上兼行文章博士阿波介巨勢朝臣文雄、文章得業生越前大掾從七位下藤原朝臣佐世於鴻臚館、饗讌渤海國使、宣詔曰、客人倍波、常都例波、大宮乃內爾召天、饗賜比音樂賜比介理、而乎思女須大心大坐爾依天宗毛、使乎遣天大物賜布、客人倍此狀乎悟天、安具可爾侍食宗止勅大命乎聞食止宣、觴行數周、客主淵醉、賜客徒祿各有差、○廿四日癸巳、大使楊成規從掌客使請私、以壞奠、將奉獻天皇及皇太子、掌客使奏狀、有詔

許之、內裏東宮賚物有〔數〕是日勅、遣民部少輔兼東宮學士從五位下
橘朝臣廣相、賜客徒曲宴、遣兵部少輔從五位下兼行下野權介高階眞
人令範賜御衣、客主具醉、興成賦詩、〇廿五日甲午、勅遣參議右大辨從
四位上兼行讃岐守藤原朝臣家宗、從四位上行右近衞中將兼行阿波
守源朝臣興、從六位下守大內記大江朝臣公幹於鴻臚館、賜勅書、從五
位上行少納言兼侍從和氣朝臣彜範、正五位下守右中辨藤原朝臣良
近、左大史正六位上大春日朝臣安守、付太政官牒、大使已下再拜舞踏、
大使楊成規膝行而進、北向跪受勅書、太政官牒函、勅書曰、天皇敬問渤
海國王、成規等至、省啓昭然、惟王家之急績、粉澤施治、一性之貞凝、丹青
守信、風猷不墜、景式猶令、相襲舊基於居城、靡欺先紀於行棹、言其篤義、
來覲既脩、贈以翔仁、放歸如速、數千里之波浪、雖有邊涯、十二廻之寒暄、
豈促圭晷、苟謂拘禮、誰爲隔疎、德也不孤、夢想君子而已、國信附廻、到宜
撿受、梅熟、王及境局、小大無恙、略懷遣此、何必煩多、太政官牒曰、日本國
太政官牒渤海國中臺省、得中臺省牒偁、奉處分、天崖路阻、日域程遙、常

○往復遊、遊は尾本前本注本及類史に據て補ふ
○政堂省、省は秘本閣本尾本及類史に據て補ふ
○大蟲皮、大蟲は虎の一名なり續紀天平十一年十二月戊辰紀に出づ尾本蟲を蛇に作るは非
○授位階告身、菅家文草八に賜渤海入覲使告身勅書見ゆ
○常都例、都は原本大字させるを諸本及類史に據て改む
○李周慶、原本周を國に、慶を度に作る周は諸本及類史に據り慶は類史紀略に據て改む
○交關、關は原本閑に作る類史紀略に據て改む
○興房、興は原本與に作る閣本及類史に從ふ
○常都例波、波は原本爾に作る類史に據て改む
○侍食余止、侍は饗讌に侍し食は飲食するを云余は原本奈に作る秘本閣本尾本及類史に據て改む
○壤奠、尙書康王之誥に出づ注に執壤地所出而奠贄也とあり土產を獻上するを云、原本懷尊に作る諸本に據て改む
○賚物、狩谷氏は賚恐賚

限紀以修和、亦期年而繼好、隣交有節、使命無愆、音耗相通、歳月長久、今者星霜易變、雲物屢移、一紀已盈、實當聘覲、謹差政堂省左允楊成規、令赴貴國者、官具狀奏請、奉勅曰、成規等翹情紫闕、織路滄溟、守我朝章、修其國禮、善隣之歎、允屬寢興、宜准前規、使中舊好者、准勅處分、及期却廻、附璽書幷國信、至宜領之、今以狀牒送、牒到准狀、故牒、是日、領歸鄉客使多治眞人守善等、引客徒出館、大使楊成規跪言、成規等觀聘禮畢、歸本土去、今差天使、令其領送、成規等瞻望丹闕、涕泗盈衿、仰戀之誠、中心無限、臨別、掌客使都良香相遮館門、舉觴而進、○卅日己亥、駿河國國分寺別堂有大蛇、呑般若心經卅一卷複爲一軸、觀者以繩結蛇尾、倒懸樹上、小選吐經、蛇落地半死、俄而更生、備後國獲連理樹一、○六月庚子朔、十一日庚戌、天皇不御神嘉殿、所司於宮內省、修神今食祭、○十六日乙卯、地震、○廿四日癸亥、地震、除目十三人、○廿九日戊辰、地震、

さ云
○讃岐守(原宗、上文三月癸巳紀には權守とあれど下文十六年二月己未紀には守とあり其他にも守とあり
○源朝臣興、興は原本與に作る祕本閣本及類史に據て改む
○賜勅書、勅書は菅家文草八に載す
○大春日朝臣安守、朝臣の二字祕本閣本尾本等にはなけれど類史にはあり
○昭然、昭は原本照に作る諸本及類史文草に據て改む
○粉澤施治、北堂書抄引周書に禮義治國之粉澤とあり
○「性之貞凝、」口は類史に據て補ふ文草は本書に同じ貞凝は上官儀册江王文に體局貞凝とあり凝は定也堅也
○丹青守信、文選陸雲詠懷詩に丹青著明誓、永世不相忘 注に善曰東觀漢記光武詔曰明設丹青之信、李陵曰、如丹青分明とあり
○景式、景は大也式は法也、帝國の大法なり
○相與[illegible]

日本三代實錄卷第廿一

の王位を繼承せるを云ふ ○靡欺先紀於行伸、先紀は來觀の規定をいふ行伸は遠く海を航行し來るを云ふ來觀の規定を欺かず渡來せりとなり、 ○言申篤義、義は原本信に作る諸本及類史に據て改む ○翔仁、類史朔仁に作る ○波浪、波は原本涉に作る類史に據て改む ○圭晷、圭は土圭也晷は日影也日時を云ふ ○德也不孤、論語里仁篇に德不ㇾ孤必有ㇾ鄰とあるに據れり、故に下に夢想二君子一と云ふ ○附廻、廻は原本還に作る文草に據て改む ○梅熟、熟は原本熱に作る類史及文草に據て改む ○何必煩多、文草必を亦に作る ○牒渤海國中臺省得、原本省字なく得上に牒字あり、類史及狩谷氏の說に據て刪補す ○亦期年、亦は原本示に作る類史に據て改む ○音耗、耗は原本札に作る諸本及類史に據て改む ○聘覲、聘は原本躬に作る尾本前本及類史に據て改む下同じ ○織路滄溟、文選思玄賦に織路於四裔注に織往來於道如織也とあり ○我朝章、我は原本彼に作る諸本及類史に據て改む ○善隣之歎、左傳隱六年に親仁善鄰國之寶也とあるに據れり ○寤興、興は原本與に作る祕本閣本及類史に據て改む文選顏延之答郁尙書詩に寤興鬱無已、注に毛詩曰言念君子載寢載興とあり ○使申舊好、使は原本便に作る祕本尾本前本及類史に據て改む ○今以狀牒送、牒送の二字は類史に據て補ふ ○覲聘、原本覲躬に作る覲は祕本閣本尾本等及類史に據り聘は類史に據て改む覲は視也周禮春官典瑞の注に大夫衆來曰覲寡來曰聘とあり ○歸本土去、類史には去字なく歸上に一字空白とす ○小選、少選に同じ須臾なり 〔六月〕庚子朔、此三字紀略に據て補ふ ○修神今食祭、紀略神上に月次の二字あり ○十六日乙卯、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ ○癸亥地震、地震の二字は類史及紀略に據て補ふ ○除目十三人、古今目錄に廿四日癸亥從五位下源朝臣精補侍從とあり下文七月辛巳紀に據るに安倍貞行も此日陸奧守に任ぜられしなるべし ○廿九日戊辰、此條類史及紀略に據て補ふ ○日本三代實錄卷第廿一、原本此下に終字あり前本尾本淀本に據て削る祕本閣本には此一行なし

日本三代實錄卷第廿二　起貞觀十四年七月盡十二月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

秋七月己巳朔、四日壬申、廣瀨龍田祭、○九日丁丑、晝有大流星、○十日戊寅、申時、白雲氣起東北、亘西南、形如疋布、是日、參議右衞門督源朝臣生抗表、請罷右衞門督、不許、○十一日己卯、四品守彈正尹惟喬親王寢疾、頓出家爲沙門、○十三日辛巳、正五位下行陸奥守安倍朝臣貞行詣闕拜辭、引升殿上、賜飲、酬醉之後、賜御衣物而罷、○十五日癸未、酉初、月有蝕之、至戌復本、輪下片黑如聚墨、○十七日乙酉、遠江國兵庫自鳴、聲如槌鼓、○十八日丙戌、延六十僧於大極殿、限以三日、轉讀大般若經、祈雨也、○十九日丁亥、貞觀寺申牒、天安三年三月十九日、依大僧都傳燈大法師位眞雅表請、賜年分度者三人於嘉祥寺、彼時貞觀寺建立之初、未定其名、因假嘉祥寺爲年分號、即稱西院、安置度者、貞觀四年七月

○日本三代實錄、日本の二字は祕本閣本になし
○左大臣云云、此行祕本閣本前本等になし
【貞觀十四年】己巳朔、此三字祕本閣本前本等なし
○四日壬申、此條紀略に據て補ふ
○疋布、一疋の布の意なるべし
○是日、以下不許に至る廿二字は紀略に據て補ふ此上表は文草九に見ゆ
○彈正尹惟喬親王、上文三月己巳紀に惟喬親王爲上野太守とありされば尹の下に兼上野太守とあるべきなり
○頓出家、伊勢物語に此親王の事を詳に述べ御側近く仕へし人も俄に御出家あらせられし事を驚きたりと云り
○賜飲酬醉、原本飲酬の二字を酒の一字とす諸本及紀略に據て改む
○月有蝕之、月は原本日

廿七日、以嘉祥寺西院、號貞觀寺、而年分之號、仍舊不改、恐後代之人、還致疑殆、望請、依實早被改定、太政官處分、依請、○廿日戊子、外從五位下行侍醫兼美作權介坂上宿禰貞野卒、云云、○廿一日己丑、降雨、天皇以百姓罹旱、依佛祈雨、不御葷鮮、果得甘雨、時人以爲、感之至也、○廿四日壬辰、大雨、參議右衛門督源朝臣生重奉表言、臣去十日抗表、請罷右衛門督、不堪懇至、重奉陳聞、許之、○廿五日癸巳、大雨、○廿七日乙未、雷雨地震、○廿九日丁酉、是日、有宣旨、停相撲節、駿河國蛇呑佛經之異、神祇官卜曰、當年冬、明年春、當國有失火疫癘之災、是日令國司鎭謝焉、皇太后幸染殿宮、制、五畿七道諸國、出納官物、國司史生已上、隨犯科罪、餘官不相坐、先是近江國司言、出擧收納、幷出下雜稻等事、官長獨自不得巡檢、仍分遣史生已上、令行其事、而或心挾貪濁、當事費用、或身受賂遺、多致虛納、格云、一人有犯、餘官同坐、郡司和許、亦同國司、今依此文、事發之時、共陷重罪、苛酷之甚、更亦何言、案律條、不知情者、不入其罪、望請、所欠之物、相共塡納、所坐之罪、獨科其身、從之、○八月己亥朔、王公

に作る諸本に據て改む
○壬戌、戌は原本戌に作る紀略に據て改む
○黑如漆還、原本黑た鈎に罣な雲に作る知に諸本に據り暑は閣本前本に據て改む
○眞雅表請、諸本請字なし
○太政官處分依請、三代格二に太政官符見ゆ
○坂上宿禰貞野卒、貞は原本眞に作る閣本前本達本及紀略に據て改む貞野は十三年正月戊寅紀に美作權介と見えたる外に所見なし
○依佛祈雨、依は諸本及紀略に據て補ふ
○甘雨、紀略甘澍に作る
○源朝臣生重奉表、此表文草九に見ゆ去十日を去十五日とす
○雷雨地震、地震の二字は諸本及類史(百七十一)紀略に據て補ふ
○制五畿七道諸國云云、三代格十四に太政官符として載す
○當事費用、當は原本掌に作る格に據て改む
○賂遺、賂は原本略に作る格及要略に據て改む
○同國司、格には此下に

者字あり
○案律條、格には案上に謹字あり
○不入其罪、格には此下に者字あり
○所欠之物相共塡納、原本欠を貢に塡を須に作る祕本閣本前本等及格に據て改む
〔八月〕左仗、左は紀略右に作る
○會飲、會は諸本及類史七十五に命に作る
○勅賜、勅は類史なし
○在座者、座は原本坐に作る類史に據て改む
○御扇、抄調度部服玩具に扇四聲字苑云扇〈阿布岐〉所以取風也兼名苑云扇一名箑〈箑注に按扇門扉也〉振箑、取風似門扉之開闔故箑亦名扇皇國宇知波即是とあり
○大原史弘原賜姓大原宿禰、宿禰を賜ふ事は五年九月丁酉紀に已に出づ何れか誤あるべし姓は例に據て補ふ
○丹波國人云云、以下愛宕郡に至る廿八字八年閏三月壬戌紀に已に出づ何れか誤あるべし
○源朝臣生、紹運錄に嵯峨天皇皇子母大原全子と

已下、侍左仗下、會飲至夕、勅賜五位已上、見在座者、御扇各一、親王已下、皆起舞蹈、右京人但馬權掾從七位下大原史弘原賜姓大原宿禰、丹波國人左近衞將監從六位上丹波直副茂、改本居貫山城國愛宕郡、○二日庚子、參議正四位下源朝臣生、先是沈痾累月、落髮爲僧、是日卒、云云、年五十二、○四日壬辰、大風雨、多壞民人廬舍、○八日丙午、勅省治部省書生二人、宮內省史生二人、加置勘解由使史生二員、書生三員、備後國安那郡人安那豐吉賣一產三男、給稻三百束、乳母一人、三年之間給粮、○九日丁未、釋奠如常、○十日戊申、明經博士等參入內裏、不喚賜祿而罷、○十三日辛亥、左京人主稅頭從五位上兼行算博士家原宿禰氏主、主計頭從五位上兼行但馬權守家原宿禰繩雄、從五位下行侍醫家原宿禰善宗、外從五位下行曆博士兼陰陽助家原宿禰鄕好、主稅助正六位上家原宿禰春鄕、筭得業生從八位上家原宿禰繁居、學生從八位下家原宿禰良居等、賜姓朝臣、氏主父宿禰富依、天長三年、賜姓家原連之日、富依修解偁、富依先、出自後漢光武皇帝也、氏主今言曰、先出自宣

化天皇第一皇子、延暦十八年、進本系之日、以後漢光武皇帝爲祖者誤也、父子所稱、始稱之所出、先後不同、未知誰是矣、但姓氏錄所記可謂得實正焉、紀伊國那賀郡人左少史正六位上伴連貞宗、父正六位上伴連益繼等、改本貫隸右京、右京人有澤眞人春則等男女九人、賜姓文室眞人、○廿五日癸亥、進從三位守大納言兼左近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣基經階加正三位、參議民部卿正四位下兼行春宮大夫近江守南淵朝臣年名、參議正四位下行皇太后宮大夫兼讃岐守藤原朝臣良世、並從三位、天皇御紫宸殿、拜大臣以下參議以上、策命曰、天皇我詔旨良萬止勅命乎、親王諸王諸臣百官人等、天下公民、衆聞食止宣、比年國家毛弊衰多禮波、公費在倍岐政波、行給波之止所念行止毛、國家之鎮之天、天下之政乎輔導岐侍萬須太政大臣久病天、私第爾苦侍末世波、庶政乃擁滯留事毛在奴部岐爾依天奈毛、大臣以下乃官上賜比治賜布、食國之法止定賜行賜倍留國法乃隨爾、先立先立止、大納言正三位源融朝臣波、久朝政爾經奉天、至今時末天爾無怠緩、亦於朕天近親爾毛在、又可奉岐次爾毛在

あり類史六十七に生下一字空白とす
○年五十二、此四字は紀略に據て補ふ
○四日壬辰、此條は紀略に據て補ふ
○勅省、以下三員に至る卅字は類史百七に據て補ふ
○三年之間、間は原本内に作る閣本前本及類史五十四に據て改む
○不喚、此下恐くは御前の二字あるべし
○出自後漢光武、後字は下文に據て補ふ
○始稱之所出、稱は恐くは祖の誤なるべし
○姓氏錄所記、現存の姓氏錄には見えず
○右京人有澤眞人云云、以下廿字は紀略十二月十五日辛亥に繫く其方正しきかと思へど姑く諸本に據る
○親王諸王、諸王の二字は例に據て補ふ
○比年、比は原本此に作る諸本に據て改む
○輔導、輔は諸本齊に作る
○擁滯、擁は壅に同じ
○先立先立止、先立の二字は祕本尾本に據て補ふ

爾依天、左大臣官爾治賜布、又大納言正三位藤原基經朝臣波、元來致誠天、日夜止無久、愼奉之上爾、朝政毛能堪奉倍岐器奈留爾依天、右大臣官爾治賜、又繼々仕奉倍岐次第止之天、中納言從三位源多朝臣、從三位藤原常行朝臣乎波、大納言官爾、參議從三位南淵年名朝臣、從三位藤原良世朝臣乎波、中納言官爾、從四位上菅原朝臣是善、從四位上藤原朝臣仲統、從四位上源朝臣能有乎波、參議爾任賜久止勅布天皇我大命乎、衆聞食止宣、○廿八日丙寅、叙位、○廿九日丁卯晦、右大臣藤原朝臣基經爲左近衛大將、大納言藤原朝臣常行爲右近衛大將、並如故、云云、除目六人、是日、皇太后幸染殿宮、○九月戊辰朔、地震、○二日己巳、太政大臣從一位藤原朝臣良房薨于東一條第、年六十九、輟朝三日、○三日庚午、停御燈之齋、○四日辛未、諸衛陣兵戒嚴、遣雅樂頭源朝臣穎、率左右近衛兵衛等舍人、監護左右兵庫、散位安倍朝臣比高監左馬寮、武藏介藤原朝臣房守監右馬寮、又遣使於伊勢、近江、美濃等、警固、云云、策命曰、云云、正一位乃冠加贈、云云、封以美濃天、爲美濃公、謚曰忠仁、食封賚人、並如生存、太

○可奉岐次、次は原本賁に作る祕本閣本前本等に據て改む次は順序なり ○基經朝臣、朝臣の二字は前後の例に據て補ふ ○朝政毛、毛上に爾字あるべきか ○仕奉倍岐次第止之天、原本仕を任に岐を之に作り次以下五字なし諸本に據て改め補ふ ○能有乎波、原本乎波の二字缺く諸本に據て補ふ ○任賜久止勅布、久以下衆聞食止宣に至る十五字は十二年正月丙寅策命に據て補ふ ○廿八日丙寅、此條紀略に據て補ふ ○右大臣藤原朝臣基經、以下並如故云云に至る卅五字は紀略に據て補ふ ○除目六人、六人中二人は上に見ゆ他の四人中參議左兵衛督在原朝臣行平は左衛門督に參議源朝臣勤は兼右衛門督にす

九月、良房薨于東一條第、于以下三日に至る十三字は原本云云に作る紀略に據て改め補ふ紀略もさきより略之なれど姑く之に據る公卿補任に九月二日薨同四日贈正一位

號白河殿又染殿、謚曰忠仁公、封美乃國、贈朝ミ國日是日葬山城國愛宕郡白河邊とあり
○四日辛亥、此條紀略に據て補ふ
○愛宕郡白河邊、諸陵式に後愛宕墓太政大臣贈正一位美濃公藤原朝臣、在山城國愛宕郡、山城志に在一乘寺村地名染殿と見ゆ
○月入箕、箕は廿八宿の一にて東方にあり
○遣內舍人、原本遣上に遣使の二字あり諸本に據て削る
○當麻眞人春興、原本麻を摩に、興を與に作る、祕本閣本に據て改む
○式部少錄、原本式を民に作る諸本に據て改む
○大祓於建禮門前、祕本閣本淀本には於字なし
○生丘、丘は諸本及九年二月辛巳紀に據て補ふ
○日宿在氐、氐は廿八宿の一にて東方にあり在は原本亢に作る諸本に據て改む狩谷校本に日恐月さあり
○大納言兼右近衞大將（常行）、原本右近衞大將大納言に作る紀略に據て

政大臣之官、父如故、遣大納言源朝臣多、中納言南淵朝臣年名、參議藤原朝臣仲統、樞前宣制、是日、葬太政大臣於愛宕郡白河邊、云云、○六日癸酉、夜、月入箕、○八日乙亥、諸衞解嚴、罷兵庫左右馬寮監護使、遣內舍人從六位下多治眞人國統、從七位下當麻眞人春興、正八位上藤原朝臣高尙等、齎勅符木契、解伊勢、近江、美濃等國關警、○九日丙子、停重陽節也、固近江國關使前丹波守從五位上坂上大宿禰貞守奉契歸奏、○十日丁丑、攝津國豐嶋郡人式部少錄正六位上榎原忌寸良員、改本居貫隸左京、○十一日戊寅、不奉伊勢大神宮幣、以太政大臣薨也、大祓於建禮門前、○十三日庚辰、大祓、固伊勢美濃國關使左京權亮從五位下藤原朝臣生丘、前伊豫權介從五位下藤原朝臣房雄等、奉契歸奏、○十六日癸未、日赤無光、日宿在氐、○廿一日戊子、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿五日壬辰、新鑄貞觀錢、文字破滅、輪郭無全、凡在賣買、嫌弃大半、譴責鑄錢司、令分明鑄作、○卅日丁酉、地震、大祓於建禮門前、大納言兼右近衞大將藤原朝臣常行抗表曰、云云、拔臣爲

大納言、伏願聽臣退讓之請、優詔不許、〇冬十月戊戌朔、參議已上、於左仗下賜飮、侍從五位已上、侯於侍從所、並賜祿各有差、〇二日己亥、夜地震、〇六日癸卯、正三位守左大臣源朝臣融、抗表辭職、優詔不許、〇七日甲辰、烏囓拔內竪傳點籌木、〇十日丁未、正三位守右大臣兼行左近衞大將藤原朝臣基經、抗表辭故太政大臣忠仁公封邑曰、臣聞、昔樊哀侯之遺言、時至猶從厥旨、羊太常之終制、府丞不敢違心、何況忘私義讓、指河日而結誠、愛國忠謀、瀝肝膽而貽誡、臣謹讀去月四日詔書、贈於故太政大臣藤原朝臣以正一位、又以美濃國封之、爲美濃公、謚曰忠仁、食封資人、並同存日、太政大臣之官、亦如故矣、崇貴慇懃、寵光煇赫、聲榮之盛、門閥縟華、伏計、先臣幽魄、追榮舊想、添蒐藻於天波、退憚新恩、增氷谷於地底、但先臣臨終、誡臣曰、余昔奉聖主於繈褓、望成人於日月、上天從欲、明辟累年、吾生自此而殞、世上亦有何思、徒恨、時運陵遲、邦國凋弊、雖煩開聖化於東后、猶難起人謠於甫田、生時既見帑藏之空、死後何招錙銖之費、卽我下世之後、朝例攸給、葬送等物、凡諸應爲公煩者、無小無大、汝

改む
〇抗表曰云云、曰云云の三字諸本になし
〇優詔不許、優詔の二字は紀略に據て補ふ
（十月）烏囓拔、原本烏を鳥に作る閣本に據て改む
〇樊哀侯之遺言云云、後漢書樊儵傳に儵卒諡曰哀侯帝遣張音問所遺言云云帝勅二郡並令從之と見ゆ原本哀を裏に作る諸本に據て改む
〇羊太常云云、後漢書羊續傳に靈帝六年徵爲太常未及行會病卒遺言不受賵遺舊典二千石卒官賻百萬府丞焦儉遵續先意一無所受（節略）とあり
〇指河日而結誠、唐書蘇安恒傳に指河爲誓、毛詩王風大車章に謂予不信有如皦日とあり
〇瀝肝膽而貽誡、原本瀝を歷に作る諸本に據て改む誡は恐くは誠の訛なるべし
〇同存日、存は原本平に作る謄本閣本尾本に據て改む
〇崇貴、崇は尊崇也貴は御也、階位嫡謚號を云

○鬼瀆、已に注す
○繈緥、繈襁に同じ
○上天從欲云云、尙書泰誓に民之所欲天必從之とあり明辟は辟は君なり明君に同じ
○徒恨、徒は原本從に作る諸本に據て改む
○凋弊、弊は原本幣に作る諸本に據て改む
○雖煩閑聖化於東后、東后は考に謂春農也と云煩は諸本炊に作る或は欲の訛ならむか
○起人謠於甫田、豐年を贊嘆するを云甫田は毛詩小雅甫田章に我田既臧農夫之慶とあるに據れり
○汝宜固辭、汝は原本須に作る祕本閣本前本に據て改む
○長樂之宮、皇太后を申す長樂宮は漢の長安の宮名にて太后の居處なり
○沉瘵之地、瘵は病也原本瘵を瘉に作る祕本閣本前本に據て改む
○汝郎猶子、菓經は良房の兄長良の子なり故に猶子と云禮記檀弓に兄弟之子猶子也とあり
○職位二封、職封と位封となり二は原本食に作る諸本に據て改む

宜固辭一切勿請、但如此心事、々須面諮皇太后殿下、然而君臣禮隔、男女事殊、何驚長樂之宮、敢幸沉瘵之地、吾既無男、汝郎猶子、宜述吾志、莫忘吾言、而今職位二封、既同平日、加之以美濃之一國、公費兼倍於生時、誠非先臣提撕告誡之意也、臣仍具狀以聞、皇太后殿下答曰、先慈淹疾涉旬、雖有危篤、恐余憂灼、不令聞知、永隔慈顏、無由再奉、崩心哽絕、何地寄思、唯須欽遺命之旨、以獻愼終之誠、宜抽深趣、早奏聖朝、謹奉令旨、敢上此表、伏惟聖主陛下、疇昔下恩詔、加爵加封、敢將綢繆勅斷章表、然猶感其匪石之誠、不敢張奪情之制、魂而有靈、意當無變、既在眼前、而苦讓寧於泉下、而甘承、因顧、唯加號謚、以表殊恩、職封國封等、於公有費者、盡准恒典、即從停廢、然則陛下追崇之德、猶有所加、先臣損挹之心、遂無攸失、上令太后全永言之孝思、下使愚臣果欽命之精誠、伏願陛下、曲從哀許、反汗收綸、被至德於幽明、均深仁於存歿、伏陳誠詞、淚俱咽、不任悲懇征營之至、謹拜表以聞、勅答曰、省表悉之、故太政大臣忠仁公、保養朕躬、不訓苦切、朝露遽至、傷如之何、凡褒贈之設、所以旌有功表有德也、忠仁

○平日、平は上文に據るに存の誤なるべし
○提撕告誡、提撕は後進を教導するを云ふ
○先慈、亡父の意、皇太后藤明子は良房の御子
○渉旬、渉は祕本閣本尾本に據て補ふ
○憂灼、灼は燒也憂の心を燒くが如きを云ふ
○敢上此表、敢は原本數に作る諸本に據て改む
○疇昔下恩詔、原本疇字詔の下にありて昔下の二字なし昔下は祕本閣本尾本等に據て補ひ疇は狩谷氏の說に據て改む
○將綢繆勅、綢繆は纏綿に同じ懇篤の意將は持也以に同じ
○匪石之誠、毛詩邶風柏舟章に我心匪石不可轉とあり
○奪情之制、原本奪を奮に作り情を惟に作る奪は寛イ本に據り情は諸本に據て改む
○苦讓、苦は原本昔に作る諸本に據て改む
○寧於泉下、寧は諸本に據て補ふ
○永言之孝思、毛詩大雅下武章に永言孝思、箋に長我孝心之所思とあり

公處於外祖之顯地、重以上台之元功、朕恩所以加隆、無所不至、但尋公平日之志、深秉謙損之志、是用纔飾以正一位、追封爲美濃公、於朕之心、猶有不厭、軍法斬一牙門將者、封侯萬里之外、夫斬一將之功、孰與安寧天下、況亦有天爵者、人爵從之、朕答於恩、公食於道、後之議者、誰謂不宜、今卿上表、爲公讓之、朕雖知其丹誠、未忍割素意、宜如前詔、莫有所請、○十三日庚戌、右大臣兼左近衛大將藤原朝臣基經上表、辭大臣職曰、伏奉恩旨、以去八月廿五日、任右大臣、仰思注意、望辰極以魂亡、俯佇具瞻、捐蒸黎而顏厚、臣銀黃濫服、菽麥彌昏、欲報光寵於昊蒼、更累崇班於尸素、況乎禮之强仕、臣齒未滿其期、書之皐成、臣能未及其事、昔甘羅之一十餘二、以多智不爲少年、今微臣之卅有七、以無才猶謂太早、伏願陛下鴻慈、聽臣愚悃、退臣所帶、俾槐路絕曠官之聲、華門得稅駕之地、不勝至誠、上表以聞、優詔不許之、○十六日癸丑、右大臣重抗表曰、臣聞、深衷所屆、昊穹必遂其誠、至懇攸通、仁聖不違其願、臣以先臣深託、前表具陳、唯是血誠、實非華飾、聖朝陛下、不忍哀惜之篤意、欲全追賁之鴻恩、重降册

詔、未賜天從、夫人心如面、性尚各殊、若反其所好、即榮還爲憂、先臣常守沖退、固辭榮位、至心表彰、臨歿彌勵、而今追加封爵、豈同生人、則將必奪情之恨更深、結草之思還薄、昔晉太傅羊祜、生時讓封、歿時遺令、代王重違其志、遂叶其望、還下優詔、更褒至謙、比夷齊而稱賢、均季札之全節、君臣之道美、兩存而不刊、竊以、先臣深款、無慚於羊公、陛下篤仁、定加於晉帝、何有鬢氷之感已同、大渙之施還異乎、況亦皇太后殿下、至孝蒸々、必欲述遺命之旨、瑣々愚臣、誓以死者反生、々者不愧也、但先臣非好逃聲榮於朝市、尤忌致煩費於國家、然則賜爵賜諡、足以表戎功、國封職封、不敢妨國用、唯位封所加、公損無幾、望准人存、略在聖旨、然亦不過服紀之閑年、將同朝廷之恒跡、伏願陛下、推至誠以存理、應懇請以顧公、俯賜寢慈、早收璽誥、俾憂國之誠、徹泉壤而寡恨、奉公之節、施竹帛而遺芬、頗塵璇扆、伏深戰兢、不任悾款之至、謹重拜表以聞、勅答曰、右大臣藤原朝臣抗表累至、反覆知之、然先王之治國也、觀其毛髮之勞、且不愛肥腴之壤、況忠仁公、莫大之績、冠於古今、朕盡青桐而爲珪、何曾酬德、窮白茅而爲

○伏陳誠詞涙俱咽、私記に或云詞上下疑有脱字と云

○征營、漢書王莽傳に人民正營無所錯手足、注に正營惶恐不安之意也正音征とあり征は原本屏に作る諸本に據て改む

○勅答、都氏文集四に載す

○若切、原本若を告に作る秘本閣本尾本等及文集に據て改む

○朝露溘至、霧去を云、溘は奄忽也此語文選恨賦に出づ

○褒贈之設、設は文集詔に作る

○有德、原本頭注に本闕德字以都氏文集補とあり

○處於外祖、處は文集起に作る

○一牙門、後漢書袁紹傳注に牙門旗竿軍之精也郎周禮司常職云軍旅會同置旌門是也とあり牙は牙旗なり

○有天爵者云云、孟子告子上篇に古之人脩其天爵而人爵從之とあるに據れり

○後之議者、後は原本假に作る文集に據て改む

○兼左近衛大將藤原朝臣此十字紀略に據て補ふ
○上表、此表文は菅家文草及文粹五に出づ
○伏奉恩旨云云、以下上表以聞に至る百三十七字は祕本以下諸本になし松下氏菅家文草を以て補ひしなり
○去八月廿五日、原本廿を十に作る文粹に據て改む
○注意、史記陸賈傳に天下安注意相、天下危注意將とあるに據れり
○佇具瞻、佇は原本紵に作る文粹に據て改む佇は待也立也具瞻は已に注す
○蒸黎、衆民なり
○顏厚、文草此下に臣某誠恐誠惶頓首頓首死罪死罪の十四字あり文粹には臣某中謝とす
○銀黃、漢書酷吏楊僕傳に懷銀黃垂三組、注に銀銀印也黃金印也とあり
○菽麥彌昏、左傳成十八年に周子有兄而無慧不能辨菽麥、注に菽大豆也豆麥殊形易別故以爲癡者之候、不慧蓋世所謂白癡とあり
○昊蒼、昊天に同じ天子を申せり

苞、未可答恩、初謂公功高蛇丘、封卑蟻垤、設使讓章十上、不欲一從、何意重讀來表、令人酸鼻、卿感其猶子之愛、甚於喪父之傷、自稟啓體之診訓、善述損己之遺言、推丹之誠彌深、泣血之請苦至、追想平素、時動朕心、加之、太后殿下、亦爲辭之、至孝安親、豈其違之、朕既屈意於紫闥、公當流謙於黃泉、又晉羊叔子、身歿讓存、來表引以相比可矣、唯祜雖南城之新爵眼前固辭、而鉅平之舊封、身後相傳、其位封者、存日所食、今之加增、亦是細塵、宜同之鉅平、永々莫絕、豈足爲餝幽之榮、聊須寄追遠之念、餘依來請、並從停廢、景風徒吹、震雷收響、朕之遺恨、千秋無窮、○十七日甲寅、正三位守左大臣源朝臣融抗表、不省、○廿一日戊午、右大臣重抗表曰、中使左近衛少將藤原朝臣有實、至奉勅旨、還臣辭謝大臣之表、伏願、上慮天心、下審人議、濟臣之欲陷氷淵、顧臣之必傷糞土、不許焉、○廿五日壬戌、右大臣重抗表、伏願、曲照丹懇、俯降洪澤、退微臣新命之職、全陛下不貲之恩、○廿六日癸亥、勅、大宰府輸貢綿、以麁惡特甚、宜降新典、更肅將來、仍須其麁惡絹及百疋、綿滿萬屯、彼府藏司別、并使監典、並解却見

任己、勅答曰、右大臣藤原朝臣讓表三至、具之、朕推心於卿、大小悉委、而今頻致收維之請、未親補袞之勤、雖清風足以激貪、而素概何益匡政、若欲雲霞聳意、不在人間、朕豈蔑之、若當輔道眇身、共安天下、今其時也、遂以往命、便斷來章、○廿七日甲子、守大納言右近衛大將藤原朝臣常行上表辭職、不許、

○禮之强仕、禮記曲禮に四十日强而仕とあるに出づ　○書之阜廢、尚書周官に六卿分職各率其屬以倡九牧阜成兆民、傳に大成兆民之性命とあるに出づ　○甘羅云云、史記甘茂傳に甘茂の孫甘羅十二歲にして能く秦の相文信侯の爲に張唐を說き使命を果せる事見ゆ

○槐路、周禮秋官朝士に面三槐三公位焉とあるに出づ　○華門、華は蓽の訛、左傳襄十年注に蓽門は柴門とあり　○稅駕、史記李斯傳注に稅駕猶解駕言休息也とあり　○不許之、不は紀略に據て補ふ　○深衷、衷は原本裏に作る閣本前本に據て改む　○不違其願、願は原本顧に作る祕本閣本前本等に據て改む　○血誠、血は原本至に作る諸本に據て改む　○追賁、贈位賜封等を云　○天從、尚書泰誓に民之所欲天必從之とあるに據れり聽許の意なり　○人心如面、左傳襄十二年に人心之不同如其面とあり　○性尙、性情好尙なり　○結草之恩還薄、結草は左傳宣十五年に魏武子有嬖妾武子疾命顆曰必嫁是疾病則曰必以爲殉及卒顆嫁之及輔氏之役顆見老人結草杜回躓而顚故獲之夜夢之曰余而所嫁婦人之父也（節略）とあるに出づ報恩の意なり薄は原本落に作る祕本閣本尾本等に據て改む　○羊祜云云、晉書羊祜傳に詳なり　○代王、考に此一字難解疑誤若爲晉王二字易解と云　○季札之全節、吳の公子季札が兄より位を讓られしも遂に卽かず家を棄てゝ田に耕し其節を全うせしを云、左傳襄十四年に見ゆ全節は原本節全に作る祕本閣本尾本等に據て改む　○君臣之遺美、遺美は原本道蓋に作る祕本閣本前本等に據て改む　○鬢氷之感、晉書羊祜傳に羊祜卒時五十八帝素服哭之甚哀是日大寒帝涕淚霑鬚鬢皆爲冰焉とあるに據れり之字は山崎校本所引イ本を以て補ふ　○天渙之施、天渙は恩詔を云原本渙を魚に作る諸本に據て改む　○至孝、至は閣本尾本前本に據て補ふ　○死者反生云云、史記晉世家に獻公謂荀息曰吾以奚齊爲後云云子能立之乎荀息曰能獻公曰何以爲驗對曰使死者復生生者不慙謂之驗とあり　○戎功、毛詩周頌烈文章に念茲戎功傳に戎大也とあり　○人存、人存は其人存するを云紀略には存人に作る　○在聖旨、在は紀略存に作る　○服紀之闋年、闋は訖也又盡也終也服喪の期の終るを云原本闋を闔に作る狩谷校本に據て改む　○懇請、懇は諸本懃に作る　○璇扆、璇は美稱扆は斧扆の扆にて玉座と云に同じ　○畫靑桐而爲珪、史記晉世家に成王與叔虞戲削桐葉爲珪以與叔虞曰以此封若とあるに據れり　○窮白茅而爲苞、古者諸侯を封するに白茅を以て五色の土を包みて與へ之を祀らしむ故にかく云　○未可答恩、尾本可下に一の字あり　○啓體之終訓、論語泰伯篇に曾子有疾召門弟子曰啓予足啓予手云云而今而後吾知免夫とあるに出で臨終の遺訓を云　○損亡、損は原本捐に作る閣本淀本に據て改む　○紫闥、闥は字彙に門也漢號禁門曰闥崔亭伯達旨攀臺階闚紫闥とあり　○身殁讓存、存は原本封に作る諸本に據て改む　○南城之新爵云云、晉書羊祜傳に詔封祜爲南城侯祜讓曰臣受鉅平於先帝敢辱重爵以速官謗固執不拜遺令不得以南城侯印入柩（節略）とあり　○加增、增は紀略贈に作る　○同之鉅平、同は原本國に作る祕本閣本尾本に據て改む　○景風徒吹、

爾雅釋天に四氣和爲通正謂之景風とあり徒は原本從に作る諸本に據て改む　○右大臣重抗表、右は原本左に作る紀略に據て改む　○不貲之恩、貲は貲に同じ貲は限也、限りなき恩德を云、原本不を舊に作る諸本に據て改む　○貢緺、貢下恐くは緺字を脫す　○緺及百疋綿滿萬屯、原本及は疋下に滿は屯下にあり祕本尾本に據て改む　○朕推心於蜩云云、朕以下六十六字諸本云云の二字に作る松下氏都氏文集を以て之を補ふ推は原本權に作る文集に據て改む　○收搉之請、官を辭せむとの請を云文選秋興賦に斂搉以歸來兮忽投紱以高厲注に搉衣襟也紱綬也言斂衣綬棄榮利以自激厲也とあり搉は原本社に作る文集に據て改む　○補袞之勤、宰相の勤を云毛詩大雅烝民章に袞職有闕維仲山甫補之とあるに出づ　○素杯、淸白の氣節を云　○匡政、匡は原本道に作る文集に據て改む　○欲雲霞之意云云、世を捨て、隱遁するを云從は原本促耳の二字に作る文集に據て改む　○輔道、道は導に同じ文集亦同じ　○便斷來章、便は原本使に作る祕本閣本尾本等に據て改む文集には章を表に作る　○甲子、此二字紀略に據て補ふ　○守大納言藤原朝臣常行、守以下八字は紀略に據て補ふ

○十一月丁卯朔、二日戊辰、右大臣抗表曰、云云、誠願見賢思齊、還職封之一半、積小成大、裨國用之萬分、不堪悃誠、謹以奉表、詔許之、○三日己巳、除目二人、○六日壬申、平野春日祭如常、○七日癸酉、梅宮祭、○八日甲戌、通夕雪、未止、右大臣已下、參議已上、於侍從所、賞雪會飮、詔以內藏寮綿賜之各有差、侍從五位以上、亦預賚焉、○十日丙子、權律師法橋上人位平勢卒、○十一日丁丑、園韓神祭、○十二日戊寅、鎭魂祭如常、○十三日己卯、修新嘗祭於神祇官、所司供祭如常、○十四日庚辰、停節會之事、王公侍左仗下、終日酣飮、侍從陪侍從所、錄見在座者、後日賜祿有差、烏噦拔內豎傳點籌木、○十七日癸未、地震、節婦陸奧國柴田郡人刑部國主賣、叙位二階、免戶內租、表於門閭、詔、大和因幡兩國、當年田租、收

（十一月）抗表曰云云、祕本閣本尾本等曰字なし　○見賢愚齊、愚は諸本に據て補ふ恐くは思字の訛なるべし論語里仁篇に見賢思齊焉とあり　○詔許之、此勅書は都氏文集四に出づ　○除目二人、其氏名詳ならず　○六日壬申、及七日癸酉の兩條は紀略に據て補ふ　○會飮、會は諸本及紀略命に作る　○平勢卒、傳詳ならず　○十一日丁丑、此條紀略に據て補ふ　○見在座、座は原本坐に作る類史九に據て改む　○烏噦拔、烏は原本鳥に作る閣本に據て改む　○癸未地震、地震の二字は類史百七十一及紀略に

不四得六段、以夏旱魃、秋風水、苗稼連損也、〇十九日乙酉、從四位上行右近衞中將兼阿波守源朝臣興卒、興者左大臣贈正一位常朝臣之子也、興美姿質能擧止、外貞雄峻、內性寬柔、幼略無學、暗於百氏、承和十二年、授從五位下、十三年爲侍從、嘉祥三年、除左兵衞權佐、仁壽元年、加從五位上、三年遷右兵衞權佐、齊衡元年六月、丁父大臣憂解職、七月詔以本官起之、二年進正五位下、三年遷任左近衞權少將、四年兼相摸守、天安元年、遷爲右近衞中將、二年授從四位下、三年爲筑前守、中將如故、貞觀元年六月、母喪去職、二年正月、詔奪情起之、三年兼美作守、五年至從四位上、十一年兼阿波守、卒年卅五、〇廿三日己丑、地震、〇節婦武藏國橘樹郡人巨勢朝臣屎子叙位二階、免戶內租、表於門閭、〇廿八日甲午、地震、〇廿九日乙未、天南有聲、如雷、授丹波國從四位下出雲神從四位上、從五位下阿當護神從五位上、正六位上奄我神從五位下、阿波國正六位上伊比良咩神、船盡比咩神、並從五位下、〇十二月丁酉朔、三日己亥、地震、〇十三日己酉、公卿奏請省除贈太皇太后宮高野氏十二

據て補ふ

○國主賣、國は類史五十四に閣に作る

○收不四得六段、原本收不を倒置得を待に作る諸本に據て改む賦役令に凡田有水旱蟲霜不熟之處者十分損五分以上免租さあり令制にては五分以上の損にあらざれば免租させざるを此詔にては四分の損にて六分の收獲あるものは納稅せしめ四分以上の損あるものは免租させられしなり段は一段にて一段に滿たざるものは切捨て一段以上のものを此法にて處分せられしなるべし

○源朝臣興卒、興の事蹟は此に見ゆるが如し其以外に貞觀六年正月癸卯伊勢守さなる、興は原本與に作る祕本閣本及紀略に據て改む下同じ

○幼略無學云云、幼にして學ぶこさなくして百氏の書を能く知れりさなり

○遷右兵衞權佐、兵は原本近に作る尾本前本に據て改む

○十一年、一は諸本及十一年正月辛未紀に據て補

月廿八日國忌曰、謹勘禮經、前件國忌、親盡之義既著、捨故之理斯存、准諸舊典、宜從省除、謹錄事狀、伏聽天裁、奏可、先是天安二年十二月九日、定十陵四墓、獻年終荷前幣、是日、十陵除贈太皇太后高野氏大枝山陵、加太皇太后藤原氏後山階山陵、以足其數、在山城國宇治郡、四墓、加太政大臣贈正一位藤原朝臣良房愛宕墓、爲五墓、在山城國愛宕郡、○十五日辛亥、山城國葛野郡上林鄕地一町、充平野神社、○十九日乙卯、延六十僧於大極殿、限以三日、轉讀大般若經、於內殿修佛名懺悔、限三日訖、○廿四日庚申、獻荷前幣諸山陵墓如常、○廿六日壬戌、節婦安藝國佐伯郡人榎本連福佐賣、叙位二階、免戶內租、表於門閭、○卅日丙寅、大祓大儺、並如式、

ふ
○卅五、卅は原本三十に作る閣本尾本前本に據て改む承和十二年授從五位下、十三年爲侍從、とあり卒年卅五とすれば九歲にて侍從に任ぜられし事となりて年齡合はず
○出雲神、續後紀承和十二年七月辛酉紀に出づ
○阿當護神、六年五月乙未紀に出づ
○乎我神、神名式丹波國天田郡乎我神社、庵我村中
○伊比良咩神、式外、神祇志に所在板野郡奧野村一說東中富村若一王子祠內合祀とあり
○船盡比咩神、式外、同志に所在名東郡入田廣野二村界とあり
（十二月）十三日己酉、原本此條錯簡あり祕本閣本以下諸本は是日十陵以下在山城國愛宕郡に至る七十一字廿八日甲子聽天裁奏可の下にも見えて重複す紀略に據るに高野贈太皇太后大枝山陵を除て太皇太后後山階山陵を加ることを十三日にありされば廿八日甲子更に天裁を請ふべきにあらず是も

亦錯亂せり之に就て山田以文屋代弘賢兩氏の說あれど今姑く大系本に據る

○公卿奏請、以下十二月廿八日國忌に至る廿三字は紀略に據て補ふ

○講般若經、以下奏可に至る卅八字は下文廿八日の下にありしを此に移す但し佚の字は閣本前本谷本に據て補ふ

○定十陵四墓、天安二年十二月丙申紀(一七頁)に見ゆ

○年終荷前幣、終は原本給に作る尾本前本谷本等に據て改む

○太皇太后藤原氏、文德天皇御母藤原順子

○四墓、上文に見ゆ

○上林鄉地、此事三代格一に見ゆ格に在山城國葛野郡上林鄉九條荒見西河里卅四坪東限荒見河南限典藥寮園西限社前東道北限禁野地とあり

○平野神社、神社の二字は紀略に據て補ふ

○延六十僧云云、以下大般若經に至る十八字は紀略に據て補ふ

○荷前幣、幣は尾本及紀略に據て補ふ　○日本三代實錄卷第廿二、原本二下に終字あり尾本前本淀本に據て削る祕本閣本には此一行なし

日本三代實錄卷第廿二

○日本、祕本閣本谷本此二字なし

○左大臣云云、此行祕本閣本以下の諸本になし

【貞觀十五年】十五年春正月、原本年下に癸巳の二字あり諸本欄外頭注さす故に刪る

○剛卯杖、剛は祕本閣本尾本に據て補ふ

○宴於群臣、於は紀略に據て補ふ

○是善正四位下云云、云云は諸本に據て補ふ

○卅九人、補任に此日源舒を從四位上藤原山陰を正五位下橘廣相を從五位上に叙し古今集目錄に在原業平を從四位下に紀有常を正五位下に藤原敏行都良香を並に從五位下に叙すとあり

○加從三位、加恐くは衍

○爲大內記云云、云云は諸本に據て補ふ下文兼東宮傳下の云云及中務卿知故下の云云も同じ

日本三代實錄卷第廿三

起貞觀十五年正月盡五月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

(癸巳)十五年春正月丁卯朔、天皇不受朝賀、以雨後地濕也、春宮坊及所司獻剛卯杖、付內侍奏、天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、停雅樂寮音樂、幷吉野國栖風俗歌、以去年九月太政大臣薨也、宴竟賜被、是日申時、飄風暴雨、雷二聲、○七日癸酉、天皇御於紫宸殿、覽靑馬、賜宴於群臣、宴竟賜祿各有差、進正三位守左大臣源朝臣融、正三位守右大臣兼行左近衞大將藤原朝臣基經階、並加從二位、授參議從四位上行式部大輔菅原朝臣是善正四位下、云云、卅九人、○八日甲戌、於大極殿、始講最勝王經、以東大寺僧華嚴宗傳燈大法師位玄永爲講師、授正四位下上毛野朝臣滋子、加從三位、男二人、女子三人、○十三日己卯、以從五位下行少內記都宿禰良香、爲大內記、云云、四品惟彥親王爲彈正尹、左大臣從二位源

○卅三人、補任に此日大納言藤原常行を兼按察使に參議治部卿藤原仲統を兼備前守に參議左兵衛督藤原諸葛を備中權守に源冷を宮內卿と爲し古今集目錄に藤原敏行を出羽介と爲すとあり
○源朝臣貞子卒、貞子は十八年正月癸卯從四位下に叙す
○廿一日丁亥、此條諸本及類史紀略に據て補ふ
○傳點籌木二、二は諸本に據て補ふ
(二月)是日地震、是日の二字は紀略に據て補ふ
○祈年祭、年は諸本及紀略に據て補ふ
○於伊勢大神宮、於は同上
○爲天下及年穀、天下の下恐くは脫文あらむ
○辛丑園韓神祭、辛丑園韓神の五字は紀略に據り祭字は意を以て補ふ、原本此下に戊戌明經博士等云云の十七字あり分注に可在八月此月此儀不可書とあるが如く內裏に參るは八月のみなれば此事此にはあるべからず且干支を推すに八月六日は戊戌なれど二月六日は

朝臣融爲兼東宮傅、云云、二品行中務卿諱光孝天皇親王爲上野太守、中務卿如故、云云、卅三人、○十六日壬午、停踏歌之節、○十七日癸未、勅公卿於建禮門前行射禮、春宮帶刀舍人預射焉、○十八日甲申、停賭射、○廿日丙戌、地震、從四位下源朝臣貞子卒、○廿一日丁亥、停內宴、○廿三日己丑、烏噬拔內豎傳點籌木二、○二月丙申朔、二日丁酉、釋奠如常、是日地震、○四日己亥、是日、依例祈年祭、別遣使者於伊勢大神宮奉幣、爲天下及年穀祈焉、告文曰云云、○六日辛丑、園韓神祭、○十一日丙午、流星出從七星邊入弧、其色白、○十三日戊申、今月一日初申、可修春日祭、而彼日有事而停、是日祀之、○十六日紫宸殿東南隅虹見、○十八日癸丑、地震、○廿二日丁巳、除目廿八人、○廿三日戊午、陰陽寮言、今茲天行應愼、稼穡不登、以歲當三合也、詔五畿內七道諸國、班幣境內名神、幷於國分及諸定額寺、限以三日、晝則轉經、夜則禮懺、薰修之間、禁斷殺生、國司講師齋潔至誠、祈佛神之冥助、消災疫於未然焉、○廿四日己未、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若

辛丑なり又二日釋奠を行ひ六日に至て參內すべきにあらず誤なること明なり故に尾本に據て刪る
○從七星邊入弧、七星は北斗の七星を云るか又廿八宿中の星宿も七星なれば或は此を云るか、弧は弧矢星を云るか詳ならず原本弧を狐に作る祕本閣本尾本に據て改む
○十六日、此條下文三月十六日紀に再出す此にあるは衍文なるべし紀略には三月十六日に見え二月には記事なし從ふべしと思へど今諸本に據る
○除目廿八人、補任に此日源光を讃岐權守とす古今集目錄に貞朝臣登爲大和守ことあり
○歳當三合、十七年十一月甲午紀に三神相合名曰三合所謂三神者大歳客氣太陰是也とあり
○廿四日己未、此條は紀略に據て補ふ
○愛寶山、位山の舊名なるべしと云
三月 ○當麻眞人鴨繼卒云云、鴨繼は續後紀嘉祥二年正月壬戌紀に初見侍醫典藥頭主殿頭越後筑前阿波介讃岐備介伊豫權守

經。○廿六日辛酉、夜、春宮廳院失火、燒一屋。○廿八日癸亥、飛驒國司言、大野郡愛寶山、貞觀十三年十一月十八日、十四年十一月十二日、今月十五日、三度紫雲見。○廿九日甲子、大祓於建禮門前、緣春宮廳院火也。

○三月乙丑朔、三日丁卯、停御潔齋、以春宮失火之穢也。○八日壬申、從四位下行主殿頭兼伊豫權守當麻眞人鴨繼卒、云云。○九日癸酉、除目二人。○十六日庚辰、地震。紫宸殿東南隅虹見。○十九日癸未、通著外變不息、咎徵荐臻、決之卜筮、告云、自夏至秋、兵革成變、事起西垂、警及北闕、仍令因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、大宰等諸國府司、戒嚴兵卒、備之不虞。○廿日甲申、陸奧國頻年不登、賑給之。○廿六日庚寅、前近江權守從四位下藤原朝臣有貞卒、有貞者右大臣贈從一位三守朝臣之第七子也、年在童亂、侍奉仁明天皇、姉爲女御、因而蒙寵狎、及弱冠、承和十一年授從五位下、拜丹波介、不之任、十二年、見疑私通後宮寵嬪、出爲常陸權介、仁壽二年爲縫殿頭、齊衡三年遷爲右兵衛佐、四年遷左兵衛佐、天安二年加從五位上、遷右近衛少將、未幾兼伊勢權介、貞觀六年授正五位下、七年

等を歷任す其致仕の表者氏文集三に見ゆ云云の二字は諸本に據て補ふ
○藤原朝臣有貞卒、有貞は續後紀承和十一年正月庚寅紀に初見、敍位に就ては此に見えたる以外に貞觀四年正月壬午紀に從阿波權介より因幡權守さなるさあり
○童亂、幼年を云說文に男八月生齒八歲而齔さあり亂は齔に同じ
○姊爲女御、女御は藤原貞子なり六年八月丁巳紀に傳見ゆ原本姊を娣に作る諸本に據て改む
○私通、私は原本和に作る諸本に據て改む
○卌七、卌は原本三十に作る諸本に據て改む
○壬辰勅、此事十年三月壬戌條に出づ此に出づるは重複なり紀略には此にありて十年になし
○右京職、右は原本左に作る淀本及類史(百七)紀略に據て改む
(四月)賜祿有差、有差の二字は類史七十五に據て補ふ
○五日己亥、亥は原本卯に作る諸本及類史十六に據て改む

爲讚岐權介、少將如故、八年遷從四位下、爲備中守、十年出爲近江權守、卒年卌七、有貞不以權貴矜物、若忤其意、未必避人焉、廿八日壬辰、勅令木工寮與右京職共監守鴻臚館、○夏四月乙未朔、天皇不御紫宸殿、賜侍臣飲於仗頭、如常、賜祿有差、○三日丁酉、勅賜四品行常陸太守惟恒親王、從三位守大納言源朝臣多、帶劔、○五日己亥、授美濃國從二位中山金山彥神正二位、出羽國從三位勳五等大物忌神正三位、肥後國正四位下阿蘇比咩神正四位上、和泉國從四位下積川神從四位上、飛驒國正五位上水無神從四位下、筑前國從五位下鳥野神、信濃國從五位下出早雄神、並從五位上、信濃國正六位上鹽野神、和世田神、薩摩國正六位上多夫施神、伯耆國無位國廳裏神、並從五位下、○九日癸卯、夜有流星、入女林、亦入天市、其色皆赤、○十四日戊申、地大震動、○十六日庚戌、左大臣從二位兼行皇太子傅源朝臣融上表、請還食封千戶、勅答曰、來表悉之、朕仰慙玄鑒、俯媿蒼生、所憑者輔弼忠良、所渇者苦言切諫、今公恐溫凉之乖適、嫌環佩之頻朝、是蓋忘針石於朕躬、而存消摩於公

○中山金山彦神、元年正月甲申紀に見ゆ中は原本仲に作る諸本及類史に據て改む
○大物忌神、四年十一月乙丑紀に見ゆ
○阿蘇比咩神、元年正月甲申紀に見ゆ
○積川神、六年三月己酉紀に見ゆ
○水無神、九年十月庚午紀に見ゆ
○鳥野神、式外、神祇志に所在遠賀郡藤田村とす
○出早雄神、式外、同志に信濃國諏訪郡西山田村とす祕本尾本前本雄を雌に作る恐くは非
○鹽野神、神名式信濃國小縣郡鹽野神社、西鹽田村間山
○和世田神、式外、神祇志に所在伊奈郡とし村名を擧げず
○多天施神、式外、同志に所在讃岐國阿多郡田布施郷宅下村とす
○口鶪裏神、式外、同志に所在伯耆國久米郡國分寺村とす
○女林、原本女を羽に作る諸本及紀略に據て改む林は縣の誤なるべし女縣は天市垣中天紀星の北東

性也、況公年毛既壯、氣骨彌强、不擧風節、以賛此時、將抱冰壺、以施何地、朕之奉公也、未得其道乎、至彼減封之請、苟存利國之義、復有舊章、不敢排拒、朕之此意、公能順之、○十七日辛亥、公卿就太政官曹司廳、授文武百官成選位記、去十五日可行此事、自有常式、而彼日當賀茂祭、故避之、非緩也、○十八日壬子、地震、○廿一日乙卯、勅曰、朕以涼德、辱此守文、待化未孚於豚魚、用心徒形於腒腊、唯深蒼生爲子之德、不慊盆斯則百之福、而今心事罔養、男女繁昌、當分茅土之重、多致帑藏之費、寤寐預愁、心魂罔措、若涉洪水而无舟檝、但弘仁以降、載代遺蹤、或作親王、或爲朝臣、尤是損上益下之大義、屈躬利物之通規、朕之不德、仰慚前良、因願顧變舊章、惣爲源氏、然而事當師古、義貴宜今、故其不獲已者、擇之以爲親王、唯須其後一世早停王號、即賜朝臣、以節國家之經用、頗加公謙之篤情、又其號親王者、同母後產、並同盡一、尸鳩之深惠、欲一恩施、可牧之至公、猶從義制、但冀枝分若木、高下共春、派出天潢、淺深同潤、普告遐邇、令知朕意、是日定親王八人、源氏四人、皇子貞固、母橘氏、治部大輔休蔭之女、

皇子貞元、母藤原氏、參議治部卿仲統之女、皇子貞保、母女御藤原氏、故中納言長良之女、皇子貞平、母藤原氏、右中辨良近之女、皇子貞純、母王氏、中務大輔棟貞之女、皇女孟子、母藤原氏、兵部大輔諸葛之女、皇女包子、母在原氏、參議左衞門督行平之女、皇女敦子、與貞保同母、並爲親王、皇子長猷、母賀茂氏、越中守岑雄之女、皇子長淵、母大野氏、前石見守鷹取之女、皇子長鑒、母佐伯氏、信濃權介子房之女、皇女載子、與長猷同母、並爲源氏、貫隷左京一條一坊、○廿四日戊午、地震、○廿六日庚申、流星入翼、其色赤、○廿七日辛酉、雷電雨雹、諸衞府近屯殿前、

にあり
○地大震動、宮イ本此下に諸衞警固十五日己酉加茂祭の十二字あり
○左大臣從二位、二は原本三に作る諸本及正月癸酉紀に據て改む
○勅答曰朱表巻之、朱表以下道乎に至る九十三字は諸本なし原本頭注に菅家文草八に據て補ふと云
○玄纓、玄は天なり天の降臨するを云
○溫涼、敎へ導くを云陸雲谷風詩に習習谷風以溫以涼とあり
○嫌環佩之頻朝、環佩は朝服なり朝服を著けて屢參朝するを嫌ふとなり
○忘針石於朕躬云云、針石は諫言に譬ふ柳宗元弔屈原文に進針石而從之とあり消摩は針石に對す曹毗杜闌香傳に神女闌香曰消摩自可愈疾淫祀無益香以藥爲消摩（藝文類聚所引）とあり　○冰壺、心の潔白なるに譬ふ　○十八日壬子、此條續史百七十一及紀略に據て補ふ　○乙卯勅、三代格十七に出づ　○以涼德辱此守文、涼德は薄德に同じ左傳莊卅二年に虢多涼德注に涼薄也とあり守文は史記外戚世家に繼體守文之君、注に守文猶法也とあり　○待化、化は原本犯に作る諸本に據て改む格は待を徃に作る　○豚魚、易中孚卦の象傳に信及豚魚也注に魚者蟲之隱者也豚者獸之微賤者也とあり　○形於臞腊、論衡道虛篇に世稱堯若腊舜若腒心愁憂苦形體羸癯とあり憂勞して瘠するを云原本臞腊を措据に作る臞は祕本閣本前本及格に據り腊は格に據て改む諸本臞を腊に作るは訛なり　○爲子之德、德は格に懷に作る　○螽斯則百之福、螽斯は毛詩周南螽斯章序に螽斯后妃子孫衆多也とあり則百は同大雅思齊章に大姒嗣徽音則百斯男、傳に大姒十子衆妾則宜百子也とあり　○同養、同は原本固に諸本因に作る格に據て改む　○茅土之重、封邑を云巳に注す　○罔措、罔は原本因に作る格に據て改む　○裁代遺蹤、代は格に據て補ふ　○經下之大義、大は格に據て補ふ　○利物之通規朕之不德、通以下の四字は祕本尾本及格に據て補ふ　○節國家之經用、原本節を卽に用を典に作る節は諸本及格に據り用は宮本及格に據て改む　○公謙之篤情、謙は格に謹に作る　○同盡一、盡は畫の訛か　○尸鳩之深惠云云、毛詩曹風鳲鳩章に鳲鳩在桑其子七兮、傳に鳲鳩之養其子朝從上下莫從下上平均如一とあり欲は原本歟に作る諸本に據て改む　○枝分若木、分は原本令に作る祕本閣本尾本前本に據て改む　○天潢、巳に注す　○普告、普は原本並に作る諸本に據て改む　○定親王八人源氏四人、原本定を鴨に作り四人の二字なし諸本に據て改め補ふ　○貞固、原本固を困に作

る諸本に據て改む　○貞元、紀略に延喜九年十一月廿六日四品貞元親王薨號閑院親王と見ゆ　○皇子貞平、尊卑分脈に貞平親王女子一條君京極御息所女房之由有大和物語之說後撰拾遺集作者とあり　○貞純、同に貞純親王母神祇伯棟貞女中務卿兵部卿四品上總常陸等太守延喜十六年五月七日薨年六十四歲號桃園親王とあり　○流星入翼、翼は廿八宿の一にて北極の南方にあり　○屯殿前、屯は原本候に作り前本衛に作る紀略に據て改む祕本閣本尾本等空白とす

〔五月〕雷電、電は諸本及紀略に據て補ふ
○松尾社、社は紀略に據て補ふ
○並裝飾、並は原本竝に作る祕本尾本前本に據て改む
○參議大江朝臣音人、此八字は紀略に據て補ふ諸本此八字を使の一字に作る
○告文曰云云、云云以下平久奉謝无爲に至る百八字は紀略に據て補ふ
○高峯寺、山城志に鷹峯在西賀茂村西舊作高峯乃高峯寺址とあり
○差使天云云、云云の二字は祕本閣本尾本等になし
○十一日甲戌、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ

○五月甲子朔、地震、○三日丙寅、雷電雨雹、其大如雞子、或如梅實、○五日戊辰、停端午之節、以神祇官陰陽寮言、雨雹之恠、賀茂松尾等神成祟、於是遣使社頭、奉幣幷走馬、以謝神怒、其走馬、賀茂御祖別雷兩社各十疋、松尾社五疋、並裝飾人馬、足悅神明、告文曰云云、從五位下行伊勢介良岑朝臣晨茂乎差使天奉出須、○九日壬申、遣參議大江朝臣音人於賀茂神社奉幣、申謝雨雹之咎徵、告文曰、云云、高岑寺乃佛奉移禮留事爾依天、皇大神成祟之賜倍利止卜申世利、但此佛波、大神乃成祟之賜倍留仁依天、他處爾奉移倍支狀、去年祈申之賜倍利、須奉移留日爾、先此狀乎申賜倍之、而不申賜天、大神乃御社近之天、騷動世留事在介利、此怠乎畏恐天、平久奉謝无爲、始自今月廿日天、一萬卷乃金剛般若經令奉讀毛止須、仍參議正四位下行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人乎差使天、云云、○十一日甲戌、地震、○十五日戊寅、先是大宰府言、筑前國司解偁、天長元年六

○嶋門渡、筑前國遠賀郡葦屋の南に嶋門と云村あり遠賀川の西岸なりこれ古の嶋門驛の地にて嶋門渡も此なり、嶋は原本鳴に作る閣本尾本前本淀本に據て改む
○逗留、逗は原本遶に作る閣本尾本に據て改む
○買充、尾本充を取に作る恐くは非
○不賚、賚は原本貴に作る紀略に據て改む
○來竊邊境、原本來窺を竊來に作る紀略に據て改む諸本來竊に作るは來窺の訛なるべし
○歸順、順は原本頂に作る祕本尾本淀本に據て改む
○蕞爾新羅、諸本新羅蕞爾に作る是なるが如し蕞爾は左傳昭七年に蕞爾國、注に蕞小貌とあり
○久挾禍心、挾は原本狹に作る諸本に據て改む

月廿九日格曰、諸國渡船廿年已上爲期買替、而嶋門渡船二艘、不知始置之時、今既朽損、利渉失便、況復河岸頽缺、渡口闊遠、公私往還、累日逗留、望請、以正稅稻、乃早買充、依請許之、○十七日庚辰、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿日癸未、轉讀經卷、更延二日、奉幣於賀茂、松尾、乙訓、稻荷、貴布禰、丹生川上雨師神、並祈嘉澍也、○廿三日丙戌、雷而不雨、於十五大寺、讀經請雨、○廿四日丁亥、雷雨、○廿五日戊子、制、伊勢大神宮司、元一員、年料給絹百疋、米三百斛、貞觀十二年加置一員、今定絹各五十疋、米各百斛、○廿六日己丑、授山城國從四位下貴布禰神正四位下、○廿七日庚寅、先是大宰府言、去三月十一日、不知何許人、舶二艘載六十人、漂著薩摩國甑嶋郡、言語難通、問答何用、其首崔宗佐、大陳潤等、自書曰、宗佐等渤海國人、彼國王差入大唐、賀平徐州、海路浪險、漂盪至此、國司推驗事意、不賚公驗、所書年紀、亦復相違、疑是新羅人、僞稱渤海人、來竊邊境歟、領將二船、向府之間、一船得風、飛帆逃遁、是日、勅、渤海遠蕃歸順於我、蕞爾新羅、久挾禍心、宜令府國官司審加推

○渤海人者、者は諸本及紀略に據て補ふ

○散位淡海眞人、散位の下位階を脫す

勘、實是渤海人者、須加慰勞宛粮發歸、若新羅凶黨者、全禁其身言上、兼令管內諸國、重愼警守、○廿九日壬辰、散位外從五位下飯高朝臣貞宗披訴、貞宗不可賜外階、於是刊除外字、改賜從五位下告身、左京人河內大掾正六位上淡海眞人濱成、散位淡海眞人高主、內豎淡海眞人秋野、淡海眞人最弟、蔭子從八位上淡海眞人安江、正六位上永世眞人志我、永世眞人仲守、右京人文章生正八位上永世朝臣有守、蔭子正六位上永世朝臣宗守等九人、並賜姓淡海朝臣、其先大友皇子之苗裔也、

日本三代實錄卷第廿三

○卷第廿三、原本此下に終字あり尾本淀本に據て削る、秘本閣本前本には此行なし

○日本、此二字祕本閣本谷本になし
○左大臣云云、此行祕本閣本谷本等になし
【貞觀十五年】京畿七道諸國、諸國の二字は紀略に據て補ふ
○自大宰府所遷配、原本大を太に所を亦に作る大は諸本に據り所は紀略に據て改む
○酢川溫泉神、式外、羽前國南村山郡高湯即ち酢川溫泉なりと云ふされば此處にあるべし
○七月四日丙寅、此條紀略に據て補ふ
○八日庚午、原本八を本に作り庚午の二字なし八は諸本に據て改め庚午は尾本に據て補ふ
○雷電暴雨、以下十一字紀略に據て補ふ

日本三代實錄卷第廿四

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

起貞觀十五年六月盡十二月

六月甲午朔、十四日丁未、地震、○十五日戊申、自今月一日霖雨、是日始霽、○十六日己酉、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿行事、今月十一日大膳職有犬死穢、由是引及今日、非緩也、○廿一日甲寅、武藏國司言、新羅人金連、安長、清信等三人逃隱、不知在所、令京畿七道諸國搜捕金連等、貞觀十二年、自大宰府所遷配也、○廿二日乙卯、京邑飢、開倉廩而賑給之、河內國飢、以攝津國正稅稻一萬束賑給之、○廿六日己未、授出羽國正六位上酢川溫泉神從五位下、○節婦出羽國飽海郡人伴部小椋賣、伉儷亡後、廬於墓側、爲尼持戒、苦行精進、敍位二階、免同戶租、旌表門閭、○秋七月癸亥朔、日蝕無光、虧昃如月初生、自午至未乃復、○四日丙寅、廣瀨龍田祭、○八日庚午、雷電暴雨、諸衞府近屯殿前、先

○宰孫、宰は諸本に據て補ふ
○張建忠、忠は類史百九十四に思に作る
○官衛、正字通に官吏階位曰衛とあり使者一行の官位を具記したるものを云家語禮運篇に官有衛職有序、注に衛治也とあり官衛の名此に本づく衛は衞の俗字
○在此間者、此は原本狀に作る類史に據て改む
○姧寇、原本行冠に作る秘本閣本淀本及類史に據て改む
○艱難、類史艱を難に作る
○蠟封函子、貴重なる書は浸潤を恐れて蠟を以て封ず之を云
○名窟、窟は原本宜に作る諸本に據て改む窟は窟の俗字
○姧賊、姧は原本以に作る類史に據て改む
○過契、疎闊を責むるなり官位姓名を明にせずして逃亡せしを云
○雷雨、雨は紀略に據て補ふ
○宇倍神、四年五月庚辰紀に出づ

是、大宰府馳驛言、渤海國人崔宗佐、門孫、宰孫等漂著肥後國天草郡、遣大唐通事張建忠、覆問事由、審實情狀、是渤海國入唐之使、去三月著薩摩國、逃去之一艦也、仍奉進宗佐等日記、幷所賚蠟封函子、雜封書、弓劔等、是日、勅討覆宗佐等申狀、知是渤海人、亦其表函牒書、印封官衛等、鑒校先來入覲在此間者、符合如一、崔宗佐等、既非伺隙之姧寇、可謂善隣之使臣、其飄泊艱難、誠當矜憫、宜令在所支濟衣糧、所上蠟封函子、雜封書等、全其印封、莫煩披閱、亦其隨身雜物、秋毫不犯、皆悉還與、其所乘二舶、設有破損、勤加繕修、足以凌波、早得好去、但宗佐等、彼國名窟之人、盡知我朝之相善、然則飄著之日、須露情實以望恩濟、而飛帆逃亡、還似姧賊、非我仁恕、何免重誅、宜責以過契、俾悔其非、○九日辛未、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、遣使於賀茂、松尾、稻荷、乙訓、貴布禰神社、奉幣、祈雨也、○十九日辛巳、遣散位從五位下好風王、神祇大祐正六位上大中臣朝臣當道於伊勢大神宮、奉幣、祈甘雨、是日、雷雨、○廿日壬午、降雨、○廿八日庚寅、授因幡國正四位下宇倍神正四位上、從

○多神、巨摩郡大神社なるべし
(八月)爲奈野、河邊郡猪名川沿岸の地なり
○諱親王、諱は紀略に據て補ふ
○樵蘇、樵は采薪也蘇は取草也
○美和天神、神名式駿河國廬原郡神神社今志太郡岡部村三輪、和は原本知に作る祕本谷本淀本及類史十六に據て改む
○高倉彥神、式外、神祇志に珠洲郡寺家村高座宮とす
○正六位上氣多若宮神、式外、神祇志所在吉城郡上氣多村とす、正は原本從に作る諸本及類史に據て改む
○大縣神、元年二月癸卯紀に出づ縣は原本懸に作る類史十六に據て改む
○廿日壬子、此條紀略に據て補ふ
○廿一日癸丑、癸丑の二字尾本及紀略に據て補ふ
○除目十三人、古今集目錄に此日大內記藤原朝臣敏行爲中務丞とあり
○鳥噉云云、原本鳥を鳥に作り噉及二の二字なし諸本に據て改め補ふ

五位上多神正五位下。左京人成相王。後相王。賜姓高階眞人。其先高市皇子之後也。○八月癸巳朔。勅賜攝津國河邊郡爲奈野於二品行中務卿兼上野太守諱（光孝天皇）親王。以爲遊狩之地。勿禁百姓樵蘇焉。○四日丙申。駿河國從五位下美和天神。能登國從五位下高倉彥神。並授從五位上。飛驒國正六位上氣多若宮神從五位下。○五日丁酉。釋奠如常。○六日戊戌。明經博士等奉參內裏。不見賜祿而罷。○十三日乙巳。授尾張國從四位上大縣神正四位下。○廿日壬子。長門國言。講師傳燈滿位嘉亮申。實龜年中。國分寺失火。燒四王像。修復堂舍。未有彼像。請亮發心弘願。奉造靈像。依請許之。○廿一日癸丑。除目十三人。○廿二日甲寅。鳥噉拔內豎傳點籌木二。○廿八日庚申。從四位上行彈正大弼橘朝臣貞根卒。貞根者。左京人也。越中守從五位下宗嗣之子也。美鬚髯。身長纔五尺。腰闊甚大。幼年侍奉嵯峨太上天皇。頗蒙恩幸。及成人。年廿五。承和五年六月。擢授從五位下。十年拜中務少輔。頃之遷侍從。十一年加從五位上。嘉祥三年遷安藝守。不之任。天安二年增正五位下。貞觀三年拜右京大夫。六

年授從四位下、十一年授從四位上、十五年遷彈正大弼、卒於官、年五十八、無才學、常侍嵯峨南北兩宮、復仁明天皇之外戚、故名位稍進、○卅日壬戌、授雅樂助正六位上藤原朝臣四時、大和權掾當麻眞人忠實、並從五位下、○九月癸亥朔、三日乙丑、停御燈之齋、○六日戊辰、鷺集朔平門上、○八日庚午、甲斐國言、新羅沙門傳僧、卷才二人、來寄山梨郡、傳僧等、貞觀十三年徙配上總國者也、仍令還著本處焉、○九日辛未、停重陽之節、親王已下、侍從已上、賜飮於宜陽殿西廂、賜祿各有差、掌侍從五位上春澄朝臣高子奉幣氏神、向伊勢國、勅賜稻一千五百束、以爲行旅之資、○十三日乙亥、地震、○十六日戊寅、授肥前國從四位上田嶋神正四位下、從五位上志々支神、豫等比咩神、並正五位下、從五位下宗形神從五位上、正六位上白角折神、葛木一言主神、溫知神、並從五位下、○廿五日丁亥、新鑄銅印一面、賜伊勢國、舊印文字刓滅也、遠江國引佐長上郡百姓給復一年、○廿七日己丑、授伊賀國從五位上敢國津大社神正五位下、從五位下佐々神、應感神、阿波神、宇奈根神、並從五位上、正六位

○貞根卒、原本根を相に作る諸本及紀略に據て改む下同じ
○頃之、之は祕本閣本尾本に據て補ふ
○加從五位上、加は尾本に據て補ふ
○嘉祥三年、以下不之任に至る九字原本貞觀三年の上にありしを年號の順序に據て改め移す
○南北兩宮、原本兩を内に作る諸本に據て改む
○卅日壬戌、祕本閣本尾本卅日の二字なく壬を甲に作る甲戌は九月十二日
（九月）徙配、徙は原本從に作る諸本に據て改む
○掌侍、原本次侍從の三字に作る類史七十八に據て改む諸本常侍に作る常は掌の訛なり
○春澄朝臣、十二年二月辛丑紀に天長五年猪名部善繩賜姓春澄宿禰こと見え舊姓猪名部なり神名式伊勢國員辨郡猪名部神社あり是其氏神なり
○十三日乙亥、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
○田嶋神、元年正月甲申紀に出づ
○志々支神、二年一月己

丑紀に出づ
○豫等比咩神、同上
○並正五位下、原本五を四に作る祕本閣本尾本及類史に據て改む
○宗形神、十三年四月己卯紀に出づ
○白角折神、以下三神並に式外神祇志に所在白角折神溫知神は神崎郡朝日村さし葛木一言主神は三根郡天建寺村さす木は類史城に作る
○前國津大社神、六年十月戊辰紀に出づ
○佐々神、嘉祥三年六月庚戌紀に見ゆ
○應感神、式外、神祇志所在阿拜郡法華村さす
○阿波神、三年四月甲寅紀に出づ阿は原本河に作る諸本及類史に據て改む
○宇奈根神、同紀に見ゆ
○宇豆賀神、神名式伊賀國阿拜郡宇都可神社、所在說あり原本賀下に之字あり諸本及類史に據て刪る
○鹿高神、式外、所在未詳
○伊古奈神黑山神火山神、以上並に式外、所在未詳、火は祕本及類史大に作る

上宇豆賀神、鹿高神、遠江國正六位上伊古奈神、鑄錢司正六位上黑山神、火山神、並從五位下。右京人正六位上藤山王、三原王、長柄王、長峯王、長良王、忠峯王、正峯王、豐峯王、男女十九人賜姓文室眞人。其先、出自淨御原天皇第二皇子、左京人幸身王、時身王賜姓平朝臣。賀陽親王後也。○冬十月壬辰朔、天皇不御紫宸殿。親王以下次侍從以上、於左仗下賜飮、賚祿各有差。是日、任次侍從。○六日丁酉、遣使於賀茂、松尾、平野、大原野奉幣。告文曰、天皇我詔旨止、掛畏岐賀茂大神乃廣前爾、申賜倍止申久、頃月之間、物恠頻見己止、在利、仍令占求爾、御病事可在止占申世利、此乎聞食天、驚恐御坐須、今所念行久、先々爾毛如此岐不祥乎波、皇大神乃矜賜爾依天、灾咎消除太利、因茲參議從四位上行左兵衞督兼美濃權守源朝臣能有乎差使天、禮代乃大幣乎令捧持天奉出須、皇大神此狀乎聞食天、未然之前爾、災咎乎消除賜天、御體無驚久、常磐堅磐爾矜守利幸賜天、天下平久護賜比助賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申。參議正四位下行左衞門督在原朝臣行平爲松尾社使、參議從四位上守治部卿兼行備前守藤原朝臣仲統

爲平野社使、從四位上行兵部大輔兼備中守藤原朝臣諸葛爲大原野社使、其告文詞、並准此焉、○九日庚子、狂馬追牛、入太政官、於辨官廳事前相戰、○十日辛丑、勅、左右坊城使、仁壽二年、既從停廢、隷木工寮、今彼寮作事繁多、難耐兼濟、宜復舊置之、○十六日丁未、任左右宮城使判官主典等、○廿日辛亥、時加辰、日重暈、左右有珥、其下雲氣如龍、○廿四日乙卯、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○廿九日庚申、地震、

○十一月壬戌朔、三日甲子、太政官候廳成、此廳在帝宮建春門東、大臣已下聽尋常政之處也、始置之後、積代破損、命木工寮、加修理、先是、大臣已下於太政官曹司廳視事、今日始就候廳、公卿會飲、五位已上並侍、終日酣飲、極歡而止、以廚家及大藏省錢、給預席者各有差、○六日丁卯、右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣基經上表、請還故忠仁公封邑曰云云、勅答曰、右大臣藤原朝臣、得表已知、爲故太政大臣忠仁公讓封、朕聞、存立嘉庸、沒受寵渥、古之遺法也、公儀形道著、輔道年深、仁爲己任、死而後已、朕追加封爵、同之生存、蓄恩篤也、而卿稟遺旨、再三固辭、朕察

○藤山王、以下十九人及幸身王賜姓の事紀略には十六日とす

○長柄王、柄は原本栖に作る諸本及紀略に據て改む

○淨御原天皇第三子、天武天皇皇子大津皇子なるべし

○幸身王時身王、原本幸な幸に作り時身王の三字なし祕本閣本尾本及紀略に據て改め補ふ

(十月)六日丁酉、此四字は紀略に據て補ふ

○遣使於賀茂、以下其告文詞並准此焉に至る原本及諸本十一月十六日闕韓神祭如常の下に收む紀略及類史を參考するに本史此月の記事最も脫漏多く十日十六日廿四日廿九日等孰れも紀略及類史に據て補へり之に據て考ふるに諸社奉幣の事も誤て十一月に收めしなるべし故に今紀略に據て改め移す

○十日辛丑、此條及十六日丁未の兩條は紀略に據て補ふ

○仁壽二年既從停廢、三代格十二齊衡二年九月十九日太政官符應修理坊城非理之損事の文中に

太政官去仁壽二年六月七日下左右京職符偁云云停修理左右坊城使隷木工寮宜官物一事已上受領者云々とあり

○廿四日乙卯、此條及廿九日庚申の兩條は類史百七十一及紀略に據て補ふ

（十一月）聽尋常政、聽は原本政上にあり諸本に據て改移す

○厨家、紀略厨下とす

○右大臣（基經）、右は原本左に作る閣本尾本及紀略に據て改む

○曰云云、曰は諸本に據て補ふ云云の二字は諸本になし

○右大臣藤原朝臣、以下奠祭之費に至る諸本云云の二字に作る原本頭注に右大臣至奠祭之費以都氏文集四補さあり松下氏の補へるなり

○嘉庸、嘉は美也善也庸は功也

○仁爲己任云云、論語泰伯に仁以爲己任不亦重乎死而後已不亦遠乎さあるに據れり

○荅恩篤也、篤也は原本荅己に作る文集に據て改む

○纔過忌景、忌景は忌日

其至誠、不拒來請、唯餘位封之所輸、以示厚意之不已、今纔過忌景、更求讓還、朕以爲、古之功臣、有傳世不絕之誼、況公地居外祖、天下推勳、至其遺封、未謂淡食、於朕不失割腴之賞、在公非爲紾臂之飡、聊添幽冥之榮、兼助奠祭之費、朕不勝感泣、卿勿復請焉、○七日戊辰、詔賜長門國四王院沙彌教勝教林二人度、先是、貞觀九年始置前件四王院、安置四僧、教勝等預在四人之內、仍特度之、○十一日壬申、平野春日祭、左京人善常王、直道王、今道王、賜姓淸原眞人、○十二日癸酉、梅宮祭、○十三日甲戌、詔曰、如聞、今茲收藏不害、民庶稍休、宜太皇太后皇太后宮春宮坊封及服用五位以上封祿諸王季祿等、往年減省之物自今以後仍舊莫減、唯至朕躬德淺責深、是故、朕服御常膳左右馬寮秣穀、或分折或權停之類、尙如前令、更不加進、詔曰、垂鴻一德、違道者先亂其行、歷象同天、變常者乃遺其怒、朕政無寒暑、化負冰波、陵遲之運、仰慙洪緖、及至十一年、夏旱映甚於常時、桂璧空投山澤之靈、魚龍殆失淵源之府、朕念而三復、過在一人、龜衣以待天下之溫、菲食以思天下之飽、而卿等推心唱和、敢承往來、

論奏一成、懇誠自露、遂王公減封、諸臣省祿、縦令奉如舊制、伏臘之費難支、何況法損恒規、朝夕之儲逾乏、朕之燕思、已渉炎凉、如聞、今茲收藏不害、民庶稍休、非望栖畝之餘糧、蓋聞載路之多黍而已、夫先王之爲政也、弛於急張於緩、年荒節用、無節不可以存、穀熟復常、不復難可以贍、宜太皇太后、皇太后宮、春宮坊封及服用、五位以上封祿、諸王季祿等、往年減省之物、自今以後、仍舊莫減、唯至朕躬、德淺責深、堯之冷葛、舜之輕瑠、朕雖未窺彼垣墻、而今恨其珍麗、以群蠧之器、非片漆之所能堅、屢空之民、豈一秋之所能富、是故朕服御常膳、左右馬寮秣穀、或分折或權停之類、尙如前令、更不加進、普告遠近、不拒朕行、○十四日乙亥、從四位上行大和守在原朝臣善淵、前肥後守從五位上在原朝臣安貞等上表請、無品高丘親王入唐之後、多歷年序、歸却之期已過、存亡之分難決、而偏准於平常、猶受其封邑、靜而思之、慙悚難耐、望請早被返收、將免謗議、勅、存亡難卜、何許來請、○十五日丙子、大原野祭、○十六日丁丑、公卿奏言、伏奉今月十三日詔旨稱、年荒節用、無節不可以存、穀熟復常、不復難可以贍、

に同じ良房は十四年九月四日に薨じ此に一年餘なり故に云、忌は原本芯に作る文集に據て改む
○更求謝還、求は文集に據て補ふ
○朕以爲古之功臣、原本以を不に古を召に作る同上に據て改む
○推動、原本推を權に作る文集に據て改む
○羨食、羨は餘也食は食封の意
○判腴之賞、文選過秦論に東割膏腴之地とあり賞は原本宥に作る文集に據て改む
○紾臂之飡、孟子告子篇に紾兄之臂而奪之食注に紾戻也とあり、紾は原本軫に作る孟子に據て改む
○幽穸之榮、穸は墓穴也
○兼助、兼は文集に據て補ふ
○勿復請焉、焉は同上に據て補ふ
○平野春日祭、此五字及十二日癸酉の條は紀略に據て補ふ
○左京人善常王、以下清原眞人に至る十八字紀略は十二日に係く同書には善常王等四人とあれは此

宜太皇太后、皇太后宮、春宮坊封及服用、五位以上封祿、諸王季祿等、仍舊、莫減、但朕服御常膳、左右馬寮秣穀、尙如前令、更不加進者、臣等反復再三、憮然罔厝、夫緝諸王化、職在股肱、寅亮天工、責歸槐棘、臣等位在具瞻、身居非據、割立之賞、既知其不功、欺天之罪、未計其所避、往年陰陽并隔、年秩虧功、求其所由、咎關臣等、而貶責聖躬、緬徵六事、權減絕制、星管五廻、方今四表無事、三農有年、黃紙詔新、封祿復舊、至于服御常膳、未許從於常規、遜聽經邦之訓、詳求爲政之方、君臣相須、其猶一體、豈可聖上尙撤非食之膳、群下還厚素飡之祿、在於聖躬、雖爲盡美、求之僉議、理有未安、伏請、服御常膳、左右馬寮秣穀減絕之色、一復舊制、豐儉隨時、古今通法、權常互用、聖哲彝蹤、謹錄事狀、伏聽天裁、勅曰、群卿奏請、詞旨慇懃、丹懇難違、素懷自屈、所請之事、一依來表、○園韓神祭如常、○十七日戊寅、鎭魂祭如常、○十八日己卯、天皇御神嘉殿、親供新嘗祭、禮畢還宮、○十九日庚辰、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、五節舞如常、賜祿各有差、○廿六日丁亥、無位藤原朝臣佳珠子爲女御、○廿七日戊子、酉時、流星入參南

に一人を脱せしか
○詔曰如聞云云、以下更不加進に至る九十二字は次に見ゆる詔書の略文なれば削るべきなりされど姑く舊に仍る
○垂鴻、垂は祕本尾本前本乘に作る
○逵道、逵は原本達に作る祕本閣本前本等に據て改む
○歷象、尙書堯典に欽若昊天歷象日月星辰敬授人時とあり
○陵遲之運、陵は原本凌に作る意を以て改む
○夏旱映甚於常時、映は原本復に作る諸本に據て改む
○桂蠹、桂は原本牲に作る諸本に據て改む
○三復、原本復を複に作る諸本に據て改む論語先進篇に南容三復白圭とあり
○非食、麁食なり
○敢承、よく命を承はるを云ふ、敢承は原本取義に作る諸本に據て改む
○諸臣省祿、臣は尾本前本淀本王に作る下文に諸王季祿とあれば王とすべきか
○伏臘、伏は三伏臘は臘

邊、其色青白、體大尾短、欲入之時、分迸連入、(一)廿九日庚寅、右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣基經獻物、奏樂歡宴、

月にて寒暑を云
〇損恒規、恒は諸本に據て補ふ
〇栖畝之餘糧、文選魏都賦に餘糧栖畝而不收注に年穀豐多盈於田畝如鳥之栖さあり諸本栖を棲に畝を欽に作る　〇難可以贍、贍は原本瞻に作る閣本前本に據て改む　〇堯之冷葛、史記太史公自序に墨者亦尙堯舜道言其德行曰云云夏日葛衣冬日鹿裘さあり　〇堯之糲糧、韓非子に堯舜飯土塯さあり塯は盛飯瓦器也糲は糲也粗末の意
〇群蠹之器、蠹は原本橐に作る谷本閣本前本等に據て改む蠹は食木蟲也群蠹の爲に蝕み害はれし器とは僅に一片の漆を以て堅固にする事能はさなり　〇履空之民、空は匱也食に乏しきを云論語先進篇に回也屢空さ見ゆ　〇能富、富は原本當に作る谷本閣本前本等に據て改む　〇善淵、親王の子なり安貞亦同じ　〇從五位上在原朝臣安貞、原本上を下に貞を身に作る上は諸本に據り貞は紀略及六年十一月庚午紀に據て改む　〇高丘親王、丘は紀略岳に作る　〇歸却之期、却之の二字は諸本及紀略に據て補ふ狩谷氏云却之二字據元慶五年十月紀朝之之譌　〇偏准、偏は原本編に作る諸本及紀略に據て改む　〇十五日丙子、此條紀略に據て補ふ　〇難可以贍、贍は原本瞻に作る上文に據て改む　〇緝諧、緝は明也諧は調也和也　〇股肱、股は原本肱に作る誤なれば改む　〇寅亮、尙書周官に寅亮天地弼予一人さあり寅は敬亮は信なり　〇割立之贊、私記に或云立疑當作土さ云
〇年秩、年或は平の誤平秩は尙書堯典に平秩東作さあり　〇告國臣等、告は原本各に作る谷本閣本に據て改む　〇納徵六事、六事は公卿を云か尙書甘誓に大戰于甘乃召六卿王曰嗟六事之人さあり納徵は原本媍徵に作る諸本に據て改む徵は懲に通ず　〇星管五週、五年を經過せるを云減省の詔ありしは十一年六月丁亥なり星管は一年を云宋書黃回傳に星管未周さあり　〇三農、平地農・山農・澤農　〇經邦之訓、詳求爲政之方、原本邦を世に作り詳字なし諸本に據て改め補ふ　〇還厚素飡之儀、還厚は原本遷原に作る諸本に據て改む　〇僉議、衆議に同じ　〇減絕之色、色は原本包に作る紀略に據て改む　〇舞蹤、舞は原本尋に作る諸本に據て改む　〇錄事狀、事は前本に據て補ふ　〇閑韓神祭如常、此六字紀略には公卿奏言の前にあり原本此下に遣使於賀茂松尾云云の文あり紀略に據て十月丁酉條に移す　〇作珠子爲女御、藤原基經の女、珠子の二字は原本頼の一字に作る諸本及類史紀略に據て改む　〇參南邊、參は廿八宿の一にて北極の西方にあり　〇分迸連入、迸は淀本迸に作る

〇十二月壬辰朔、二日癸巳、是夜有流星、出自婁與天倉間、入奎南邊、將入之時、爲三連沒、左京人外從五位下行助教越智直廣峯賜姓善淵朝臣、其先出自神饒速日命之後也、越前國敦賀郡人右大史正六位上伊部造豐持賜姓飯高朝臣、即改本居貫左京五條三坊、其先出自孝昭天

(十二月)婁與天倉、婁は廿八宿の一にて北極の西方にあり奎宿さ相隣す天倉は婁宿中にあり其南方に位す
〇奎南邊、奎は廿八宿の一にて北極の西方にあり
〇越智直、智は原本知に作る諸本に據て改む
〇神饒速日命、日字は宮

○本に據て補ふ　○伊部造、神名式越前國敦賀郡伊部磐座神社あり、蓋伊部は伊部造本居の地、同社は其祖神を祀れるものなるべし　○廓中、廓は原本府に作る、紀略に據て改む、諸本廓に作るは廓の訛なり　○栗太郡、栗は原本粟に作る、諸本に據て改む　○小槻山公有緒、諸本山字なし　○兼子女王、系詳ならず　○叛戾、戾は原本逆に作る、祕本閣本前本に據て改む　○忌宮神、神名式長門國豐浦郡忌宮神社、長府町豐浦にあり國幣小社に列す　○武智石打命神、及意久神土地神は並に式外、神祇志に石打命神は美禰郡伊佐德定村杉森石打神蓋是、意久神は所在未詳、土地神は阿武郡川嶋莊舊城地にありと云　○賀積神、式外、同志に新川郡宮津村正八幡宮蓋是也と云

皇子天足彥國押人命也、大宰府郭中飢疫、賑給之、讃岐國三木郡人從五位下守大判事兼行明法博士丹波權掾櫻井田部連貞相、明法得業生大初位下櫻井田部連貞世、三野郡人右近衞將監正六位上櫻井田部連豐貞等、並改本居、貫右京六條一坊、大和國城下郡人右大史正六位上長統朝臣河宗、改本居、貫左京四條四坊、近江國栗太郡人正六位上行左少史兼笇博士小槻山公今雄、主計笇師大初位下小槻山公有緒等、改本居、貫左京四條三坊、河內國大縣郡人陰陽允正七位上弓削連是雄、改本居、貫右京三條二坊、攝津國嶋上郡人散位正六位上守部連蔵直、男陰陽權允從七位上守部連利貞等、改本居、貫右京二條三坊、○七日戊戌、無位兼子女王爲女御、先是陸奥國言、俘夷滿境、動事叛戾、吏民恐懼、如見虎狼、望請准武藏國例、奉造五大菩薩像、安置國分寺、肅蠻夷之野心、安吏民之怖意、至是許之、○十一日壬寅、神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿行事、○十五日丙午、授長門國從五位下忌宮神從五位上、正六位上武智石打命神、意久神、土地神、

○生益貧身、生は原本無に作る諸本及類史百五十九に據て改む
○苦賦役、苦は原本若に作る總本前本及類史に據て改む
○寡妻妾卌畝、從本及類史卌を卌に尾本五十に作る
○公營田、大宰府にて徭丁を役して佃らしめ其穫稻を以て租庸調を輸し溝池官舍を修理し其餘を蓄へて富實を圖る所の田を云
○鎭戍、戍は原本戎に作る閣本尾本に據て改む
○每國、原本無闕に作る閣本尾本前本に據て改む
○加以朝夕、加は原本如に作る諸本に據て改む下同じ
○計口給貧、貧は食の誤か
○女子口分、諸本口字なし

越中國賀積神、並從五位下、〇十七日戊申、大宰府言、筑前國去仁壽二年班田、其後歷十九年、死亡口分、散入富豪、生益貧身、徙苦賦役、仍須早班口分、令民安堵、但課役之民、日無偸安、不課之戶、時多閑逸、論其身事、固非同年、然則所得之分、多少宜殊、昔唐制、丁男中男、給田一頃、殘疾癈疾卌畝、寡妻妾卌畝、差降之法、誠非無故、今定課丁、給三段三百廿九步、不課男給二段、女一段、然則女子得半男之分、乘田益舊年之數、又依弘仁十四年二月廿一日格、管內諸國、始置公營田、而筑前國耕作數年、卽以停止、尋其由緒、緣土地薄埆、獲輸數多也、今須班田之日、擇良田九百五十町、不論土浪人、須充令耕佃、夏時以正稅、買備調庸、秋日以獲稻、塡納本倉、然則百姓免徵責之酷、貢賦絕逋懸之煩、又府之備隣敵、其來自邈代、而去貞觀十一年、新羅海賊竊窺間隙、掠奪貢綿、自斯遷運甲冑、安置鴻臚、差發俘囚、分番鎭戍、重復分置、統領選士、備之警守、今所用糧米、每國有數、出納之事、非無勾當、加以、朝夕資給、米鹽多煩、仍差置書生駈仕等、計口給貧、結番宿直、自餘之色、觸類猥雜、件國割女子口分、置公

○警固田、外敵の警固に充つる爲に之を設け其收益を以て費用に充るなり
○租穀割地子內、原本租を相に內を因に作り穀字なし諸本に據て改め補ふ
○五使粮、正稅使・大帳使・貢調使・朝集使を四度使と稱し之に貢綿使を加へて五使と云五は原本凡に作る諸本に據て改む
○常苦闕乏、苦は原本若に作る諸本に據て改む
○許之、諸本此下に十七日戊申の五字あり恐くは衍
○正丁成疋、原本正を十二の二字に疋は足に作る正は原本傍書に據り疋は諸本に據て改む
○饒益錢、饒益神寳なり元年四月癸丑紀に見ゆ
○同錢十四文、同は諸本に據て補ふ
○彼錢新貴時、新貴さは新鑄價貴を云
○今貞觀、今は諸本に據て補ふ
○饒益幣賤、賤は原本錢に作る神本閣本淀本に據て改む幣は或は弊の訛か
○肆拾漆人給復一年、漆人給の三字は諸本に據て補ふ

營田、所遺之田、猶倍他國、須分置一百町、名警固田、如其耕營、收所輸之地子、充年中之雜用、但租穀割地子內、准例進納、又府儲料稻惣三萬束、五使粮并水脚賃、及厨家雜用、凡百庶事、惣在其中、諸國所備、各有色數、而或致違期、或置未進、府中之用、常苦闕乏、須割置田二百町、名府儲田、收其地子、以充府用、但租穀同上、依請許之、左京職言、撿去承和三年二月九日格、調錢准外丁絁三分之一、人別輸調錢百文、係八十文、仍准折正丁成疋、然則人別應輸絁五尺、以此准當時沽法、饒益錢百八十三文、而去年以往、正丁一人所輸調庸同錢十四文、卽是彼錢新貴時之法也、今貞觀新出、饒益幣賤、因依官符宣旨、雇役夫三丁之所輸、不足一人功食、然則須以五尺絁直爲調法、然而俄有增加、弊民難堪、望請、貞觀錢十文、定令輸貢、勅、宜別令輸貞觀錢三文、畿內諸國亦宜准此、但馬國城埼郡澇旱、百姓窮困者漆佰肆拾漆人、給復一年、備後國年來凋殘、百姓貧窮、仍尤甚者十四郡七千四百一十三人、給復一年、○十八日己酉、詔授參議正四位下行左衞門督在原朝臣行平從三位、拜大宰權帥、除

○拜大宰權帥、拜は祕本閣本前本に據て補ふ
○除目六人、職事補任に從四位下行左中辨源朝臣直補藏人頭とこの日あり
○天押日命神、伴林氏神社なり九年二月丙申紀に出づ
○三輪神、式外、神祇志に所在會見郡小濱村三輪山とす
○卅二人、二は閣本前本及紀略に據て補ふ
○兇毒、兇は原本元に作る諸本に據て改む
○疑亦、私記に亦或云示歟とあり
○起請三事、三は尾本二に作る
○每年、每は原本毋に訛せるを淀本宮本に據て改む
○有功之胤、胤は原本職に作る諸本に據て改む
○稅帳、帳は格長に作る
○納藁、納は格以に作る
○酋豪、格百姓に作る
○據格旨、格は祕本閣本前本及格に據て補ふ
○偏貪俸料、原本偏上に備字あり貪を貧に料を斷に作る備は格に據て削り貪及料は尾本前本淀本に據て改む

日六人、○十九日庚戌、始修佛名懺悔之事如常、○廿日辛亥、授河內國正六位上天押日命神、伯耆國正六位上三輪神、並從五位下、○廿二日癸丑、先是大宰府言、去九月廿五日、新羅人卅二人、乘一隻船、漂著對馬嶋岸、嶋司差加使者送府、卽禁其身、著鴻臚館、是日勅曰、新羅人挾姧年久、兇毒未悛、疑亦流著之體、攜候隙之謀、宜重加搜撿、審覈情狀、早令放歸、○廿三日甲寅、正五位下行陸奧守安倍朝臣貞行起請三事、其一事曰、爵祿之興、爲優功績、然則授叙之事、當必其人、而比年國司不依勞效、任意授爵、由是預祿者衆、調物減耗、所司勘出、歷代不絕、望請、夷俘位階、每年立叙法、選有功之胤、隨年死之闕、叙補廿人已下、其二事曰、國中之政、莫重收納、然則分配之吏、可勤其事、而任用之官、未必其人、或被誘郡司稅帳、納藁爲稻、或見賂富饒酋豪、以虛爲實、須據格旨、必科其罪、而偏貪俸料、不畏有罪、望請、爲致虛納缺損國司之公廨、先補所欠、然後科責、若欠物巨多、公廨數少、長官已下相共塡納、太政官處分、依請、○廿五日丙辰、發遣荷前使、公卿行事、○廿七日戊午、伊勢國多氣郡人從五位下

○有罪、格は憲法に作る
○太政官處分依請、此七字は原本叙補廿人已下の下にありしを狩谷氏の說に據て此に移す
○發遣荷前使、發は原本使上にありしを改め移す
○阿閉臣、阿は原本河に作る祕本閣本前本に據て改む下同じ
○大彥命、原本大彥を火產に作る阿閉臣は大彥命の後なれば大彥とありしを字形の相似たるより誤りしこと明なれば改む

阿閉臣次子、從七位下阿閉臣雄繼等賜姓朝臣、其先、出大彥命之後也、
○卅日辛酉、大祓大儺如式、

○日本三代實錄卷第廿四、原本四下に終字あり尾本前本に據て削る祕本閣本には此行なし

日本三代實錄卷第廿四

○日本、此二字祕本閣本谷本なし

○左大臣云云、祕本閣本前本谷本等此一行なし

【貞觀十六年】

○五日丙寅、此條紀略に據て補ふ但朝臣の二字は例に據て補ふ

○並正四位下云云、云云の二字は諸本に據て補ふ補任に此日從四位下源興基從四位上に、藤原有實從五位上に、菅原道實從五位下に叙すとあり

○是日授女爵、此五字紀略に據て補ふ

○爲信濃守云云、云云の二字は諸本に據て補ふ

○刑部卿如故云云、云云の二字は同上

○餘官如故云云、云云の二字は祕本尾本に據て補ふ補任に此日藤原有穗春宮少進に菅原道眞兵部少輔に式部大輔菅原是善兼播磨權守に右兵衞權佐藤

日本三代實錄卷第廿五

起貞觀十六年正月盡六月

左大臣從二位兼行左近衞大將臣藤原朝臣時平等奉　勅撰

(甲午)十六年春正月壬戌朔、天皇不受朝賀、雨後地濕也、御紫宸殿宴于群臣、賜御被、○五日丙寅、中納言兼民部卿春宮大夫南淵朝臣年名上表、請罷民部卿、不許、○六日丁卯、春宮坊及所司獻剛卯杖、付內侍奏、○七日戊辰、天皇御紫宸殿、覽青馬、賜宴群臣、奏女樂、賜祿各有差、授參議正四位下行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人從三位、參議從四位上守治部卿兼行備前守藤原朝臣仲統、大藏卿基兄王、並正四位下、云云、○八日己巳、於大極殿始修最勝會、以藥師寺僧法相宗傳燈大法師位藥仁爲講師、是日授女爵、○十三日甲戌、詔授從四位上藤原朝臣儉子從三位、○十四日乙亥、大極殿最勝會竟、僧綱引諸宗名僧十餘人、奉參內裏、論佛理、訖施御被、○十五日丙子、從四位下行相摸守在

原國經兼播磨介に右近衛少將藤原山陰兼備前守に藤原保則備前權守に源湛土佐權守に任ずさあり
○踏歌之節云云、原本踏歌之節の四字、賜宴の賜字、雅樂の二字及如常儀の三字なく各有差を如常に作る類史七十二に據て改め補ふ日暮の暮は類史晩に作る
○而罷、而は諸本及類史方に作る
○廿三日甲申、此條紀略に據て補ふ
○宇保貞主、保は諸本及紀略に據て補ふ
（二月）○賀樂内親王薨、賀は原本加に作る紀略及紹運錄に據て改む、同錄に賀樂内親王桓武天皇皇女母橘御井子入居之女さあり
○天皇不視事三日云云、天皇の二字は前例に據り不視事以下十一字は紀略に據て補ふ
○祭春日神例也而、原本祭及也而の三字缺く紀略に據て補ふ
○左馬寮牛斃右馬寮、原本左を右に右を左に作る左は紀略に據り右は閣本前本等及紀略に據て改む

原朝臣守平爲信濃守云云、從四位上守刑部卿茂世王爲加賀守、刑部卿如故云云、從五位上行陰陽頭兼陰陽博士滋岳朝臣川人爲安藝權介、餘官如故云云、○十六日丁丑、踏歌之節、天皇御紫宸殿、賜宴群臣、雅樂奏樂、宮人踏歌如常儀、日暮賜祿各有差、○十七日戊寅、勅公卿行射禮於建禮門前、○十八日己卯、天皇御射殿、覽諸衞賭射、○廿一日壬午、内宴、近臣奏樂賦詩、極歡而罷、賜祿各有差、○廿三日甲申、授女爵、○廿九日庚寅晦、右近衛宇保貞主宿直仗下、頓得病死、或稱、氣絕於宮中、或云、出於宮外而命終、來月上旬、應祠祈年大原野春日等神、仍是日大祓於建禮門前、○二月辛卯朔、大原野祭如常、○三日癸巳、三品賀樂内親王薨云云、天皇不視事三日、桓武天皇子也、○四日甲午、祈年祭如常、○六日丙申、祭春日神例也、而内裏犬產、内藏寮鬪毆出血、及左馬寮牛斃、右馬寮馬死、由是停遣勅使、皇太子奉參内裏、出自東宮東門、入自朔平門、皇太子侍御所、親王公卿飮宴仗下、自餘群官留候玄輝門外、賜王公已下御衣物絹等、各有差、日暮、皇太子還本宮、○七日丁酉、釋奠如常、○十

日庚子、少納言兼侍從橘朝臣茂生、先是闕荷前、解侍從職、是日有勅、免罪復本、○十一日辛丑、停園韓神祭、○十四日甲辰、地震、○十七日丁未、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經、○十八日戊申、參議大宰權帥在原朝臣行平詣闕拜辭、詔引殿上、賜御衣物、○廿三日癸丑、授遠江國從四位下蒴原河内神、小國神、並從四位上、尾張國正六位上栗栖地神從五位下、左京人中原眞人正基賜姓清原眞人、其先舍人親王之後也、○廿七日丁巳、皇太后移自染殿宮、御職院、在左近衞府西、公卿參會奉迎、所司供奉、陪從如常、五位已上賚賜有差、是夜、文昌星微而不明、○廿九日己未晦、以參議右大辨從四位上兼行讚岐守藤原朝臣家宗、爲左大辨、讚岐守如故、從四位上行左近衞中將兼備中權守源朝臣舒爲右大辨、餘官如故、云云、參議從三位行左大辨兼勘解由長官近江權守大江朝臣音人爲左衞門督、近江權守如故、云云、○三月庚申朔、夜流星入、犯大微左執法第二星、大如李實、色赤尾短、○三日壬戌、御齋奉燈如常、○七日丙寅、新鑄銅印一面、賜武藏國、以舊印文刓盡也、○八日丁卯、左

○勅使、使は諸本及紀略に據て補ふ
○玄輝門外、原本此下に日暮の二字あり衍なり紀略に據て削る
○本宮、宮は原本官に作る諸本及紀略に據て改む
○十日庚子、及十一日辛丑の二條は紀略に據て補ふ但し停字は紀略になきを下文十五日條の意を掛みて補ふ
○十四日甲辰、此條は類史百七十一及紀略に據て補ふ
○地震、原本此下に十五日乙巳欲修鎭魂祭云云仍成祟の卅八字あり下文十二月十五日乙巳紀に重出す此にありては意通せず故に此を削て彼を存す
○十七日丁未、及十八日戊申の二條は紀略に據て補ふ在原は紀略藤原に作る上下の文に據て改む
○蒴原河内神小國神、並に二年正月戊寅紀に出づ内下の神字は神名式に據て補ふ蒴は同式芽に作る
○並從四位上、並は意を以て補ふ
○栗栖地神、式外、國内神名帳に春日井郡正四位下栗栖地神とあり所在詳

ならず栖は原本栖に作り地字なし諸本及類史十六に據て改め補ふ
○(注)左近衛府西、西は諸本及紀略に據て補ふ
○文昌星、六星ありて北斗の魁前にあり
○兼行讃岐守、兼行は原本行兼に作る尾本前本に據て改む
○源朝臣舒、原本舒を能有に作る能有は此時左兵衛督兼美濃守にて近衛中將備中權守に非ず諸本源朝臣の下一字空白とし能有の名あるなし故に公卿補任に據て改む補任に據るに此下に參議正四位下藤原朝臣冬緒爲兼民部卿參議正四位下行式部大輔兼播磨權守菅原朝臣是善爲勘解由長官式部大輔播磨權守如故とあるべきなり
○餘官如故云云、云云の二字は諸本に據て補ふ
○近江權守如故云云、云云の二字は諸本に據て補ふ補任に據るに此下に參議從四位上行左兵衛督兼美濃守源朝臣能有爲備中權守及橘朝臣廣相爲右少辨菅原朝臣道眞爲民部少輔等の記事ある

近衛府獻物皇太后職院、○十一日庚午、麋鹿一入宮城內、於神祇官北門頭、有人捉得、以放神泉苑、○十四日癸酉、授因幡國正四位上宇倍神從三位、阿波國從四位上天石門和氣八倉比咩神正四位下、河內國正五位上建水分神、下總國意富比神、上野國赤城神、阿波國葦稻葉神、並從四位下、但馬國正五位下出石神、養父神、粟鹿神、並正五位上、○十六日乙亥、地震、○十七日丙子、律師法橋上人位光善卒、○十九日戊寅、帝設宴於皇太后宮、五位已上、賜祿各有差、○廿一日庚辰、地震、○廿三日壬午、是日、詔於貞觀寺、設大齋會、以賀道場新成也、以律師道昌爲導師、大僧都慧達爲咒願、延諸宗宿德僧百人、以備威儀、雅樂寮唐高麗樂、大安寺林邑、興福寺天人等樂交奏、先是預教公子王孫年少者卅人、時出遞舞、凡厥莊嚴幡蓋灌頂等之飾、微妙希有、奪人目精、親王公卿、百官畢集、京畿士女、觀者塡噎、事畢之後、賜導師以下百口之僧度者各一人、其願文曰、夫貞觀寺者、先皇仁壽之初、今上降誕之日、星垂長男之光、月有重輪之慶、故太政大臣美濃公、憂龍姿之不免在襁、憐鳳德之未得勝衣、

べきなり
(三月)大微左執法第二星、左執法は太微垣中にあり第二星は東蕃の第二星なるべし左執法は一星なれば第二星あるべき理なし
○皇太后職院、后は原本子に作る紀略に據て改む
○提得以放、提は原本收に作る諸本及紀略に據て改む紀略以を詔に作る
○宇倍神、四年五月庚辰紀に出づ
○天石門和氣八倉比咩神七年二月己卯紀に出づ
○建水分神、五年八月壬戌紀に出づ
○意富比神、五年五月戊子紀に出づ
○赤城神、九年六月丁亥紀に出づ
○峯稻葉神、九年四月壬辰紀に出づ
○出石神、十年十二月丙戌紀に出づ
○養父神、十一年三月庚辰紀に出づ
○禾鹿神、神名式禾を粟に作る、十年十二月丙戌紀に出づ
○十六日乙亥、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ

與僧正眞雅和尙私相謀、使念諸佛之加持、修眞言之祕密、庶幾飛天景福、與日月而光華、表海元儀、感風雲而眇遠、卽除荆棘、漸夷涯險、成斯堂搆、爲一道場、及至貞觀之始、系統守文、悟彼遠慮深謀、斯時遂成鴻業、寢食之頃、不肯遺忘、當今無爲爲之、無事事之、一切不費無益國之用、一事不行有苦民之務、往欲酬彼私志、返慙乖此公議、重思將恐之雅言、復顧棄予之風刺、卽課梓匠、爰命掄材、搆毗盧舍那之寶塔、造尊勝如來之金像、幷立灌頂堂一宇、太政大臣生存之日、更建一堂、奉造釋迦丈六梵釋四王像、皇太后別立西堂、安置金剛界曼荼羅、僧正眞雅和尙、又立東堂、安置胎藏界曼荼羅、三摩地法、宛如修天上三昧耶界、自然移於下界、始自嘉祥院之後園、今爲貞觀寺之初地、仍取其本號、爲定額名、唯有足於性者、天損不能入、貞於明者、時累不能淫、故不爲勸誘者增浮華、不因諫諍者廢塗餝、歷代規摸、前王典故、非樸非斲、允執其中、所懼不誠之者、遠之則爲同秦繆勞苦鬼神之勤、近之則爲非漢文重中民十家之產、思玆在玆、去泰去甚、遂不施國家糜費之功、猶恐後代處刹圖之罪、然而帝釋

○光善卒、六年二月癸酉紀に見ゆ傳は詳ならず
○廿一日庚辰、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
○交奏、交は諸本更に作る
○卌人、原本此人に作る諸本及紀略に據て改む
○觀者、原本都邑に作る諸本に據て改む
○星垂長男之光、長男は易說卦傳に震爲長男とあるに據れり此句蓋し帝王世紀に黃帝母見大雷繞北斗樞星照郊野感孕生黃帝とあるに出づ
○月有重輪之慶、原本月を日に作り輪を瞳に作る閣本前本谷本に據て改む
○美濃公、良房
○不免在纈、纈は纈襭なり原本纈襭に作れども未得勝衣と對句なれば襭字なきを可とす故に諸本に據て削る
○飛天景福、飛天は天位に登るを云景は大也
○表海元儀、表は顯也表海は四海に君臨するを云左傳襄十四年に以表東海とあり
○堂搆、堂屋を構ふるを云尙書大誥に出づ

安居之化、不獨以自利爲謀、輪王精進之官、唯斯以周施爲業、故三千世界、遠近歸依、百億群方、幽明仰慕、況乎一人有慶、兆民賴之、因此而論、不言可知、天下黎甿、四方庶品、或竭力相持、或勞身共役、孰不進趣賴此吉祥、方今所修、雖事起于一人、而爲德及兆民矣、何祈彼功力、還作斯功德、信心惟貴、非謂金銀七寶之莊嚴、明德惟馨、何必黍稷百味之供養、原野旅生之菜、可施十方之僧、山林自笑之花、足供三世之佛、仍請僧徒一百人、爲今日之證者、設伎樂一兩部、代天人之妙音、先以功德上分、奉憑山陵七廟、崇之以春秋綸祀、覺路先迷、敬之以伏臘牲牢、玄津晚闇、不如乘斯妙業、宜遊十地之前、託此勝因、馭蹕三天之上、故太政大臣、志深輔佐、念切憂勞、專謀聖□之福祚、不顧我生之衰耗、天不憖遺、四海相怨、次々願尋彼宿因、速歸依佛部、捧覺藥而大覺、乘化蓮而廣化、皇太后德懷千月、慈雲覆之彌明、功載萬方、法雷震之無動、朝廷歸依諸佛、乃父乃兄、迴向法門、或權或正、所願長期交泰、永保昇平、雨順風調、年豐歲稔、東宮被金剛之愛護、增銀牓之精華、衆福雲聚、群祿星拱、九卿八座、內外百官、霑

○系統守文、皇位に卽き給へるを云守文は已に注す ○無爲爲之無事事之、爲之事之の四字は諸本に據て補ふ ○將恐之雅言、此句及棄予之風刺は毛詩小雅谷風章に將恐將懼維予與ㇾ女將安將樂女轉棄ㇾ予とあるに出づ此詩は風俗澆薄にして苦難の時救助を受けし恩義も一度安樂の身となれば忘れて顧みざるを刺る故に忘恩を警むる意に用ふ ○掄材、良材を擇ぶを云掄は原本輪に作るを改む諸本倫に作る倫は掄の訛なり周禮地官山虞に邦工入ニ山林一而掄ㇾ材不ㇾ禁、注に掄猶ㇾ擇也とあり ○四王像、秘本閣本尾本像字なし ○三摩地法、一切經音義に三昧正言ニ三摩地一此譯云ニ等持一等者正也正持ㇾ心也或云ニ正定一謂住ニ緣一境一離ニ諸邪亂一也と云 ○宛如修天上、原本宛を恐に作る秘本谷本淀本に據て改む修下に於字を脱せるか ○三昧耶界、三昧耶は佛菩薩の内證の本誓を標幟するものを云四種曼陀羅の一なり ○嘉祥院之後園云云、貞觀寺は初嘉祥寺西院と稱して寺號なく嘉祥寺の境内にありたり故にかく云 ○足於性者云云、文選演連珠に足ニ於性一者天損不ㇾ能ㇾ入貞ニ於期一者時累不ㇾ能ㇾ淫とあり原本不能淫の能字なし諸本に據て補ふ明は期の誤なり ○諫誹者、誹は原本誂に作る諸本に據て改む ○規摸、摸は原本莫に作る前本に據て改む莫は恐くは摸の一體なる摹字の訛なるべし ○前王、王は原本主に作る閣本尾本に據て改む ○非樸非斲、原本樸非の二字なく斲を外に作る諸本に據て改め補ふ斲は斵(斲に同じ)の訛なるべし文選魏都賦に匪ㇾ樸匪ㇾ斲去ㇾ泰去ㇾ甚とあるに據れり ○允執其中所懼不誠之者、原本允を久に作り之字なく所懼の二字其中の上にあり諸本に據て改め補ふ、誠は恐くは誠の訛なり ○遠之、之字は諸本に據て補ふ ○爲同秦繆云云、史記秦本紀に戎王使ニ由余於秦一秦繆公示以ニ宮室積聚一由余曰使ニ鬼爲ㇾ之則勞ㇾ神矣使ニ人爲ㇾ之亦苦ㇾ民矣(節略)とあるに據れり同は原本是に作る諸本に據て改む ○近之、之字は秘本閣本尾本に據て補ふ ○漢文云云、漢文は漢の文帝なり史記文帝紀に嘗欲ㇾ作ニ露臺一召ㇾ匠計ㇾ之直百金上曰百金中民十家之産吾奉ニ先帝宮室一常恐ㇾ羞ㇾ之何以ㇾ臺爲とあるを云 ○思茲在茲、奢侈に陥るを誡め思ふを云尚書大禹謨に念ㇾ茲在ㇾ茲とあり ○靡費之功、靡は靡と通ず靡は損也 ○輪王、輪轉王なり ○黎庇、庇は原本叱に作る山崎校本に據て改む〻 ○竭力、原本錫刀に作る諸本に據て改む ○何折彼功力還作斯功德、功力還作斯の五字は諸本に據て補ふ ○惟貴原本淫質に作る諸本に據て改む ○明德惟馨云云、尚書君陳に黍稷非ㇾ馨明德惟馨とあり ○旅生之菜、旅生は後漢書光武紀に野穀旅生、注に旅寄也不ㇾ因ニ播種一而生故曰ㇾ旅とあり菜は原本菜に作る諸本に據て改む ○奉憑山陵七廟、七廟は七代の御陵なり支那にては天子は七廟を建て、祖先を祀れど我國にては山陵のみを祀れり故に山陵七廟と云憑は原本鳴に作る諸本に據て改む ○禴祀、禴は祭也毛詩小雅天保章に禴祠烝嘗とあり ○覺路先迷、春秋の祭祀のみにては路に迷ひて輙く極樂に往生し難きを云玄津晩闢も亦同じ ○伏臘、伏は夏の三伏日臘は十二月の祭日、何れも牛羊を屠りて祭を行ふ、伏は原本仗に作る秘本閣本前本に據て改む ○晩闢、晩は原本脫に作る諸本に據て改む ○十地、歡喜地離垢地等の大乘菩薩の十地を云華嚴經に見ゆ ○託此勝因、託は原本記に作る秘本閣本尾本に據て改む ○三天、三十三天の略か ○謀聖□之福祚、聖は原本臣に作る諸本に據て改む私記は聖下一有ニ主字一といひ大系本は一字空格として恐當ㇾ作ㇾ體と云今之に據る ○次々、々は諸本に據て補ふ ○佛部、胎藏界の三部の一、果位に入て覺道圓滿せるを示す部門なり ○覺蘂、正覺を云修行の根より生ずるを以て花に譬へてかく云 ○化蓮、化は教化の意なり ○金剛之愛護、金剛は金剛薩埵の略にて普賢菩薩を云 ○銀牓之精華、神異經に東方外有ニ東明山一有ニ宮焉一云門有ニ銀牓一以ニ青石碧鏤一題曰ニ天地長男之宮一と

聖德之香霖、滅世間之煩燬、一切神祇、一切靈鬼、雨師風伯、水神山精、攝ニ此芳緣、倶脫苦業、含生有識、或飛或沉、同嘗法味、共趣覺路、○廿五日甲申、地震、

あり勝は原本勝に作る諸本に據て改む　○群祿星拱、蘇頌の詩に星拱北辰ことあり衆星の北辰に拱するが如く聚合するを云　○九卿、諸本公卿に作る　○或飛或沉、飛は鳥をいひ沉は魚を云　○廿五日甲申、此條類史百七十一に據て補ふ

○夏四月己丑朔、地震、天皇不御紫宸殿、於宜陽殿西廂、賜飲侍臣、勅左右近衛府、賜擧音樂、賜祿有差、○五日癸巳、殞霜、○六日甲午、左兵衛府獻物於皇太后、○七日乙未、時加未、日有五重暈、白虹貫日、卽日在胃宿、天文書曰、日月暈氣者、三日以內有陰雨、則其災消而不成、而八日暴雨、然則可謂其災消、○八日丙申、暴雨、是日、內殿依例應灌佛、而祠平野神、仍從停廢焉、○十五日癸卯、四方陰霧、終日不晴、○十八日丙午、申時日赤無光、此夜、月有蝕之、○十九日丁未、丑刻、淳和院失火、飛燼轉行、飄落禁中、諸衛警陣、左右近衛分登東西諸殿屋上、迎遏飄燼、右大臣藤原朝臣基經、大納言藤原朝臣常行、參議左大辨藤原朝臣家宗、昇殿侍衛、勅遣左衛門權佐藤原朝臣維範、左兵衛佐源朝臣平、率兵衛衛士等、救問火災、參議左衛門督大江朝臣音人率僚屬、馳往救難、黎明火勢折滅、是夜、淳和太皇太后御素車出宮、避火於松院、在院西南、○廿日戊申、諸衛警固、緣賀茂祭也、是日、雷電暴雨、諸陣屯於殿前、○廿一日己酉、賀

（四月）地震、此二字類史百七十一及紀略に據て補ふ
○五重暈、五は紀略に據て補ふ
○卽日在胃宿、胃は廿八宿の一にて北極の西方にあり宿は原本空白とし諸本々に作る紀略に據て補ふ
○而八日暴雨然則云云、原本及諸本八日の下に丙申の二字あり八日以下を別條とす然るに紀略は少しく文を略するも上文に續けて之を七日に繫ぐ故に今之に據る又謂下の其字も紀略に據て補ふ
○八日丙申暴雨、此六字は原本然則云云の上にありしを紀略に據て此に移す
○是日內殿、是日の二字は紀略に據て補ふ
○停廢、廢は原本焉に作る前本及紀略に據て改む
○折滅、滅は原本減に作る諸本に據て改む
○素車、飾なき車を云
○避火於松院、避は原本

牌に作る紀略に據て改む
松院は山城志に葛野郡西院村西南今有松井寺址とあり相傳卽松院舊蹤とあり
○是日雷電云云、以下十二字は紀略に據て補ふ
○染淳和院、染は祕本閣本尾本及類史(五)紀略に據て補ふ
○奉遣白絹卅疋、遣は原本遺に作る祕本閣本尾本及紀略に據て改む卅は類史百七十三には册に作る
○赤絹百疋、百疋は紀略八百匹に作る
○日在畢宿、以下是日に至る十四字は紀略に據て補ふ
○墨染紗、墨は原本黑に作る紀略に據て改む
○非雲、雲は原本傻に作る祕本閣本尾本及紀略に據て改む
○延蔓、蔓は原本慢に作る狩谷氏の說に據て改む
○右兵衛督、紀略兵衛を衛門に作るは非
○秋雄卒、傳は此に見ゆるが如し但し明年正月詔以本官起之とあるは續後紀には承和七年正月丁未紀に爲侍從とありまた信濃守は仁壽二年二月己丑紀に信濃介とす

茂祭、染淳和院火穢之人、入於齋院、仍停祭事、○廿二日庚戌、諸衛解嚴、有勅遣參議左大辨藤原朝臣家宗、勞問淳和院火災、兼奉遣白絹卅疋、赤絹百疋、絲百絇、調布五百端、貞觀錢百貫文、鐵二百廷、白米五十斛、黑米五十斛、右大臣已下、參議已上、相引奉問慰焉、○廿四日壬子、日在畢宿、薄蝕如不復而隱沒、是日有片雲、如墨染紗而掩日、又非雲非霞、黃赤色氣、延蔓蔽天、從四位上行右兵衛督兼越前權守清原眞人秋雄卒、秋雄者右大臣贈正二位夏野之第四子也、秋雄能射藝、好引強弓、人無能及者、天長八年爲內舍人、承和元年夏四月、嵯峨太上天皇幸大臣雙岳山莊、叡賞之餘、賜大臣男從五位下瀧雄從四位下、澤雄、秋雄、並從五位下、數月秋雄爲侍從、四年十月父大臣薨、因而解官、明年正月、詔以本官起之、累遷歷左兵衛佐左近衛少將、其間頻兼信濃守備中權介、轉權守豐前守、天安元年冬、母喪去職、服紀未終、詔起之、還爲左馬頭兼但馬介、尋任阿波守、累加、貞觀八年至從四位下、除大和守、俄而拜右兵衛督、十六年進從四位上、兼越前權守、秋雄不脩細行、飲洒過差、晩節沉醉、日

○雙岳山莊、諸本山字なし
○從五位下瀧雄從四位下澤雄、原本瀧上の下を上に作り瀧以下六字なし諸本に據て補ひ改む
○累迁、迁は原本任に作る諸本に據て改む
○左兵衞佐、佐は原本なし嘉祥三年四月己酉紀に據て補ふ
○貞觀八年至從四位下、貞觀年の三字は諸本に據て補ひ八の字は諸本空白にさせるを八年正月甲申紀に據て補ふ
○十六年、原本十の上に貞觀の二字あり諸本に據て削る
○不脩細行、脩は原本備に作る諸本に據て改む
○勅賜、以下是日に至る廿一字は紀略に據て補ふ
○御輦車、車は尾本前本及紀略に據て補ふ
○洞裏殿、洞は原本澗に作る諸本に據て改む
(閏四月)四日壬戌、此條紀略に據て補ふ
○稻荷上中下三名神、上中下の三字紀略にあれども類史十六にはなし
○御德高支波、波は原本岐に作る祕本閣本尾本及

不暇給、卒年六十三。○廿七日乙卯、勅賜親王及源氏新錢三千七百貫、令各買居宅。是日、淳和太皇太后御輦車還本院洞裏殿。○閏四月己未朔、四日壬戌、遣使於伊勢大神宮、奉幣、告文曰、云云、四月之中爾、日體變常世利、因此卜筮爾、申云、爲御體爾可有驚事止申世利、云云。○七日乙丑、山城國正四位上稻荷上中下三名神、並奉授從三位、告文曰、天皇我詔旨止、稻荷神乃前爾申賜部止申久、京都爾近之天、公私爾崇御體坐須御德高(ミイキホヒ)支波、御冠□畢爾依利天奈毛、殊爾有所念行天、從三位乃御冠爾上奉利崇奉流、此狀乎神祇大副從五位下大中臣朝臣有本乎差使天、御位記乎令捧持天申奉出須、神奈可良毛聞食天、天皇朝廷乎、寶祚無動久、常磐堅磐爾、護幸倍奉賜比、天下平安爾之天、水旱之災、疫癘之憂無聞久、風雨順時比、五穀豐登世之女給波々、彌高彌廣爾、榮餝利崇奉无止申賜波久止申。授山城國從五位下興我萬代繼神從五位上。○十二日庚午、東京失火、燒人廬舍。○十八日丙子、地震。○廿三日辛巳、地震。○廿四日壬午、雷雨、諸衞陣於殿前。○廿五日癸未、延六十僧於紫宸殿、限以三日、轉讀大般若經。是日

頒金字仁王經七十一部、云云、於五畿七道、每國安置一部、下野國藥師寺、大宰府觀音寺、豐前國彌勒寺、別置各一部、○廿八日丙戌、頃年天皇讀群書治要、是日御讀竟焉、○五月戊子朔、四日辛卯、地震、○五日壬辰、停端午之節、○六日癸巳、京邑飢、賑給之、○七日甲午、散位從四位下時佐王卒、○十日丁酉、授遠江國正六位上岐氣保神從五位下、○十一日戊戌、授因幡國從五位下賀露神、須賀神、鷲峯神、服織神、美歎神、並從五位上、遠江國正六位上蒲太神、白伊大刀自神、常陸國立野神、飛護念神、國都神、出羽國矢向神、並從五位下、○廿七日甲寅、從五位上行陰陽頭兼陰陽博士安藝權介滋岳朝臣川人卒、云云、川人作世要動靜經三卷、指掌宿曜經一卷、滋川新術遁甲書二卷、金匱新注三卷、○廿八日乙卯、從去十八日、頻雷雨、是日大雷雨、諸陣屯於殿前、先是制、右京職木工寮、相共監護鴻臚館、若撿挍疎略、有致破損、寮職長官遷替之日、拘以解由、是日定寮職主典已上、同共監護、拘其解由、同於長官、○是月、霖雨、

類史に據て改む按に此下に類少久坐須彌などいへる句の脫ちしなるべし此まゝにては通ぜず
○御冠□卑爾依利天、□は原本猶に作れど諸本空白とす故に諸本に據て後考を俟つ
○大中臣朝臣有本、朝臣の二字宮イ本及類史に據て補ふ
○願時、願は類史隨に作る
○登世之女給波々、々は類史に據て補ふ祕本閣本等給波の二字なし
○興我萬代繼神、興は原本興に作る祕本閣本尾本及類史に據て改む
○十八日丙子、此條紀略に據て補ふ
○廿三日辛巳、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
○廿四日壬午、及廿五日癸未の兩條は紀略に據て補ふ
○廿八日丙戌、此五字紀略に據て補ふ
○頃年天皇、以下十五字は原本下文五月廿八日乙卯條屯於殿前の下にありしを類史及紀略に據て此に移す
（五月）四日辛卯、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ　○七日甲午、此條紀略に據て補ふ　○時佐王卒、文德紀天

祥、元年正月丙午授従四位下、貞觀元年四月丁亥爲次侍従とあり　○十日丁酉、此條諸本になし尾本のみ六月十一日の事とす、按に或は類史十六に據て補へるか　○岐氣保神、式外、神祇志に遠江國周智郡領家村秋葉山秋葉神とす　○十一日戊戌、此條も諸本になし同じく類史に據て補へるか　○須賀露神、神名式には甘露神に作る三年十月丙辰紀に出づ　○須賀神、同上　○鷲峯神、四年九月甲戌紀に出づ　○服織神、神名式因幡國法美郡服部神社、今岩美郡服部村海士　○美歎神、同式同郡美歎神社、今岩美郡宇倍野村美歎　○蒲太神、式外、神祇志所在周智郡蒲鄕神立村とす　○白伊大刀自神、式外、所在未詳　○立野神、神名式常陸國久慈郡立野神社、今那珂郡小瀨村小瀨　○底護念神、式外、所在未詳　○國都神、式外、神祇志行方郡行方村鎭守國神明神とす　○矢向神、外、同志出羽國最上郡結貝村矢向明神とす、矢は原本天に作る類史及神階記に據て改む　○川人卒云云、云云以下卅四字は諸本になし松下氏類聚國史を以て之を補ふ　○世要動靜經、本朝書籍目錄に三卷滋岳川人撰　○指掌宿曜經、同に一卷同撰　○滋川新術遁甲書、同に二卷同撰　○金匱新注、同に金匱新經三卷同撰とあり匱は原本櫃に作る今類史百卌七に從ふ　○諸陣屯於殿前、狩谷校本に諸下一本有衞字と云原本前下に頃年以下十五字あり紀略に據て閏四月廿六日條に移す　○先是制、以下同於長官に至る類史百七に據て補ふ　○是月霖雨、此四字紀略に據て補ふ

○六月丁巳朔、日有蝕之、○四日庚申、先是渤海人宗宇佐等五十六人漂著石見國、充給資粮、放還本鄕、○五日辛酉、右近衞淸井冬行、病後狂發、騎馬馳入郁芳門、○十四日庚午、月次神今食祭、天皇不御神嘉殿、親王公卿、奉勅行事、去十一日大膳職犬死、由是延至今日、是日雷雨、東京牛震死、○十五日辛未、傳燈大法師位以船求法入唐、勅大宰府、賜資內國正稅稻千束、是日酉時、日未入、流星出自織女西邊、入大陵卷舌間、色赤有光、○十七日癸酉、遣伊豫權掾正六位上大神宿禰巳井、豐後介正六位下多治眞人安江等於唐家、市香藥、○廿一日丁丑、地震、○廿四日庚辰、大雷雨、陣屯殿前、○廿七日癸未、任官、○廿九日乙酉、酉時、流

○六月、宗宇佐、宗は原本宋に作る諸本及類史(百九十四)紀略に據て改む類史紀略には宇字なく宗佐とありされば宗上に崔字を省けるにて十五年七月八日紀に見ゆる崔宗佐と同人なるべし　○右近衞淸井冬行、原本右を左に冬を天に作る閣本淀本及紀略に據て改む　○是日雷雨、雨は原本西に作る閣本尾本前本及紀略に據て改む　○以船、以は紀略側に作る　○管內國、國は祕本閣本尾本等に據て補ふ　○是日酉時、是日の二字は紀略に據て補ふ　○織女、天河の北にあり

○大陵卷舌間、大陵は胃宿の北に、卷舌は昴宿の北にあり
○於唐家市香藥、原本唐の字重複す諸本に據て刪る市は紀略質に作る
○廿一日丁丑、此條類史百七十一及紀略に據て補ふ
○廿四日庚辰、及廿七日癸未の兩條は紀略に據て補ふ
○陣屯、陣上恐らくは諸字を脫す
○出自室入登地、室は廿八宿の一にて北極の北にあり登は原本癸に作る尾本前本淀本及紀略に據て改む

星出自室、入登地、長可一丈餘、其色黃白、

〇卷第廿五、原本此下に終字あり尾本前本淀本に據て削る秘本閣本には此行なし

日本三代實錄卷第廿五

昭和十五年十二月十五日印刷
昭和十五年十二月二十日發行

豫約頒價 金二圓

不許複製

增補 六國史

卷九

（三代實錄卷上）

編纂者 佐伯有義
東京市淀橋區西大久保一丁目三七三番地

發行者 櫻木俊晃
東京市麴町區有樂町二丁目三番地朝日新聞社

印刷者 小坂孟
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所 東京 大阪 朝日新聞社